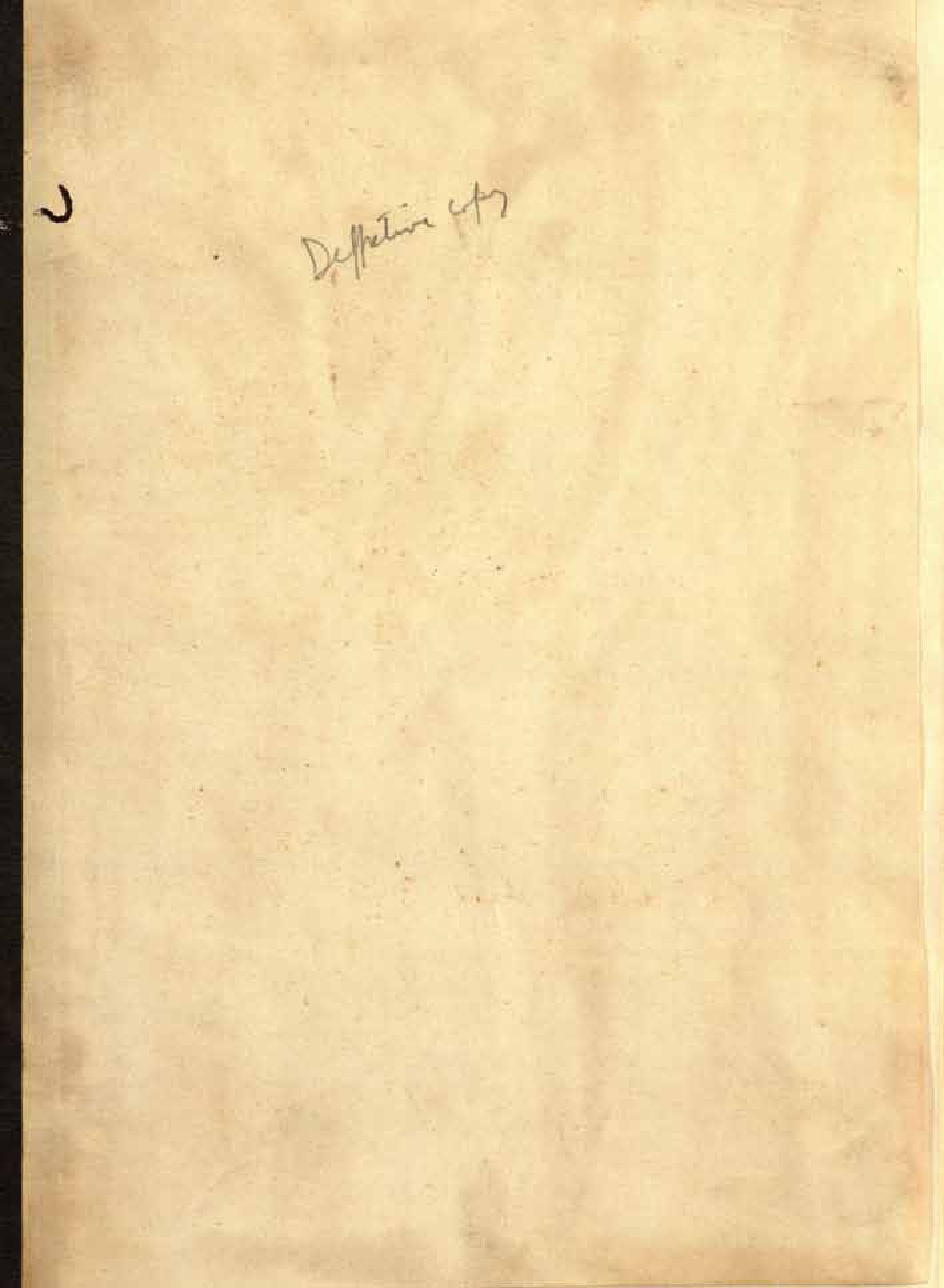

Deffective copy



ZEITSCHRIFT
FÜR
PRAEHISTORIE

(SHIZENGAKU-ZASSHI)

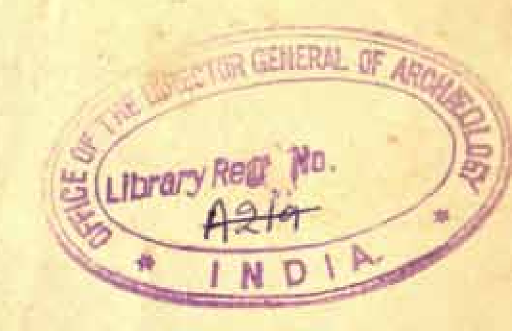
Organ der Japanischen praehistorischen Gesellschaft

Herausgegeben

von

KASHIWA OHYAMA





2. BAND 2. HEFT

TOKIO

März 1930

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Aoyama Tokio.

Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   - A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   - B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   - C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   - D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder

   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder

   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen

   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden

   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

9. Onden Aoyama Tokio
Ohyama Institut für Praehistorie
(Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama
Isamu Kohno
Mitsuji Miyasaka
Kensei Hohjoh
Sueo Sugiyama

INHALT

I. Abhandlungen (Japanisch)

II. Kleine Mitteilungen (Japanisch)

1. Fundorte

2. Fundgegenstände

3. Protohistorische Zeit und deren Nachfolger

4. Vergleichende Ethnologie

5. Zoologische Verhältnisse

6. Botanische Verhältnisse

TAFELN

動物資料

尾張國名古屋市熱田東町外土居貝塚の貝類　昭和二年四月三日調査、東海道線に面して傾斜(角度約三十度)してゐる丘陵の裾麓上部に存してゐた黒色土は建築のため除削されて僅かにしか存してゐなかつた。その下部六五糎は貝層であつて、その下部はバラストの層である。遺物はこの貝層中に存し、上部に祝部土器、彌生式土器の包含があり、最下部からは、やゝ厚手の繩紋土器が出土する。

アカニシ　Rapana thomasiana *Grosse.*　(少量)
カニモリガヒ　Clava Kochi *Philippi.*　(多量)
ハマグリ　Meretrix meretrix *Linne.*　(多量)
シホフキ　Mactra veneriformis *Reeve.*　(多量)
オホノガヒ　Mya arenaria (*Linné*) japonica *Jay.*　(少量)
マガキ　Ostrea (Crassostrea) gigas *Thunberg.*　(少量)
セタシヤミ　Corbicula sandai *Reinhardt.*　(多量)
アカガヒ　Anadara inflata *Reeve.*　(少量)
ハヒガヒ　Anadara granosa *Linne.*　(稀)

(直良信夫)

植物資料

武藏國荏原郡目黒町上目黒東山貝塚附近竪穴出土木炭の化學的成分

昭和二年三月二十一日筆者採掘、試料は擂鉢狀竪穴(底部の長徑、四米五十糎、深さ一米八十糎)の底部に於て、西南より東北に向つて水平に存してゐた。長さ二十糎、直徑四糎のものであり、伴出遺物には繩紋土器片があつた。分析者は筆者である。

揮發分	六〇・三〇〇%
灰分	一五・〇五六%
固底炭素	二四・六四四%
水分	二六・三一二六%

(直良信夫)

會告

本年度の會費は會計の都合上御面倒でも、可成早く振替を以て御拂込下さる樣御願ひ致します。

顔面に此れをなす。余は、此れが刑罰なりとて、タイヤル族に直接の關係ありと云ふものでない。然し、一應の注意を望むものである。

3 耳　飾

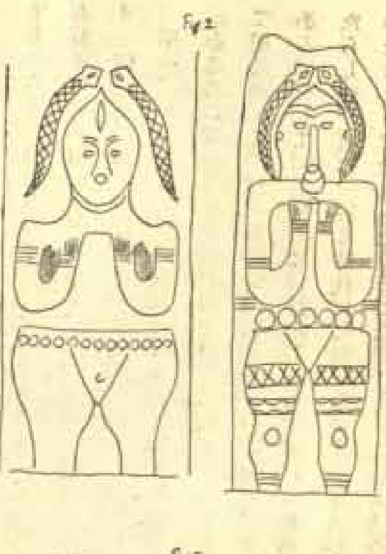
現今にても、彼等は、耳朶に孔を開けて、耳飾を用ふる。併し、此の風習は、全體として、廢れつゝある様に思はれる。古代にては、此の風習は盛んに行はれ、又、耳朶に開ける孔も非常に大なるものがあつたと思ふ。第三、四、五圖に示す内獅頭社、カピヤン社の祖先像にも、此の耳飾が表はれて居る。余は、アミ族キビ社や、大港口方面にて、耳朶に開けられた非常に大なる孔を見た(直徑一寸三分位)。又、第五圖に示す様に、耳朶に大きな孔を開け、此れに夜光貝のフタを、すりへらして作つた圓形にして厚い耳飾を、用ひたるを下恆春蕃クスクス社の女子に見た。

4 腕　輪

第一、二、四圖にある如く、兩腕の手首及び、腕に、腕輪があるのが認められる。手首にある腕輪は、現今でも、用ひて居る所があるが、腕の方のは、今の所、認められない様である。そして、古代では、此の腕輪が、實に多數卷かれて居たらしい。貫は、或る時代にては、眞鍮が最も多いものであつたらしい。現に、花蓮港秦東間海岸、大港口附近の海岸アミは、Alaiと稱して、眞鍮の腕輪を、昔から傳へて居る。又話に依ると、ライ社及奈東附近呂安社の古墳から、骨と共に此の眞鍮の腕輪が出たと云ふ事である。何れにせよ、此の大なる腕輪の流行は、或る時期の古代に擴つたと見て間違ないであらう。

5 貝貨を連ねた帶

第一、二圖に表はされた腰間の珠數狀のものは、貝貨を連ねた帶を示すものである。此れは、現今、用ひない様であるが、昔から傳へたものとして、此れを保存して居る。貝貨と云ふのは、イモガヒ(Conidae)の螺塔の基部を輪切りにしたもので、現今は衣服に縫ひつけられたりして遺つて居るが、古代は、此れを貨幣として通用したものである。此の貝貨に使用されたイモガヒは臺灣近海に産する種類と其の種(Species)を異にする様である。何れにせよ、此貝貨や、此れを連ねた帶は、古代に盛んに使用されたものらしい。パイワン族は、此れをKarijuと稱して居る。此のKarijuの分布は、臺灣蕃族内にても、パイワン、ブユウマ、アミ、又平埔蕃の中にも見られる。又、インドネジヤや、ニューギニア地方の蕃族の衣服にも用ひられて居る。余は、パイワン族の有するKariju は、彼等が、南方より臺灣に漂着當時、已に此れを有して居たものと考へて居る。(鹿野忠雄、一九二九、一二、一二)





二間半もあり、恐ろしく巨大なものである。其の建物は、相當大きく、又非常に古くして、傾きかゝつて居る。此の像の如きも、多數の蟲蝕を認める事が出來る。此れは、木製なりとは云へ、前と同樣の考古學的價値があるものである。

第五圖は、矢張りカピヤン社に遺る木像の一部である。

以上揭げたる五例の遺留地を見るに、皆、其の地方での最古の蕃社なるは、見逃せない重要な事實である。

次に以上、五例の材料によつて、太古の風俗を注意して見たいと思ふ。

1　鼻　輪

第一圖に表はされたマカザヤザヤ社の祖先像の顏面には圖の如く、鼻輪とより思へないものが畫かれて居る。此れが、若しも、鼻輪だとすれば、非常に興味ある問題となる。現在、臺灣諸蕃族を全部見渡しても、鼻輪を使用する種族はない。又、臺灣近海の隣接地方を注意しても、鼻輪を使用する種族あるを知らない。

2　額の刺墨

第二圖に示されたクワルス社の祖先像の顏面には、額に刺墨と思はれるものが畫かれて居る。現在、パイワン族にては、顏面に刺墨するものなく、女子に限り、手の甲に、此れをなし、又、頭目系の男子に限り、文身するものがある。而し、顏面には絕對に此れをなさない。北部のタイヤル族は、

此の像は、中には、比較的新らしいものも認められる事があるが、其の多くは、現在の蕃社への移住さえ分からない程、古い蕃社創立當初から、殘つて居るものであつて、非常に考古學的の價値があるものである。普通の考古學的發掘物の樣に、地下に埋もれる事なくとも、其の意義は大きいものと考へて居る例すれば、諸地方に見られる巨石建築物の如きものである。

此の祖先像は、種々の見地より、興味ある問題を提供するものではあるが、余は、本篇に於て、古代の風俗を考察する一資料として取り扱つて見たいと思ふ。他の側面よりの考察は、別に機を見て、此れをなし度いと考へて居る。

此の祖先像を材料にして、古代風俗を、うかがふ事が出来ると云ふのは、此のメンヒル樣の立石の或るものには、祖先の像が刻まれてあるからである。此のサウライは、古代よりの傳統として、建築物の一部をなし、又、宗教的の意義も帶んで居るパイワン族は祖先崇拜の念がさかんである。此の結果として、彼等は、此の立石に祖先の像を刻んで此れを尊崇する。

此の立石に刻まれた所謂祖先の像に表はされた風俗、裝身具は、現代又は、少し以前の風俗と異る所が多い。そして、中には、現在全く認められない特殊な風俗も、此れをサウライの上に、マザ／＼と、此れを見る事が出来るのである。云ひて見れば此の像こそ、太古の日の姿を語り、普通ならば、發掘物に仍つて、斷片的に復原し得るに過ぎない風俗を、最も完全に現はした貴重な資料と云ふ可きである。我々は此れに依り、一部分なりとも太古の日をうかがひ、又、現在消滅した諸部分を見て、他種族との民族關係を幾分明かに出来はしないかと考へて居る。

筆者は、パイワン族の祖先像は、殆んど此れを、身親しく實見する機會を得たが、其れ等の中、此の題目にとつて、重要なるものとして、次の五例を擧げやう。

第一圖に表はしたものは、高雄州屏東郡蕃地マカザヤザヤ社にあるもので、頭目の家の前に立てられて居る。スレートを切り出した約一間位の大さのもので、女身像である。

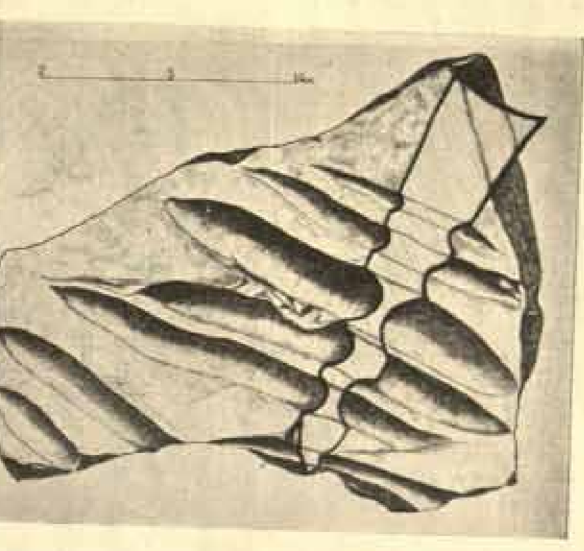
第二圖に表はしたものは、高雄州潮州郡蕃地タワルス社頭目家の屋内にあるもので、前者と略同大、スレートで女身像である。此れは此の像がある所に、家を立てたか、又家を立てゝから、他より持つて来たか、兎に角古いものである。

第三圖は、同じく潮州郡蕃地内獅頭駐在所前に立てられて居るもので、此れは、他の祖先像と異り、厚く、スレートに刻まれたものでなく、砂岩を以て造られて居る。厚さ六寸高さ五尺五寸ある。

此れは、枋山蕃に屬する内獅頭社の舊蕃社趾に遺つて居たものを、運んで来て、此度に立てたものであると云ふ。此れは、女性か男性か分らない。

第四圖は、同じく潮州郡蕃地カピヤン社頭目家の屋内にあるもので、岩石ではなく、大きな木の丸彫りで出来て居る。高さ

大體伺はれる。表面の溝は圖の如く不規則で、その形も所々に曲つてゐる所等を見るが、裏面のは殆んど平行して居つて規則正しい物である。その幅にも二——一センチの間の多樣であつてその深さも各溝不一定であるが、いづれもその斷面U字形を示し、その中に硬質の砂粒によつて出來たらしい條痕を有してゐる。



本資料はその厚さ一方に厚く(三・五)他方に薄い(一・五)。條溝以外の面は平に磨かれてゐる。現在國學院大學考古學研究室藏品。(國大支部、三好好毅)

比較民族學

古代風俗研究資料としてのパイワン族の祖先像に就て（パイワン族祖先像に關する報文第一）

文化民族の居住する開化地方に於ける史前學研究の對象は、過去を遠く溯るのを常とする。何故ならば、文化民族にては、比較的早く自然に頼る生活を脫し、又其の文化自身の賜として、文書に仍る記錄が存するからである。此れに反して、自然に以據する生活を營み、低級なる文化の結果として文書に仍る記錄なき野蠻未開地方の史前學研究の對象は、前者に比して、より近代的の資料を含んで居る。此の甚だしい例を擧げるたらば、石器を使用するオーストラリヤ土人の場合の如きである。

此の意味に於て、臺灣占據數千年の歷史を有する臺灣蕃族の或るものを考察する場合には、宏義の史前學の領域に入れて考察してよいものと思はれる。

臺灣南部に占據するパイワン族は、臺灣の蕃族中でも、比較的古い歷史を有する蕃族であるが、彼等は、長年月住居する蕃社內の頭目の家の前や、又屋內に、祖先像卽ち、彼等の語を以てすれば、サウライと呼ばれる、通常スレートで出來たメンヒル樣のものを立てるのである。此れはパイワン族を研究する場合には、最も重要な資料であるので、余はパイワン族蕃地殆んど全領域を踏査して、此れに特に注意する所あつた。

(1)淡褐色で石英粒を多分に含むが堅緻な燒成である。燒上りの色調は部分的に異つてゐる。口緣部は腹部成形後に接合したものである。

(3)内面は淡黄色、外面は黒ずんだ黝黒色。堅緻な燒成であるが尚少量の石英粒を含んでゐる。(1)と同じく後から口緣部をつけたもので、外部に刷毛目を有する。(2)深鉢形に屬するものと思はれる。

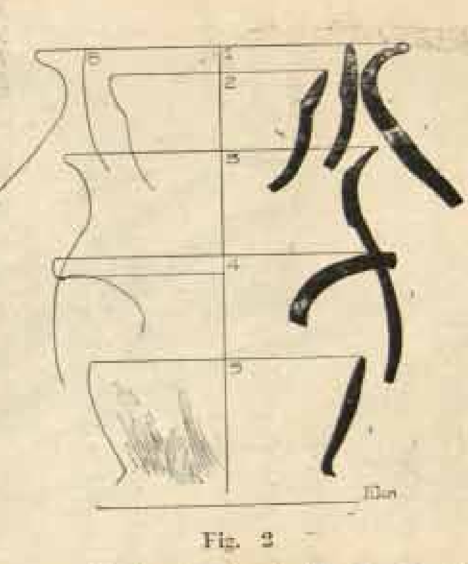


Fig. 2

やゝ精選された土質で淡黄色であるが、その内外面に赤色顔料が塗附せられてるのは注意すべきである。本顔料は明かに Fe_2O_3 である。

(6)淡褐色で石英の細粒を含んでゐる。(標本番號一〇九三、國大支部　中川徳治)

貞幹舊藏の土器　我國土器發見史の最初の頁を飾るものは、亀岡のそれに次いで此の京都岡崎村出土のものであらう。此土器に就いてけ屢々論議されては居たが多くは實物を見ずに述べられたものであつた。最近人類學雜誌に直良信夫氏の詳細なる實査報告が載せられたから、此の機會に該土器の寫眞を發表する事は無意義な事でないと思ふ。遺物に就いては何等說明を加へる餘地は無い。只參考に好古日錄原本の寫眞を載せて比較の便に供する。尚寫眞中の木箱及蓋は、貞幹の筆跡を傳へる當時の物である事を附記して置く。（小林行雄）

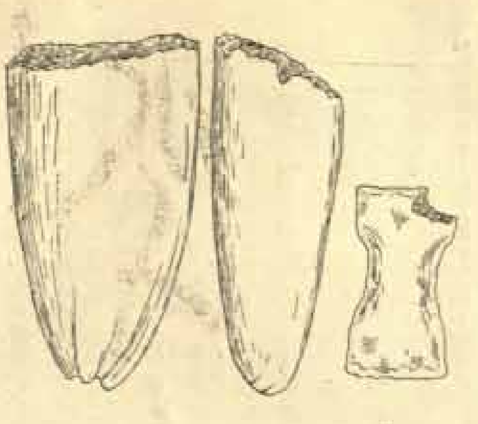
本資料には數葉の挿圖が附されてありましたが編輯の都合上、その代表的なもの一枚を載せさせて頂く事と致しました。



京都岡崎村出土の土器

奈良縣出土の玉砥の一資料　圖に示す一箇の玉砥は奈良縣磯城郡三輪町字高宮の某農家の井戸掘工事中に出土したと傳へられる。黒色硬砂岩質の扁平な遺物である。その形狀は不完全であるため原形は不明であるが、おそらくは梯形に近い形狀の物ではなかつたかと思はしめる。現在二十一センチ――十六センチの大さを表し、表面に八箇の溝を、裏面にも同數の溝の存在が

在位置に變遷せる以前）入江とも思はれ、地形最も住居に良き所なり。本年四月頃同村小學校庭埋立の爲め、右古墳の崩潰を行ひたるが、其の際中央石槨を包含せる無數の小石の中より發見せる物にして甚だ珍らしく、且つ研究の價値ある物ならん。案ずるに同塚を建造中外部を粘土又は小石を以て包含せんとて、偶々工人が其の附近より小石と共に拾ひ來りて使用せし物ならんか。同村より東北二千米小字江戸原及荻の窪附近の山林畑は先住民の遺物多く散布し、又前橋大胡縣道荻の窪松林に現に遺物包含層の露出ある所より見れば、此附近は往古より人類の居住せし地なるべく、而して既に古



墳時代に及んで石器時代人は形影なく去り、古墳築造者は無數に遺棄せられたる磨石斧打石斧等を拾ひ來り、之を使用せしものならん。（高橋勝之助）

國學院大學附近出土土器片　東京市外澁谷町國學院大學附近出土といふ一箇の厚手繩紋式土器片と數箇の彌生式土器片とが現在同學考古學標本室に藏されてゐる。出土地點、出土狀態は明かでないが、この附近の臺地には繩紋式の遺物が存在することが既に知られてゐる。（鳥居博士、上代の東京とその周圍）

第一圖　厚手繩紋式土器片。厚さ九ミリ赤褐色で石英粒を多分に含み、雲母の混入を見る。紋様は一の隆起帶と、それに平行して更に下方に彎曲する二平行單獨繩紋様つゝき紋とから成つてゐる。



Fig. I

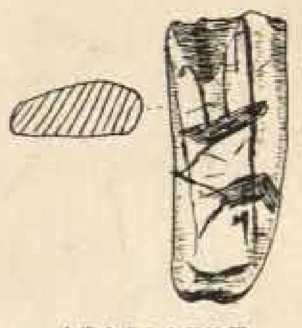
第二圖　彌生式土器片。一般に堅緻な燒成である。全部が破片で、僅かに(3)が完形を窺ひ得るに過ぎない。

(4)黄褐色。外部に反轉した口緣部で石英粒を含んでゐるが均密に分布し、比較的佳良な土質より成る。明かに轆轤使用の跡が見られる。

(5)赤褐色で精選された粘土質である。内面に刷毛目を有し、外部に又刷毛目の紋様を有する。

所々に禾本科植物の葉莖の痕跡がある。

土偶はその分布の大圏が美濃、越前の各一箇所の發見地をきりとして、備中に二箇所、離れ小島式にその分布をみるのである。いま、この大歳山に於ける一箇の土偶片の發見によつて、この離れ小島式分布の狀態は、一つの連鎖を有するに至つた。大歳山發見の脚部は、備中宵生貝塚出土のそれに近い。たゞ大歳山出土品には、宵生貝塚土偶片の如き、表面に縄紋の痕跡を見ない變りに、縄紋の原形態をなす禾本科植物の葉莖の印跡をみるのである。今後二十數ヶ所に散在する近畿地方の縄紋土器出土遺跡について、この方面の遺物の存在に注意しなければならない。（直良信夫）



大歳山出土土偶足部

石狩國旭川市東旭川發見熊の頭部石製品

東京人類學會雜誌二六九號に發見者たる佐山郡司氏の報告がある。最近ある必要から筆者は之を精査した。當時旭川の某中等學校の敎師であつた佐山氏が（明治四十年五、六月頃）旭川の東一里、石狩川の分流に望んで丘立する岡の西部で、この石製品が少しく身の一部を露出してゐるのを發見したのであつて、川の東の丘岡では石斧を發見したよしである。尙伴出遺物としては、以上の外、石鏃石匙があつた。第五版の石器時代埴名表四九四頁旭川市の所に旭ケ岡として、獸頭形石製品と錄してあるのは、このものを指してゐるのである。石質は蛇紋岩らしく、いまそれをよく磨いて、圖の如く工作し、毛髮を表示するために、毛彫がされており、後頭にあたる所の下部に穿孔があつて、紐を通す樣にしてある。歐洲舊石器時代人類の骨角に彫刻若くは工作したこの類の遺品を思ふとき、私は日本のこの種の作品を、もつと多く蒐集して研究してみたいと思ふ。（直良信夫）

北海道旭川發見熊の頭部石製品

古墳石槨を包含せる小石の中より發見せる磨製斧及打石斧に就て

群馬縣勢多郡大胡地方は打石斧の多く發見せらるゝも、磨石斧の出土は極僅少なる事は同好研究者の注目せる所なるが最近同村桂萱村大字鶴泉古墳跡より綠泥片岩製の磨石斧一個及小形打石斧を採集せり。同古墳跡は前橋市より産泰神社に通ずる村道の斜面にして往昔人馬の往來甚だしき爲め、古墳全體を知る由なきも傾斜面を利用せる相當大なる物と信ぜらる。太古利根川（現

遺　物

横濱市青木町三ツ澤貝塚發見の土偶　昨昭和四年六月二十二日史前學會一行の三ツ澤貝塚發掘の際、其末席を汚した筆者は、當日偶然の機會から、表題の如き遺品を採取する事が出來たので、其概報を記して諸賢の御参考に供しようと思ふ。

抑々本貝塚から土偶の見出された例は、古く江見水蔭氏記載する異形土偶（地中の秘密一〇九頁—一一〇頁参照）あり、其に續いて二三の發見を聞知する所があつたのである。

Fig. 1

茲に述べようとする土偶は、貝塚の西南部と北東部に於いて、各々一個づつ收得したのである。貝塚の西南部から見出された其は、平沼亮三氏邸の北西方約百五十米、瀧ノ川の作る派生小谷に臨む、急斜面の頂きの畠上に、貝殻及び土器片と共に混在したのである。首部を缺いた上半部と足部を殘す體の一部であるが、截然と中央部から切斷されて居る。色澤黝黒色燒成緻密堅硬、多少の雲母片を混じ、全體として扁平の感を持ち、最大長八・五糎最大幅三・一糎最大厚一・九糎（上體側面部にて計側）を算する。然して表裏共に細點を列名に弧狀文は縦狀に配置して均整的な體の調和に充分の効果を與へしめて居る。（第一圖参照）

次に貝塚の北東部に位する谷に沿うた、小林中の包土層（此部分の南側は貝層露出す）において見出されたものは、燒成佳良緻密幾分研磨を加へ、色調黒味を伴つた暗褐色を呈する脚部片である。今上縁に近く、微かな不整山形を刻し、其下部に二條の横線を加へ、更に二・六糎乃至三・三糎の間隔をおいて一條の横線を畫き、最大長四・九糎最大幅三・七糎最大厚三・六糎（脚部頂點にて計側）を測り得る。脚部の頂點は扁平な箆狀器具を以つて、壓痕を加へた如く、規則正しく偏長に縁部から〇・八糎陷沒する。製作の際の一表出であらうけれど、注意すべき事と思はれる。（第二圖参照）（松下胤信）

Fig. 2

播磨國明石郡垂水町山田大歳山出土の土偶脚部破片　大正十五年十月三十一日發掘。地點、大歳山頂上に存する最西圓墳封土の西部地表下三十糎黒色土層中他の縄紋土器と共出。やゝ内股式になつてゐて、扁平である。そして、その先端が少しく凹味氣味になつてゐて、一段低くなつてゐる。燒きは硬くなく、濃いオレンヂ色をして表面には、意味の受けとれない紋様が付いてゐて、

一八四	△	大透圓	打石器	ブヌン	森 丑之助	(三)
一八五	△	ヒラン泊社	打石器	ツヲウ	〃	〃
一八六		カナブ蕃住地	土器、打石斧	〃	島居 龍藏	(一)
一八七	△	トナチ社	打石器、土器	〃	森 丑之助	(三)
一八八	○	ラボラン	打石斧	ブヌン	鹿野 忠雄	
一八九	○	ラツクス	打石斧	〃	〃	
一九〇	△	潮州郡小琉球	打石器、土器		森 丑之助	(三)
一九一	△	內英山	打石器		〃	〃
一九二	△	スボン社	打石器	パイワン	〃	〃
一九三	△	楓港溪	打石器	〃	〃	〃
一九四	○	ライ社	錘石	〃	鹿野 忠雄	
一九五	○	クヅルス社	土器、石器	〃	〃	
一九六		恒春郡蚊丁庄赤牛湊(貝塚)	土器、石器		柳町 忠太 尾崎 秀眞	(一)
一九七		ラマセン溪畔	打石斧	パイワン	島居 龍藏	〃
一九八	△	恒春郡龜仔角	土器、打石斧、磨石斧、石杵、石庖丁、石錘		山田 金治	(四)
一九九	△	クスクス社	石斧	パイワン	〃	〃

臺東廳　一八個所　(二〇〇—二一七)

二〇〇		臺東支廳カロラン(貝塚)	打石斧	アミ	島居 龍藏	(一)
二〇一		卑南巳タラ、ボアン	土器、磨石斧		松村 瞭 宮內 悅藏	〃
二〇二		紅頭嶼	磨石斧(打石斧)	ヤミ	三宅 驥一	〃
二〇三	△	火燒島	打石斧、土器		森 丑之助	(三)
二〇四	○	舊ヒナン社跡	土器、磨石斧、打石斧、土輪	ヒユーマ	鹿野 忠雄	
二〇五	△	里壠支廳マスボル社	打石斧、	ブヌン	森 丑之助	(三)
二〇六	○	內本鹿タンシキ社跡	土器、	〃	鹿野 忠雄	
二〇七		大武支廳　大麻里	土器、打石斧	パイワン	宮內 悅藏	(二)
二〇八	△	阿塱衞	石斧、	〃	森 丑之助	(三)
二〇九		新港支廳　馬武窟	土器、石斧	アミ	齊藤 透	(一)
二一〇	○	バラバリン	打石斧	アミ	鹿野 忠雄	
二一一	○	カロライ	打石斧、土器	〃	〃	
二一二	○	ベシユリン	打石斧、土器	〃	〃	
二一三	○	石寧埔	打石斧、土器	〃	〃	
二一四	○	加走灣	打石斧、	〃	〃	
二一五	○	三軒尾庄	打石斧、	〃	〃	
二一六	○	姑子律	打石斧、	〃	〃	
二一七	○	都巒	打石斧、	〃	〃	

花蓮港廳　一六個所　(二一八—二三三)

二一八		花蓮支廳薄々社	石器	アミ	杉山壽榮男	(一)
二一九	○	花蓮港街花岡山	磨石斧、土器	〃	鹿野 忠雄	
二二〇		鳳林支廳大港口	打石斧	アミ	島居 龍藏	(一)
二二一	△	律姑	打石器	〃	森 丑之助	(三)
二二二	○	新社	打石斧	〃	鹿野 忠雄	
二二三	○	馬太鞍	土器 磨石斧、打石斧、土器・石棒 石槍	〃	〃	
二二四	○	平林	石製品	タイヤル	〃	
二二五	○	大巴塱	土器	アミ	〃	
二二六	○	備公	〃	〃	〃	
二二七	△	玉里支廳水尾庄	打石器		森 丑之助	(三)
二二八	△	針朗庄	打石器		〃	〃
二二九	△	タビラス社	打石器、土器	ブヌン	〃	〃
二三〇	△	レタエ社	打石器、土器	〃	〃	〃
二三一	△	マユツン社	打石器	〃	〃	〃
二三二	○	公埔	打石斧、石棒		鹿野 忠雄	〃
二三三	○	端穗マイツル社	打石斧	アミ	〃	

澎湖廳　一個所　(二三四)

二三四		湖西庄青螺虎頭山	中磨石斧		伊能 嘉矩	(一)

(鹿野忠雄)

番號	印	遺跡	遺物	種族	報告者	文獻
一三一	△	鉄砧庄	打石器		森　丑之助	(二)
一三二	△	土地公鞍嶺	打石器		〃	〃
一三三	△	集々大山	打石器、磨石器、土器		〃	〃
一三四	△	新高郡頂崁庄	打石器、磨石器、錘石		〃	〃
一三五	△	カンムツ社	打石器、土器	アヌン	〃	〃
一三六	△	ヒノコン社	打石器、土器	〃	〃	〃
一三七	△	ナルサン社	打石器、土器	〃	〃	〃
一三八	△	柴橋頭庄	打石器、土器		〃	〃
一三九	△	八張庄	打石器、磨石器、土器、錘石		〃	〃
一四〇	△	林尾庄	打石器、土器		〃	〃
一四一	△	林圯埔	打石器、土器		〃	〃
一四二	△	東埔仔庄	打石器、土器		〃	〃
一四三	△	社寮庄	打石器、土器		〃	〃
一四四	△	牛轀轆	打石器、錘石		〃	〃
一四五	△	二八水	打石器		〃	〃
一四六	△	頭社坪	打石器		〃	〃
一四七	△	龜仔頭	打石器		〃	〃
一四八	△	羅竹湳	打石器		〃	〃
一四九	△	ホサ社	打石器	ツヲウ	〃	〃
一五〇	△	カイタン社	打石器	アヌン	〃	〃
一五一	△	カサウラン社	打石器	〃	〃	〃
一五二	△	ナマカバン社	打石器、土器	ツヲウ	〃	〃
一五三	△	人倫	打石斧	アヌン	河野　廣道	(四)
一五四	△	イリト社	打石斧	〃	〃	〃
一五五	△	ピンテボアン社	打石斧	〃	〃	〃
一五六	△	イバホ社	打石斧	〃	〃	〃
一五七	△	マシタルン社	土器、打石斧	アヌン	〃	〃
一五八	△	米々	打石斧	〃	〃	〃
一五九		トンボ社	打石斧	アヌン	鳥居　龍藏	(一)
一六〇	○	パクラス	打石斧	〃	鹿野　忠雄	
一六一	○	卡　社	打石斧	〃	〃	
		臺南州　一三個所（一六二―一七四）				
一六二	○	臺南市郵便局附近(貝塚)	土　器		鹿野　忠雄	
一六三		新營郡新營庄附近	土　器		鳥居　龍藏	(一)
一六四		曾文郡官田庄烏山頭	土器、土環、土製紡錘車、石庖丁、石斧		佐山　融吉	〃
一六五	△	曾文溪	土　器		森　丑之助	(二)
一六六		斗六郡斗六街ノ南方二里半	打石斧		和田　千吉	(一)
一六七		嘉義郡小梅庄大坪	土器、打石斧、磨石斧		鳥居　龍藏	〃
一六八		阿里山	土器、打石斧、磨石斧		〃	〃
一六九	△	タリバン社	打石器、磨石器、土器、	ツヲウ	森　丑之助	(二)
一七〇	△	ラブラ社	打石器、磨石器、土器、錘石	〃	〃	〃
一七一	△	ニヤウチヤ社	打石器、土器	〃	〃	〃
一七二	△	タダブヤン社	打石器、土器	〃	〃	〃
一七三	△	旗山郡竹頭崎	打石斧	〃	〃	〃
一七四	△	竹脚社	打石斧	〃	〃	〃
		高雄州　二五個所（一七五―一九九）				
一七五	△	高雄市	打石器、土器、貝塚三		森　丑之助	(三)
一七六	△	店仔口	打石器		〃	〃
一七七	△	屏東郡老濃庄	打石器		〃	〃
一七八	△	ピインラ社	打石器	ツヲウ	〃	〃
一七九	△	パイチエン社	打石器	〃	〃	〃
一八〇	△	ガニ社	打石器	〃	〃	〃
一八一	△	トアホイ社	打石器	アヌン	〃	〃
一八二	△	ライロア社	打石器	〃	〃	〃
一八三	△	サンマ社	打石器	〃	〃	〃

資料

遺跡

臺灣石器時代遺物發見地名表（二）

臺中州　八二個所（八一—一六二）

番號		地名	遺物	種族	發見者	
八一		臺中市臺中神社附近	土器・石器		森　丑之助	（一）
八二		烏日湊畔ノ番地	土器・打石斧		鳥居　龍藏	〃
八三	△	[illegible]廍庄	打石器		森　丑之助	（二）
八四	△	烏日庄	打石器、磨石器、土器		〃	〃
八五	△	土城庄	打石器		〃	〃
八六	△	中科山	打石器	タイヤル	〃	〃
八七	△	石角山	打石器	〃	〃	〃
八八	△	横龍河	打石器	〃	〃	〃
八九		東勢郡水底寮	土器、土製丸玉、石斧、石庖丁、土輪、石製品		宮原　敦	（一）
九〇		東勢角庄奥ノ番地	打石斧		鳥居　龍藏	〃
九一	△	サテライ社	打石器	タイヤル	森　丑之助	（二）
九二	△	ユカライワン社	打石器	〃	〃	〃
九三	△	メパーシン社	打石器	〃	〃	〃
九四	△	阿冷山	打石器	〃	〃	〃
九五	△	梧棲	打石器	〃	〃	〃
九六		能高郡埔里街	打石斧		鳥居　龍藏	（一）
九七		國姉庄ヨリ北港尾ニ至ル途上	打石斧		〃	〃
九八	△	北港庄	打石器		森　丑之助	（二）
九九	△	能高郡水長流	打石器		〃	〃
一〇〇	△	三條崙	打石器		〃	〃
一〇一	△	大坪頂	打石器		〃	〃
一〇二	△	マイバライ社	打石器	タイヤル	森丑之助	（二）
一〇三	△	[illegible]番坑	打石器　錘石		〃	〃
一〇四	△	烏牛欄	打石器		〃	〃
一〇五	△	興吉城庄	打石器		〃	〃
一〇六	△	莿桐腳庄	打石器		〃	〃
一〇七	△	枇杷城庄	打石器		〃	〃
一〇八	△	中心崙	打石器		〃	〃
一〇九	△	桃米坑庄	打石器		〃	〃
一一〇	△	水尾庄	打石器		〃	〃
一一一	△	珠仔山	打石器、磨石器		〃	〃
一一二	△	卓社大山	打石器、土器	ブヌン	〃	〃
一一三	△	霧社	打石器	タイヤル	〃	〃
一一四	△	白狗	打石器	〃	〃	〃
一一五	△	櫻ケ峯	打石器	〃	〃	〃
一一六	△	マレツパ社	打石器	〃	〃	〃
一一七	△	トロツク社	打石器	〃	〃	〃
一一八		新高郡魚池	打石斧		鳥居　龍藏	（一）
一一九		木屐囒	打石斧		〃	〃
一二〇		水社	打石斧		〃	〃
一二一		頭社	打石斧		〃	〃
一二二		集々庄拔社埔	打石斧		〃	〃
一二三		集々	土器、打石斧、（磨石斧）		〃	〃
一二四		社仔	打石斧（土器、錘石）		〃	〃
一二五	△	新城	打石器		森　丑之助	（二）
一二六	△	司馬按庄	打石器		〃	〃
一二七	△	鍋蘭崙	打石器		〃	〃
一二八	△	石印庄	打石器		〃	〃
一二九	△	卜吉庄	打石器　錘石		〃	〃
一三〇	△	福龍庄	打石器		〃	〃

Vordere Höhe des Körpers	13	Grösster Sagittaldurchmesser des Dens	14
Transversaldurchmesser des Dens	17	Distanz der äussersten Ausladungen der Proc. articulares superiores	(40)
Sagittaldurchmesser des Foramen vertebrale	13		
Transversaldurchmesser des Foramen vertebrale	19	Index des Foramen vertebrale	68.4
Sagittotransversal-Index des Dens			82.4

Kreuzbein.

Grösste Breite der Basis	118
Mediansagitatldurchmesser der Basis des Kreuzbeins	38
Grösste Transversaldurchmesser der Basis des Kreuzbeins	58
Promontrium-Winkel	67°
Tiefe der oberen Oeffnung des Canalis sacralis	13
Breite der oberen Oeffnung des Canalis sacralis	21
Breite zwischen den Foramina sacralia anteriora (I.)	(42)
Vorderer Verticaldurchmesser des Kreuzwirbels (I.)	26
Sacralcanal-Index	61.9
Sagittotransversal-Index des Körpers	65.5

Becken.

		(1.) ♂	(2.) ♂	(3) ♀
Tiefe der Fossa iliaca	r	—	—	—
	l	8	—	—
Länge des Foramen obturatum	r	—	—	—
	l	51	—	49
Breite des Foramen obturatum	r	—	—	—
	l	31	—	36
Grösster Durchmesser der Gelenkpfanne	r	—	52	—
	l	56	—	—
Symphysenhöhe	r	—	—	—
	l	36	—	—
Längenbreiten-Index des Foramen obtratum	r	—	—	—
	l	60.8	—	73.5

		1.	2.	3.	4.	e.
Umfang im Niveau des Foramen nutricium	r	96	82	—	80	—
	l	90	82	—	—	—
Kleinster Umfang der Diaphyse	r	75	72	—	68	—
	l	74	69	—	—	74
Krümmungs-Index	r	1.0	2.2	—	—	—
	l	—	1.9	—	—	—
Index des Querschnittes der Mitte	r	78.6	67.9	—	69.3	—
	l	63.7	70.4	—	66.7	—
Index cnemicus	r	74.3	69.0	—	67.9	—
	l	65.6	70.0	—	—	—

Fibula.

		1.	2.	3.	4.	5
Grösster Durchmesser der Mitte	r	17	18	12	—	—
	l	17	18	12	—	15
Kleinster Durchmesser der Mitte	r	9	10	9	—	—
	l	10	10	9	—	10
Umfang der Mitte	r	48	46	35	—	—
	l	47	46	35	—	43
Kleinster Umfang unterhalb der oberen Epiphyse	r	37	36	34	—	—
	l	36	35	34	—	35
Kleinster Umfang oberhalb der unteren Epiphyse	r	35	—	—	—	—
	l	—	—	—	—	—
Index des Diaphysenquerschnittes der Mitte	r	53.0	55.6	75.0	—	—
	l	58.8	55.6	75.0	—	66.7

Calcaneus.

Grösste Länge	r	(72)	Ganze Länge	r	(70)
	l	—		l	—
Mittlere Breite	r	(38)	Länge des Corpus	r	52
	l	—		l	|
Höhe	r	35	Länge der Facies articularis posterior	r	27
	l	—		l	—
Höhe der Facies articularis posterior	r	6	Längenbreiten-Index	r	52.7
	l	—		l	—

Praesacral-Wirbel.	7.	9.	11.	12.	14.	15.	16.	20.	22.
Vordere Höhe	11	—	—	19	—	—	—	—	—
Mittlere Höhe	10	13	—	18	—	—	—	23	—
Hintere Höhe	13	15	—	20	—	—	—	24	22
Oberer Sagittaldurchmesser des Wirbelkörpers	15	—	—	23	—	—	—	—	—
Mittlerer Sagittaldurchmesser des Wirbelkörpers	16	—	—	25	—	—	—	—	—
Unterer Sagittaldurchmesser des Wirbelkörpers	17	—	—	26	—	—	—	—	—
Oberer Transversaldurchmesser des Wirbelkörpers	29	—	—	32	—	—	—	36	—
Mittlerer Transversaldurchmesser des Wirbelkörpers	—	—	—	26	—	—	—	25	—
Unterer Transversaldurchmesserr des Wirbelkörpers	26	32	—	35	—	—	—	38	—
Sagittaldurchmesser des Wirbelloches	11	9	12	12	12	10	12	11	9
Transversaldurchmesser des Wirbelloches	23	19	15	16	15	13	16	17	19
Entfernung der äussersten Ausladungen der Proc. articulares superiores	—	—	41	33	—	31	29	(41)	(47)
Entfernung der äussersten Ausladungen der Proc. articulares inferiores	—	—	36	34	—	33	30	(30)	(42)
Verticaler Wirbelkörper-Index	118.2	—	—	105.3	—	—	—	—	—
Sagittoverticaler Wirbelkörper-Index	62.5	—	—	72.0	—	—	—	—	—
Index des Wirbelloches	47.8	47.4	80.0	75.0	80.0	71.3	75.0	64.7	47.4

Epistropheus.

Vordere ganze Höhe	23	Vordere Höhe des Dens	15

(16)

		1.	2.	3.	4.	5.
Oberer transversaler Diaphysen-durchmesser	r	35	29	28	29	32
	l	—	32	27	28	33
Kleinster unterer sagittaler Diaphysendurchmesser	r	31	—	—	—	—
	l	—	29	—	—	—
Unterer transversaler Diaphysendurchmesser	r	—	—	—	—	—
	l	—	47	—	—	—
Collumlänge	r	—	—	55	—	—
	l	—	—	—	—	68
Verticaler Durchmesrr des Collum	r	37	32	28	—	—
	l	—	—	—	—	33
Sagittaler Durchmesser des Collum	r	27	23	21	—	—
	l	—	—	—	—	27
Umfang des Collum	r	104	93	75	—	—
	l	—	—	—	—	107
Verticaler Durchmesser des Kopfes	r	48	—	—	—	—
	l	—	—	—	—	—
Transversaler Durchmesser des Kopfes	r	48	40	—	—	—
	l	—	—	—	—	—
Umfang des Kopfes	r	155	—	—	—	—
	l	—	—	—	—	—
Epicondylenbreite.	r	—	—	—	—	—
	l	(84)	—	—	—	—
Dicke des Condylus lateralis	r	(60)	—	—	—	—
	l	—	—	—	—	—
Grösste länge des Condylus lateralis	r	(60)	—	—	—	—
	l	—	—	—	—	—
Krümmungs-Index	r	1.7	—	—	—	—
	l	—	1.9	2.3	—	—
Torsionswinkel	r	7°	—	—	—	—
	l	—	—	—	—	—
Collo-Diapeysenwinkel	r	131°	—	130°	—	—
	l	—	135°	—	—	123°
Condylo-Diaphysenwinkel	r	80°	—	79°	—	—
	l	80°	77°	—	—	—

		1.	2.	3.	4.	5.
Längendicken-Index	r	19.7	—	19.5	—	—
	l	—	—	—	—	—
Längendicken-Index (Umfang der Mitte: Diaphysenlänge)	r	—	—	—	—	—
	l	—	24.1	—	—	—
Längendicken-Index (Martin 5a)	r	22.5	—	—	—	—
	l	—	22.1	—	—	—
Index des Diaphysenquerschnittes der Mitte (Index pilastericus)	r	100.0	100.0	100.0	113.0	—
	l	103.9	100.0	95.7	114.3	100.0
Index des oberen Diaphysenquerschnittes (Index platymericus)	r	82.9	79.3	78.6	75.9	68.8
	l	—	68.8	74.1	71.4	69.7
Index poplitcus	r	—	—	—	—	—
	l	—	61.7	—	—	—
Index des Collumquerschnittes	r	73.0	71.9	75.0	—	—
	l	—	—	—	—	73.0
Index des Caputquerschnittes	r	100.0	—	—	—	—
	l	—	—	—	—	—
Index der Collumlänge	r	—	—	15.4	—	—
	l	—	—	—	—	—

Tibia.		1.	2.	3.	4.	5.
Grösste distale Epiphysenbreite	r	(50)	—	—	—	—
	l	—	—	—	—	—
Sagittaler Durchmesser der unteren Epiphyse	r	40	—	—	—	—
	l	—	(32)	—	—	—
Sagittaler Durchmesser der Mitte	r	28	28	—	26	—
	l	30	27	—	24	—
Transversaler Durchmesser der Mitte	r	22	19	—	18	—
	l	19	19	—	16	—
Sagittaler Durchmesser im Niveau des Foramen nutricium	r	35	29	—	28	—
	l	32	30	—	—	—
Transversaler Durchmesser im Niveau des Foramen nutricium	r	26	20	—	19	—
	l	21	21	—	—	—
Umfang der Diaphyse	r	83	76	—	74	—
	l	79	75	—	—	—

		1.	2.	3.	4.
Umfang der Mitte	r	—	64	62	58
	l	67	—	62	58
Umfang des Caput	r	—	—	—	—
	l	144	—	—	—
Breitendurchmesser des Caput	r	—	—	—	—
	l	(44)	—	—	—
Längendurchmesser des Caput	r	—	—	—	—
	l	(47)	—	—	—
Breite der Trochlea	r	(44)	—	—	(25)
	l	—	—	—	—
Breite des Capitulum	r	16	—	—	—
	l	—	—	—	—
Tiefe der Trochlea	r	(27)	—	—	(23)
	l	—	—	—	—
Breite der Fossa olecrani	r	30	(25)	—	26
	l	—	—	—	—
Tiefe der Fossa olecrani	r	12	(10)	—	12
	l	—	—	—	—
Condylo-Diaphysen-winkel	r	82°	—	—	76°
	l	—	—	—	—
Capito-Diaphysenwinkel	r	—	—	—	—
	l	46°	—	—	—
Diaphysenquerschnitts-Index	r	—	77.3	80.0	85.7
	l	79.2	—	64.0	75.0
Index des Caputquerschnittes	r	—	—	—	—
	l	93.6	—	—	—

Radius.

		1.	2.	3.	4.
Kleinster Umfang des Schaftes	r	40	40	40	—
	l	40	38	36	—
Umfang unterhalb der Tuberositas	r	43	—	—	—
	l	42	37	—	—
Transversaler Durchmesser des Schaftes	r	16	15	16	—
	l	15	15	14	—
Sagittaler Durchmesser des Schaftes	r	11	10	10	—
	l	11	10	10	—
Diaphysenquerschnitts-Index	r	68.8	66.7	62.5	—
	l	73.3	66.7	71.4	—

Ulna.

		1.	2.	3.	4.
Kleinste Umfang	r	39	34	—	—
	l	39	34	—	34
Krümmungs-Index	r	—	—	—	—
	l	—	—	—	0.8
Dorso-volarer Durchmesser	r	12	12	—	10
	l	12	10	—	11
Transversaler Durchmesser	r	17	16	—	15
	l	16	16	—	16
Diaphysenquerschnitts-Index	r	70.0	75.0	—	66.7
	l	75.0	62.5	—	68.8

Femur.

		1.	2.	3.	4.	5
Grösste Länge	r	446	—	360	—	—
	l	—	—	—	—	—
Ganze Länge in natürlicher Stellung	r	437	—	357	—	—
	l	—	—	—	—	—
Diaphysenlänge	r	—	—	—	—	—
	l	—	332	—	—	—
Diaphysenlänge (Martin 5a)	r	380	—	—	—	—
	l	—	345	—	—	—
Sagittaler Durchmesser der Diaphysenmitte	r	27	25	22	26	—
	l	27	24	22	24	25
Transversaler Durchmesser der Diaphysenmitte	r	27	25	22	23	—
	l	26	24	23	21	25
Umfang des Diaphysenmitte	r	86	80	71	78	—
	l	84	78	70	75	80
Oberer sagittaler Diaphysendurchmesser	r	29	23	22	22	22
	l	—	22	(20)	20	22

		1.	2.	3.	4.	5.
Breite der Incisura mandibulae	r	—	—	—	—	—
	l	34	37	—	—	—
Höhe der Incisura mandibulae	r	—	—	—	—	—
	l	12	15	—	—	—
Querprofilwinkel des Obergesichts		151°	—	145°	145°	146°
Kinnwinkel		—	—	—	78	—
Symphysen-Winkel		—	—	—	—	—
Astwinkel	r	128°	—	—	—	—
	l	128°	120°	—	—	—
Transversaler-Frontal-Index		83.2	—	—	81.9	76.1
Transversaler Parietooccipital-Index				—	—	—
Transversaler Frontoparietal-Index				—	68.4	63.1
Sagittaler Frontal-Index		89.2	88.9	87.7	85.0	88.3
Sagittaler Parietal-Index		—	—	—	(87.4)	—
Index des Margo coronalis	r	—	84.7	—	81.8	—
	l	84.0	—	—	79.3	80.7
Orbital-Index	r	—	—	—	—	76.3
	l	90.2	—	—	92.2	76.3
Vorderer Interorbital-Index		91.3	—	—	—	81.8
Nasal-Index		—	—	—	—	(50.0)
Höhendicken-Index des Corpus mandibulae	r	41.2	—	46.4	—	—
	l	41.2	42.4	—	—	—
Index des Unterkieferastes	r	—	—	—	—	—
	l	52.7	54.7	—	—	—
Index der Incisura mandibulae	r	—	—	—	—	—
	l	40.5	35.3	—	—	—

Clavicula.

		1.	2.
Sagittaler Durchmesser der Mitte	r	19	11
	l	—	—
Verticaler Durchmesser der Mitte	r	11	11
	l	—	—
Umfang der Mitte	r	53	38
	l	—	—
Lateralwinkel	r	120°	—
	l	—	—
Querschnitts-Index ber Mitte	r	57.9	100.0
	l	—	—

Scapula.

		1.	2.
Länge der Cavitas glenoidalis	r	—	—
	l	(34)	—
Breite der Cavitas glenoidalis	r	—	—
	l	(25)	—
Acromioglenoidale Breite nach Hasebe	r	—	—
	l	(15)	—
Längenbreiten-Index der Cavitas glenoidalis	r	—	—
	l	(73.5)	—

Humerus.

		1.	2.	3.	4.
Transversale Dicke am Collum chirurgicum	r	—	—	—	—
	l	28	—	—	—
Grösster Durchmesser der Mitte	r	—	33	20	21
	l	24	—	25	20
Kleinster Durchmesser der Mitte	r	—	17	16	18
	l	19	—	16	15
Grösster Durchmesser im Niveau der Tuberositas deltoidea	r	—	22	22	20
	l	24	—	22	20
Kleinster Durchmesser im Niveau der Tuberositas deltiodea	r	—	19	16	16
	l	22	—	17	14
Kleinster Umfang der Diaphyse	r	—	63	58	58
	l	66	—	58	57

計　　測　　表

Schädel.		1.	2.	3.	4.	5.
Kleinste Stirnbreite		99	96	86	95	89
Grösste Stirnbreite		119	—	—	116	117
Biauricularbreite		—	—	—	116	—
Grösste Schädelbreite		—	—	—	139	(141)
Basion-Bregma-Höhe		—	(130)	—	—	—
Mediansagittaler Frontalbogen		130	126	114	120	128
Mediansagittaler Parietalbogen		—	—	—	(136)	—
Mediansagittaler Occipitalbogen		—	—	—	—	—
Mediansagittaler Oberschuppenbogen		—	—	—	—	—
Bogenlänge des Margo coronalis	r	—	111	—	110	—
	l	125	—	—	116	124
Bogenlänge des Margo lambdoidea	r	—	—	—	—	—
	l	—	—	—	—	—
Mediansagittale Frontalsehne		116	112	100	102	113
Mediansagittale Parietalsehne		—	—	—	(118)	—
Sehnenlänge des Margo coronalis	r	—	94	—	90	—
	l	105	—	—	92	100
Obergesichtsbreite		(106)	—	(90)	102	104
Biorbitalbreite		—	—	—	—	98
Nasomalarbreite		—	—	—	—	103
Vordere Interorbital-breite		21	—	—	—	18
Vordere Interorbitalbogenbreite		(23)	—	—	—	22
Orbitalbreite	r	—	—	—	—	43
	l	41	—	—	39	43
Orbitalhöhe	r	—	(31)	—	—	32
	l	37	—	—	36	32
Orbitaltiefe	r	—	(53)	—	—	—
	l	—	—	—	—	—

		1.	2.	3.	4	5.
Nasenbreite		—	—	—	—	(24)
Nasenhöhe		—	—	—	—	48
Obere Breite der Nasenbeine		9	—	—	—	6
Kleinste Breite der Nasenbeine		7	—	—	—	5
Choanenhöhe	r	—	—	—	—	—
	l	—	—	—	—	—
Grösste Höhe des Wangenbeins	r	47	—	—	—	46
	l	—	—	—	48	—
Maxillarhöhe des Wangenbeins	r	28	—	—	—	26
	l	—	—	—	25	—
Temporalhöhe des Wangenbeins	r	18	—	—	—	—
	l	—	—	—	14	—
Obere Breite des Wangenbeins	r	48	—	—	—	—
	l	—	—	—	—	—
Mittlere Breite des Wangenbeins	r	29	—	—	—	—
	l	—	—	—	—	—
Untere Breite des Wangenbeins	r	38	—	—	—	—
	l	—	—	—	—	—
Bimentalbreite		—	—	—	45	—
Kinnhöhe		—	—	—	30	—
Höhe des Corpus mandibulae	r	34	—	28	—	—
	l	34	33	—	—	—
Dicke des Corpus mandibulae	r	14	—	13	12	—
	l	14	14	—	12	—
Astbreite	r	—	35	—	—	—
	l	35	35	—	—	—
Asthöhe	r	—	—	—	—	—
	l	64	67	—	—	—
Coronoidhöhe	r	—	62	—	—	—
	l	65	63	—	—	—

(3) 〃 〃 肥後國熊本市春日町北岡神社境內古墳ヨリ發見セシ人骨ニ就キテ　熊本縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書第二册　大正十四年四月
(4) 〃 〃 津雲貝塚人人骨ノ人類學的研究　第二部頭蓋骨ノ研究　人類學雜誌第四十一卷第三・第四號大正十五年三・四月
(5) 宮本博人　現代日本人人骨ノ人類學的研究　第一部　頭蓋骨ノ研究　同誌第三十九卷　三〇七頁　大正十三年
(5a) 〃 〃 現代日本人人骨ノ人類學的研究　第三部　骨盤ノ研究　人類學雜誌第四十二卷第六・第七號昭和二年六・七月
(6) 〃 〃 同　上　第二部　上肢骨ノ研究　同誌第四十卷第六・第七・第八號　大正十四年六・七・八月
(7) 〃 〃 越中國礪波郡城山古墳ヨリ發見セラレシ人骨ニ就テ　同誌第四十卷　第十二號　大正十四年十二月
(8) 〃 〃 美濃國可兒郡土田村字渡古墳發見ノ人骨ニ就テ　同誌第四十卷　第九號　大正十四年九月
(9) 〃 〃 近江及攝津ニ於ケル古墳發見人骨ニ就テ　同誌第四十卷　第十一號　大正十四年十一月
(10) 長谷部言人　河內國府石器時代人骨調査　京都帝國大學文學部考古學研究報告　第四册　大正八年四月——大正九年三月
(11) 平井・田幡　現代日本人人骨ノ人類學的研究　第四部下肢骨人類學雜誌第四十三卷　第一附錄　昭和三年二月
(12) 清野・平井　津雲貝塚人人骨ノ人類學的研究　第三部　下肢骨同誌第四十三卷　第三附錄　昭和三年五月
(13) 〃 〃 同　上　第四部　下肢骨同誌第四十三卷第四附錄　昭和三年五月
(14) 平井　隆　樺太アイヌ人頭蓋骨ノ研究　同誌第四十二卷　第一附錄　昭和二年十一月
(15) 〃 〃 備前國赤磐郡軽部村西軽部古墳ヨリ發掘シタル人骨ニ就テ　同誌第四十四卷第一・第二號　昭和四年一・二月
(16) Koganei, Y., Beiträge zur physischen Anthropologie der Aino. I Untersuchungen am Skelett. Mitt. med. Fak. Univ. Tokio Bd.2. 1893.
(17) 金高勘次　吉胡貝塚人人骨ノ人類學的研究　第一部　頭蓋骨ノ研究　人類學雜誌　第四十三卷　第六附錄　昭和三年十月
(18) 〃 〃 伯耆國東伯郡灘手村長谷古墳ヨリ出土セシ人骨ニ就テ　同誌第四十四卷第二附錄　昭和四年十月
(19) 〃 〃 伯耆國東伯郡東鄉村大字別所寺山古墳人骨(頭蓋骨)ノ人類學的研究　同上
(20) 〃 〃 出雲國簸川郡莊原村學頭古墳人骨ノ研究　同誌第四十三卷第十一號　昭和三年十一月
(21) 清野・平井・金關　福岡縣筑紫郡山家村ノ甕棺中ヨリ發見シタル金石併用時代ノ人骨ニ就テ　同誌第四十三卷第四號
(22) 田幡丈夫　津雲貝塚人人骨ノ人類學的研究　第五部　骨盤骨ノ研究　同誌第四十三卷　第七附錄　昭和三年十一月

して後關節面高は(三)であるから略ぼ中等高と云つてよい。

結　言

頭蓋骨に就ては既に概括の條下に記述した如く頭型は Brachykephal 乃至 Mesokephal であらう。山陰古墳人に能く觀る頭蓋縫合の鋸齒短かく、屈曲の細密な事も本例の多數例に適合する。宇野村古墳人に觀た前頭縫合殘存が女性の一例に立證せられた事から考へて山陰古墳人間にもかなり Metopismus の多い事が察せられる。之はアイヌ人間に尠ない事實と對照して興味がある。グラベラ眉上弓の發育及鼻根部の陷凹は男性は概してかなり强く、前頭は後退して居る。此性質は日本石器時代人に通有し、山陰古墳人中にも宇野村古墳人に認め、隣接現代人ではアイヌ人の特徵である。城山古墳人もグラベラは中等强で福岡金石併用人は稍著明だと云ひ、熊本北岡神社古墳人も此部の發育は强いそうである。同じ山陰古墳人にも寺山人の如く發育の弱いものもあつて平井氏の輕部古墳人と軌を一にする。眼窠入口の形態は既述の如く高いものと低いものとある。梨子狀口下緣は從來調査した山陰古墳人は何れも Infantile-Form であつて本例中觀察し得た一體も同樣である。齒牙の殘存せるものは少ないけれ共其咬耗狀態から察して咬合型は鉗子狀であつて多くの古人骨に類似の性質である。

肢骨中殊に大腿骨及脛骨は長谷古墳人に似たる所あり。併し大腿骨は伸長で彎曲弱く、頸は短かく、骨幹は圓味を帶びたものと彎曲比較的强く、扁平で頸も割合に長いものとがあるが大腿骨と脛骨とは各々平均した所では其扁平さは現代日本人と津雲人・アイヌ人の略ぼ中間に在るものと云ひ得やう。肩胛骨は二體だけで且不完全であるが肩胛截痕は深く、肩峯突起關節窩間距離は比較的狹く、肩胛棘も急峻ではない。此等の點は現代人に似た所である。

以上に依つて觀る時は若し山陰古墳人に寺山人の如き頭型を有するものと、宇野村古墳人の如きものとが存在すると假定するならば本例は正に此兩型を含有せるものと見るべきである。肢骨も亦一樣ではないが近く寺山古墳人の肢骨研究が完了するから共れを俟つて更に比較する事としやう。

主要文獻

(1) 足　立　正　伯耆國高麗山麓ノ古墳、人類學雜誌第十六卷第百八十六號、明治三十四年九月
(2) 清　野・宮　本　國府石器時代人人骨ノ人類學的研究、人類學雜誌第四十一卷第八號　大正十五年八月

方に凸隆し、而かも緣鋭くして脛骨は刀身の如くだと云ふて居るが本例は緣の磨耗もあり、あまり鋭いものはない。脛骨の最扁平部が中央部に存するか榮養孔部にあるかは本例では區々である。又骨間稜の發育及筋肉附着部粗糙の狀態等に關しては特に異つた所はない。

第三節 腓骨

保存狀態 之も五體分存在する。(1)♂(2)♂及(3)♀は左右共に存するけれ共(4)♀と(5)♀?とは左側のみである。以れも上下の骨端を失ひ、(4)♀は中央骨幹部のみを殘存する。

一般所見 以上の如くであるから最大長は全然不明である。中央最大徑は第四表の如く、畿內日本人より大きく、津雲貝塚人よりも小さい。最小徑は(1)♂(r 10 / l 10)(2)♂(r 9 / l 10)♀(r 9 / l 9)(5)♀?(r — / l 10)・中央周徑は(1)♂(r 46 / l 46)(2)♂(r 48 / l 47)(3)♂(r 35 / l 35)(5)♀?(r — / l 45)である。前者は畿內日本人♂(r 10,3 / l 10,4)♀(r 9,0 / l 9,0)・津雲貝塚人♂(r 12,1 / l 12,1)♀(r 9,9 / l 9,7)、後者は日本人♂(r 41,5 / l 41,1)♀(r 38,6 / l 37,4)・津雲貝塚人♂(r 51,8 / l 50,7)♀(r 43,5 / l 42,9)であるから本例の腓骨は畿內日本人と津雲貝塚人との略ぼ中間の太さである。

第二十四圖 腓骨中央橫斷面

(r) (l)

No. 1 No. 2 No. 3 No. 5(l)

Fig. 24 Qurrschnitte durch die Mitte der Fibula.

中央橫斷示數は第四表の如く性別が甚しい。卽ち男性は同表の何れよりも小さく、女性は畿內日本人と大差がない。中央橫斷面は第二十四圖の如く男性は二例共扁平であるが女性は不正三角形である。骨間稜の關係は男性は發育强く、女性は弱い。內面の起狀も亦同樣の性別がある。骨の外面の狀態は輕く凹陷して居り、彎曲は弱い部に屬する。

第四節 踵骨

保存狀態 右側のもの一個、而かも不完全である。

一般所見 最大長は(72)であって畿內日本人♂(r 72,4 / l 72,3)♀(r 66,6 / l 66,9)の男性に一致し、津雲貝塚人♂(r 76,2 / l 76,0)♀(r 69,6 / l 70,7)よりも短かい。中幅は(38)で畿內日本人♂(r 40,7 / l 40,7)♀(r 36,3 / l 36,6)及津雲貝塚人♂(r 41,8 / l 41,8)♀(r 37,9 / l 38,0)に比べて見ると之等の男性よりは狹い。長幅示數は(r 52,7 / l —)であって畿內日本人♂(r 56,3 / l 56,2)♀(r 54,4 / l 54,6)及津雲貝塚人♂(r 55,3 / l 54,9)♀(r 54,3 / l 53,9)に較べて小さい。踵骨隆起は厚結顯著に

Tabelle 4. 第　四　表		Index des Querschnittes der Mitte der Tibia 脛骨中央横斷示數	Index Cnemicus 同榮養孔部横斷示數	Grösster Durchmesser der Mitte der Fibula. 腓骨中央最大徑	Index des Diaphysenquerschnittes der Mitte der Fibula. 腓骨中央横斷示數
本　　例	♂ r l	73,3 67, (2)	71,7 67,8 (2)	17,5 17,5 (2)	54,3 57,2 (2)
	♀ r l	69,2 66,7 (1)	67,9 — (1)	12,0(1) 13,5(2)	75,0(1) 70,9(2)
稲岡金石併用人	♂ r l	80,0 76,7 (1)	79,4 76,5 (1)	— 17(1)	— 76,5(1)
熊本北岡神社古墳人	♂ r l	67,7 67,7 (1)	— 69,7 (1)	16 17 (1)	62,5 64,7 (1)
	♀ r l	80,8 80,8 (1)	80,7 79,3 (1)	15(1) —	66,7(1) —
伯耆國宇野古墳人	♂ r l	69,0 69,0 (1)	65,7 66,7 (1)	— 17(1)	— 70,6(1)
畿内日本人	♂ r l	73,7 73,7 (30)	72,5 72,4 (30)	14,1 13,7 (30)	74,1 76,5 (30)
	♀ r l	78,1 77,0 (20)	76,0 75,4 (20)	13,1 12,6 (20)	68,7 71,5 (20)
津雲貝塚人	♂ r l	61,5 62,4	62,0 62,0	17,7 17,5	69,0 68,8
	♀ r l	65,5 64,8	62,9 63,1	15,0 14,8	66,3 65,8
北海道アイヌ人	♂	62,9±0,51(42)	61,1(25)		
	♀	65,4±1,00(25)	62,8(25)		

彎曲示数は (1) ♂$\binom{r\ 1,9}{l\ —}$(2) ♂$\binom{2,2}{1,9}$であつて津雲貝塚人♂$\binom{r\ 2,4}{l\ 2,4}$ ♀$\binom{r\ 1,4}{l\ 1,7}$の男性に比して小さく、畿内日本人♂$\binom{r\ 1,7}{l\ 1,5}$ ♀$\binom{r\ 1,4}{l\ 1,7}$に較べて大である。計測出来なかつた骨に就て見ても彎曲は弱い方である。清野・平井氏によるも津雲貝塚人脛骨の前縁は強く前

である。殊に學頭古墳人・津雲人及稲岡金石併用人に比較すると甚だ小さい事を知る。骨幹上部の横斷面は第二十一圖の如く扁平に傾いて居る。數字的には第三表の如く概して小さく、北海道アイヌ人♂73,6±0,67(40)　♀71,2±0,65(30)は頸軸に考慮せず計測した數字であるが扁平な點に於て本例と大差がない。

頸の横斷示數は小さく、斷面は上下に楕圓にして津雲人とは趣を異にする。

(1)♂及(2)♂は彎曲が甚だ弱い。(3)♀と(4)♀とはかなり强い。又骨幹から下端への移行狀態は概ね漸進的で喇叭狀をなしたものはない。捻轉角は(1)♂5°にして小さく、骨頭は同骨のものは稍大にして圓く他のものは華車である。又一般に筋附着部は中等强である。

第二節　脛　骨



Fig. 22
第一號脛骨(右)前面圖 [illegible]大

保存狀態　五體分が現存するけれ共不完全で長徑を計り得るのはない。(1)♂は兩側共存在する、兩者共上骨端を失ひ、左のものは下端をも破亡する。(2)♂は左右共上下兩端を破損し、(3)♀も亦同樣である。(4)♀の右側は上端を失ない、左は骨幹の一部のみを殘存する。又(5)♀?は左側のみ下半部現存してゐる。

第二十三圖　脛骨中央横斷面

(l)　No. 1　(r)

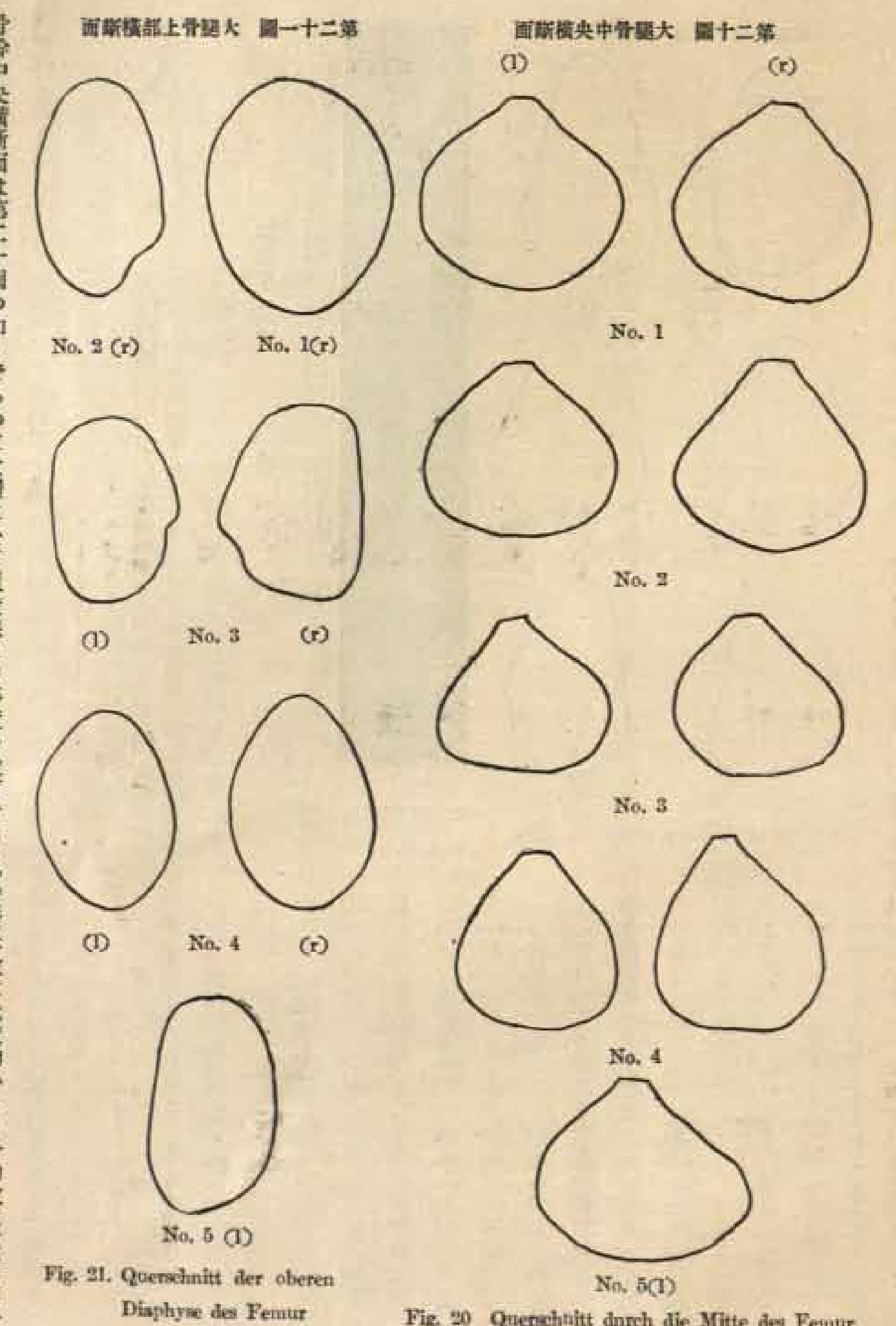
(l)　No. 2　(r)

No. 5(l)　No. 4(r)

Fig. 23 Querschnitt durch die Mitte der Tibia

一般所見　此等の骨に就いて知り得る所は骨幹中央及榮養孔部附近の形態であつて中央横斷面の形態は第二十三圖の如くである。數字的に云ふと第四表の如く中央横斷示數は Meso-Eurykuemie であつて Eurykuemie なる畿內日本人に比して扁平であるけれ共 Platykuemie と Mesokuemie との間に在る津雲貝塚人や Platykuemieなる北海道アイヌ人に比して本例の方が圓味が强い譯である。又榮養孔部横斷示數は同表の如く、概ね前者と同樣の關係に在る。

人とも著差はない。



第二十圖 大腿骨中央横断面

Fig. 20 Querschnitt durch die Mitte des Femur

第二十一圖 大腿骨上部横断面

Fig. 21. Querschnitt der oberen Diaphyse des Femur

骨幹中央横断面は第二十圖の如くであつて大體に於て粗糙線は中等度の發育である。横断示數は比較的小さく平均數は100.0内外

津雲貝塚人は♀$\begin{pmatrix} r & 16,6 \\ l & 16,8 \end{pmatrix}$　♀$\begin{pmatrix} r & 16,4 \\ l & 16,6 \end{pmatrix}$、又國府石器時代人は♂(r)16,2(1)♀(r)15,4(1)であつて古人骨は一般に小なる事を知るが、北岡神社古墳人は♂$\begin{pmatrix} r & 18,2 \\ l & 17,5 \end{pmatrix}$(1)で割合に大である。

Tabelle 3.
第三表

		Index Pilastericus 大腿骨中央横斷示數	Index Platymericus 大腿骨上部横斷示數	Index des Callumquerschnittes 大腿骨頸横斷示數	Collo-Diaphysenwinkel 頸體角	Condylo-Diaphysen-winkel 髁體角
本例	♂ r l	100,0(2) 102,0(2)	81,1(2) 68,8(7)	72,5(2) —	131° 135°(1)	80°(1) 78,5(2)
	♀ r l	106,5(2) 103,3(3)	74,4(3) 71,7(3)	75,0 73,0(1)	130° 123°(1)	79° —(1)
出雲國學頭古墳人	♂ r l	118,5 114,3(1)	113,8 113,8(1)	— —	— —	78° —(1)
熊本北岡神社古墳人	♂ r l	96,3 100,0(1)	81,3 83,9(1)	75,8 87,1(1)	120° 125°(1)	— 77°(1)
	♀ r l	— 100,0(1)	86,7 83,3(1)	72,4 88,9(1)	135° 135°(1)	82° —(1)
畿內日本人	♂ r l	107,8 106,4(30)	86,3 84,3(30)	77,9 78,1(30)	130,5° 131,3°(30)	79,7° 79,8°(30)
	♀ r l	101,4 102,3(20)	82,0 80,3(30)	80,7 81,1(20)	129,2° 131,3°(20)	78,2° 79,0°(20)
福岡金石併用人	♂ r l	115,4(1) —	96,4(1) —	— —	— —	— —
伯耆宇野古墳人	♂ r l	107,4 100,0(1)	— 72,2(1)	— —	— —	75° —(1)
津雲貝塚人	♂ r l	114,6 113,2	79,5 81,5	81,6 83,0	125,3° 125,6°	81,2° 81,9°
	♀ r l	104,2 105,5	76,6 77,5	80,1 81,0	124,2° 124,5°	79,0° 78,8°

次に頸體角は第三表の如く津雲貝塚人及宇野村古墳人よりも大きく、畿內日本人とは大差がない。又髁體角も日本人に似て津雲

であつて後者の男性は割合に短かい。骨幹長は (2)♂(r — / l 332)又Martin 5a の骨幹長は(1)♂(r 330 / l —) (2)♂(r — / l 348) で(1)♂は矢張り長い部類である。

Tabelle 2 第二表

			Umfang der Mitte 中央周徑	Krümmungs-Index 彎曲示數	Längendicken-Index.(Martin 5a) 長厚示數
本例	♂	r	83 (2)	1,7 (1)	22,5(1)
		l	81 (2)	1,9	22,1(1)
	♀	r	74,5(2)	2,3 (1)	—
		l	75,0(3)	—	—
學頭古墳人	♂	r	94 (1)	2,9 (1)	—
		l	94	2,9	—
伯耆宇野古墳人	♂	r	90 (1)	4,8 (1)	—
		l	90	—	—
熊本北岡神社古墳人	♂	r	83	2,7 (1)	—
		l	85 (1)	2,7	22,8(1)
	♀	l	82 (1)		
畿內日本人	♂	r	83,1 (30)	3,3 (30)	23,8 (30)
		l	83,1	3,3	23,8
	♀	r	74,8 (20)	3,7 (20)	23,0 (20)
		l	74,7	3,5	23,0
津雲貝塚人	♂	r	86,8	3,9(14)	24,6
		l	86,6	3,8(11)	24,7
	♀	r	77,3	3,3(18)	23,8
		l	78,0	3,5(16)	23,7

中央周徑に就ては第二表の如く本例は學頭古墳人・宇野村古墳人よりも細く、津雲貝塚人よりも華車で寧ろ畿內日本人に似て居る。又北海道アイヌ人は ♂ 88,0(22) ♀ 80,1(25)で之も本例よりは太い。

尙同表の Martin 5a による長厚示數は他成績に比して小さいから之で見ても本例の大腿骨は華車で割合に長い事が解る。頸長の明らかなものは(3)♀(r 55 / l —)と(3)♀ ♀(r — / l 58)である。併し(1)♂及(2)♂の右は一見して短かい事を知り得る。此兩表は計測し得ぬけれ共恐らく(3)♀よりも短かいであらう。(4)♀は全く不明であるけれ共頸長に於て長いものと短かいものと二種ある事が解る。尙他成績に依ると畿內日本人は♂(r 72,9 / l 73,1)(30) ♀(r 64,6 / l 66,0)・津雲貝塚人♂(r 68,3 / l 69,9) ♀(r 61,8 / l 63,1) であつて古人骨は現代人よりも短かい觀がある。併し國府人は♂(r 75 / l —)(r 63 / l —) ♀(r 70 / l 73)(r 68 / l 69)で甚だ長い例をも見受ける。

頸長示數は(3)♀(r 15,4 / l —)の一例に於てのみ示し得るに得ぎないが之は他の成績に比して甚だ小さい數字である。

尙(1)♂及(2)♂などは更に小さい事は察するに難くない。此示數は畿內日本人では♂(r 17,8 / l 17,8(30))♀(r 17,2 / l 17,0(20))

第五章　遊離下肢骨

第一節　大　腿　骨

保存狀態　五體分が存する。最大長を計測し得たのは(1)♂と(3)♀の右側のみである。(1)♂の左側は下端から275mm殘存し、(2)♂の左側は骨幹長を計り得るが右は骨頭から346mm殘つてゐる。(3)♀の左側のものは兩骨端が失はれ、(4)♀は兩側共存在するが殘存部は骨幹部約300mm が存する。(5)♀?は左側のみが存する。之も下端が失はれて骨頭から 300mm 現存する。

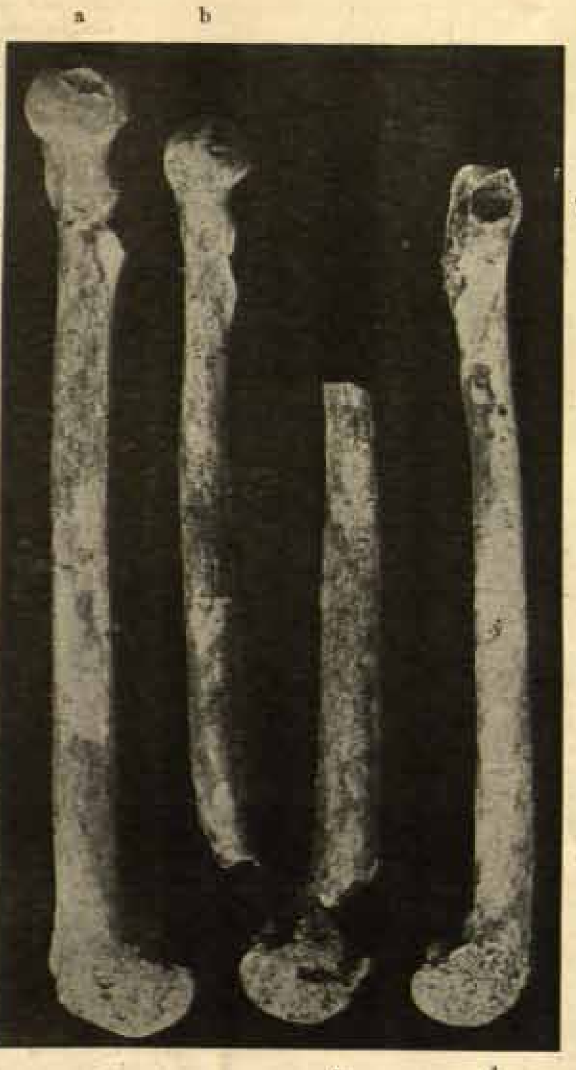


Fig. 19　a.　第一號大腿骨(右)内側面圖[illegible]大
b.　第二號大腿骨(右)内側面圖[illegible]大
c.　第一號大腿骨(左)内側面圖[illegible]大
d.　第一號大腿骨(左)内側面圖[illegible]大

一般所見　二例の最大長は(1)♂(r 446 / l —)　(3)♀(r 300 / l —)であつて平井・田幡氏の畿內日本人♂(r 418,5 / l 418,7(30))♀(r 382,3 / l 384,5(20))・清野・平井氏の津雲貝塚人♂(r 417,9 / l 414,9)　♀(r 382,5 / l 385,0)及北海道アイヌ人♂407,8±2,80(38)　♀382,4±2,18(22)に比べて本例の男性は甚だ長く、女性は反對に短かい方である。此他北岡神社古墳人は♂(r — / l 441(1))　♀(r 400 / l —(1))・國府人は　♂(r) 392(1)♀(r) 380(1)

し、北海道アイヌ人は弧形線の彎曲最も高度なる部位に相應じて存し、從つて後方髖腸關節に接近すと云ひ、津雲人にては男性は後方に、女性は中央に多しと云ふ。

(1)♂の腸骨櫛は發育强く、田幡氏の稱する共地平彎曲は甚だ弱い。大坐骨截痕は一般に狹く、銳角をなす。閉鎖孔の形態は(1)♂は楕圓形(3)♀は鈍圓三角形である。又閉鎖孔長幅示數は(1)(r —, l 60,8)(3)(r —, l 73,5)であるが畿內日本人の同示數は ♂(r 63,3, l 63,8)(30) ♀(r 70,0, l 70,2)(20)津雲貝塚人は♂(r 64,8, l 66,6) ♀(r 69,6, l 69,9)で本例の女性は短廣なるも男性は狹長である。又國府人は ♀(r 57,7(1), l —)で女性としては狹長である。尙劉氏が男性支那人の腰帶骨盤に就いて計つた結果は62,4(18)であり、又北海道アイヌ人にては♂64,2±0,69(36) ♀67,1±1,03(18)である。Symphysenhöhe は (1)♂(r —, l 36)で津雲人♂(r 34,8, l 35,4) ♀(r 33,6, l 33,0)及畿內日本人♂34,2(30) ♀31,5(20)に比べて本例は高い。意義の有無は別とするも本例は一般に弧線の發育が顯著である。

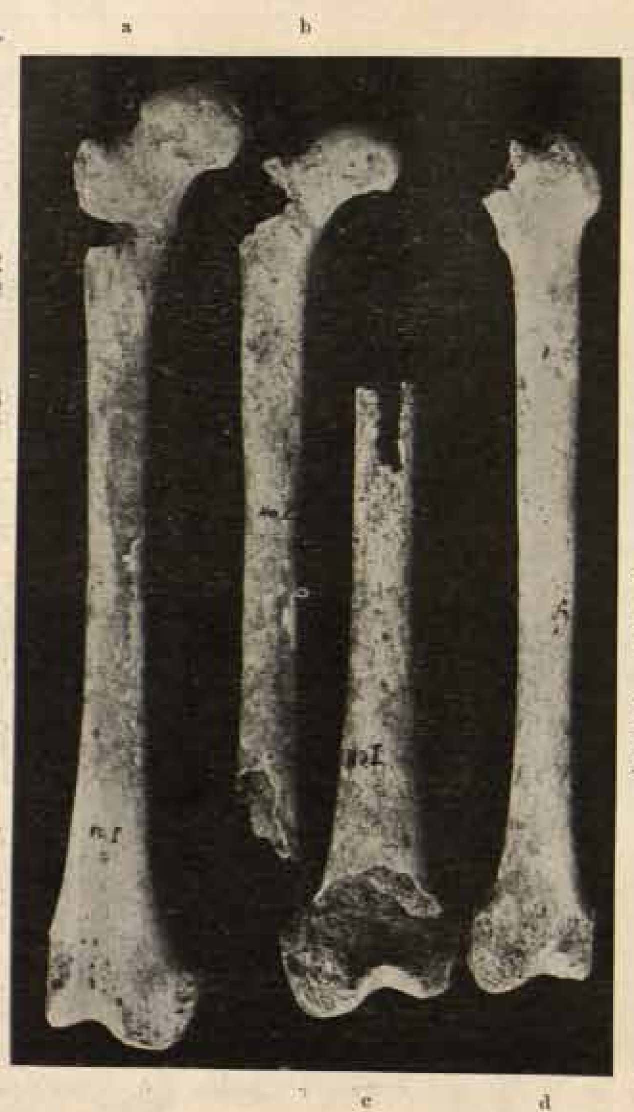


Fig. 18 a. 第一號大腿骨(右)前面圖1/3大
b. 第二號大腿骨(右)前面圖1/3大
c. 第一號大腿骨(左)前面圖1/3大
d. 第一號大腿骨(左)前面圖1/3大

Tabelle 1
第　一　表

			Diaphysenquerschnitts-Index 尺骨々幹横斷示數	Kleinster Umfang der Ulna 尺骨最小周徑
本例	♂	r	72,5(2)	36,5 (1)
		l		36,5
	♀	r	—	— (1)
		l	66,7 68,8 (1)	34
福岡金石併用人	♂	r	76,5 (1)	37 (1)
		l	72,2	28
北岡神社古墳人	♀	r	81,3(1)	36 (1)
		l	—	—
畿內日本人	♂	r	81,8 (30)	36,8 (30)
		l	81,3	36,0
	♀	r	79,5 (20)	32,4 (20)
		l	77,7	32,1
津雲貝塚人	♂	r	87,4	39,3
		l	87,6	38,9
	♀	r	84,4	33,9
		l	81,3	32,9
支那人	♂	r	89,4±0,35 (166)	37,1±0,18 (166)
		l	87,8±0,35	36,3±0,17

又女性は男性よりも更に扁平である。同表の津雲人・支那人並に清野・宮本氏の國府石器時代人は　♂(r 75,3(4) / l 74,6(3))　♀(r 89,0(3) / l 87,7(3))であるから之等は本例とは餘程差が大である。又最小周徑は之も第一表に示せる如く概ね中等大で國府人は　♂(r 38(1) / l 36(2))　♀(r 34(2) / l 33,5(2))で男性は太い。

體中央横斷面は第十七圖の如く不正三角形であつて背面と掌面とは少しく凹陷して居る。尺骨粗隆は發育中等端である。(2)♂は橈骨側から見て8字形彎曲が可成り強いけれ共內側面の凸彎は弱い。

第四章　骨　盤　骨

保存狀態　四體分が存する。何れも不完全であつて、(1)♂と(3)♀とは不完全ながら兩側揃ふて居り(1)♂の左側は腸骨翼を殘存するし、髀臼の周圍を觀察し得る。(2)♂と(3)♀とは右側だけで之も髀臼の周りの肥厚部が現存する。

一般所見　男性に屬する(1)及(2)は頑強で筋附着部の粗糙强く、髀臼も深大である。(1)♂の腸骨高は(r (157) / l —)であつて之を畿內日本人の　♂(r 126,1 / l 128,0(30))　♀(r 119,0 / l 120,1(20))及津雲貝塚人の　♂(r 130,6 / l 131,1)・♀(r 125,2 / l 126,3)に較べて高い事が解る。其骨質も厚く、腸骨窩深は(r — / l 8)であるから宮本氏の畿內日本人♂(r 7,7 / l 8,0(30))　♀(r 4,5 / l 4,4(20))及田幡氏の津雲貝塚人　♂(r 8,6 / l 8,0)　♀(r 5,0 / l 5,0)に較べて男性間には略ぼ一致を見る。又窩の最深部は略ぼ中央の上部に在るが日本人は中央若くは稍內方に位

では(1)♂が甚だ淺く現代日本人と較べて甚だ差がある。併し(4)♀は左程でも無く中等深と云ふてよい。

第四節 橈骨

保存狀態 (1)♂は左右兩骨端を失ひ、殘存部は右193mm 左192mmである。(2)♂は之も兩側共存するが同じく上下骨端を失ひ、前者よりも短かい。(3)♀は左右骨幹の大部を殘存する。

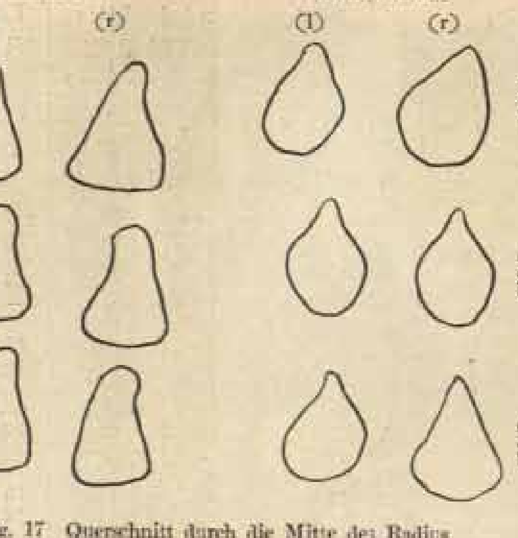


Fig. 17 Querschnitt durch die Mitte des Radius und der Ulna

一般狀態 何れも骨端を失ふて居る爲め長徑を知る事は出來ない。概して骨は中等大で外側面は輕く彎曲し、橈骨粗隆は(1)と(2)のものに認め得るが其發育は著明である。骨間稜は中等度に發育し、骨幹中央横斷面は第十七圖の如くであつて其横斷示數は(1)(r 68,8 / l 73,7)(2)(r 66,7 / l 66,7)(3)(r 62,5 / l 71,4)で一樣ではない。この示數は畿内日本人は♂(r 70,3 / l 70,6(30))♀(r 66,2 / l 65,6(30))津雲貝塚人は♂(r 68,9 / l 68,7)♀(r 70,1 / l 67,5)で日本人の男性は稍大である。次に骨幹最小周徑は(1)(r 40 / l 40)(2)(r 40 / l 38)(3)(r 40 / l 36)で畿内日本人では♂(r 42,3 / l 41,2(30))♀(r 35,1 / l 34,8)・津雲貝塚人♂(r 44,4 / l 45,4)♀(r 38,3 / l 36,7)、國府石器時代人は清野、宮本氏によると♂(r 45,3(3) / l 44,0(4))♀(r 37,0(3) / l 38,3(3))であつて津雲及國府石器時代人の男性は太い事が解る。

第五節 尺骨

保存狀態 (1)♂ (2)♀ (4)♀ は各々兩側揃ふて居るけれ共皆上下骨端を失てふ居るから長徑は不明であり、又幾分は骨面の磨耗を來たしたものもある。

一般所見 背掌徑は(1)(r 12 / l 12)(2)(r 12 / l 10)(4)(r 10 / l 11)・横徑(1)(r 17 / l 16)(2)(r 16 / l 16)(4)(r 15 / l 16)であつて體横斷示數は第一表に示す如く、本例は甚だ扁平な事が解る。

と日本人は鈍隅四角形又は三角形は比較的稀なりと云ひ、清野・平井氏によると津雲貝塚人は扁平な不正四角形で圓形又は三角形は尠なしとせるも小金井氏によると北海道アイヌ人は不正四角形又は三角形なりと云へり。



a　　b　　c

Fig. 15　a　第一號上膊骨(左)1/2大
b　第二號上膊骨(右)1/2大
c　第一號上膊骨(左)1/2大

中央横斷示數と平均數は♂(r 77,3 / l 79,2)(1)　♀(r 85,3 / l 68,3)(2)　であつて男性は畿内日本人♂(r 78,1 / l 77,5)(30)と大差がない。又小金井氏の北海道アイヌ人は♂76,4 ♀74,8であつて男性は本例の男性と似て居る。其他津雲貝塚人♂(r 73,1 / l 74,7)♀(r 69,1 / l 70,9)・國府石器時代人♂(r 67,1 / l 65,9)(12)♀(r 74,5(5) / l 78,7(12))・轟人♂(r 68,5(5) / l 74,8(4))♀(r 70,0(5) / l 68,1(7))又北岡神社古墳人♂(r — / l 73,9)(1)　♀(r 68,2 / l —)(1)　であつて個人的にも亦左右間にもかなり差がある事を知る。

中央周徑は(1)(r — / l 57)(2)(r 64 / l —)(3)(r 62 / l 60)(4)(r 58 / l 58)で畿内日本人♂(r 66,3 / l 65,5)(30)　♀(r 57,3 / l 56,2)(20)　や津雲貝塚人♂(r 69,7 / l 68,8)　♀(r 58,0 / l 56,7)　と大差無く、髁體角は(1)(r 82° / l —)(4)(r — / l 76°)であつて國府石器時代人♂(r 87° / l 87°)(1)に比すれば小さい。此角は人種的に差等ありて原始人程大なりと云ふ。其他滑車幅は廣く、鶯嘴窩深は津雲貝塚人に似て日本人よりも深い。滑車の深さは性別があつて日本人に就て見ても男性は女性に比して深い。之は恐らく運動の劇易や頻度にも關係する事と思ふが本例

上膊骨中央横斷面

No.1 (l)　　No.2 (r)

(l)　No.3　(r)

(l)　No.4　(r)

Fig. 16　Querschnitt durch die Mitte des Humerus

第一節　鎖　骨

保存狀態　之も二體分存在するが各片側のみで(右)、骨幹中央のみが完全である。

(1)は骨幹中央が著しく上下に壓扁され横斷示數は$\left(\frac{r\ 57.9}{l\ —}\right)$で彎曲が强く、外側角は、$\left(\frac{r\ 120°}{l\ —}\right)$を示し一般に筋附着部の粗糙は顯著であるから恐らく男性であろう。

(2)は前者よりは伸直で細い。筋附着部も弱いから女性骨と推定せられる。骨幹中央横斷示數は$\left(\frac{r\ 100.0}{l\ —}\right)$であり、又此等兩者の横斷面は第十四圖の如くである。

鎖骨中央横斷面

No.2(r)　No.1(r)

Fig. 14. Querschnitt durch die Mitte der Clavicula

第二節　肩　胛　骨

保存狀態　之も二體分存在する。併し極めて不完全なものであつて何れも關節窩附近の骨質肥厚部のみであつて(1)は男性で左側(2)も男性であろうが(1)よりは華車であつて之は左右兩方共存在する。

(1)は頑丈で關節窩は深く、關節窩上下の凸隆は强く腋窩緣は厚い。關節窩の形は梨子狀で肩胛截痕は甚だ深く、烏喙突起は頑强であるが長谷部氏の肩峯突起關節窩間幅は15であつてあまり廣くは無い。

(2)は前者から見ると一般に華車で關節窩は淺く、其形は梨子形で窩上・窩下の凸隆は弱いし、腋窩緣上部の厚味は$\left(\frac{r\ 7}{l\ 8}\right)$で前者の$\left(\frac{r\ —}{l\ 15}\right)$に較べて薄い。肩胛截痕は淺廣で肩峯突起關節窩間幅は$\left(\frac{r\ 13}{l\ 14}\right)$で狹い部である。又棘根の存在に依つて見るも肩胛棘は崚立して居ない事が解る。

第三節　上　膊　骨

保存狀態　(1)♂は兩側共に存在するが現存部は右は下端から205mm.左は上端から190mm.である。(2)♂は右側のみで上下兩骨端を破亡して居る。(3)♀は左右共存するが之も骨端の破亡は免れて居ない。(4)♀は兩側存在し左は兩骨端を失ふも右は下端が略ぼ完全である。

一般に筋肉附着部の粗糙は比較的强く、特に三角筋粗糙は顯著である。上膊骨頭を有するは(1)♂の左側のみであるが大結節は强いけれ共津雲貝塚人の如く骨頭よりも高く聳へて居るか或は等高と云ふ樣な事はなく、日本人の如く低い。結節間溝は寧ろ淺廣で橈骨神經溝は著しくは無い。各骨の中央横斷面は第十六圖の如く概ね鈍隅四角であるが稍三角形に傾いたものもある。宮本氏による

次に前頭骨の幅員に就て云ふと横前頭示數は(1)♂83,2 (4)♀81,9 (5)♀?76,1で平均數は80,4(3)であるから寺山古墳人79,8(3)吉胡貝塚人♂80,6 ♀80,5・畿内日本人♂79,3 ♀79,3・九州日本人♂80,0 ♀80,5及津雲貝塚人♂79,9 ♀80,8と似て居る。又樺太アイヌ人は♂81,9 ♀84,4・輕部古墳人は♂83,5 ♀83,6及Haberer氏の支那人は81,3(18)で之等は本例よりも平均大である。從つて本例中(1)♂の外は比較的 kugelstirnig である。前頭結節は性別があるが之は何れの人種にも通有せる所である。顱頂結節は(4)♀に於て甚だ強く發育し、(2)♂は弱く、其他のものは不詳である。耳門は一般に小さく、形は楕圓であるが古人骨特に石器時代人には圓形をなすものが比較的多い。前頭縫合の殘存は(4)♀に於て認める。曾て金高は伯耆國宇野村古墳人骨に之を認め、山陰古墳人の此頻度に就いて注意を喚起して置いた。結局山陰古墳人の十三例中に二例の該縫合があつた譯で15,7%にあたる。

顏面觀で注意すべきは眼窠入口の高低である。既述の如く(1)♂と(4)♀とは甚だ高く Hypsikonch であるが他の(2)♂と(3)♀?とは甚だ低く本例には斯く二樣の眼窠を認める。後者は吉胡貝塚人や津雲貝塚人に屢々遭遇する眼窠入口に一致するが前者は支那人や一部の朝鮮人に見る所である。グラベラの發育は(1)♂ (2)♂ (3)♀?が稍〻強く、眉上弓も中等强であるが他の二例は甚だ弱く、又鼻前頭縫合部の凹陷も同樣の關係である。梨子狀口下緣の形態は(3)♀?に於てのみ認め得られるが Infantile-Form であつて從來調査して山陰古墳人と同樣である。鼻顴骨角は(1)♂が151°で稍〻大であるが他は平均145°であつて畿内日本人・吉胡貝塚人及津雲貝塚人等と大差はない。犬齒窩は(3)♀?は扁平であるが他は深いものが多い。下顎骨は概ね中等大で體の高厚示數も特に異つた點を見ぬ。齒牙は甚だ尠ないけれ共其中にも齲齒がある。咬合型は齒牙磨耗の關係から推して鉗子狀が多數を占めて居る。

第二章 脊椎骨

保存狀態 二體分存在する。一體(1)の椎骨は2, 7, 9, 11, 12, 14, 15, 20, 22, と推定せられ、此外第一薦推が存する。之等の計測數は末表に讓る事とするが推體高は概して低く、又薦骨體基底面は橫楕圓形である。岬角は57°で側部上緣と基底との關係は Hypobasilitär である。他の一體(2)は胸椎三個の存在であるが概して小さい。其他軀幹骨として肋骨の破片數箇を認むるも玆には記載を省略した。

第三章 上肢骨

伯耆國西伯郡高麗村大字長田尾無原古墳人骨に就て（二）

金高勘次
金關丈夫

第二節　頭蓋骨の概括

(1)♂　(3)♀　(6)♀?は破損が甚しいから頭蓋長の程は見當が付かぬ。(2)♂と(4)♀とは挿圖を見ても解る如く頭形は比較的短い。

(5)♀?は不完全ではあるけれ共頭蓋最大幅も甚だ廣いし、顳顬坦面の膨滿も强いから頭形は決して狹長ではない。(3)♀は前頭骨の膨滿は强いけれ共其他の現存部が僅少なので頭形の推定は困難である。(1)♂は之も前頭骨が扁平で割合に廣いのとグラベラ附近の發育が强いと云ふ事の外に特に頭形推定の根據がない。

頭蓋を上面より見た所の形は(2)♂と(4)♀は卵圓形であり、(5)♀?も恐らく同型かと思はれる。

頭蓋縫合の狀態は(4)♀が單純であるのを除いて他は何れも細密で他の山陰古墳人骨と善く似た特徵がある。縫合癒合は年齡に相當して發現して居て特に早期癒合と見るべきものはない。

頭蓋容積にしても(3)♀が甚だ小なるを除き他の四例は概ね中等大と云ふべきであらう。

前頭骨に就いて數字的に觀察すると本例の矢狀前頭示數は平均87.8(5)であつて寺山古墳人の平均數♂+♀89.0(4)よりは小さい。又吉胡貝塚人♂+♀87.5(75)・畿內日本人♂87.9(30)　♀87.6(20)及樺太アイヌ人♀87.8(21)　♀87.3(18)と近似して居るが津雲貝塚人♂+♀88.7(31)や城山古墳人♀92.7及Black氏の支那人♂+♀88.3±0.24(17)よりは小さい。但し本例に於ても性別ありて女性は男性に比し小なる事は勿論である。

顱頂骨に就いては(4)♀が矢狀示數87.4である外は數字的には記されないけれ共も(2)♂も甚だ强い矢狀彎曲を示して居る。

往々にして石器時代・原史時代等抽象的字句にとらはれ、其間に劃然たる時間的差異を認めやうとする論者がある。石器及これに伴ふ遺物が、相對的に金屬文化に先んじて出現したことは文化史上略共通した事實であらう。併しそれは大局の觀察である。箇々の遺物は常に此原則を固守して使用せられたものでなく、箇々の遺跡は亦常に此原則を意識して營まれたものでない限り、事實は常にこれに相應する如く表はれるものではなからう。本古墳出土の繩紋式土器の有する價値が如何なるものであるかは識者の判斷にゆだね、正しい解釋を俟つものである。而して又余は、かゝる事例が今後常に容易に認めらるべきものとは思はない。又稀であるとも考へない。唯若しこれを求め得るならば、大規模の古墳ではなく、從來殆んど度外視された小墳に可能性が多いのではあるまいか。貴族的高級文化の研究も必要である。然し文化史の完全を期する爲めには、下級平民文化の研究も亦必要であらう。又未だ明瞭でない繩紋式土器文化の下限、及び彌生式文化との交渉に關しては、從來好んで研究の對照とせられた遺物豐富なる大古墳の外に、これに伴ふ住居遺跡、下級民の住居、墳墓等を併せて研究する必要があらう。

稿を終るに當り、發掘に便宜を與へられた中山村小學校職員諸氏及び有志百瀨定雄同爲市氏と、附圖の作製に就いて援助せられた杉山壽榮男・竹下勇氏に對し、其厚意を感謝する。

1　洞澤運吉氏の談によれば豐岡古墳の東に並び存する小墳では、嘗て其上部の石塊の間から大刀が發見されたといふ。古墳の大いさと、大刀の發見位置とは、本古墳と共通した點がある。

2　向畑臺地の南麓、坪内部落の東端に在る。此遺跡から發見された遺物は、目下同部落の百瀨爲市、百瀨定雄氏方に收集せられてゐるが、厚手の渦紋土器が多い。又石斧、石鏃、石匙等多く、石劍、土偶等を出してゐる。

3　小松昌之氏の談によれば、本古墳の北方に存在した一古墳は、石室を二分して前後の二室に分けて居つたといふ。

4　柏木古墳は中山村小學校より稍北に下つた、北向斜面柏木地籍に存在する。其構造は大體鍬形原古墳と類似し、大正十四年十一月發掘された時多くの遺物が出土した。其一部は既に警察署へ納め、其他多少逸散したものも在るらしく、玆に掲げた數量は昭和三年十一月現存のものによつた。

これを要するに盤掘古墳は、厚葬を競ふた後期古墳の築造期に當つて、貴族階級の墳墓たる横口式石室墳を模し、或は其傳統的形式を負ふて作られた、一般庶民の墳墓であつたらう。偶々破壊を免れて盤掘古墳の東に竝び存する小墳が、其大いさといひ遺物の出土狀態といひ、略本古墳と一致するところあるのは、往時かくの如き一種の小規模なる墳墓が、壯大な石室墳と共に行はれたことを物語るものであつて、獨り本古墳のみが其奇型石室を專にしてたものではない事を證してゐる。

四　結　言

向畑古墳及盤掘古墳は、いづれも貴族、或は權力者に非ざる人を葬つた、いはゞ平民階級の奥城であつたらう。而して若し如上の推定が許されるならば、向畑古墳は比較的古い時代の築造に係はり、盤掘古墳は、高塚の築造隆盛を極めた後期横口式石室墳の時代に營まれたもので、此盆地に於ける平民文化の一斑を表はすべきものであらう。

從來の調査によれば、信濃の中央に位置する松本盆地には、古式古墳と認め得るものは殆んど存在しない。前方後圓墳を見ず、埴輪・鏡鑑類を伴ふ古墳を殆んど見ることの出來ないのは、南北信濃と聊其狀態の異なるところである。然るに後期古墳と認むべき横口式石室墳は、南安曇・東筑摩兩郡の諸處に亘つて多數存在する。此事實より推測すれば、古墳によつて代表せられる貴族的原史文化は、新たに此盆地に浸潤したものであることを想像するに難くない。而して北信の川中嶋盆地或は南信の天龍峽谷に、相當發展の跡を遺す前期古墳及これに伴ふ原史文化が、此地方と交渉を有たなかつたとは考へ得ない。宏大なる墳壟の偉容と豐富なる副葬遺物によつて貴族的文化の跡を遺した其人が直接此處に關係しないとしても、其文化影響は當然此盆地にも及ぼされ、其處に一種の田園文化を產んだのであらう。向畑古墳は恐らくこの田園文化の所產に係はる平民の墳墓であつたと解せられる。其後に於て横口式石室墳築造の風習は新たなる文化狀態を來したのであらう。此風習が唯文化の移動によつて此地方民の上に自ら生じたのであるか、又は民族の發展移動によつて將來せられた階級的制度であつたか、それには勿論尚ほ史的考究の餘地を多く存する。而してそのいづれの場合に於ても、地方的階級の發生と、舊文化の殘存とは當然あり得べきことである。此時代に盤掘古墳が平民階級の人を葬るべき奥城として築造されたことには、略疑のないところであらう。唯私は此內に埋葬された繩紋式土器を以て、直ちに舊文化の殘存であると主張するには聊か躊躇すると同時に、又これを偶然の混入に歸して却け去ることにも躊躇するものである。

る種類のみである。

故に本古墳は、一般横口式石室を有する後期古墳の築造時期に於て營まれ、それらの制を模して小規模に作られたところの墳墓であつたらう。

若し右の推定を許すならば、宏壯なる墳墓の築造を競ふた此時代に、何故かゝる小墳を作る必要があつたであらうか。恐らく本古墳の營まれた頃には、既にその模範となるべき横口式石室墳が、此鍬形原或はその近隣に姿を見せて居つたことゝ思はれるが、それにもかゝはらず、此の如き一種奇型墳を生じた理由は何邊にあつたらうか。

蟹掘古墳は其外貌の貧弱であること、又石室の小規模であると同時に、副葬遺物の種類及數量も多い方ではない。太刀二口、鐵鏃十箇管玉一箇の副葬品を、太刀數口、鐵鏃六十箇、勾玉管玉切子玉瑠璃玉等玉類合計六十箇餘り、金銀環十六箇、土器十二箇其他馬具鐵斧等數多の遺物を藏して居つた、横口式石室を有する柏木古墳(4)と比較すれば、向畑古墳の場合と同様に、彼我被葬者の間に身分階級乃至は貧富の差の存在することを想はざるを得ないのである。而して玆に最も注意を要するのは、縄紋式土器の存在である。再三述べて來た如く、之は大體半面を存する大形土器の破片であつて、其存在狀態より見れば、死屍埋葬の際偶然混入したものとは認められない。縱令此土器自身が直接副葬の目的を以て納められたのでないとしても、意識的人爲作用によつて此處に置かれたのであることは認めねばならない。而してこれは一つの大いなる矛盾である。從來石器時代の遺物として認められて來た縄紋式土器を、遙かに時代を降る後期古墳の中に發見することは、混入の結果でない限り、他に其理由を求めねばならない。元よりこれは本古墳の一例を以てのみ結論することは不可能である。唯此蟹掘古墳に縄紋式土器の存在を許すべき場合を假定するならば、これには左の三様の解釋が可能であらう。

1　被葬者と此土器は全く無關係であつて、偶然存在したものを便宜の爲めに使用した。

2　被葬者が何等かの機會に入手し愛玩珍重してゐたのを、その死後、遺族がこれを副葬した。

3　被葬者又は其家族が、此種の土器を未だ製作或は使用しつゝある狀態に在り、これを埋葬に使用した。

右の假説のいづれが本古墳の場合を解釋するに最も適當であるか、それを論ずるは徒らに屋上屋を重ねる結果に陷る恐れあるを以て、今は單に事實に對する假説を提出するにとゞめ、此解決は將來に俟たうと思ふ。

る。圖版第八は宮坂の復原に係はり、土器の實際連絡を主とした。第十二圖は杉山壽榮男氏を煩はしたもので、紋樣の復原を主眼とした。口緣部の形大きく土器上部の外彎した、部厚大形の浮紋土器に多く見る形を呈する。全面には繩紋を印し、其上に浮紋樣を付けてゐる。口緣部には一條の凸帶と三條の浮狀繩目帶を以て鋸齒形及び渦を表はし、其下には五條の浮狀繩目帶を水平に置いて土器の周をめぐらす。胴部より底部に至る間には、同樣の繩目を縱に付して模樣とする。

此土器の形態は厚手渦紋土器に類似する點あるも、模樣の構成及び其手法は、東京灣沿岸地方の貝塚より出土する諸磯式土器に近似し、最も近い遺跡に例を求めれば、本村内坪ノ内(2)出土の或種土器と類似する。その共通するところは、細い繩目或は爪形樣の浮帶を以て曲線直線の混合よりなる模樣を表はした點である。これは初め粘土を以て作つた細い紐を土器面に適宜付着して、箆や牛管狀或は半月形狀に先端を凹ませた器具によつて繩目狀痕を印したらしい。坪内出土の一破片は箆叉は櫛の如きものを以て掻いた跡を認められるが、(第一三圖下)本古墳出土のそれは更に細密に印せられ、別種の方法を採つたものと思はれる。



Fig. 13　坪内出土土器片

3　築造の年代と其被葬者

先にも既にいふた如く、盤掘古墳の石室は、其形態明かに横口式石室を小規模とした、一種の變形石室である。實際の用に立たないながらも通路を付して、南方に開口せしめる形式を採つたことは、鍬形原の横口式石室に見るところであり、これに先行すべき原始的形態とは認められない。又室を前後の二區に分つたことも、屢々存在する例であつて、嘗て破壞せられたといふ鍬形原の一古墳と其規を同じくする。(3)唯これは小形に作られた爲に、自ら面積の狹隘と石壁の低小を餘儀なくせられた結果、かゝる奇形を呈するに至つたもので、本來竪穴式石室の構造を採つたものではないと考へられるのである。

副葬遺物に就いて見るも、繩紋式土器の外には、特殊の遺物存在せず、太刀・鐵鏃・管玉等いづれも一般の横口式石室墳に通有す

奥室底部に發見せられた鐵鏃は、主として細形な種類に屬する。西壁下に存した鏃三箇は各々多少形を異にする。一つは全長二・五糎、篦代の先端が稍膨んで身となり、其境は明かでない。（第十一圖5）一つは身と篦代との區別なく、篦代の先端を磨して直ちに鋒とする。其長さ一〇糎餘。（第十一圖6）各れも先端の斷面は紡錘形を呈し、篦代は方形である。他の一つは關によつて身と區別せられる。先端の形は缺損して不明である。（第十一圖7）此等と伴なひ二箇の鐵片が發見された。（第十一圖8・9）無柄の鐵鏃殘片であらう。奥室中央に存在した鐵鏃は5に類し、全長七・五糎身の部分は稍それよりも大である。（第十一圖10）

管玉　蟹掘古墳より發見せられた唯一の裝身具である。長さ二・糎五、直徑〇・七糎程の小形な出雲石製で、孔は一方より穿れる。（第十一圖11）

鐵製品　太刀の下部に存在した鐵製品二箇は、各れも缺損し、用途不明である。第一號太刀の下部にこれと交叉して發見された鐵片には三箇の孔を有し、一端は孔の部分で折れてゐる。一部に木質柄の存在した跡を殘す。刀或は劍の莖とも思はれるが明かでない。（第十一圖12）他の一箇は第二號太刀の下にこれと竝んで置かれる。兩端を缺損して斷面楔形を呈するものである。表面剝離の跡を示し腐蝕甚だしい。（第十一圖13）

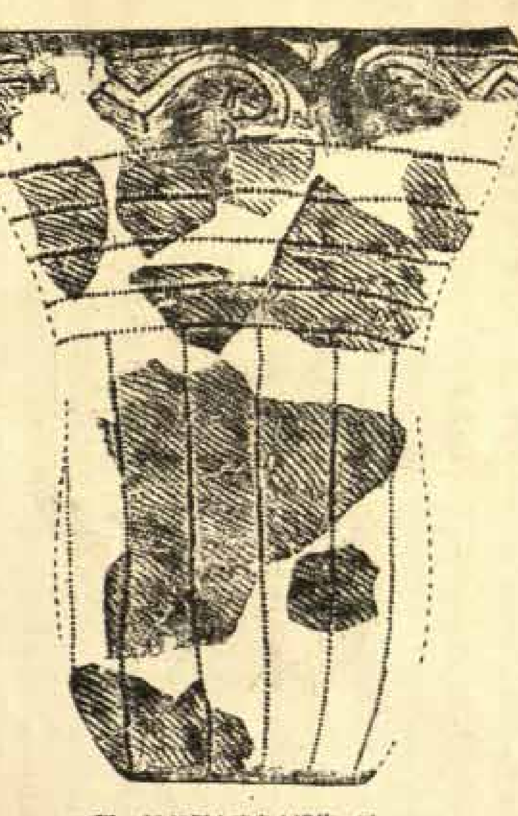


Fig. 12 蟹掘古墳出土遺物　二

土器　蟹掘古墳にとつて最も重要な遺物である。發掘以前より既に細かく破碎し、又發掘に當つて新たに壊され紛失したので、今はこれを正しく復形することは不可能である。大體口緣部、胴部、及び底に近い三部分の大片に接合せられ、其間の缺損部を補へば土器の半面を構成し得る。圖版第八及び第十二圖に示した復原圖は土器面の彎曲及び模樣の連絡を基礎として試みた配置であ

2 遺物

本古墳に副葬された遺物は、向畑古墳に比べれば稍數量多く、種類も亦増してゐるが、大體に於て武器が主要なる位置を占める。

太刀　太刀は二口發見された。第一號太刀は全長八六・五糎、身長七六・九糎、莖長九・九糎程である。關に近い部分に於ける幅三糎餘、重ね〇・九糎を算し、保存狀態良好である。莖は身の長さに對して著しく短かく、且つ目釘孔を有さない。（第十一圖A）第二號太刀は前者より稍小形で、鋒の先端を缺いてゐる。殘存する全長六七・五糎、刀身五七糎、莖長一〇・五糎、幅三・〇糎、重ね〇・八糎程である。前者に比すれば、莖は身長に對して稍大きく、目釘孔一箇存在する。（第十一圖B）

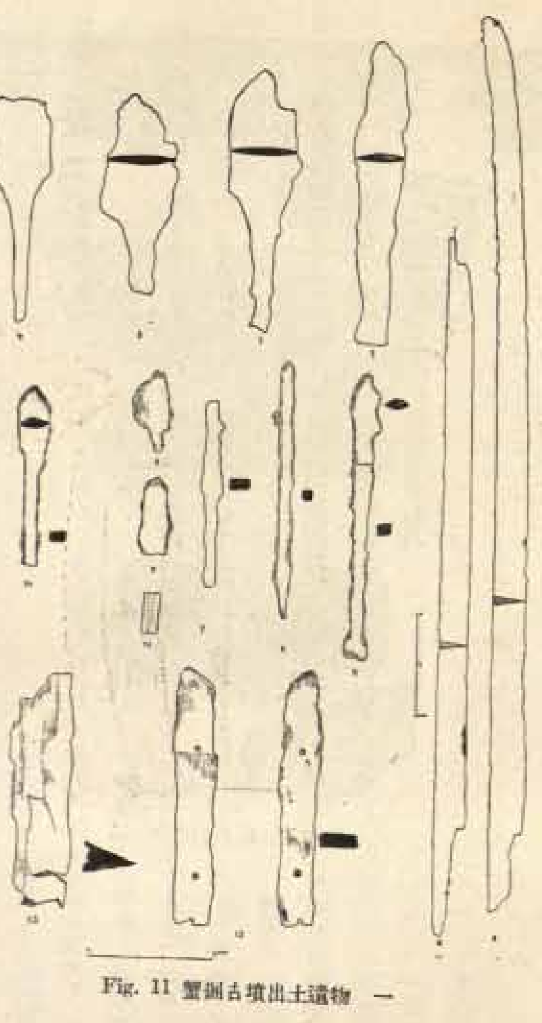


Fig. 11 蟹洞古墳出土遺物 一

鐵鏃　鐵鏃は比較的多く發見せられた。其形式より見れば多く箆代を有し、幅廣ろの薄く平らたい種類のものと、幅狹く部厚なものとの二種類存在する。第一號太刀の鋒より稍離れて存在した鐵製品は、一見劍の鋒部とも見られるが、根元に至るに從ひ次第に幅を減ずる點は、恐らく鏃の前者に屬するものらしく、長さ約一二糎、幅二糎、厚さ〇・三糎程の柳葉形を呈する。一面は殆んど平らに近く、他面稍彎曲し、鎬は認められない。（第十一圖1）

その前方に存在した三箇の鏃は、いづれも平身のものである。略同大で、一は鋒を缺き、他の一は箆を損じてゐる。完全なものに就いて計れば、全長一〇・五糎、身五糎、箆代五・五糎程である。

奥室內部には副葬品は多く存在しない。西壁の下、略中央部に鐵鏃三箇、石室の中央に同じく一箇、及東南隅に近い位置に繩紋式土器の破片若干と、其周圍に拳大の礫石少數を發見したのみである。

かくの如く、本古墳に於ては、副葬品は主として奥室の外と認められるところに置かれ、（1）直接死屍に伴ふて發見せられたのは、その左右に副へて葬られたと覺しい六箇の鐵鏃と、次に疑問とする繩紋式土器の碎片及礫石に過ぎない。室は一體に黑土を以て滿たされ、その東側には殆んど遺物を認めることが出來なかつたけれども、室外に多くの副葬品の存在したことから見れば、此處にも何物か置かれたであらうと想像される。

石器又は繩紋式土器破片等、石器時代の遺物が、古墳の封土又は石室の內部に存在することの例は、從來屢々聞くところであるが、それらの多くは破壞的作業による偶然の發見や、非學術的發掘にかゝはる場合であつて、その存在狀態を明確にしない爲め、單に埋葬時の混入によつたものであるか、又は意識的に副葬せられたものであるか、不明の點が少くない。本古墳內に於て發見せられた若干の繩紋式土器破片は、幸に我等の目前で百瀨氏の發掘したものであるから、從前の諸例に比して稍其狀態を明かにすることが出來たと信ずる。

此等土器破片は數箇の礫石と共に、奥室の東南隅に近い床面に在り、既に數多の細片として發掘せられた。其上には黑土これを覆ひ、蓋石は半ば陷落狀態を呈して下方に傾いてゐた。これを外觀より判斷すれば、或は嘗て破壞された痕跡とも考へ得るが、前室•奥室共に、東側の壁に使用せられた石塊は不整形且つ小形のもの多く、壁の脆弱を來して崩壞狀態を呈する處あり、加ふるに蓋石は元來黑土上に敷き並べられたのみで、正しく石壁によつて支へられてゐない爲め、種々の點より不均衡を生じた結果と思はれる。從つて此土器は後世外部よりの混入とは認め難たい。又土器破片は黑土中に散亂狀態を呈して存在せず、悉く石室の底部より發見せられたのを以て見れば、偶然土と共に搬ばれ來つたものでなく、意識的に置かれたと考へねばならない。且つ發掘に際して新に破碎し、紛失した部分を補へば、大體大形土器の半面を復形することの出來る點より見るも、これを偶然の混入に歸することは不可能である。故に寧ろ埋葬當時、その存在を意識して此處に置かれた結果と考へるのを以て最も穩當とする。頭骨の存在位置と思はれる部分に礫石を伴ふたことゝ、此土器が亦礫石と共に存したことは、其處に何等か共通した埋葬行爲の跡を認め得られやう。

られた箇所が多いので不明瞭の點あるを免れないが、大體左右に一枚づゝ、南北に數枚の石を並べ、東西の端は各れも石壁に僅か載せられてゐる。中央は全く黒土によつて支へられたものらしい。即ち石室內部に充ちた黒土は、埋葬當時より略現在と同じく存在したことを思はせる。奥室東南隅の蓋石は半ば下方に傾き墜落しかけてゐた。蓋石上下の關係は全く不明である。又此等平石の周圍には比較的大きな塊石を積み、蓋石を固定せしめてゐる。覆土は此石室を淺く覆ひ、極めて低平な土饅頭形を呈するのである。

以上を約言すれば、發掘古墳は其平面觀に於て、通路及前後の二室よりなる横口式石室の體裁を備へてゐるが、狹小な通路、壁の低い石室は、實際にこれを横口式石室として使用することは全く不可能である。又竪穴式石室の複雜化したものとは認め難い。實際これが埋葬に當つては、先づ石壁を積んで前後の二區劃と通路を作り、遺骸を納め副葬品を副へて、更に土を埋めて其上に蓋石を蔽ふたものであらう。故に其埋葬の道程より見れば、竪穴式石室、或は石棺の一種とも認められるであらうが、此石造物全體の構造を見れば、石棺でもなく、又竪穴式石室でもない。明かに横口式石室の制を追ふたものと見るべきである。

遺骸及副葬品と其存在狀態　本古墳に葬られた遺骸は、今僅かに前頭骨の一部を存するのみで、他は全く朽ち果てゝしまつたものらしい。奥室の奥壁に接し、中央より西に偏した位置に發見せられた。恐らく北首し南方に下肢を伸べてゐたのであらうが、今は既に明かでない。頭部の存在位置と思はれる部分には、數箇の小さな礫石が存在する。（第十圖參照）

副葬品は奥室より發見せられたのみで、前室及通路には存在しない。其種類及數量左の通りである。

太刀　二口　　鐵鏃　十箇　　鐵片　二箇　　管玉　一箇　　土器片　若干

太刀は二口共奥室の西北隅、壁の上に發見せられた。第一號太刀は西壁上最も北位に在り、石壁の緣に沿ふて數糎外方に、鋒を南に向けて横はる。其下には刀の莖らしい鐵片が一箇存在した。第二號太刀はそれより約三〇糎程東に距だゝり、これに平行して奥壁上に存在する。鋒は北方に向ひ、第一號太刀と反對である。莖及刀身の半ばは室の上に出で、半ばは奥壁上に置かれる。此部分を蔽ふた蓋石は、第二號太刀の大半を覆ひ、第一號太刀と殆んど緣を接して、西壁及奥壁に支へられてゐる。第二號太刀の下部にも、亦鐵片一箇發見された。

第一號太刀の鋒より稍離れて、西壁上の中央部に鐵鏃と思はれるもの一箇、それより更に稍離れて鐵鏃三箇、前室との境界に近く管玉一箇發見せられた。各れも石室外に在り、蓋石と周圍に積まれた塊石との合間に置かれてある。

整な石塊を用ひ、其面の凹凸甚だしく、又既に崩壊した部分も少くない。(圖版第七及第十圖參照)

通路は南方に開口する如く作られ、其長さ約一米餘を有するも、幅は僅かに三五乃至四〇糎、高さ四〇糎に過ぎず、全く形式的に付加せられたものである。石室の主軸に對し稍西に偏する。

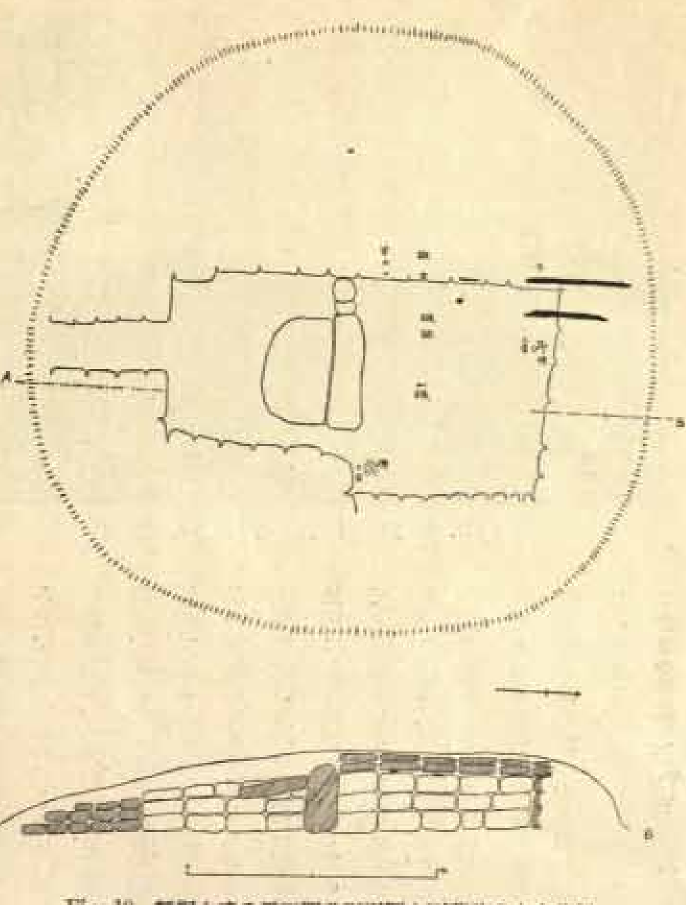


Fig. 10. 蟹掘古墳の平面圖及斷面圖と副葬品の存在位置

前室は奥行一・四五米内外、幅は通路に近い部分に於て一・二米、奥室との境界に近く一・四五米程を算する。東側壁は西側壁に比べて石材小さく、積み方不整で崩壊した部が多い。室の北側には長さ九〇糎餘、幅三〇糎、高さ四五糎程の石が東西に長く横はつて奥室との境界をなし、之れに接して稍大きな平石が一枚置かれ、其下面は左右の石壁上面より稍下方にある。其以外には蓋石らしいものを見ず、内部は黑色の土を以て滿たされたのみで副葬遺物は存在しない。

奥室は奥行一・五五米内外、幅一・七〇米内外の大さを有し、西側壁は大いさの略等しい切石を殆んど一直線に積み、高さも五〇糎程で水平に近い。奥壁及東側壁には大小形狀を異にする石を用ひ、殊に奥壁には大形の石を使用して、其積み方甚だ粗雜である。東側壁は半ば内方に向つて崩れ、發掘の爲め内部の土を除けられて支へを失つたので、石室内に墜落したものも少くない。奥室の内部にも亦黑土が充滿し、其上には數枚の平石を二重に重ね並べて蓋とする。其配列の狀態は發掘の初めに當つて早く剝脱せ

さを有するに過ぎず、其下には平石が二重に重なつて存するのを認め、叉表面より僅か十糎餘の淺い位置に太刀をすら發見するに至つたので、最初の計畫は全然失敗に終つた。よつて北側は暫くそのまゝ放置し、平石の存在しない南側の覆土を去ることに努めた結果、本古墳は略其中央部に存在する稍大きな石を境として、南北に分れた石室様の石造物を有することを知ることが出來たのである。南側には蓋石らしいもの一枚と、前方に付加せられた通路を認めたのみで、副葬品は存在しない。次に再び北側の區域に歸つて其上部に在る平石を取り去り、人骨の一部と太刀・鏃・管玉・土器破片等の副葬品を發見すると共に、本古墳の主體たる石造物は、石室とも石棺ともいへない様な奇型を備へてゐることを知つたのである。而して此奇異なる構造と相俟ち、副葬品の配置にも多少異るところを見出すことが出來るけれども、我等の最も注意を惹いたのは、其一隅に存在した半面の繩紋式土器である。此土器が如何にして此處に存在したのであらうか。これが唯偶然の混入によつたのであるならば全く問題とするに足りないことであるが、若し副葬せられた結果であるとすれば、此一小墳には我等の予期しなかつた重大なる價値の存在することを認めねばならないであらう。



Fig. 9. 發掘古墳全景

唯本古墳の發掘は未だ經驗に乏しい數年前に於て行はれ、其方法・觀察の上に不備の點の少くなかつたことは、今に至つて私の甚だ遺憾とするところである。

古墳の構造　發掘古墳の主要部は、主軸を南北に置き、前後の二區に分つた石室と、狹小な通路からなる石造物である。其基底部はロームの殆んど直上に置かれてある。此石造物は面積に比して容積著しく小さく、通路の部に於ける高さ約四〇糎、奥室に於て五〇糎餘の、高さの極めて低い割石積みの石室と見做すことが出來る。奥室の西側壁は比較的正しく切られた厚さ約一五糎程の石を三段に重ね、南北に殆んど直線に近く積んでゐるが、他の壁には大小不

長野縣 東筑摩郡 中山村古墳發掘調査報告（二）

宮坂光次

三 蟹掘（ガニホリ）古墳

一 發掘

位置 中山の南方に面する鍬形原は大きな貝殻狀に凹入してなだらかな斜面となり、標高七〇〇米附近から急に傾斜して、向畑臺地の延端との間に小峽谷を擁する。明治維新の頃までは、此の鍬形原に約四十箇許りの古墳が密集して存在した由であるが、其後次第に開墾破壊せられて、今其痕跡を尋ね得るものは僅かに十數箇のみに過ぎない。此古墳群中最も南に位置を占めて、鍬形原の突端峽谷に臨む場所に、二つの古墳が竝び存在する。次に述べやうとする蟹掘古墳は、此中の西に存するものであつて、洞澤運吉氏の所有するところである。（第一圖B及第二圖▲印）

外形 蟹掘古墳は直徑六—七米、高さ一米未滿の圓形を呈する古墳である。封土の表面には諸所に小石存在するが、これは後に棄てられたもの丶如く、又埴部・祝部等の土器破片が多く散在する。古墳の北側は隣地が桑畑にせられた結果稍形を變じ、且つ石塊を積み上げられて幾分高さを増してゐるが、大體自然の傾斜に從つて北に高く、南方にゆるく傾いた一塊の小隆起である。葺石・埴輪等は存在しない。（第九圖）

發掘經過 本古墳の發掘は、向畑古墳の調査を終へた三月二十六日の午後より着手し、翌二十七日の夕刻に至つて全部作業を終つた。小松・中島・百瀬等諸氏の援助を得たこと前日と同様である。

蟹掘古墳は最初外貌の小形なことから、向畑古墳の如く無石室無石棺の土壙ではあるまいかとの想定の下に、其發掘計畫を立てて、封土を表面から漸次剝脫しやうと企圖し、北側より發掘を開始したのであつたが、我等の豫想に反して、表土は僅か五六糎の厚

(10) 濱田耕作氏 梅原末治氏 金海貝塚發掘調査報告 六頁。
(11) 島田貞彦氏 周防國吉敷郡見能ヶ濱遺蹟 考古學雜誌 十五卷 十二號

一 遺物

(一) 自然的遺物

貝類を以つて最多數とし、獸骨此に次ぐ。因みに貝類の主なる種名は、凡そ次の如きである。

ツメタガヒ	ハマグリ	アカニシ	アサリ
キサゴ	サルボウ	ニナ	シホフキ
バイ	イタヤガヒ	ヤツシロガヒ	カガミガヒ
オホヘビガヒ	オキシジミ	イタボカキ	カキ

右示した所は、幾多の遺漏を免れないであらうが、尚且本貝塚の側面を語る標準的資料として、注意するに足ると信ずる。獸骨は量的に極めて豐富である。此中僅かに知り得た猪鹿骨を擧げ得るに止め、其他の骨片の推斷的記述を避けようと思ふ。之を要するに、動物遺骸の考究は、種々遺憾の點が多い。出來得べくんば、將來の研究に委ねて、調査者としての充分なる責を果したいと念じて居る。

一九二九、八、十九、稿・一九三〇、二、三補

前號正誤

頁	行	誤	正
二八	七	獻身的ないし	獻身的なりし
二九	五	從つは	從つて
二九	十四	此小波に臨ひ	此小流に臨む
三一	七	整然ある	整然たる
三一	十六	仙田盛太郎	山田盛太郎

殼を部分的に夾雜する。土器含有示相に關しては、前述諸例と何等異る所はない。

a點より東方へ約十米進んだ地點、卽ちd點と假稱する層序の調査結果を示すと、黑土層中多量の貝殼を含む事が他の場合と相違するのみで顯著なる垂直的變異を見出されない。青灰色層は此地點において奧深く沒入し、砂を混へた褐色層が約八十糎の厚さをもつて黑土層下に連帶する。

以上の如く層序的記述の概要は其大體を說示する事が出來た。依つて最後に、考慮すべき一事例を特記し本稿を終らうとする。其層位的連關に就いては、明かな證示を得なかつたが、AB兩點近邊に於いて少數の繩文土器片を見出し得た事である。其等が他よりの混入でない事は、工事に際し盛り上げられた土砂貝殼の堆積を檢採中發見した事實に徵しても、或ひは土器其自身の持つ性體から、明確に然かも雄辯に吾々に語る所である。かの周防國見能ヶ濱（註11）に於いて見出された繩文片は、此場合類同的傾向を持ものとして多大の暗示を與へしめるが、何れにしても彌生式文化に象徵される遺跡の中に、繩文土器を設出する顯著なる遡證を確認する事の出來得たのは、只に私共の喜びとする所のみではない。

【註】（1）此等に關しては、專門學者の教示を俟つより外明快な解答を與へられないが、此赤褐色層を河流の運搬に依り齎らされた推積物とし、其が海水の奔騰作用もて築成された結果ではないかと、私共は假りに想察する。

（2）同種現象に關し、八幡一郎氏　下總國山崎貝塚に對する二三の私見　人類學雜誌　四十二卷十二號參照

（3）清野謙次氏　日本原人の研究　一〇二頁

（4）鈴木敏雄氏　三重縣桑名郡多度村柚井貝塚諸考　考古學雜誌　十八卷十號

（5）東海地方の比較的後代迄存續したと思はれる彌生式貝塚に、新種の土器類を出す事は稀有の現象ではない。（中谷治宇二郎氏日本石器時代提要一五〇頁―一五二頁）だが關東地方に於ける斯うした事例は確かに輕々に看過する事は出來ない。

（6）私共の異常の注意を換起するのは、僅か五十米隔てた此地點に於いて、A點と全く違つた層序を呈するのは、明かに矛盾を生じて居る筈である。二三の憶說も見出されない事はないが、偏へに專門家の御教を請ふ次第である。

（7）古式と識得せられる土器が、上層近く出土する埴瓮類と混在して居つた確證は、殆ど全く接し得なかつたと稱しても過言ではない。然しながら、器面に摩研を施された赤褐色のものと古式の其との混層は、二三觀察する事が出來た。從つて此場合の意味は後者に適用する。

（8）本地點に對して、鍛冶場と呼稱せられる由を、東漸寺住職より聞知したので後考までに附記する。

（9）曾つて大場磐雄氏或程度まで集成し（南豆に於ける特殊遺跡の研究　中央史壇　十三卷　八號）後藤守一氏又多少の論述を試みられた（上古の工藝　考古學講座　八號―九號）

及び後期の其れと變するてふ現象に對し、單なる獨斷として一笑に附すべき事は、此場合有力なる反證の擧らざる限り不可能事に屬する。加ふるに上層出土土器が彌生式としては、遙か後代に屬せしむべき古墳出土品と何等變りなき埴瓮類を多量に含む事に於いて、近時一部學者の注意を惹きつゝある彌生式の編年的問題に、或程度までの重點を確保する事の出來得たのを秘かに吾々は喜ぶ。

e點から三米西方に位する所をC點と假稱する。(第四圖參照)此地點に掘られた數條の坑は南方に向つて約八十米の距離を以つて採掘される。然るに此處に偶然にも本遺蹟の性質を考ふるに、最も重大な鐵滓層の集積を發見するに至つたのである。(第六圖參照)



Fig. 6 A點に於ける鐵滓の集積

層序に於いて見るe點とC點との差異は、黑土層と褐色層との間に鐵層を夾雜する。層位各々が包含部位により、多少厚さを異にする事は言ふまでもないが、大體第一層黑土層は略七十糎、第參層赤褐色層及び第四層青灰色層は共に十糎を示し、第二層鐵滓層は略三十五糎乃至五十糎の厚さを以つて、南方に六十米の果々たる一定層序を現出する。(註8)蓋し其壯觀到底凡筆のよく企て及ぶ所ではないが、早くも石器主用期を脫して此地に偉大なる金屬文化を輝かしつゝあつた日の彼等の生活環境を思ふ時、少くとも、西部日本の同種文化とは、別個な文化的地步を築成せる點に盡せぬ興趣を覺えしめる。

遺物は黑土層中に合包されて、製作軟性黃褐色の新しき彌生式を出す。殊に鐵層中數十片の土器片と高杯脚部を見出し得た事は、疑ふべくもなく此れとの連鎖を語る有力な傍證でなければならない。翻つて鐵滓を出す遺蹟に對しては、既往の先輩の證示により其多くを敎へられて居る。(註9)其故に本稿では屋上屋を架する煩を避けて、彌生式文化の時期に見るさうした現象を把握すれば足りる。けれども大陸に於ける其、例へば金海貝塚(註10)等に思ひを致すならば、余りにも偶然的ならざる照合に、高鳴る胸の轟きを暫し止め得ざるものがあらう。

e點から南方へ約六十米鐵層の盡きる邊、假りにa點と假呼する地區の斷面を檢するに、黑土層中往々に陶土の小塊及び獸骨貝

西東に幅約二十五米の域内に幾條となき壑壕式堀鑿を施したる爲長坑は或は交錯し、或ひは接し遂に此地域全般に亘り驚く可き遺物包含の示相を現出するに至つたのである。吾々の觀察になる此等の總てを列擧する事は、到底煩に堪へないが、全域層序の語る所は何等著しき變動を認めず、大同小異の包藏狀況を呈示して居る。依つて此處では二三の例を選んで次示する。

Ｂ地點の北端に近い前記Ａ點より約五十米西方に位する長さ二十米の坑をｅ點と假稱する。（第四圖參照）　層位の様相Ａ點と全く變化し、最下層に青灰色層を置き（註６）次層なる赤褐色層は砂を混入して、第一層黑土層中に續く。土器の包藏は第二層赤褐色層以下に認められず、多く黑土層に見る。各層位は包藏狀態に依り、多少厚さを異にするけれども、第三層青灰色層は大略二十糎、第二層赤褐色層は七十糎、第一層黑土層は五十糎の層序を保つ。包含される土器は他の場合の如く、彌生式より成り多量の祝部其他陶性硬質土器を伴ふ。



Fig. 4　Ａ點貝層斷面

今仔細に檢するに、表土近く見る土器は燒法軟弱乃至滑澤何等の文樣を伴はず色澤黃赤褐色轆轤使用判然たる瓮置系統に屬する。然るに下層に占置する土器類は、主として燒成粗糙色調黑赤褐色刷毛目を有する成形手捏より成る。稍〻大形の器形を出す。此層序的委相——但し包含層中に於いては、相對的に古式と認知せられるもの〻勢力は薄弱であつて、全的に後期の彌生式のみより成る場合が多い。——は淺層なる爲、其間に少數の例外を豫想されるが（註７）Ｂ點全域に於いて觀察した結果は、此事象に對して何等減殺すべき大なる理由を見出されないのである。

例へばＥ點から約七米北方に鑿出された坑内の垂直的觀察の示す所は（此地點の層序は黑土層中に褐色層を多量に含む）其表土近き所より完形に近い黃褐色小形壺を發掘し、或ひは轆轤の跡歷然たる黃褐色の坩坏類と祝部系統を、又下層に於いては黑赤褐色刷毛目を伴ふ土器類を見出し得たに徵して、有機層中に於けるデリケートな間隙を少くとも見逃す事は出來ないと思ふ。ともあれ實驗と觀察の語る所から導かれる考覈にして、大なる誤謬を含まざるとせば、下層に於いて相對的に古式彌生式を出し、上昇するに

比較的後期迄繁盛したと思はれる彌生式貝塚に、新らしい土器類を伴ふ事は其類例に乏しくはない。清野博士によれば、尾張國熱田貝塚は貝層上部に及ぶに從ひ後期の初期磁器類を出すと聞き（註3）又木製品を伴ひ、且つ後退的色彩濃厚なる彌生式祝部類を出す三重縣柚井貝塚の存在を知る（註4）更に進んで、此狀相は遺物包含層中にて最も著しく、多量の祝部及び磁器類を有機層上部に見出す。始の上層下層兩部に對し、後世の混合攪亂を精算の中に加へて檢出を行つた吾々は、彌生式土器の示す移行的過程よりして、此推定の多少誤謬に陷れるを發見する事が出來た。

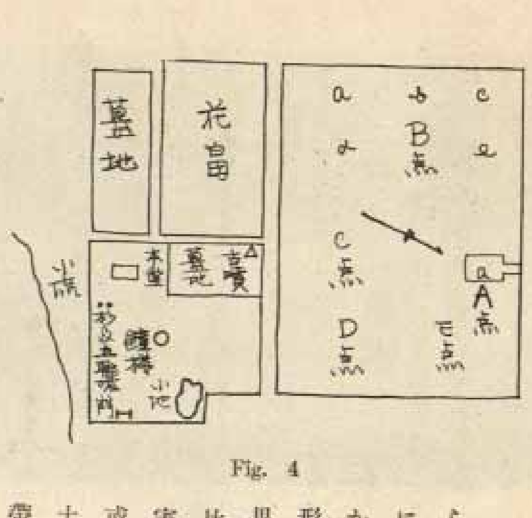


Fig. 4

即ち第二層上半部（貝層と有機層の混合狀態を成す邊）より第參層の間に於いて見られ得る土器は、主として燒成粗鬆、文樣において刷毛目を伴ふに反し、第一層下半部に及ぶや此現象は徐々として變じ、遂に文樣を消失し、剩さへ燒成堅硬緻密土器面恰かも磨きを掛けたるが如く滑澤となり、軈て表土近く接するに及び、燒成軟弱無文器形著しく縮少した性質を帶び、祝部其他の硬質土器を伴出する。然しながら此推移的結果は劃然たる土器の過程を示すのでなく、多少の例外を伴つて居る。殊に第三層中にて比較的後期に屬する彌生式土器高坏脚部一個を發掘した事は、少なからず此見解に傷害を與へたが、吾々は第二層上半部より第一層に至る迄の層序的變化過程に對しては、或點までの肯定を容認しやうと思ふ。此事象を多少なりとも助くるものは、採集した土器片整理の際、製作燒成に於いて硬質なる祝部の手法と、樣式色澤に於いて赤褐色を帶ぶる彌生式と變化なき中間形と目せられる多くの土器片を見出した事である。（註5）

層位狀態は不明に屬するが、以つて此觀察に一つの徵證を與ふるものとして特筆に價する。其他の遺物包含狀態に關しては明瞭な證示に接し得ないが、僅かに土錘土製品を第一層に認め、又多少の骨類と腐蝕した木片を檢出せしに止る。尙をa點以外の他の側面の調査結果も全く此れと同一であるが故に此處には重複を避ける。

A點より西方へ約五十米の地點に當る同一建築場は遺物包含層より成る。此地點一體を假りにB地點を呼ぶ。貝層はA點よりB點に至る約四十米にして斷續的に消滅し、遂に包含層近く全く其影を沒する。B點は基礎工事の必要よりして南北に長さ約百米、

横濱市杉田東漸寺貝塚の研究（二）

尾形順一郎
松下胤信

三　層位的成果に依る經過

前述の如くに、貝層斷面は建築場處々に表れ、多數の遺物を其中に包藏し、一定位を保つ整然たる層位は南方より北方に進展し、小川の流れ來る河岸に盡き、再び對岸中原に及ぶ。就中建築場の北方河岸に接して防火壁を作らん爲めに、南北に長さ一四・二米西東に幅三・六三米深さ二・三五米より成る工事は貝層集積狀態に關し、極めて豐富なる事例を與へたのである。

此地域が掘進の方法に依り、略長方形を呈し、其四側の斷面に就て觀察の出來得た結果は左の如くである。今說明の便宜上此地點をA點と名づけ（第四圖參照）更に四側の一面をB點（東側）と命名する。（第五圖參照）全深二・三五米中、第一層黑土層、第二層貝層、第三層赤褐色層（貝殼を多量に含む）第四層砂層、第五層砂貝層より成る。第一層黑土層は個々の包含狀態により一米より八十糎の厚層を成し、第二層同じく四十糎より六十糎、第三層主として二十五糎乃至三十糎の厚さを保ち、第四層又三十糎より六十糎、第五層砂貝層は殆ど六十糎の一定不動の層位を平行に南北に向つて築く。第四層以下が當時の海底に屬し、第三層に至り始めて人類の活動の閃きを見る事は、遺物包含により容易に認め得る所である。第三層赤褐色層は寧ろ貝殼含有赤褐色層と呼ぶを適當とすべく、殆ど赤褐色層に貝殼を含む混合狀態より成る。（註1）然して第三層上部を貝層被覆し、一部は黑土層中に混入する。

此黑土層中往々赤色に變化せし燒土層を見出す事を得たが、何等徵する足る事象を把握する事は出來なかつた。尙注意すべきは、貝層中蛤アカニシのみより成る層が、一定量集積する狀態である。（註2）

遺物の包藏示相に關しては、第三層より第一層に至り、第四層以下に認める事は出來ない。其詳細に就いて述べれば、土器包層は第一第二兩層最も多く、第三層に至つて急激に含有量を低下する。殊に下層（第三層）より上層に進むにつれ、多少土器性體上に變化を及し表土近く至るに從ひ祝部土器、朝鮮土器其他の陶質土器を伴出し、遂に少數ながら靑磁の破片すら發見するに至つた。

で、殊に茅山貝塚出土のそれは、無文赤褐色の小破片で、貝層の最上部、覆土に接して發見された物であるから、直ちにこれを以て下層出土土器の年代を左右し得る程有力な物と見るべきかはなほ考慮を要する。しかしその他の遺跡に於ても彌生式土器や陶器を混出してゐる個所が往々存し、殊に久比里貝塚に於ては、榊原氏の記事によれば、明かに貝層中から齋瓮の破片を出土し、爲めに同氏は同貝塚の年代を石器時代の末期に比定して居られる。

私は以上の稍矛盾した事實に對して、何等の回答を與ふべき豫備知識を有たないが、たゞ考慮に加へければならぬ事は、同半島中橫須賀市及浦賀町附近は、上古上總安房に渡る一の交通路に當つてゐた事で、彼の日本武尊東征の傳説中、弟橘媛命の受難によつて人口に膾炙する走水は浦賀町の東方觀音崎近くに存する。故に起源を西方に有し異質文化の所產に成る彌生式土器が、半島内に早く移入した事は怪しむに足りない。

繰返して言ふ。私の憶測は茅山式土器を以て三浦半島内最古の繩文土器とするのである。關東地方延いては東日本全體から見て如何なる地位に立つかは自ら別個の問題であつて他日精査考察を經た上で決定せらるべき物であらうと思つてゐる。

（三月一日稿）

厚手式土器を主とし薄手式土器と茅山式土器を伴出する。

横須賀市不入斗ラッパ山　遺物包含地

厚手式土器に彌生式土器を混出。

横須賀市公鄕中學校裏　遺物散布地

厚手式土器に彌生式土器を混じ、又陶器を伴出する。

浦賀町高坂小學校內　貝塚

嘗て人骨を發見し、人類學雜誌に報告せられた所である。土器は厚手を主とし、薄手式をも混じ、且つ茅山式土器も認められる。貝類は「ハマグリ」を主とし、その他久比里貝塚と同樣である。

以上を通觀すると、吉井、茅山の二貝塚は、頗る他遺跡と趣を異にしてゐる事を知り得られるのである。まづ貝塚を構成する貝殼に於ても他の貝塚の物とは相違があり、その他の主遺物たる土器に於ても前述の如く甚しい隔りが存する。茅山式土器が他からも混出する事は事實であるが、この二貝塚は純然たる該式土器のみを以て終始して居り、且つ層位的にも變化を認める事は出來ない。この顯著な特徴は何に起因してゐるであらうか。第一に思ひ起される事は年代の相違であらう。これは他遺跡中茅山式土器を混出する個所の正式な發掘によつて、該式土器と厚手式、薄手式土器との層位的關係が明瞭にされれば頗る興味深い事ではあるが、不幸にして現在に於ては全く知る事が出來ない。故に單なる直感と想像から推定するより外はない。私が單に假想してゐる事は、茅山式土器の器形、文樣、製作技術等が、頗る單純にして古拙の感を得られる點から、或は該式土器は三浦半島中に於て最も古い形式を示す物ではあるまいかと思つてゐる。貝塚構成の貝塚が他と異る點も、偶然その居住地近くの內川入口が當時「カキ」の棲息に好適な場所であつた爲のみならず、一面に於て該式土器使用時代が「カキ」の發生旺盛な時期に一致したとも見られ得る。そして遺物が層位的差異なく、又貝層の積成狀態から推察し、合せて附近の遺跡中該式土器より一層進歩したと認め得る繩文土器（厚手式、薄手式）と共に茅山式土器の混在する事實から、該式土器使用の年代は左程長期間の物でなく、漸次變化を見るに至つた物とも考へてゐるのである。

玆で一寸問題とされる事は、彌生式土器の存在である。三浦半島から出る彌生式土器の年代は、現在明確な位置を決定し難い物

三　結　語

關東に存する所謂纖維土器の總括的研究はこれからである。故に私の乏しい經驗からは何等の歸納もなし得ないが、茅山、吉井の二貝塚を敍述した關係上、二貝塚に就いて一二の愚考を吐露して本文の結びとしやう。

三浦半島は古代遺跡の分布濃厚な地である。然し興味深いのは東部と西部とはやゝ趣を異にしてゐる事實である。即ち繩文土器系石器時代遺跡は、西海岸に尠なく、僅かに半島の南端近い諸磯字新堀に於てその存在を見るが、それから東海岸に及ぶと漸く增加を來し、殊に內川を挾む丘陵卽ち橫須賀市と浦賀町との附近に濃厚さを示してゐる。その理由に就いては未だ確定的な意見を有してゐないが、その地理的狀態が東海岸は西海岸に比して住居の經營に好適な條件を具有してゐたと思はれる點が、多大の影響を與へて居るものであらう。次に比較の便宜上半島內に於ける代表的な各遺跡に就いて簡單に記すと左の如くである。

三崎町字諸磯小字新堀　　遺物包含地

諸磯式土器のみを出土し、石器は比較的小量である。詳細は考古學雜誌十一ノ八榊原氏論文參照。

南下浦村上宮田小學校裏　　遺物包含地

土器は厚手式と薄手式とを混じ、又彌生式土器を伴出する。

浦賀町字久比里江戸塚　　貝塚

吉井、茅山の二貝塚を去る程遠からぬ箇所であるが、貝類にはカキ殆んどなく、他の海產二十余種類に及ぶ。石器には打磨石斧、石錘、敲石等、土器は頗る多く何れも厚手式繩文土器に屬し、且つ陶器數片を伴出してゐる。詳細は考古學雜誌十一ノ十、十一榊原氏論文參照。

衣笠村字森崎　　遺物包含地

土器は厚手式と諸磯式とを混出し、合せて彌生式土器並に陶器を伴出し、石器に粗製石棒及び玦狀石製品を出してゐる。

橫須賀市田戸聖徳寺裏山　　遺物包含地

厚手式、薄手式土器に小量の茅山式土器を混じ、又彌生式土器も伴出する。

橫須賀市內海軍病院跡　　貝塚

れる。然し玆に注目すべき事は、破截面から内部に草類と思はれる纖維が多數含まれてゐる事實である。それが如何なる植物であつたかは分析の結果に據らなければならぬが、肉眼では禾本科植物類らしく考へられる。纖維土器の名稱は全く該當してゐるのである。憶測を廻らすならば、その製作に際し、原土に交ふるに多數の草類を以てし（或は草を以て土器の原體を作り、更に原土を交へ）不充分な燃料で燒成した物ではあるまいか。故に前述の特殊文樣たる内面文樣は器形の成形に當りその固成の爲めに生じた物が、後に一種の文樣となるに至つた物ではあるまいかと考へられる。土器表面の凹凸や、厚さの不一致も亦之に基く物であらう。手法はやゝ相違するが、かの原史時代の陶器中、從來所謂朝鮮土器と稱せらるゝ物が、内部に波形の敲文樣を存するのと類似を示してゐる。

以上列記した事實に徴すると、兩貝塚發見の土器片には大體左の特質を具有する事となる。

(a)　器形は簡單な鉢形が多く、把手も亦頗る簡單な突起の程度である。
(b)　文樣は刷毛目文や撚糸縄文が多く、眞の縄文や渦卷文その他の曲線文等が尠ない。
(c)　内面に刷毛目文を施した物が多い。
(d)　土器の製作に際して原土に草類を混交した。
(e)　主に厚手で質は粗鬆、燒成亦不充分從つて吸水性が强い。

是等の諸點は他の縄文土器類――厚手式、薄手式、陸奥式等――と直感的に相當の懸隔を示しゐる。やゝ之に類似の諸點を認め得る物は所謂諸磯式土器である。故に私が前述の如く「茅山式土器」と假稱した理由は玆に存するのである。

次に立返つて他の伴出遺物を見よう。茅山貝塚からは彌生式土器片を出土してゐる。赤星君は二個、私は一個を得てゐる。私の分は小發掘の際、貝層の最上部覆土に接して存在してゐた。何れも無文赤褐色で、三浦半島からは往々他にも發見を見られる物である。これが所謂茅山式土器と如何なる關係を有するかについては、後節述べる所があらうと思ふ。

石器は甚だ僅少である。茅山貝塚では私が一個の半磨製石斧を得、吉井貝塚では赤星君が二個の磨石斧を得てゐる。自然遺物として貝類の外に獸骨角器も多くない。赤星君は茅山貝塚から銛と鹿角を未加工のまゝ使用した物二個とを得てゐる。私は發掘の際鹿角二個、猪の下顎骨一個その他骨片多數を得た。

骨類が相當出土してゐる。

告された事があり、私も南武藏箕輪貝塚の發掘報告中に詳述し、杉山氏の原始工藝にも轉載せられた相當著名な一片である。横一〇糎、縦七糎の小破片の一部に、七個の介殼押文が挨擬縄文様に附せられてゐる物で、その周圍は粗い刷毛目文で埋められてゐる。なほ一個小把手の外面鎬狀隆起部にも同様な押文三個を有する物があつた。何れも「ハヒ貝」の頂殼を押したらしい。次に文様と稱するにはやゝ妥當でないかもしれぬが、兩貝塚出土の土器片に見る一特徴として注意しなければならない物は、土器内面に刷毛目文様が施されてゐる事である。破片の殆んど全部に存在してゐる。試みに赤星君と私の採集品との總數中、内部刷毛目文様の有無を檢出して見ると、赤星君の物百六十個中百卅六個、私の物八十三個中、七十六個が何れも内面模様を有してゐる。中には底部の内面迄施された物も存する。又或物は單なる刷毛目文様に止まらず、圖に示す様な渦卷類似の文様を施した物すら認められる。故に内面文様が單なる製作上の結果のみでなく、表面の文様と同様何等かの意義を有するに至つた狀態を窺ひ知る事が出來る。

Fig. 2　茅山貝塚出土土器拓本

なほ最後に以上の破片全體を通じてその他の性質を肉眼上から觀察すると、色は黒色又は黒褐色が多く、往々赤褐色を呈し、原土の精撰は行はれてゐない。表裏とも凸凹があつて厚さは一定しない。吸水率は概して強く從つて脆弱である。即ち製作技術は進歩した物でなく燒成亦不充分であつたと思は

隆起部を示す物と、口縁部に二個の小突起を並出する物との二種となる。前者には突起部の左右と、三角形を呈する上面及び外面の鎬狀隆起部に撲擬縄文を附する物が多い。思ふに縄を以て土器を緊縛し、口縁部にその結び目を突出せしめた狀態を文様化したかの感がある。後者はそれに連る文様と考へ合せて、同じく紐縄の突起を示したものか、或は箆を念頭において製作されたものかとも思はれる。然し何れにせよ把手としては他の縄文土器に見る様な發達を示した物はなく、單なる附加物の域を脱しない程度である。



Fig. 1 茅山貝塚出土々器

器形。多くは鉢形で、殊に内外への曲率少ない物が主である。中に往々上部約三分一邊から下方に、への字形の緩い内曲を示す物が存するがその外面には殆んど屈曲部に撲擬縄文が繞されてゐる。底部は數個を有するが、何れも平底で何等特徴を擧げる點はない。その中一個には底面に竹箆で附したと思はれる不規則な刷毛目文様を有する物があつた。厚さは頗る不規則で、薄いのは〇、八糎から厚いのは一、五糎位、普通一糎内外である。

文様。全體を通じて眞の縄蓆文は頗る少ない。私の得た八十三個中僅かに二個を認めたのみである。最も多く見られる文様は刷毛目文様である。その大部分は單に不規則に斜行せしめたものであるが、中には編み目を示した物も存する。又不規則な格子様の物もある。次に多いのは撲擬絡縄文である。その方法は多種であつて、口縁部に繞らした物、又は明の隆起部に帶狀に押付けた物、或は竹箆や尖つた竹木の先端で平行線、斜行線、曲線、デイクザク等を描いて居る。時には同一の手法を浮縄文としてゐる破片もある。次には撲擬浮縄文様と刷毛目文様とを並用した物がある。即ち地をやゝ細かい刷毛目文様で充填し、その間に浮縄撲擬文を隆起せしめた物で、その浮縄文は何れも直線である。最後に特殊文様ともいふべき物に介殻押文がある。これは曾て赤星君が考古學雜誌に報

る等を知つた。然しながら私はなほ二三の問題を提出して、直接矢倉氏より御示教を請ふた處、直ちに懇切な解答を得るに至つた。（大正十四年五月廿九日附。）右の内容を列擧すれば次の如くである。

一、從來貝塚發見の「カキ」は何れも他の貝類に比して能く發育してゐる。右は當時の潮流の温度に關係し、又採取の程度が甚しくなかつた等によつて、その發生力が旺盛であつた。

二、「カキ」は普遍的に分布するも、海水の比重に大なる影響を受け、又潮流の如何にもよりその棲息狀態を異にする。

三、「カキ」の棲息に最も適した地は、鹽分の少ない淡水を混ずる所で、海底には細砂に泥土を混じ、潮流の烈しからず且つ食餌分多い箇所で、都會の下流などは最も適はしい。又潮流の緩慢な地は貝殼の發育盛な爲、丈延び殼薄くなり、反之榮養分少ない所は發育不良で貝殼は小さく、肉は痩せてゐる。同一ケ所に於ても差異が存する。

四、昔と今と「カキ」の發生力に相違を來してゐる場所が往々ある。潮流の一時的現象によつて貝類の死滅する場合が存するから、現時の狀態を以て昔時を推定する事は困難である。

如上の事實に立脚して二貝塚を見ると、「カキ」の量が夥しい事や、何れも極めて良好な發育を示してゐる物が多い事から、當時の內川入江は「カキ」の發生に最好適の場所であつた事が推察出來る。次にその貝層を檢すると、何れも「カキ」殼が密集されその間土を交へない狀態を呈してゐる。之は恐らく當時の住民が一定の期間に、好んで多量を採取した結果と推定する事が出來る。この點に於て二貝塚が貝層の狀態を等しくしてゐるのは、兩貝塚がほゞ同一時期に積成せられた事を物語るものではあるまいか。なほ右は層內より出土した遺物上からも同一の結果を認められるのである。

かくの如く遺跡それ自身に於て特殊な狀況にある二貝塚は、又出土の遺物に徵しても頗る注目すべき物を有してゐるのである。以下その遺物に就いて記述しよう。種類には土器、石器、骨角器、獸骨類がある。今私は自ら採取した物に、多數の赤星君蒐集の品を加へて考察する事とする。先づ土器から見ると、私の得た物は茅山貝塚で八十三片、吉井貝塚で數片、赤星氏所藏品は茅山貝塚百六十片、吉井貝塚十數片、合計約二百六十片を有する。之を一括して知り得た事實は大體次の通りである。

口緣部。殆んど平緣である。稀に把手樣の小突起を附する物がある。因みに把手を記すと、寫眞に示した樣に何れも小形簡單な物のみである。試みにその中を分類して見ると、口緣部に一個の小突起を作り、頂をほゞ三角形とし且つ中央を凹め、外面に縞樣の

たされ、往々蛤、蠣、灰貝等を混じてゐる。茅山貝塚は浦賀町より三崎に通ずる縣道中、内川新田の聚落を去る西北方約十町、數米の丘上に存し、觀音堂裏の畑地がそれで、面積は吉井貝塚に比してやゝ狹い。古く沼田賴輔氏の報告によつて石器時代遺物發見地名表に登載せられてゐる。此處にも同じく一部の斷崖に貝層の露出を見、私は赤星君と共にその小發掘を行つた。約二、七米の厚い覆土を有し、貝層の厚約一、二米一方に傾斜を示してゐる。構成の貝殼類は吉井貝塚と同じく大部分は「カキ」を以て充され小量のニシ、サザエ等を混じてゐる。

扨て最初に注意せられる物は、上記の如く二貝塚が何れも貝塚構成の貝類に於て同一狀態を呈する事である。三浦半島の各所に存する貝塚は、私の實査によれば後述の如く關東各所に存する貝塚の狀態と同一で各種類を含んでゐるにも係らず、その二貝塚のみが全くその狀態を異にしてゐる。蛇足ながら遺跡のみにその類例二三を求めると、

（1）横須賀市山崎貝塚
（2）武藏國橘樹郡旭村下末吉別所貝塚
（3）東京市芝區伊皿子三井邸內貝塚
（4）下總國印旛郡宗像村岩戸古屋貝塚
（5）武藏國北豐島郡瀧之川町中里貝塚
（6）伊勢國桑名郡蠣塚村貝塚
（7）相模國中郡旭村萬田貝塚

等があるが、(1)と(6)とはその包含遺物から見て原史時代の貝塚であり、(2)と(5)とは石器時代末期のものと見られ、(4)と(7)とが所謂纖維土器出土の遺跡で少しく關係を有するがこゝでは全く別問題である。たゞ如上の少數例に徵すると、それ等は何れも「カキ」の採集に便利な土地と時期とを有した爲にかゝる現象が現はれたものと考へる事が出來る。玆に於て問題は「カキ」それ自身の貝類學的研究に及んで來る。この點に就いて全く門外漢の私は、試みに貝類學者矢倉甫田氏の著書によると、日本產の「カキ」は石器時代頃から繁殖し出した事、就中「イタボカキ」は石器時代に於て始めて發生した局部的な貝であつて、海深三乃至十尋前後の、潮流烈しく海水清澄の礫地に棲息する事、及び現在の產地として、千葉縣木更津附近、安房船形附近が擧げられてゐる

相模國中郡旭村萬田貝塚

武藏國橘樹郡日吉村矢上谷戸貝塚

〃　都筑郡新田村吉田六間丁貝塚

〃　南埼玉郡篠津村白岡正福院内貝塚

〃　　和土村黒谷中通貝塚

下總國印旛郡宗像村岩戸古屋貝塚

なほ類例を他に求むると、肥後國轟貝塚の土器中にも頗る酷似した物が存在してゐる。

右の中相模の二遺跡はやゝ詳細に調査し、殊に茅山貝塚は小發掘も試みたから、私の有する資料の中最も確實性を有する物である。その他萬田貝塚を除いては、私の偶然な發見が主であり、且つ他形式の土器を混在してゐるので茲には記述する事を省く。下總古屋貝塚の物は、友人大野一郎氏の採集品を親しく實見し、且つ遺跡の狀態に就いても氏から大略聞き及んだので、他日實査の機を得たいと思つてゐる。

故にこゝでは專ら相模國三浦郡の二例についてのみ述べる。然るに幸にしてその詳細な記錄が、前述の國學院雜誌未掲載のまゝ手許に保存されてゐるので、舊稿であるが、現在記憶を辿つて書くよりは正鵠に近い物と信ずるからそのまゝ茲に載せる事とするたゞ讀者に對してお詫びしておく事は、この原稿は大正十四年の起草で、後昭和二年に前半國學院雜誌に掲げたといふ曰く附の物で、如何にも三番茶といふ感のある點である。

茅山貝塚と吉井貝塚

嘗て大正十四年の春、友人赤星直忠君の東道によつて、三浦半島の遺跡遺物（主として石器時代）を踏査した。その際收得した多數の資料中、私が最も興味深く感じた二つの貝塚があつた。一は久里濱村茅山貝塚で、二は浦賀町吉井貝塚である。

二貝塚は何れも浦賀町を去る程遠からぬ内川入江を挾む丘上に相對して存在してゐる。浦賀町に近い吉井貝塚は、内川入江に南出する丘陵の頂に存し、古くは八木奘三郎氏の報告を見る。面積は相當に廣いが、貝殼は北方と西方の畑地に散布してゐる。幸にして、一部に貝層露出の断面が見られた。それによれば覆土約一尺、貝層約二尺で、貝層を構成する貝は殆んど「カキ」を以て充

土器」なる名稱を與へた事は、私の備忘錄槳石雜筆卷五の三八頁に明記して居り、且つその後間もなく一文を草した原稿によつても知り得られる。然しながら當時は專ら諸磯式土器の發表に汲々たる際であつたので、又新らしく「茅山式土器」を提唱するのは愈ゝ奇に走るの觀を有したのみならず、なほ這種土器の性質に就いて充分考察の步を進めてゐない點からもその發表を後日に期さうと思つてゐた。後昭和二年二月國學院雜誌第三十三卷二號に「三浦半島に於ける石器時代遺跡」といふ表題の下に、三浦半島に於ける諸磯式土器出土の遺跡を綜合して記述した際、舊稿を利用して上記の二貝塚に就いて詳細に記述したが、不幸にして右は半途で斷稿され、所謂「茅山式土器」の提唱は印刷に附せられる事なく終つたのである。然しその後同年九月二十七日考古學會例會に於て「關東地方に於ける繩文土器の種々相」といふ講演を行つた際、茅山貝塚出土の土器數片を持參して親しく列席の各位に示し、關東に於ける繩文土器の一種にかくの如き特殊な物の存在する事を注意し、合せて私は「茅山式土器」と假稱してゐる旨を述べた右の講演の內容はその後雜誌へ掲せさせて頂く筈になつてゐたが、筆不精からつい起筆が延び〳〵になつた爲と、その後繩文土器に對する私の見解がやゝ異なつた爲めとで、これも未發表に終つたのである。然るにその翌年昭和三年三月末から仙臺方面に出張した際、所謂纖維土器の提唱者たる山內君を卅一日夜その宿舍に訪ひ、談偶ゝ該土器に及んだが、私のいふ茅山式土器が、山內君も目下研究中の物であると知り、種々意見の交換を行ひ、且つ山內君は頻りにその資料の發表を慫慂せられた。私も興涌き意動いて當て歸京後直ちに發表する事を約したが、その際山內君は未だ「纖維土器」なる固有名詞を用ゐられてゐなかつた事は、なほ新たな時の記憶に於ても、亦その時の小生のノート槳石雜筆卷八、八七頁にも記載されてゐない點から徵し得られるのである。所が又もや歸京後私の筆不精がその約束を反古として荏苒日を閱してゐる中、前記山內君の論文發表の次第となつたのである。

上述の如く私と所謂纖維土器との關係は、決して淺からぬ因緣を有するので、山內君の論文を拜讀して眞先に頭腦に響いた理由も亦決して偶然ではない。玆に於て遲ればせながら往時を追懷し本誌に一文を物さうと思ひ立つた次第である。

二、關東地方に存する茅山式土器と其の遺跡

私の乏しい資料に據ると、私の所謂「茅山式土器」の存在は、關東地方に於て左の數ヶ所を算へてゐる。

相模國三浦郡久里濱村茅山貝塚

〃　〃　浦賀町吉井城山貝塚

纖維土器出土の遺跡に就いて

大場磐雄

一、所謂纖維土器に關する從來の管見

本誌一卷二號所載山內淸男君の「關東北に於ける纖維土器」なる論文は頗る興味深く拜讀した。私も亦かねて這種土器の一群に就いては些少ながら注意を怠らなかつたので、やゝ蛇足の嫌はあるが先づ從來の管見から敍述させて頂きたい。

所謂纖維土器に對する私の注意は、今から約四年前、例の諸磯式土器の研究に熱中してゐた時に起つてゐる。最初に注意したのは、大正十四年一月の考古學雜誌第十五卷一號中「諸磯式土器の研究(三)」に於て、武藏國都筑郡新田村吉田六間丁貝塚出土の土器を記述し、その中に二個の土器片を摘出して、

この二個の土器は燒成は頗る粗雜で、表裏共縱橫に太い刷毛目が附されてゐる。これと同樣なものは南埼玉郡に於ても下總においても發見したが、果して純然たる諸磯式土器であるか否かについては疑問がある。

と記し、次で同文後節の南埼玉郡篠津村白岡正福院內貝塚の土器を記した個所にも、

最後に二個の刷毛目文がある。中一個はその燒成、文樣の型は前記のそれと少しく異なり、前述の都筑郡吉田六間丁貝塚發見の土器のあるものと軌を一にしてゐる。

とあるのがそれで、當時は諸磯式土器のみに沒頭してゐた爲、深い考慮も拂はなかつたが、間もなく同年三月三十日より三十一日の兩日に亙り、三浦半島の石器時代遺跡を調査するに及び、偶然にも浦賀町吉井城山貝塚と、久里濱村茅山貝塚の小發掘に於て、這種土器のみを包含する特殊な遺跡の存在に逢着し、頗る興味をそゝられて、歸京後直ちにノートの整理を行つた際、之に「茅山式

の四、一一八項參照。

10 本誌第二の一號、拙稿、「史前學、考古學及び史學」參照。

11 エトノロギーは、土俗學と云はず、民族學と云ひ又獨のVölkerkundeとの關係等、こゝに一切これ等の問題には觸れて居らない。稱呼も舊きに從つて置く。

器を使用して居る文化もあるが、詳細は未だ、發表してない。我石器時代に於ても、東北地方の一部には、随分立派な骨角器が、種と量に於ても相應に多いものがあるが、未だ代表的のものであるか如何は、決定し得ない。

5 骨角の性質、これに伴ふ骨角器の特徴等に就ては、史前形態學上に於て、其一部は、述べる考である。

6 本研究の主眼は、史前學と石器時代との關係で、ある故、特に必要を見るもの丶外、金屬内に於ける内容には、多く觸れて居らない。從つて、單に金屬と概稱するに止めた。一般的に、金屬出現の當初は、銅乃至青銅とせられて居るが、(8参照)所謂純銅と青銅との間に、幾何の差があるが、其一極限場合に猶疑存するものがある故、これも明示を避けた一理由であり又特に我國に於ても、問題を藏するものがある故、かく概稱したのである。

7 私自身に於て、石器時代の貝塚、純貝層中より、金屬器一個を發見したことは、府下千鳥窪貝塚に於て經驗して居る。(人類學雜誌、第四一の一一號第五一九項及第八圖版参照)この樣な場合に於て明瞭に彌生式混入の跡もなく、單なる一個の青銅器が、關東繩紋式に於て、所謂大森式とでも云ふ可き部類に入れ得べき文化階梯にある、千鳥窪貝塚を以て、直に金石時代とするのは、過早の樣に考へる。從つてこの場合は、本文に後述して居る、Aに當るものとし、依然石器時代と考へるのである。それにしても、本文化階梯が、既に末期に近く、金石時代に近づいて居るとか、或は他の金屬文化に接近したのか等何れにしても、甚しく古いものでないと云ふ、或る指針は與へらる丶のである。

この外、佐藤傳藏氏は、古く人類學雜誌、第一三の一四五號(明治三一年)「日本本州に於ける竪穴發見報告」に於て金滓と雲母鐵鑛とを發見せられ且つ金滓中には有孔のものあるを報ぜられて居る。(同書第二六四項)(第七、八圖)もしこれが其住民自からの金滓であるなれば、それは其民が、金屬に對する理解あつたと見らる丶し、一方に於ては、金屬に理解があるなれば、其金滓をわざ〳〵加工してまで、これを裝飾品とするにも及ばぬ樣にも見られ、こ丶に研究の餘地あること丶思ふが、こ丶には單なる金屬關係の一例とするに止むる。又これと伴ふ他の遺物に就ても、研究したきものがある。

8 北歐の石器時代より金石時代を經て、青銅期移行に就て、僅か其一部であるけれども、拙稿、北歐の石斧編年、人類學雜誌第四一の十號に述べて居る。

9 文化の三大時代組織は、史前學の開祖とも云ふ可き、トムセンに發する。これに就ては、拙稿、「史前學研究史」史學、第七

111 —

れ亦、史前學研究の範圍に入れ得ない條件はない。勿論ありとするも、數多いものとも思はれないが、勿論研究として、附加して置く。

　但し基本文化階梯に變化はなくても、小なる退化現象は、多く認めらるゝもので、研究として、最も戒心を要すべきものもあるが、今回は、これにて止める。

三、結論。

　以上石器時代なるものを概察した結果、更にこれと史前學との關係を綜合すると、史前學としては、石器時代研究を包含して居る。但し石器時代としても、所謂史前石器時代が中心をなし、其外周緣に於ては、色々の交渉をも生じ得ることを、かく一應述べたに過ぎない。更に考へて見ると、史前學とか、原史學等は、從來のある傳統に基いて、學術として分課せられて居るのであるが石器時代とか、青銅、鐵等夫々の文化階梯に從つて、學として、石器時代學或は石文化學等の分課樣式は、未だ提唱せられて居らない。見方によつては、理論として、これ等の分課樣式の設定も可能の樣に思はれ、場合によつては、有意義のことも存し得ると考へるが、今の所特別に學として、取り出す必要を見て居らぬ故、從來の慣例に從つて、史前學と稱し、石器時代研究は、この内に含まして居る次第である。（昭和五、二、二一、稿了）

1　本誌上に於て、史前學の基礎問題として、述べたものは次の通りである。

A　史前學研究と年代及び民族問題、（一の四）

B　史前學、考古學及び史學、（二の一）

以上の外、人類學雜誌第四四の四、（第五〇〇號記念）「所謂人類學と史前學、」

　但し以上は、史前學を立前とすれば、主として外周問題であり、これが内容には、未だ多くを觸れて居らない。

2　原石に就ては、近く岩波講座、生物學、に於て、原石文化問題と題し、卑見を開陳する。

3　所謂軟部資料の出土するので有名なのは、歐洲では、スヰスの杭上生活跡や、獨逸の泥炭遺物層等數へることが出來、我國でも青森縣是川等より、此種遺物を出土して居る。是川に就ては、私共に於ても、調査をして居り、近くこれを發表する豫定である。又これ等軟部に就ては、別に取纏めて吾れ等同人の研究もあり、近き内には、發表を見ることゝ思ふて居る。

4　マグダレニアン文化に就ては、拙著、歐洲舊石器時代（考古學講座）參照。この外、北歐中石器時代に於ても、隨分多く骨角

ざかるに從つて、文化波及遲く、そこに所謂原史時代の生活を營むものもあり、終には文化普及圈外に於ては、史前時代の存在も、考へられる。文化階梯上より見て、文化中樞の鐵時代に對し、圈外に石器時代の存立は、これを今日我々の高等文化に進んで居るに拘はらず、依然原始生活の住民が尙世界各地に存することからして、今日をより溯れば、溯るに從つて、これ等低文化民存在の可能は、明に認められよう。これ等過去に於ける、高等文化民に相平行した、石器時代ある時、これを史前石器時代と區別して、有史平行石器時代と、區別す可きか、否かの問題も、一通りは、見て置く。これに對し、私自身に於ては、これ等有史平行の石器時代ありとするもそれ等の住民、自身を立前として見れば、よしそこに、若干の口碑、傳說其他若干の記錄の存するものが、あつたにした所で、それ等自からの啓發でなく、他の高等文化民の所產であるとするなれば、彼れ等は依然たる史前文化の民と見て、支障なきものと考へる。比隣の高等文化民との交涉は、あつても、其高等文化を受け入れる程度により、文化階梯區分上、石、金石金屬等の文化を分ち、それが石器文化である以上、史前石器時代と同樣に取扱ひ得る。事實に於ても、先覺文化は小アジア、エジプト、支那等各地にあり、廣義に解すれば、多くが有史平行となり、先覺文化始原のみが、史前文化となる樣な結果にも到着する故、私は通常の場合は、この區分の必要は、無いと考へて居る。

2。**近世石器時代問題**。以上の平行文化關係を延長してくると、其末端に於て、次の問題が生れる。卽ち現在乃至は最も近き過去に於て、石器文化の民ありとすれば、それも史前學上の對象たりや如何、と云ふ問題で、引いて土俗學（Ethnologie）（11）との分野問題ともなる。これは單なる文化延長程度の問題であり、史前學としては終末點のことである。平行文化を認むることが、正しいならば、これと同樣に取扱ふても、不合理はない。たゞ史前文化と云へば、常識的に見て、如何にも古く聞へるに對し、現在近くまで、石器時代、乃至は史前時代の存在が、不自然の如く見らるゝのであるが、理論上としては、牴觸する所はない。たゞしこれ等は史前學としては、外周末端の問題であり、土俗學と分野重複した所で、不都合な點は見出されない。

3。**文化衰退**。　こゝに尙注意すべき現象がある。文化衰退である。文化は必ずしも、進展のみは、して居らない。大局に於ては、進展するとしても、局部的に、衰退もし、消滅もする。從つて一應は、この現象も考へて置かねばならない。今日果してどれだけの事實が存するかは知らないが、理論上から見て、萬一にも、一度金屬文化に到達した民であつても、文化衰退の結果、石器時代に逆轉することも、決して不可能ではない。大局にないにした所で、場合により、局部的にはあり得る。而して萬一にも、こんな文化があつても、こ

周に、既に金屬文化があつて、これとの接觸よりして、他發的に啓發せられたものか否かも、色々の關係を生じ、他發的としても、其接觸程度により差も生じ、又その接觸乃至は、これが分布に就ては、地理的環況にも、考慮を要す可きものがある等、必要に從つて、問題も生じてくるから、餘り無造作に、片付けらるゝものではない。

これを要するに、石器時代より金石時代への移行の如きは、簡單であるが如くにして、甚だ複雜なものゝ存することを忘れてはならない。

以上で一通り、石器時代なるものを、上限、內容、下限等に就て、說明をしたが、更に、これと史前學との關係に就て、眺めて見よう。

二、史前學と石器時代との關係。

史前學としての定義は、既に本誌第一の四號、一二項、拙稿に於て述べて居るから、これを繰り返さない。たゞ史前學、原史學有史考古學等の區分は、文献の有無を立前としたもので、史的文献なきものを、史前、其朦氣なる時代を、原史、文献存在以降が有史時代であつて、この區分意識中には、文化階梯上のことは、含まれて居らない。然るに石器時代なる區分は、これと青銅、鐵時代とが、夫々相對應して、所謂三大時代組織（Dreiperiodensystem）と稱せらるゝ、文化進展上の階梯として、其基礎をなす、石、青銅、鐵なる主要器具原料によつて、編年設定せられた(9)其當初の階梯であり、從つて、石器時代なる區分は、この文化階梯に發したものである。それ故、兩者夫々其根本を異にして居る以上、局部的に見て、兩者一致を見ることもあれば、一致しないことも生じ得る。然しながら、石器時代なるものは、以上の三大時代組織、當初のものであり、從つて文化も、それだけ進んで居らない關係上、石器時代の文化でありながら、其民自から文字文献を有して、他の區分に於て、それが、原史時代乃至は、有史時代であると、云ふ樣な場合は、考へられないし、今日の事實に於ても、其存在を知つて居らない。それ故、石器時代研究、は當然史前學研究の範圍に包含せらるゝ。且つ史前學は、其定義に述べた如く、史前文化の研究である以上、苟もそれが史前文化であるなれば青銅、鐵等の階梯にあつても、研究の對象範圍に入る。現歐洲に於ては、かく取扱つても居る。(10)又我國現況に於ては、史前文化卽ち石器時代及び金石時代であつて、こゝに問題はない。たゞ吟味して行くと一考を要すべきことがある。

1。**平行文化問題。**　文化中樞（kulturzentrum）に於ては、既に文化進展して、有史時代となつて居るに拘はらず、中心を遠

D　錆滓を存し、或は相當量の錆石を包含する樣な場合は、金石時代以降に考へる。

E　鞴、鎔范等を出すものは、主として金屬時代とする。

G　他に多くの石器を存しても、利器の主體が、金屬器であれば、多くの場合、金屬時代とする。（第一圖Ⅳに當る）

F　直接金屬器を出土しなくとも、金屬を以てしなければ、出來得ざる確證あるものを存する場合は、少なくとも金石時代以降とする。（本項は甲野氏の助言による）

以上は全く理論的見地に於て、しかも單に遺物學上、白紙の狀態に於ての一標準であり、動かぬものではない。もし實際の場合に於て決定を要すべきときには、獨り直接金屬關係に止まらず、他の遺物をも併せ考慮しなければならない。特に我國に於けるが如き場合では、土器の研究が、以上の決定に、密接なる關係がある。又遺跡學的立場も、同樣に考慮せらる可きもので、以上の標準を以て、他を顧みることなく、無造作に、ある文化系統內の決定が、出來るものではないことを斷つて置く。特に注意を要すべきことは、新に編年設定にある。

（註）（二）**文化階梯編年設定問題**　一文化圏內、例へば我繩紋式文化に於て、從來石器時代であると考へられて居つた一部に對し、新にこれと伴ふ金屬出土があつたからとて、其一部に對し、これを金石文化、乃至は金屬文化であると、不用意に編年決定は出來ない。これに就ては根本に於て、文化階梯に對する、編年設定の準據が、確立せられなければ、確からしさに於て、不充分な免れない。本文に於ても、述べて居る如く、金屬以外の共存遺物、特に土器に就て、從來研究せられてきた、關係に對し、これを覆すか或は考察を改めしむる樣な結果等に到辭する樣な場合、一入新研究に於て、確からしさが、充分であられば、新說樹立の力が弱い。單に一遺跡に於て、相當の金屬器を發見したからとて、其土器を含む、全般の文化階梯が、悉く金屬出土に平行したものか否か、或は單に其遺跡のみに、金屬が特出すべき理由の存するのではないか否かを、充分に明にして後、幾何の範圍までを、それと平行文化階梯と認む可きか等、文化階梯設定に對しては、充分に注意し、研究して、發表しないと、金屬發見なる强き背景のもとに、動もすると、歸納の範圍が擴大せられ易きものである故、注意があつて欲しい。

又根本に於て、事實を離れ、文化階梯（Kulturstufe）の編年設定に就ては、色々研究すべき件々な藏して居り、所謂編年學（Chronologie）なるものと、型態學（Typologie）や系統學（Genealogie）等の相互關係に於ても、一部に於ては、混同もせられ、從つて、其確からしさの如何に關せず、大なる歸納も試みられて居る今日、先づ根本から吟味して見れば、ならないものが多い。今回はこれが必要な述ぶるに止め、これ等に就ても、私の考へて居る所は、將來に於て、追々開陳の機あることゝ、考へて居る。

更に石器時代より金石時代への移行に就て、考へねばならぬものは、それが、自發的に漸次金屬利用を會得したものか、或は四

も出來てき、線に代るに、帶狀帶を以てする樣な場合が生ずる。この帶狀境界にあるものは、同一資料も人々の考へにより甲は石器時代、乙は金石時代と認める樣に、必ずしも一致を見ない樣な現象も起り得る。今この移行關係を簡單に圖示して見れば第一圖の樣になり、更にこれを、理論的に細分して見れば、次表の樣になる。

石器時代より金屬時代へ移行一覽表

V　金屬時代
↑
IV　金屬 金石 過渡時代
↑
III　金石時代
↑
II　金石 石器 過渡時代
↑
I　石器時代

然し此表の如く、嚴密に理論分類をした所で、やはり境界線の不明瞭は脫することが出來ない。且つ今日に於ける事實史前學上の研究が、幾何までに、細分を要求して居るかと云へば、概ね第一圖の區分多くの場合I IIは石器時代、IIIが金石時代）で足るものとは思ふが、或る必要を顧慮して理論分類樣式を述べて置く。

以上述べてきた、要旨に從へば、石器時代と金石時代との區別が、殆んど不可能の樣にも見らるゝかも知れない故、今少し具體的に、大局上より一考定資料として、私の考へて居る、區分基準の要項を摘出して、參考に供する。

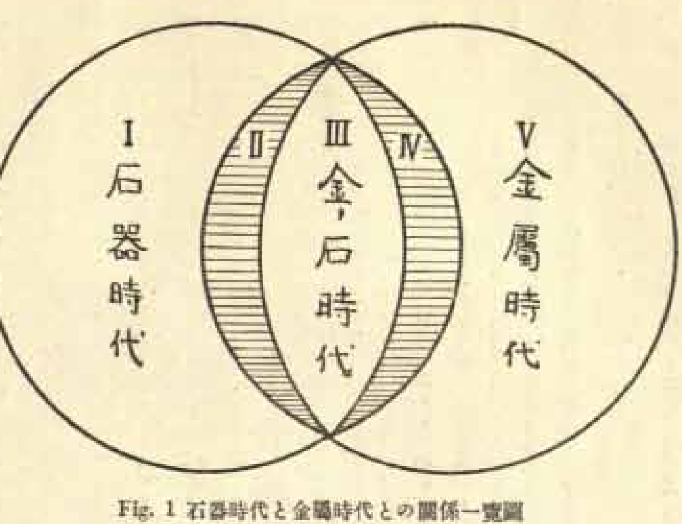


Fig. 1 石器時代と金屬時代との關係一覽圖

A　僅少なる金屬、特にそれが、主として利器でない樣な場合は、これを石器時代とする。（第一圖のIIに當る）

B　利器にあらざる金屬器でも、その量と種とによつては、これを金石時代とする。

C　僅少でも、中、大形金屬利器の混入は、少なくとも金石時代以降とする。

2。**内容問題。** 現存事實に於て、往々見るものは、石器時代の一部分に於て、其主要器物は、必ずしも、石器のみでなく、骨角、歯、牙、貝、木、土等を以てせらるゝものがあり、石器時代當時に於ては、今日多く現存して居らない、木、草、皮革、筋等所謂軟部資料とも云ふ可き種々なものが、存して居つたことは、偶々これ等一部遺存可能なる遺跡より出土して居る。(3)而して場合によつては、必ずしも主要器物は石器にあらざることすらも存する。事實に於て、歐洲舊石末のマグダレニアン文化の如きは寧ろ骨角器文化とまで云ひ得る。(4)然しながら、所謂石器時代なる基礎概念は、これと對應する、青銅、鐵等の金屬に對してであつて、石に對する骨角ではない。而して全石器時代を通觀しても、骨角器主要文化なるものが、石器主要に對し、甚だ多いとも思はれない。たゞ前述の如き事實を存し、又今後に於ても、或は類例増加も無いとも申されぬから、定義の如く、「骨角器等を主用乃至併用」(5)と其範圍を廣くし、これ等も金屬使用の無い以上、これを等しく、石器時代に包有せしめたのである。たゞ蛇足ではあるが、こゝに一言御斷りしてをくことは、石器時代の研究、其内でも人工遺物研究に於ては、其研究の主體は、石器時代だからとて、必ずしも石器ではなく、我新石時代の研究の如きは、土器にある様なことも、申すまでもない。こゝでは石器を主要器具とした時代觀察をして居るのであつて、其時代の研究法に就て述べて居るのでないから、混合せられない様に婆心まで、加へて置く。

3。**下限問題。** 次は下限に於ける交渉であつて、金屬(6)出現の幾何までを、石器時代とするか、換言すれば、石器時代より金屬時代に移る、所謂金石併用時代との關係如何の問題である。もしこゝに石器時代の民があり、偶々一個の銅乃至青銅を得たからとて、これを以て、直に金石時代とするのは、餘りに理論に走つたものである。少なくとも、彼れ等が相應に金屬を理解するに到つた時以降を金石併用時代と考へたい。(7)又萬一にも、彼れ等が金屬を解せず。單なる石として取扱つた様な場合も、理論上想定可能でもある。又北歐等に見た一事實は、金屬使用始期には、金屬が多く小形な装飾品であつて、爾後利用の進むに從つて同じ装飾品でも大形、複雜なるものを生じ、一方には小形な利器、多くが銅―青銅鏃が生れ出づる様である。而して其後に大形な利器、例へば、斧、鉾、刀等が出てくる様である。(8)勿論地方によつて、必ずしも一樣ではあるまいが、文化躍進なき限りは、漸進的移行の一例とも考へらるゝ。もし以上の様な漸進的移行を見るに於ては、よしそれが同一文化圏内に屬するものであつても、甲の進み方と、乙とでは大局に於て一致するとしても、夫々各個の個性も當然生ず可きであるから、小差は免れない。不揃となる。從つて多くは、石器時代――金石時代――金屬時代の區分が、明瞭なる一境界線を以て、畫し得ない。そこに不分明なる重複分野

後述して居る關係が、石器時代との間に存するのみであつて、これとは、直接狹義の石器時代研究とは、交渉が尠ない。

(註)(一) **人類文化始原問題** 人類文化の發生なる問題は研究上有意義でもあり、又興味深いことゝも考へる。而して多くの人々から想像せられて居る如く、最初の人類、乃至は人類とまで稱し得ないかも知れない樣な、原始的なものだちの時代があり、又それ等は未だ何等の器具も無かつたであろふ。所謂無器具時代など云はれもし、且つ無器具時代にも文化存せりや否や等議論もある。而して何等かの動機に彼れ等が一歩進んで、木、石其他何等特別の加工もせずに、これを以て手足等の助けとした、所謂自然器物時代に進み、それが段々とよりよき器具を得んとする工風が、加工即ち、所謂人工品となり、それが石を以てしたものが、所謂石器であるとせらるゝのである。

以上は單なる理論として、文化進展の原則上、これを否定すべきものが無いと、同時に、これを肯定すべき事實事物は何物もない。從つて單なる理論として、且つ想像として、取り扱ふ可きものである。これを最格狹義の史前學上から云へば、事實事物を對象として文化を研究するもの(本誌、第一ノ四、一二項參照)である以上、事實と事物とを現存せざる、無器具時代の如きは、取扱ひ得ないのである。勿論無器具時代に文化存在せるものであり、又事實實物上これを認め得るものであるなれば、研究對象たり得る。又現實は無くとも、調出し得る見込みがあつて、研究するのも、對象とすることが出來ないのではない。

所謂自然器物時代があつて、其自然器物が今日に殘存乃至は間接に殘存の證據があるなれば、當然、史前學研究の對象とすることが出來る。然しながら、以上の自然器物なるものを、如何にして過去人類の使用せるものと、認知し得るか。こゝに大なる困難が伴ふ。自然物である以上、人類の使用しなかつた、他の自然物との區別は、特別の場合の外、通常は困難、或は不可能のことゝ考へる。僅にそれが使用せられた結果、そこに明瞭なる使用痕跡が、今日まで現存して居らぬ以上、今日の學術を以てしては、如何ともすることが出來ない。即ち人類使用物と決定し得ないに於ては、これを對象とすることが、出來ない。特に木の如きは、多くが朽廢してしまうことは、申すまでもない。從つて自然器物時代としては、主として石が問題となる。勿論石器と稱するものは、石製の器具を云ふのであるから、必ずしも加工の有無に拘はらない。それが自然石であつても、其使用痕跡が明である以上、立派な石器である。所謂自然石利用と稱せらるゝものであつて、我國石器時代にも、搗き石、石槌其他にもこうした例が存する。故に問題は使用痕跡が、今日確認し得るや、否やにある。從つて萬一にも、自然石利用のみの時代を發見したとすれば、やはり石器時代の一部と認め、前掲の定義に對しても、牴觸するものが、無い。而して、自然石利用時代とか、加工石器時代とか、區分するにしても、それは同じ石器時代内の問題となる。實際に於て、今日世界の問題となつて居る、原石(Eolithen)はあるけれども、(2)自然器物時代のことゝは、別問題であつて、自然石利用時代の事實としては、未だ聞知して居らない。

史前學雜誌　第二卷第二號

史前學ご石器時代研究

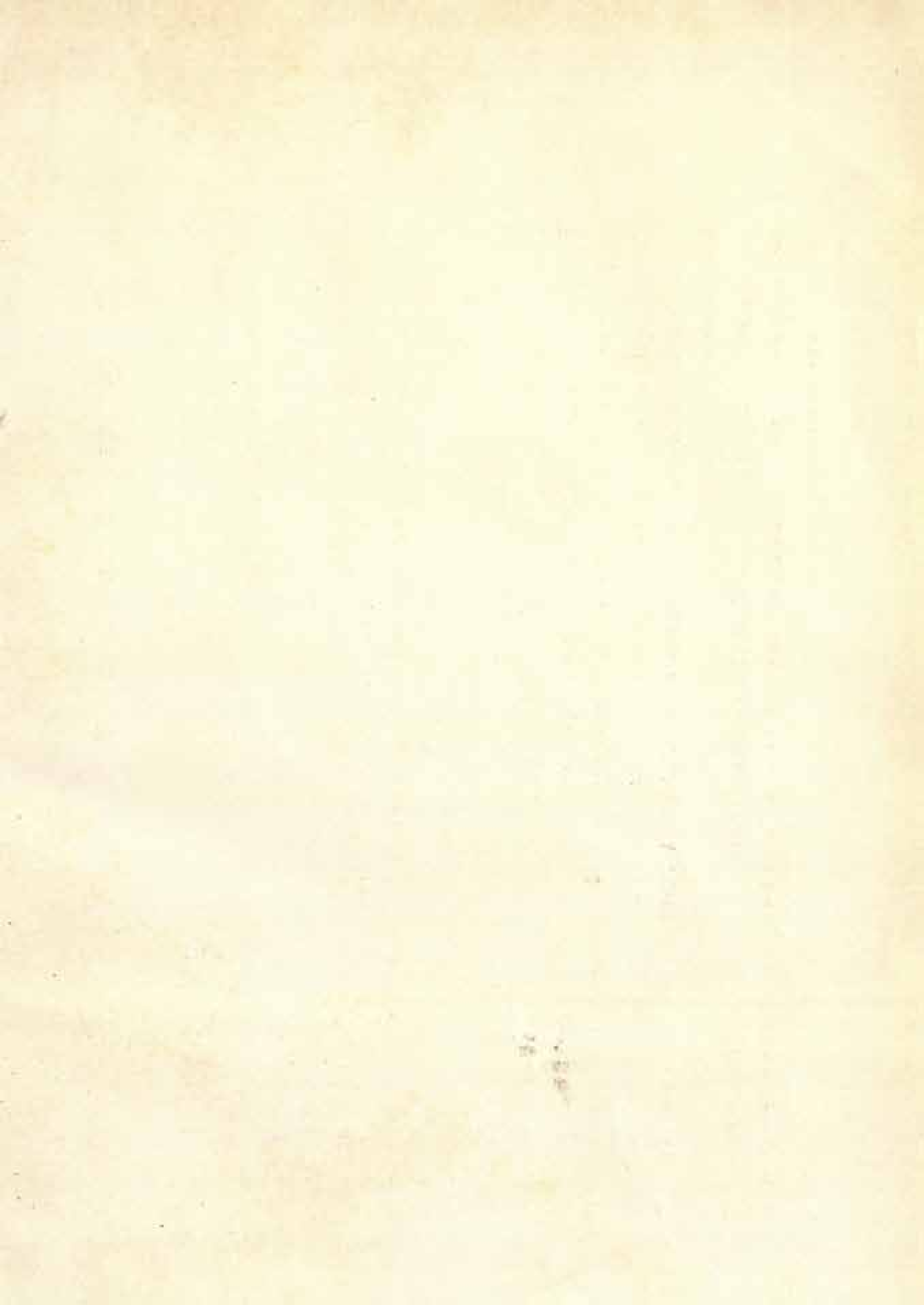
大山柏

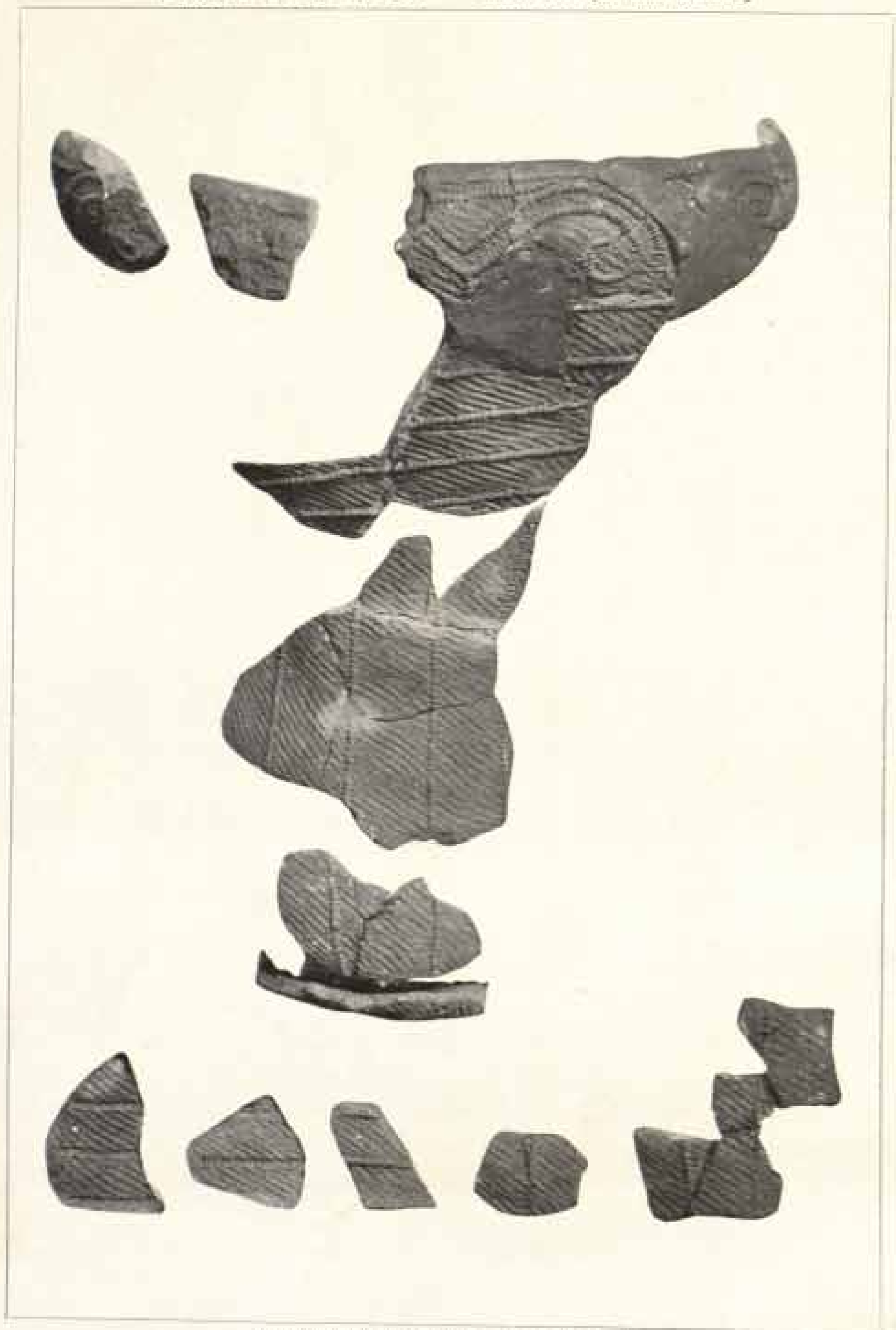
はしがき　史前學研究に於て、よく出會する問題中に、表題に掲出した如き、關係に就て質さるゝものがある。今これに就て、先づ石器時代なる概念を明にして、史前學上の關係に移り、且つ本誌上に於て既に述べた一部の史前學基礎研究(1)として更に其歩を進むることゝする。

一、石器時代の意義

石器時代と吾れ吾れは、一言簡單に方付けて居るが、見方によつては、色々の問題も起る。先決問題として、石器時代なるものに定義を與へて見れば、『石器時代とは、通常石器、場合によれば、骨角器等を主用乃至併用して、主要なる器物となし、金屬器利用の全く乃至充分に行はれざる、文化階梯を云ふ』と私は考へて居る。以上の定義に於ては、空間的に於ても、時間的に於ても、何等制限を與へてない。廣く一般的に云ふて居るので、必ずしも日本石器時代のみでなく、より廣き場合を指して居る。これを空間的に見て、ある區域を限定する場合、支那とか、歐洲、アフリカ等、其地方名を冠すれば足り、より狹く、局地を指すことも出來る。從つてこの方には疑義なきことゝ考へるが、時間的觀察に於ては、一應明にせねばならぬものがある故、これを、上限、內容下限、の各關係に就て、夫々述べる。

1。**上限問題。**　一部の人々からは、人類文化の始原期に於て、石器時代に對應し、更に其上限、即ち石器時代以前に於て、自然器物時代が存すると云はれ、こゝに石器時代との交渉を云々せらるゝ。然しこれが根本は、所謂人類文化始原問題なのであつて

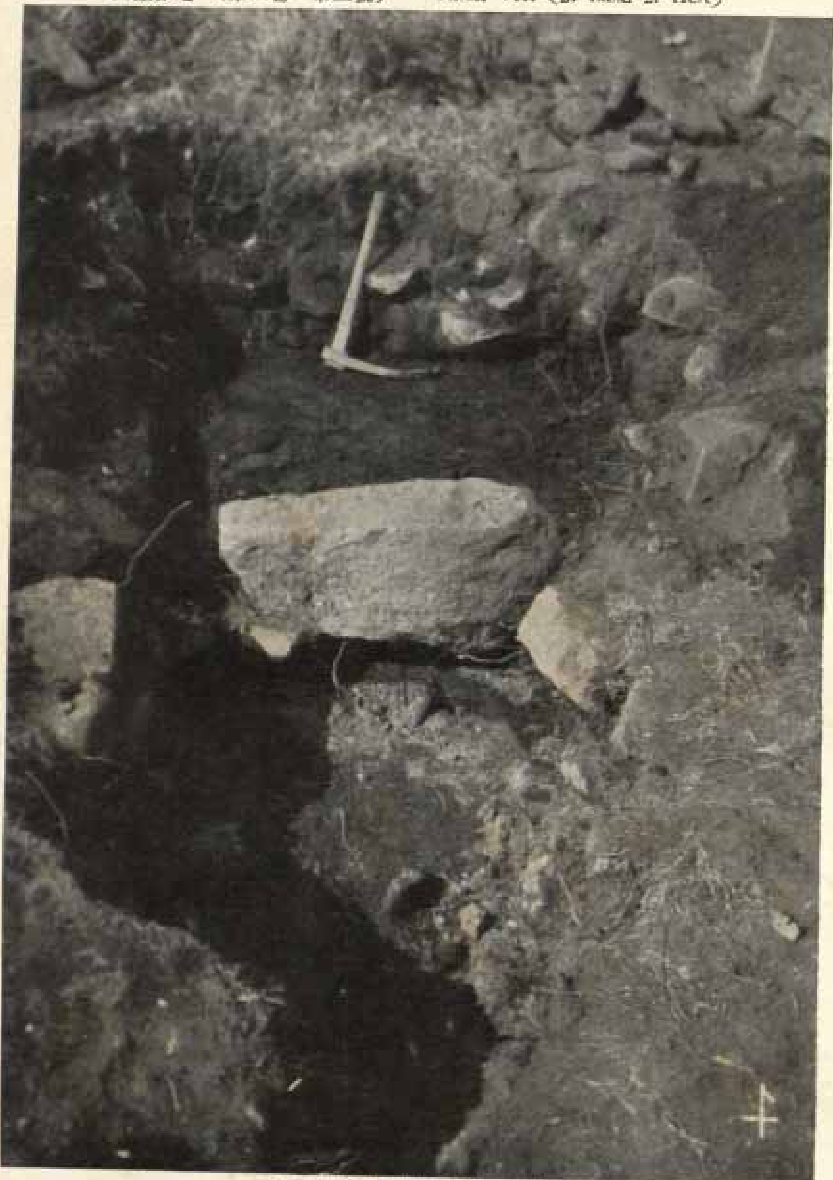




長野縣蟹掘古墳出土繩紋土器

VIII. Jomonware aus dem Protohistorischen Hügelgrab Ganihori.
(Die Jomonware gehöhrt eigentlich zur Steinzeit, dieser
Fall ist eine seltene Ausnahme.)





長野縣蟹掘古墳石室

Steinkammer des protohistorischen Hügelgrabs Ganihori, Prov. Nagano

動物資料

植物資料

史前學雜誌　第二卷　第二號　目次

資料

遺跡

遺物

比較民族學

史前學會々則

一　本會ヲ史前學會ト名付ケル

二　本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三　本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル

研究小報及パンフレツトノ發行

史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ノ發行

調査竝ニ研究旅行、臨時講演會竝ニ展覽會ヲ催ス

四　會員

本會ノ趣旨ニ贊成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル

特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五　本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌竝ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル（但海外在留者ハ別ニ遞送料ヲ要スル）

六　會員特典

本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ其研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル

本會ノ調査竝ニ研究旅行、講演會及展覽會ニ出席シ、

本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覧スルコトヲ得ル

七　本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル（將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル）

八　本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穏田九
大山史前學研究所內　**史前學會**
電話青山一二五番

幹事　大山柏　甲野勇
宮坂光次　北條憲政
杉山壽榮男

會計　岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては內容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

定價一册壹圓郵稅四錢

昭和五年三月十二日印刷
昭和五年三月十五日發行

編輯者　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穏田九番地　大山柏

發行者　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穏田九番地　岡田義一

印刷者　東京市神田區表猿樂町二　株式會社開明堂東京營業所　中村修二

發行所　東京府豐多摩郡千駄ケ谷穏田九大山史前學研究所內　史前學會　電話青山一二五番　振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區北甲賀町四番地　岡書院　電話神田二七七五番　振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第二卷　第二號

昭和五年三月十五日發行

史前學會

ZEITSCHRIFT
FÜR
PRAEHISTORIE

(SHIZENGAKU-ZASSHI)

Organ der Japanischen praehistorischen Gesellschaft

Herausgegeben

von

KASHIWA OHYAMA





2. BAND 3. HEFT

TOKIO

Mai 1930

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9. Onden, Aoyama Tokio.

Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder

   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder

   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen

   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden

   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

   9. Onden Aoyama Tokio
   Ohyama Institut für Praehistorie
   (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama
Isamu Kohno
Mitsuji Miyasaka
Kensei Hohjoh
Sueo Sugiyama

INHALT

I Abhandlungen (Japanisch)

II. Kleine Mitteilungen (Japanisch)

1. Fundorte

2. Fundgegenstände

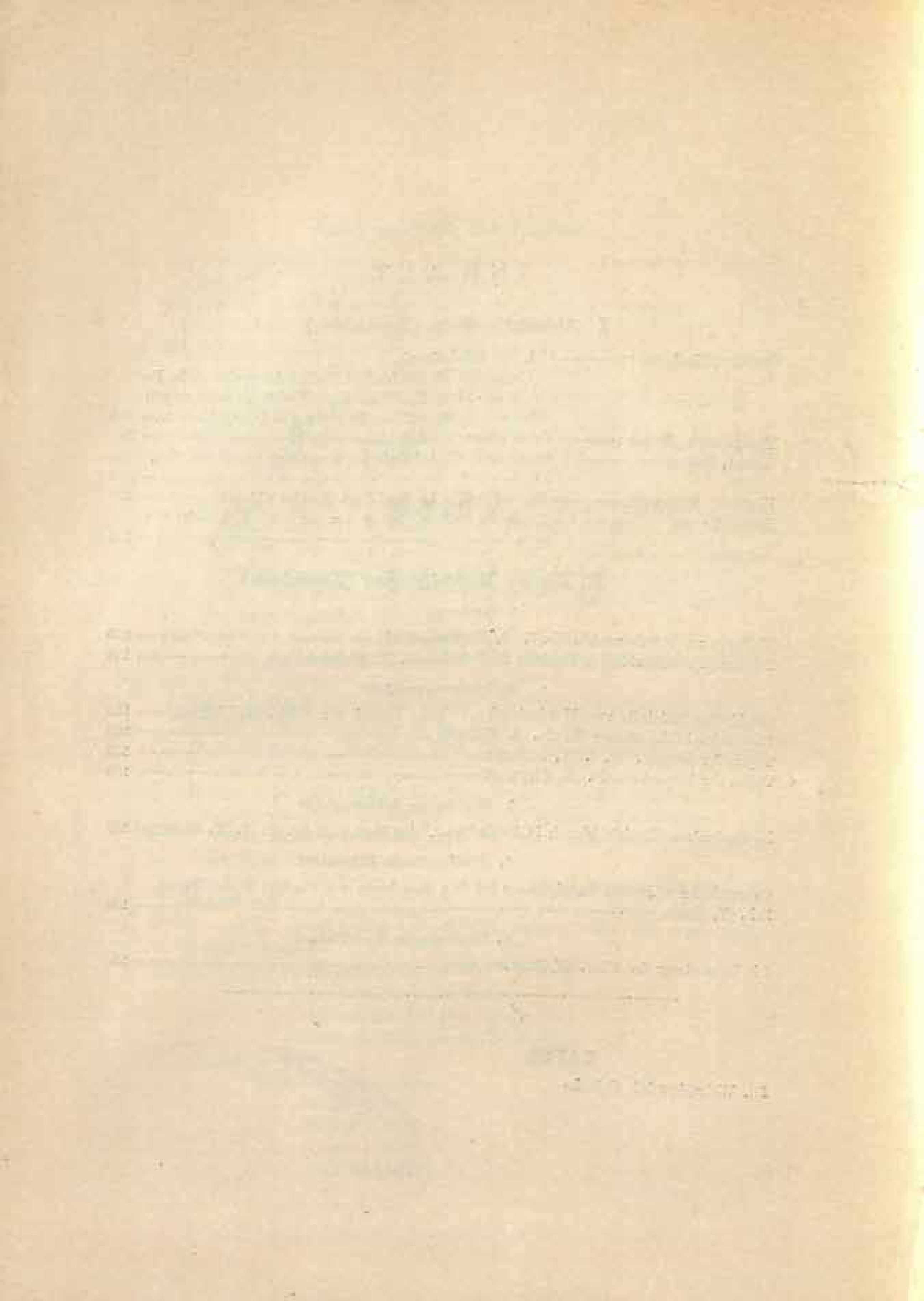
3. Physische Anthropologie

4. Vregleichende Ethnologie

5. Zoologische Verhältnisse

TAFEL





雜　報

シユミツト博士近信

ベルリンの日、シユミツト博士は、大山が師侍した、獨逸に於ける史前學の一權威であります。この報道如きも、餘りに、それが、私一個の事情に走り、果して多數會員諸君の集團たる本會として、此の如き報道が、御役に立ち得るや否や、適確に判斷し得ません。只同博士の一近狀として、御讀みな願ひます。然しながら、私自身に取つては、壓へきれない感情が、筆な執らすには居られない所も、皆様の御寬容な併せ、御願して置きます。

私が初めて、シユ博士を知つたのは、大正十二年五月十六日、ベルリン人種博物館内、シユツハルド博士室に於て、兩博士と共に御目に掛つたのでありました。爾來私に取つては、唯一人の師であり、同研究所に於て、親しく其指導を受け、一面に於て、親しみ易い、打ちとけた心持の先學として、其後引續き交際を願つて居つたのであります。それが、昨年歸朝せられました、京大梅原氏の御話によれば、シユ博士は大患に侵されたとのことで、電で問ひ合せました所、何んの音信もありません。又昨年十二月頃、さる獨逸人よりの話では、シユ博士は、他界せられたとまで、聞いたのであります。私は再び同博士に、病氣見舞な出し、ベルリンの知人なして、博士の病狀な訪れて、もらつたのであります。この知人の返信には、轉居其他で遲れ二月末に、私手元に、同博士の、恢復な報じてまいり、胸なでおろして、其健康な悦んで居りました所、三月四日、突然、同博士より、書留郵便な以て、近狀を得ました。但し署名が、餘りに變り、且つ文字が、甚しく震へて居るので恐る恐る、讀んでまいりますと、「右手が、未だ充分でない爲、左手で書いた」、とあつて、私は、暫く手紙を離れて、じつと、考へさせられました。「未だ大學の講議は、休んでゐる。然し自分にとつて、最も必要である所の、博物館に於ける仕事、卽ち發掘報告だけは、目下再び着手して居る」。と書かれて居る所に、シユ博士の面目が窺はれ、近くに居るなれば、身體にも不自由な博士に、心からの御手傳いも、したいものとは、考へますが、千山萬里の彼方、如何とも出來ないことを、私自身、殘念に耐へないので、あります。この仕事とは、曾てから承つて居つた、シユ博士の最も得意とせらるゝ彩色土器に關したものと思はれ、健康も全く恢復せられ、且つこの研究の、目出度、完成せられん日の、一日も速に來らんことを、祈るものであります。私は本日シユ博士の一年有半の重患より、兎に角、こゝまで恢復せられたに對する、歡ぶの餘り、かくは報道するものであります。（昭和五、三、四、書簡受領の日、大山柏）

バイヤー博士近信

先頃、本誌、第一の五號、千葉縣貝塚村貝塚發掘報告概報の拔刷を、ウヰーン、歷史博物館の同博士に送りました所、同博士より、詳報と共に、私共に再度の、歐洲研究旅行を勸めてまいりました。（大山柏）

コツロフスキー博士近信

同樣、ポーランドの舊クラカウの同博士に、拔刷贈呈の所、同博士より、同地方に於ける新石器遺物の一研究拔刷を送られましたが、ポーラント語で讀めないのが、殘念であります。

（大山柏）

タルグレーン博士近信

前駐日フヰンランド公使ラムステツド博士の昨冬歸朝に際し、タ博士との文獻交換を申込みました所、タ博士より心持よく交換成立の報な得、當方は大山史前學研究所の名のもとに、研究所の著述を送ると共に、本會雜誌も、同樣に發送することに致しました。只今先方よりはユーラシア、セプテントリオナーリスが送つてきました。（大山柏）

に亘つて居る。

其編年問題に關しても、從來問題となつて居る新古の黄土研究に敢然として、これに觸れて居る所は、更に熟讀して見たいと思ふて居る。兎にあれ、大著であるから、一小部の拾ひ讀みに過ぎないのに、かく遠慮なき評論を下したことは陳謝して置く。それにしても、舊石研究に一参考書を加へ得たことを悦ぶものである。（大山柏）

會報

入會

神林淳雄　東京市外蕭谷町國學院大學
有住散久　同
神田重夫　橫濱市神奈川區靑木町軽井澤一三八
津田繁二　長崎市本紙屋町五八
下村作次郎　東京市外世田ヶ谷町池尻一五五
內藤政光　東京市外世田ケ谷町若林一一
豐澤藤一郎　千葉市縣立千葉高等女學校
松永安道　富山縣立礪波中學校
松本安三郎　宮城縣栗原郡長岡村荒谷字實子一ノ一九
木田七郎　福島縣安積郡福良村中町
梅村包雄　東京市外代々幡町幡ケ谷三八九
齋藤房太郎　麴町區元園町一ノ二七
立正大學考古學會　東京府下大崎町谷山
森田勝太郎　大阪市南區道頓堀中座前
福田正作　橫濱市關東學院中學部
東北帝國大學附屬圖書館　仙臺市
福山敏男　東京市外落合六一六
小川永一　東京府世田ケ谷町經堂向原八二七
日沖正常　東京市外杉並町田端六八四
齋藤庄太郎　四谷區愛住町一六
吉野嚴成　本鄕區駒込蓬萊町五八清林寺內
吉澤正男　長野縣上伊那郡赤穗町下平

轉居

森潤三郎　東京市外馬込町原丸三八五〇
松田蟻　淺草區馬道町八ノ一
太田天洋　本鄕區森川町七九
淺野隆　兵庫縣尼崎市竹谷町二丁目四七
羽田一成　山梨縣南都留郡福地村
今井楷三　新潟縣長岡市殿町三丁目
坂口保治　東京府下野方町新井二八八岡方
村田義夫　橫濱市中區南太田町一七五五
武藤鐵城　秋田縣仙北郡角館町
船越章　大阪市西成區南海道一ノ三五船越政一郎方

E. Werth, Der fossile Mensch. (Grundzüge einer Paläeanthropologie) Berlin, 1921. 1928.

本書上巻は今より七年前のものであるが、上下二冊となり下巻が昨年出版せられてから初めて兩冊を入手した關係上、これを新巻として紹介して置く。この著書が Professor Dr. であると云ふ外、著者に就ては何んにも知つて居らない。又この上下巻發行に關した出來事も、一部は著者が下巻序文で述べては居るが、一向氣も付かなかつたのである。

表題は「化石人」であるが傍註に「古人類學の特徴」と附せられて居る。内容は別として、古人類學なる言葉が新しき感じを起させる。著者の考へでは、古生物學 (Paläontologie) と同様の意味で古人類學なる言葉を用いたらしい。而してこの著者も古生物學とか地質學とかの方面の人らしく、自然人類學方面の人の様には見られない。序論中に「史前學者」はと、鋭い語調のある所から。

上下巻全體を通じて十五章に分ち、氷河時代、洪積地質、洪積動植物より特に力を入れて洪積人類の體質を説き、原石問題舊石文化に亘る。兩巻合して四六倍版、八六七項に及ぶ大冊であり、挿圖も豐富で七百圖に達して居る。而して新しき所までよく取入れられてある所に對しては、著者の努力を感謝せざるを得ない。たゞ表題が表題であるだけ、内容が餘りに廣過ぎる

從つて問題を個々に取出して見ると、不足も不充分も出てくる。いくら九百項の大冊でも、足りないものがあるのも致し方がない。「史前學者」と呼び捨てらるゝ末席の一人として、史前學方面の二三を指摘もしたくなる。

然し本書は洪積地質の記述に於ても、氷河、共存動植物に於ても、他の一般的なものに比して、より精しいが、動物でも鳥類、魚類、等は取纏つた記載はない。洪積人類の體質に關しては、上巻の大部を費されて居る程、詳記せられて居るが、この内容に就ては、評者は觸れ得ない。

第七章に於て、化石人類の物質文化として、文化に就て述べて居る。而してこの方面は著者としては餘り得意の方らしくない。古いモルチエー、ヘルテス等のものが随分出てき、オーバーマイヤーが中々優勢であつて、R R シユミツト、ビルクナーなども參酌せられて居る様に見へる。特にハウザーのミコクエンなどを可なりに採用せられて居る所などは、反つて著者の聞を疑はれる様な氣がする。掘り棒など多くを述べて居らるゝが、著者の史前形態學上の立場は遺憾乍ら認め得ない。全般を通じて後期舊石文化に著しき不足の存することも、もし著者が地質―古生物學者側の人であるなれば、止むを得ない。それにしても前後を通じて、舊石文化は獨り歐洲に止まらず、アフリカ、インドに及び、同じ歐洲でも、中歐、イベリア、英國等各地

如く上部舊石器時代型の彫刻刀はしばしばムステリアン期の皮剝の型と結合してゐる如き多くの例より歸納して一の石器は皆上部下部舊石器時代の利器の形式の結合である事が知られる。

著者はかつてアルタ地方の高臺地の遺蹟の文化をマグダレアン期の物と同一である事を證明したが、これは現代に於てはこの說を固執する必要はなく、現今得られた多くの採集遺物中代表なヲオリナシアン期の形の物が非常に多いから、この發見物はその特質に於てヲオリナシアン期の物であると云ふ可きである。しかし一方此等の遺物中には下部舊石器時代の形態の物が可成り優勢である事實は認められるもの〻之は決してフィンマルクに限られた事なく Breuil や Obermaier によれば同一の現象は佛國に於ても存すると云はれてゐる。又一方先のかつての著者の意見の如くこの遺蹟をマグダレアン期の物とすればその形式は非常に多く古式を殘してゐる物と云はなければならない。要するにフィンマルクの高臺地發見の石器はヲオリナシアン期に屬せしむ可き樣である。

右に述べたが如き石器を發見した高臺地はスカンヂナビア氷河の最後の時代に屬する所の上部高臺地と陸地の Tapes 氾濫期に屬する低地との中間に位するものであつて、こゝへ始めて人類が移住して來たのは最後の氷河氾濫期の後に土地が次第に隆起して來た時であつて、その時の海面と現在とは約五十米もの差を示してゐる位の古い時代であつたと考へられてゐる。しかしこの說には幾多の重大な反對說もあつて、種々の理由からフィンマルクの高臺地遺蹟が陸地のスカンヂナビヤ最後の氷河の氾濫より古いかも知れないと考へられるのであつて、吾人はこの說の可能性をも認めなければならない。

元來フィンマルクの考古學的研究はすでに知られてゐる如く O. Nicolaysen 氏によつてかつて成された事があつて著者が初めてゞはないが、むしろ本書の有してゐる特殊な價値は多くのフィンマルクに於ての新發見の遺蹟を報告したと云ふ點に在つて、その遺蹟が果して歐洲舊石器時代の一時期に相當するか否かについては種々の議論の存在する所であつて、準備智識の少い自分にも直ちに之等を肯定する事をためらはしめる。むしろか〻る結論は、より多くの地理學的研究のなされた上、それ等や生物學や氣象學的な研究の助力によつて、單に北ノルウエーのみならず東方ロシア地方に於ける同種遺蹟の探索とその結果導かれる本遺蹟と歐洲舊石器時代を結ぶ一のラインの發見された後に呈出さる可き性質の物であつて、單に箇々の石器の形態加工法の類似を以て云々する事は危險であり、やゝ非科學的であると云はなければならない。（樋口清之）

E. Werth, Der fossile Mensch. (Grundzüge einer Paläanthropologie) Berlin, 1921, 1928.

本書上卷は今より七年前のものであるが、上下二冊となり下卷が昨年出版せられてから初めて兩冊を入手した關係上、これを新卷として紹介して置く。この著書が Professor Dr. であると云ふ外、著者に就ては何んにも知つて居らない。又この上下卷發行に關した出來事も、一部は著者が下卷序文で述べては居るが、一向氣も付かなかつたのである。

表題は「化石人」であるが傍註に「古人類學の特徵」と附せられて居る。內容は別として、古人類學なる言葉が新しき感じを起させる。著者の考へでは、古生物學 (Paläontologie) と同樣の意味で古人類學なる言葉を用いたらしい。而してこの著者も古生物學とか地質學とかの方面の人らしく、自然人類學方面の人の樣には見られない。序論中に「史前學者」はと、鋭い語調のある所から。

上下卷全體を通じて十五章に分ち、氷河時代、洪積地質、洪積動植物より特に力を入れて洪積人類の體質を說き、原石問題舊石文化に亘る。兩卷合して四六倍版、八六七項に及ぶ大冊であり、挿圖も豐富で七百圖に達して居る。而して新しき所までよく取入れられてある所に對しては、著者の努力を感謝せざるを得ない。たゞ表題が表題であるだけ、內容が餘りに廣過ぎる從つて問題を個々に取出して見ると、不足も不充分も出てくる。いくら九百項の大冊でも、足りないものがあるのも致し方がない。「史前學者」と呼び捨てらるゝ末席の一人として、史前學方面の二三を指摘もしたくなる。

然し本書は洪積地質の記述に於ても、氷河、共存動植物に於ても、他の一般的なものに比して、より精しいが、動物でも鳥類、魚類、等は取纏つた記載はない。洪積人類の體質に關しては、上卷の大部を費されて居る程、詳記せられて居るが、この內容に就ては、評者は觸れ得ない。

第七章に於て、化石人類の物質文化として、文化に就て述べて居る。而してこの方面は著者としては餘り得意の方らしくない。古いモルチエー、ヘルチス等のものが隨分出てき、オーバーマイヤーが中々優勢であつて、R R シュミツト、ビルクナーなども參酌せられて居る樣に見へる。特にハウザーのミコクエンなどを可なりに採用せられて居る所などは、反つて著者の眼を蔽はれる樣な氣がする。掘り棒など多くを述べて居らるゝが、著者の史前形態學上の立場は遺憾乍ら認め得たい。全般を通じて後期舊石文化に著しき不足の存することも、もし著者が地質—古生物學者側の人であるなれば、止むを得ない。それにしても前後を通じて、舊石文化は獨り歐洲に止まらず、アフリカ、インドに及び、同じ歐洲でも、中歐、イベリア、英國等各地

如く上部舊石器時代型の彫刻刀はしばしばムステリアン期の皮剝の型と結合してゐる如き多くの例より歸納して一の石器は皆上部下部舊石器時代の利器の形式の結合である事が知られる。

著者はかつてアルタ地方の高臺地の遺蹟の文化をマグダレアン期の物と同一である事を證明したが、これは現代に於てはこの説を固執する必要はなく、現今得られた多くの採集遺物中代表なヲオリナシアン期の形の物が非常に多いから、この發見物はその特質に於てヲオリナシアン期の物であると云ふ可きである。しかし一方此等の遺物中には下部舊石器時代の形態の物が可成り優勢である事實は認められるものゝ之は決してフィンマルクに限られた事なく Breuil や Obermaier によれば同一の現象は佛蘭に於ても存すると云はれてゐる。又一方先のかつての著者の意見の如くこの遺蹟をマグダレアン期の物とすればその形式は非常に多く古式を殘してゐる物と云はなければならない。要するにフィンマルクの高臺地發見の石器はヲオリナシアン期に屬せしむ可き樣である。

右に述べたが如き石器を發見した高臺地はスカンヂナビア氷河の最後の時代に屬する所の上部高臺地と陸地の Tapes 氾濫期に屬する低地との中間に位するものであつて、こゝへ始めて人類が移住して来たのは最後の氷河氾濫期の後に土地が次第に隆起して来た時であつて、その時の海面と現在とは約五十米もの差を示してゐる位の古い時代であつたと考へられてゐる。しかしこの説には幾多の重大な反對說もあつて、種々の理由からフィンマルクの高臺地遺蹟が陸地のスカンヂナビヤ最後の氷河の氾濫より古いかも知れないと考へられるのであつて、吾人はこの說の可能性をも認めなければならない。

元来フィンマルクの考古學的研究はすでに知られてゐる如く O. Nicolaysen 氏によつてかつて成された事があつて著者が初めてゞはないが、むしろ本書の有してゐる特殊な價値は多くのフィンマルクに於ての新發見の遺蹟を報告したと云ふ點に在つて、その遺蹟が果して歐洲舊石器時代の一時期に相當するか否かについては種々の議論の存在する所であつて、準備智識の少い自分にも直ちに之等を肯定する事をためらはしめる。むしろかゝる結論は、より多くの地理學的研究のなされた上、それ等や生物學や氣象學的な研究の助力によつて、單に北ノルウェーのみならず東方ロシア地方に於ける同種遺蹟の探索とその結果導かれる本遺蹟と歐洲舊石器時代を結ぶ一のラインの發見された後に呈出さる可き性質の物であつて、單に個々の石器の形態加工法の類似を以て云々する事は危險であり、やゝ非科學的であると云はなければならない。（樋口清之）

う少し遺蹟の natural condition についての記述を多く見たかつたし、又出土の狀態についても親切な記錄を望みたかつた。しかもこれが、むしろ本書に於ては他の記載よりはるかに重要視さる可き性質を當然有すべきものであるに於ては遺憾であつたと云ふ可きである。

第一回の一九二五年の調査はフインマルクの西 Langfjordbotn 附近を手始めに、Alta 市附近の調査を中心としたものであつて、こゝでは高臺地に於ては舊石器樣の低地に於ては新石器樣の各石器を發見してゐる。著者は高臺地の石器の形態をソリウトレアンやヲオリナシアンさてはムステリアン等と比較してゐる、低地の遺蹟からは爐趾や磨石器や其他北歐新石器時代の特色を有する石器が出土してケールン等も存在してゐる。しかし此等各は共にそれ自身の中に於ても遺蹟の相異によつて、やゝ新古の別が存在するものゝ如くであつてすべてが同一とは云へない樣である。第二回の一九二六年の調査は Honningsvåg 市から始まつて Porsanger 灣の沿岸地帶の調査であつて、此等のある物からは新石器と認められる物が出で、又ケールンが存在したりしてゐるが、中には多くの舊石器もしくは中石器の特色を具有した物等も出で、著者はしば〳〵 Le Moustier-implement との比較を試み、又 Aurignacian との類似を求めてゐる。第三回の一九二七年の調査は Tanafjord 灣附近の Gamvik を振り出しにフインマルク東北地方に於て行はれたものであつて地理學者である Halvor Rosendahl 氏と共に行つてゐる、この地方に於ても多數の舊石器樣石器を發見し、又特に、高低兩地によつて石器の樣式を異にし高地よりは舊石器樣石器が、低地より新石器が出で先のアルタと類似の樣相を示す物がある。而して以上の如き記述の後に著者は簡單にすべてに對する結論とも見る可き物を發表してゐる、その一部を參考までに左に意譯して見る。

「以上の記述によつて吾人が接した所の高臺にある遺蹟から出た遺跡はその形態に於て、下部舊石器時代にも又上部舊石器時代にも屬する物の存する事が知られた事と思はれる。それは吾人をして一見この住居趾が種々異つた古さ以後營まれた物であるのではなからうかと思はしめ、又特に發見遺物の表面に見られる種々の異つた風化の樣式は二乃至三の異なつた時代の間の居住を考へしめるものである。がしかし、もしこゝに吾人がこの異つた二舊石器時代の形態の石器が本文記述のあらゆる高臺地遺蹟から出るものである事を考へる時には前述の如き想像は許され得ない事を知るであらう。故に今までに發見された高臺地の遺蹟は皆地理學的に云つても、又考古學的に云つても同時代に屬するものであつて、之は特に石器加工の技術によつても裏書きせらるるものである。而して例へば前に吾人が見たる

遺跡から出土する諸動物も、歯其他により、大約老若が考へられ、如何なるものが多いか、私共では、調査をなしつゝある。今参考の爲 K. W. Neumann, Brehms Tierleben, 1924. より、現生一般諸動物の年齢を掲出する。（大山柏）

一、象　一五〇―二〇〇
二、馬及驢　四〇―五〇
三、斑馬　二二
四、牛　二〇―二五
五、一瘤駱駝　四〇―五〇
六、羊、山羊　一〇―一五
七、緜羊　二〇―二五
八、赤鹿　三〇
九、ロー鹿　一五―二〇
十、ダム鹿　三〇
十一、馴鹿　一六
十二、犬　一〇―一六
十三、猫　一二―一五
十四、狐　一〇
十五、猪　九―一〇
十六、獅子　二〇―二五
十七、虎　二〇
十八、熊　四〇―五〇
十九、海狸　二〇―二五
二〇、ハリネズミ　一五―二〇
二一、野兎　八―七
二二、家兎　五―七
二三、野鼠　三
二四、オラングータン（歐洲に渡來せるもの）五〇―六〇

文獻

A. Nummedal. STONE AGE FIND IN FINNMARK. Oslo, 1929.

本書は Instituttet for Sammenlignende Kulturforskning (Institute for Comparative Research in Human Culture) の Serie B 第十三冊目の出版物であつて、本文百頁、附圖五十二葉に挿入圖二十二個と、ノルウエー史前學研究の泰斗 A. W. Brøgger 氏の序文を添へた、印刷の鮮明な感じの悪くない冊子である。著者について自分の有する智識は皆無であるが、かつて Steinaldersfundene i Alta (Norsk geologisk tidsskrift. B. IX, 1926.) 等を發表した事のあるおそらくは新進の學徒ではないかと思はれる。本書はその内容として著者ヌムメダール氏が先のブレーガー教授の着手に代つて一九二五、六、七年の三回の夏に行つた、ノルウエー國の最北端，北緯七〇度内至七一度前後の間の所謂フインマルク地方の考古學的研究を忠實に記錄するを以て目的としてゐる。著者はこの研究旅行に於て先の人類文化研究協會の物質的援助のもとに多數の石器時代遺蹟を發見して、それ等を本書に於ては調査の年次と、遺蹟によつて各々別に順次記述し、遺物の如きは正確な數字を擧げたりしてゐる。記述法については自分等の評す可き資格は無いが、たゞも

1. Stirnbreite　125 mm
2. Die Breite der Oberaugenwülste　110
3. Die Stirnbreite unmittelbar hinter den Supraorbitalbögen　106
4. Mediansagittallinie　122

詳細は報ぜらるゝものあると信ずるが、今回は以上を紹介して置く。(Mannus 22. Bd. H.1.u.2. 1930.S. 163—170)（大山柏）

比較民族學

臺灣古代に於ける黒柿の用途　考古學者は、石器時代の前に、木器時代とも稱す可き時代を想定して居る。事實、木は石よりも加工が容易であるから、斯く考へる事は、當を得たものであらう。

木質の種類に仍りては、硬軟な岩石以上のものがあり、又、岩石の或るものの如く、かける樣な事がないから、或る種の用途に向つては、或る種の木の方が、はるかに適した場合があり得る。臺灣の古代に於て、鐵の少なかつた時代には、石器と共に硬い木を使用した事は、當然考へ得らるゝ事である。であるから、一地方に於ける古代史を研究する場合に、石器と併用し得る程の、硬質の樹が産するか否かの研究は是非とも、試みて置かなければならない問題と思ふ。

筆者は、此の一例として、俗に黒柿と呼ばれる樹に就て、一片の報告を試みやうと思ふ。

此の黒柿は、柿樹科（Ebenaceae）の喬木で、學名をケガキ（Diospyros discolor Willd.）と稱する。而して、木質は極めて硬く、乾燥すれば黒色を呈する。そして、よく、此の木の枝の部分を利用して、鍬樣のものを作り、鍬に代用する事が出來るのである。

事實、紅頭嶼のヤミ族は、此の木を以て、鍬を作り、水田や畠を開墾したと云ふ話を傳へて居る。

此の樹は、臺灣にては、瘴熱の地にしか産しない。卽、紅頭嶼の他、火燒島、恆春半島、臺東山脈等に見られるのみである。

此の木は、ヤミ族は、Kamayo と云ひ、又、パイワン族は、Kamaya と稱して居る。

以上を以て見ると、黒柿の産するパイワン、アミ、ヤミ族の古代史、又は、其の地方の史前學を研究する場合には、此の樹に對して、一顧を拂ふ値は、充分にあると考へられる。（鹿野忠雄）

動物の研究

哺乳類の壽命　共種類によつて、壽命と云うものには、甚しき相違があり、概して大形な獸類の生命は長い樣である。而して

櫛目とも云ふ可く、これも櫛目土器群中に往々に見るものである。十一—十二は、長形櫛目のより便化した、平行集線紋であり特に十二には、所謂羽狀の復合集線を見、これは、第十圖（本誌第一の五號）にも類形があり、長形櫛目と同樣に、本土器群の一特色をなすものである。十六は眞の繩紋とも覺しきものであるが寫眞が不鮮明で、よく定め兼るのを、大なる遺憾とする而して、この眞の繩紋が、この土器群中に幾何まで、含まるゝかゞ、今後に於ける重要なる研究と考へる。十七は、櫛目土器の一特徵である、小刺孔があり、他に比して、より代表的である。出土は、一—十六はシベリア Ladeika Bez. Krasnojarsk (Gouv. Jeniseisk) 十七は同、Karaulnija Bez. krasnojarsk である。（大山柏）

自然人類學

新に獨逸に於て發見せられた洪積原人骨（Homo visurgensis）

近著、マンヌス誌に、全く豫報的に、最も簡單に載せられたものであるから、內容は殆んど不明であるたゞ圖の樣な寫眞が揭出せられて居るがまゝに、これに引かされて、紹介する。報告者は、ヲルデンブルグの H. V. Buttel Reepen 教授であつて、一九二九年の春、地下約十四米の深さの所から出土したと報ぜられ、且つこの前頭骨を發見した附近より各種の比高に於て、洪積動物骨の出土を見るとのみであつて、出土地點は述べられて居らない。又この前頭骨のみであるが、他の部分の有無、或は人工遺物に就ても、報告はないが、恐らくこの前頭骨のみ





Homo visurgensis

出土して居る樣である。而して同教授は本頭骨に於て、ネアンデルタール人（Homo primigenius）に對し、大局に於て似て居つても、相應の偏歪を認めらるゝ。根本に於てネアンデルタール人なるもの丶中で、どれだけの偏歪を許すか、否かによつて、この前頭骨の持主たるもの丶分類位置が決定せらるゝものである。とのみ述べられて居る。而して、これ等に就て述べられた、計測は次の數量のみが發表せられて居る。



Fig. 1. Lapados Mouros, cabane des Maures, Ancora, Portugal.



Fig. 2. Lodève, Hérault.



Fig. 3. Lodève, Hérault

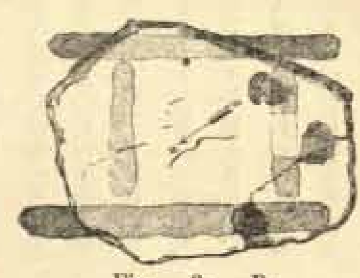
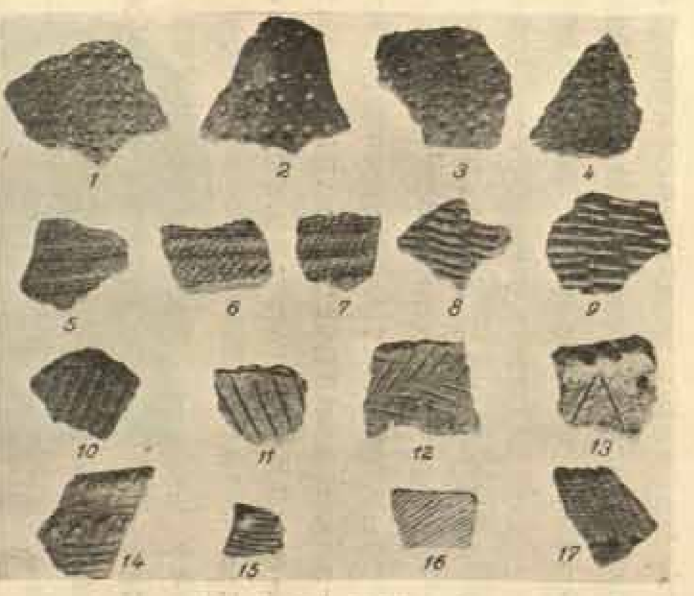


Fig. 3. B.

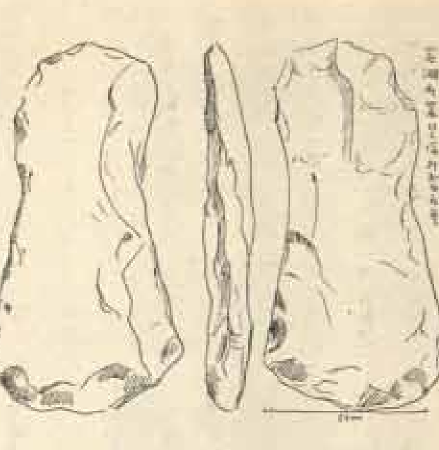
ではない。然し櫛目土器を中心としては居る。從つて、こゝに揭出した十七個の寫眞では、如何にも物足らぬ感じがする。前々のアイリツヲ氏と對比を要する。然し櫛目土器としては其特徴



櫛目土器集成（第十二）

のある物が見られるのである。一より四までは特に所謂突紋（Grübchen Ornament）であり、五—七が所謂一部の櫛目であり、又日本側から見れば、所謂疑縄紋風でもある。八—九は、長形

た様なものが附着してゐます。（中根君郎）



石器時代の土鈴　圖示する土鈴は、青森縣八戸市に居られる本會々員泉山岩次郎氏の所藏に係り、同縣是川村中居にある同氏の別宅內の石器時代遺跡より出土した物で、全體楕圓形を爲し色は灰黑色、表面は粗雜、上部には鍾樣物が附加せられて居る中空であつて中には小石でも入れてあるらしく、ふればからからと朗かな音がする。類品は埼玉縣高麗村臺の石器時代住居趾から發見されて居るが、これは前者に比して更に興味を帶びて居る。兩者共にその音調は、所謂郷土玩具の一つである「土の鈴」のそれと可成り類似して居る。

此の遺物の出土地—是川村中居遺跡—は、泉山氏の多大なる努力のもとに、長年月に渉つて順次發掘され、既に數千點の遺物を出し、學界の耳目を傾倒させた所である。史前學研究所に於ても、昨春、泉山氏の厚意に依つて、其の重要なる地域の一部を發掘調査する事が出來た。この結果は本誌第三號に掲載される餘定である。（甲野勇）



是川村中居發見土鈴（實大）

ドルメン集成其四。　第一圖はポルトガル Ancora にあるもの、第二、第三圖は、佛國 Lodève, Hérault 附近にあるもので、第二圖のものには、正面の側石下部に有孔部の存することが、目立つ外、特に述ぶるものもない。而して第三圖Bで見らるゝ如く、比較的平面的な石材を以て、營まれて居る所は、一形式をなすものである。（三圖共、E. Cartailhac, La France Préhistoric 1889. より）（大山柏）

櫛目土器集成其四。　本圖は O. F. Gandert, Beitrag zur Kenntnis der jüngeren Steinzeit in Sibirien. (Studien zur vorgeschichtlichen Archaeologie.1925.)の論文中に掲出せられたものであり、且つこの土器片は、ベルリン人種博物館所藏である。本來この研究が、表題の如く、シベリア新石器時代に關する知識とでも云ふたものであるから、必ずしも、櫛目土器のみの研究

については大場氏が詳しく報告されて居る。（考古學雜誌十六卷）（11）の「所作」は常陸國稻敷郡阿波村所作貝塚と思はれる杉山氏藏品中には彌生式數片、蓮田式三片、諸礒式三片、他に所謂薄手式かも知れない一片がある。淸野博士は往年この貝塚を發掘せられ、上層に彌生式及び諸礒式を、下層に繩紋土器を發見された。（社會史研究第九卷第三號）ここの繩紋土器が、杉山氏の蓮田式片の如く、纖維を含む繩紋土器であれば、諸礒式と蓮田式の層位的重疊を示す重要な一例と云ふべきであらう。今日では、甲野氏が前記ベンシン臺貝塚の貝層（諸礒式）以下に蓮田式及び茅山式數片を得られたのが唯一の例とされて居る（12）の「木原村宮地」とあるのは常陸國稻敷郡木原村のことだらうと思うが、地名表にも、淸野博士「日本原人の研究」にも記載がない。（山内淸男）

橫濱先史時代遺物發見地名表　斷片的な資料を聚成して、本地名表を作成する事にした。記述の制約と混亂を防ぐ爲說明的敍述を省略するが、軈て來るべき日に於いて、本表を基礎として語るべき機もあらうと信ずる。（松下胤信）

神奈川區篠原町一八四一番地附近　繩文土器　黑曜石
神奈川區菊名町妙蓮寺裏の丘岡　繩文土器　彌生式土器　土錘
神奈川區菊名町省線菊名驛南方臺地　繩文土器
神奈川區神奈川町捜眞女學校西北方畠　繩文土器　土錘
中區弘明寺町字山下三〇七番地附近　彌生式土器
同　井土ケ谷町春屋敷　彌生式土器　齋部土器
同　本牧町三八二九番地近邊畠　繩文土器
同　蒔田町伊勢山竝びに同町城山　彌生式土器
同　堀内町堂ケ谷　彌生式土器
保土ケ谷區岩間上町一七五四番地北西方畠　繩文土器
保土ケ谷區保土ケ谷町橫濱市兒童遊園地　繩文土器　打製石斧　石皿　黑曜石
磯子區岡村町金剛院附近臺地　彌生式土器
磯子區岡村町岡村天神附近臺地　繩文土器

遺　物

東京府下岩淵町袋貝塚の一打製石斧。　史前學雜誌第二卷第一號の資料欄中、關口竹治氏の報告せられてゐる。東京府下岩淵町袋窪田の貝塚に石器類の伴出しない事を注意して居られますが、僅か一個の打製石斧と云ふ乏しい材料ですが、昭和四年五月六日、之が道路面の貝層に包含されてゐるのを採集してゐますから、お知らせしておきます。當打製石斧は圖示しておいた樣に最も普通見る形式のもの。全長十一糎半。此の打石斧は當貝塚のアイノ式のものとして差し支へないでしよう。石斧表面には、屢々貝塚出土の石器類の表面に見る樣な何か酸化して白くなつ

共行はれなかつたが（三戸式）、後纖維の混入が行はれ、次で繩紋の押捺が始まつたと云ふ順序になる譯である。しかしこれは單なる想像で、各型式の內容がより闡明され、年代關係が確定的となるまでは、當否は不明である。更に前記の順序で他の特徴を列べて見ると、アカガヒ屬の貝殼の先端による條痕は三戸式及び子母口式に少數であるが茅山式では甚だ多數、蓮田式には皆無である。底の圓錐形に尖つたものは三戸式にあり、圓く卵形の樣なのが子母口式、茅山式にある。そして兩方共蓮田式には全く無いらしい。私は最古の繩紋式土器が繩紋を缺き、又この時期に於いて圓錐形又は卵形の底部があることも見て、朝鮮のある種の土器（朝鮮古美術寫眞集第一圖及びその說明、木村宇太郎氏「石器時代の遺跡新發見」考古學雜誌十五卷八二八頁、原始文様集の雄基貝塚土器片等參照）及びシベリアの土器を（Jochelson: Archaeological Investigations in Kamchatka p. 30）想起せざるを得ない。古式繩紋土器が、大陸の土器と系統的に連るであらうことは私の永らく抱懷した考案であつたが、纖維以前そして繩紋以前の型式が將にそれらしく考へられて來たのである。假りに、圓後纖維又はその手工品（繩紋）が土器製作に盛んに用ゐられ、又は子母口式によつて暗示される如く纖維の混入が先づ始まり、次に繩紋がこれと並び行はれ、後者のみが傳統として長く殘つたとすれば、繩紋土器の由來は今までの樣には難解ではなくなるであらう。子母口式の如く、繩紋以前らしく、そして纖維混入が行はれる土器は、他の遺跡では未だ發見されて居ない。今後の搜査を必要とする。前記の三浦郡の聖德寺裏山の例も、これに近似したものかと思はれるが、確言出來ない。

蓮田式　內面に條痕のない、纖維を含む土器は次の遺跡から出て居る。

1、武藏國東京市本鄕區丸山新坂　一片
2、荏原郡調布村下沼部　一片
3、北豐島郡板橋町池袋東貝塚　一片
4、南埼玉郡黑濱村黑濱炭釜貝塚
5、同　郡篠津村白岡貝塚
6、橘樹郡日吉村矢上貝塚
7、同　郡同　村箕輪貝塚
8、都筑郡新田村高田貝塚
9、橫濱市程戸ヶ谷町下星川　一片
10、下總國東葛飾郡小金町幸田貝塚
11、　所作
12、木原村宮地

このうち下沼部（2）及び幸田貝塚（10）にこの式が出ることは前回にも記述した。箕輪貝塚（7）の材料は多量であつて、これ

昨年八月杉山壽榮男氏の好意によつて同氏藏關東地方諸遺跡の土器の過半を拜見し、遺跡別に出土土器型式を記錄して見たそのうちから纖維土器に關係した部分を摘錄する。

條痕のある纖維土器は次の三箇所から出て居る。

1、武藏國都筑郡新田村吉田六間丁貝塚
2、同　國橘樹郡橘村子母口貝塚
3、同　國南埼玉郡篠津村白岡貝塚

茅山式　以上のうち1、3、は大場氏によつて內外面に太い刷毛目あるものとして旣に指摘されて居る。同氏は條痕のない纖維土器の型式（蓮田式）を諸磯式の仲間に入れられたが、條痕のある式はこれとは別のものと認めて居られたらしい。又前述の如く赤星氏は茅山貝塚のこの式を、大野一郞氏は古谷貝塚のものを注意されて居つたのである。大塲氏はこの式を所謂厚手式の終末に位するものと見て居られた（同氏談、尙この意見を考古學會で發表された由である）。大野氏は古谷貝塚の土器を普通の繩紋式よりも一時代遡るものと考へて居られる（考古學雜誌十七卷七四九頁）。私達も陸前槻木貝塚で類似の土器を發掘して居つたが、關東に同樣の例があることは、大野氏から贈られた標品を史前學硏究所で拜見して、漸く知つた次第である。

子母口式　子母口貝塚（2）の土器は昨年大山硏究所によつて多量に採集された。私はこの材料を昨夏、再び本年正月拜見し纖維混入による土器製作、及び繩紋應用の上限に關する興味ある示唆を得た。この材料は子母口式とでも命名すべき一型式の標準になるものである。土器は甚だ厚い、そして著しくではないが、纖維の混入がある、茅山式の樣な顯の內折は認められない底は一例に於いて丸く移行する（卵形？）。體內外面には少數に於いて、條痕がある。特に文樣と云ふべきものは乏しいらしく、一例には細隆線による文樣がある。これは甲野氏の報告された生見尾村パンシン臺貝塚（移川氏等の所謂子安貝塚）の二例（人類學雜誌三十九卷一九四頁拓本、10、11）とよく似て居る。又槻木1にも類似の文樣（前報圖版中の9はその一例）がある。繩紋は全く無いらしい。

私はこの型式が恐らく茅山式以前、三戶式以後に位するだらうと思ふ。しかし何等層位的根據がある譯ではない。今假りに三戶式、子母口式、茅山式、蓮田式の順序があるとして、纖維の混入繩紋の有無を考へて見やう。三戶式及び子母口式には繩紋がないらしい。正に繩紋以前のものと思はれる。茅山式には僅に存し、蓮田式では甚だ盛行して居る。一方、繩紋以前のうち、三戶式には纖維の混入が全く見られないが、子母口式にはある。茅山式、蓮田式に於ては一層著明である。卽ち纖維は子母口式まで、繩紋は茅山式まで遡り得る。換言すれば初め兩者

例は信州及び九州に於て數ヶ所報告されて居る。信濃上伊那郡三ヶ所（先史及原史時代の上伊那、一五二頁及び四十三圖）同南佐久郡一ヶ所（南佐久郡の考古學的調査一〇頁第七圖５）薩摩出水貝塚（京大考古學研究報告第六冊圖版第十五、下段最下列左隅より三番目及びその直上の二片）豐後直入郡（長山源雄氏考古學雜誌十七卷一號四四頁第五圖２及び４）その他（原始工藝圖版解說二一一頁八十二圖最下列右端及左端、他一個）等の例がある。東北では未だ經驗しない。⑵の鋸齒狀の文樣も南佐久（前出、同圖４）にも、又九州にも（原始工藝前出同圖最下列右から二番目）ある。⑶の方眼狀の押捺文は一種平方位な印を規則正しく捺したか、又は方眼狀に溝ある平板で一度に押捺したかの孰れかであつて、類例は九州方面（長山源雄氏前出同圖５及び原始工藝前出同圖、最下列右から三番目）に知られて居る。以上⑴と⑵の文樣は信濃南佐久の一遺跡で發見されて居るから、そこに三戸式に比較し得る土器型式が出るかも知れない。九州の例は土地が餘り離れて居るが、これらが古式土器であるか否か解決したいものである。

三戸式らしい沈文ある土器片が三浦郡衣笠村森崎(６)から出て居る。又宮貫に依れば上野國海老瀨貝塚發見土器片の一部(上毛及び上毛人昨年十一月號圖版)、拓本に依れば、信濃南佐久郡の二遺跡（八幡氏前出同圖１及び２）の例も、三戸式の文樣ではあるまいかとも思はれる。この式は底の尖ること、纖紋の無いことで陸前の槻木１及び渡島の住吉式と同樣であるが、裝飾は三型式とも異つて居る。

特殊な一型式　橫須賀の聖德寺裏山(１)の土器片中には所謂厚手式、薄手式もあるが、纖維を僅に含む土器が多數を占めて居る。この仲間には繩紋が無いらしい。そして文樣は沈文が主であるが、三戸式のものとも、又以後の各型式に見る例とも異つて居る。恐らく未制定の一型式をなすものであらう。アカガヒ屬の貝殼の外面の壓痕、先端の剌痕等のある例もある。又圓錐形に尖つた底の破片も二三出土して居る。

所謂諸磯式　以上の他、古式繩紋式土器の一類として諸磯式を擧げて置かう。三浦郡三崎町諸磯貝塚は古來、八木、佐藤、榊原等の諸氏によつて報告され、又諸磯式の名稱の發祥地として有名である。赤星氏がこの貝塚から採集された土器片は、ほとんど全部諸磯式であつて、僅かに二三片の所謂薄手式（堀之內式の新しい方）の破片の混在を見るのみである。諸磯の名を冠してこの式を呼ぶのは適當である。この式は纖維を含み、條痕のない型式（蓮田式）にまで擴意されたのは大場磐雄氏であるが、諸磯の材料には纖維を含む例は全く無い。この式は前記遺跡（６，４，９）にも出る。

二、關東地方の諸遺跡

紋は前者に乏しく、後者では盛行して居る。關東地方の他遺跡から出た茅山式の土器片にも縄紋が稀らしい。陸前に茅山式の様に縄紋の稀な型式、關東に槻木2の如く縄紋の多い型式があるか否かは未だ解つて居ない。〔陸前槻木貝塚第二回發掘の際(昨年四月)貝層下半に縄紋のないものが比較的多かつたから、良好な材料では、縄紋の多いそして稀な二つの細別が可能でないとも限らない。そして茅山式と共通な文様が總て縄紋のないものに限られて居ることも、同じ懸念を起させる。〕

茅山式は他四箇所の遺跡（2、3、6、7）の材料中にもあるが、茅山の如く單型式ではなく、夫々種々の別型式の土器も發見されて居る。吉井貝塚(3)の材料では茅山式が比較的多かつたが、他では少數しか採集されて居ない。尚、赤星氏は西浦村佐島附近の海岸で、この式の土器片一個を拾はれたが、附近には遺跡は無いとの事である。茅山の土器の詳細に關しては後日同氏が報告される筈である。

蓮田式　内面に條痕のない、纖維を含む土器は（2、3、4、6、8、9）の貝塚から出て居る。この中には純粹にこの型式許りを出す遺跡はないらしい。高坂貝塚(2)の材料にはこの式の土器も多量に採集されてある。縄紋には種々の變化がある。注意すべきことは、口頸部に整正な撚絲の壓痕による文様が屢々あることである。前報に關東の條痕のない纖維土器の口頸部文様帶には撚絲紋を見ない様に書いたが、この項は取り消されねばならぬ。この遺跡には他に數型式の縄紋式土器が發見されて居る。他の遺跡の材料は少量である。この式の土器は一般に、茅山式よりも薄手で、頸部が急に内折するものは無い。底の平らな例はあるが、卵形の場合は無いらしい。縄紋は盛んに加へられる。この式の土器は一型式ではなく、陸奥や陸前の如く若干の細別があるものと思はれる。しかし私はこの方面の調査に必要な材料を持ち合せない。大山研究所の諸氏はこの種のものを蓮田式と命名されて居る。

三戸式　三戸(7)の遺跡に就いては赤星氏の報告がある。茅山式が少量、同氏の三戸式と呼ばれた一型式が多量採集されて居る。他に蓮田式らしい纖維を含み縄紋ある例も二三あつた様に思う。三戸式土器は厚手に傾き、頸部の急な内折は認められない。纖維の混入もない。底は平底のものもあるが、圓錐形のものは特に注意を引く。渡島の住吉式にある様な乳嘴狀な尖端を持つものもある。器外面には少數ながら、條痕のある例がある。内面には稀らしい。文様は種々の手法があつて、沈線の文様が最も多く、口頸部のみでなく、體部にも見られる。全く無紋の破片も多い。文様のうち珍らしいのは(1)網を押した様な文様(2)鋸歯狀の文様(3)方眼狀の紋様である。(1)は網を押したらしいものであるが、條には纖維製らしい證據がない。類

資料

遺跡

纖維土器に就て　追加第三

一、三浦半島に於ける諸遺跡

昨年九月赤星直忠氏から相模茅山貝塚と同様な土器が他の二遺跡からも出ると云う通信を戴いた。その後、氏の發表せられた三戸遺跡の報告を拜讀して、始めて、三戸式の存在を知り、これと渡島の住吉式、又は陸前の槻木1の型式を比較して異常の興味を覺えた。本年正月私は同氏を横須賀に訪ね、三浦半島の諸遺跡からの採集品を拜見することができた。各遺跡の土器は小破片までよく採集されてあつて、型式の調査には非常に好都合であり、殊に茅山、三戸、諸磯等の豐富な材料はこの上もなく有益であつた。此處に氏の好意を謝し、併せて古式縄紋式土器に關する所見の概要を記させて戴くことにする。

纖維又は以前の土器の出土遺跡は次の如くである。

1、横須賀市公郷町樂徳寺裏山
2、浦賀町高坂小學校敷地（貝塚）
3、同　町浦賀、吉井（沼田）貝塚
4、同　町浦賀、久比里、江戸坂貝塚
5、久里濱村、佐原、茅山貝塚
6、衣笠村、森崎、春日臺
7、初聲村、三戸、谷戸上、光照寺裏山
8、同　村、三戸、ガンダ畑
9、鎌倉郡腰越津村、津村

纖維を含む土器型式には、(A)内面に、又は外面にも一種の條痕（アカガヒ屬の貝殼の先端によるもの）を有するものと、(B)斯くの如き條痕のないものとがある。私は前報「關東北に於ける纖維土器」のうちに、前者の例として茅山(5)を、後者のものとして高坂(2)を擧げて置いた。

茅山式　赤星氏は古くから茅山貝塚の土器に注意せられ、特に多量の土器片を採集して居られる。そのうちには他型式の土器は殆どなく、總て、内面、又は外面にも條痕ある一型式に適はしいもの許りである。この式は關東地方では未だ名付けられて居ないから、茅山式と云うことに相談を決めた。この式には縄紋が甚だ稀で、數百片のうち三四例を見るに過ぎない。内外面に條痕のあるのが常である。文様は前報の圖版にある様な、點列によるものと、細隆線によるものが多い。形態に於いては頭部が急に内方に折れ曲るものが相當に多く、底に平底と共に丸く移行するもの（卵形）があるのが注意すべき點である。纖維の混入は殆んど全部に認められる。厚手、そして大形に傾く。この式は陸前の槻木2の型式と共通な性狀をもつて居るが、縄

は、前述の磨製石器より、はるかに古いものであるか、を考へねばならない。石器使用段階の一般說によれば、打製は磨製に先行すると云ふ。然し此れは概論であつて、特殊な場合に於ては、此れを裏切る樣な事實が少からずあると思ふ。紅頭嶼に於ても、此の打製石器が黑色の磨製石器より古いものであると云ふ事は考へられない。

此等の興味ある問題は、現時の乏しい材料や、又臺灣東海岸地方の石器の研究の不完全を以てしては、論斷されないものである。筆者は、更に材料を集めて、研究して見たいと思つて居る。

×　×　×　×

紅頭嶼の石器に關聯して、色々の事が思ひ起される。一は石器の材料であり、他は、その用途である。

例へば、磨製の石器を使用する可なり進んだ種族が、或る島嶼に渡來するとする。彼等は、其の島の富源を開拓すべく、其處に定住するとする。然し乍ら、其處には、磨製石器を製作する樣な良い材料がないと假定する。さすれば、彼等は、自然、磨製石器の文化が廢れて、粗雜な打製石器文化が此れに代るであらう。從つて、彼等の文化は退歩するであらう。環境の力は力强いものである。此れは自然に依據する程度が比較的多い未開民族の間に於て殊に然りである。舊石器時代に於て、人類の發達した地方は、皆微細な細工をするに足る器具の材料たるフリントの產地である事を見ても、原始民族の文化を見るとき、殊に其の石器時代のそれを見るときは、その環境は注意せられねばならない。ヤミの場合に於ても、磨製の石器を有し、所謂磨製石器文化を以て、此の紅頭嶼に渡來して、其處に定住しても、其處の特殊な環境は、磨製石器の文化を退化せしめ、打製石器を使用せしめるに至つた樣な事がないとも限らない。

又、用途に就て見るも、注意を要する。第一に、其の石器が如何なるものに使用されたかを究めるのは最も重要な事と思ふ。例へば刀の樣な物を切つたり、削つたりする樣な刃物は、是非とも、磨製による銳利なる刃を要するであらう。然し、他方に於て、鍬の樣な器具は、前者程、磨製による銳利さを要しないものではあるまいか。紅頭嶼の場合に於ても、彼の打製石器が、田畑耕作用の鍬の樣なものであつたならば、勿論、進んだ磨製石器と年代を爭ふ樣な意義は消滅するわけである。（終）

研究が不完全であるので、今、此れを、にはかに論斷する事は出來ない。然し乍ら、臺灣本島の石器類とは、かなりに趣の異る點を注意したい。臺灣に發見せられる石器の系統は、略支那日本型と、馬來型とも稱すべき、二大系統に分つ事が出來るかも知れないが、此の紅頭嶼の石器は、支那、日本型とはかなり趣の異つたものである。此の石器は、より南海の石器に近似を求むる事が出來るものであらう。インドネシア、オセアニア地方の石器が研究されゝば、必ず連鎖を求め得る性質のものであらうと思はれる。



1.　2.

Fig. 3

磨製石器の中Bの如きは、それと全く同一なるものを、ポリネシア、イースター島の石器に見る事が出來る——The Natural History of Juan Fernandez and Easter Islands. vol.1, Geogr., Geol., and Origin of Island Life. Pt. 1, Notes on a Visit to Easter Islands. (C. Skottsberg), Pl. XIV, Fig. 3, 1920, Upsala 參照——

以上の如く、紅頭嶼には、打製、磨製兩様の石器を認める事が出來る。此れは如何樣に解すべきか?。此の兩樣の石器は、各々其の遺した種族を異にするものであるか?。或は種族は此れを同じくするも、其の年代に於て、非常に差があるものであるか?。

此處に注意しなければならないのは、磨製石器の或るものに使用される黑色にして、堅硬緻密な水成岩質?　の石は、紅頭嶼に發見されない事である。此れは如何樣に解すべきであるか?。

此れに就ては、次の解釋の他ない。卽ち、一はヤミ族の祖先が、フイリッピン方面より渡來した當時、此の石器を携へ來つたものである事。他はヤミが紅頭嶼に渡來してより、此の石器又はその材料を、他種族との交渉によりて得たる事。二、更に、此の島嶼に他種族の渡來を假定すれば、其の種族が遺したるものなる事。

打製石器の材料は、紅頭嶼に產する材料を以て作られて居るので、紅頭嶼に於て製作された事は勿論であらうが、此の打製石器

る。又、厚さの最大部、六糎余を算へる。此れは、ヤミ族蕃人に聞くと、Cmm と稱し、昔、木を伐るに使用したものだといふ。

B〔第三圖１〕　（著者所藏）

此れは、同島に發見されない堅硬な黑色を呈する岩で作られて居る。長さ一一、七糎、幅は基部に於て、約二、七糎、尖端刃の部分（最大幅）に於て、三、七糎を算する。一面は、略平らで、よく磨かれて平滑であるが、他面は、刃の部分を除きて、甚だ厚く、約二、五糎を算する。刃の部分は、眞直ならずして、稍弧狀をなして前方に突出して居る。



1.　2.

Fig. 2

C〔第二圖２〕　（著者所藏）

材料は、砂岩で、淡褐灰色を呈し、左程、緻密堅硬でない。長さ七糎、幅四、五糎、略長方形を呈して、兩側並行して居る。兩側は、少しく斜であるが、略眞直に切斷せられ、厚さは、一糎余。一面は、稍弧狀をなすが、大體に於て平滑で、他面は、片刃を作るために、尖端より一、八糎の所より傾斜して、刃の部分に終つて居り全體平滑に磨かれて居る。

D〔第三圖２〕　（著者所藏）

此れも同島に產しない、質の緻密堅硬な、黑色の石を材料として作られてある。恐らくは、完全品でなく、或る一部分と想像される。此處に注意す可きは、前述の鑿狀の石器とは、少しく趣を異にし、一面は平滑であるが、他面の長邊の兩側が、斜に削られ、殊に一方は、以前に刃をなして居た様に思はれる事である。全體頗る平滑に磨かれて居る（長さ九糎、幅三、三糎）。

前述せる紅頭嶼に發見せられた石器は、如何なる地方の石器に、類緣を求むる事が出來るであらうか。此れは、附近島嶼の石器

島の方は、紅頭嶼より、より以上に、外國船に訪れられる關係や、又西班牙、米國の敎化によつて、早く、石器時代の文化を脫したと思はれるが、紅頭嶼は、此れに反して、比較的近年迄、外部文化の影響が殆んどなかつたので、換言すれば、鐵を得る道が、なかつたので、石器を使用したものと思はれる。以下發見された石器に就て、述べて見やう。

1、打製石器、〔第二圖1〕　〔著者所藏〕

此の石器は、安山岩で、海岸の圓石を以て造られて居る。少量の變化はあるが、其の長さは大約十三乃至十五糎、幅九乃至十糎で、其の形狀は、兩側中程をかき取つてあるために、∩形をなして居る。形狀に於ても、變化があるが、其の最も模範的なるは、圖に示した樣なものである。厚さは、最も厚い部分に於て、大約二糎余を算する。表面は、何等細工を加へないので、中央部が稍隆起して居り、緣邊が薄くなつて居るが、その裏面は圓石を打ちかいて製したるため、表面とは異り略同一平面をなして居る。ヤミ族は、此れを、Chichibuchibu—no—inapo と呼んで、祖先が遺したものだと稱し、その使用法は、稍膨起したる表面を、手の掌に當て、くびれたる部分を、握つて使用したものだと云ふ。

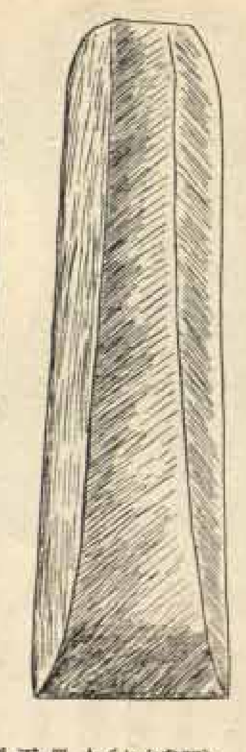


Fig. 1 磨製石器 A（本文參照）

2、磨製石器、

A〔第一圖〕　〔臺北帝大土俗人種學敎室所藏〕

此れは、同島に發見せられた石器の中で、最大のもので、長さ二三糎、最大幅（刄の部分）六、一糎を算する（基部の幅は四、四糎）。材料は、玄武岩（Basaltic）の堅硬な岩質で作られて居る。全體長方形を呈し、一面は略平らであるが、他面は中央部を除いて、兩側より、斜に削り取られて居る。そして其の中央部は、平らであるが、尖端の刄の部分に至るに從つて、次第に傾斜し、刄の部分に於て、薄い刄に終つて居る（片刄である）。　中央部の平らな部分、基部に於て、一、九糎、中程に於て二、七糎を算す

々出るのであるが、彼等は、此れを、彼等の祖先が作つたものだとして、此れを尊重し、若し、此れを山野に於て、見付ける時は直ぐ拾ひ來つて、自分の家に保存して置くのが常である。此れは、前の場合と對照して、比較的近年迄、彼等が石器を使用して居た事を物語るものである。余が、大約百年前迄は、此の石器を尙半ば使用して居たと云ふ見解を持つのは、百年前に於ては、此の近海は、殆んど、船の航海するものがなかつたからである。對岸の臺灣本島より、紅頭嶼は、晴天の日、明かに望見出來るが、對岸のパイワン、ピユーマ、アミ等の蕃族は、百年前に於て、已に自が船を失つて居たので、勿論渡る可くもない。此の時代に於て對岸の臺灣本島蕃族は、完全に鐵を使用する時代に進んで居たのである。地圖上に於て見るも、臺灣本島と紅頭嶼は、左程離れて居ず、互ひに、彼我兩岸に、蕃族が住んで居る事は、認めて居たが、此の間には、少くとも近代に於ては彼我の交渉は全くなかつたのである。此の樣な關係に就ては、別文で詳述したいと考へて居る。

此の樣に、比較的近年迄、石器を使用して居た事は事實であるが、此れには、面白い一の貴重な歴史的標本がある。イモルル社の或る家には、一寸位の鐵片があつた。此れは、現在の利器 Wasi の樣な形をして居るが、此れに就て、面白い話が傳へられて居る。

『昔紅頭嶼には鐵が全くなく、石器類を以て、家でも何でも作つて居たのであるが、或る時、船の破片でもあらうか、鐵片が潮に乘つて流れて來た。此れを拾ひ上げて、此の樣な形にし、次から次へと、貸しまはつて、ヤミは、家や色々のものを作つたのである』と。

此れは、歴史的に非常に面白いものであり、彼等が比較的近年迄、石器を使用して居た事を示すものであるが、此れは、現在臺北帝大土俗人種學教室に保存されて居る。

紅頭嶼ヤミ族が、今より幾年位前に、此の島に渡來し、根を下したかは、今の所明かでない。然し、彼等は、彼等種族の文化段階に於て、石器時代に於て、此の島に移住したものである事は、（極く少量の金屬は此れを有して居たかも知れないが）云ひ得ると思ふ。彼等の神話又は、口碑によりても、彼等は、フイリッピンのバタン諸島より來たと稱へるのであるが、此れは、唯神話傳說に止らず、彼我の文化を詳細に比較して見ると、直ちに兩者の關係が深いのを發見する事が出來る。ヤミ族が、バタン諸島に居住した前の故郷は、測り知れない。然し、ヤミ族が、バタン諸島に居た頃も、尙、石器時代の狀態にあつたものと思ふ。バタン諸

紅頭嶼に發見せらるゝ石器に就いて

鹿野忠雄

臺灣の東南の海上、バシ海峽に浮ぶ小島に紅頭嶼がある。同島は面積僅かに三方里の小島であるが、此處にはヤミ族と稱へられて居る蕃人が一七〇〇人程住んで居る。此の蕃人は、同島が、他に隔絕した洋上の孤島であり、又種々の原因よりして、同島が現實の環境以上に、孤島的に保たれたるため、實に原始的に保存され、人類學的研究に、興味ある資料を與へる事豐富である。余は本篇に於て、同島に發見され、又ヤミの現在所藏してゐる石器に就て、述べて見たいと思ふ。

現在地球上にある諸地方は、皆其の地理的環境に於て均しくない。即、氣候、風土とか、民族移動の經路となる可き交通路の難易とかは、一地方に於ける文化を、或は發展せしめ、或は退歩せしめる。此の點よりして、時代は此れを同じくするも、一地方と他地方の文化的段階は、相互に甚だしい相違を現す事が屢々である。彼のタスマニア土人が、比較的近年迄、石器を使用して居たるが如きは、その甚だしい例といつてよい。

ヤミ族は、現在では、鐵が入る樣になつてから、彼等は斷然石器時代の域を脫した。然し乍ら、此の Neolithic の文化は、比較的近年迄、遺つて居たものらしい。余は、百年前は、尚、此の石器を半ば使用する、所謂金石併用の時代を保つて居たものではないかと思ふ。

臺灣本島の諸地方からは、石器や土器が、澤山發見される。又、現在居住して居る蕃人の住居附近からも澤山出る。而して、此れ等發掘される石器や土器が、現存の蕃人の祖先が遺したものに相違ない場合に於ても、彼等現在の蕃人は、此の石器土器が、祖先の遺したものである事を、知つて居るものは、殆んどない。此れは、彼等が、遠きその昔に於て、石器使用の時代を、離脫した事を示すものである。

然るに、ヤミ族の場合は、此れと異つて居る。紅頭嶼の山野からは、先住民？ ヤミの祖先？ が遺したと思はれる石器が、時

一箇の完全に近い坏について見るに、その口徑約九糎、底徑四・五糎、高さ六・五糎を算し、極めて薄手、全體に精巧なろくろの跡と、その平底面に巧妙な絲切りの跡を印してゐる。此等の土師器と同層位から出土して、同一の燒成、吸水性等を有するものに第六圖及び第七圖に示す樣な不正形の薄片が存在してゐる。第六圖寫眞の方は山崎常盤氏方にある物で、第七圖は現在國學院大學に保存するものである。共にその厚さ三ミリ位でその面や周には多くの小さい凹凸が存在してゐる。共に破片であるためにこのまゝでは完形時の形體が不明であるがその破片等を綜合して、約一邊一二―一三・五糎の內曲邊正方形（Σ3）の角の無い物の樣な形を呈して居つた事が推知せられる。その周邊には、緣としての特殊な造設を見ないが、全體的に中央部の方やゝ凹むが如き傾向を有して、その形をして容器としての使用可能の條件を備へしめる。全面に指斗と指紋とを見る事が出來る。以上の如き土師器はいづれも精巧薄手であつて、多くはろくろの使用を認め、一般に古式古墳等より出土する稍々雜大形複な土師器に比して、後出的な物ではないかとの感を深めるものである、その形體に於ても先の方形に近きが如き淺き盤形土器は自分等の例を知らない所であつて、特異な形態として注意を拂ふ可きものである。（未完）

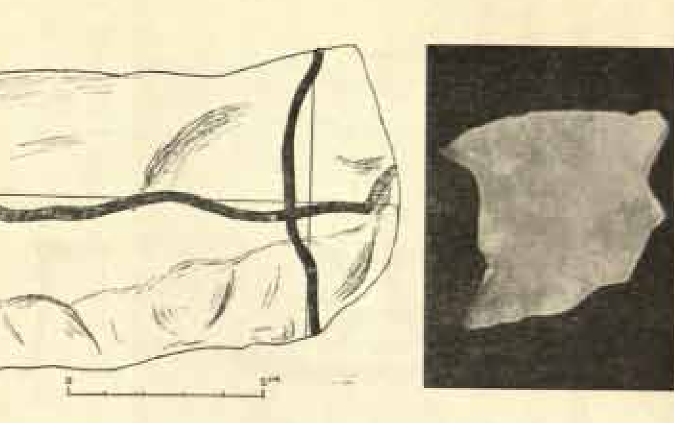


Fig. 6.　Fig. 7.

【註】(1) 縄紋土器、特にその伴ふ他の遺物の性質の相異に伴ふ土器の形態、燒成等の差異についての綜合的な發表の無い今日、この樣な用語は嚴密な意味に於ては許されない所であるが、こゝではたゞ、常識的な意味で用ひてゐる。勿論しかし吾人は、所謂高塚古墳より出土する同種遺物と、墳墓等より出土する同種遺物とはその形態燒成共に可成り相異するのを經驗によつて知つてゐる。

(2) 廣い意味に彌生式土器を解して土師器をもこれに含める人がある、自分等は兩者を明かに區別し得る理由や、又その必要の多くをも知らない。之等についての卑見は近く綜合的に發表し度い思つてゐるが、本文に於てはたゞ記述の便宜上本文に記載した樣な意味に土師器といふ言葉を用ひてゐる。

在する。紋様は極めて稀である。第五圖1—8に示す如く、壺形土器底部は多くは一種の上げ底の精巧な物を有して奈良時代等に於ける骨壺の一形式を連想させる。壺形土器の口縁部は多くは極めて軽く反轉するものの如くであるが、盤形の口縁部は外方に向つて開く9の如き物と、10の如く合せ蓋を受け得る装置を持つた物とが存在する。第五圖の11 12は完全な坏であるが、11の方は口

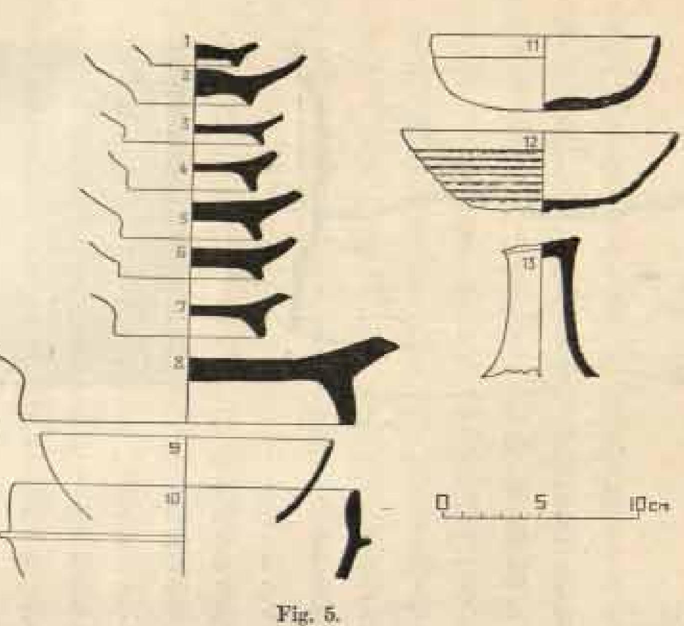


Fig. 5.

徑一一・五糎、高さ三・八糎で口縁に近く一の沈刻線をめぐらし、簡素な坏、比較的薄手で精巧堅密な焼である。12は11よりも外方に開いた坏、口徑一四糎高さ三・九糎、その特色として外面に幅五ミリ程のろくろ目を有し、之は裏面より眺める時渦卷狀を呈してゐる。全體に薄手、堅密、精巧である。高坏形の物は完形品が存しない。13の如き例について見ても薄手であるのを特色としてゐる。以上の如き祝部土器はその量に於ては多數であるが、變化には極めて乏しく、全體の性質としては、薄肉堅密精巧でろくろ使用の跡を明瞭に有し、やゝ簡素な感を與へ、祝部製作の技術としてはむしろ後期に屬せしむ可き物であるのを推察し得る。(1)

B 土師器

改めて申すまでもなく、所謂土師器と彌生式土器との境界は極めて不明瞭であつて、(2)その見解は人々によつてそれ〴〵異つてゐる。自分がこゝで特に彌生式土器と區別して云ふ所の土師器は便宜上、本遺蹟に於て、包含層上部より祝部土器と伴つて出土した素焼土器である。この土師器もその破片は多數に存在するのであるが、その質の粗なため、完全に近い形を呈するものは極めて稀である。大體にその破片より推察して坏形、もしくは鉢形のものが最も多かつたらしく、その形も小形である。全體に白みを帶びた黃紅色を呈し、粘土は可成り精選せられたものらしく思はれる。現存する中川君採集の

としてみだりに發掘する事が許されない。B點附近はA點の東百五十米程の所であつて、こゝからは新川筋を挾んで兩岸からしば〳〵完全な土器が出土してゐる。C點附近は領家橋の北端より西二十米程の所であつて、比較的完全な土器が大多く出るが、後世の攪亂が明かである由である。

以上は靜岡縣小笠郡曾我村遺蹟の概要であつた。本遺蹟に於て特に自分等の注意をひく點は本遺蹟が低い沖積層上に、かつ自分の所謂「舊逆川地帶」の東南岸に接して存在し、その包含層中に於ては、彌生式土器が下部より祝部土器土師器が上部より出土して此等は絶對的明確ではないがその兩者の一包含層中に於ける位置を明かに知らしてくれるものであつた。勿論この包含層それ自身が有する確然率については絶對的保證はためらはなければならないが、假りに之が二次的變化を受けたものであるとしても全般的にではなく、その一部に於て（平面的又は垂直的に）行はれたにすぎないものであらうし、少くとも自分等の知見の範圍内では本包含層が流水時の沈澱で生成されたとも、又層中を流水等によつて混亂されたとも考へるに充分な資料は存在してゐない。



Fig 4.

三

右に述た如き遺蹟より出土した遺物の種類は木炭類を除いては凡が土器のみであつて、他の金屬器や石器を見る事が出來ない。石器や金屬器の探求については中川君と共に可成りの努力を費し、又先の山崎常盤氏や増田泰平氏等も同樣であつたそうであるがいづれもその努力は無駄であつた。土器は祝部土器、土師器及び彌生式土器であつて、記述は各々によつて別に行ひ度いと思ふ。

A　祝部土器

最上部から土師器や木炭と共に出たものであつて、その破片を併せると可成りの多數に達する。完形品は殆なく、口緣部や胴部の破片が大部分である。全體的に見て青灰色の極めて堅緻な燒成であつて、中にはその表面の一部に、黑白色や灰釉を呈する玻璃狀物質の附着を見得る。器形はその破片等から推して深い壺形と、淺い盤形が最も多かつたものらしく、稀には高坏の如きものも存

あるらしい。この層の下は漸進的ではあるが速かに淡茶褐色の白味がゝつた層に移行する。この層の厚さはA點附近では十五糎B點附近では四十糎に達し、その中間に於てはほゞその平均數に近い所から、自分はAよりBに至る程次第に薄くなるものと考へてゐる。この土壌の構成々分は自分には明確ではないが、やゝ粘着力を有する砂利を多く含んだ物であつて、その中に存する白色での部分は明かに凝灰岩の霉爛物、又砂粒にも硅岩の如き物多數を示してゐる。特にこの層に於て注意すべき事實はその各部分に於る木炭の類の多數挾在である。しかもこの木炭は自分の試掘時に於ても同高位に並列して多數集つて存在した事實を見られた事で



Fig. 3.

けある。本層は可成り多量の有機物を含有してゐる。而して遺物のすべてはこの層より出土すそるものであつて、その上部十糎內外の附近からは精巧な祝部土器が精巧な土師器と共に出で、その下部本層の終末に近く彌生式土器が完形や破片共に混じて出土してゐる。その兩者の間はほとんど遺物を見ない所もあるがその土壌には何等の變化を認められない。勿論木炭片はその間と雖も認みられてゐる、大いに注意すべきすべての狀態である。この層も漸進的にしかし急激に次の粘土層に移行する。次の粘土層はその深さが不明であるが、極めて粘着力の大な青灰色を呈する精良な物であつて、遺物等存在しない。以上の如き狀態はAB點共に認めらるのであるが、Cの部分は試掘の機會を失した上、中川德治君に從へば後世攪亂あるので証が明かそうである。

以上の如き環境の中から出土する遺物を包含する層の擴がりは極めて廣くて、領家小學校西方の領家橋から西に向つて篠場八幡橋を過ぎ梅橋小字尺紳につゞいてその長さ一キロに及ばんとしてゐる。(その幅は水田に防げられて明かでない)勿論しかし此等は少數なりとも遺物の存在する地域であるが、最も代表的な物はやはり領家橋から八幡橋に及ぶ附近の地であつて　A、B點及び領家橋附近から完全な多數の土器を發見してゐる。A點は完全な彌生式土器の多數と共にその破片の多くをも出してゐるに對し、領家橋附近かはらは彌生式以外に特に祝部の多數をも出してゐる。第四圖に於てほゞ中央に見られる層は近頃削られたA點附近の包含層であつて仕掛の發掘が行はれたならばなほ多數の遺物を出すであらう所であるが、現今では河の一部

の遺蹟局部A地點の附近で急に著しくカーヴして今までの西南の進路を急に西北に變じてゐるものであつて、現在よりは低い堤防を以て挾まれ、その幅も僅かに二十米位の物であつたらしい。從つて絶へざる氾濫は遂に改修の大工事を餘儀なくさせたのであるが、この樣な著しい河道の人工的變化は、往々にして長い時間の後には舊河筋の存在を忘れしめる傾向を持つものであるが、勿論吾人は本遺蹟に對する逆川は舊逆川の方である事を明かに記憶すべきである。そしてこの舊逆川は數年前未だ改修工事の行はれなかつた前に於ては右の如き河筋を採つて居つたが、それよりもはるかに以前に於ては往々にしてその河筋を變じ、一種の沼川樣の性質を持つて居つたものではないかと思はしめる。それは現今東海道より本遺蹟へ達する途次に於て往々見受ける所であるが、所々帶狀凹地として特に低濕な部分を殘存して、茅や楊柳が茂生して居る所を殘し、しかもそれ等が、多くの蛇曲を作つて方々に曲線的に連續して殘存する事實は大いに注意に價するものである。而して現在の東海道は全く沖積平地上に在つて、ほとんどその標高に於て右の如き河流の殘存物存在地と著しい差を示して居らない、これは勿論他の明確な自然科學的理由や文獻等を檢討しないと明かでない事實であるが、自分は假りにこの東海道筋の邊が以前の逆河の河流氾濫の北限ではないかと考へて、現在の川筋の北岸附近との間の一帶の低濕地を、廣く「舊逆河地帶」と呼び度いと思ふ。敢へてその南限を現在の河筋の北岸附近に定めた理由はこの附近を界として東南方がその高さを異にし、舊逆河氾濫時には東海道と同樣その局外に立ち得る性質を有して居るからであつて、これはなほ次に述べる附近土壤の性質からも明かにされる所である。現在に於ては遺蹟局部地附近ではこの「舊逆河地帶」に直接接した部分は大部分新逆川の中に含まれてしまつてゐるため明かでないが、以前はその地名によつても知られる如く八幡官有地附近は八幡森と稱して小高い芝生であり、その附近にも水田面より一段高い部分の畠地となつてゐるのを往々見られた樣であり、現在に於ても、新川筋東南方には水田中に一米近く高い畠地の多數に存在し、又現在附近の農家はいづれも皆同樣の小高い上に存する事實が知られるのであつて、新川筋堤防用の土砂をこの附近の水田より採らなかつた以前には一帶に小高かつた樣である。

　現在の水田面を被ふ所の土壤はいづれも所謂耕作土と稱せられる有機物含有土であるが、自分の行つた都合三箇所の試掘に於てこの所謂表土とも稱すべきものはA地點では約三十糎、B地點では約五十糎程であつて、それは白味を多く帶びて粘滑力少く、有機物含有の割合は普通の近畿關東の黒色土に比してはるかに少く、その中には硅岩等の小礫石を含んだりして又雲母をひ混へてゐる。その白色を呈するのは先述の小笠山の凝灰岩の露臨によるものらしく、要するに一種の移動後あまり多くの年月を經ない土壤

異にして、改修前の舊逆川は兩岸に僅かながら氾濫平原を伴ひその外側に堤防が築れて居つたのであつて、遺蹟はこの舊流路の狭(lobe)の部分に、約十七米の標高を有する此等の流の作つた沖積層中にあるのである。一方本遺蹟の存する沖積層に接する南方の丘陵すなはち小笠山は代表的な第三紀層の殘存から成り、褐色中粒砂又は凝灰岩から成りやがては小笠山礫岩層に移行して居つて、

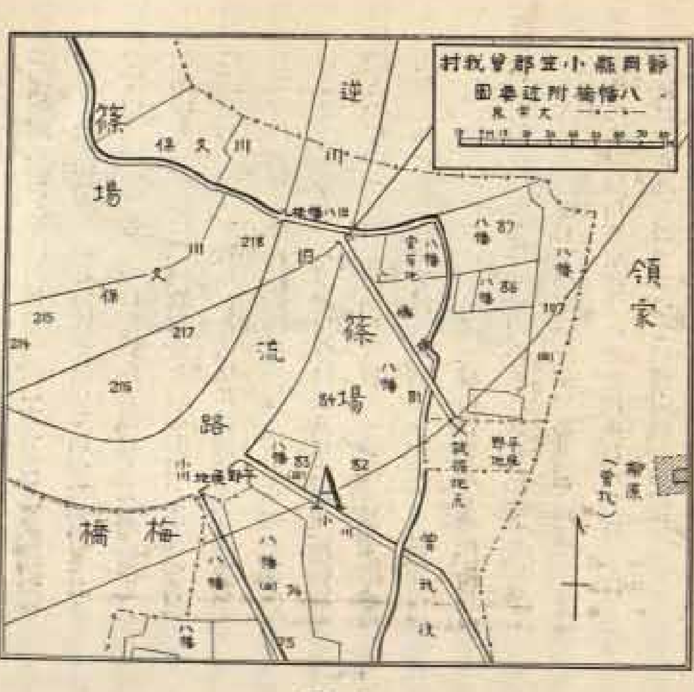


Fig. 2.

その麓ではほとんど直ちに沖積層に移行して居ると云ふ可く、その麓に近く多數の横穴群を有し、又、我國銅鐸分布の最東端である所の長谷銅鐸の出土地である掛川町長谷の丘陵は實に赤本丘陵の連りの一部であつて僅かに本遺蹟の東一キロに充たない地點である。本遺蹟の北方に東海道を距てて存する岡津の臺地は高さ三十米余で、かつてはその麓を原野谷川に洗はれた形蹟を有し、同性質の丘陵、その上には古墳が存在し、又石器時代遺蹟が存在してゐる。

前述の事實によつて明かな如く本遺蹟に對する逆川の關係は極めて重大な物であつて、本文に於てはなほ少しこれについて詳述する必要を認める。逆川の改修工事が本遺蹟發見の動機を作つた物である事は先にのべたが、この改修工事はつひ三年程前から始められたものであつて、自分等が特に曾我村役場を訪問して吏員諸氏の厚意によつて拜見する事を得た地籍圖や工事豫定圖等を參考として作製した第二圖によれば以前の逆川は改修後のそれとは可成り著しい相異を示してゐる。すなはち現在は曾我村領家の小學校西北側から直ちにほゞ眞直に西南にのびて八幡橋の邊よりやゝ西方にその進路を轉じてその幅も八十米に近いが、以前は之に對して、小學校西北側より逆川は低濕地の上を幾多の小さい蛇曲(meandering)を呈して現在

靜岡縣小笠郡曾我村は遠江國のほゞ中程、天龍川と大井川の中間に位し、掛川町の西一キロ餘、北は舊東海道南は現在の東海道線の間に存在する逆川が西流して、南流する原野谷川と原泉村に於て合流するやゝ東部に當る五六の集村を含める部落であつて、遺蹟は特にその内八幡橋と云はれる橋梁の南東を中心として前述の如き領家徳場梓橋の三大字に擴がつてゐる。この附近は北には遠く赤石の山地を控へ、南には近く丘陵性臺地を控へ、東西は眺望廣豁、近くの東海道は松並木を陽炎の中に連續させて長閑に、通風採光良しきも、濕氣多き沖積層である。本遺蹟局部地へは東海道線掛川驛より、掛川袋井間の乘合自働車によつて原川藥師前で下車し道を南に採つて約五町程で達するのが最も便利な途次である。今遺蹟附近の地理學的考察を簡單に述べて見る。

Fig. I.

天龍川が赤石楔狀體を出ると西に三方原、東に磐田原の洪積層の臺地を展開し、その赤石楔狀體の西南を大井川と共に洗つて幾多の洪積世の臺地を、天龍、大井及び幾多のその支流の間に挾んで發達させてゐる。この洪積層は第三紀の終末に第三紀層が削磨されて準平原となつた物であつて、後その上に天龍、大井の諸川は扇狀地fanを作り、更に地盤の隆起と共に諸川はこの洪積扇狀地を侵蝕してその侵蝕谷底に廣い氾濫平野を造つたのである。前述の本遺蹟の存在する地點は、右の如き遠江平野を西流して天龍川に入る逆川と、南流して逆川に注ぐ原野谷川との合流點附近の沖積層上に存するのであつて、この逆川は曾我村の約十余キロ東北の地に源を發し、掛川町の附近に於て相當の三角洲平野を發達させると同時にその曲率半徑も認められ、曾我村に入つてはその三角洲平野も廣くなつて更に原野谷川を合せてより廣い平野を作る。後設の如くこの現今の逆川は往時とは著しくその狀態を

靜岡縣小笠郡曾我村彌生式土器出土遺蹟研究

樋口清之

一

本文に於て記述する遺蹟は靜岡縣小笠郡曾我村領家、篠場、梅橋に汎つて存在する一の彌生式土器出土遺蹟である。

本遺蹟は、二三年前から始められた、その附近を流れる逆川の河道改修工事の結果、偶然にも東海道線袋井驛の驛員の一人によつて發見され、後異常なセンセーションを起して、前同縣史蹟調査委員山崎常盤氏を始め、足立鍬太郎、後藤肅堂、西鄉藤八、高橋勇增田恭平氏等の諸先輩によつてその遺蹟や遺物が研究され、あるひは地方に於ける講演會や新聞にその考察が發表され、特に「掛川志稿」所載の素賀國造に關係ある遺蹟としての感興を强くひいたもの丶如くであつた。この遺蹟について自分が智識を得た動機は本遺蹟に近接する掛川町出身の學友中川德治君が、昨年十月國學院大學上代文化研究會の例會に於て、この遺蹟に關する詳細な調査を報告して鳥居博士の指導を受けられたのを幸にも拜聽する機會を得たのに在つて、自分はその同君の報告より、同君とは別の意味で特殊な感興を覺へて、昨年十二月東海道筋の彌生式遺蹟調査の際特にその二日間を割いて本遺蹟に臨る事を得、又掛川町附近に於て先の山崎常盤氏邸に集められた標本や、袋井町に於て增田恭平氏の採集標本、袋井驛保管の同驛員採集標本等を可成り精細に調査する事を得て、大體の概念を得られたかの如く感ぜられた。先の中川君は、本遺蹟を鳥居敎授の指導や山崎常盤氏の誘導によつて昨年夏、冬及び本年春季休暇の間たへず注意研究して來られたのであつて、本報告は同君と共同して書き度く思つて居たのであるが、特に同君の意志によつて自分の知見を發表するに止める。しかしなほその中には多分に同君から得た援助があり、特にその挿入圖の一部は同君の手によつて成つてゐる。又自分の調査については先の山崎常盤氏や增田恭平氏等は特別の便宜を計られたし、特に山崎氏はその發表を寛容された。いづれもその厚意を銘記して謝意を表はす次第である。

二

以上此の住居趾に關する調査は云ふまでもなく、不完全なものであつたが、筆者は爐及び柱穴らしきものゝ存在と、これが一種の平地住居である事を明かにし得た結果を以て滿足し度いと思ふ。たゞ筆者の最も遺憾とする所は、此の住居趾の平面的形態、及び柱穴らしきものゝ排置狀態を知り得なかつた點にある。

其他の住居趾類似遺跡　工事中筆者は度々住居遺跡の一部と考へられる燒土層、及び、人工的土壤構築物―柱穴の如き物、鈍きU字狀を爲す褐色土層の凹入―等の存在を目擊したが、作業中の事とて充分の調査を施行するを得なかつた。左に其等の主要なるものゝみを畧記する。

燒土層は第二圖bcdの部分と、南方斜面に開鑿された新道路の西側斷面上に發見されて居る。此等の幅は二十五糎―四十糎位ひで、その厚さは十糎内外であるが平面的形態は不明である。cd兩地點の燒土層は大略水平を爲す壙塌面上にあり、その附近に人爲的土壤加工の跡を見ないが、b地點に於ける燒土層は多少U字狀に凹入する壙塌の東隅に位し、c地點のそれは傾斜する壙塌上面の一部を階段狀に削平した部分に存在して居る。（第五圖）

柱穴の如き褐色土層の陷入は發掘地域全部を通じて餘り顯著には認められないけれども、b地點燒土層に續く部分斷面に四個並列露出して居る。（第五圖參照）此の他壙塌が殘淺狀又はV字狀に掘られ、其內に粗なる黑土の堆積するが如きものは各部分に認められるが、何れも近世の土木工事の結果と思はれるものゝみである。

人工遺物は、cd兩地點には全くその發見を見ず、b地點及びc地點の黑土層下部よりは堀之內式に屬する土器が見出された。又、f地點には底部を缺くカリパー狀勝坂式土器が、口部を上に直立して埋沒せられ、その下部は壙塌中に埋められてあつた。斯の如き土器を以て爐と爲した類例は、下總姥山貝塚、下總上本鄉貝塚、武藏船田、武藏峯等發見の住居趾に於て之を見る事を得るも、f地點の土器はその內部に灰燒土等を含まず、又、土器それ自身も再び火にかゝつた影跡の認められないものである。從つて之を以つて直ちに上記例の如く土器を利用せる爐とする事は困難である。（未完）

となる。黒土層下には十糎内外の褐色土層が存在し之と壚埸との境界は前記の如く極めて不明であるが、前者は後者に比して多少黒味勝ちで、粘着性に富み、土質も壚埸の如く堅硬でない事に依つて多少區別される。爐は褐色土層下、壚埸層直上に構築されて居る。之によつて爐の存在する純壚埸層上面が當時の住居の表面である事が了解出來るから發掘に際しては褐色土層も特別の事情を有せぬ限り取り去る方針を採つた。發掘の結果、此地は全く竪穴狀を爲さず、たゞ爐の北端より二・七五米の所に一箇の柱穴様の褐土の陷入があつた。此穴の斷面形態はU字形を呈し直徑三十糎、深三十七糎ほどある(第八圖版上、右方斷面に白くU字形を畫くは柱穴)而して床面は爐の方向に向つて極めて輕度に傾斜して居る傾向がある。又爐の南端から南方約二米、壚埸中に前記の柱穴とほゞ同等の大さと形態を有する褐色土の陷入が認められる。(第三圖參照)發掘を試る事は出來なかつたが、之も恐らく柱穴の如きものであらう。爐は略々楕圓形を呈し十一個の石より成立して居る。その內徑に於て東西六十九糎南北五十四糎を算し、內部は約十糎內外の深さまで燒土と化して居るが表面には、全く灰、炭等の存在を見ない。列石に使用する石は1―4までは天然の砂岩で何等加工の跡を止めない。5―11は綠泥片岩製の石皿破片を利用した物でその一部には搔穴が認められる。(第四圖第八圖版下)遺物、特に土器破片は、本遺跡を被覆する黒土層下部褐色土層中より發見され、爐に接した褐色土層層からは數個の打製石斧が見出され、又、爐の周邊の土中よりは微細なる黒曜石破片が多少出土して居るけれども、意識的に此の住居趾に接置したと思はれる人工遺物の如きものは全く之を發見し得なかつた。此處より發見せる土器の大部分は所謂勝坂式に屬し、之に微量の堀之內式を混へて居る。

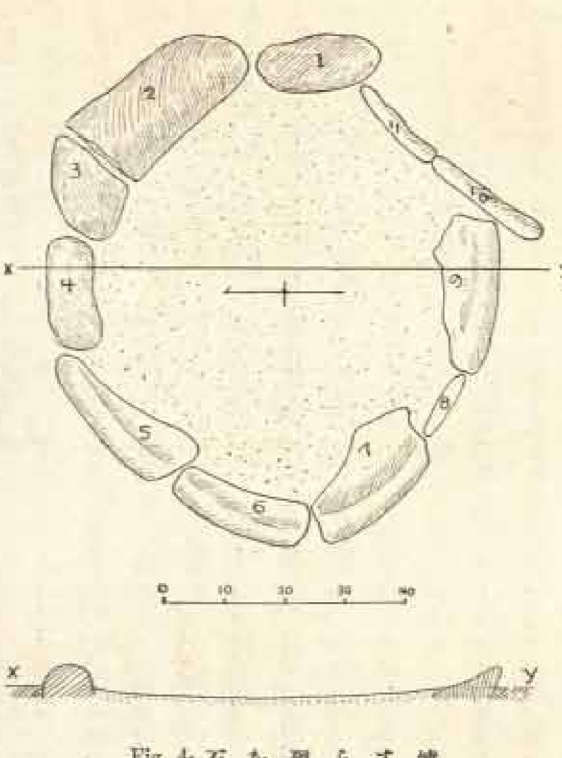


Fig. 4 石を廻らす爐

住居趾 此の遺跡の如く、相夥多量の土器を出土し、更に其の當時の民衆の日常用具と推定される石斧、石鏃の如き器具類を出す所謂遺物包含地は、例へ住居それ自體は存在せずとも、當時の人類の住居地を暗示するもの、換言すれば狭義の住居趾發見の概全性を有する地と認められて居る。而して今回の工事の結果見出された一個の確實な爐を有する住居趾と、これに比すれば稍々確實性を缺くも、大體に於て一種の住居趾と考へられる土壤構築物の存在は、上述の推定の妥當性を有する事を證明して居る。然し本發掘は元來學術的意圖の下に行はれたものでなく、又筆者自身も餘暇をもつて此の調査に從事した事とて遺跡狀態の不明確なる點のあるのは遺憾に堪へない所である。

Fig. 3. 住居趾發掘見取圖

石を廻らす爐を有する住居趾 此の住居趾は發掘地の中央部より稍々東側に偏した部分に發見された。（第二圖 a）最初は斷面の黑土層と壚坶層との境界部に二個の砂岩が露出して居たのみに過ぎなかつたのであるが、筆者は之に對して爐の一部ではないかと云ふ疑問をいだき、工事當局者の許可を得て四月十一日にこの發掘を行ひ、更に同十三日に之を續行し、爐及び柱穴と思はれる褐色土層の陷入部を發見しその性質を稍々明かにする事を得たが、一方整平工事は漸次此の部分に向つて進捗した爲め、これ以上發掘調査を繼續する事は不可能となつた。

發掘の最初の目的は露出する石の排列狀態を知る事にあつた爲め、其石を中心として東西一米、南北二米の長方形の地域を注意して掘り下げたのであるが、その結果前記二個の砂岩は、石を環狀に排置した爐の列石の一部である事が判明したので、十三日は更に此の爐の存在する住居趾の性質―特に床面形態、及び、柱穴の有無―を知る可く、爐の北方に一米の幅を以て二米の横濠を作り、續いて爐の西方に向つて幅二米、長さ一米の濠を開鑿した。（第三圖）爐の附近に於て黑土層は最も厚く、約八十糎に達しそれより北方に赴くに從つて漸次薄くなり發掘地北端に於ては約七十糎ほど

つて善福寺川沖積地の埋立を行ふ工事が開始せられた。その結果、筆者自身の發掘は不可能となつたが、一面に於て例へ學術的でないにせよ、兎に角極めて廣い範圍に渉る發掘が行はれるのであるから、多少の精密さに缺除するも、遺物包含地の内容を知る爲めには最も適當な機會と考へ、工事開始後殆んど毎日同地に赴いて、遺跡及び遺物出土の狀態を觀察し、一方、當事者に遺物は例へ

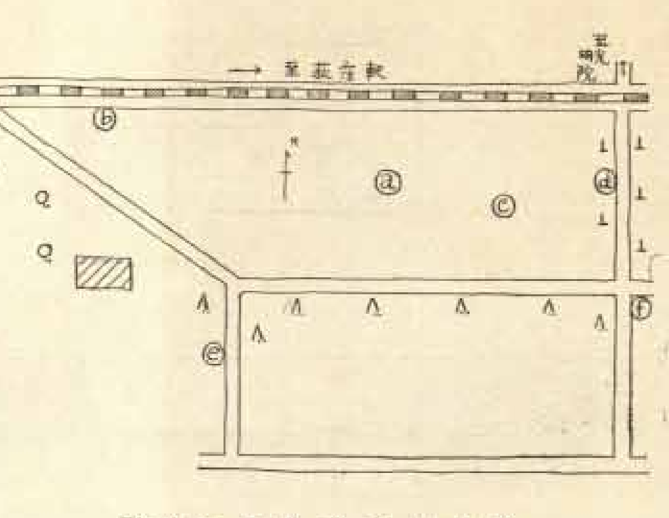


Fig. 2. 發掘地附近見取圖

破片たりとも成る可く保存する樣に依賴し資料の蒐集に努めた。此の間、石を廻らせる爐を有する住居趾の一部の露出せるを認め、この部分は特に當局者の了解の下に二日間の發掘調査を行ひ、以て不完全ながらも本遺跡に於ける住居形式の一規準を知る事を得た。此の機會に、本地に於ける土木作業に從事して居られた高野組、榎本組の諸君が筆者に與へられた便宜と好意に對して感謝の意を表し度い。

II

今回の土木工事に依つて開鑿された地域は上荻窪三百四十三—三百四十四番地に屬し、東西約百二十米、最大幅部に於て南北約四十米あり、その地表面はほゞ平坦であつた。削平作業は原地表面より一・五米内外の下方—壚坶上面より下方約五十糎—にまで及んで居るのであるから、遺物包含層は勿論、壚坶上面に多少加工を施した住居趾の如きものも亦完全に壞滅され終つた。以下、筆者の觀察した所を簡單に記載しよう。

表土—黑土—の厚さは概ね六十糎—八十糎位ひで、最厚部と雖も一米を超ゆる部分は稀である。この黑土層の下方十糎内外の部分は、黑褐色を呈する所謂褐色土層でこれより漸次壚坶に移行する。斯く黑土層と褐色土層、褐色土層と壚坶層との間の移行狀態が甚だ漸變的なる爲め、各層間の境界は極めて不明瞭である。遺物は概して黑土層下半部、及び褐色土層中、或ひは壚坶最上面上に存在して居た。

東京府下井荻町上荻窪光明院附近の石器時代遺跡（一）

甲野勇

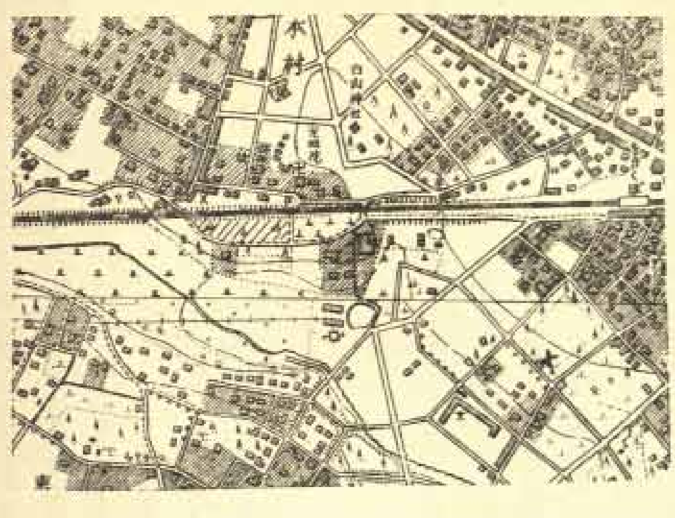


Fig. 1. 遺跡附近地形圖. 1:10000（粗き斜線を引ける部分は發掘地）

I

中央線荻窪驛附近より鐵道線路に伴ふて、西方に行く事約五百米の所に位する、井荻町上荻窪光明院境内及び其の附近一帶の地は、石器時代遺跡として一部の研究家の間には、早くから知られて居た所である。此の遺跡は善福寺池より發する善福寺川の爲す沖積低地が同町川南の北方に於て、ゆるやかに南方に轉向する地の北側なる洪積臺上に位し、その標高約四十五米、比高は約三米を算する。（第一圖參照）

此の地は、東大人類學教室編纂の石器時代住民遺物發見地名表（第五版）に井荻町光明院境内として記載されて居るが、遺物散布の範圍は、單に光明院境内のみに限らず、同院西方の住宅地一帶、同南方の墓地とその西方なる荒地、及び道路を隔てゝ之に續く南側斜面畑地等に渉つて居るけれども、散布密度の最も濃厚なる地域は、前記荒地及び南側斜面である。本年三月初旬、筆者はこの附近を散策中、耕地整理の目的を以て開鑿された新道路の斷面の所々に、土器破片其他の遺物の包含せらるゝを認め、又壙塌上面に爐址とも考ふ可き燒土層の存在するを實見し、此地の發掘調査を計畫したるも、その實現を見るに先達つて荒地全體の土壤を削り取り之を以

列の中期に限られることを指摘した。

五、複節及び異條斜縄紋の諸型式に於ける存否を明にし、年代的意味あることを述べた。

六、縄紋の末端及び結束線が横位に走ることを述べ、併せて、結束線を有する型式を列擧した。

七、縄紋の最も普通な押捺手法について所見を述べ、次に帯狀縄紋の手法を細説した。後者の盛行する型式を新舊二群に大別した。

八、本篇は縄紋の調査が型式制定又は同定に役立ち得ることを示すことを主眼とし、原體の組織形態如何に關しては深く論究しなかつた。

には無いらしい。地方的に限られて居ると云つてよい。他の一つは遙に古い時代であつて、前者との間には型式の間隙があり系統關係はないらしい。陸前の室濱式、大木1式（甚だ多數）、關東の蓮田式の一部等がこれである。總て纖維混入が行はれ、內面條痕のない型式である。帶は水平。繩紋の押捺は橫位。前記第一の手法によつて口部から各帶毎に加へられたものが多い。第二の手法はないらしい。繩紋の末端は往々口に近い方の端に見られる。又この仲間では各帶が條の走行を異にする部分に分れ、一帶に二種又は二個體の繩紋が左右相接して居ることがある。これは前記の龜ヶ岡式には稀である。關係する繩紋の種類は、單節繩紋許りでなく、複節繩紋（大木）、異條繩紋（關東の蓮田式の一部）のこともある。

圓筒土器上層式及び下層式には結束のある帶狀繩紋はあるが、この種の結束なきものは無いらしい。前記の室濱式には兩方共ある。尙、大木7の型式にも兩者があるが、結束なきものは少數である。押捺は縱位のことが多い。この他關東地方の彌生式にも帶狀繩紋がある。橫位が普通であるが普通の繩紋に一小部分宛各種の方位のものを含む例があるから、その他の場合もあるかも知れない。結束のあるものは無い。又、河內國府の羽狀繩紋土器は、寫眞で見ると、橫位で、一帶が條の走行を異にする左右二部分に分れるものがあり、關係する繩紋は單節繩紋の根本的二種らしい。結束はない。この羽狀繩紋は陸前の龜ヶ岡式に伴ふ帶狀繩紋に比較され、又關東彌生式のものと關係付けやうとする意見もあるが、果して關係があるとすれば、私は寧ろ古い方の盛行期を指示したいと思ふ。

八　摘　要

一、斜繩紋の共通性狀を擧げ、條及び節の特徵によつて、これを單節、複節、無節、異節及び異條の五種に分類した。

二、單節、無節、複節の三種は、同一組織によるらしく、夫々撚られた纖維束、撚られない纖維束、撚紐を原料とするため、節の性狀を異にして居るものと推定した。

三、單節及び複節斜繩紋では、原料の纖維束に右撚り左撚りの二種があり、これが、條、節、等の性狀を支配するらしいことを想像し、これによつて兩繩紋を根本的二種に分けた。

四、各種繩紋の押捺の方位（縱位及び橫位）を規定した。そして型式について兩者の消長を表示し、縱位押捺盛行が繩紋式土器系

の帯狀繩紋が甚だ盛行して居る。帶は水平に走る。縦のものはない。各帯の繩紋は皆横位の押捺である。同一器面の各帯が一個體の繩紋であることは無いらしく、通常二個體の繩紋を認めることが出來る。そのうち、(一)單節繩紋の根本的二種がある場合が最も多く、(二)單節繩紋と無節繩紋の兩者、(三)單節繩紋の同一種に屬する二個體のものあることもある。第一の場合では、押捺が横位であるから、夫々右行する條と、左行する條を有する帯が生ずる譯であつて、兩者は通常交互に重疊し、所謂羽狀繩紋を形成する。第二の場合も同樣條の走行を異にする帯を含むことが多い。第三の場合では條は同方向に走り、羽狀繩紋をなさない。又第一第二の場合では條の同一方向に走る各帯は、條及び節の特徴、密度を同うし、同一原體の押捺によるものと思はれる。この種の羽狀繩紋は結束されたものゝ如く云はれて居るが、私はこの說に有利な事實を認め得ない。相隣り、互に條の走行を異にする二帯は條の數が一致しない（前述圓筒土器等の結束ある帯繩紋では通常同一である。しかし特殊な例外がある)。又、節の密度、性質も一致しないのが當然で、原料の纖維束の撚り方が既に異つて居る。（これは結束あるものにも見られるから直接の證據にはならない)。結束關係は全く見られない。その上、押捺が異時である證據はあるが、同時である證據はない。各帯が別々に押捺されたと見るのが適當である。

大洞C地點發掘土器の帯狀繩紋には次の二つの手法が見出される。

一、各帯が口部から下に順次に加へられる場合。各帯の一方の端は强く、往々他の帯を犯して押捺される。他方の端は淺く、不鮮明に終り、或は別の横帯の端に犯される。又、水平に走る撚絲又は纖維束の壓痕に接して居ることもある。このうち强く押捺される方の端には、繩紋原體の末端が見られることがあり、各帯を通じて口端に近い側にある。前記の如く、同一器面に二個體の繩紋があり、各帯はその孰れかに同定し得るのであるから、用ひられた原體の數は二個と見てよからう。

二、一旦繩紋(第一次)が普通の押捺法によつて加へられ、その上に、別の繩紋帯(第二次)が間隔を置いて數段加へられる場合。帯は第二次のものと、その間隔に殘つた第一次繩紋（元來は帯狀でない）との二種からなつて居る。この手法は第一のものと較べて、遙に少數である。

結束なき帯狀繩紋の盛行する型式は二大別することが出來る。一つは前記の龜ヶ岡式の諸型式（大洞B、C等）の如く繩紋式の末期に近い頃である。陸前では甚だ盛行して居るが、陸奧、羽後等の同式では少數らしい。この式の一部に並行する關東の安行式

る。これらの不規則があるに關らず、條及び節の密度はある部分では一定して居る。換言すれば、繩紋面はその繩紋に特有の性質密度を示す整正な部分の配合からなつて居るのである。若し器面の繩紋が全面、原體の直接同時の壓痕であるとすれば、如上の不規則は原體に歸されねばならない。しかしこれは考へ難い。私はそれは押捺に際して生じたものと考へる。今繩紋の整正な部分の石膏型を製作して、これを粘土に押捺して見ると、一時に捺された部分は整正であるが、異時に加へられた部分との間には條の交叉が生ずる。この狀態は上記繩紋面の不規則と相似たものである。實際の繩紋原體が、繩紋面を被ふに充分な程大きかつたとしても整正の部分を直接同時の壓痕とし、叉整正部の若干からなる繩紋面を同時でなく、順次に加へられたものと解釋することが出來る。如上の交叉を說明するために、原體が折り疊まれたと解することも可能である。しかし、折り疊むには原體が柔軟であることが必要であり、叉條の交叉する限界に、折目に相當する强い壓痕叉は粘土の隆起を生ずることが豫想される。しかし事實左樣な例は稀であつて、凹凸を消し去つた痕跡もない。

帶狀繩紋の二種　繩紋が狹い帶をなして數段叉は十數段にも加へられたる場合である。帶の方向は水平な場合が多いが垂直なこともある。相隣る二段の繩紋の條の走行が異る場合（羽狀繩紋）が多く、兩帶とも條が同方向のことは少い。この種の繩紋には二つの區別がある。その一つは帶と帶の間に前記の結束のある場合で、他の一つは斯くの如き結束の認められない場合である。

結束のある帶狀繩紋は押捺の手法に起因するものではない。圓筒土器下層式には數段の間に結束線のあるものがあるが、これは原體が既に帶狀になつて居るものであつて、押捺の方法は前記の普通の場合と變らない。この場合横に走る結束線が器周續いて居るならば、原體が筒狀をなして居る事を示す譯であるが、未だ確かな例を見て居ない。原體が筒狀であるか、平面狀のものであるかに就いては、條が不規則であり膨な普通の壓痕では確かめ難く、この種の結束線叉は、前記の末端線に依つて調査するのが適當と思はれる。圓筒土器上層式の帶狀繩紋は原體と押捺の兩方によつて生ずる。先にも述べたやうにこの式では結束は二帶間に限られて居る。帶の數は普通十數段にも達するが、これは皆一つの結束線を中心とする細長い繩紋原體を何度にも押捺したものである結束線は屢々食ひ違つて居つて、原體を土器に卷き附けた樣子をよく示して居る。帶のうち結束線でない端は、無紋の器面と境することもあり、隣りの帶の條と交叉することもある。この點は後述結束ない帶狀繩紋の場合と同じである。

結束なき帶狀繩紋　以上の場合と異つて、各帶間に結束の證據のないものである。陸前の龜ケ岡式土器に伴ふ粗製土器にはこの種

は、反對に全部右に曲る。相隣る二帶が同方向の時には、挿入される端は向き合ひになる。この條の先端の曲り方は前記繩紋末端(5)(6)例と同樣であつて、繩紋原體の根本的二種はこの點をも支配して居る樣に思はれる。

この種の結束は圓筒土器下層式中の細別CDでは全繩紋の半數內外を占めて居る。細別a、b、には稀又は皆無である。同上層式の古い方（中居貝塚A'地點土器を標準とする）には少數であるが、新しい方（同貝塚A地點土器を標準とする）には甚だ盛行して居る。このうち圓筒土器下層式では數帶がこの種の結束によつて連續して居る例もあるが、上層式には結束は二帶間にのみに限られて居る。結束線は器面で橫に走るのが常であるが、下層式では少數ながら縱に走る例（縱位押捺）がある。

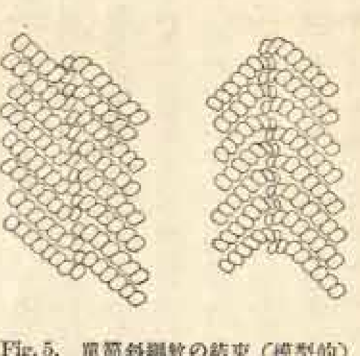


Fig. 5.　單節斜繩紋の結束（模型的）

陸前では室濱式では甚だ盛行し、繩紋の過半を占める。二帶間に限られるらしい。凡て橫位。大木2の型式にも少數ある。二帶間、橫位の例が知られて居る。纖維以後の型式では大木7を舉げることが出來る。押捺方向は主として縱位。通常二帶間のみの結束である。關東地方ではこの種の結束の確實な例を知らない。

七　押捺手法、特に帶狀繩紋に就いて

繩紋が土器面上に於いて占める位置には種々の場合がある。又同一面上に現はれる繩紋の種類は一種とは限らない。同一種であつても個體の違つた繩紋が並存することがある。稀には斜繩紋と撚絲紋とが並存することもある。かくの如く、押捺の手法は雜多である。しかし同一個體の斜繩紋原體が土器外面の全部又は廣い部分に加へられるのが最も普通の場合と云へやう。又特殊な押捺の一種に羽狀繩紋（帶狀繩紋）と云はれるものがある。これも亦通常土器の全外面又はその大部分に加へられて居る。次に通常の押捺と、帶狀繩紋の押捺に就いて一言しよう。

普通押捺方法　同一の繩紋原體は、條節の微細、特徵、密度等が一定して居つて、これによつて作られた繩紋面も亦同樣である。しかし、この種の繩紋面は一見整正に見えるが、同一條が上限から下限まで續くことは少數で多くは中途で消失したり、他の條と交叉して終つて居る。條の走行も部分によつて多少異なつて居つて、稀には水平位になり、又は逆に傾いて居ることとさへあ

走る末端は未だ經驗しない。末端の形態には二三の種類がある。圖は單節縄紋のみから例を取つたが、複節縄紋にも類似の例がある。(1)(2)では各條がこの端で連絡し、(3)(4)は二條宛連續して居る例である。(5)(6)は各條が末端に於いて折れ曲つて、條間に入り込んで居る。(1)(2)の如きものは陸前の所謂龜ヶ岡式複土器に伴ふ粗製土器の縄紋に往々見られ、特に羽狀縄紋の各縄紋帶の上限に多い。(3)は陸前室濱貝塚、(4)は磐城の三貫寺貝塚出土であつて、類例は少い。(5)(6)の如きものは陸前の大木1又は室濱の型式（共に纖維を含み、內面に條痕のない土器を主とする）にあり、關東の同種の土器(蓮田式)にも見られる。これも亦羽狀縄紋の各帶の上限に比較的多く、又、この種の末端が狹く、數段に加へられる例（大木1、及び關東蓮田式の一部）がある。條の末端は右撚の纖維からなる縄紋原體では右に、左撚りの場合では左に（壓痕ではその反對の方向に）曲つて居る。

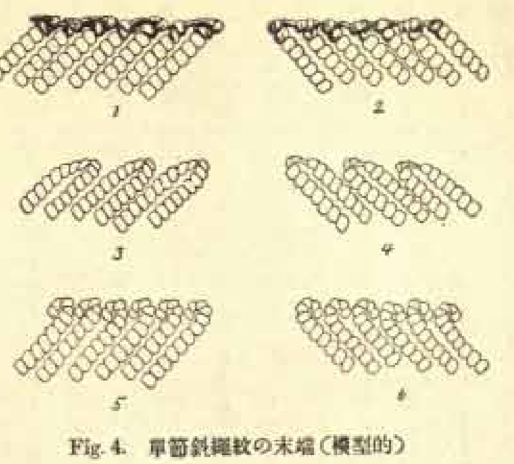


Fig. 4.　單節斜縄紋の末端（模型的）

斜縄紋原體の結束　所謂羽狀縄紋の各帶の間には結束があると云う議論は屢々聞いて居つたが、私にはさうは思はれなかつた。しかし、陸奥相内貝塚の圓筒土器上層式の土器を調査するに及んで、初めて縄紋帶間に疑ひもない結束ある實例を發見した。その後間もなく陸前長部貝塚の土器にも同種の縄紋があることを知り、爾後新型式の發見と共にこの地方の數型式の土器にも存することが解つた。しかし、これは從來注意されて居つた龜ヶ岡式土器に伴ふ羽狀縄紋には絕無である。

これらの諸例では、一つの縄紋帶の各條の末端は、相互にこれに接する他帶の條間に挿入されて居つて、明らかに一種の結束が成り立つて居る。結束の線は直であつて、この線を橫に置けば、上下兩帶の縄紋は橫位である。この種の結束は單節縄紋の兩帶間のみならず、これと複節縄紋異條縄紋、無節縄紋との間にも見られる。又兩帶の條が異方向な場合が多いが、同方向のこともある。第五圖の例は單節縄紋の例である。右傾する條の挿入される部分は上端で結束する時は右に曲り、下端で結束する時は左に曲る。卽ちS字様である。これに反して左傾する條ではこの反對であつて、上端では左に下端では右に曲り、Z字に譬へることが出來る。兩帶が條の方向を異にする場合には、その角が左向の時は結束線の端は兩帶とも右に、この角が右を指して居る時

て置く。

無節斜縄紋　條が節に分れて居ない場合である。單節斜縄紋のうち節の鮮明でないものとは混合され易い。條に纖維の走行の明らかなこともあり、全く見えないこともある。前者の場合に就いて觀察すると、纖維の走行と條とがなす角度は、丁度、單節縄紋の節が條となす角度と略同じである。そして、條に對して右傾するものと、左傾するものがある。私はこの種の縄紋原體は撚られない纖維束によつて、單節の場合と同じ工程が行はれ、それがために節の結成がなく、又纖維束の走行が、後者の節と同じ角度に傾いて居るのではあるまいかと思ふ。稀にこの斜縄紋には淺い節の輪廓を伴ひ、單節縄紋との移行を示すものがある。條に於ける纖維の走行が右傾するものと左傾するものとの二種類があり、又押捺方向にも横位と縱位とがある。この種の縄紋は一般に少數であつて特に盛行する型式はないらしい。又、全く存在しない型式もある様である。押捺の方向は他の斜縄紋と同じである。

異節斜縄紋　同一條の節が同形、同大でない場合である。單に僅少の相異があるだけのものは、單節又は複節の縄紋の特異例として取扱つて差つかへない。併し特に異節と呼ぶものは、節の形態、節內の纖維の走行が異る例であつて、非常に稀である。陸前室濱貝塚の一例は最近齋藤忠君によつて紹介された。(東北文化研究二卷四號九〇頁) その他の例については尙調査の上報告したいと思ふ。

異條斜縄紋　一續きの縄紋に於いて條が太さ、節の狀態等を異にして居る場合であつて、一般に稀である。條の太さの少し許りの相異は特にこの種のものに入れなくてもよい。異條斜縄紋の中には幾多の變化があり得るが、最も著明な一群は、條が一つ又は二つの間隔を置いて正しく單節又は複節であつて、介在する條は撚絲又は纖維束に比し得る場合である。この種のものは、殆んど古い型式のみに見られる。陸奥の圓筒土器下層式、關東の蓮田式等、纖維を含み、內面に條痕のない型式（その總てではないが）に見られる。

六　斜縄紋の末端及び結束

縄紋原體の末端　土器面上の縄紋の限界を觀察すると、稀に原體の末端、邊緣を示す様な部分を見當てることがある。第四圖はその數例である。この末端は常に條と斜行する方向に一直線をなし、條を横位に置くときは、この末端線は横に走つて居る。縱位に

り、その撚糸の節が、この繩紋の節のうちに細節として殘つて居るものだらうと思ふ。（第三圖參照）

この種の繩紋にも根本的二種を分つことが出來る。右撚りの纖維束は節に於ける細節の左傾、條に於ける節の右傾と伴ひ、左撚りの纖維束は節に於ける細節の右傾、條に於ける節の左側と因果關係を持つて居る。單節繩紋の場合と同樣に押捺の方向を次の如く定める。

	纖維束	細節（原體）	節（原體）	條（原體）	條（壓痕）
横位	右撚	左傾	右傾	左傾	右傾
	左撚	右傾	左傾	右傾	左傾
縦位	右撚	左傾	右傾	右傾	左傾
	左撚	右傾	左傾	左傾	右傾

Fig. 3.　複節斜繩紋の二種及び押捺方向
a 右撚り b 左撚り 1.纖維束の走行 2.同壓痕 3.撚糸 4.同壓痕 5.横位 6.同壓痕 7.縦位 8.同壓痕

私が調べた範圍では、ある型式に於けるこの種繩紋の右撚と左撚の比例は當該型式の單節繩紋のそれと同じである。又押捺方位も亦一致して居る。從つて右撚りが多い。そして横位押捺のある型式では、單節繩紋の條が左傾するものが多いが、併存する複節繩紋では反對に右傾するものが多い。

複節繩紋は單節のもの程普通ではなく、繩紋式土器中期以前の諸型式に見られる。しかしその各型式に系統的に連續して存する譯でもなく、又甚だ盛行する型式もない。纖維の混入ある、內面に條痕のない型式にも存し、又所謂厚手式の仲間のうち大木8、9、10、に並行する型式には關東から陸奥まで各式に存し、爾後跡を絕つて居る。この終末は丁度縱位押捺盛行の終末と相一致して居るのは興味深い。

五　その他の斜繩紋

斜繩紋には以上二種の他、無節、異節、異條の種類がある。本稿はこれらの詳細を盡すのが主眼でないから、簡單な記述に止め

● 加曾利E式	● 大木8	◐ (中居貝塚III a)
● (未命名)	● 大木9、10	● (中居貝塚III b 材料少量)
○ 堀之內式	○ (未命名)	◐ (未命名、相內第一地點上層)
○ 加曾利B式	○ (未命名)	? (未命名、調査材料少量)
○ 安行式(眞福寺式)	○ 大洞BCAA′	○ (略々陸前と同じ、所謂龜ヶ岡式)
(彌生式)	○ 桝形式	

この表を見ると、横位の押捺が始め盛行し、次に縦位の押捺がこれに代り、後再び横位の盛行して居ることが解る。中頃に縦位の押捺があることは注意すべき事實であつて、少量の土器〝例へば人骨に伴存するもの等〟の凡その年代を決定する場合に、役立ち得るであらう。又この期間のうち關東の加曾利E式、大木8式、陸奥の中居貝塚第三の型式は互に酷似して居つて、並行して存在して居つたものと思はれる。この式の直前の土器を見ると、陸奥の圓筒土器上層式(中居貝塚第二の型式)に於ては縦位の押捺は稀である。又關東の阿玉臺式には諸磯式終末以來の縄紋の稀少化が認められ、押捺方位は不明である。陸前の大木8型式の直前卽ち大木7式に於いては縦位押捺が甚だ多い。斯樣な所見は縦位押捺盛行の源泉を示すかの如く見られる。又一方縄紋縦位盛行は大木8に並行するもの以後一二の型式に續いて見られ、然る後、横位押捺に置き代へられる。この限界は丁度所謂厚手式と薄手式の限界にも當り、又後述の如く複節縄紋の終末と相一致して居る。唯陸奥に於いては關東の堀之內式に並行する土器型式(相內貝塚第一地點上層の材料)於いても約半數に遺存して居つて、縦位押捺盛行の終末がこの地方に於いて遅れたことを示すやうである。

四 複節斜縄紋

複節斜縄紋の節は更に細い節に分れて居る。節の中の細節は二個又は三個が最も普通であつて、稀にはそれ以上に達する場合がある。二個の場合には細節は同大であるのが常で、一方が淺く押捺される事もある。三個の場合には中央の一個が大きく、兩側のものが淺く押捺されて居ることが多い。細節は節に於いて右に傾く場合もあり、又左に傾く場合もあり、單節縄紋の節の中の纖維の走行と並行して居る。私はこの種の縄紋原體は、一旦二子撚にされた撚糸を用ひて、單節斜縄紋と同じ工程が行はれたものであ

纖維束		原體に於ける條	器面に於ける條
横位	右撚り	右傾	左傾
	左撚り	左傾	右傾
縦位	右撚り	左傾	右傾
	左撚り	右傾	左傾

この二種の押捺方向は土器型式によつて比例を異にする。例として大洞貝塚C地點の土器と、大木貝塚（型式大木8，9，10）の土器を擧げよう。大洞C地點の土器の縄紋（羽狀縄紋を除く）は、纖維の右撚りのものが多く、左撚りのものが少い。右撚りのものは通常、條が左行し、左撚りのものは右行する。從つて概見して條の左行するものが多い。卽ち、大洞C地點に於いては、横位の押捺が盛行して居るのである。大木貝塚土器の單節縄紋は、右撚りのものが多く、左撚りのものが少い。この點は大洞Cと同樣であるが、概見して條が右行するものが甚だ多い。精細に調べると、右撚りのものは條が右行し、左撚りのものが左行して居る。卽ち大木に於いては縦位の押捺が盛行して居る譯である。

縄紋土器諸型式について縄紋の押捺方向を注意して見ると前記大洞Cの如く横位が盛行するものも、又大木8等の如く縦位が主な場合もある。これを略年代順に並べて見ると次の樣になる。同じ行の型式は三地方の略並行した型式である。○印は横位，●印は縦位の主なことを示し，◐は兩者が相半ばするものである。?は不明なことを示す。

關東地方	陸前	陸奥
三戸式（縄紋以前）	槻木1（縄紋以前）	
子母口式（同）		
? 茅山式（縄紋稀）	○ 槻木2	
○ 蓮田式	○ 大木1、2、室濱、	◎ 圓筒土器下層式（中居貝塚I）
○ 諸磯式	○ 大木3、4、5、	（遲滯）
? 阿玉臺式（縄紋稀）	● 大木7	○ 圓筒土器上層式（中居貝塚II）

場合では左傾する。従つて、節內纖維の右傾、節の條に對する左傾、は、纖維の左傾、節の右傾と同樣、因果關係を保つて居るのである。（第一圖參照）

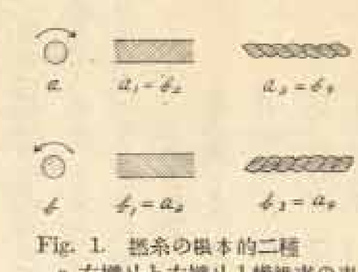


Fig. 1. 撚糸の根本的二種
a 右撚り b 左撚り 1 纖維束の表面 2 同壓痕 3 撚糸の表面 4 同壓痕

斜繩紋の節も、撚糸程著明ではないが、條に對して多少傾斜するのが常であつて、左傾することと、右傾することとある。そして節のうちに一定の方向に走る皺襞が認められることが多い。この皺襞は纖維束の表面に於ける縦走する皺を示すものと考へられる。今、この皺襞の走行を見ると、節が條に對して右傾（卽ち原體に於いて左傾）するときには、この皺襞は左方に（原體では右方に）節が條に對して左傾する場合には、右方に傾いて居る。皺襞が節に於いて右又は左に傾くのは、節を作る纖維束が、右撚り又は左撚りされたことを意味して居る。卽ち單節斜繩紋の節にも右撚、左撚りの二種があつたことになり、撚糸の場合と同樣に、節內纖維の右傾と節の條に對する左傾、節內纖維の左傾と節の條に對する右傾とは相伴ひ、夫々纖維束の右撚又は左撚りに原因して居る。單節斜繩紋も亦、撚糸と同樣、節をなす纖維束の撚り方によつて、根本的二種に分たれる譯である。（第二圖參照）節のうちに往々皺襞の方向の不明なものがあるが、これは多分、壓痕に見えないだけで、事實は根本的二種の孰れかに屬するものであらう。

纖維束の右撚りと左撚りの比例は土器型式によつて異つて居つて、型式の特徵の一つに數へられてもよい。一般に右撚りのものが多い型式が多いが、反對の場合もある。又後述の如く羽狀繩紋に於いては特殊な關係があるから、兩者の比例を決定するには細心の注意が必要である。

三　單節繩紋押捺の方位

繩紋原體の根本的二種が定まつたから、次に押捺方向を規定しやう。假りに次の標準を用ひる。（第二圖參照）

Fig. 2. 單節斜繩紋の根本的二種及び押捺方向
a 右撚り b 左撚り 1 纖維束外面 2 同壓痕 3 橫位 4 同（壓痕） 5 縱位 6 同（壓痕）

後者を異條と呼ぶことにしよう。同條の繩紋には、節の特徴によつて、前記の四種の別がある譯である。これを、無節斜繩紋、單節斜繩紋、複節斜繩紋、異節斜繩紋と呼ぶことにしよう。異條の斜繩紋には必ず單節又は複節の條が一定の間隔に存在する。そしてその間には撚絲、無節撚絲卽ち纖維束、無節繩紋等が一條又は二條挿まれて居る。從つてこれらの組合せは多數に上り、一々名稱を付けるのは煩瑣に堪えない。又一般に稀なものであるから、總括して異條斜繩紋として置く。

二　單節斜繩紋の根本的二種

單節斜繩紋の各條は器面に於いて斜行するのが常である。この繩紋を精査すると繩紋原體の末端線らしいものが稀に發見されるが、その場合に於ても條はこの線に對して斜に走つて居る。器面で條が斜行するのは、原體を横又は縱に押捺したためと思はれる。器面で條が垂直又は水平になつて居ることは局部的には往々あるが、これは押捺方位がその部分に於いて斜位になつた場合であらう。又全面に水平又は垂直に加へられることは稀有であつて、これは原體の斜位壓痕であるか、それとも條が縱又は横に走る別種の原體によるものであるかに就いては、尙考究の余地がある。

與へられた斜繩紋が原體の横位の壓痕であるか、又縱位の壓痕であるかを判別するには種々の觀察が必要である。繩紋原體の條が一定の方向に、例へば、左上から右下に走つて居るならば、これを側から見れば右上から左下に走つて居るに相異ない。同樣にこの原體によつて生ずる斜繩紋にも、縱及び横の押捺が可能であるから、條の右傾するものと左傾するものの二種が出來る理である。若し原體に條が右傾するものと、左傾するものの二種があるとすれば、そして事實あると認められるのであるが、押捺は夫々右傾するものと、左傾すものの二種の繩紋を與へることになる。從つて繩紋原體の種類及び押捺の縱横を判別するのは一見困難となる。併し、幸ひ繩紋原體の二種は、條及び節、更らに節に於ける纖維の走行を異にして居り、そして、それがために存在が知られたものであるから、與へられた繩紋を觀察してこの二種に分類することが出來る。從つて同時に押捺の方向も判定することも可能である。この關係を簡單に說明しよう。

二子撚の撚絲には右撚りと左撚りの二つの場合がある。右撚りの撚絲の節は條に對して左傾し、左撚りの撚絲の節は反對に右傾する。壓痕で見るとこの關係は正反對である。次に節に於ける纖維の走行を見ると、右撚りの場合では節に對して右傾し、左撚り

斜行縄紋に關する二三の觀察

山內清男

所謂縄紋には文字通りの縄ばかりではなく、種々の組織されたものの壓痕が含まれて居る。假りにその範圍を限定すれば柔軟な纖維束を用ひて作つた諸工藝品の壓痕と云ふ他ない位である。網代、簾、莚などで作つたものはこのうちには入れられて居ない様である。この意味に於ける縄紋一般は、夫々原體の組織によつて、更に分類されるべきものであつて、私は明に撚絲の壓痕と認められるものを撚絲紋と云ひ、その器面に於ける狀態又は原體の結束等の狀態によつて、網様、木目狀結束等の名を冠して用ふることにして居る。しかし所謂縄紋のうち最も多く見られ、又年代的にも連綿として續いて居る種類は、撚絲卽ち縄の壓痕ではなく、斜行縄紋又は斜縄紋とも名付くべき一群である。

一　斜行縄紋の分類

斜縄紋は概して次の特徴をもつて居る。(一) 條々は器面に於いて（後述の如く恐らく原體に於いても）斜行して居る。(二) 各條は規則正しく、密に並行して居る。(三) 條は通常節に分たれるが、節が條となす角度は、撚絲の場合よりも直角に近い。このうち條が斜行し、密に並ぶことは、原體がある種の組織を持つことを示し、條に於ける節の狀態は(一)(二)の條件と共に撚絲とは異ることを示して居る。しかし、私はこの原體の組織如何には觸れずに壓痕を詳細に觀察し、分類し、併せて押捺手法についての所見の一班を報告するに止めやう。

斜縄紋の條には節のあるのが普通であるが、稀に節のないものがある。同一條に於ける節は同大、同形なのが常であるが、極めて稀に節が交互に形を異にして居ることがある。又、節が單なる纖維束の一小區分であることもあり、更に小さい節に分れて居ることもある。斯くの如く條には無節、單節、複節、異節の場合があるのである。次に、一續きの縄紋に於いて隣り合ふ各條の太さ節の性質が同樣なのが普通であるが、稀には一條置きに又は規則正しい間隔に於いて異つて居ることがある。假りに前者を同條、

等の痕跡すら止めざるものがある。此の如き遺跡に對しては、今日、これを必然的に發見すべき方法なるものが、殆んど無い。從つて、其過半は偶然的發見に過ぎないのであるから、これに對する理想としても、方法發見なき以上、これを低下せざるを得ないのである。又他の一面に於ては、文化相研究なるものが、必ずしも研究室机上のみに止まらず、實地調査を要求して居る。從つてこれに伴ふ勞作も亦、大であつて、學者として、其腦力に止まらず、體力をも多く要するのであるから、能率の點から見ても、中々負擔が重い。加ふるに我國新石文化の如き、萬餘の遺跡を存するに於て、これを調査し盡すと云ふことは、到底僅少の學者と、年月とで出來るものではない。從つて目的論としても、一人の學者や、僅少の年月を單位として考へて居るのではない。加ふるに今日の樣な研究方法では、一遺跡の調査すら、數年を要すべきものを存する故、理想と現實とには餘りに大なる隔てを認めざるを得ない。それ故方法論としても、この目的達成に關し、最も正確にして迅速なる方法を講究せらるゝことが必要なのである。それかと云ふて、或傾向の如く、勞少なく功大なるを望み、往々それが、所謂奇道の捷徑とでも云ふた、道を歩むことも無い。目的が遼遠であるにせよ、正しい大道を進みたいものである。

　これを要するに、史前學には史前學として、前述してきた如き、高遠なる理想を有し、この理想に一歩なりとも近づく可く、今日私共學徒が精進して居るのである。決して、無目的に、仕事に追從して居るのではない。この自覺を、一層明にする爲に、かくこれを述べたものである。（昭和五年五月四日、齒痛を忍びつゝ識す）

せらるゝもので、この兩目的達成の手段に於ては、又別に考へねばならない。こゝでは、目的論として、時間、空間兩目的が、互に深き關係あるに拘はらず、兩者を取締め、しかも、個々に存在する總ての文化群に對し、單に個々の究明のみに止まらず、夫々文化の相關々係にまで及ぶ所の、全史前文化探究が、史前學研究の根幹目的であると云ふことを述ぶるものである。

五、目的論と方法論との關係。

以上で一通り目的論の大要を述べた心算であるが、更にこゝに目的論と方法論一部の關係に就て萬一の誤解を恐れ、附加するものである。勿論方法論は方法論として、他日私の考を開陳はする考ではあるが、取り敢へず、目的論の一部に關連したことを述べて置く。

今迄に目的論として、全史前文化の究明と云ふて居るのは、史前學として研究可能なる範圍に於ける全史前文化なのであつて、史前學上よりの研究範圍を越へて、他の姉妹科學によつて、究明せらる可き、史前文化の研究範圍にまで亘つて、要求して居るのではない。總ての史前文化は史前學獨自の研究によつて、研究し盡さる可きものでないことは、已に本誌上に述べて居る。（第一の四、史前學研究と年代及び民族問題、第一二項、及び第二圖參照）而して、史前學なるものが、私の述べて居る定義の如くんば史前學は、當時の事實、事物に基いて史前文化を研究する科學である。即ち當時の事實、事物なる研究上の對象を定められて居るのである。從つてこの對象研究範圍より研究せらる可きもので、決して無制限ではない。前述してきた樣な、目的を達成するにしても、この範圍をを越へることは、立前ではない。この對象限定は、亦一方に於ては、研究方法の限定でもある。假に事實事物によらざる史前文化の研究法が存するとしても、それは狹義の史前學研究の範圍外にある。從つて通常の場合は、研究法に於ても限定せられたる對象に對しての研究法でなければならない。これを今少し強く云へば、史前學なるものは、方法を限定せられたる研究なのである。それ故、目的論としても常に、限定せられたる方法を以てした、可能の最大限を理想とすると云ふ樣に、方法論よりする限定を以て、標準としなければならない。時間目的に於ても、其研究方法が考出せられなければ、理想に向つて進み得ない。」これが亦、容易に出來るものでないことは、今日史前文化事實の研究狀態に照して見れば、了解も出來よふ。特に文化始原研究の如きは、更に困難なるものがある。空間目的に於ても個々の遺跡調査の如き、其種類によつては、深く地中に埋沒して、地表に何

不備の存するものが多い。從つて單に遺物學研究に偏したからとて、排撃する必要なきのみならず、或る點は助長もせねばならない。只私の謂はんとする所は、獨り遺物學のみよりして、文化相全般が究明せられ得べきものではない。其重要さは充分に認めると共に、他の一面に於てこれのみより起る不備も認めらるゝと云ふにある。而して、文化相內容の究明理想としては、個々の遺跡の性質究明、其遺跡と出土遺物との關係、而して遺物學研究との綜合によつて、より確からしさ多き歸納を生るゝことを期待するものである。

以上各個に就て述べてきた、空間目的なるものを、綜合して見ると、夫々の取り出だされたる文化群に就て、夫々其文化相を明にすると共に、第二、第三對象文化の範圍を進め、夫々其相關々係も明にして、發見存在する總ての史前文化に行き亙るに及んで理想の終局に到達するのである。卽ち空間目的達成となるのであるが、現況から云へば、この大理想に對しては、餘りに距離があり、今より何世紀の後にこれに近き得るものか、想像もつかないが、理論上から云へば、この大理想に對し、決して到達不可能のものではない。

四、時間並に空間目的の綜合。

時間並に空間目的に對し、夫々各個に就て述べてきたが、兩者間には、互に相離る可からざる相關々係を有し、兩者をかく切り離して、各個に述べる方が、寧ろ無理とも云へる程であるが、錯雜を防ぐ一手段として、かく述べたのである。今こゝにこの兩者を綜合すべき機に達した。時間目的としては、文化發生より終局までを、一貫して時の經過を追ふて、其文化修行の鮮明を要求し空間目的としては、全文化相の判明を望んで居る。而して、文化なるものが、時の經過に從つて、修行するものであるから、空間目的に於ける文化相は、其時期時期に於ける文化相の綜合でなければ、時を追ふた、全經過が生れ出でゝこない。從つて、時間的に細く階梯の編年せらるゝに從つて、文化階梯夫々に於ける文化相が、より明瞭になる可きものである。一方に於ては、文化圖がより明でないと、果してそれが始原文化であるか、或は編年上に落ちがないか、又は終局文化は何處に於て見出すか等、時間目的からも空間目的が鮮明でないと、研究進展を見ない等のことを生じ、兩者相平行して、究明せられないと、欠陷を生ずるに至ることがある。勿論この兩者相互關係は、夫々の文化群に於て、一樣ではない。特に其資料存在狀態に於て、彼れ是れと、研究法が決定

方相研究には、より深く自然環境等が、明にせられなくてはならなくなる。

4。**文化内容**（Kulturinhalt）。文化内容と云ふても、考へ方によつては、甚しき廣狹の差を生ずる。考へ方によつては前述してきた諸件も含まれ得るが、こゝでは、外的關係を除いた、主として個々の文化資料存在地に就て先づ見てゆく。これ亦、遺跡學から見れば、所謂、個々の遺跡に當るもので、其個々の集團範圍が、文化圈であり、其分布密度大なる所が中樞ともなる。こゝでは基點文化内容とでも云ふたら、より明に云ひ得るとも考へる。即ちこの個々の遺跡なるものが、總ての基礎分子を形成するのであるから、この内容が亦、全般の文化相の基礎ともなる。從つて、これ等遺跡の性質如何を問はず、夫々其内容が究明せらるゝことが、最も要求せらるゝ所であつて、一文化の研究理想から云へば、この文化を含む、總ての遺跡が完全に研究し盡された結果に於て、始めて、其對象文化として、其最大内容が調出せられ得るものと云へよう。又これを研究の立場から見れば、一遺跡づゝ研究せられて行き、其研究三角網が、全文化圈を覆ふに至らんとする理想を有するものである。更に遺跡個々の性質研究に就ても、言ひ度き多くがあるが、これ亦其詳細は他日に讓るも特に文化研究の立場からして從來動もすると、其研究歸納が、民族論や絶對年代論等、これ亦、所謂史的觀察に引き付けらて居るものではないか。研究を要すべきものがあり、文化研究としては、尚多くを、當時の所謂生話様式（Wirtschaftform）に對し、究明せらる可きものと考へる。

註四。生活様式の復原に就て。

生活様式なる言葉が、果して上述の獨語に當るか、否かには、更に研究もして見るが、こゝで生活様式と云ふて居るのは、史前住民が、果して如何なる生活を營んで居つたのか、これなかく複雜したものである。彼れ等の生活狀態も、其文化により、其環境によつて、必ずしも一樣ではあるまい。個々に精しく見れば、見るに從つて、其差も生じ、終局に於ては、人々の個性までも發揮せらるゝものが、存在したことも、理論としては、肯定せられ得る。この生活に就ての種々相が、所謂生活樣式であつて、其内にも、其一部である、狩、漁、農、牧等の所謂生業樣式もあれば、衣食住とでも云ふた、所謂日常樣式なるものも見らるゝ。

これ等の復原によつて、始めて、文化内容がより鮮明となり、引いて文化相を究明することになるのである。從つて史前學上の研究歸納も、先づこれに向つて行はれなくてはならない。然るに今日、一部に於て、この點に着意せらるゝもの尠ないことを遺憾と考へる。

更にこの個々の遺跡に於ては、遺物を包含して居る。この研究、即ち遺物學たるものが亦、遺跡學と相對して重要研究要素をなすことは、改めて述べるまでもない。而して現況に於ては、我國の如き、或る傳統によつて、史前學として、其研究對像が、餘りに多く、遺物學に傾いて居ると云ふ感を催すものがある。勿論文化相を究明するには、遺物學研究が重要であり、且つ今日、其不足

彌生爾文化を存するのみであるから、相互交雜した所で、各々の文化特異相が比較的明であるから、其判別は、通常困難でない。從つて、この文化圏問題は、より簡單に取扱ひ得るのである。然るに、四周特別に境界を畫するもののなき、大陸平地地方に於ては、この文化圏が奈邊に及んで居るのか、これを知ることが、特に要求もせらるゝ。又數文化錯雜存在する場合にも、悉く錯雜して居るのか、或る地方に、單文化のみ見るのか等、この文化圏問題が、より必要を生じもしてくる。それ故、本土に於ける研究が、一歩なりとも、大陸に伸びる日、卽ち本問題の要求がより高くなることを、豫め覺悟して置かねばならない。又一方に於て、島國文化大陸文化の相違と云ふことにも、連關してくる。

2　**文化中樞**　（Kulturzentrum）。文化圏に連關した一問題は、この文化中樞の探求である。これ亦前述したと同樣、これを遺跡學から見れば、分布密度の問題となる。この文化中樞は、必ずしも悉くの文化に、存在するとは限らない。又一口に文化中樞と云ふても、各文化一樣でもない。要するに一文化内に於て、最も發育した文化の比較的集在する地區を指すのであるから、漠然たるものに過ぎない。たゞ一文化研究に當つて、この文化中樞を研究すれば、比較的迅速容易に、其文化相の概念を捉へ得る。それ故、一文化相の準據を得る爲には、文化中樞の調出が用立つ。一面に於ては、前述の文化圏との相關々係に於て、中樞發見は、其文化相研究の核心をなし、文化圏の範圍、文化修動の方向、次に述べる地方相の比較基底等これによつて、研究の歩が進められ得る。又この中樞内部の研究に於ては、住民相互の交渉關係に就ても考察せられ、引いて住民間に於ける統制乃至は、集團樣式等にも觸れ得べきものを存する。從つて、これ亦其景況が明なるを望まるゝのである。

註三。文化中樞の一二例。

歐洲舊石文化に於ては、殆んど其大部が、中佛にあり、一部が佛西國境ピレニー地方にある。それ故、中佛ドルドニュのベゼール溪谷地方の如きは、中樞中の中心とまで稱せらるゝ程である。我國縄紋文化に於ても、關東及飛信山地方に其内の或るもの、中樞をなし、同樣に東北地方にも、ある中樞を見て居る。彌生式に於ても北九州の一部、乃至は山陰一部に、中樞を見、更に細く見て行くと、各地に小中樞の散在するものがある。

3。**地方相**　（Lokalfazie）。　同一文化に屬する範圍内にあつても、局部的に夫々の地方地方に、獨自の特色を有することがある。これが地方相と稱せらるゝものであつて、この研究が充實して、綜合せらるゝ文化群の文化相が、より明に寫し出さるゝものである。又この地方相によつて、夫々地方地方の民族性の反影も見られ得るし、一方文化中樞と對比して、文化進展の相違も考察せらるゝ。今日と雖も文化中樞をなす大都市と、交通不便な田舍とでは、如何に其相違の甚しいかに思ひ合せて見れば、この地方相問題は、容易に肯定出來よう。而してこの地方相なるものが、特に交通不便な地方に於て、より明瞭に現れ得るものであるから、地

（10） モンテリユス編年は、（8）の各書の外、拙稿、北歐の巨石墳、人類學雜誌、第四一の九、及び北歐の石斧編年、同上、第四一の十參照。

三、史前學の目的と空間關係

今、時に關して見たと同様の立場に於て、これと對應する空間關係に就て見て行く。この空間關係としては、史前學研究對象の存する限り、其場所の如何をとはず、廣く各地に亘つて、對象面とこれに伴ふ深度とを有して居る。從つてこの全地域に亘つて、如何なる種類の文化が、如何樣に存在したのであるか、これを知らんとする理想が存する。この大理想を更に分解して、夫々個々の文化郡を對象とするに於て、ここに其個々に就ての理想を生ずる。卽ち大局より見れば、第二次的理想とも云ひ得よふ。この第二次的理想としては、其取り出されたる一文化群に對し其文化相を明にせんとするものであつて、これ等個々の文化相悉くが理想の如く明となり、更にこれ等を綜合せらるゝに於て、第一次理想と合致すべきものである。それ故、今より、この個々の文化相に關した理想を、更に分辨研究して行くことゝする。この文化相の研究に就ては、各方面より、各種の觀方も存することゝ考へるが大約外部より內部に向つて、文化圈、文化中樞、地方相、文化內容等の諸問題に分つて、述べることゝする。

一。**文化圈**。（Kulturkreis） 一對象として、取り出だされた某文化に於て、それが如何なる地方に於て、幾何までの範圍に亘つて、其文化を見たのか、これを其文化自身を立前とすれば、其文化の普及範圍、卽ち文化圈なるものを明にしようとする一理想が存する。又この文化圈なるものは、他の意味に於て、遺蹟なるものを主體として考へるに於て、これが分布範圍とも云ふことが出來る。この文化圈がより明にせらるれば、せらるゝに從つて、其文化全般に對し、其文化相を明瞭ならしむる一方法であると考へる。一面これによつて、資料の增加も可能であり、以下述べんとする諸相に對する準據ともなり、他に他文化との交涉或は姉妹學方面に連關して、其文化の存する自然環境の研究のより明確等、文化圈鮮明が文化相究明に對する一要素をなすものである。それ故、これを明にせんとする理想も亦、生ず可きである。

註一。文化圈にする助說。

この文化圈問題は、これな白紙的に見て、餘り重要な問題とも見られない樣に、考へられもする。我國史前學研究に於て、特に然りである我國本土の如きは四周海である以上、この文化圈に對しては、四周大陸接觸地方の外、特に考慮な要さない。又文化內容に於ても、縄紋及び

き付けられたのではなく、史前學は史前學として、其相對編年の精度を、絶對編年に近くまでの精度に要求するに過ぎない。これを換言すると、史前學上可能の範圍に於ける各文化階梯の、編年時差の短縮を望むものとも云へよう。

更に注意を要すべきことは、こゝに述べて居る編年設定なることは、大局上に於て、一般的のものを指して居るのであるから、或る局部的編年になると、色々複雜した關係の存するものもある。又夫々の文化階梯によつては、其特異相に從つて、編年方法、編年精度の要求にも、相異ものがあり、決して全文化を通じて、一律一樣の要求が存するわけではない。又これ等各個の文化に於ては勿論、其大局に於ても、常に文化發生、並に文化終局なる兩時端に於ける、研究も亦、重要なる位置を有するものである。

これを要するに、史前學としての時に關した理想なるものは、前述した、各文化階梯を通じ、其文化發生より文化終末に至るまでの間、より細い梯尺に於て、正確を失せざる範圍にあつて、其編年時差を短縮すると共に、其全文化移行を明にするにある。而して、この理想に到達せんとする期待を、時に關した目的と、考へるのである。

（1）史前學として、對象となり得る、文化始期問題に關しては、拙稿、史前學と石器時代研究、本誌、二の二、第一〇三項參照。

（2）同樣、最下限問題に就ても（1）の稿、第一〇五項參照。

（3）史前學上の年代觀が、史的年代觀に引きづられた最もよい一例は、拙著、歐洲舊石器時代、（考古學講座、第七項、アール所載、歐洲舊石（氷河）時代質年代一覽表がある。これで見ると、同じ歐洲氷期に對し、相當の學者達の觀察の差、最大百餘萬年もあるから、或る意味では、標準尺にはならない。勿論こうしたものは、其個々の年代觀の基礎に對する吟味な必要とするものであるが、本論に述べて居る如く、其根據に無理がある以上、深く立入つて、これをなす、勇氣と所信とを缺くものである。同樣に我國の石器時代、年代觀に就ても、今日、具體的に觸れ得べき、どれだけの根據があるのか、吟味の價値に疑を存する。（我國に關しては、拙稿、史前學研究と年代及び民族問題、本誌、第一の四號參照）

（4）地質學上に於ける、主として層位に基く、地層構成の編年の如き、こゝに改めて云ふを要しない。

（5）動物に於ける編年に就ても、多くの例がある。馬や象に關した、進化編年の如きは有名であり、我れ我れ史前學關係に就ても、各種動物編年には、出會する。其一例は、拙著、歐洲舊石器時代、第六六項、洪積期共存生物の研究其他參照。

（6）植物編年も、略動物編年と同樣の立場にある。而して、已に一八四二年には、ステーストルツプは北歐氷後期植物編年を試みて居る。（拙稿、史前學研究史、史學、第七の四號、第一二〇項參照）

（7）トムゼンに關しては、既に多くな發表して居る。（6）の拙稿、並に拙稿、デンマークに於ける貝塚構成時代、史學、七の二、等參照

（8）ラボックの編年に就ては、（6）の拙稿、同、歐洲石器時代研究の概況、本誌、第一の三號等參照。

（9）モルチエ編年に關しては、（3）の拙著、（8）の各書參照。

んとするに外ならない。勿論局部的に見れば、文化は衰滅退步、停止、等の現象もあれば、躍進等もするが、其大局上は、進捗して居るのである。又この編年なるものは、必ずしも大局に於てのみ試みられるものでなく、局部的にも行はるゝ。通常、大きな編年が出來れば、第二次第三次と細部編年に進んで行くのが順當である。一方編年は、必ずしも編年的已知階梯より出發しなくとも、全く未知の文化に對しても、其方法が正しければ、遂げ得ないものではない。其確からしさの多寡は、全く編年方法に存する。

史前編年上の事實。 今日までに、既に多くの碩學刻苦研鑽によつて、大局に於ける史前編年の出來て居ることは、今更申すまでもないが、順序として、一通り述ぶれば、デンマークのトムゼン（7）によつて文化上の大局を石、青銅、鐵の三大編年期を設定せられ、英のラボック（8）石器時代内に於て舊新兩時代區分、即ち第二次編年を行ひ、舊石にては、佛のモルチエ（9）北歐新石にては、スエーデンのモンテリユス（10）が、各第三次編年を行ふて居る。方今一方に於ては、第二次編年を補正して、舊、中、新石の三期にするし、他は第四次編年に向ふ樣な傾向であり、我國に於ても、繩紋式文化に對し、遲れ乍らも、私共は關東に於ける、それに精進して居る次第である。

編年方法論。 編年學としては、如何に編年して行く可きであるか、其方法論が、眼目をなして居る。編年設定は、矢鱈に濫造せらる可き性質のものではない。成し得る限り、確からしさの大なるものを必要とする。不確實のものであれば、寧ろ編年が、却つて人を惑す樣な、有害な例すらある。特に一部學界に於ては、編年學と形態學（Typologie）との混同すら多くを見らるゝ。今これが詳細は、略するも、形態學は、必ずしも編年學と一致すべき歸締のみを見るものでない。場合によつては、編年に對し、逆現象すら起すことがある故、注意があつて欲しい。

更に實際編年設定方法としては、夫々の史前狀態に基いて、色々に考出もせらるゝ。これ亦、今回は目的論を主體とする以上、細部には觸れない。編年學研究としては、物足らないことも、充分承知はして居る。只一言、方法論に就て、述べて置くことは、其編年をなして、其確からしさを增大する爲、撰ぶべきことは、其出發點を已知階梯に求むるか、さなくんば、時の經過を追ふて、成立すべき、何等かの自然法則に其準據を結ぶが、簡單に、且つ其自然法則の確からしさに應じて、史前編年の確からしさを增すものであると云ふに止むる。

さて今迄に於て、史前學上に於ける時に關する考と、特に所謂史的年代觀との相違を述べ、且つ史前編年に論及して、史前學としての、時に關した性質に就て見てきたのであるが、更に以上の如き性質である以上、果して其理想が幾何まで要求せられ得べきかに就て、申さねばならない。實現の能否を問はぬものなら、史前學上の時的歸締が史的年代觀即ち絶對年代と一致するまでに到達すれば、誠に結構のことであるが、今日の學術では、特別の場合の外、通常到達し得ない。從つて、以上の如き希望は、理想の範圍を超越して、空想に近いものと見らるゝ。史前學上、標定し後る相對編年なるものは、如何に第二第三次……と細分し得た所で、相變らずそれは相對編年を生み出すに過ぎないので、何等か方法を講ぜざる以上、相對年代より絶對年代が生れ出づるものではない。從つて、理想の極限に於ては、假令それが相對編年であるにした所で、其精度が、順序を經て確からしさを失はざる範圍に於て、史的年代觀、即ち絶對年代に最も近きまでに、史前編年の到達することを希望するものと考へる。これとて、史的年代觀に引

いものである。其甚だしいのになると、確たる根底もなく、史的年代と結んで見たり、或は編年編成に就ての順序も踏まず、直感的な階梯論まで行はれて居る。これを專門外に對し、所謂衆生濟度と云ふなら、或る點までは、見逃しもしよう。（3）然らば、史前學上の標尺は如何なるものかと云へば、文化群相互に於ける比較乃至は實在の結果、夫々の相對的な新古の關係が見出さるゝに過ぎない。これを言ひ換へれば、夫々の文化群が時の關係に律せられて、文化階梯なるものを決定せられ、其文化階梯なるものが相對的に、夫々の新古の序列を與へらるゝのが、史前學上に於ける標尺決定であつてこれを文化階梯の相對的編年（Kulturstufe der relative Chronologie）と云ふて居る。而して、この相對編年に對し、前述してきた史的年代觀の如きものは、絶體年代（Absolute Zeit）なのであつて、そこに大なる相違を存する。勿論場合によつては、史前學上の相對編年なるものが、史的年代たる絶體年代に對し、一致し又は連絡する場合もあり得るし、又これに近くことも出來ることがあるが、他に全く、史的年代とは沒交渉の場合も容易に起る。史前學としては、寧ろ後者の場合を立前とすべきことゝ考へる。これ以上、內容に觸れるに於ては、こゝに所謂編年學（Chronologie）との交渉が、より深くなるから、横道に入るものゝ、誤解を防ぐため、一通り編年學の概念を述べて置く。

註一。史前編年學略說。

編年學に就ても、研究せねばならない、多くがある。其詳細發表は、研究の順序上、甚だ遲るゝものと考へる故、かくこゝに略述する次第である。然し今述べんとする史前編年學なるものも、其總てに亘つた概說でもない。述べんとする主旨は、本論の時に關した目的論に對して、最も關係深き部分を、より多く述べるに過ぎない。

元、單なる編年學なるものは、獨り史前學上のみに專有せらる可きものではない。時に關する分野を有する諸科學に於ては、當然適用せらるゝ。私の所謂編年學として考へて居る定義は『夫々の時に關した科學に於て、或る標尺に基いて、取り出されたる數群に對し、時の經過に從つて、夫々其新古の階梯序列を組織的、系統的に配列せんとする研究を指す』と申したい。從つて、所謂文化科學に止まらず、地質（4）動物（5）植物（6）其他自然科學上に於ける編年も存する。尙編年學に就ては、其根本に於て學と稱するけれども、それは所謂科學として、一專門をなすものとも、思はれないが、この詳細は、他日に保留して、今は述べない。

史前編年學。 それなら史前編年學とは如何なるものであるかと云へば、前述の定義を、史前學的に改むれば、足るのである。即ち『史前編年學とは、史前學上或る標尺に基いて、取り出されたる文化群に對し、時の經過に從つて、夫々其文化階梯の序列を組織的、系統的に配列せんとする研究である。』即ち史前時代なる長大なる時の經過に對し、これを文化上から、或る標準に基いて、夫々文化を區分し、この區分によつて時間經過の標尺を作ろふとするものなのである。一面事實の示す大局に於ては、文化は漸次進展して居る。この進展の狀態に從つて、夫々の文化區分なるものは、これを時の經過より見れば、所謂文化階梯なのであつて、この秩序的編成に基いて、大局に於ける文化移行の經過をトせ

なくては、ならない。

史前學上に於ける時なる考へは、常に文化上に於ける時なのである。且つこの史前學上の時なるものも、其根本に於て、史前學としての時なのであつて、必すしも他科學のそれと、無條件で一致するものゝみではない。其内でも、最も多く混同せられて居るものは、所謂一般史學上に於ける時との關係である。史學上に於ける時なる考察は、通常の場合、文獻に於て決定せらるゝものであるから、簡單明瞭である。紀元を中心として、其前後何年と云ひ、史學としては、特に不明瞭の場合でも、總括的に第何世紀頃、或は何々朝とか、又は大約何年より何年の間等、或る年代に對する標準が與へらるゝ。史學上年代不明と云ふことは、通常の場合決定的な年代即ち所謂絕體年代の不明を指し、多くが、其前後或は其一端に於ける已知年代は、知られて居り、其兩已知年代内に於て或は其一端に對し、不明なのであるから、例外の外、飛拍子もない時的相違も、研究が充實して居れば、起つてもこないのである。而して、この史學的年代觀なるものは、御同樣、子供の時から、吾人等の頭腦に深く喰入つて居り、一面には、廣く普遍化もせられて居る關係上、殆んど總ての年代觀を代表せられて居る形にある。從つて、一般の人々の年代觀の梯尺なるものが、通常有史以降高々千單位の數量に深く細く刻まれてをる以上、舊石などの數萬年とか、或は古生物學的の數百萬年などの大單位が、受け入れきれないで、疑惑を深くしたり、或は他の一面では、好奇心を唆る樣なことにもなるのである。こうした傳統的に古くより史的年代觀なる堅き地歩がある以上、新しい、史前學上の年代觀を以てしては、中々一般から、容み込まれないのも、或る意味から云へば、致し方もない現象でもある。而して、本家の史前學者、それ自身ですら、どれだけ多く、これに引き付けられて居るのか。過古は云はすとも、現在、隨分自覺ないものすら、見て居る。但しこれは、獨り我が國のみに見る現象ではない。見方によつては、歐米の方が烈しい。今所謂史學に於ける時の梯尺と、史學上のそれとの違いに就て、說明して行く。

史前學なるものが、文化研究の科學である以上、其對象とする處の文化は、史前文化である。この史前文化、それ自身を立前とすれば、文獻記錄が無いのが、通常である。從つて史學的の年代なるものが、容易に生れ出でゝこないことも當然と考へる。それを何等の根底もなく、一足飛びに前述して居る、史的年代觀と同一、乃至はこれに近く導かふとするから、無理が出來る。而してこれが容易に出來るものなら、まだよいが、場合によつては、殆んど不可能のこととすらあるにも拘はらず、史的標準尺を以て直に史前文化を標示しようとするから、全く確からしさの無い、數量となり、史前學者自身からは、單なる一種の自慰であるに過ぎな

今簡單に史前文化を明にする目的と云ふたが、今少し説明して見るなれば、史前學として、研究せらる可き範圍にある、總ての對象を、悉く夫々理想の如く、研究し盡さんとする期待を、終局に於ける目的と云ふのである。換言すれば、史前學上に於ける總ての種々相が、悉く研究し盡されたならば、其總量が、如何なる結果に到着すべきか、又これが如何なる風に組織せらるゝであろふか。この豫期に對し、到達せんとする期待が終局に對する目的であり、又これが史前文化を明にする前途の根帶目的なのである。今日實際研究に當つて、色々と共歩を進めて行くのも、要するに、この終局の大理想に對し、部分的僅少のものであつても、やはり終局に向つてする一歩なのである。それ故、今こゝに述べんとする所のものは、全般的のものであつて、或る限定的、乃至は局部的に就てではない。例へば、日本史前學とか、或は新石文化研究とか云ふことは、史前學總てより眺めれば、其一部に過ぎないので、これ等研究の目的は、全般より見て、第二次、第三次等の目的なのである。

更にこの目的論の研究に就て、考へねばならぬことは、前述して居る如く、根本に於て、史前學なる本質を、少なくとも或る點まで、了解した上でないと、誤解も起り、曲解も起し易い。この史前學本質に關した、一部に就ては、既に本誌上に於て、開陳もした心算ではあるが、勿論、充分とは申さない。足らぬ所の方が、多いかも知れないが、本論と對比の必要を生ずるに於て、已述の拙論に對し、再讀を煩したい。又こゝに述べんとする目的論なるものも、私自身の考へて居る史前學の定義に基いての目的論であることは勿論であると共に、愚見に對しては、識者の遠慮なき、叱正を御願するものである。

今この目的論研究の手段として、先づ目的なるものを分解して、時間的及び空間的の二方面とし、夫々研究を試み、この兩者を綜合するに止まらず、研究の手段、即ち所謂方法論との相關々係の一部に觸れ、本論を終りたいものと考へる。

二、史前學の目的と時間關係

所謂人類なるものゝ、其初期文化に於て、既に史前學として、研究上の、對象を存する、其最初(1)より、今日近くまでの間、卽ち史前學として、其研究對象の最下限(2)までの間に於ける、史前學としての、時間的經過の全長なるものが、甚だ悠久であることは、今更これを改めて云ふを要しない。而してこの長大なる經過に對し、これを無視して、單一に、史前事實を平等視せんとするが如きことの、あり得ざることも、同樣、述ぶるまでもない。苟も史前學研究としては、この長大なる時的經過に對する理想が

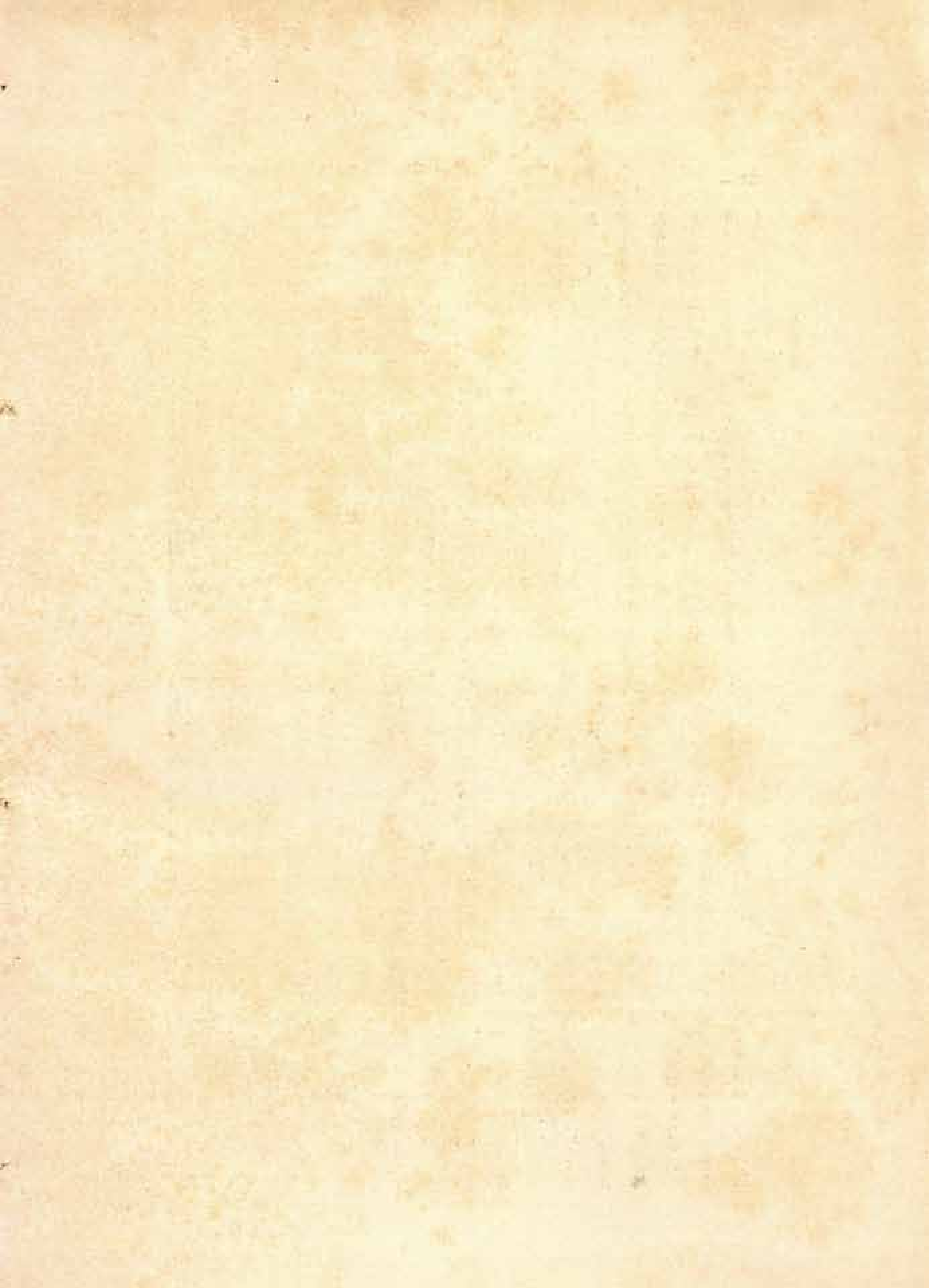
史前學雜誌 第二巻 第三號

史前學の目的

大山 柏

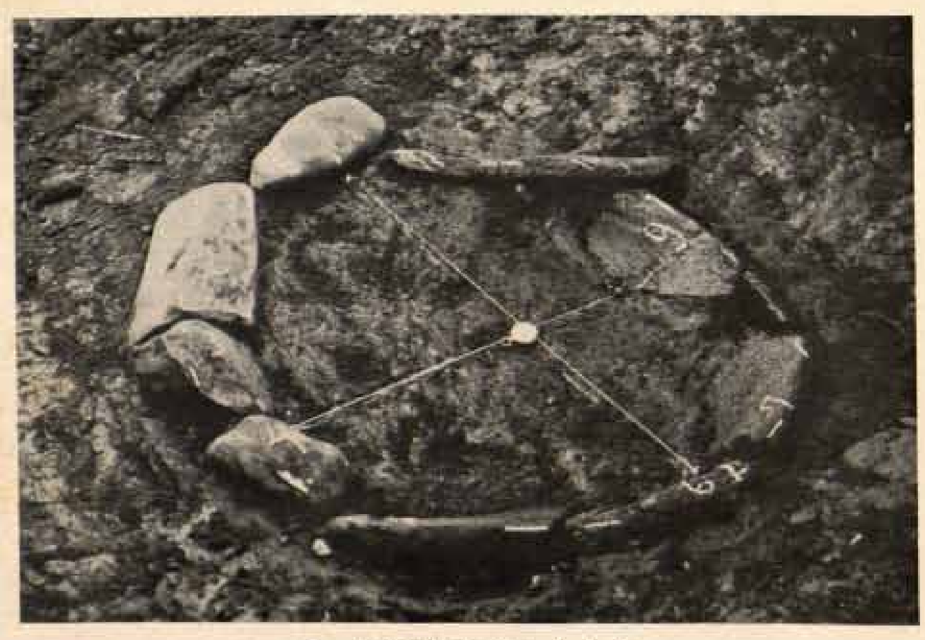
一、目的論一般に就て

史前學とは、史前文化を研究する一科學であるが、其研究内容に於ては、今開陳して居る樣な、基礎論もあれば、直接事實研究に於て、これを時間的に見ても、又は空間的にあつても、其範圍は甚だ廣い。從つて、この廣範圍に亙る對象に對し、何んの爲めに、これを研究して行くのであるかと云へば、史前文化を明にせんが爲めの研究なのである。卽ちこれを換言すれば、史前文化を明にせんとする目的を有するものである。これが史前學としての總括せられた、根幹目的であると云ふことが、出來よう。然しながら、この根幹目的と雖も、決して何等の理由もなくして、生れ出づるものではない。且つ又、この目的なるものには相應の內容も、條件もある。其內容なるものは、先づ史前學として、其本質が如何なるものか、少なくとも、其概念を捕捉しなければ出てこない。而してこの概念捕捉の結果、こゝに目的を生む可き基底が形造らるゝものである。條件とは、史前學として、研究の範圍は廣くこそあれ、決して無制限ではない。ある限度を有する。從つて目的としても、この限度內に於ける目的なのである。今これ等詳細に就て、以下順次述べて行くことゝするも、尙、この大綱に就て述べて置かねばならぬことがある。卽ちこの根幹をなす目的が決定せらるゝに於て、第二次、第三次、…………と漸次局部的なる、部分目的も、必要に應して、生れ出でゝくる。從つてこの根本目的なるものが、明かでないと、兎角研究の方向も誤り易く、一面に於ては、學說として、其根底の確からしさに、及ぼす所も深い。





東京府下井荻町上荻窪發見の石器時代住居址



同　上・石を以て圍める爐
Wohnplatz bei Kamiogikubo, Tokio-Fu.

文獻

會報

史前學雜誌　第二卷　第三號　目次

圖版第九　東京府下井荻町上荻窪發見の石器時代住居趾。同　石を廻らせる爐。

資料

遺跡

遺物

自然人類學

比較民族學

動物の研究

史前學會々則

一　本會ヲ史前學會ト名付ケル

二　本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三　本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル
研究小報及パンフレットノ發行
史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ノ發行
調査竝ニ研究旅行、臨時講演會竝ニ展覽會ヲ催ス

四　會員
本會ノ趣旨ニ贊成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル
特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五　本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌竝ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル(但海外在留者ハ別ニ運送料ヲ要スル)

六　會員特典
本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ其研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル
本會ノ調査竝ニ研究旅行、講演會及展覽會ニ出席シ、本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

七　本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル(將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル)

八　本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク
東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九
大山史前學研究所內　**史前學會**
電話青山一二五番

幹事　大山柏　甲野勇
宮坂光次　北條憲政
杉山壽榮男

會計　岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては內容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

昭和五年五月十二日印刷
昭和五年五月十五日發行

定價一冊壹圓郵稅四錢

編輯者　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九番地
大山柏

發行者　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九番地
岡田義一

印刷者　東京市神田區表猿樂町二
中村修二

株式會社開明堂東京營業所

發行所　東京府豐多摩郡千駄ケ谷穩田九大山史前學研究所內
史前學會
電話青山一二五番
振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區北甲賀町四番地
岡書院
電話神田二七七五番
振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第二卷　第三號

昭和五年五月十五日發行

史前學會

ZEITSCHRIFT
FÜR
PRAEHISTORIE

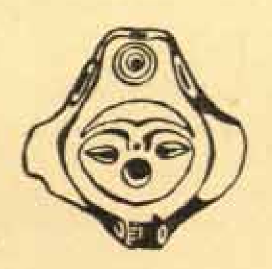
(SHIZENGAKU-ZASSHI)

Organ der Japanischen praehistorischen Gesellschaft

Herausgegeben

von

KASHIWA OHYAMA



Sonder Nummer: Korekawa-Funde

2. BAND 4. HEFT

TOKIO

Juli 1930

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Aoyama Tokio.



Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder
   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder
   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen
   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden
   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

   9, Onden Aoyama Tokio
   Ohyama Institut für Praehistorie
   (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama
Isamu Kohno
Mitsuji Miyasaka
Kensei Hohjoh
Sueo Sugiyama

Korekawa-Funde

vom Korekawa, einer charakteristischen steinzeitlichen Station von Kame-ga-oka Typus der Nord-Ost Jomon-Kultur.

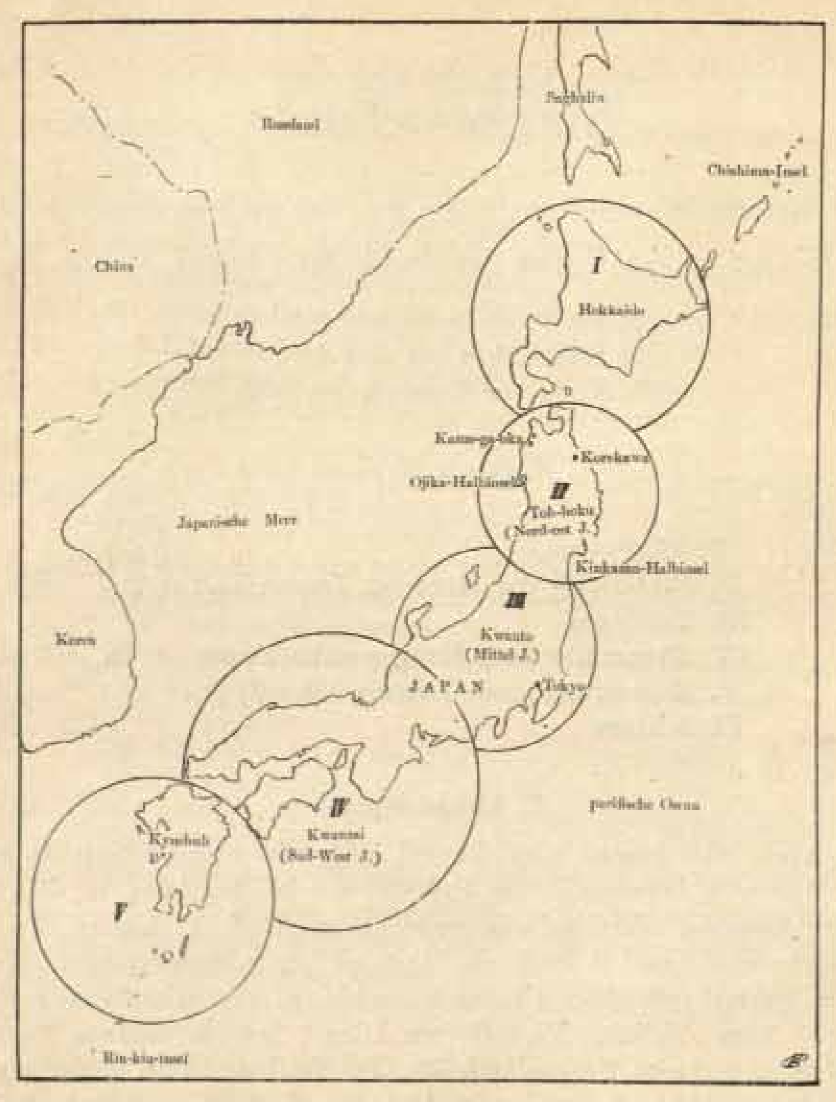
Herrn Prof. Dr. Hubert Schmidt
in Dankbarkeit mit dem besten
Wünsche zur Genesung gewidmet
von

Kashiwa Ohyama

I. Allegemeines

Im April 1929 konnte unser Institut infolge der Freundlichkeit des Landbesitzers Herrn I. Izumiyama, die Fundstationen bei Korekawa in der Prov. Aomori untersuchen; dabei nahmen ausser uns teil Prof. Y. Koganei, Prof. T. Kita und unser Mitglied S. Sugiyama. Dort gibt es mehrere Stationen nahe bei einander; diesmal erforschten wir nur 3, welche zu der reinen Jomon-Kultur gehören; es finden sich keine Yayoi-Spuren. Diese 3 Stationen sind ein Torflager, ein Wohnplatz und eine Freilandfundstätte. Das Torflager ist die Hauptfundstätte von Korekawa. Ueber sie berichte ich hier. Das Torflager wurde unter Leitung unseres Institutsassistenten I. Kohno ausgegraben, der in dieser Nummer über die Funde auf japanisch veröffentlicht. S. Sugiyama berichtet auch japanisch, über Korekawa Lack-und Holzgeräte einschliesslich früherer Funde.

Dieses Torflager ist als Fundstätte schon frühzeitig bekannt gewesen und seit langem sind von dem Landbesitzer und seiner Familie jählich Ausgrabungen gemacht und erstaunliche Mengen von verschiedenen Resten gefunden worden, trotzdem die Fundstelle nur ca 10000 q.m. gross ist. Es wurden über 1000 vollkommene, feingearbeitete Tongefässe, ferner mehrere Holz- und Lackgeräte, verschiedene Mattenarten, sowie zahllose Stein- und Knochenwerkzeuge, dazu noch



E. Fig. 1. Einteilungen der Kultur-Gruppen innerhalb der Jomon-Kultur in Japan.

eine Menge von faunistischen- und floristischen Natur-Resten gefunden; die Grabungen dauern noch fort. Metall fand man aber bisher hier nicht, trotzdem mit grösster Sorgfalt nach Mettall gesucht wurde. Ungeachtet der vortrefflichen Funde blieben die früheren Grabungsresultate unsern Forschern ziemlich unbekannt, weil dort meist von dem Landbesitzer aus eigenem persönlichem Interesse ausgegraben wurde. Eine wissenschaftliche Veröffentlichung darüber erfolgte noch nicht. Die Fundgegenstände befindet sich fast alle in Izumiyamas Hause in der kleinen Stadt Hachinohe, Prov. Aomori unweit vom Fundort.

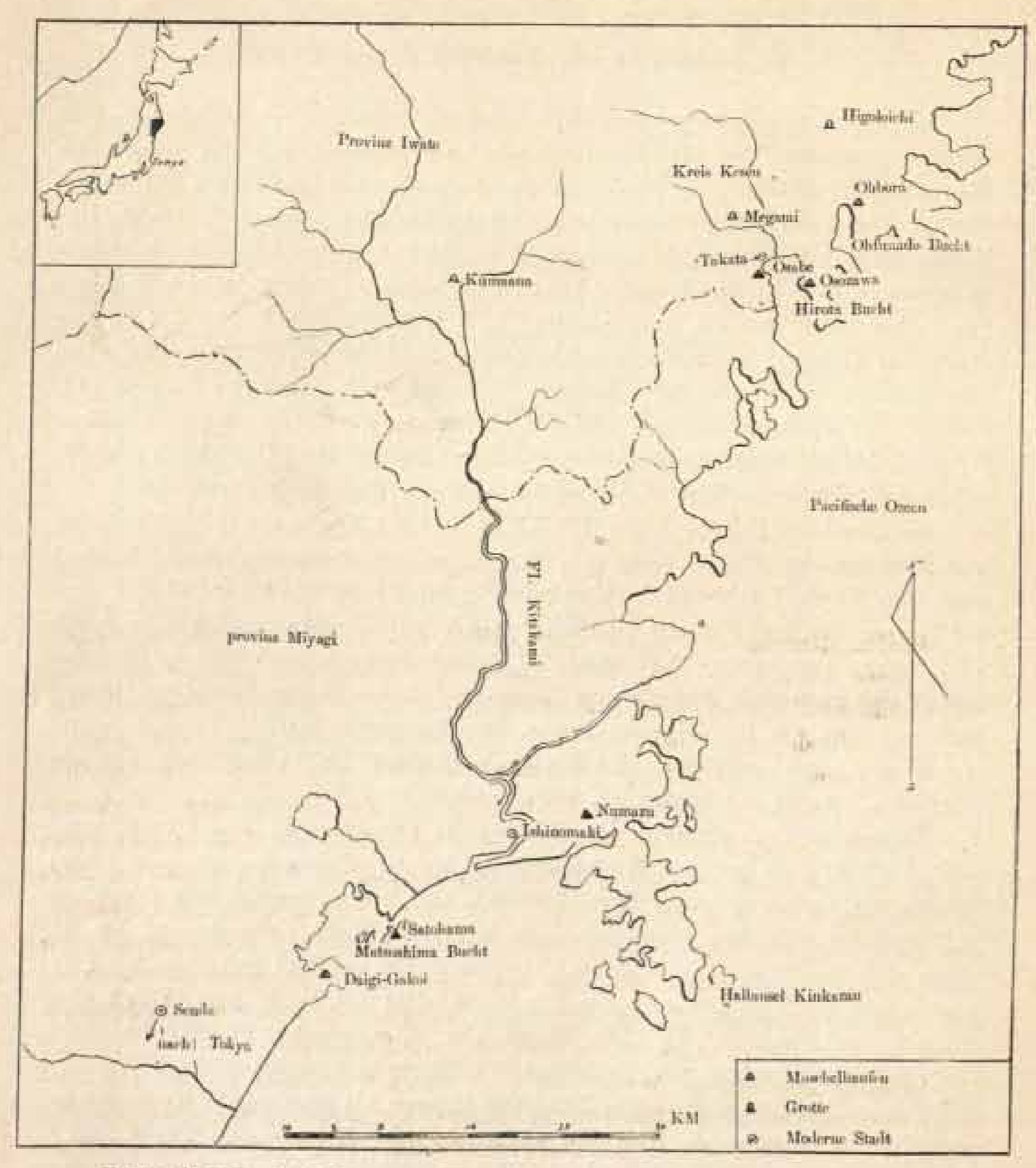
II. Einteilung der Nord-Ost Jomon-Kultur

Ich möchte dieser Gelegenheit etwas über die Stellung der Nord-Ost Jomon-Kultur sprechen. Die Hauptkulturguppen der Steinzeit auf den japanischen Haupt-Inseln sind zwei, die eine ist die Jomon-Kultur, die andere die Yayoi-Kultur. Die Yayoi-Kultur bespreche ich bei der nächsten Gelegenheit. Die Jomon-Kultur ist fast in ganz Japan verbreitet, nördlich von der Insel Hokkaido bis nach west-südlich zu den Ryukyu Inseln sind bisher ca 10000 Funde bekannt (1). Wir teilen jetzt die Jomon-Kultur in 5 Lokalgruppen (E. Fig. 1)(2), von denen jede Gruppe bestimmte charakteristische Merkmale hat, trotzdem alle zu der früheren "Jomon-Kultur" gehören. Besonders die Nord-Ost Gruppe (II. Gruppe, auf japanisch Tohoku) und die Kwanto Gruppe (III. Gruppe = Mittel Gruppe) sind als Vertreter der Jomon-Kultur bekannt. Die bisherigen Veröffentlichungen über Jomon-Kultur behandeln meist nur diese beiden Gruppen.

Die Nord-Ost Gruppe teilen wir wieder in zwei Typen ein, Ichi-ohji Typus und Kame-ga-oka Typus. benannt. Wir nennen den ersteren Typus "Ichi-ohji" nach dem Fundort Ichi-ohji in Korekawa, wo ihn auch Prof. K. Hasebe von der Universität Sendai zuerst fand und wissenschaftlich erkannte, aber im Jahre 1927 unter dem Namen "Ento-Doki" = Zylinderkeramik beschrieb (3). Dies war damals eine ganz neue Beobachtung, denn man dachte in der Nord-Ost Gruppe fände sich nur der Kame-ga-oka Typus. Die Fundstelle Ichi-ohji ist nur ca 200 m von den oben erwähnten Torffundstelle entfernt und wurde auch von uns bearbeitet, voruber wir später berichten werden.

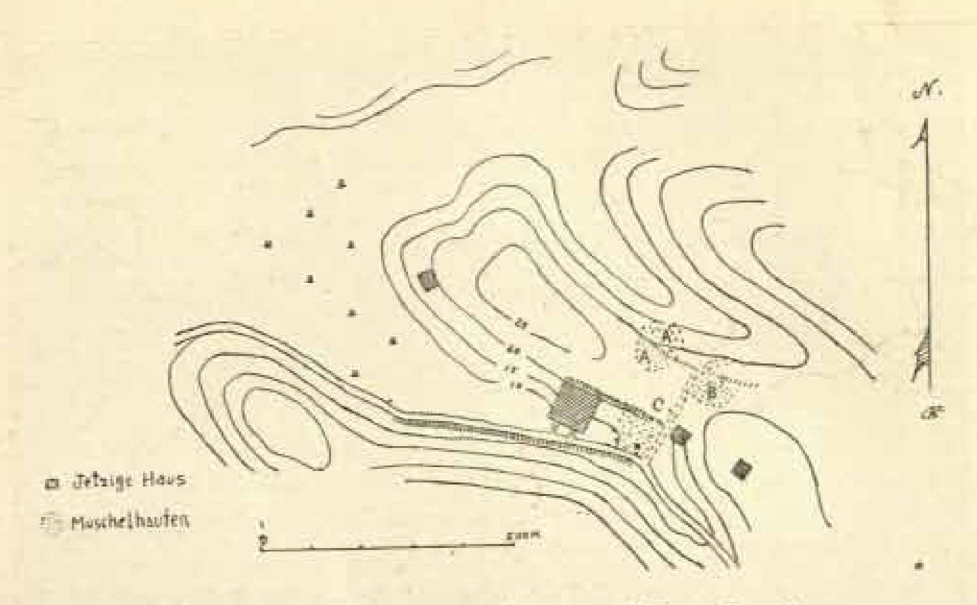
Kame-ga-oka ist ebenfalls der Name eines Fundorts (E. Fig. 1) und zwar eines Torflagers; es bedeutet Keramikhügel. In der Tokugawa-Zeit (vor 1868) kannten die Landleute schon diesen Fundort, und hatten verschiedene Tongefässe und Anderes gefunden, aber der erste wissenschaftliche Erforscher ist Dr. D. Satoh, der den Fundort im Jahre 1894 untersuchte und viel gefunden hat (4). Aber ausser Satoh gruben auch die Landleute selbst aus, und diese Funde sind fast alle verschwunden (5). Die Menge der Kame-ga-oka Funde war nicht klein, mindestens sogross wie die Menge der Funde in Korekawa.

Solche Torflager sind in der Nord-Ost Gruppe bis jetzt nur in Kame-ga-oka sowie Korekawa gefunden. Aber die gesamtzahl der Kame-ga-oka Typus Fundstätten in der Nord-Ost Gruppe ist ca 2000; hauptsächlich Freilandfunde, daneben sind Muschelhaufen auch häufig, von denen man ungefär 90 zählen kann; Höhlenwohnungen kommen auch nicht selten vor, aber es gibt keine Dolmen, Ganggräber und Steinkisten; das Grab der ganzen Jomon-Kultur ist ganz einfach, meist nur ein Erdgrab (E. Fig. 4) (6). Dann fand man noch ziemlich viel Wohngruben, aber in diesen fand man manchmal Yayoi-Keramik, sowie auch



E. Fig. 2. Einige Beispiele von der Verbreitung der Muschelhaufen und Höhlen in einem Teil der II. Gruppe der Jomon-Kultur.

Schlacke; so ist es fraglich, ob sie zur reinen Jomon-Kultur gehören oder nicht. Weiter gibt es auch sog. "Chashi", Festungen, aber diese sind meist von den fraglichen Wohngruben begleitet, also auch noch unsicher.



E. Fig. 3. Die Lage der Muschelhaufen Ohbora, Kreis Kesen, Prov. Iwate.

Freilandfunde. Wenn man oberflächlich etwas findet, oder bei der Ausgrabung keine sichere wohnung findet, so spricht man in Japan einfach von "Freilandfunden", aber diese sind meist das Gleiche wie in Europa die sog. "Wohnplatzfunde". In Japan gibt es bei den Muschelhaufen verschiedene Formen der Wohnungen, und ausser den Muschelhaufen sind auch deutliche Wohngruben häufig, so dass man Wohnungs-Funde folgender Art unterscheidet : Freiland-Wohnplatz-, Wohngruben-, Höhlen- und Muschelhaufenfunde. Aber es gibt soviel Funde in Japan, ausser den vielerlei praehistorischen Funden gibt es noch protohistorische sowie historische Funde und zwar in mengen dicht bei einander, dass man nicht alles ausgraben kann, sondern sich meist mit Versuchausgrabungen begnügen muss. Besonders viele Lokalforscher müssen sich auf kleine Versuchsgrabungen beschränken. So kommt es zu Mengen von sog. "Freilandfunden", deren Beschaffenheit erst nach und nach klar werden wird.

Mnschelhaufen Die Muschelhaufen finden sich fast alle an der Ostküste, nämlich an der Küste der buchtreichen Gegend des stillen Ozeans (E. Fig. 2), wo die Leute leicht und reichlich Nahrung fanden. Hier gibt es viele bekannte Muschelhaufen, z. b. Satohama, Insel Miyato in der Matsushima Bucht, Numazu, nahe der Stadt Ishinomaki (7) ; Osabe (8), Nakazawahama und Ohbora in der Kesen Gegend. Die einzelnen Muschehaufen in der II. Gruppe sind nicht gross, meist 30—100 m. lang und 10—30 m. breit, während in der Kwanto Gruppe (III. Gruppe) sich manchmal wesentlich grössere finden. Die zur II. Gruppe gehörigen sind merkwürdig gelegen : fast alle liegen übereinstimmend im Sattel



E. Fig. 4. Skelettfunde aus dem Muschelhaufen Ohbora. (Photographie nach Yahata)

eines Hügels (E. Fig. 3). Die Tiefe der Muschelschichten ist verschieden, höchstens ca 2 m. (Osabe,) viele nur 30 bis 60 cm tief.

Unter den Muschelschichten oder in halber Tiefe findet man Wohnplätze, häufig dicht bei- und übereinander, und hauptsächlich in der Mitte der Wohnplätze den Feuerplatz, meist mit Holzkohlen, Asche, gebrannten Muscheln, gebrannter Erde und Knochen bedeckt. Die Hausform ist rund, seltener 6—8 ecking. Auch unter den Muschelhaufen sehen wir manchmal zwischen 50 cm bis 1 M tiefe Wohngruben. In einem Teil der Muschelhaufen finden sich auch Gräder, häufig mit ziemlich vielen Skeletten (E. Fig. 4). So kann man sagen, dass die Muschelhaufen nicht nur einen einfachen Wohnplatz mit Grab darstellen, sondern eine Station, an welcher wir das ganze Leben der damaligen Fischer kennen lernen können.

Höhlenwohnung Höhlenwohnungen von dieser Gruppe finden sich im Kreis Kesen (E. Fig. 2) ziemlich viel, weil in dem dortigen Kalkgebirge zahlreiche Kalkhöhlen vorhanden sind. Ich untersuchte mit Prof. Y. Koganei u.a. im Jahre 1925 dieses Höhlengebiet, um mich einer palaeolithischen Frage zu vergewissern.



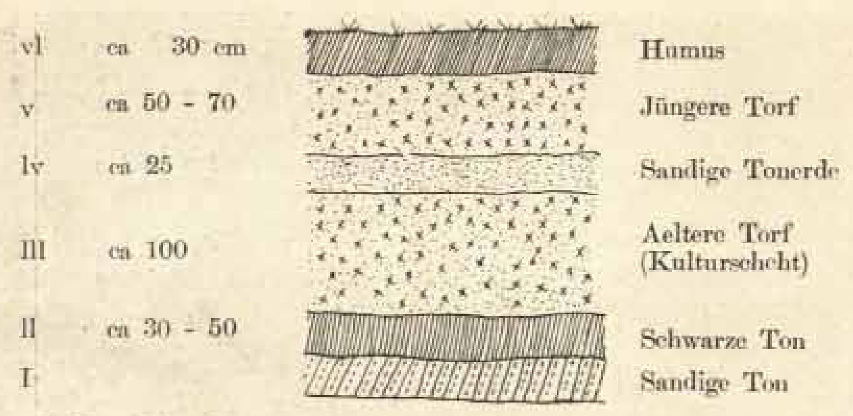
E. Fig. 5. Höhle Megami, bei Umenoki, Kreis Kesen, Prov. Iwate.
(Photogr. nach Yahata.)

Aber es gibt dort nur neolithische oder noch jüngere Fundstellen. In einer Höhle mit Namen Megami (E. Fig. 5) haben wir eine gründliche Ausgrabung gemacht, doch konnten wir keine diluvialen faunistischen oder Kultur Reste finden. So hatte auch diese Höhlenuntersuchung für die Kenntnis der japanischen Palaeolithikumfrage keine besonderen Ergebnisse (9).

III. Torflager

A) Kame-ga-oka Funde

An der Nordspitze des japanischen Hauptlandes liegt die Halbinsel Tsugaru. Kame-ga-oka liegt in der Mitte dieser Halbinsel (E. Fig. 1). Dort laufen die



E. Fig. 6. Eine Durchschnittskizze der Fundstelle von Kame-ga-oka. (nach Satoh)

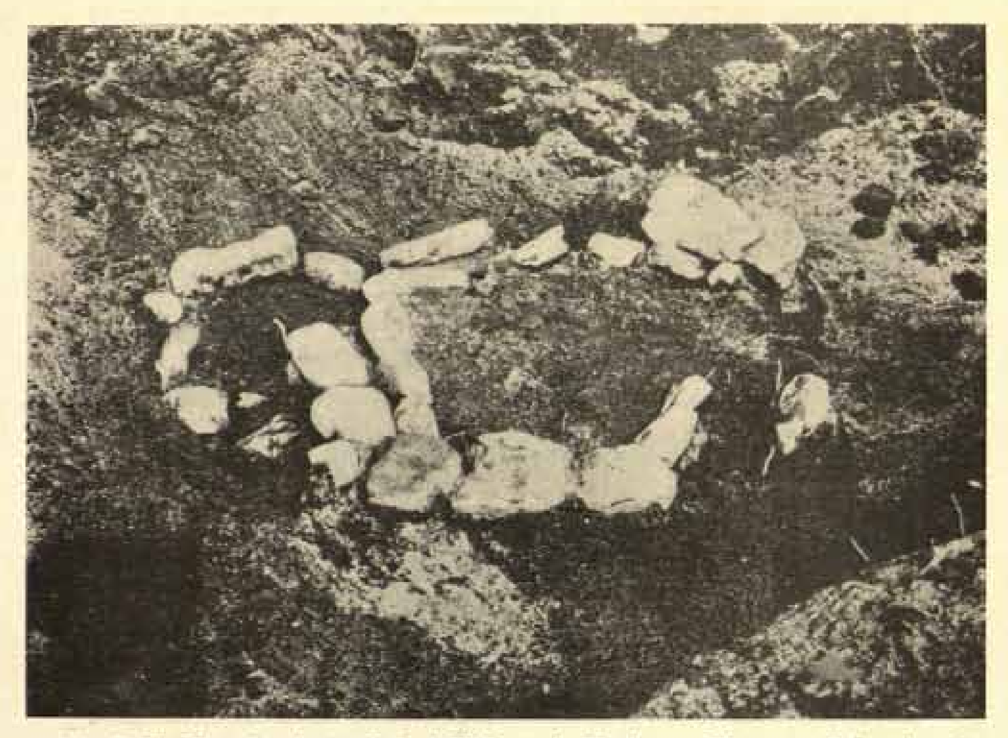
diluvialen Anhöhen parallel mit der Seeküste des japanischen Meeres. Die Fundstatten sind auf der Innenseite der Anhöhen; und unweit davon fliesst der Fluss Iwaki nach Norden und bildet eine alluviale Ebene. Hier und da bleiben noch mehrere Sümpfe und Moore, und entsteht Torf. Die Funde befinden sich auch in den Torfschichten, wie die Skizze zeigt (E. Fig. 6).

Hier fand Satoh verschiedene Reste, meist in Schicht III und IV; hauptsächlich verschiedene Formen von Tongefässen und Pfeilspitzen, Steinbeile, Steinmesser mit knauf, Steinstäbe, Tonidole und einigen gekehlten Hängeschmuck.

B) Korekawa Funde

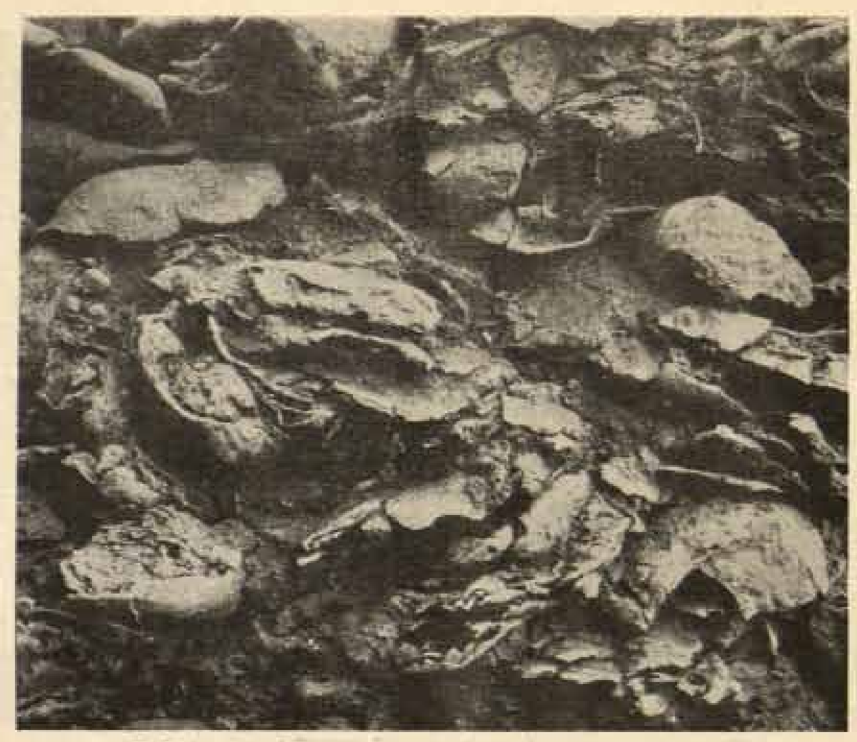
Korekawa liegt 5 km südlich von der kleinen Stadt Hachinohe (Taf. XI, E. Fig. 1, Fig. 1. S.239, Fig. 2. S.240). Die Umgebung der Fundstellen ist tertiäres Hügelgebiet, meist ca 100 m hoch. An der Ostseite der Fundstellen fliesst der kleine Fluss Araida nach Norden und bildet eine schmale alluviale Ebene. Die Fundstätte liegt auf der Südseite der zungenförmigen niedrigen Anhöhe, welche 17 m über dem mitteren Seespiegel hoch ist.

Die Oberfläche der Fundstätte ist Ackerfeld, und einzelne Reste kann man auf den Humus finden. Die Humusschichten sind ca 30 cm mächtig, in ihnen findet man auch einzelne Reste wie auf der Oberfläche. Darunter liegt Schwarzerde ca 40— 60 cm stark; in dieser findet man nicht viele Reste, aber der Landbesitzer hat in diesen Schichten einen Wohnungsboden und in dessen Mitte einen Feuerplatz mit Stein-Umringung gefunden(E. Fig. 7). Dicht bei dieser Fundstätte findet sich eine flache und seichte Vertiefung von Nord-Ost nach Süd-West, etwa 70 m lang, 20 m breit, und darunter liegen Torfschichten unter den Schwarzerdeschichten (Taf. XII, Fig. 3, S.242).Bisher grub der Landbesitzer nur an der Nord-Ost Seite der Vertiefung. Dort beginnen die Torfschichten von der oberseite des Abhangs an, die oberen sehr dünn, dann nach und nach tiefer dicker und bis 1. 20 m mächtig.



E. Fig. 7. Ein Feuerplatz in der Steinzeit-Wohnung in Korekawa. (Photogr. nach Izumiyama)

Wir konnten zwei Torfschichten unterscheiden. Die obere Torfschicht ist echter Carex- und Phragmitestorf und ziemlich dicht und schwarz ca 20—30 cm dick (Fig. 4, S. 244). Die untere Torfschicht ist von besonderer Art; man kann sie Kjökkenmöddingertorf oder vertorfte Kjökkenmöddinger nennen (Taf. XIII. E. Fig. 8), welche hauptsächlich aus damaligen Pflanzenresten, vornehmlich Rosskastanienschalen, dann aus ziemlich vielen Walnussen, Kastanien und vielen anderen bestehen. Knochen- und Muschelreste sind nicht zahlreich, aber wichtigste Kultur- und Naturreste finden sich auch in diesem Torf (Taf. XII u. XIII). Im unteren Teil dieses Torfs fand man mehrere Stämme und Zweige, die dicken mit einem Durchmesser bis zu 25 cm von Nussbaum, Kryptomerien, Kastanien u. a. Darunter ist wieder die dünne Schwarzerde ca 5—10 cm mächtig und gibt nur wenige Reste; dann folgen Diluvialschichten. Die Entstehung des Kjökkenmöddingertorfs ist wie folgt zu erklären: durch einen Erdrutsch wurde das damalige schmale tiefe Tal verstopft und nach und nach das Wasser vermehrt, bis sich endlich ein Teich und später ein Moore bildete. Steinzeitliche Bewohner wohnten auf dem Abhang und warfen verschiedene Reste herunter, durch die der jetzige Kjökkenmöddingertorf entstand.



E. Fig. 8. Ein Teil der Kjökkenmöddingertorfschichten. N.G.

IV. Naturreste

Die zu dieser Gruppe gehörigen Tiere und Pflanzen zeigen sich nicht als eine besondere Gruppe, sondern sind nur der gegenüber der III.—V. Gruppe etwas kälteren Lage entsprechend etwas anders gemischt.

In Korekawa findet man nur wenige Arten von tierischen Resten, weil dort in dem Torf die tierischen Reste schlecht erhalten sind. Aber in den Muschelhaufen finden sich viele Arten von Tieren. Ich werde hier einige Beispiele in Tabellenform aufführen.

A) Muschelarten

(Muschelarten aus dem Muschelhaufen Hosoura, Kreis Kesen. Nach Prof. K. Hasebe (10))

1. Natica clausa Brod. & Sowb.	viel
2. Polinices didyma Bollen.	viel
3. Thais (Purpura) tumulosa problematica Baker	viel
4. Th. (″) bronni Dkr.	viel
5. Th. (″) saxicola Val.	viel
6. Rapana bezoar thomasiana Grosse.	wenig

7. Marumorostoma coronatus Gmel.	viel
8. Ocinebra burunetti Ad.& Rve.	viel
9. Chlorostoma argyrostomum basiliratum Pils.	viel
10. Ch pfeipferi Phil.	wenig
11. Ch. rusticum Gmel.	viel
12. Thylacodes imbricatus Dkr.	wenig
13. Batillaria (Potamides) multiformis Lisch.	viel
14. Helcioniscus eucosmius Pils.	selten
15. Acmaea pallida Gld.	selten
16. Littorina sitchana Phil.	selten
17. Monodonta labio Linne.	selten
18. Haliotis gigantea discus Gmel.	wenig
19. Fusinus tuberosus Rve.	selten
20. Murex endermonis E. A. Smith.	wenig
21. Voluta megaspira var prevostiana Gross.	selten
22. Dentalium lubricatum Sow.	selten
23. D. hexagonum Gld.	selten
24. Septifer bifurcatus Weigm.	wenig
25. Mytilus crassitesta Lisch.	wenig
26. Tresus nuttalii Conr.	viel
27. Mactra sachalinensis Schrenk.	viel
28. Paphia (Tapes) philippinarum Ad. & Rve.	hauptsächlich
29. Cyclina chinensis Chem.	wenig
30. Mya arenaria japonica Jay.	viel
31. Saxidomus purpuratus Sowb.	Viel
32. Solinatellina olivacea Jay.	selten
33. Venus (Chine) jedoensis Lisch	viel
34. Ostrea gigas talienwhanensis Crosse.	viel
35. Metis sp.	menig
36. Solen gouldii Conr.	selten
37. Pecten yessoensis Jay.	viel
38. Chlamys laetus Gld.	wenig
39. Lyropecten swifti Bernardi.	wenig
40. Meretrix meretrix L.	selten
41. Anomia cytaeum Gray.	selten
42 Arca inflata Rve.	wenig
43. Macoma incongrua Morts.	wenig
44. Calliostoma (Turcica) imperialis A. Adams.	selten
45. Eulota quaewsita Desh.	selten
46. Pyramidula pauper Gld.	selten

47. Succinea lauta Gld. selten
48. Dosinia troscheli Lischk.
49. Petuncnlus fulguratus Dkr.
50. Caecella chinensis Desh.
51. Gomphina melanaegis Romer.
52. Batillaria (Potamides) cumingii Crosse.

B) Fischarten

(Nach Prof. K. Kishinoue, Prehistoric Fishing in Japan. 1911)

1. Trygon akajei
2. Myliobates tobijei
3. Pterothrissus gissu
4. Clupea melanosticta
5. Engraulis japonicus
6. Onchorhynchus sp.
7. Leuciscus hakuensis
8. Gadus brandti (nur in I. u. II. Gruppe)
9. Lateolabrax japonicus
10. Sebastes sp.
11. Sparus schlegeli (ziemlich viel in ganz Japan)
12. Psgrus major (sehr viel in ganz Japan)
13. P. cardinalis (wie oben)
14. Caranx trachurus
15. Seriola quinqueradiata
16. Scomber colias
17. Auxis tapeinosoma
18. Gymnosarda pelamis
19. Thunnus thynnus
20. Paralichthys olivaceus
21. Tetraodon

C) Säugetierarten

1. Pithecus fuscatus
2. Lepus brachyurus brachyurus
3. Ursus torquatus japonicus ?
4. Canis familiaris
5. Nyctereutes procyonoides viverrinus
6. Shika nippon nippon (sehr viel in ganz Japan)
7. Sus leucomystax leucomystax (sehr viel in ganz Japan)
8. Equus caballus
9. Delphenus Arten
10. Wall Arten

11. Seehund Arten

D) Pflanzenarten

1. Carex sp.
2. Miscanthus sinensis Anders
3. Phragmites communis Trin
4. Aesculus turbinata Blume
5. Xanthoxylum sp. od. Fagara sp.
6. Castanea pubinervis Schneid
7. Quercus crispula Bl.?
8. Q. sp.
9. Cryptomeria japonica D. Don.
10. Pterocarya rhoifolia Sieb. et Zucc.
11. Juglans sieboldiana, Maxim

Diese Tabellen geben nur eine vorläufige Uebersicht, und werden später noch stark vermehrt werden.

V. Kulturreste

Der Kame-ga-oka Typus ist ein ganz entwickelter Typus der Spät-Jomon-Kultur. So kommen hier verschiedene feingearbeitete Reste hinein, hauptsächlich mehrere Arten von tönernen Arbeiten, nämlich Tongefässe, Tonidole, Tonplatten, Tonmasken, Tonschellen u. a.: auch viel Steinwerkzeuge(Fig 5. S. 245,Fig. 6. S. 246) z. b. Pfeilspitzen, Beile, Stäbe, Schaber u. a.; Die Knochen- und Geweihgeräte umfassen mehrere Typen von Harpunen, Spitzen, Nadeln, Angelhaken und noch eine Anzahl unerklärte Stücke, wahrscheinlich Stein- und Knochenschmuck.

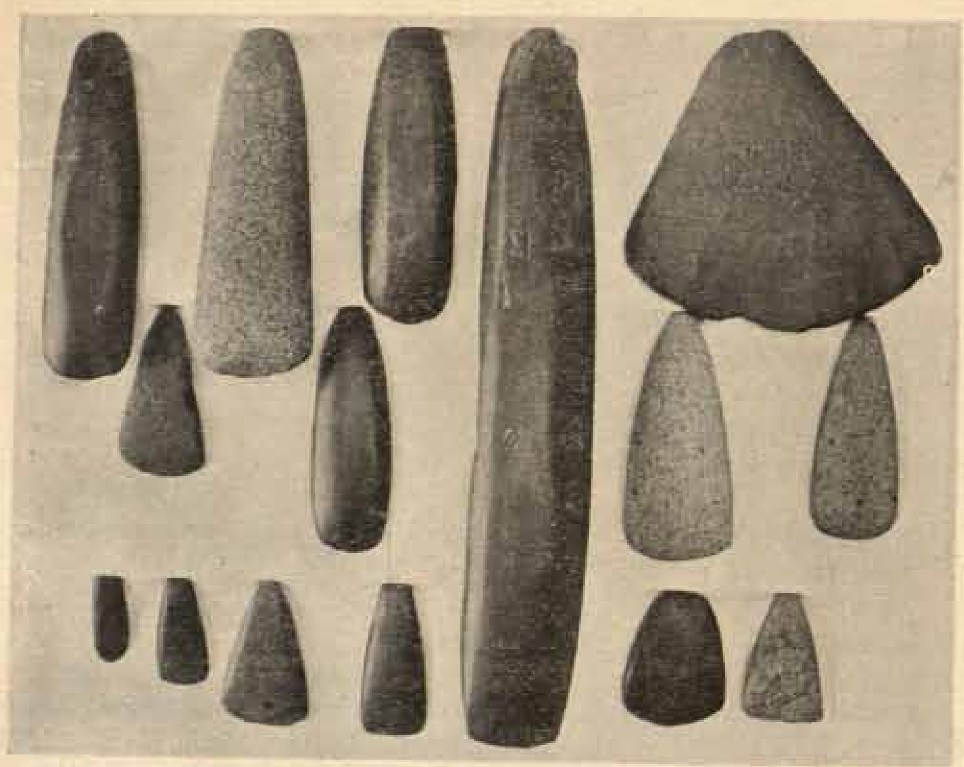
1) Steinwerkzeuge

(A) Steinbeile

Die Steinbeile sind meist klein, gewöhnlich ca 7—15 cm lang und fein poliert; die Formen sind verschieden, doch finden sich keine speziellen Formen, aber Beile mit spitzigem Kopf und etwas walzenförmiger ovaler Klinge sind häufiger (E. Fig. 9). Als Ausnahme ist ein in Korekawa gefundenes grösseres Beil 33 cm lang (E. Fig. 9, in der Mitte); andererseits haben wir auch kleine Beile gefunden, welche manchmal nur 2—3 cm lang sind, so dass wir sie nicht zum wirklichen Gebrauch bestimmt denken, sondern als sog. Miniatur betrachten.

(B) Pfeilspitzen

Die Pfeilspitzen sind ziemlich zahlreich, und man hat sie schon frühzeitig gekannt (11). Die Formen der Pfeilspitzen sind verschieden, doch lassen sich Zwei

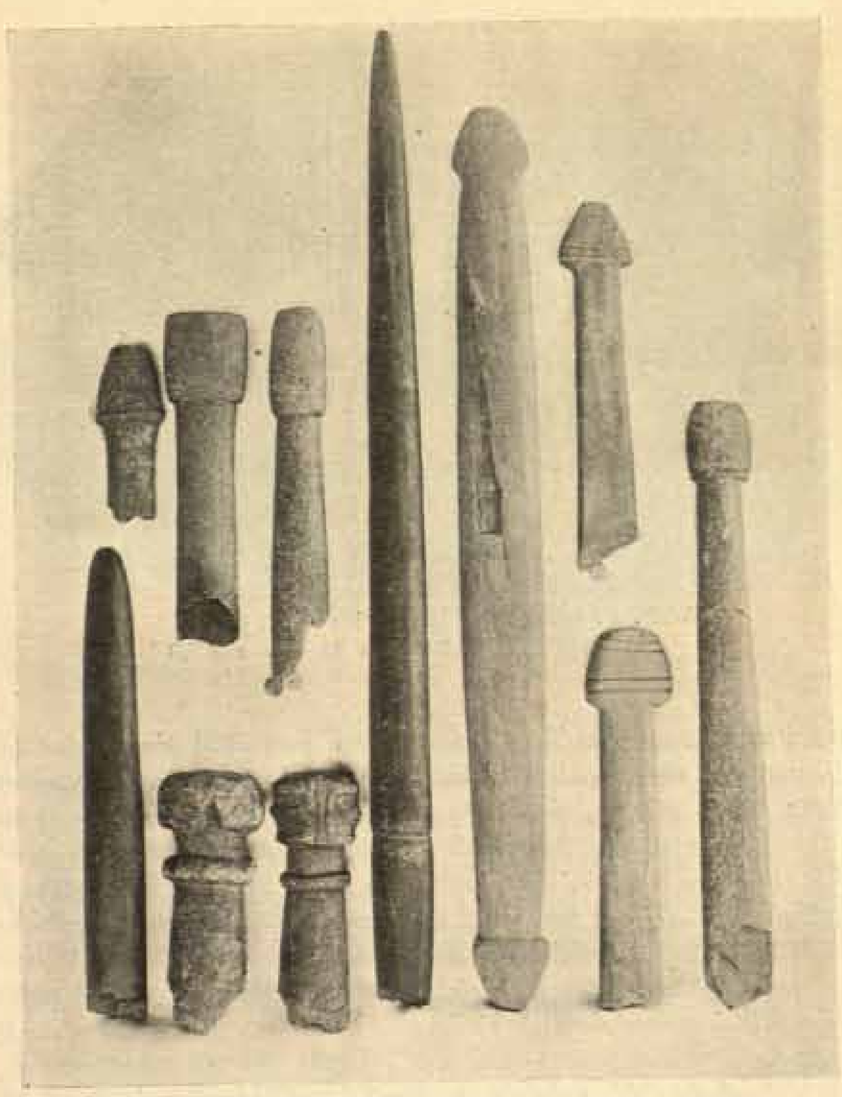


E. Fig. 9. Einige Steinbeile aus Korekawa. (Photogr. nach Izumiyama) ca. $\frac{1}{2}$ N.G.

Grundtypen erkennen: die eine hat einen Dorn zur Befestigung am Schaft, die andere hat keine solche ausgezogene Basis. Die beiden Typen kommen fast immer gemischt vor und auch in Korekawa haben wir gleichmässig die beiden Typen gefunden. Die Formen des Hauptteils sind Triangel, Ovalspitz, Oval, Weidenblatt Lorberblatt und Trapez etc. Die Grösse variiert im allgemeinen zwischen 1 und 3 cm. Das Steinmaterial ist meist Obsidian, daneben kommen flintartige Stein vor, aber manchmal wurde auch sog. Halbedelstein verwendet: Bergkristal, Opal, Achat, Olivin u, a. Polierte Pfeilspitzen sind in dieser Gruppe sehr selten, trotzdem sie in Kyushu (Gruppe V) häufig fast immer mit Yayoi-Kultur zusammen gefunden werden.

(C) Steinstäbe

Die Steinstäbe sind ein charakteristisches Steinwerkzeug der ganzen Jomon-Kultur. Wir finden sie meist in der Gruppe II und III, aber sie sind ziemlich selten. Ihre Länge schwankt zwischen 20 und 60 cm. Sie haben gewöhnlich an beiden Enden eine kopfartige Anschwellung, oft verziert. Doch sind auch Stücke mit einseitigem Kopf nicht selten. Den Zweck der Steinstäbe konnte man noch nicht



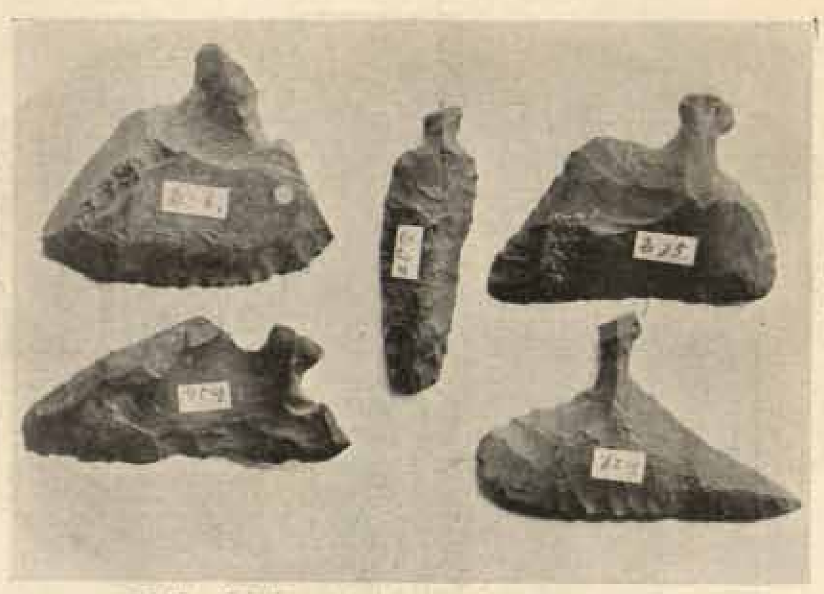
E. Fig. 10. Einige Steinstäbe aus Korekawa. (wie vorher) ca $\frac{1}{4}$ N.G.

fest stellen. Der eine denkt an echte Schlagwaffen oder Würdeabzeichen (Kommandostäbe), der andere an Zeugen eines Phalluskultes.

In Korekawa hat man sie ziemlich viel gefunden (E. Fig. 10), sie waren aber nur klein und einfach.

(D) Steinmesser mit Knauf

Diese Steinmesser sind auch ein charakteristisches Werkzeug der Jomon-Kultur, und ihnen ähnliche Formen sind in anderen Kulturen selten. Sie gehören



E. Fig. 11. Einige Beispiele von Messern mit Knauf
aus dem Muschelhaufen Numazu. ca $\frac{2}{3}$ N.G

nicht nur dem Kame-ga-oka Typus an, sondern man fand sie in der ganzen Jomon-Kultur und zwar ziemlich zahlreich. Ihre Formen sind recht verschieden, aber in der Mitte oder an der Seite einen einfachen, selten einen doppelten Knauf. Ihre Klinge ist meist halbmond- oder sichelförmig gebogen, aber manchmal findet sich auch eine länglich, blattformige Form (E. Fig. 11, in der Mitte). Sie sind gewöhnlich 3—7 cm lang und 3–5 cm hoch. Sie bestehen meistens aus Obsidian doch gibt es auch solche aus Flintarten und andere. Polierte Steinmesser habe ich in der Jomon-Kultur noch nicht gesehen. In Korekawa fand man auch nicht polierte Steinmesser ziemlich wenig.

(E) Steindolche

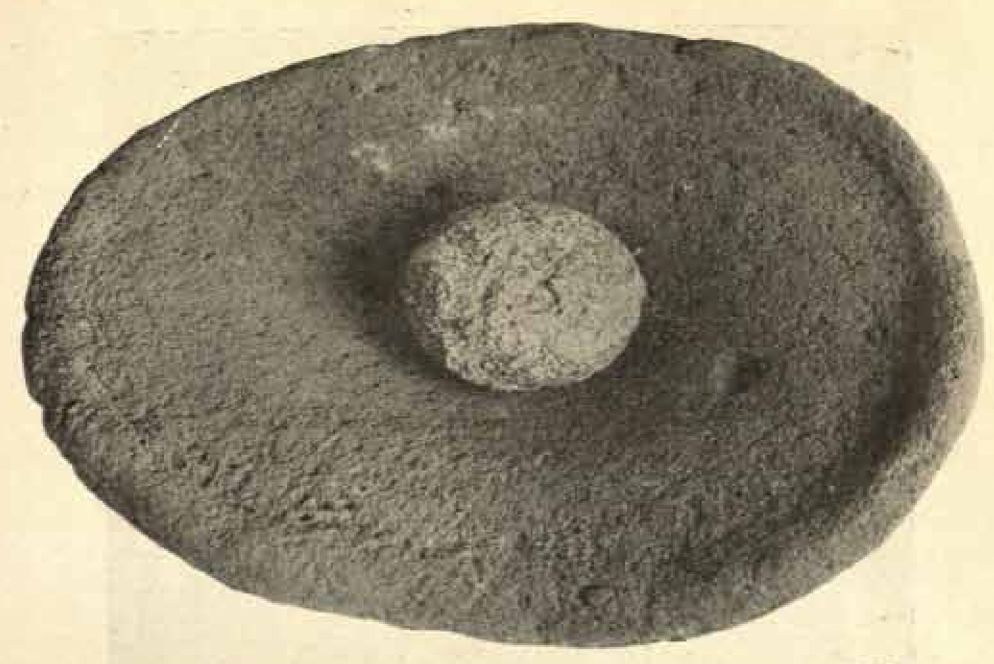
Steindolche finden sich meist in Gruppe II und III, und ziemlich selten. Die Form der Dolche ist ähnlich wie der einköpfige Steinstab, nur ist der Klingenteil des Dolches flach. Sie erreichen eine Grösse von 20—40 cm. Auch in Korekawa fanden wir solche. Die japanischen Steindolche sind alle poliert und nicht geschlagen.

(F) Lanzenspitzen

Sie sind nicht selten, besonders in der Gruppe I und II. Die Formen sind meist Lorbeerblattartig; die Grösse ist gewöhnlich 5—15 cm.

(G) Mahlsteine

Steinplatten von 20—60 cm Durchmesser, 10—15 cm hoch, mit einer glatt



E. Fig. 12. Ein Mahlstein aus Korekawa. (Photogr. nach Izumiyama) ca. ½ N.G.

geschliffenen oder polierten seichten Eintiefung und Rahmen nennen wir in Japan Steinteller, aber sie werden als Mahlsteine zur Verarbeitung von Früchten und Körnern angesehen. In Korekawa fand man ziemlich viele typische solche Mahlsteine (E. Fig. 12).

(H) Steinhacken

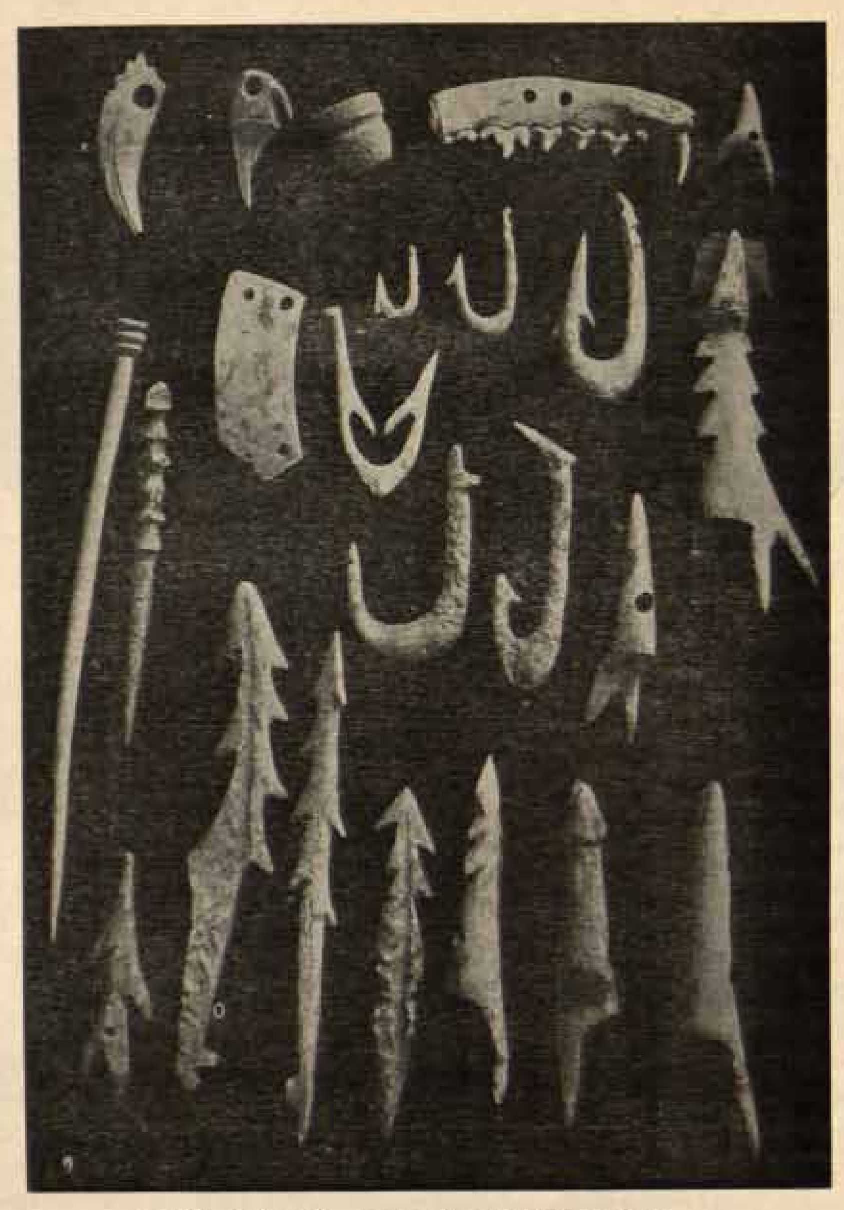
Diese sind in Japan sehr häufig, und meist nur roh zugeschlagen und kommen in vielen Formen vor. Hacke und Mahlstein u. a. sind Beweise einer Ackerbau-Kultur in der Jomon-Steinzeit.

(I) Weitere Steingeräte

Weiter fanden wir noch ziemlich viele andere Steinwerkzeuge, sowie steinerne Schmucksachen in dieser Gruppe: z. b. Steinplatten (Fig. 7, S. 249), Hammer, Schleifsteine, Steine mit Vertiefung, Steinringe, Steinbohrer u. a. welche ich bei nächster Gelegenheit erklären werden.

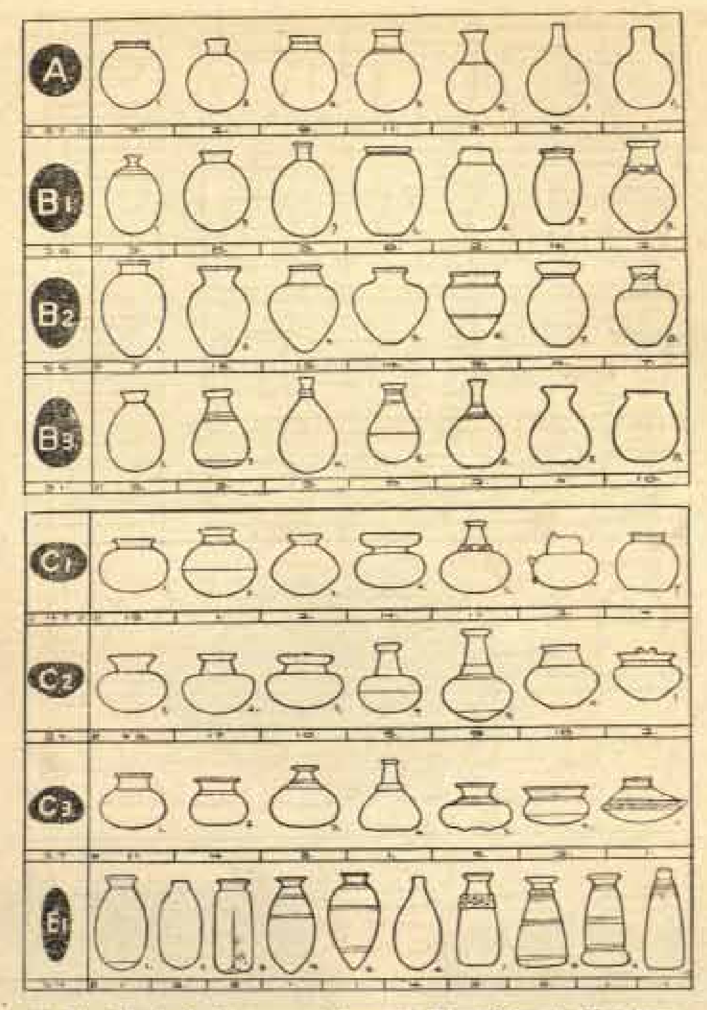
2) Knochen—und Geweihwerkzeuge

Die Knochen- und Geweihwerkzeuge sind im allgemeinen zahlreich;im Kame-ga-oka Typus sind sie besonders häufig. Aber an den Fundstätten Korekawa, sowie Kame-ga-oka fand man nicht viel, weil die Torfschichten Knochen und Geweihe nicht genug erhalten, und wahrscheinlich viele verfaulten. In den



E. Fig. 13. Beispiele der Knochen- und Geweihgeräte
aus dem Muschelhaufen Numazu. ca. ½ N.G.

Muschelhaufen fand man sehr viele und meist fein gearbeitete. Die Arten der Werkzeuge sind hauptsächlich Harpunen, Spitzen, Angelhaken, Pfeilspitzen, Nadeln und verschiedene Schmucksachen. In dem bekannten Muschelhaufen Numazu,



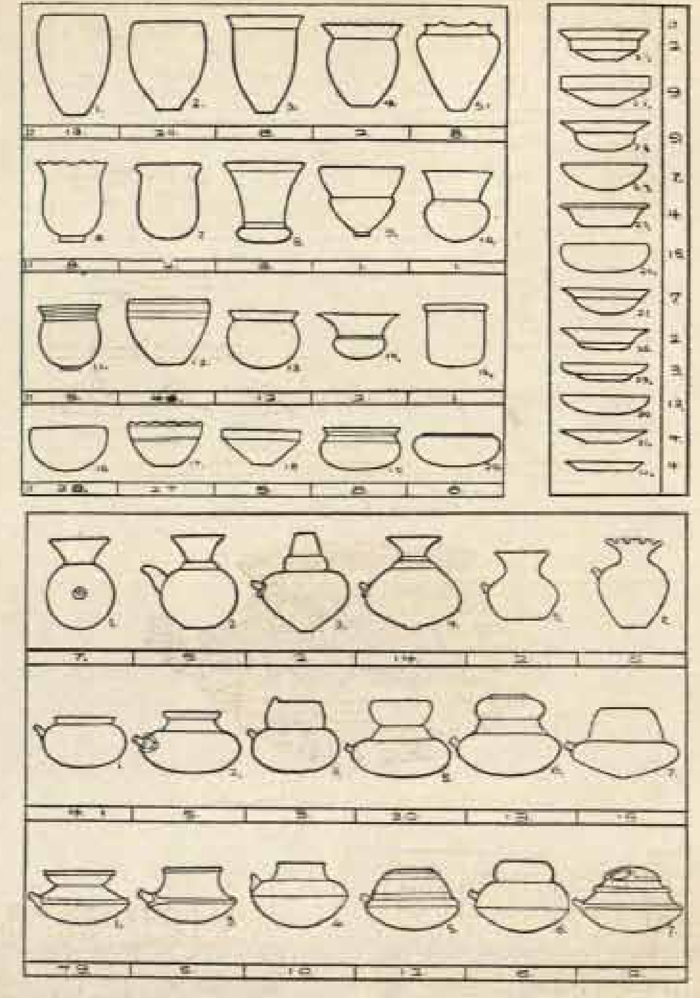
E. Fig. 14. A. B. Formenverteilung der Tongefässe aus Korekawa
(nach Sugiyama)

Provinz Miyagi (E.Fig. 2) fand man bisher wenigstens über 1000 fein gearbeitete verschiedene Knochen-Geweih- und Zahnwerkzeuge (E. Fig. 12.). Hierüber möchte ich bei weiterer Gelegenheit berichten.

3) Tonarbeiten

(A) Tongefässe

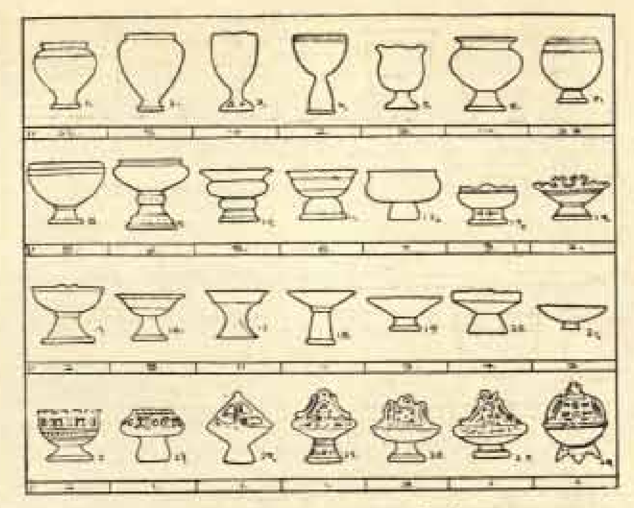
Die Tongefässe sind in den ganzen Jomon-Kultur sehr zahlreich. Wir fanden in Korekawa Tongefässe manchmal dicht zusammen an einen Ort. Besorders in



E. Fig. 14. C. D. (wie vorher)

den Torfschichten fanden wir viele vollkommene Gefässe, weil sie unter der Deckung des Torfs so gut erhalten blieben. (Taf. XV).

Die Formen der Tongefässe sind verschieden; Amphoren, Hohe Töpfe, Becher, Flaschen, Schüsseln und Näpfe u. a. wie in E. Fig. 14, A bis E gezeigt. Die besonderen Merkmale des Kame-ga-oka Typus sind die Entwicklung der Ausgussware (E. Fig. 14, D, Fig. 10. S. 252) und die Keramik mit Untersatz (E. Fig. 14, E, u. E. Fig. 16). Unter den Gefässen mit Untersatz findet sich wieder ein spezieller Typus, den wir in Japan Kohro-gata Doki (Räucherschalengefäss) (E. Fig. 19) genannt haben. Sie sind nicht selten in der Kame-ga-oka Kultur, und zeigen deutlichere Besonderheit als andere Gefässe. Ueber ihren Gebrauch



E. Fig. 14. E. (wie vorher)

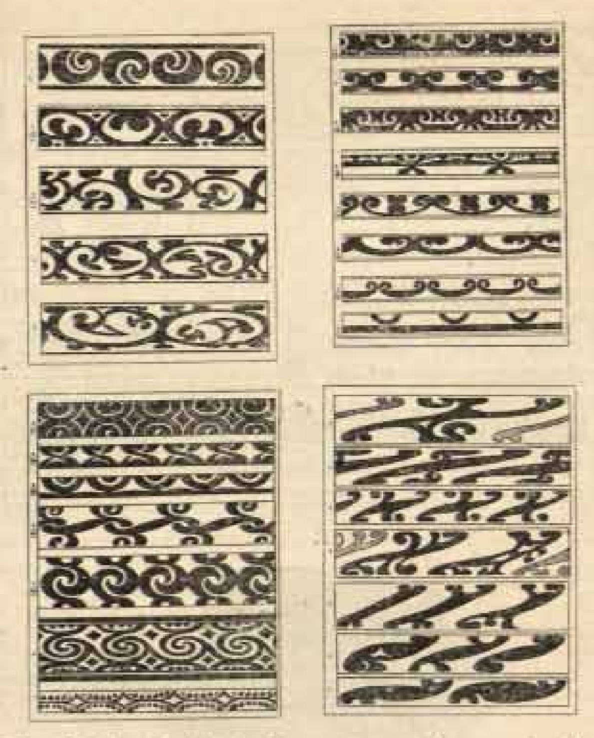


E. Fig. 15. Ausgussware aus dem Muschelhaufen Numazu.



E. Fig. 16. Gefässe mit Untersatz aus Korekawa. (Photogr. nach Izumiyama)

kann man noch nichts sicheres sagen, höchst wahrscheinlich dienten sie als Lampen. Sie finden sich auch in der jüngsten Stufe im Kwanto (III. Gruppe)(12).



E. Fig. 17. Charakteristische Ornamente vom Kame-ga-oka Typus. (Ka) Unter Nummer, bedeutet die Fundstätte Kame-ga-oka, (Ko) die aus Korekawa.) (nach Sugiyama)

Das Ornament des Kame-ga-oka Typus hat auch charakteristische Merkmale. Das Hauptelement des Ornaments ist die vollentwickelte Kurve, indessen finden sich auch Spirale, Mäander, S-förmige, X-förmige u.a. Muster und zwar meist stark komplizierte (E. Fig. 17, 18, Fig. 8. S. 259). Die Mattenmuster zeigen in diesem Typus schon etwas Rückschritte. Mehrere fein gearbeitete Gefässe haben das Mattenmuster nicht mehr, weil die meisten feinen Gefässe poliert sind, und dadurch das Mattenmuster zurücktritt. Nur auf den roh gearbeiteten Gefässen bleibt es. Manchmal fanden wir rotbemalte oder rotlackierte Keramik in verschiedenen Formen und Mustern; in Korekawa fanden wir solche ziemlich viel. Aber ich habe bisher in der ganzen Jomon-Kultur nur rotbemalte, und noch nie polychrome Keramik gesehen.

Die Technik des Kame-ga-oka Typus zeigt keine Besondereheit in der Jomon-Kultur. Die Keramik ist alle handgemacht; noch findet sich keine Anwendung der Drehscheibe. E. Fig. 20. zeigt hier ein schönes Beispiel der Herstellung eines Tongefass. Weiter findet man noch eine andere Art der Herstellung mit von unten nach oben aufeinander gesetzten ca 5—10 cm breiten Bandringen. Die Oberfläche mehrerer fein gearbeiteter Tongefässe ist zum grössten Teil poliert und

manchmal fanden wir sog. "Asphaltkeramik", d. h. die Oberfläche der Gefässe ist mit Asphalt bestrichen.

(B) **Tonidole.**

In Gruppe II und III, wo die Jomonkeramik ihren Hauptsitz hat, sind Tonidole in grosser Zahl (mehr als 400) gefunden worden. Auch in Kame-ga-oka sowie Korekawa hat man ziemlich viel gefunden. Sie sind meist 10—20cm hoch und stellen stehende menschliche Gestalten dar, seltener sitzende. Männliche Idole sind nicht so häufig; meist handelt es sich um weibliche, die unter starker Betonung der Geschlechtsmerkmale geformt sind. Die zum Kame-ga-oka Typus gehörigen Idole zeigen meist auf dem Kopf Darstellung der Frisur. (E. Fig. 21, 22)



E. Fig. 18.

Zeichung der Ornamentierung einer Tonfläche am Haneyama, Prov. Ugo.(Kame-ga-oka Typus)
1 Ornamentierung des Bauchteils
2. Verhältnisse zwischen Form und Ornament
3. Bodenornamentielung (nach Sugiyama)

(C) **Tonplatten.**

Die Tonplatten fanden sich auch in Gruppe II und III, wie die Tonidole. Die eigentliche Form ist viereckig oder oval, meist 12 bis 18 cm lang und 6—12 cm breit. Manchmal haben sie in der Mitte ein Loch. Sie haben gewöhlich auf beiden Seiten gravierte Ornamente, welche die gleichen Elemente wie bei den Tongefässen zeigen, aber in seltenen Fällen fand man auf der einen Seite Gravierung oder Reliefdarstellung menschlicher Figuren. Daher glaubt man, dass die Tonplatten zu den Tonidoren in enger Beziehung stehen. In Korekawa fanden wir nur allgemein ornamentierte Tonplatten (E. Fig. 23) sowie Steinplatten gleicher Formen.

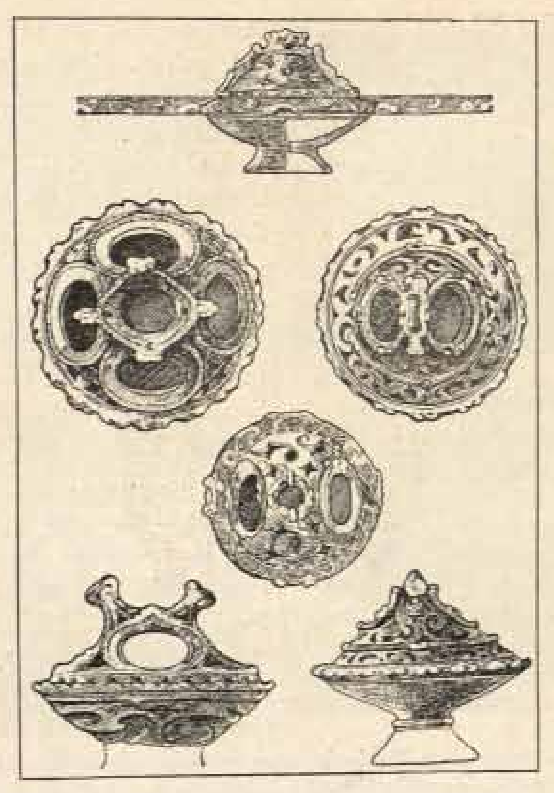
(D) **Weitere Tonarbeiten**

Tonmasken gehören auch zum Kame-ga-oka Typus, aber sie sind sehr selten; bisher wurden nur zwei solche gefunden. In Kame-ga-oka selbst sowie Korekawa wurden sie noch nie gefunden. (E. Fig. 25)

Tonspinwirtel fanden wir ebenfalls in Korekawa (E. Fig. 24,) dann noch tönerne Ohrringe (E. Fig. 24, unten, in der Mitte,) tönerne Armringe, Tonlöffel, Tonschellen und Tonstempel, auch in demselben Funde.

4) Holz- und Lackgeräte sowie Mattenarten

Holz- und Lackgeräte sowie Mattenarten sind nur in Korekawa und zwar



E Fig. 19. Sog. Räucherschalengefässe, charakteristischer Kame-ga-oka Typus. (nach Sugiyama)

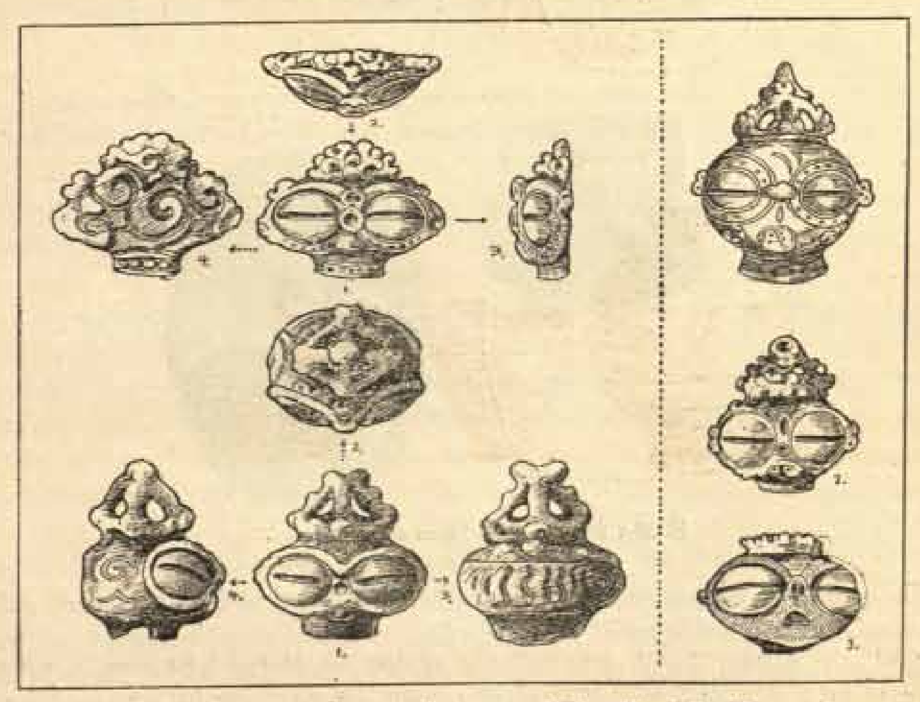


E. Fig. 20. Ein schönes Beispiel der Herstellung eines Tongefässes aus dem Kame-ga-oka Funde. (nach Sugiyama)

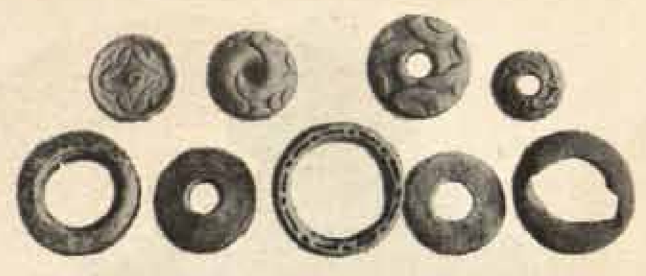
ziemlich viel gefunden. Der Gebrauch des Holzes als Material ist schon hoch entwickelt, es kommen als Waffen Degen(?) und Bogen vor, aber noch hat man die Schäfte der Pfeile und die Stiele der Beile nicht gefunden,(Fig.1.S.256) obwohl Pfeilspitzen und



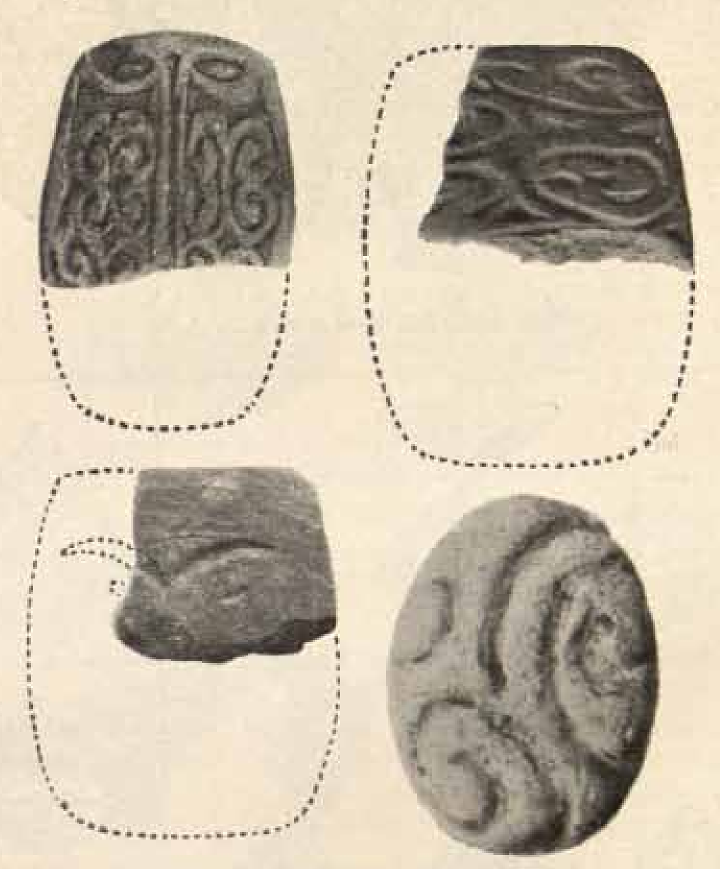
E. Fig. 21. Das grösste und typische Tonidol aus Kame-ga-oka Funde. (nach Kohno) 38 cm hoch



E. Fig. 22. Köpfe der zum Kame-ga-oka typus gehörigen Tonidole, links aus dem Kame-ga-oka Funde, rechts aus Korekawa. (nach Sugikama)



E. Fig. 23. Tönerne Ringe aus Korekawa. (Photogr. nach Izumiyama)



E. Fig. 24. Die Tonplatten aus Korekawa.

Beilklingen sehr viel gefunden wurden. Becher, Kämme und weitere noch unbestimmte Sachen wurden auch viel gefunden. Ferner echte Lackgeräte und verschiedene Geflechte, sowie nicht wenige Mattenarten. Da solche Reste in den Torfschichten gefunden wurden, sind sie mit höchstem Wassergehalt gesättigt. Sobald nun derartig gesättigte Holzstücke der Luft und der Wärme länger



E. Fig. 25. Die schönste Tonmasken aus Asoh, Prov. Akita.
(Kame-ga-oka Typus) (nach Sugiyama)

ausgesetzt werden, und das Wasser verdunstet, so schrumpft die Oberfläche des Holzes oder der Lackgeräte, sie springt, zieht sich zusammen, und das Stück fällt schliesslich auseinander, von der ursprünglichen Form fast nichts mehr zeigend. Nur durch eine besondere Behandlung lässt sich das ursprüngliche Aussehen der Stücke erhalten.

(A) Bogen

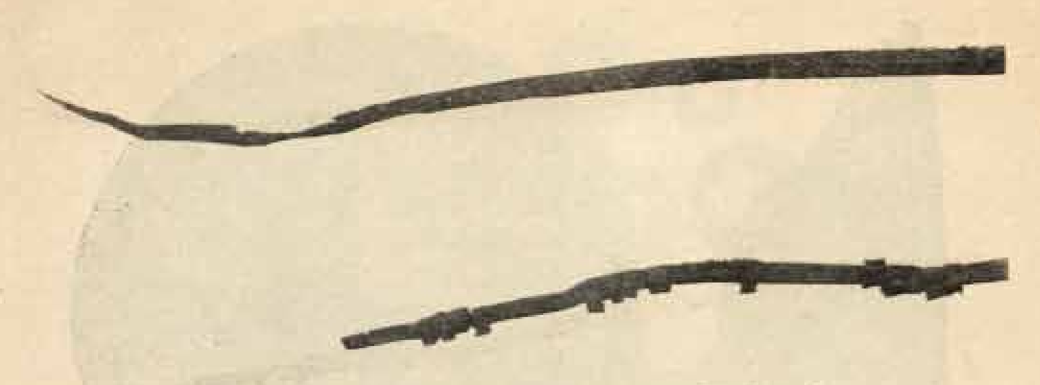
In Korekawa hat man bisher 5 Bogen gefunden, einer 173 cm lang, die vier anderen kleiner ca 100—150cm lang. Der eine kleine Bogen ist sehr fein gearbeitet. Er besteht aus zwei Leisten, die mit einigen schmalen Rindenstreifen fest zusammen gebunden sind. Die Oberfläche eines kleinen Bogen ist lackiert. E. Fig. 26. unten ist der feinste steinzeitliche Bogen in der Welt.

(B) Schwertähnlicher Stab.

Er ist aus Kryptomerienholz gemacht, 70 cm lang und auf der ganzen Oberfläche lackiert. Er hat einen Griff mit Knauf und gravierter Verzierung (Taf. X. u. Fig. 8, S. 266). Da er zu schwach und fein zum echten Gebrauch ist, handelt es sich wahrscheinlich nur um ein Würdeabzeichen. Nur dieser einzige wurde in Korekawa gefunden.

(C) Degen (?)

Die Degen (?) über 10 Stücke, sind auch in Korekawa gefunden. Sie



E. Fig. 26. Bogen aus Korekawa (Photogr. nach Izumiyama)
oben, 173 cm lang. unten 124 cm lang.

bestehen auch aus Kryptomerienholz und sind meist 60 cm lang und 4—10 cm breit. Mehrere Degen (?) haben auf der Oberfläche einige gravierte Verzierungen und am breiten Ende der sog. Klinge finden sich zwei vorspringende Rechtecke, wahrscheinlich zur Befestigung in einem Griff (?) (Fig. 6. S. 264).

(D) Hölzerne Kämme

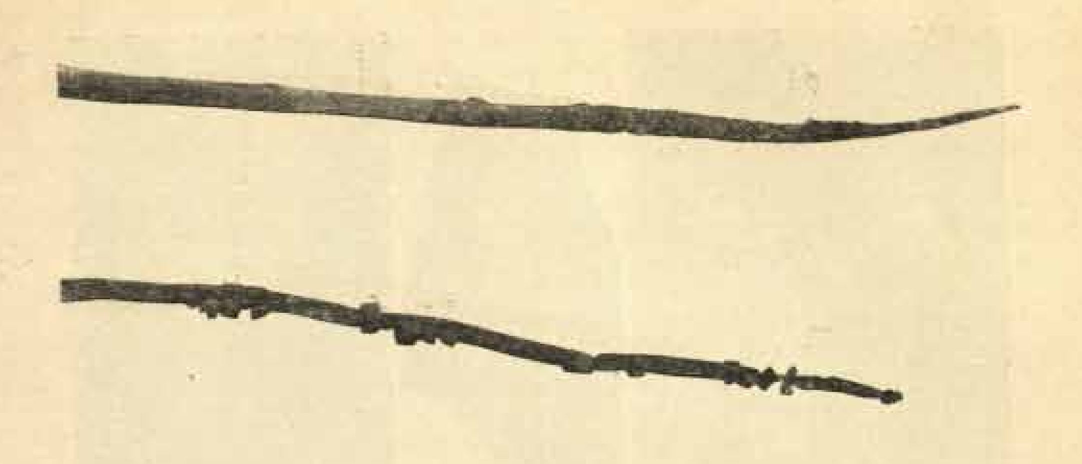
Von Kämmen sind ausser in Korekawa einige Bruchstücke in dem Muschelhaufen Numazu gefunden. Die Form des Blatts ist dreieckig und ca 5 cm lang ca 3 cm hoch; hier haben sie Ornamentierung und sind darüber lackiert. Die Zähne sind 5 bis 10 cm lang und der einzelne Zahn wurde in das Blatt hineingesteckt.

(E) Hölzerner Becher

Ausser Bruckstücken wurde ein vollkommener Holzbecher gefunden. Er ist feingearbeitet, 3.2cm hoch, hat am Oberrand 8cm Durchmesser, und seine Oberfläche ist lackiert. Die Höhlung lässt noch die mühsame Kunst der Bearbeitung erkennen. Dass man eine solche mühevolle Arbeit beim jetzigen Zustand der Technik nicht ohne Hilfe der Drehscheibe verfertigen kann, wurde mir von einem Holztechniker selbst gesagt. (Fig. 10, S. 269)

(F) Lackgeräte

Lackgeräte sind bisher im Torfschichtenfunde Shimpukuji, beim Dorf Kashiwazaki, Prov. Saitama im Kwanto (III Stufe in III Gruppe) gefunden (13). In Korekawa fanden wir noch mehr als in Simpukuji. Die Formen der Lackgeräte sind verschieden, wie die der Tongefässe, z. b. Schüsseln, Kolbe u. a. Sie sind nicht gross, die Kolbe ca 8.5cm lang 8.5cm hoch. Man verfertigt die Lackgeräte in dem man zuerst aus Halmen, Stengeln oder Fasern die gewünschte Form flechtet, und dann die äussere und innere Seite mit tönerner Erde verschmiert, darauf poliert man besonders die Oberfläche sorgfältig und lackiert darüber. Unsere steinzeitliche Technik ist dieselbe, die man noch heute verwendet; für



dieselben Objekte das gleiche Material und die gleiche Technik.

(G) **Mattenarten**

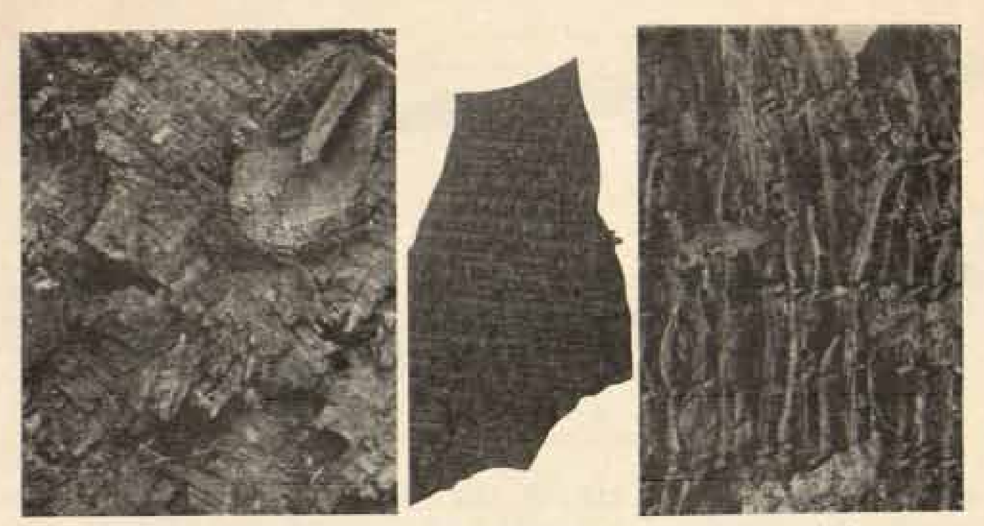
Mattenarten sind nur in Korekawa gefunden. Die Arten sind ziemlich verschieden, aber wir zeigen nur einige Beispiele in der E. Fig. 27. und Fig 13, S. 275. Wir nennen eine Art unserer steinzeitlichen Keramik Jomon-Ware, weil ein Merkmal der Jomon-Ware die sehr vielen Jomon (Mattenabdrücke) auf der Oberfläche sind. Bis jetzt waren leider nur Abdrücke (Negative) der Matten gefunden, noch nie echte Matten selbst. Nun haben wir endlich einmal ihre Positive entdeckt(Fig.13,S. 275).Ich werde später besonders über diese Mattenstückchen berichten.

VI. Schluss

Die von uns gemachten Korekawa-Funde bedeuten einen grossen Fortschritt für die japanische Praehistorie, indem besonders der Umfang der steinzeitlichen Kultur viel klarer geworden ist. Die oben kennen gelernten entwickelten Tonarbeiten, ferner die Holz- und Lackgeräte, sowie die Mattenarten beweisen eine hohe Kulturstufe; und die Kulturreste zeigen, dass wenigstens die Korekawa Steinzeitleute schon in die Ackerbau-Kultur eingetreten waren.

Die parallele Stufe durch Korekawa vertretenen Kame-ga-oka Typus ist der sog. Ohmori Typus (III Stufe) im Kwanto (Gruppe III); beide Stufen haben jede ihre besonderen Merkmale, doch finden sich viele Beziehungen zwischen beiden (14).

Nun dauert das japanische Neolithikum ziemlich lang, länger als man früher meinte. Die Steinzeit dauert in entfernten Gegenden noch fort, als in Mittel Japan (Gebiet vonGruppeIV)schon die Bronze-Eisenkultur(sog. Yamato-Kultur)begonnen hatte. Die reine Jomon-Kultur bleibt auf die Steinzeit beschrenkt und ist dann verschwun-



E. Fig. 27. Einige Mattermarken am Korekawa. (wie vorher) etwas verkleinert

den, denn in Japan hat man eine zu der Jomon-Kultur gehörige sichere Stein-Bronzezeit noch nicht gefunden. Als Regel sehen wir in der Steinzeit einen deutlichen Unterschied zwischen Jomon- und Yayoi-Kultur, nur manchmal findet sich zwischen beiden eine Misch-Kultur. In der Stein-Bronze Zeit dagegen finden wir reine Yayoi-Kultur oder gelegenheitlich Jomon-Yayoi Mischkultur. Nur in der Insel Hokkaido (Gruppe I) kann man vielleicht spätere Jomon-Kultur finden. Der Grund für das Verlöschen der Jomon-Kultur im Hauptland (Gebiet von Gruppe II—IV) war wahrscheinlich die stärkere Macht der Yayoi-Kultur, sodass nach und nach die Yayoi Einflüsse in die Jomon-Kultur eindrangen, und letztere in der Zeit der Stein-Bronzekultur schon fast ganz Yayoi-Kultur geworden war. Dieses Unterliegen der Jomon-Kultur zeigt sich am deutlichsten in der Gegend von Kyushu und Kwansai (Gebiet von Gruppe IV u. V) in der Kwanto Gegend (Gebiet von Gruppe III) weniger als in den vorigen, in der Tohoku (Gegend Gruppe II) noch seltener. So denken wir, dass die Yayoi-Einflüsse zuerst von Süd-West Japan gekommen sind, und sich nach und nach in der Nord-Ost Richtung verbreiteten. Mit andern Worten kann man so sagen: die Kame-ga-oka Stufe der Jomon-Kultur dauert bis zu der Zeit wo die Yayoi-Einflüsse in Nordost Japan eindringen. So kann man die Zeit der Kame-ga-oka Stufe als vollentwickelte Blütezeit der Jomon-Steinzeit betrachten, zu einener Zeit, wo die Jomon-Kultur sich im schon ihrem Ende nähert.

Für die Mithilfe bei der Korrektur dieses Berichts danke ich Herrn Dr.phil. C von Weegmann Tokio.

(1) Nach anthropologisches Institut der Kaiserlichen Universität zu Tokio; Sekki-jidai Ibutsu Hakken Chimeihyo. 1928. (Tabellen der japanischen steinzeitlichen Fundstätten)

(2) Ich unterscheide zwischen E. Fig. und Fig. E. Fig. bedeutet Abbildung zu Aufsätzen in einer europäischen Sprache; einfach Fig. solche in japanischen Aufsätze.

(3) K. Hasebe, Ento-Doki-Bunka. Jinrui-gaku Zasshi (Zeitschrift für Anthropologie), Heft. 1. 42 Bd. 1927. (auf japanisch)

(4) Satoh hat zweimal über die Kame-ga-oka Funde berichtet; der erste Bericht ist, "Ausgrabungsbericht über die Kame-ga-oka Funde" Jinrui-gaku Zasshi, Heft 118, XI Bd. 1896, der zweite Bericht ist, "Zweiter Bericht über die Kame-ga-oka Funde", dieselbe Zeitschrift, Heft 124, XI Bd. 1896. (beide auf japanisch)

(5) Die Fundgegenstände von Kame-ga-oka sind fast alle verkauft, nicht nur in Japan, sondern auch nach dem Ausland. Ein Teil der japanischen steinzeitlichen Sammlung des Museum für Völkerkunde zu Berlin besteht auch aus Kame-ga-oka Funden, auch Dr. Belz hat solche gekauft und nach Deutschland gebracht.

(6) Siehe: Y. Koganei, Bestattungsweise der Steinzeitmenschen Japans. Zeitschr. f. Eth. 55 Jg. 1923.

(7) Siehe E. S. 27.

(8) Ich untersuchte diesen Muschelhaufen bei der Höhlenuntersuchung im Jahre 1925 mit Prof. Y. Koganei und Prof. K. Hasebe; dabei hat Hasebe auch den Muschelhaufen Ohbora ausgegraben, wobei ich auch teilnahm. Ueber Ohbora hat Hasebe in der Jinrui-gaku Zasshi Heft 10, 40 Bd. 1925. berichtet (auf japanisch).

(9) Ich veröffentlichte darüber nur eine vorläufige Nachricht mit Yahata in Jinrui-gaku Zasshi, H. 10, 40 Bd. 1925, auf japanisch.

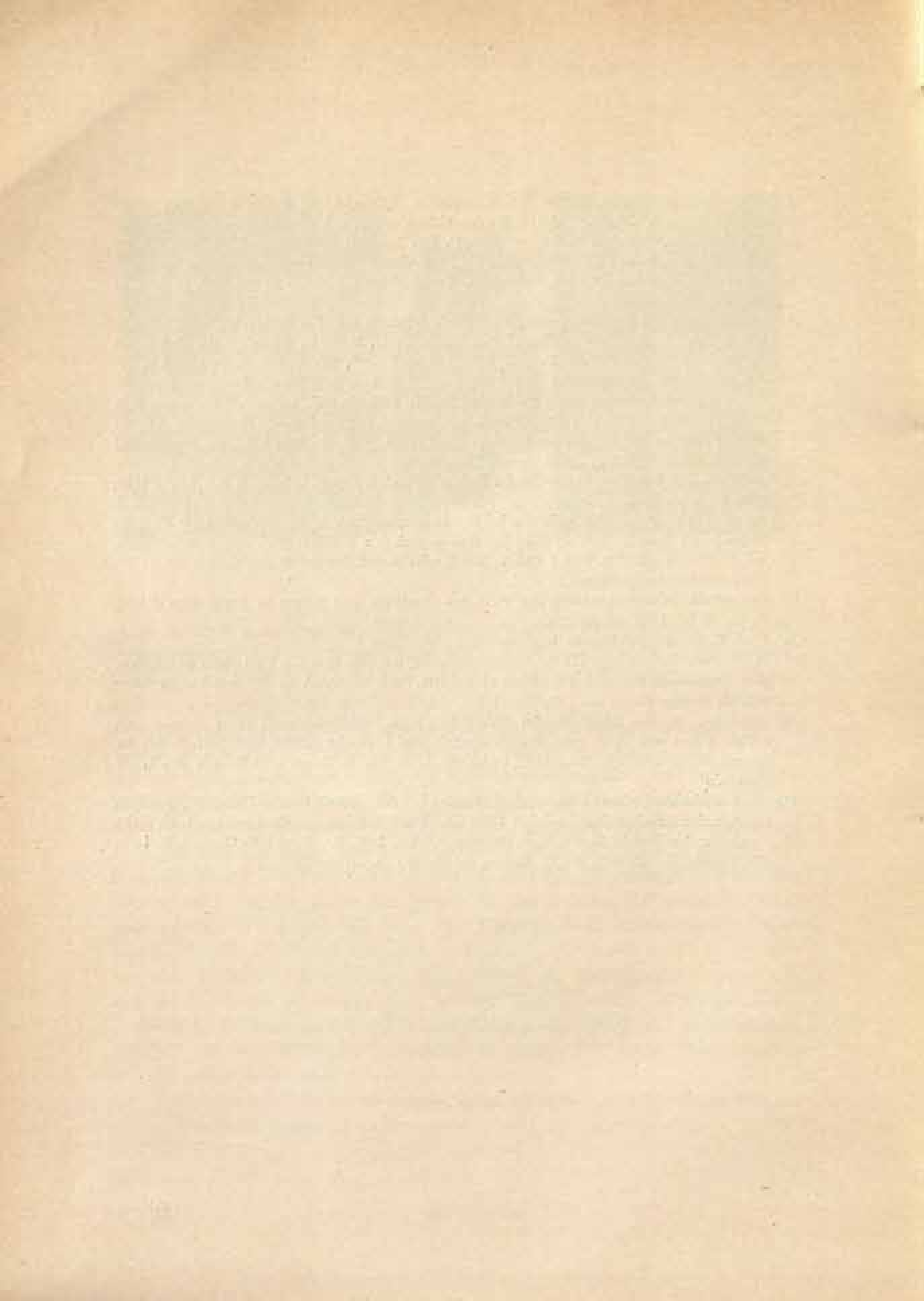
(10) Nach K. Hasebe, Senshi-gaku Kenkyu, 1927.

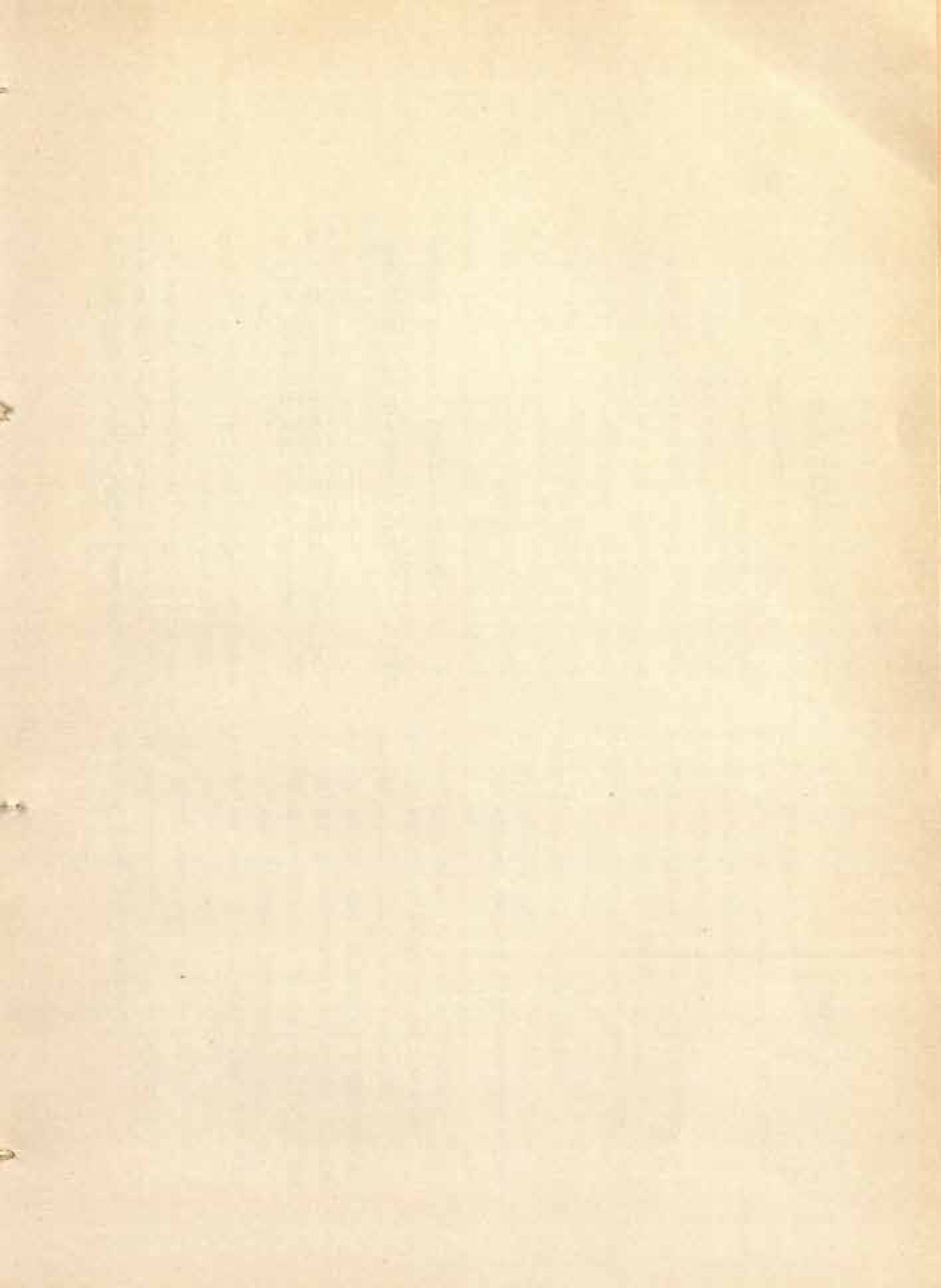
(11) In der Nara Periode (710-770 n.c.)(Sandai-jitsuroku) hat man über die Pfeilspitzen geschrieben, aber man damals, sie seien von Himmel gefallen, und die Geschosse der miteinander kämpfenden Götter.

(12) Wir haben in dem Muschelhaufen Shimpukuji, beim Dorf Kashiwasaki, Prov. Saitama auch solche Kohro-gata Doki gefunden. Shimpukuji gehört zu der jüngste Stufe (III. Stufe) der Kwanto Gruppe. Ueber Shimpukuji berichtete I. Kohno in Shizen-gaku Shohoh No. 2. auf japanisch.

(13) Die Torfschichtenfunde von Shimpukuji wurden bei dem Muschelhaufen Shimpukuji gemacht unser Institut arbeitete dort im Jahre 1926; eine Veröffentlichung darüber erfolgte noch nicht.

(14) Vergleiche den Bericht über S. Yagi, Shiizuka (Globus, 1896, No. 10) und K. Ohyama, Kaizuka (Shizen-gaku Zasshi, 1929, No. 5. Resume auf Deutsch) u. a.





第二十二圖。同頭部。右は是川、左は龜岡出土。（據杉山氏）

第二十三圖。龜岡式土板の一例。是川出土。

第二十四圖。龜岡式所謂紡錘車並に耳環。是川出土。泉山氏藏（同氏寫眞）

第二十五圖 龜岡式土面の一例。羽後麻生出土。東大人類學教室藏（據杉山氏）

第二十六圖。是川出土。弓の一例。泉山氏藏（據同氏寫眞）

第二十七圖。是川出土。編（組）物の一例。泉山氏藏。（據同氏寫眞）

御斷り 本號には喜田博士も御執筆下さる豫定でありましたが御病氣の爲め玉稿を頂く事が不可能となりました。（編者）

歐文是川遺跡挿圖解說

はしがき。是川の樣な、立派であり、且つ數多い、遺物の出土を見て居る所は、我國でも數多くない。且つ遺物存在の狀態が全く特別である故、これ等に就て、一と通りを外國にも紹介する目的で、書いたものである。我國、史前事實に就ては、餘り多く外國では、知られて居らないから、是川を紹介するにしても、餘りに局部的では、全般から見ての位置が、正しく見られない。で、色々と誤解も起ることを顧慮して、成る可く廣く、且つ是川を述ぶるに當つても、この樣な文化を含む、所謂龜岡式に就て、多くを述べ、從つて、色々、是川以外のものまで、取り入れて居る。挿圖は、一度邦文で研究せられたものを、成る可く採用する方針であつたが、大分、色々增加した故、かく解說欄を設けた次第である。

第一圖。我國石器時代縄紋式文化を、大別して、地方別により、これを、北海道、東北、關東、關西、九州の五群に分つて、地理的關係を示したもの。

第二圖。岩手・宮城兩縣地方に於ける、二三貝塚と洞窟位置を例示したもの。龜岡式文化中にも、泥炭遺物層以外の諸遺跡があり、これに關した說明の爲の圖である。

第三圖。岩手縣大洞貝塚槪測圖。稜部に位置を占める貝塚は、東北には、私の見た限りに於ても、其圖の大洞の外、數例ある。其

一例として例示したもの。

第四圖。大洞貝塚出土の人骨で單なる人骨出土の一例。(八幡氏寫眞)

第五圖。岩手縣梅木女神洞窟。(右同)

第六圖。龜岡泥炭遺物層。佐藤氏記載のもの。

第七圖。是川泥炭遺物層より、略東北二三十米の所、臺上にあつた爐跡。泉山氏發掘。(同氏寫眞)

第八圖。是川泥炭遺物層の一部を、約實大にしたもの。この樣に、クルミ、トチなどの實が、重つて居る。

第九圖。是川出土石斧の一例。泉山氏藏。(同氏寫眞)

第十圖。同石棒の一例。(同右)

第十一圖。宮城縣沼津貝塚出土石匙の一例。石卷町、遠藤、毛利氏共藏。

第十二圖。是川出土石皿の一例。泉山氏藏。(同氏寫眞)

第十三圖。沼津貝塚出土、骨角器の一例。遠藤、毛利氏共藏。

第十四圖。是川出土・土器形態一覽(A—E)(據杉山氏)

第十五圖。龜岡式注口土器の一例。沼津貝塚出土・遠藤毛利氏共藏。

第十六圖。龜岡式臺付土器の一例。是川出土、泉山氏藏。(同氏寫眞)

第十七圖。龜岡式土器紋樣の一例。圖中番號の下に(Ka)とあるは。龜岡出土、(Ko)は是川出土。(據杉山氏)

第十八圖。龜岡式土器に於ける形態と施紋部との關係・羽後、羽根山出土。(據杉山氏)

第十九圖。龜岡式香爐形土器の一例。(據杉山氏)

第二十圖。龜岡式土器製作の一例龜岡出土。(據杉山氏)

第二十一圖。龜岡式土偶の一例。龜岡出土。

云ふ事が出來るのである(此れに仍つて見ても、日本の石器時代は、非常に長い時代に亘つて居たと云ふ事が出來る)。さすれば、此の甲蟲の生活し得た頃の(此の甲蟲の發掘された個所の層位的研究が出來れば、一層正確な結果が出るが)是川遺跡は、其の地理的環境に於て、現在とは、相當異つて居た事は想像に難くない。又、此の甲蟲の生態的分布(Ecological Distribution)よりして、此の遺跡の所在地は、相當沼地に近い、濕潤の地であつたと云ふ事が出來る。

〔此の甲蟲の發見は、動物地理學の研究に從事する著者にとつては、甚だ興味あるものである。其の詳細は、來る八月に開かるゝ第六回日本動物學大會に於て、論及する心算である。〕

——一九二九、六、二三——

是川泥炭層出土甲蟲の一種に就て

鹿野忠雄

史前時代の生活は、概して文化の低級な、環境の影響を受ける事大なる生活である。地下より出土する斷片に仍つて、其の時代の生活を考察する場合には、其の生活の行はれた環境は特に注意せられねばならない。

大山史前學研究所の青森縣是川の遺跡發掘も、此の種の立場から行はれて居る。卽ち、同遺跡より出土する動植物の遺骸に仍つて、其の當時の石器時代の生活の一面を見やうとした。そして、其處より發掘された、獸、鳥、魚、或は介類等は、其の當時の環境を語る資料として、他の研究者に仍つて、記述せられるであらう。同遺跡よりは、上記の種類に止らず、甲蟲の斷片も、間々、其の分解し難いキチン質の故を以て、出土するのであるが、筆者は、此の出土する甲蟲の種類を、上述の動物の種類と列記したしとて、其の鑑定と、原稿を依頼せられて終つた。

所が考へて見ると、上記の諸動物は、直接、食料品として、石器時代人の生活に關係を有することであれ、此の微小なる昆蟲類に至つては、其の樣な事がない。唯種類の列記は何等の價値がない。其處で、同泥炭層より出土した一甲蟲に就て、此れとは、異つた、一考察を記述する事に仍つて、その責を補ふ事にしやう。

元來、動物は、其の生活する環境は、極めて鋭敏なものである。而して、一動物の發見は、其の地の氣候風土、又居住地帶の如何を明示する事が屢々である。卽ち一標準化石に仍つて、其の地質時代の如何を知り、マンモスの遺骸發見に仍つて、其の寒冷なるを知るが如きである。

此れと同樣にして、是川出土の一甲蟲は、甚だ興味ある暗示を與へるものである。卽ち其の甲蟲の一種と云ふは、ゴミムシ科 (Carabidae) に屬する Licinus 屬の一種であるが、此の屬の甲蟲は、全くの歐洲系のもので、現時の分布に於ては、歐洲に分布するのみで、未だ日本版圖內からは、未知の種類である。すると此の一甲蟲は、過去一時代に於て棲息し、現時に於て、絕滅したと

出土品は過去の製作に偉大な工藝文化の一面を暗示してくれたものである。この有機質遺物の研究はそれ自身を研めることが重要であるが、從來の硬質遺物に併行してこの進んだ軟質遺物の兩者の研究こそ工藝學的な見地を與へて呉れるに相違ない。並に西日本と東日本とに於て石器時代にこの工藝的見地に於て非常の差異が認められる。關東から奥州にかけては石器時代人の永い樂天地であつた、從つて遺物から見てもその工藝は充分且つ高度に發達して居つた、軈て縄紋文化は漸次その姿を改め、新入文化の流に合して行つたとも考へられる。是川出土の有機質遺物中に往々極めて高級の工藝品のあることは縄紋文化の發達絶頂にあつた頃、新入文化との接觸によつて產れたもので、そこには多分の摸倣的作品が出來たと思はれる。重藤の弓、裝飾太刀の如き又は轆轤應用はそれではないか。斯る推定が許されるならば、當然利器としても石器と共に金屬器が併用されたとも考へられる。斯る綜合的研究は前途猶遼遠であつて今俄かにいづれとも云ひ難いが、過去の木製工藝に對して石製工具の刄部を省みた時、この利器の問題からかく解する方が現在としては妥當すると考へたのである。再び云ふ將來の考古學は有機質遺物と無機質遺物の並行研究に行くべきである。

へても粒子や組織を考慮せずしては、結局この組織から必然的に生れる四十五度の角度の縄蓆紋の擬似紋に外ならないのである。又この編物組織のものならば表裏を粘土に壓しても紋理は同一方向に現れ、表裏を段狀に壓しても左右傾斜の羽狀紋とはなり得ないのである。この組織の復原に關しては他日詳細に發表する故茲には省略する事とする。

結　語

是川泥炭遺跡地に於ける有機質遺物に就て大略過去の出土遺物の目錄的豫報を行つたが、是等の遺物は石器時代の工藝の水準からは到底製作し得ない樣な優秀さを示して居る、石器土器、骨角齒牙貝器等の硬質製品に現れた技工を觀察するに馴れた吾々は同時代にこんな技術がありとは想像に難かつた。更に有機質遺物に施された塗料工藝の多樣性を一見した時には、他の製作品に比較して恰も文化階梯の異なる工藝品とも考へさせる。併し是等遺物の製作手法を逐次仔細に研究するならば必ずしも工藝の差異が年代的に文化的に甚だしく離れたものでない事がうなづかれるであらう。例へば塗料に於てもアスハルトや朱漆は液體の浸潤を防ぐ爲に陸奥式土器に最も多く塗布されて居る。土器に表れた彫刻文樣及形態も共通し、且つ同一遺跡より同時に伴出發見されるのであるから、石器時代の同時期所在と看做すことは些も不合理でない。

凡そ工藝はその用材と工具によりて、手法と形狀に特異性が誘導されるものであつて、石製品の中石斧の如きは利器面の打製が磨製に鉛刄が片刄に鈍より鋭に變化を辿る如く、その石質と用途によつて形態は制限を受け、骨角器類の製作には石器で削るより砂岩質の砥石がより效果的な工具となつて研磨され、其他土器の製作に於ても粘土が主材となつて成形から燒成火度を規定しつゝ發達した如くである、猶土器は容器として實用品であるのみならず、一方裝飾品としては形態に文樣に實用を離れた意義をおびること、各種の重要な石器、骨器類の如き用材にによる制限がない。又土器の縄蓆紋も初めは土器製作上の欠くべからざる必要からであつたが、これが漸次裝飾的使命を帶びつゝ變遷しては態々編目の精然たる雕型の印影には刺繡まで施すと云ふ風に纖維工藝としてこの植物質が纖維の精練と工具の發達につれ、組み編み織の組織上の推移をうながして行つたものである。從つて工藝の推移變化は材料と工具と時の相互關係をも考へられべきである。我々は曾つて斯樣な有機質遺物を與へられなかつた時に於ても、縄紋土器の研究から當時の纖維工藝の發達を豫想しては居つた。然る時最近上記の如き植物質製品を得て、從來惠まれなかつた有機質遺物の

た構成まで及ばなければ本質的とは云ひ得ない。それにもまして縄蓆紋の原體が是川遺跡より出土したので原體からの縄蓆紋の研究に向ひ得る樣になつたのである。

縄紋土器に現れた縄蓆紋の纖維質やその組織は多種多樣である。併し組織の異なるものでも表面に現れた編目が殆んど同一に現される事が多い。勿論是川での採集品が縄紋土器凡ての縄蓆紋原體の形式を供へてゐるものではないが、少なくても各地に普遍的に行はれて居る斜線方向の縄蓆紋の組織の原體である事を認める。

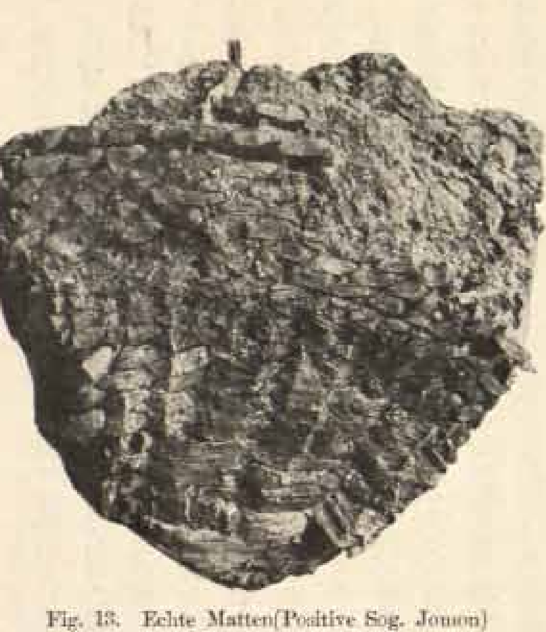


Fig. 13. Echte Matten(Positive Sog. Jomon)

抑第十三圖は是川出土の縄蓆紋の原體組織をなす一種の籠である。この組織を見るに經となるものは竹を極く細く割つて骨子とし、緯なる纖維質の、フトヰ又はカヤツリ草の如き撚のない草の莖を二本撚合せつゝ編み上げた一種の籠で、この編方は底部敷の處で骨子である竹を放射狀に集合せしめ、その集合點から緯であらく編み込み經を絡ますに五六本置き位ゐにして漸次に三四本より二本置き位ゐにしたものを經に並行に編み上げた爲め此粒子は筬の目を見る如き並行的に並列したものとなり最上部に至つて二本揃みのものを經を一本置きにづらした爲めに茲に粒子は四十五度の角度をとり斜線方向の縄蓆紋の如き編目となつて現はれたものである。縄蓆紋の內斜線方向の內に左向きと右向きの物が見られるが、この種帶狀のものは多く四十五度內外の角度を有つものが多い。この角度と編目の粒子の位置がこの斜線方向の縄蓆紋の特徵である。先に縄蓆紋を複原せんとして臺灣の編物の綾織から考へたが角度が橫に三十五度縱に八十度位ゐのものとなるので、この橫縱四十五度となるものを他の土俗品から求めて居つた、幸ひ臺灣蕃族の籠やアイヌの古い編物類からこの是川出土の縄紋と同一な組織で四十五度の角度を示す蓆紋を得たのである。從來の縄蓆紋の複原は編始めの基點を考慮におかず、或種の編物の一部分から四十五度の角度に倣らつて捺印した物であるならば、形式的にこの縄紋を複原した樣に見

編物は、土器の製作に當つて底部の粘土が密着せぬ様網代敷物の上に置くことから自然と捺されたものと考へられる。その他殊更底面の文様として施されたものもあらう。併し底面に文様として利用した所でその効果は小であり、多くは無雜作に壓つけられた影跡がある故恐らく前の場合が當るであらう。孰れにしても當時竹製の敷物類が盛んに製作使用されたことは考へられる、その他竹製編物容器に直接粘土を塗つて型として燒かれた土器も相當各地から發見されて居る。併し東北地方にはモウソウ、マダケ、の如き太い竹は見られない、その爲か東北地方（殊に陸奥地方）の土器底面は關東の夫に比して編物の經緯の幅が小である、篠竹の如き細いものは東北地方各地にあり、是川遺跡から出土する籃胎漆器類の内部の編物の骨子である、經なる纖維は主にこの竹を細く割つたもので、この經に草の纖維を巻きつけたものである、その他石鏃に附した箭もこの篠竹の一種であらう。

蔓製品

蔓類の中にはブドウ、フジ蔓の如き太きものとアケビ其他草の蔓の如き細きものもある。此等を材料とした蔓製品には太きものは半截して細くし之を組合せたものは繩や紐となる、是川の泥炭層中にこの種幾片が多く見られる。併し此等は他の裝飾品の如く塗布物を施してない爲完全に保存されて居るものは少ない。挿第十二圖のものは雪國のカンジキの外廓を失なつたやうなもので、當時の蔓製品として結束狀態を窺ふには好資料である。最大徑長さ九寸巾五寸七分。木質はニキオと推定される。ニキオは今も陸奥地方に繁殖して居り幹が軟かく屈曲自在で、現今山地で荷造り繩の代用品として使用されつゝある。

草類纖維製品

蔓類は質によつては連續と結束に不適當なことがある。併し纖維として應用を見る時には撚に依つて連絡されこの延長は自在である。然るに草類の蕁や栗の如き柔軟性に富む纖維質は比較的容易且つ簡便に使用することが出來る。禾本科類の如きものは手近で常に編物類に應用され、其他藺草や莎草類の如きは撚らなくとも莚や菰などに作る事が出來る。

繩紋土器に壓せられた繩席紋はこの種纖維製品に對する最も重要な研究資料であつた、併し過去の繩紋研究は拓影による複原位ゐで終始して居つた。土器面に壓せられた繩席紋の研究は拓影に現はれる紋理だけでは不充分で寧ろ深さ、即ち繩席紋の組織され

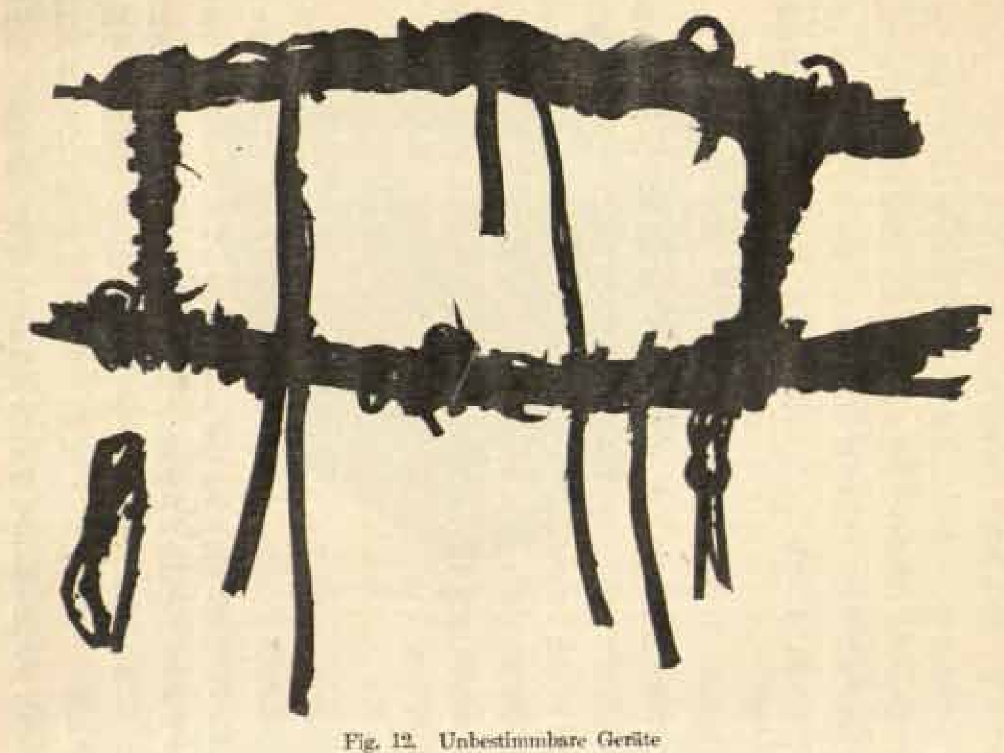


Fig. 12. Unbestimmbare Geräte

樹皮製品には外皮をそのまゝ使用したものと、内皮を細くさき又は打叩ひて纖維として用ひたものと二種の仕用法がある、厚き樹皮は曲げ物細工として容器となり其他敷物となり、細くしては樺、櫻皮の如く結束や綴目、又は弓の幹を卷き又は箍類となすなど應用範圍が頗る擴い、杉檜皮の如きは實用に最も適當した材料であつたらしい、ニレ科のオヒョウの樹皮を精撰したものはアイヌの厚司織や東北地方のマダ皮は糸として漁綱となつてゐる、樹皮をそのまゝ利用する事は現今北方民族の器具に最も多く見られる所で容器を初め船、屋根板など樺皮を以てされてゐる。

是川泥炭層中にもこの樹皮製品の殘片が多く見られる。樹皮容器や其他敷物かとも見られるものに密着した編物なぞありオニグルミの皮で作つた糸卷の如きもの、ニレ皮の表面に黒漆を全面に塗りその全面に朱色で連點の文様描出したもの等がある、これ等のものには所々に綴目がある處から短甲の如き衣類ではないかとも見られるが未だ決定するまでには至らない。

竹製品

關東地方の土器底面に壓された網代形の原體である

石製、土製品に裝身具あるが如く、木製品の内にも亦裝身具と思はれるものがある、即ち腕環に覺しきものである。多少楕圓形を有した直徑二寸六分位の環で太さ三分、完全品二個あり、其外に殘片が數個發見されて居る。挿第十一圖に示す腕環の内には木質を環狀に刳抜いたものと蔓質のものとを曲げて卷いたものとがある、同時に同種、土製品で黒漆を塗り朱漆を以て弧の連續紋を描いたものが發見された、その面は漆の生乾きの内に塗布面に手を觸れた爲當時の製作者の指紋が殘つて居る。この腕環に似て貝製のものに朱色を以て孤線を描いたものが下總加曾利から出てゐる。(原始文樣九十一)

裝身具の二　耳環形木器

今度發見された有機質遺物として、最少の耳環がある(挿第十一圖3)徑二分、高三分禾本科の莖の如き輪を鼓胴形として正面と見る處に菊座の輪廓の如き連點文樣を浮彫したものである、其他4徑四分、輪の高さ三分三厘に足らない木質を空胴として耳環を作つて居る。表面に鋸齒狀の彫刻面が見られる、5圖徑一寸二分高さ七分表輪廓面にこれ又浮紋を彫刻し胴部に並行直線を並列したもので凡て朱塗である。(3 4 は辨殼朱5は銀朱)

裝身具の三　櫛

木質の齒を十本内外並列してこれを纖維質で結束し、其の上を粘土と漆とで固めて乾漆とした櫛がある、挿第十一圖6 7はこの櫛の複原圖である、この櫛は何れも齒の先が基部で失なつて居る。最初陸前沼津貝塚から發見された時も單なる帶狀のミネのみがあつた爲め、何物か不明であつたが齒根が殘されてあつた爲、多分櫛であらうと推定した、その後各地より發見されるに至つた。是川からは六個出土したが何れも齒部を失つて居る、斯種の櫛にはミネが山形をなしたものや二頭に別れて透彫刻を施したもの等がある、齒は既記の如く何れも木質である、櫛とは云へ頭髮を梳つたものか或は編物に必要な篦としての一種の工具であつたかは不明である。この外木製品として用途不明なものが幾種か出土して居るが玆には省略する。

樹皮製品

て居る、この方は一種の籃胎漆器に屬する手法のものである。（原始工藝百四十一）

木製裝身具の一　腕輪

Fig. 11. Hölzelne Schmuck.

腐蝕されて全形を見得ない。發掘の際は上下菱形となつたまゝ泥土に包れて出土したものであつた、この製作は上半部に畳狀の沈紋を彫刻し下部は波狀線を大きく表したもので器形文様としては陸奥式菱形注口土器に多く見られるものである。土器としての製法ならばこの菱形の突端に於て接合した形跡があるが、この木製品には上下一木でこの接合部は見られない、斯くの如く菱形で内部へ向つてくびれたものは木材を以て製作するのには今日の鋭利な刃物を以つてしても製作、困難である、如何にして之を製し得たかと云ふ問題は相當研究を要する事で、内部の薄肉の點等から見て恐らく轆轤の如き工具を以つてしたのではないかと思われる様な精巧さである。

木器の三　高杯形

口徑四寸六分、高一寸八分この種の器形は陸奥式土器に多く見られる、木製品との相異こそあれ形は臺附土器そのまゝである。この木製品が泥土中にあつた時は口唇部の下方に入組文様の彫刻が明瞭に看取されたが取り出されてから木地が乾燥萎縮し、且つ塗布された朱漆が剝落した爲、余程不鮮明になつて了つた。製作は口唇部最も薄く皿形に臺部を附したもので臺部には隨圓形の透彫を施してある、この他にも同一粗品が發見されて居るが、採集の際直ちに乾燥させた爲に破片となり個々別々に萎縮して接續部が反對に反り返り復原する事を得ないものとなつた。埋藏された木製遺物は折角粘土中より取上げても急いで乾燥させては全く復原する事を得なくなるものであり、又粘土中にある際と、出土してから數日經過したものとは大さ寸法に非常な狂ひがある爲、まず粘土中に於て形態寸法を正し而して後附着粘土と共に採集し數日間日影乾しとして除々に粘土を剝して後、黴の生じない樣に乾燥すべきであつて急激に乾燥させる事は絕對に避くべきである。

木器の四　鉢形木器

挿第十圖2、口徑二寸七分、高一寸一分、底徑一寸七分扁平の木器である。底部甚だ薄く、或は製作當初より木質の底を缺き塗布物で作つたかとも思はれる。外廓は恰も轆轤細工によつて作られた樣な形態である、この器も木地目を縱に應用したもので、(切斷面參照)木質はくるみの如き緻密である。内外に銀朱の朱漆を塗る、この器形に似たものが武藏眞福寺泥炭層よりも發見され

れないものでもない。

木器の一　椀形

木製容器の形態も多種多様である，椀形，菱形壺，鉢形，高杯形等ある，挿第十圖1椀形の木器で復原圖によると直徑二寸七分，高さ一寸八分，器形の半を存する，形態は半球形を存し底部が確然と敷となつて居らない，口唇部五厘位の厚さ，底部に至つて厚い，絲柾の如き年輪の多い木地にて作られ，外部に帯狀の浮紋があり一木より高く彫り起されたものに山形狀の沈紋を彫刻してある。黑漆を内面に塗り，外面には朱漆を施してある，縦の木目の木地を半球形に刳抜くことは當時の文化としては及もつかぬ樣に考へられる，今石器の内，剝刀の如き極めて鋭利な黒曜石を以つて加工したとしても外部はとも角，内部に於ては非常に困難な細工であらう，又薄き口唇部の木地面に帯狀浮紋を殘す手際に至つては若し石器のみを工具としたならば實に驚くべき技倆である。

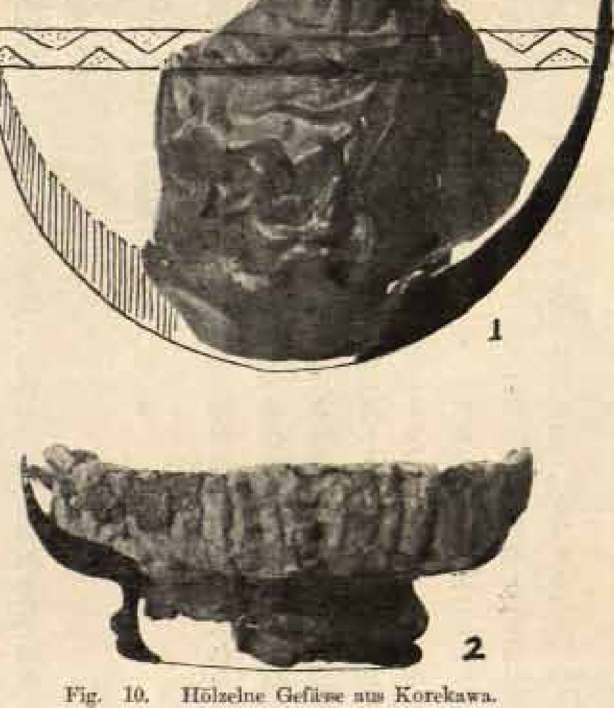


Fig. 10. Hölzelne Gefässe aus Korekawa.

木器の二　菱形壺

この容器は泥炭層と粘土層の中間に埋蔵されてあつた爲め發掘の折泥炭層中にあつた部分だけ殘り，粘土中にあつた部分は多く

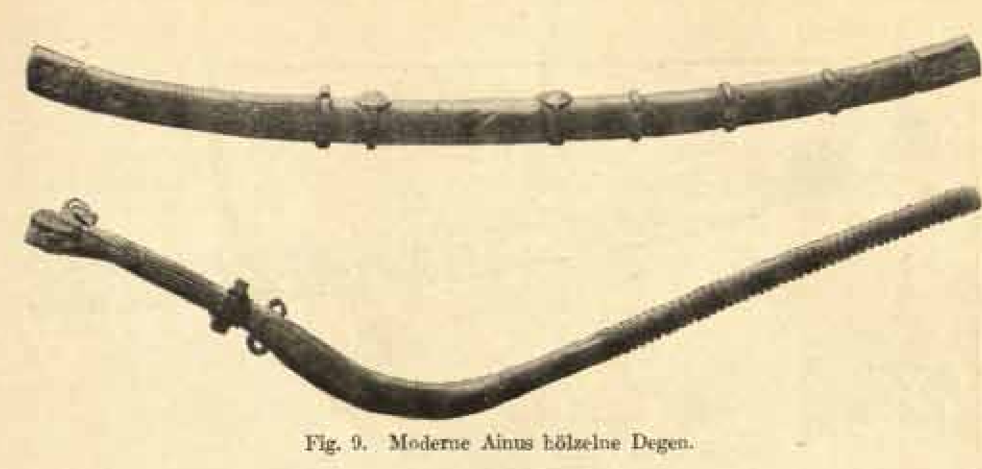


Fig. 9.　Moderne Ainus hölzelne Degen.

原色版口繪に示した、木製品の性質に就いては當時何に象られて製作されたものであるか不明である、形態から見た時は恰も太刀を擬したかと見える爲、何時とはなしに裝飾木刀と假稱せられてゐる。

複原して二尺二寸六分となり六片に折れて居る(挿第八圖參照)A—1は頭部球狀の部分に文樣彫刻がある、刀劍の柄頭を聯想せしむるものである、3は刀の柄間に似て中央に太く兩端に細く削られ2に至つては鍔に當る部分が又球狀をなし之に彫刻が施されて居る、2より以下は、刀身又は鞘に當る所が扁平に加工され、棟と刃に當る。兩者がA4切斷面の如く木地を深く削り內部に乾漆の如きもので鋸齒狀に隆起せしめてゐる、最先端の石附に當る箇所に陸奧式土器に見られる、突起狀把手に似た彫刻が施されて居る、この部に四個の孔を穿ち櫛の齒と同一手法で細き棒の如きものを嵌入させた形跡が見られる。全體に銀朱の朱漆を塗り木質は弓材と同一な黃味を帶びたものである(木質研究中)

扨てこの稀な木製品は當代の各種遺物の類似型を認め得ぬ、然し製作手法を各部に就いて見るに頭部及鍔に當る彫刻に表れた文樣は土器文樣にある手法と大差ない。又先端部の彫刻面も土器類にある把手狀隆起部にある癖を想はせる、又更に之等と伴出せる他種木製品の細部技巧に於いても相通ずる所がある。曾てアイヌが我國と接觸した時代の作品に古い太刀作の刀劍類を木を以て盛んに模造したことがある、第九圖の1の如きはその一例である。しかもそれとこれとは極めて著しい類似を示して居るではないか。又2は內地の僻村の古い土俗品で自然木の曲折したものから木太刀に仕立てたもので、此等のものは過去上流階級の文物の模倣からかゝるものが生れたと考へられる。從てこの種の遺物もより高級の文化と接觸した結果製作されたものとも見ら

Fig. 8. Details des schwertähnliche Stab von Taf. X.

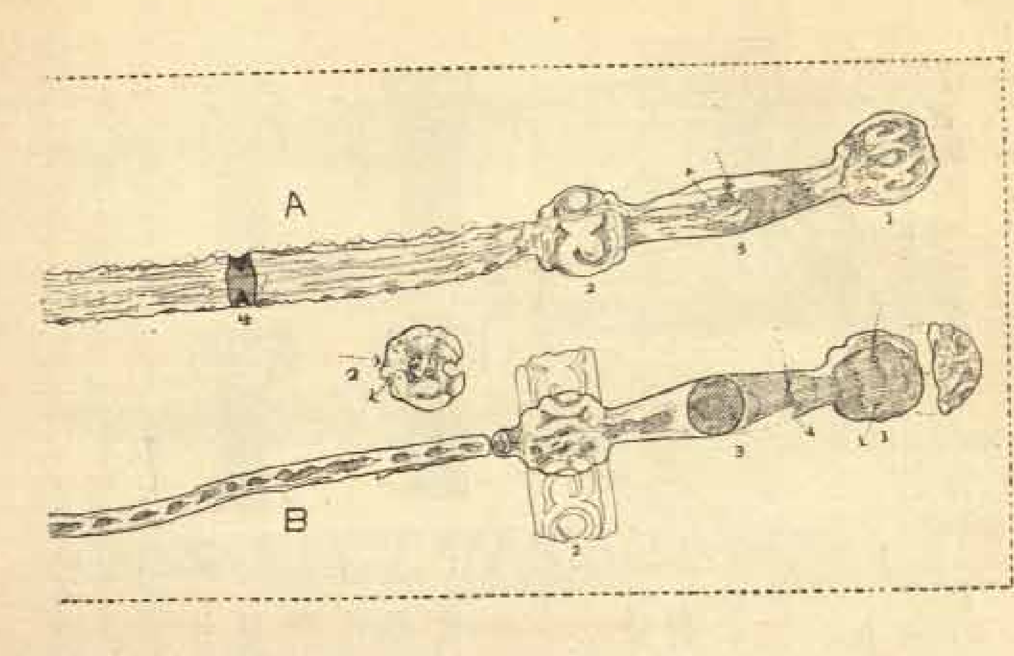
寸置き位ゐに朱塗の樺皮を巻きつけてある。

弓の五　朱塗平巻弓

現存長四尺一寸幹部全體扁平、十一片に切斷されて全長を知るを得ない。中央太さ五六分、厚さ二分位が土壓によりて厚みが一定しない。全體朱塗を塗り、これも一見重籐の弓の如く、三寸置き位に巾五分の樺皮を幾段にも巻きつけてある。元はこの弓は相當太かつたものであらうが木質部が土壓によつて扁平になつたであらう事は、上部に巻かれた樺皮のたるみによつて推察し得られる。この弓も本弭は末弭よりも太く本弭の先端には骨角器にある弭の如き彫刻が施されて居る。

以上五種の弓は形式一定せず半弓狀のものと五尺以上のものとある。白木弓はアイヌの半弓に髣髴たるものであるが弓の二の如きものは實用品としては甚だ小に過ぎる。長い弓も五尺余はあるが日本の普通の弓の同身尺の七尺五寸に比ぶれば必ずしも長弓とは見られない、塗弓、巻き弓、合せ弓の如き我が戰國時代の弓に製作法が頗似するものあるは注意すべきであらう。木の材料は殆んど一定せる樣であるが我國上古に於ても純木を利用して、古訣に梓弓檀弓槻弓梔弓柘弓等の弓材を擧げてある如く當時に於ても强靭を選擇し彈力性に富む木質が當然使用されたものと思はれる。

木製品　装飾刀



弓の二　繼木弓

現存部二尺一寸二分、六個に折斷して居つて全長を知るを得ない、中央と覺しき處、太さ六分二つの木を張り合せて密着させて居る、弭の部分には全體樺皮を卷きつけてある。材料はクワ、又はアヅサの如き木質の緻密な類である、五寸置き位に樺皮を二分許の巾に四五本づゝ卷きつけ其上へ全體に辨殻漆を塗つてある。

弓の三　塗小弓

現存部二尺四寸、殆んど全形に近きものである、六片に折れて居る太き箇所巾六分、厚さ三、四分、中央弭り部一寸、太さ七分の巾の内に撚糸のかがりを以て卷いた文樣を示して居る、兩弭根細く三寸位、厚さ二分、全體を辨殻朱漆にて塗りその上に黑色塗料を以つて一寸置き位ゐに恰も蔓を卷きたる如く二本の細き並行線を描いて居る。

斯種の弓は實用品としては甚だ細く、我が國の梓弓、破魔弓の如き裝飾的のものかと考へられる。

弓の四　黑塗丸木弓

全長五尺二寸五分、破損部一箇所、中央弭部の太さ七分、本弭巾三分、厚さ一分、末弭巾二分、厚さ一分五厘、幹部は上部に細く下部に太きものでである幹に添ふて樋の如き溝が穿たれてゐる全體黑漆塗で五

長二尺に近き大なるものと、小なるものは石劍に見られる如き長さ一尺位、巾一寸五分位のものもある。この木製品には表裏兩面に於て精粗の別あり製作が判然と區別され表面は木地をよく磨き、頭部に文様を浮彫するに裏面は何れも文様もなく、多くは斷ち割つた木地のまゝの粗なるものである。石劍には文様が表裏共に同一である。故に石劍と同一用途なりともしがたい。頭部の彫刻には如



Fig. 7. 土器と石劍の文樣
Ornamente der Stein und Tonarbeiten.

何にも粗鈍な利器によつたものと刀痕鮮かに、到底石器では刻み得られない程緻密なものがある。此等板材として縦に斷ち割るに適した、スギ、ヒノキ、等の如きものには斯る彫刻を施す事は木地目が固い爲め相當税利な刃を以てすら容易でないから、石器のみで刻み得られたとすれば非常に精錬された技術であると見ねばならない、斯の如く當時の木材工藝に於ける利器に關する研究は重要な問題であらねばならない。

木製品　弓

至る所の石器時代遺跡地には打製の石鏃が見られ、獵用又は武器として最も普遍化してゐたことを物語り、從つて弓矢の盛行を思しめる、併し鏃は弓矢のほんの一部でしかあり得ない。矢寄、矢羽はもとより弓はどんなであつたか、幸にも弓の原體がこの是川遺跡より五種も發見せられた。

弓の一　白木弓

現存部長さ二尺九寸、中央切斷面の丸さ直徑一寸、中央の弭の箇所より半裁されたもの、今これを復原すると四尺程の弓であつた事が知られる、弭部に菱狀の細き纖維質を卷きつけた痕跡が木地面に殘されて居る、先端弭は一段と細く彫り下げ弦のかゝりを作つてある、木質はアララギの手頃の枝を應用したものである。アイヌのオンコの弓と同一のもので太さ及び全長から見て半弓の形式のものである。

ヒノキ、モミ、クリ、クルミ、の如き柾目の正しきものはこの製材條件に叶ひ、斷ち割るに適し石斧の如きものでも年輪の木地目によつて牛截四截と板材が得られたことは、恰も現在桶屋がさわらの木地目に從つて容易に切斷するに徴しても考へられる。

木製品　劍狀木器

こゝに記する種類の木製品は早く、大正十五年十月に發見され、當時大里雄吉氏によつて（歷史地理第四十九卷第六號）報告されたものである其後私も實見して之を原色版として人類學雜誌第四十二卷第八號に報告して置いたものである、其後本遺跡より陸續と斯種遺物が發見され今では合計十九個に達した、形から見れば石劍を木に移した如きもので（第六圖）1、表、2、裏の如き木器で他に四個とも同一文様が彫刻されて居る。かゝる文様は挿第七圖に示す如く陸奥地方より多數出土する土器の文様や主もに石劍頭部に施された文様と同一形式である。形狀文様が石劍に類似する所から木劍と呼び慣されて居つた、併しこの木製品には先端が三つに分れた山形の彫刻を有するもの二個あり、又一個には先端に小孔二個が並列する、この先端の孔と頭部にある二個の角狀把手は單なる装飾とのみ考へられず、此器物に本來的な機能を有するものと思われる、併し其他のものは何れも先端が磨滅し、又は破損してこれを窺ふ事が出來ぬ、全體としての形式は何れも先端尖り頭部に至る程太く頭部に二個の角狀突起を有する事を特徴とする、全

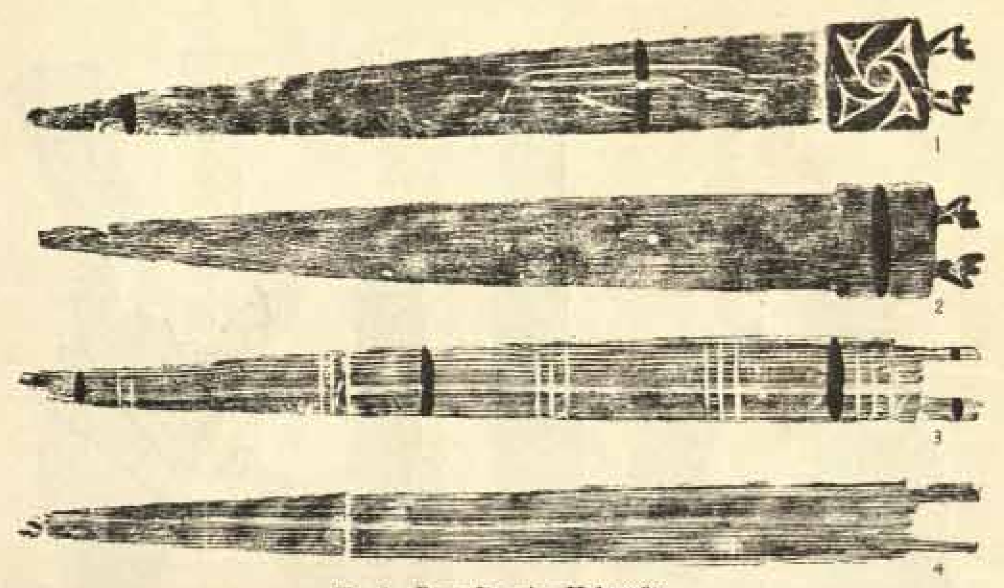


Fig. 6. Degenför mige Holzgeräte.



Fig. 5. Gearbeitete Holz.

にして切斷して使用して居る事で、當時大樹を半截するのは相當困難であつたであらう。

板材應用

大なる木材を丸木のまゝ使用した例は前述の通りである。次に木材を板材として使用した例について述べる。今日の如く利器の發達を見ない石器時代に於て大樹から板材にまで製材する事の困難なことは想像に難くなくその努力は大なるものと思はれる。丸木の大なるものを板材とするに木地面に沿ひ石斧の如きものを楔に入れ斷截したとしても木地目の惡ひものなれば不可能である。尚薄き板材は一層出來ない筈である、從つて用材を選擇し、木地目を利用することが自然であり、事實遺物にもその間の樣子を覗ひ得るものがある。本遺跡の用材中にスギ、アラヽギ、

右表に於ける木質類は製作遺物及用材の殘片と思はれる木材を資料として類別したものである。主なる木材は、スギ、クリ、トチ、アララギ、クルミ、ヒノキ、モミ、其他で樹皮にはカバ、サクラ、スギ、ヒノキ、ニレ、等がある。此等の樹木は今も陸奥地方に多く繁殖し、且つ用材とされてゐるものである。

木材の應用

用材は針葉樹最も多く闊葉樹も見られる。當時之等の樹木を如何にして立樹から採つたかと云ふ事は多少想像も加はるが、大なるものは石斧で根本から切り倒したとも考へられ。又自然の朽木も利用されたであらう。泥炭地より出土した用材の中、最も大なるものは挿第五圖に示された如きものである。幹の太さは直徑一尺全長九尺、栗材で先端をY字形に彫刻し、その頸部を一段と木地面を彫りさげて加工して居る、又基部と覺しき部分の切斷面は石斧で切り倒した如きものではなく、切り口を平面に削つてある事は注目すべき事柄である2圖の現存分三尺二寸五分先端だけで下部は發掘の節粉碎されたが、1圖と同一形式のものであつたらしい。先端の彫刻面は自然木の叉に加工したもので一層Y字形をなしその頸部が深く作られて居る。この用材は大きさから見てもアイヌその他の未開人の家屋の梁を支へる柱に類似して居る。3圖は石棒の形式を具へ、全長五尺、頭部太く六寸、略同一太さの栗丸太の頭部球狀を殘して削りとつた加工品である。中央より少し上部に大きな枝を削りとつた形跡がある。之は利器が石器の如きものとしては、手際が好すぎるやうである。5圖は栗の堅き木質を無雜作に荒く削つたものである。4は直徑二尺余の大樹の叉の基部を半截して加工したもので、頭部に大なる突起部を殘し中央にも輪を表し、右方先端も左方に倣ひ少さな頭部を彫刻してある。これ等の形式は同石器時代に屬する鹿角の叉を利用して作つた腰飾と稱せられる彫刻物に手法を等しくする。胴部斜面の窪みは發掘の節疵つきたるもの、木材栗、面はよく磨かれてゐる。6圖は4圖と同一形式で右端を尖ふ、現存部四尺に近く、これ又栗材の如きを半截して胴部に沈彫の二線を帶狀に表して居る、斯種形式の木製品がたま〳〵アイヌの墓標に類似するけれども果して同種品なりや否やは今俄かに決しがたい。以上の木製品は、石器時代の製作品としては所謂舟を除いては大なる種類の加工品である。何れも昭和四年四月發掘の節、泥炭層の上にあつた爲め腐蝕甚だしく之の加工面が如何なる利器によつて作られたかを知るには余り木地面が傷りすぎて居つて明瞭でない。3 4の如きは比較的木地面が手摺し居た。こゝに注意をすべきは4 6の如く大樹を扁平

が遺物の上より本州に於ける繩紋式石器時代の下限に置れる文化所産と推定さるべき多くの理由を持つ故、利器として石器のみ使用したとのみ考へねばならぬとも限られぬ。まして多くの木製品の中には鋭利な刄部を有する石器を以てしても、到底製作し得られまいと思はれるものゝある事は、その加工面に對する工藝的見地から觀察する時、或は金屬器の存ぜざりしかと考へられる。今暫くこの利器問題を廻けて、玆には工具の參考として石器類の內、打、切、突、磨の所作に對する主なる石器の界圖を挿第四圖に示して置く事とする。

是川泥炭層遺物中の有機用材

是川泥炭層及び之れに接する上層中に包含された植物性の遺物は原形を留めるとは云へ永い年代の間に壓縮され、質は褪色變化し、其爲めに種類の同定は顯微鏡的研究に依らねばならない、植物質用材の主なる木質に就ては工藝學校の加納淳氏、塗料に就ては酒田秀太郎氏にこの分析的研究を依頼し、又陸奥地方の現用材及纖維工藝に就ては八戶市、小井川潤次郎氏及び羽後地方のものは武藤鐵城氏を煩した。其他凡ての植物質の顯微鏡的資料は大山公の盡力によつて草野博士の鑑定を願つたが未だ研究中に屬する。

されば用材を極く平易に、木質、樹皮、莖、竹、草と類別して置くとしよう。果核類には栃の實が一番多く胡桃栗其他山椒、梨樣の種と思はれるものが發見されて居る。

是川泥炭層遺跡出土の植物性遺物

用材

- 木質類……くり　とち　にれ　すぎ　くるみ　もみ　其他
  - あらゝぎ　ひのき　其他
- 樹皮類……にれ　かば　さくら　すぎ　くるみ　其他
- 莖類……ふじ　ぶどう　にきた　あけび　其他
- 竹類……しのだけ　其他
- 草類……禾本科　莎草科　其他

加工品

- 木質製品…
  - 建築用材―柱―其他
  - 工具利器―弓―木刀類
  - 容器―椀―高杯―鉢類
  - 裝身具―櫛―耳輪―腕輪
- 樹皮質製品……容器―敷物―組物類
- 莖質製品……結束―編物―帶物類
- 竹質製品……組物―編物類―容器
- 草質纖維製品…結束―繩―席―編物類

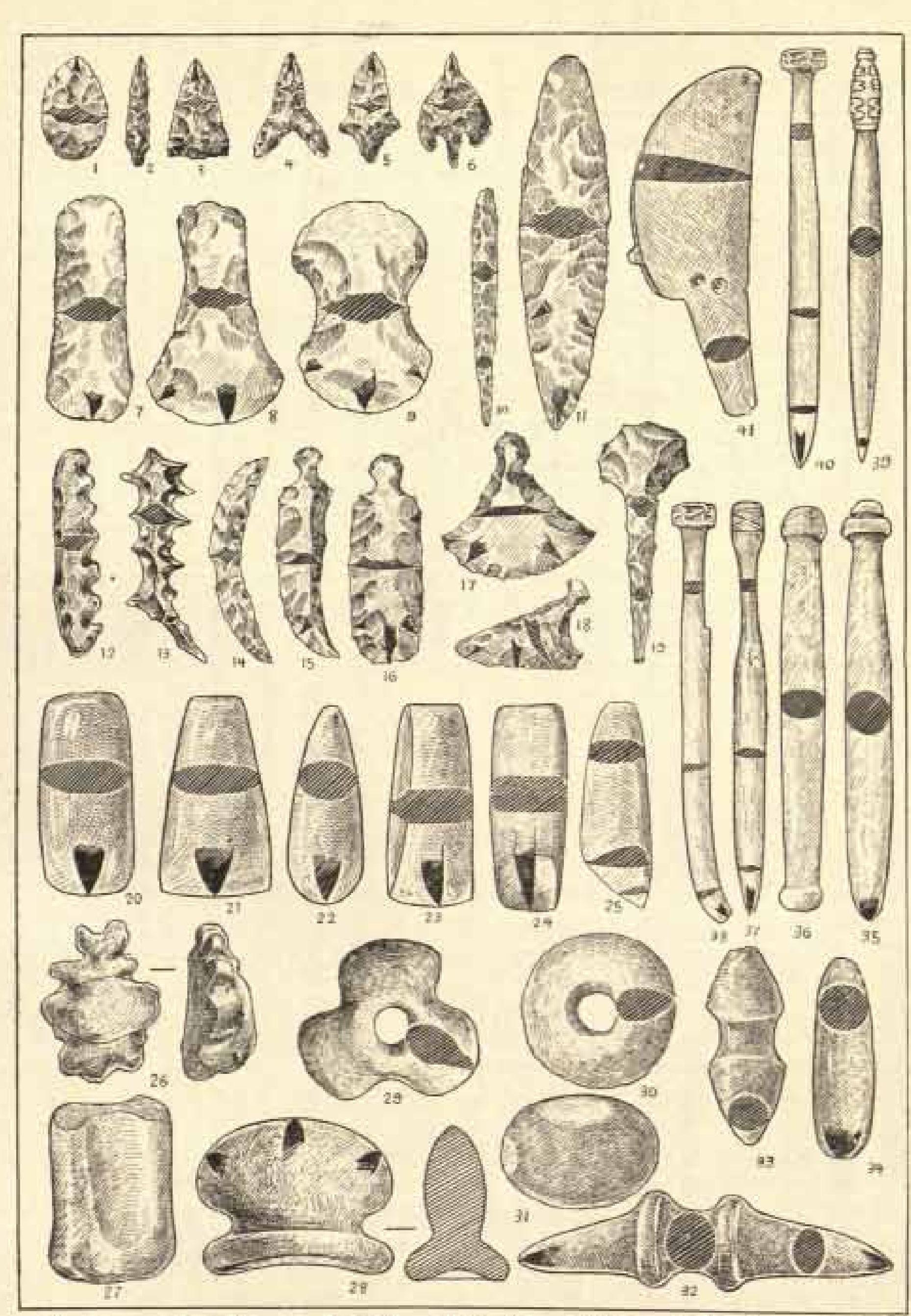


Fig. 4　1—6石鏃　7—9打石斧　10.19石錐　11石槍　12.13石鋸　14—18皮剝
20—25磨石斧　26持砥石　27置砥石　28冠石　29—31環石　32.33獨鈷石
30.34叩石　35.36石棒　37—40石劍　41青龍刀石器

現今の未開人が石器を以て優秀なる木製品を製作し得らるゝ事實に照して何等不審ではないが、一面石器時代とは云へ是川の遺跡

は考へられる。遺物が除々水面に捨てられたか、又或事情のもとに流出し各種の自然物と混同し、堆積して沈降したかは尚明かでない。之に覆土が積載され、日光の光線と、水が上層を遮断して完全に空氣の流通を止めた爲、遺物を含んだまゝ泥炭層が成生したのであらう。猶是川の泥炭層は殆んど栃、胡桃、栗の果核の如き澱質の多いものばかりで包含された事もこの遺物をよりよく保管し得たものでないかと考へられる。成因に就ての委しいことは何れ専門家の教示を仰がねばならない。是川泥炭層中の有機物を見るに昭和三年頃より度々の發掘によつて相當各種の遺物が出土したが、その層をなす主なるものは當時の住民の食物と見られる果核類でその內には極く微細な昆蟲類までも相當發見されて居る。玆では植物質の用材とそれを加工した遺物のみに就いて述べる。圖版第十五は昭和三年十月發掘の當時の情況で、完全土器と篦狀木製品が伴出した樣を示したものである。又挿第三圖はその際發見された木製裝飾刀と弓との發見狀態で泉山斐次郎氏のスケツチに依つたものである今回の發掘調査に就ては甲野勇氏の遺跡の報告を參照せられたい。

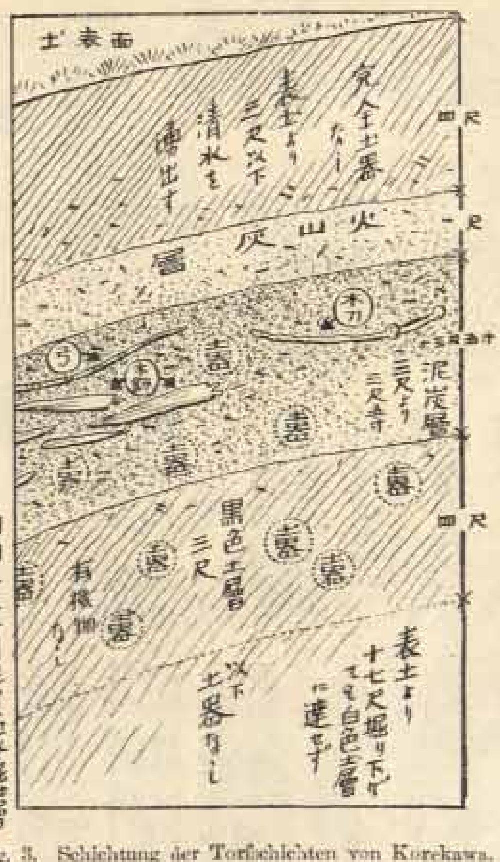


Fig. 3. Schichtung der Torfschichten von Korekawa.

石器時代の木林工藝と工具

石器時代の木材工藝を論ずる以前に、まづ當時の工具として刄部を有する利器に如何なるものがあるかを一瞥する必要がある。是川泥炭層出土の木製品は極めて精巧であるが、遺跡の狀態、伴出遺物等より石器時代の遺物なることは前述の通りである。故に唯一の利器であつた石器を以て加工されたものと推定し得られる。原始時代の工藝品が時間經濟を離れて製作されたものならば、

けらるべき筈であつた。斯る傾向は遺物の單なる形態觀に終止して、その製作法に就ての研究の行はれなかつたことに原因するであらう。陸奥龜ヶ岡の泥炭層遺跡は有機質遺物を採集するには好適地であつたようであるが、度々の發掘に於て顯著な事蹟を擧げ得なかつた。然らばこの遺跡に有機質遺物が皆無であつたかと云ふと、人類學雜誌第十一卷第三號所載の發掘報告には發見遺物表中に自然物として水草根、胡桃實、木炭、人工品として繩目と席目の痕跡を揭げて居るが、之に對して深く究めるに至らなかつた。保存に適する泥炭層こそこれから拓くべき寶庫であつて、斯る遺跡としては既に陸奥龜ヶ岡及是川、武藏眞福寺が調査されてゐる。眞福寺遺跡は大山公に依つて有機質遺物を採集する目的のもとに日本で初めて發掘された所である。最近是川泥炭遺跡中より各種の有機質製品が出土した爲、一部の人々はこの現象に對し奇異の眼を以て迎へられる事も無理ならぬ事である。之れに對して種々なる議論も聞くが伴出する遺物に依つて所謂繩紋式石器時代の所產なることは疑を容れる余地がないのである。今當の是川遺跡に於ける泥炭層出土遺物の狀態と、この植物質遺物を加へ得た過去の各種遺物相を工藝的見地から略示すれば挿第二圖の如くである。

是川泥炭層中の有機質遺物の包含狀態

有機質遺物が最もよく保存されて居る遺跡は泥炭層である。又各地の遺跡の内に泥炭層ともつかない濕潤の遺跡地に往々胡桃の果核や其他の有機質遺物の殘片の見られることがないでもない。例へば陸前沼津貝塚の下層に於て、遠藤毛利氏は加工遺物として朱塗の鉢形木器の口唇部、朱塗の櫛、朱塗の箆等がアスハルトや朱漆に依つて僅かに保存されたものを發見された。その出土狀態を見るに貝層や黑色土層中の有機質遺物は單に朱塗の塗料のみが判然とその形態を止め、心となるべき内部の有機質は土にかへつて到底採集出來なく、僅に腐蝕の少ない部分の殘片を得られるに過ぎない。斯る例品には、羽後國飽海郡松嶺の朱塗の箆、羽後國仙北郡の朱塗櫛(武藤鐵城氏發見)陸奥國南津輕郡浪岡村の櫛等がある。これ等の櫛は沼津或は是川出土のものと殆んど同一製作手法を示してゐる。朱塗の箆類は羽後松嶺や武藏眞福寺の朱塗の箆と同一製作である。斯樣に有機質製品が、土器の如く相當廣い範圍に普遍化して居つた事は注目に値ひする。

泥炭層の性質及び成因に就ては、各地一樣の狀態ではないらしい。併しこの種遺跡地が當時の丘陵と水面との接觸部に多く成生せる事は本遺跡を初め龜ヶ岡、眞福寺に於て認められる處である。從つて當時住民が丘陵の傾斜面、水面近くに居住してゐたこと

Fig 2.

ことが明かになつた。事情右の如きであつたから、従來の石器時代遺物の研究は無機質的な遺存する可能度大なるもの丶みに向けられ、有機質のそれを閑却したことも亦止むを得なかつた。けれども石斧石鏃の如き又骨角器の銛の如きは其用法を遡るならば柄の存否が當然問題とさるべきであつた。従つて石器土器の如き不朽性遺物を除外した過去の研究が片手落なりしことは云ふを要しないであらう。縄紋土器を容器として發達過程を考へる時少なくも笊や籠を想としてその面に直接粘土を塗つて製作した類の存在するから、理論上土器に並行又は先行する容器、即ち籠類編物類の使用は推察されねばならなかつた。猶且つ縄紋土器の縄席紋の原體が纖維加工品なる事からも、この原體に注意が向

就て古く明治七年武藏國大里郡曾山の溜池の土中に石斧に柄の附したる形跡ありしことに就き報告がある（人類學雜誌第二卷第十一號）又明治三十一年羽前國最上郡上竹野から箭の附されたまゝの石鏃が發見された由を、柴田常惠氏より、氏の當時のスケッチにて教示された。（第一圖1武藏大里郡出土石斧2は複原圖3羽前上竹野出土）又最近後藤守一氏の調査によれば、越後國中頸城郡潟町大字吉崎の彌生式遺跡から石鉛に木の柄を附したものが發見され、發掘の節柄が土にかへつてゐたので原形を複原する事は出

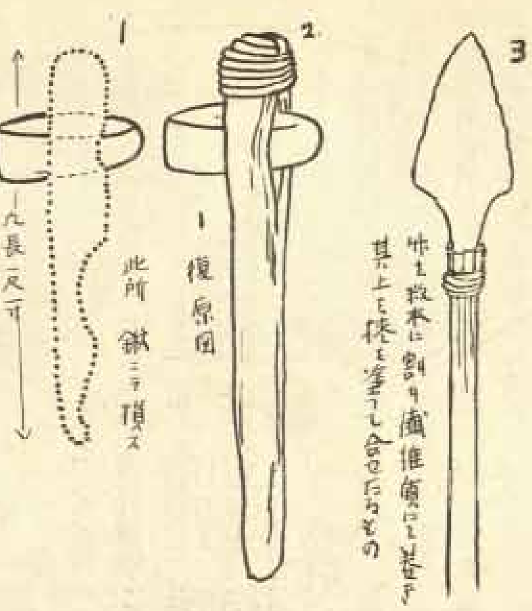


Fig 1. oben: Einzige Beispiel von Schaft der Pfeile am Kamitakeno, Prov. Akita (II. Gruppe)
unten: Stile der Beile am Kabutoyama, Prov. Gumma. (III.Gruppe)

来なかつたとの事である。石器を利器として使用するに當つて多くの場合、此等に木や竹の如き有機物質の柄を附し、固定せしめるに塗料をもつてし其上を猶纖維の類で縛付けたらしいことは諸種遺物に依つて略々證明せられる所である。此等有機質遺物は西日本の大和新澤の彌生式遺跡から梳形木器や纖維品等が發見せられて居る。（考古學雜誌十七卷三號及び八號）時代は降るが三重縣桑名の遺跡から多くの木製品が出土して居る（考古學雜誌十八卷十一號）其他石器時代に屬すると云はれる大なる丸木舟の如きものは相當數發見されて居る。茨城縣北相馬郡内守谷村小谷沼の例は石器時代の遺物と伴出し全長四尺一寸六分、巾一尺三寸高さ七寸五分あり（人類學雜誌三十卷三號）水に浮べる舟としては甚だ小なるもので容器の槍とすれば大きさなど現今の未開人の臼や盆に近い容器を思はせる。又阿波徳島、武藏狹山等からも舟と稱される木質物が發見されて居る。斯る巨大な木質遺物は永く土中に保存され易いことも考へられるが、小形有機物は腐蝕の早いのと遺物發掘の目的が一般に土器石器等を得る事にのみ向けられ勝であつた爲、例へ斷片等があつたとしても、恐らく注意を逸し土壤と共に捨て去られた事もあつたであらう。然るに最近この種有機質遺物が關東及び東北地方の縄紋土器遺跡から發見される機會が與へられ、小さな櫛や籠類が殘片ながら處々より出土するに至つた。故に今後石器時代遺跡の發掘の方法よろしきを得れば、之が採集は左程困難でない

石器時代有機質遺物の研究概報

——特に「是川泥炭層出土品」に就て——

杉山壽榮男

序言

此小報は昭和四年四月十五日、大山公、小金井博士、喜田博士及び史前學會の甲野勇、宮坂光次兩氏と、陸奥三戸郡是川村字中居の石器時代の泥炭層並に同村字一王寺遺跡の圓筒土器包含地を發掘するに際し、その一行に參加した關係と、その以前よりこの泥炭遺跡出土の有機質遺物に就て研究に從事して居つた爲、玆に其一部を豫報するものである。

日本石器時代の有機質遺物に就ては、近く喜田博士のお手傳ひして、報告を出版する運びとなつて居るので、詳細の複原圖と記述はそれに讓り、玆には大略過去に於ける有機遺物に對する一般の見解を一瞥し、併せて是川村出土の該種遺物を目錄的に解說するに止める事とする。

是川遺跡の發掘は大正九年頃より土地所有者である泉山岩次郎氏によつて行はれ、その間大正十五年長谷部博士、山内淸男氏、昭和二年中谷氏及杉山の小發掘、同四年四月史前學會の發掘を見た。泉山氏御兄弟は多年協力して是川中居遺跡より二千有余點の完全な遺物を採集され、これが今同氏の手に依つて一堂に保管されてゐるのである。私は度々の研究に非常な便宜を與へられ、有機物研究の爲に貴重な資料を全部貸與せられた泉山氏に對して玆に深謝するものである。

過去に發見された有機質遺物

從來我が國石器時代の遺跡から有機遺物を得る事は殆んど絕望に近いと考へられてゐた。たま〱發見し得られたとしても、その遺跡の狀態及び採集法の不備と、その保存法の不完全な爲め注意を逸し、明瞭なる記載を見たものは甚だ少ない。有機物出土に

銛の如き尖頭具である。即ち、此等從來の發見品より見れば、本地に於ける骨角器の發達は、他の器具の發展に比して著しく不均整である。中居遺跡と大畧同一系統の土器を出す他の此地方の貝塚に在つては、燕形銛頭其他種々なる骨角製品を豐富に出土するも、此地には斯るものを見ない。この原因を生活樣式の差異に基くと解するか、又は保存不良の結果斯の如き器具が煙滅し終つたと爲す可きかは、尙將來研究を要する問題である。我々の發掘品中には木器として特異な物は見出されなかつたが、その出土狀態は從來のものに比して多少明瞭になつた。土器の殆んど總ては所謂「龜ヶ岡式」に屬するものである。此等の編年的位置を決定する事は、此地方の研究に對する經驗に乏しい筆者には之を行ふ事を得ないが、前述の諸特徵を吟味して見れば、山內氏の所謂「龜ヶ岡前期」なる種類にほゞ該當するものゝ樣に思はれる。

又、所謂一王寺式土器は、形態、紋樣、製作上より確然と龜ヶ岡式から區別される。一言にして之を云へば、後者は概してその製作が薄手、小形にして形態の分化著しく、且つ精巧なる作品より成立するも前者は之に反する。卽ち一王寺式は龜ヶ岡式に比べて形式上古拙である。又前者は中居遺跡に於て、後者と共存するも、一王寺遺跡に在つては全く後者を混へない。斯る共存關係は兩者の時代的差異に基く如くに考へられるが、決定的なる論斷は更に將來の研究に待ち度い。



Fig 12.　一王寺上層式土器破片
Tonscherben einer Ichioji-Typus aus Korekawa.

參考文獻

河村末吉　陸奥國三戸郡地方に於ける石器時代遺物に就て　東京人類學會雜誌　第十六卷　第一七九號

杉山壽榮男　日本原始工藝　東京　昭和二年

大里雄吉　青森縣三戸郡是川村中居に於ける新發見　歷史地理　第四十九　卷第六號

中谷治宇二郎　日本石器時代提要　東京　昭和三年

山內淸男　所謂龜ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末　考古學　第一卷　第三號

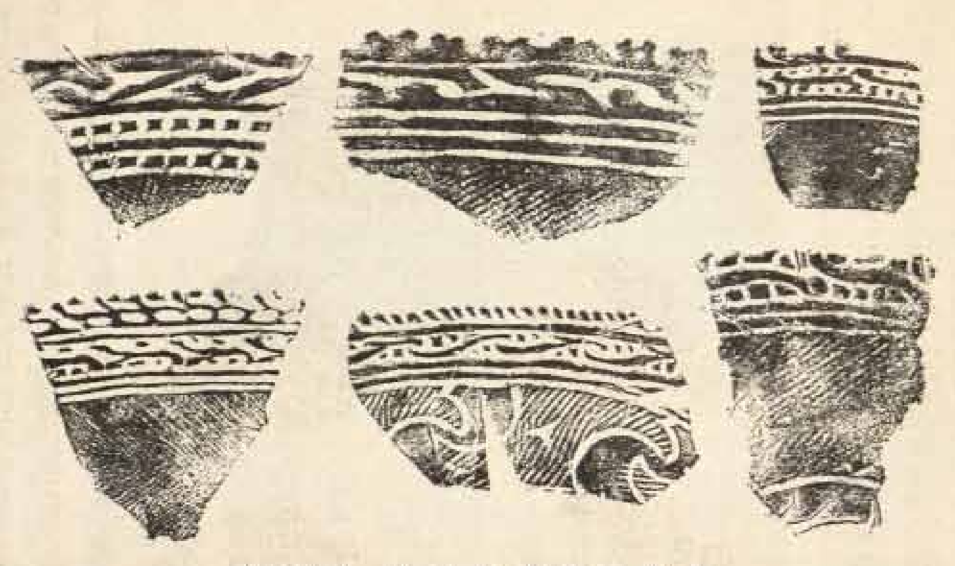


Fig. 11. A. 所謂羊齒狀入組紋

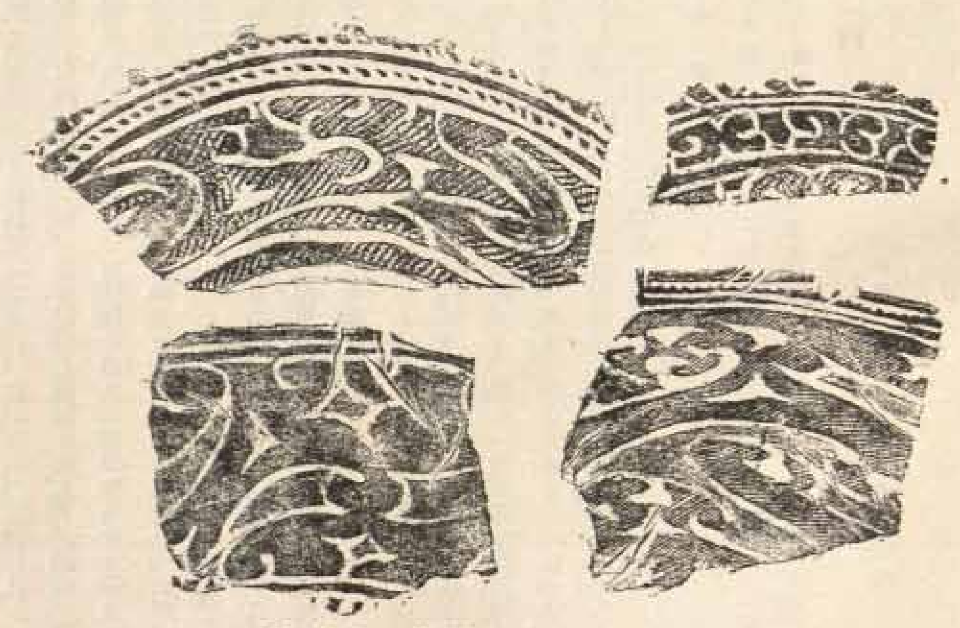


Fig. 11. B. 所謂ヱ字狀入組紋
Abreibungen von Ornamenten des Kame-ga-oka Typus aus Korekawa.

多く發見されるが、概して粗製品であつて、其等中には成形の際に輪積み的手法を採用した形跡の伺はれるものも存在する。

紋様は所謂羊齒狀入組紋、及びェ字形入組紋、入組紋的透し紋、をその優なるものとし、單なる沈線紋、縄席紋も亦存在する。羊齒狀入組紋は主として鉢形、壺形土器の頸部に施される事多く、その中に數種の變種が見られる。（第十一圖A）ェ字狀入組紋は概して壺形、鉢形、注口土器の胴部、或ひは皿形土器の底部等に施紋され、その紋樣構成樣式は複雜にして變化に富む（第十一圖B）。透し紋は臺の部分に用ゐられる事が多くその構成樣式は入組紋とほゞ同一である。概全縄席紋は主として粗製の鉢形品に行はれ、其等の出土量は相當多量である。赤色を以て塗彩されたる土器の形態は、主として壺形であつて、彩色はその外面全作に渉つて施され、時にはその內部にまで及ぶ例も亦存在する。此等の顏料としては、朱及び丹が並用せられて居る。赤塗土器の塗彩面には漆器狀光澤を有する物と、然らざる物とがあり、前者は極めてよく土器面に膠着するも、後者は之に反し、手指を擀れ、或は洗浄に際して脱落する程度のものである。斯の如き諸性質は、その塗料を溶解する溶液の性狀に基くものに他ならず、殊に前者の如きは明に漆の如き樹脂を使用して居るのである。**口緣部**には平緣のものと小波狀緣のものとがあり、更に緣上に入組狀小突起（緣瘤）を附着せしめた類例も亦多い。

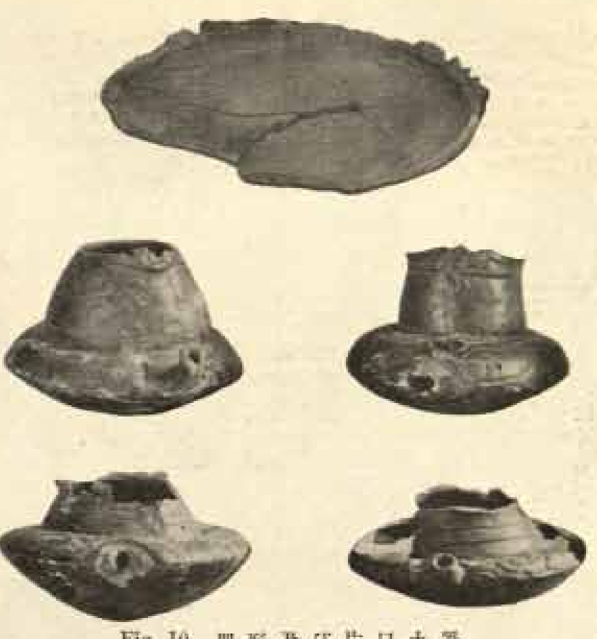


Fig. 10. 皿形及び片口土器
Tonschussel und Ausguswware aus Korekawa.

綜合 從來、本遺跡より發見されて居る石器類は、その種類に富み、且つその數量も亦極めて豐富であつたが、我々の發掘地に於ける此等の種類及び數量は、これに比して多少貧弱なる觀を呈するも、本地としては大體に於て普通なる物は一通り出土して居る。又發掘面積が前記の如く狹少なる爲め、出土量も必ずしも少ないと云ふ事は出來ない。骨器は過去の發掘に於ても、出土量に乏しく、僅か十數例を上げ得るに過ぎづ、其の種類としては銛、針等の如き簡單なる物に極限されて居たが、今回の出土品も亦

蓆紋を有する、土器破片を圓盤狀に割つた物を膠着して居る點で、斯くの如き土器の修理法は、從來餘り其の類例を見ない所である。たゞ此際使用した膠着劑の化學的性分は、未だ專門家の鑑定を受けて居ない爲め明言する事を得ないが、恐らく漆樣樹脂かアスファルトの二者の中の何れかであらう。（圖版第十四K_3第九圖　上は破損孔、下は閉鎖用土器破片）K_2口頸部外反する廣口壺形土器、K_2と同樣の彩色をなし、頸、胴、境界部には入組紋があり、胴部には繩蓆紋が施され、其上にェ字狀入組紋が施紋される。（圖版第十四k_4第八圖）k_5は外形稍々長頸壺形に類似するもの、全體紋樣なく光澤ある灰黑色を呈する。圖版第十四k_5）k_6、小形の急須形土器、（中谷氏のｅ型ｉ類に屬するもの）胴部上半には稍々立體的のェ字狀入組紋が發展して居る。此の他に破片接合の結果、複原された物としては、第十圖上の如き稍圓形皿形土器、及び長き頸部を有する注口土器（中谷氏分類ｅ型Ｊ類）がある。（第十圖下）

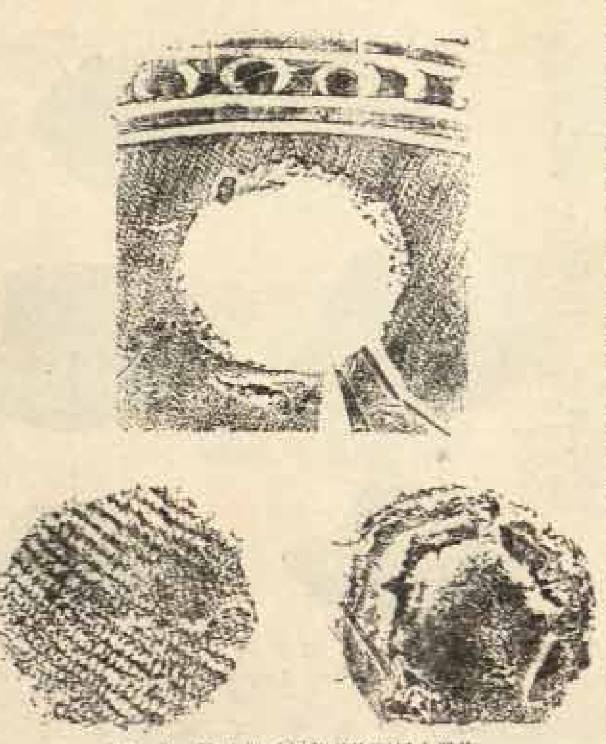


Fig. 9.　K_3土器破損部及修理用土器片
Abreibungen.

以上記載した所は出土土器中の完形又はそれに近きものに關する事のみであるが、以下總ての土器片を通ての概じ觀を試み度い。形態は鉢形壺形を主とし、その大さは中形乃至小形の物が多い。而してその出土量は鉢形の方が壺形に比してより多量であるが、完全のまゝ發見されたものは壺形のみで、鉢形は全く之を見なかつた。これは恐らく、前者が後者にくらべて、土壓に對する低抗力を備へて居た事に原因するのであらう。又、鉢形土器の中には、底部が下方發展を爲して臺狀を呈するものもある。注口土器には、k_6の如き形式と、第十圖下に示す類の如き形式の物とがあるが、前者の出土量は後者に比して少い。土器の製作は比較的薄手にして精巧のものが多數を占め、特に壺形、鉢形で精細なる紋樣を有する土器は、その土質細かく、表面はよく研磨されて光澤を有するものが多い。粗雜な繩蓆紋のみを有する鉢形土器も相等

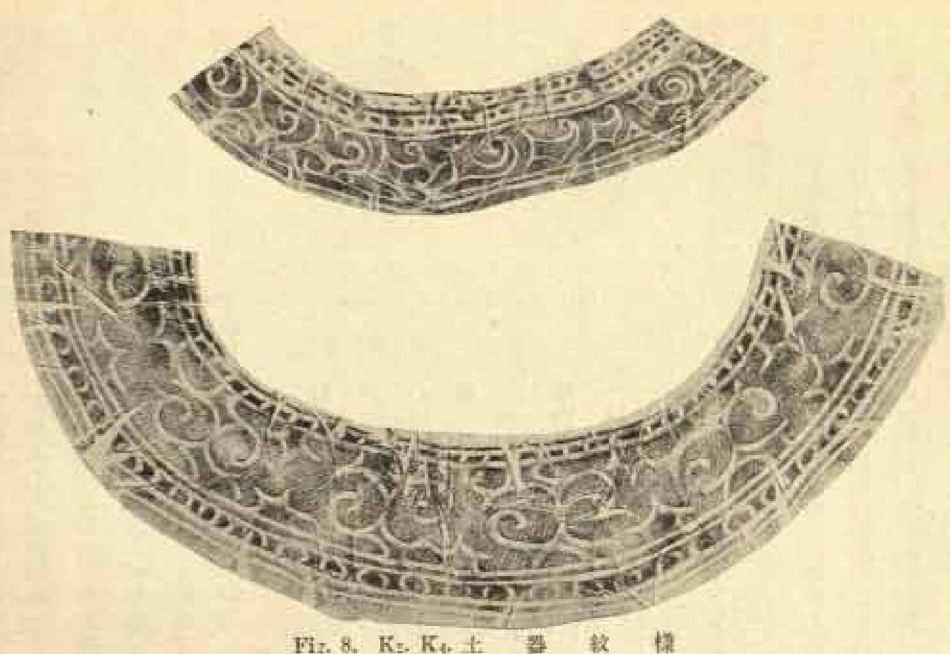


Fig. 8. K_3. K_4 土　器　紋　樣
Abreibungen von Ornamenten der Vollkommene Tongefäse aus Korekawa

旣に泉山氏の前回に與發行された發掘の際出土して居る。）等も發見されて居る。此等植物製遺物に關する綜合的研究は、他日、喜田博士、杉山壽榮男氏に依つて發表される豫定となつて居る。

土　器　我々の發掘の際に發見した土器の殆んど全部は所謂龜ヶ岡式に屬する種類のもので、極めて稀に所謂一王寺式土器破片を混出する。此等の土器は我々の發掘せる範圍に於ては、層位的にさのみの變化を認め得ない。出土せる土器破片の量は麥酒箱二個分に及び、完形又は略々完形の狀態を以つて發見されたものは七個、破片の整理接合の結果形態を伺ひ得る程度に復原された物は四個ほどある。

最初に此等完形、或ひはそれに近き土器に就て略述しよう。k_1は小形の長頸壺形に屬する土器、頸部と腹部との境界部に四個の結瘤狀裝飾を有する隆起線紋を廻らす。全體灰黑色を呈し、光澤を有する。（圖版第十四k_1）　k_2は口緣部を缺除する壺形土器、全體赤色塗料を以て塗彩され、頸部には所謂羊齒狀入組紋を附し、胴部以下にはｪ字形入組紋を施したもの。（圖版第十四k_2、第八圖）k_3前二者に比すれば製作稍々粗雜なる廣口壺形土器、口唇上緣には二個一組より成る瘤を存し、頸部に羊齒狀入組紋が廻らされ、胴部には一面に比較的精細なる單方向縄席紋が施紋されて居る。此の土器に於て最も興味深きは、その胴部にある直徑約四糎の不整圓形を爲す破損孔上に直徑約五・五糎（厚さ約〇・七糎）ほどの異種の縄

られ粗製である。（第六圖4）此等の打製品は磨製品への製作過程にあるものでなく、稍粗兩様の器具として各々並用されて居たものらしく、その用途は明かでないが磨り石又は槌石の如くに使用されたものでないかと思はれる。出土した此種石器の一面に丹の粉末が深くしみ入んで居る一例は、此物の磨石としての用途を暗示するものであらう。石匙も比較的精巧な物が多く發見されて居る。其の形式としては縱形及横形の物類が並存して居る。石質は主として逾石であるが、稀に玉髓を以て製作した美麗な品も發見されて居る。（第五圖1）石小刀とは石槍とも石匙とも附かない三角形の打製石器に與へた名稱であるが此種遺物の出土數は極く少數の様である。（第五圖2）石鏃は有柄の物が多く今回の出土品のみに就て見ればその製作は餘り精巧ではない様に思はれる。（第五圖4—10）



Fig. 7. 岩　版
Steinplatten aus Korekawa

岩　版　凝灰岩（Tuff）製にして、灰白色楕圓形を呈し、長徑四・五糎、短徑三・三糎、厚さ一・二糎、表面に左右均製の x 字狀紋様を施し、その中央上下に三角形の充紋を陰刻するも裏面の紋様は不規則の渦紋より成立して居る。（第七圖參照）

骨　銛　鹿の脛骨を縱割磨製したもので、關東より東北地方にかけての諸貝塚から出土する所謂骨銛と同一形式に屬する。特殊泥炭層中に存在して居た爲め全體灰黒色を呈する。

植物製品　今回の發掘に當つて出土した植物製品の數量は比較的少い。用途不明木製品H_1は全體朱漆を以て塗彩されて兩頭を有し、體部斷面は半圓形を呈する。出土當時の長さは（彎曲に伴ふて計測す）桓位ゐであつたが、現在は乾燥の結果、これより甚だしく萎縮して居る。H_2は、木製腕輪斷片で、木材を横斷に裁して之を刳抜き、朱漆を施したもの。H_3は櫛、その櫛造は數本の木製の歯の並列し、その上端を漆狀樹脂を以て固着せしめたものであるが歯の部分を缺損して居る。上端の結束部には朱漆を塗沫する。H_4は、耳飾斷片、製作、塗料共にH_3と同様である。これと同一の形態を有する土製滑車狀耳飾は、從來各地の石器時代遺跡から發見されて居る。（圖版第十四參照、H_1は約二分の一、$H_2H_3H_4$はほゞ實大）H_5は箆狀木製品であるが、彫刻なく其の製作は粗雜である。（類品は泉山氏によつて十數例發見されて居る。）

此等の他、草の纖維をを以て組んだ網代、（本誌歐文欄、第二十七圖と同一組織を有するもの）及び同じくスゲの如き水草の莖に赤漆を施した籃様品H_7、樹皮の一部に漆を以て紋様を畫いた原形不明の製品（容器？）斷片H_8（これと類似する樹皮製品の大形殘片は

を乞ふた。此等の詳細は他日發表されるであらうが、本報文に於ては、極くその概略を記するに止めよう。果實にはクルミ、トチ、ナラ等のものが最も多數を占め、肉質の果實も稀に混在して居る。此等の果實は主として食料とされたものらしく、多數のものは打ち割られて居る。又クルミの殼の兩側に人爲的に小孔を穿つたものも少量ながら出土して居るが、此種の加工を試みたクルミは眞福寺泥炭層中遺跡からも發見されて居る。

スヽキは發掘地北側、特殊泥炭層上部に束狀を爲して堆積して居た。又該層中の完全土器の內部、又は底部片內側にスゲの根が渦狀を爲して存在して居る事がある。從來此等を以て土器內に貯藏したもの丶如く解されて居たが、之は土器內部に下されたスゲの根が、その生長に伴つて他の部分に延び得ない爲め、器の內面にそうて渦狀を爲すに至つたもので、決して人爲的行爲の結果ではない。たゞ此の事實によつて當時斯る土器がスゲ等の發生し得る樣な濕地に存在して居た事が証明される。

動物質遺物としては哺乳類の齒牙、骨片、貝類、甲蟲類の鞘翅等が見出されて居る。哺乳類には、シカ、イノシシ等があり、此等の齒牙、四肢骨の小破片等は特殊泥炭層中より少量ながら發見される。貝類は草野教授の盡力に依つて農大動物學教室の鑑定を受けカラスガヒの類と推定されたが、其等の保存狀態は、貝塚に於ける同種の物のそれと、全く正反對で、貝塚に於ては石灰質の部分のみ殘存し、膠質の部分は失はれて了ふのを常とするが、泥炭層に於ける膠質の部分のみが、著色せるパラフイン紙の如き狀態を爲して殘つて居る。

昆蟲の全部は未だ研究されて居ないけれども、その一部は會員鹿野忠雄氏に依つて研究され、ゴミムシ科 Carabidae の Licinus 屬の一種と推定されて居る、此れに就ての詳細は本號所載、鹿野氏の報文によつて知られ度い。

IV 人工遺物

石製品　石製品としては、磨製石斧、圓盤狀石器、石匙、石小刀、石鏃、石錐等が發見されて居る。此等の中最初の二種の石質は主として硬砂岩 (Greywacke sandstone) で、他は大部分燧石(Flint)である。磨製石斧は中形の比較的よく研磨せられた所謂三味線胴を有するものゝみである。(第六圖1 2)圓盤狀石器は自然の河原石の偏平なる物の周圍に加工を施し、圓盤狀を爲さしめたもので、これには磨製品と打製品との別がある。磨製品はその形も整備し細密に磨かれて居るが(第六圖3)打製品は不規則な形に作

を被覆する泥炭質土層は、前者の堆積後、其地の周圍より流入する多少の土砂に依つて埋積せられたが、尙ほ此部分は濕地であつた爲め多少の水草の類を生じ、之が泥土に混じて堆積し泥炭化する事によつて成立したものゝ樣に考へられる。

特殊泥炭層は從來の經驗に依れば、前述泉山氏宅表入口の近くに西北に長く凹入する小谷地の底部、卽ち當時の沼澤地内にのみ限られて居る樣である。現在知られて居る該層の存在區域は大體第二圖に交叉線に依つて示す部分に限られて居る。此の谷地基底の地質は所によつて相異し火山灰質層を有する場所と、黑色土層の存在する部分とがあるらしいがその層序關係は明かでない。

此の谷地—澤地—の西北面を廻る臺上には、明確なる住居趾が發見され、又數多の人工遺物が見出されて居るから、此附近に當時の人類が住居して居たらう事は想像に難くない。此等の人々は彼等が食料として蒐集して來た果實類の殼、或は獸類の殘骸、不用となつた器具類等を、住居地の東南方に當る沼澤地に投棄した。此の澤地はその中に水を湛へるも土砂崩壞、又は流木類の寄り附き等の現象に依つて新井田川とは直接連續して居なかつた爲め、此等の遺物は流出せずそのまゝ其地に止まつた。斯くして年と共に堆積層は增大し、果殼層の堆積が中止された後と雖も此部分は依然として澤地狀態を繼續し、其結果泥炭質土層が積成され、其後周圍の黑土はこの小谷地を現狀の如くにまで埋沒した。又、此附近は谷狀を爲して一王寺山方面にまで及ぶ爲め、流水に基く土砂の運搬、或ひはこれに起因する遺物の移動等のあつた事は、發掘地の一部に於ける赤褐色ローム質土壤より成る疑層、及び其中に含まれる一王寺式土器の存在に依つても覗ふ事を得よう。

註

嘗て中谷治宇二郎氏は「日本石器時代提要」に於て本泥炭層の成因を論じ、本地は嘗て石器時代人の生活地表であつたが、土地の沈下と共に沼澤地となり、泥炭の積成を見たと說明されて居るが、遺憾な事に氏は此の所論の根據となる事實を舉げて居られない。然し該層に於ける從來の發掘及び我々の發掘の結果より見れば、本層基底部或ひは層中には、其地に直接住居を營んだ影跡——住居趾、杭上住居、爐趾の如きもの——は全く認められない。又、完全遺物の存在を以て其地に直接住居現象の行はれた一根據とするなら、此等完全遺物は泥炭中の各部に挾在して居るのであるから、此地の石器時代住民は常に泥炭生成に適するが如き沼澤地中に、好んで生活して居なければならない樣な不自然な事と爲る。

III 自然遺物

本地より發見される自然遺物には、植物質遺物と動物質遺物とがある。此の中、植物質遺物は東大農學部の草野博士に其の鑑別

泥炭層中より石器時代遺物を發見する例は歐洲に於て古くよりその存在を知られて居る。我國に於ても青森縣龜ヶ岡、埼玉縣眞福寺の如きは泥炭層中より多數の石器時代遺物を出土して居るが、兩者共に其地に繁茂せる水草の類が、枯死堆積した結果成立したもの—fen peat—に屬する。即ち此等は泥炭生成中の澤池に、何等かの原因に依つて石器時代の遺物が混入したもので從つて其等と積成當時は、石器時代の或時代に概當するものと認定される。

然るに本遺跡に於ける泥炭層は、前二者と其の性狀を異にし、層の主體を爲すものはクルミ、トチ、ナラ等の果殼で、此中に微量の水草の莖根、或ひは他の果實を混在でるに過ぎない故、これを特殊泥炭層と名付け普通の泥炭層と區別を試みた。特殊泥炭層の成因は普通の泥炭層が自然的に堆積したのと異り、人爲的に積成せられたと考ふ可き證據が多く存在する。即ち此等の果殼は打ち割られたものが最多數を占め、完全なものは極めて少く、特にクルミの如きは殼の兩側に人爲的に小孔を穿つた例も發見される。又該層中より獸骨、獸齒の斷片、石器時代人類の製作使用した器具類を出土する。斯る狀態は貝塚に於ける貝類の堆積狀態及遺物包含狀態と彷彿たるものがある。斯く從來の發掘及び我々の發掘の結果より推測すれば、此の層の成因を自然現象に歸するより、人爲現象に歸せしめる方がより妥當的である。即ち此等果殼層は當時の人類が食用に供した果實の殼を投棄したものが堆積し、且つ其地が泥炭成生に適應して居た爲め、果殼は勿論、其中に投棄、或ひは流入の結果現在して居た植物製遺物も原形を保つて保存されたものと爲す可きである。又此地が當時泥炭生成に好適なる澤地であつた事は此等の物質がそのまゝ泥炭化した現象によつても推定し得るが、更に該層中に萎、蘭の如き水草の莖根の存在する事及び斯る濕地に棲息する習性を有するゴミムシ科 carabidae に屬する昆蟲の翅鞘を發見した事に依つて證明されよう。又、特殊泥炭層

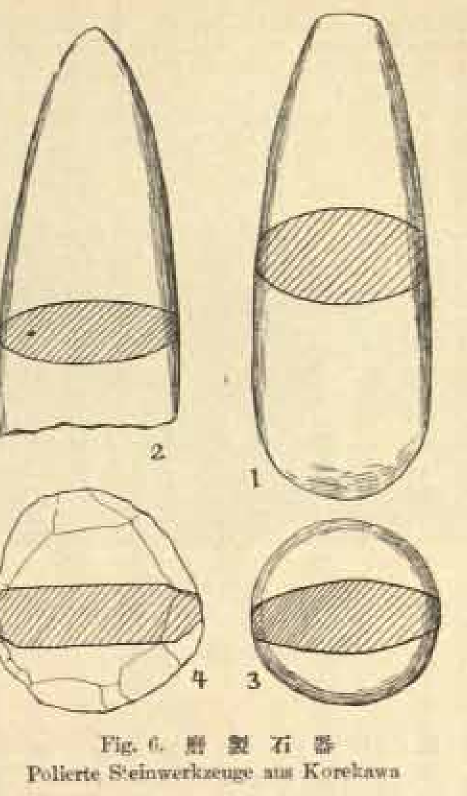


Fig. 6. 磨 製 石 器
Polierte Steinwerkzeuge aus Korekawa

しき倒木H_2の横たはるのが見出された。此の木の幹の長徑は三十糎位ゐ、土壓の爲め壓縮され楕圓形を呈して居る。特殊泥炭層は部分的に多少その內容を異にするもの丶如く、斷面西側、及南側にはクルミの果殼比較的多く、東側及び北側は殆んどトチ・ナラ等の果殼より成立して居る。(圖版第十三參照)

Fig. 5. 打製石器骨器.
Steinwerkzeuge aus Korekawa

綜合 筆者は本概報に於て屢々特殊泥炭層なる名稱を使用して居るが、その精しい內容、成因等に就ては全く論及しなかつた。此の名稱は、我々が特に中居遺跡の泥炭層に與へた假稱で將來適當な術語が生じたなら改めてもよいと考へて居る。以下之に就て多少說明を加へて見よう。

順序として最初に泥炭の性質、成因に就て略記して置く。泥炭とは低地又は高原の、湖水中に繁茂した植物が枯死堆積し、炭化的分解を爲した結果生ずるもので、これは生成地の狀態によつて澤地泥炭(fen peat)と山地泥炭(hill peat)とに分類される。前者は主として葦・燈心草・菅等の水草より成り、後者は水苔類を主體として成立する。それ故、前者を草泥炭、後者を水苔泥炭と呼ぶ事もある。此等の生成に必要なる條件は、その土地が充分に濕氣を帶びて居り、且つ植物の繁茂に適當な溫度を有し、更に酸素の作用が乏しい結果植物は腐敗せずそのまゝ炭化する樣な狀態に置かれて居る事である。斯くして生じた泥炭の堆積が層狀を爲して存在するのを泥炭層と稱する。

する。k_3の出土高的二米、特殊泥炭層中、口を西南に向け斜めに横はる。k_4は出土高二米、特殊泥炭層中、口部を上に直立する。k_5の出土高一・四米、黑土層と泥炭質土層との境界部、口を北東に向け横位を取り、k_6はk_5と相接近して出土し、口部を西南にし稍々斜めに横たはる。之と同一層位に數個分の大形鉢形土器破片が密集して發掘されて居る。



Fig 4　K₂土器出土の狀態
Tongefäse in situ in den Obere Torfschichten

此等の出土狀態を見るに何れも投棄されたか、或ひは流入したかした物が自然的に埋沒したものと考ふ可く、何等人工的に配列した如き形跡は認められない。

次に木器、H_1は兩頭を有し棒狀を呈する用途不明の物、出土高は一・七米、特殊泥炭層上部、此の附近にはスヽキが束狀を爲して存在し、H_1は鉢形土器破片の外側上面に密着して居た爲め、土器破片と同一の彎曲を有するに至つたものである。H_2は腕輪の破片、出土高は二・三米、同じく特殊泥炭層中、H_3は箆狀木器、出土高は一・八米泥炭質土層と特殊泥炭層との境界部、その尖端を東南に向け、ほゞ水平に横たはる。H_4は樹皮製容器?小破片、出土高一・六米、泥炭質土層下部。H_5は蘭の如き草の莖に赤色塗料を施したと思はれる紐樣のもので、此等は特殊泥炭層中に數本並列して發見された。此の他出土狀態は稍々明瞭さを缺くも發掘地西北隅の特殊泥炭層中に水平に存在する樹皮を採掘したものを整理した際、その一面に纖維製網代の殘片の附着するを發見した。

石器の過半數は掘り上げた泥土中より檢出したもので、その出土狀態の確實なものとしては數個の磨製石斧を擧げ得るのみ、此等の出土高は一・二米—一・八米、卽ち黑土層下部より特殊泥炭層上部へかけての間である。

自然遺物の中、獸骨、獸齒、貝殼等は特殊泥炭層中より主として發見されるがその量は多くない。又此層の最下部にトチの木と覺

質層の斷面形態はＵ字形を呈するもの〻如く思はれ、現在の小谷地の斷面形態とほゞ一致するも凹入の程度は更に强い。此等の事實に依つて、中居遺跡形成時代には、此地に現存する小谷地の祖形が更に深く彎入して其中には水を湛へて居た事が想像出來る。只、此火山灰質層の性質は坪谷理學士の鑑定に依れば、その存在部位に依つて多少異り、道路斷面、第二試掘點のものは純粹の火山灰であるが、發掘地に於けるものは火山灰を主體とするも、これに多少他の鑛物の結晶末を混へて居るとの事である。筆者の採集した該層標本は、泥炭層に接近する部分のものであり、且つ當時の谷底に相當する所であるから或ひは流水に依つて運搬された他の鑛物粉末が之に混じて堆積したものとも考へられるが、決定的なる論斷は尙ほ將來の研究の結果に期待せねばならない。又、特殊泥炭層の一部は必しも該層上に堆積せず、井戸の附近に於ては黑土上に存在し、火山灰層は此の黑土層下を數米掘り下げるも之を見る事を得なかつたと云ふ。特殊泥炭層は發掘地點の東南方に向ふに從つてその厚さを增大するも、西北側に於ける堆積狀態は一見該層の末端に近き部分の如き觀があり、第一第二試掘點等には此層を認める事が出來ない。

遺物出土の狀態　今回の發掘に當つて出土した遺物の種類は、土器、岩版、磨製石斧、石匙、石小刀、石鏃、石錐、骨鉆、木製腕輪、耳飾殘片、用途不明木器、箆狀木製品、樹皮製品、網代、草の纖維に赤色塗料を施したもの等である。

此等の中、土器、石器等は表面黑土層より特殊泥炭層に至るまでの間に、普偏的に包含されて居る。完形土器は黑土層下部から特殊泥炭層中部にかけての部分に多く發見されて居る。此等の土器の大部分は所謂「龜ケ岡式」に屬するものであるが、極めて稀に「一王寺上層式」土器の破片が混在して居る。出土せる該式土器破片の總數は四個、最下層、火山灰質層上に一個、特殊泥炭層中に一個、赤褐色粘層中に二個發見されて居る。（第十三圖）

植物製遺物は、保存の關係上主として特殊泥炭層より出土し、稀には泥炭質土層中に殘存して居る事もあるけれ共、その保存狀態は前者に比して甚だ良好でない。最下層である火山灰質層中には從來全く遺物の存在を見ない。

次に主要なる遺物の出土位置及狀態を略記して置く。但し此等の平面觀的出土位置は一々記載の煩をさける可く、第三圖に圖示したから之によつて了解せられ度い。

最初に土器（完形品又は完形に近きもの）の出土狀態に就て記載しよう。k_1の出土高（地表より出土位置までの深さ）は、一・八米、特殊泥炭層上部にあり、口部を南東に向け横位置に埋沒し、k_2は出土高一・七五米特殊泥炭層上部、口を西方に向け稍々斜めに存在

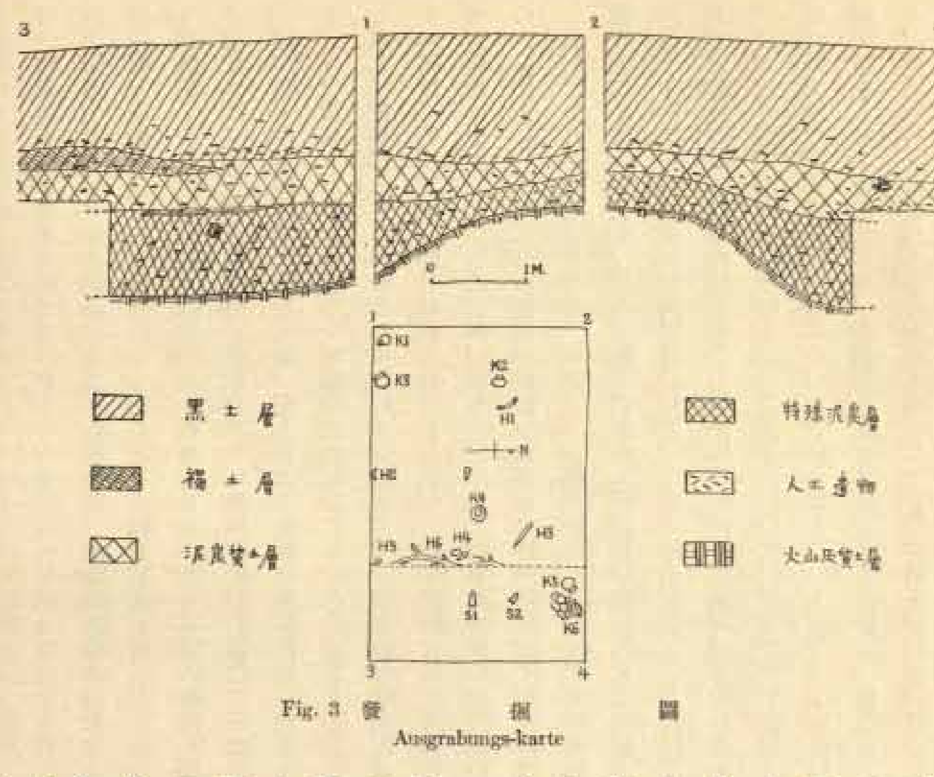


Fig. 3　發　　掘　　圖
Ausgrabungs-karte

は中居遺跡の西方山腹に多く存在して居る。泥炭質土層は二五糎—五〇糎に及び、西北側は最も薄く南方に至るに從つて厚度を增大する。特殊泥炭層も亦西北側に最も薄く（二五糎）西南側に於ては八〇糎に及び、東側は最も厚く九〇—九五糎に達する。又該層の基底を爲す火山灰質層は、發掘地西北隅を中心として、東南の方向に扇狀に傾斜して居る。卽ち上記各層がその程度の差こそあれ東南の方向に傾斜して居るのは、此等の基底となる火山灰質層の表面形態に基因するのである。此の傾斜の方向は、現在地表面に認められる小谷地のそれと大略一致して居る。（圖版第十二）

火山灰質層は、本遺跡の存在する丘陵の基底をなすものの如く、此地の各所斷面にその露出が認められるがその深さは所によつて異り一定して居ない。今、泉山氏宅地前の道路より北方に向つて卽ち小谷地を橫斷する線を假定し此線上の數ケ所を試掘し該層の深さを測定した。卽ち該道路斷面に於ては、黒土層約三〇糎の下に此の層が位し、k點南側に在つては、地表下一・五五米、同北側に於ては地表下一・八米、第一試掘點（k點の北方十米）にては一・六米餘發掘せるも之を見ず湧水多き爲め試掘を中止、第二試掘點（第一試掘點の北方約十米）に在つては、地表下一・四五米の所に該層を見る事を得た。此等の諸點を連結復原すれば、此の火山灰

等は當時同地を見學された大里雄吉氏の報告に從へば、黒土一・五米、特殊泥炭〇・七米の層中より出土したとのことである。其後、特殊泥炭層を追求發掘するに從つて、朱又は丹を以て塗彩せる弓、木刀狀木製品、木製容器、木製耳飾、腕輪、櫛、用途不明の加工せる大形木材、樹皮製品、或ひは籃體漆器、繩蓆紋原體と近似する組織の下に製作された組籃、草木の纖維を以て作られた各種組物、莖細工品の如き過去に於て殆んどその類例を求め得られなかつた植物製品が相繼いで發見されるに至つた。

圖版第十の朱塗木刀狀木製品の出土地は入口の西北方井戸の附近の特殊泥炭層中で、此の區域からは箆狀木製品が五本相接近して發見されて居る。此等の出土狀態を示す見取圖(泉山氏原圖)は杉山氏の報文中第三圖に轉寫されて居る。

扨、我々の發掘地點は同氏宅地、表入口より玄關に向ふ道路に沿ふて北方に行く事一五米、道路東方十五米の畑地で、大正十五年十一月、最初の木器を發見した地點の北側に位する。(第二圖上及圖版第十一、下) 此地は新井田川沖積地より西北方に向ひU字形を爲して緩く凹入する小谷地の中央のより稍々北寄りの畑地で地表面は南東の方向に極めて鈍く(約一度位)傾斜して居る。調査豫定地域は二〇平方米、期日は約六日であつたが、途中降雨に防げられ實際に調査した期間は同月十五日—十七日に渉る三日間で、發掘面積は東西五米、南北二米、卽ち一〇平方米の東西に長い長方形の區域であつた。其中完全に特殊泥炭層基底まで調査し得たのは、僅か三・六米×二米の區域で殘餘の部分は、降雨に基づく溜水の爲めこの發掘を行ふことが出來なかつた。

發掘はこれを西側より始め、地表より土壤の變化に從つて順次平面的に鑿剝する方法を採つた。その結果、此の地點に於ては、大體五種の層序—黒土層、褐色土層、泥炭質土層、特殊泥炭層、火山灰質土層—が認められた。卽ち、最上層は所謂耕土で黒色を呈し、その下に位するのは赤褐色壚埴質の疑層で、稍々黒土を混じ、下層の泥炭質土壤を部分的に被覆する。泥炭質土層は漆黒色を呈し、其中に多少の纖維狀有機物を混在し發掘作業が此層に及べば多少の湧水を見る。此層の下には、主としてクルミ、トチ、ナラ等の果殼より成る特殊泥炭層が堆積し、青灰色の火山灰質層はその基底を爲す。特殊泥炭層と該層との接觸部は染色され灰黒色を呈して居る。黒土層の厚さは各部ともにさのみ變化はなく、一・二米—一・四米位ゐであるが西方に於ては概して薄く、東方に至るに從つて漸次厚さを增す傾向がある。赤褐色土壤より成立する疑層は、發掘地の東南隅にのみ存在し、その西端は泥炭質土層中に尖滅するも、西方に行くに從つてその厚さを增大(二五糎)すると同時に該層上を被覆し、西に西漸するに及んで厚度を減少する。泉山斐次郞氏の言によれば此れと近似した現象は、中居遺跡の各地に往々認められたとの事であり、此の層の主體を爲す赤褐色壚埴質土壤

の究明を目的とし、且つ又、調査期間も短時日であつた爲め之を遂行する事を得なかつた。たゞ、中居遺跡の西南方約三〇〇米の山地脚、寛斜面に位する一王寺遺跡は、前記の如く宮坂、池上兩氏に依つて發掘調査された。此の結果は本誌上に宮坂氏に依つて發表される豫定である。

Fig. 2. 遺　跡　地　形　圖
Karte der Umgebung der Fundstätte

發掘　我々の發掘狀況に關する記載に先達つて、先づ從來の發掘の主要なる結果を簡單に記述して置く事とする。泉山氏に依つて最初に發掘された部分は、前記の如く丘陵東北端、縣道に接近する所で、出土遺物としては多數の土・石器類等があつた。(第二圖a)又、其の附近より人骨が發見され(a′)、a點の西方に於て臺地が長田澤水田に向ひ稍々突出して居る邊り(b)からは土器・土偶、骨器、獸骨等の出土を見、更に其の西に於ける部分には石を圍らす數個の爐趾が地下數尺の黒土層中に存在する事が明瞭となつた(c)。其の他、人工遺物は泉山氏家屋所在地の(第二圖I)周圍に廣く分布して居る。(第二圖參照)此等人工遺物の比較的密集して存在する部分の平面觀的位置を見ると、主として泉山氏家屋南方の谷狀小凹地上緣に沿ふてL字形に散在して居る事が觀取出來る。又、遺物は普通の包含地狀を呈する部分に於ては、地下約一米―二米位ゐの深さに埋沒して居るが、包含層の厚さは遺跡の高所に在つては概して薄く低所に赴くに從つて漸次その厚さを增大する傾向を有するとの事である。

以上の諸地點は、その性質に於て普通の遺物包含地、又は住居趾の範圍に包括せらる可きものであるが、去る大正十五年十二月、同氏宅地表門より玄關に通ずる道路東側の一區域、(第二圖d)即ち谷狀小凹地の一部の發掘の行はるゝや地下一・五米の所よりクルミ、トチ、ナラ等の果實を主體とする特殊泥炭層が發見せられ、其中より箆狀木製品、木製腕輪、其他用途不明の木製品が見出された。此

地　形　本遺跡は青森縣三戸郡八戸市の南方約四〇〇〇米、同郡是川村中居に存在する。此の附近は所謂北上山地の北縁に當る丘陵地帶に屬し、九戸郡山地に源を發する新井田川は此地を開析し、谷間に狹少なる沖積地帶を形成して居る。遺跡の存在する中居村落の西側は、標高一〇〇—一五〇米位の低山地（俚稱一王寺山）をなし、其の山頂より山腹にかけての傾斜は可成り急峻であるが、それ以下の部分は甚だ宣漫のスロープを爲して新井田川の沖積地に移行して居る。（第一圖參照）遺物散布地は、一王寺山に續くスロープが尾根狀を爲して沖積地に突出する部分に位し、散布範圍は泉山氏別宅內、及び其の北方の農家宅地の一部、卽ち、此の突出する丘陵の北方に彎入する同村小字長田澤（中居遺跡の北方に於て西方に灣入する小支谷）水田と、泉山氏邸南方なる一王寺山方面に通ずる間路とに依つて境界されたる地域に極限され、新井田川沖積地、長田澤、及び一王寺山に赴く間路の南側には、遺物の散布すること極めて稀である。遺物散布地の面積は凡そ六〇〇〇坪に及び、その標高二〇米、遺跡最高部と沖積地との比高は約七米を算する。（第一圖、第二圖及び圖版第十一參照、圖版第十一、上、前方に位する水田は長田澤、其の後方に突出する低臺地一帶の地域は遺物散列地、中央なる家屋は泉山氏別宅。）

Fig. 1.　中居遺跡附近地形圖　1:50000
×は中居遺跡、○は一王寺遺跡。
Topographische Karte der Umgebung von Korekawa.

　附近に於ける遺跡又は遺物發見地の分布樣式としては主として新井田川溪谷、或ひはその支谷に伴ふて點在する傾向が見られる。八戸市石手洗、大館村新井田、同十日市、是川村一王寺等がこれである。此等の中、石手洗、新井田、十日市等諸遺跡の探究は、今回の調査が主として中居遺跡、特にその特殊泥炭層

氏は「日本石器時代提要」に、各々これに關して報導される所あり、其後泉山氏の發掘作業の進捗するや、更に多數の植物製遺物が原形を保つて陸續として發見された結果、從來無機質遺物のみを心ならずも研究對象として居た我國石器時代の研究に、一新生面が開拓せられ、斯くして本遺跡の價値は學界に喧傳されるに至つたのである。

去る昭和三年四月、史前學研究所に於ては、杉山壽榮男氏の斡旋に依つて泉山氏と協力して、前記、特殊泥炭層の調査を行ふ事に決定し、同月十五日より約一週間の豫定を以て發掘を擧行する事となつた。此の調査に參加せられた方は東京帝國大學醫學部の小金井博士、東北帝國大學文學部の喜田博士を始めとして大山公爵、杉山壽榮男氏、宮坂光次氏、池上啓介氏、竹下次作氏等で、筆者も亦之に加はることを得た。併して一行中の宮坂氏は池上氏と共に泉山氏の好意に依つて、其一部を提供された所謂圓筒土器(一王寺式土器)を出す同村一王寺遺跡の調査に從事され、筆者は竹下氏と共に本地の特殊泥炭層中遺跡の發掘を行ふ事となり、小金井、喜田兩博士及大山公爵、杉山氏は此等二地點の發掘作業を綜合的に指導せられた。

唯だ本地點に於ける發掘面積は極めて狹少なる爲め、この廣大なる遺跡全地域に對しては、所謂九牛の一毛とも稱す可きものである。從つて、これに基いて遺跡全體に對する考察は勿論、その一部を爲す特殊泥炭層に關してすら充分の説明を下し得ない。若し斯る問題に向つて正鴻な解釋を得る爲めには、將來のより精密な發掘と、出土品の總てに渉る綜合的研究の結果を基礎としなければならない。今回の調査はこの將來の完成に資する一事實を提供する階梯に過ぎないのである。故に、本概報に於ては發掘に當つて我々の觀察經驗した事實の報導を主體とし、總括に於て從來泉山氏に依つて爲されて發掘の結果を參考として、此等に對する管見を披瀝して見度いと思ふ。

本文に入るに先達つて今回の調査に當り多大の便宜と厚意とを吝まれなかつた泉山岩次郎氏泉山斐次郎氏、研究調査に際して指導を給りたる小金井、喜田兩博士、大山公爵及び其他の諸氏に深甚の謝意を表する。又 本地出土の植物質遺物の鑑定は、之を東京帝國大學農學部の草野博士に乞ひ、石器類の石質の鑑別は第一高等學校の坪谷理學士を勞はした。此處に銘記して深謝の意を表し度い。

II 遺　跡

青森縣三戸郡是川村中居石器時代遺跡調査概報

甲野勇

I 緒　言

此處に報告を試みようとする青森縣三戸郡是川村中居の石器時代遺跡に就ては、既に明治三十四年の東京人類學雜誌上に河村末吉氏の報告があり、其後東京帝國大學理學部人類學教室の石田理學士も亦此處を訪はれ、遺跡の一部を發掘調査されたとの事であるが、大規模の發掘が行はれたのは大正九年以來で、此の事業は遺跡の所有者にして、現在八戸市に在住される素封家泉山岩次郎氏の計畫に係はり、發掘の監督は同氏の令弟泉山斐次郎氏が之に當つて居られる。

最初の發掘は大正九年十一月、遺跡東端、道路に沿ふ丘陵末端の部分に於て行はれ、爾後、該事業を繼續して今日に及んだのである。此の間の發掘面積は約一千坪に及び、出土遺物は完形品のみにても數千個の多きに贍り、更に從來全く學界に其の存在を知られて居なかつた、クルミ、トチ、ナラ等の果實より成立する特殊泥炭層の發見あり、且つ其の層中より貴重なる植物製人工遺物の數々が見出さるるに至つた。然るに本遺跡は僻遠の地に位する事と、その事業が個人的であつた爲め、少數の研究者を除いてはその重要性を知るものは皆無であつた。只、以前より此地に矚目せられた東北帝國大學醫學部の長谷部博士の發掘の後、大里雄吉氏杉山壽榮男氏　中谷治宇二郎氏等は相前後して本地を調査され、杉山氏は「日本原始工藝」に於て、大里氏は「歷史地理」誌上に、中谷

何れ來る可き日、より大きな研究によつて、この責の塞がるゝ日の至らんことを待つものである。（文責在大山）

昭和五年七月

醫學博士　小金井良精
文學博士　喜田貞吉
公　　爵　大山柏

是川遺跡發掘に對する謝辭

私共、其内でも特に、小金井、大山の兩名は、今回本號に報告せられて居る、青森縣下、是川の遺跡に就ては、從來より、殆んど他に於て見ることの出來なかつた、驚異に價する樣な、各種出土遺物に對しても、亦其遺物保存集積の狀態に於ても、兼々、一度現場踏査を試み度いと云ふ希望と、これに伴ふ色々の期待をも持ち、私共の學究慾をそゝるものがあつた。丁度、昨冬機會を得て親しく是川遺物にも接し、且つ所有者であり、地主である泉山岩次郎氏にも御目にも掛ることが出來、杉山氏の斡旋もあつて、主として大山史前學研究所の主催により、此地の發掘調査を許さるゝに至つた。而してこの計畫が、泉山氏より喜田に通告せらるゝに及んで、喜田も參加することゝなり、玆に一行は、曾て埼玉縣下、眞福寺泥炭遺物層發掘に經驗ある、研究所の甲野氏以下が、主として是川泥炭層發掘を擔任し、同時に、泥炭層に近き、所謂圓筒土器出土地も併せて、宮坂氏、廣瀨分擔して發掘調査することゝなり、それに杉山氏、小金井、喜田、大山が參加することゝなつた。而して私共擔任外のものは、單に見學援助と云ふ程度に、實際的仕事の多くには、直接觸れなかつた。

此發掘調査に當つて、この遺跡を學術的に解放せられ且つ日常起居に至るまで、諸種の便宜を與へられた、泉山氏に對しては、私共一同は、心から感謝の辭を捧ぐるものである。又直接私共一行八名が御厄介になつた、泉山斐次郎氏並に其御家族、親近の方々は勿論、或は直接と間接とを問はず、色々好誼を給つた、八戸市並に是川に於ける各有志諸氏に對しても、こゝで一纏としては、甚だ失禮とも考へるが、共に私共の御禮を受けて戴き度いのである。特に斐次郎氏御一家に對し、私共一行の滯在中、自由に、愉快に且つ我がまゝや無禮行まで御許し下された親切に對し、重ねて御禮を申し述ぶる次第である。

私共は、以上の樣な泉山御一族其他の方々よりの手厚い歡待に對して、これを學術的に報返するには、此報告が餘りに些少であることに就て、參差たるものがある。只本號報告の如きは、漸く其一端を紹介するに止まるものであつて、所謂前衛だに過ぎない。

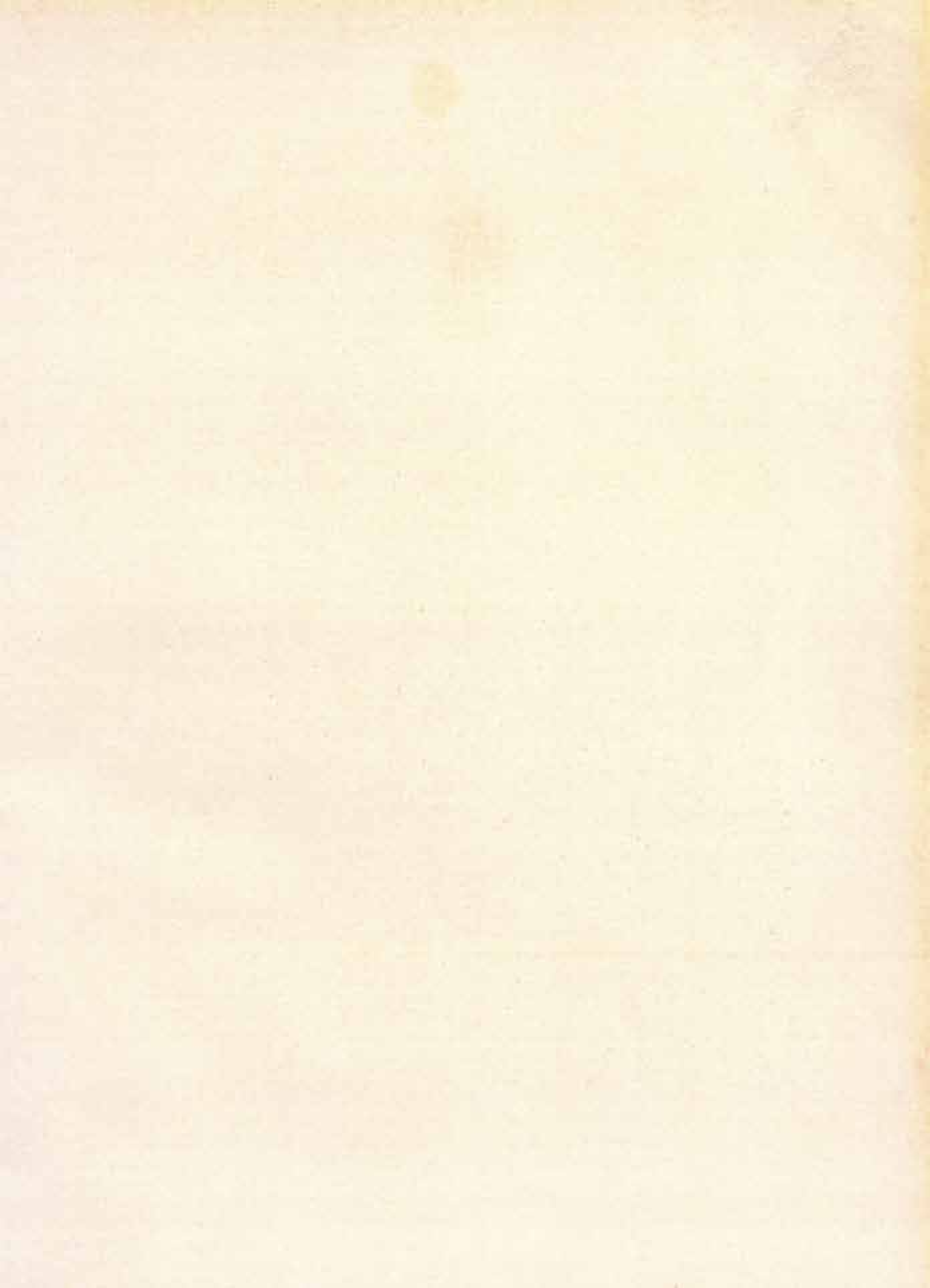




仝、遺物出土の狀態（泉山氏發掘）

Kulturreste in situ in den Torfschichten.

(Photogr nach Izumiyama)





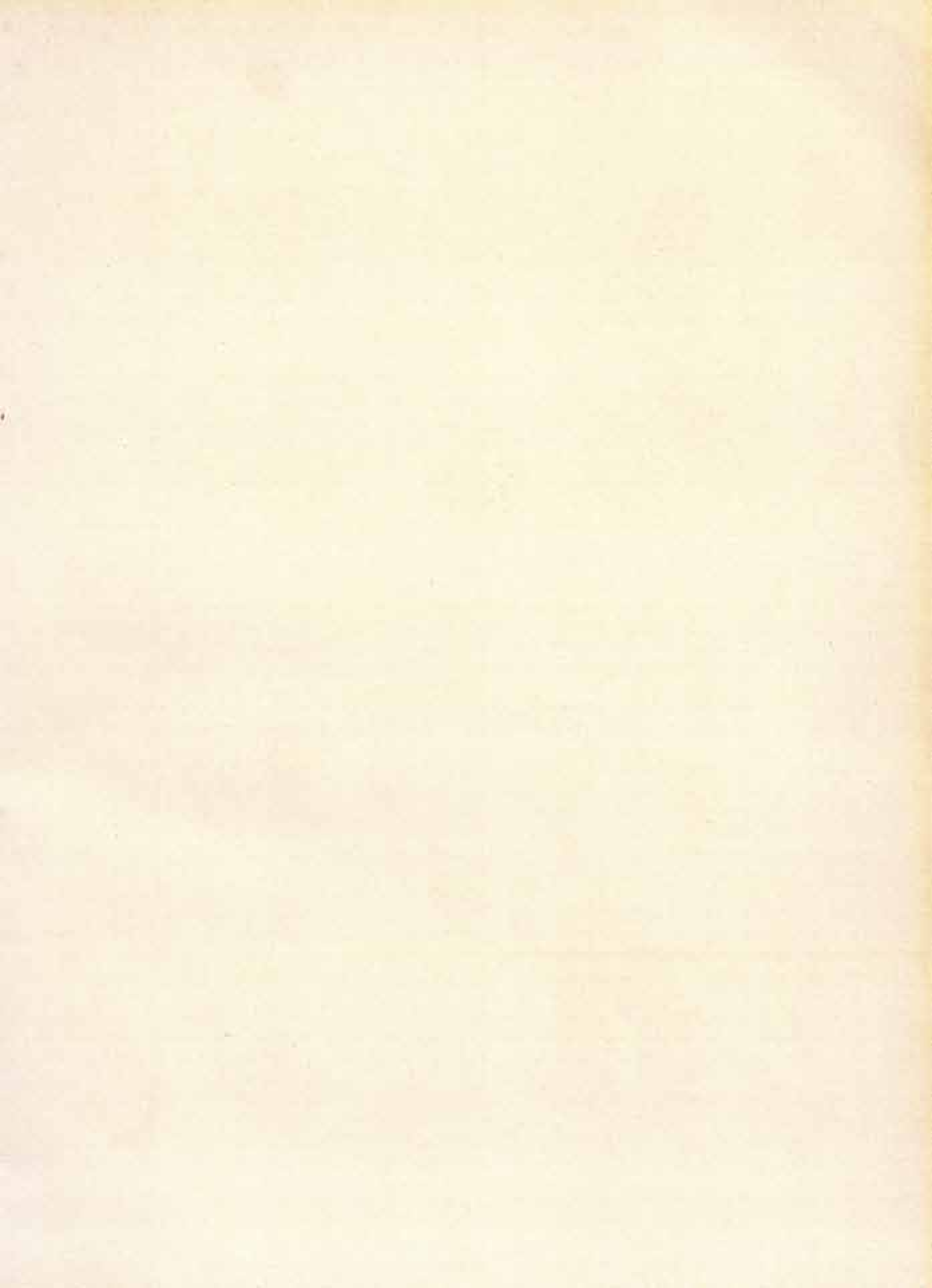
仝、出土、土器

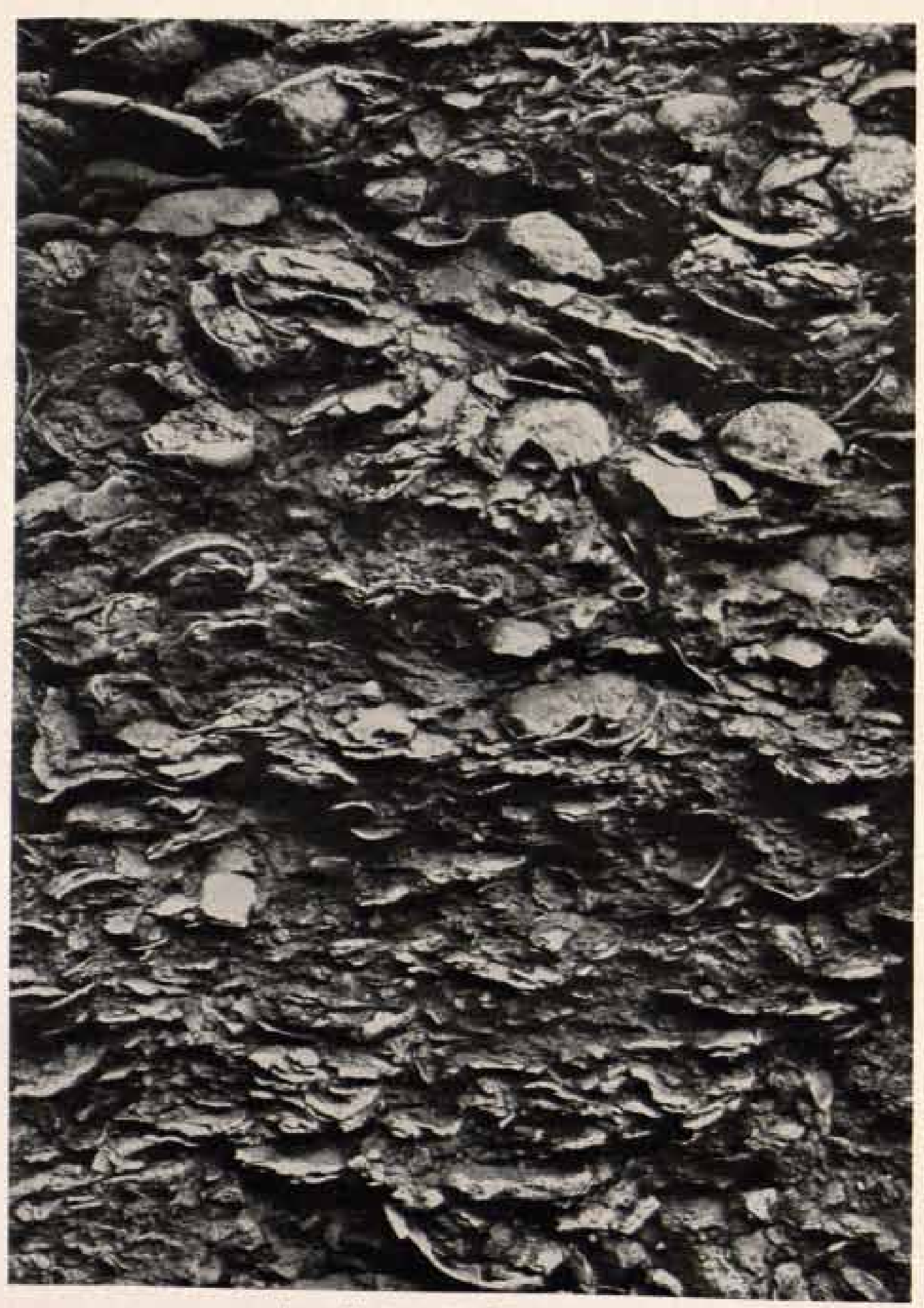
A. Tongefässe aus Korekawa



仝、植物製遺物

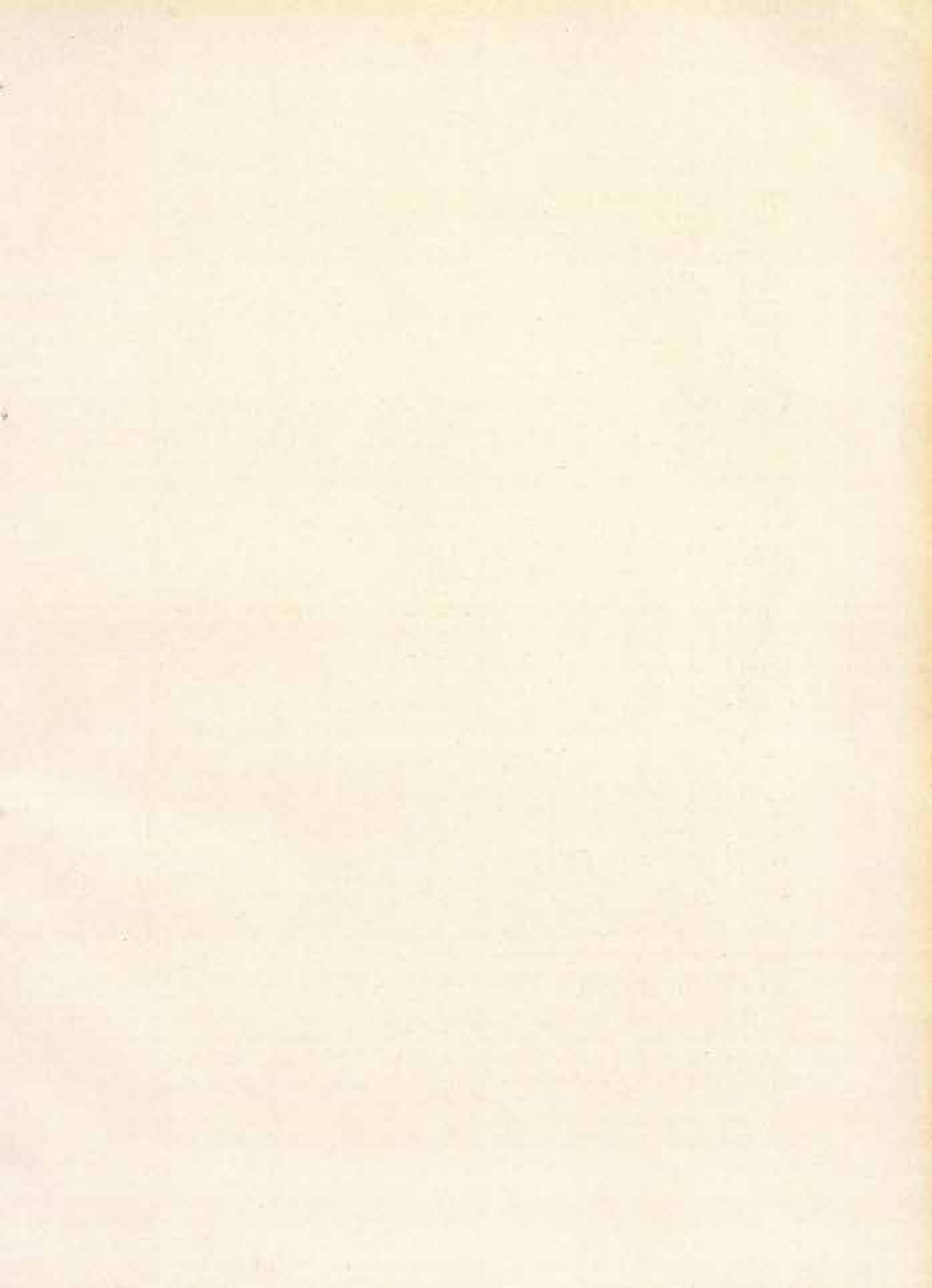
B. Holzgeräte aus Korekawa

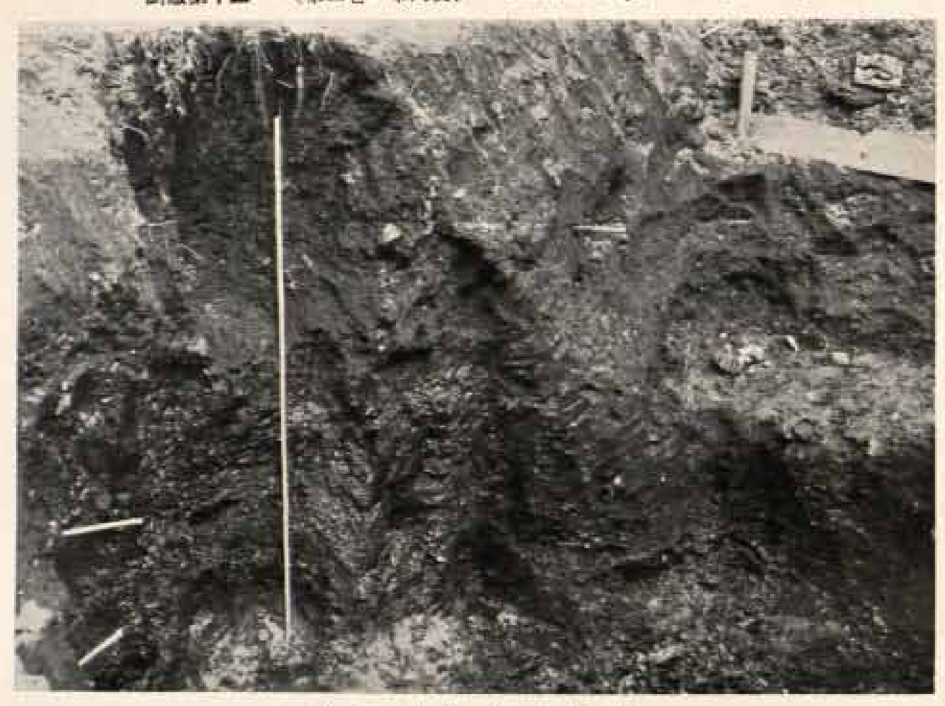




仝、 特殊泥炭層斷面の一部

Ein Teil der Kjökkenmöddingertorfschichten

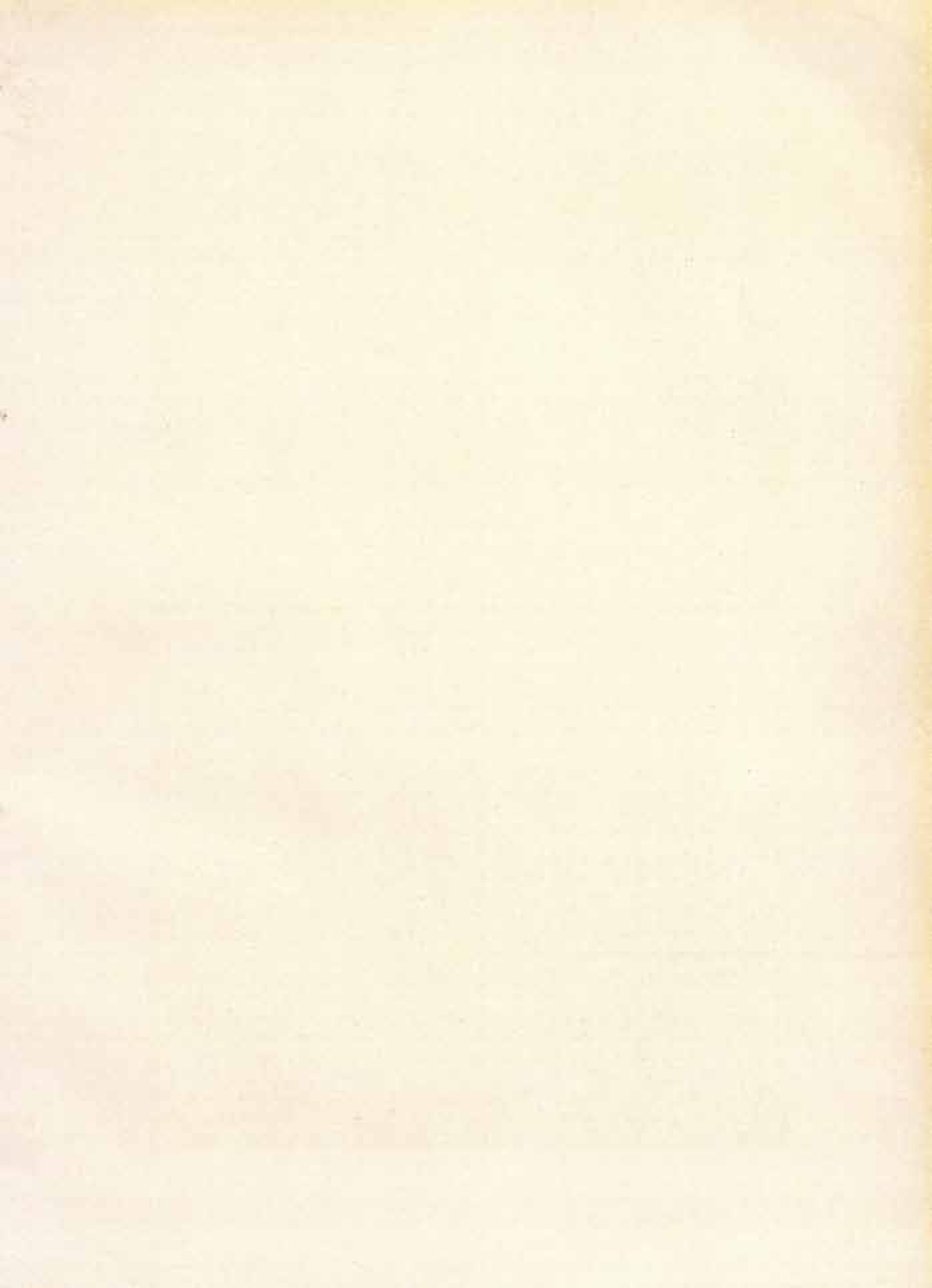




仝. 發 掘 地 北 側 斷 面
Schichtung der Torfschichten.



仝. 南 側 斷 面
desgleichen.

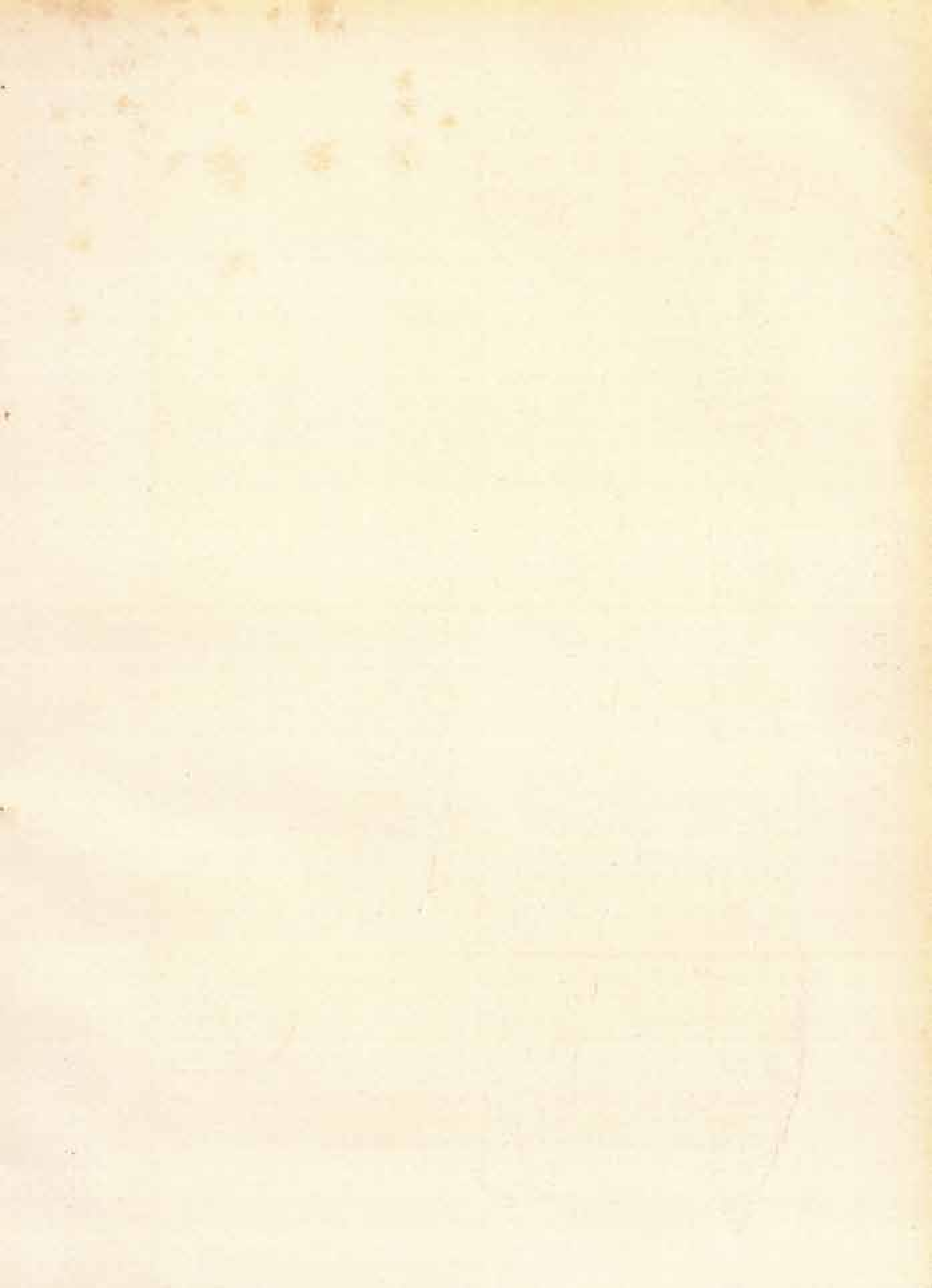


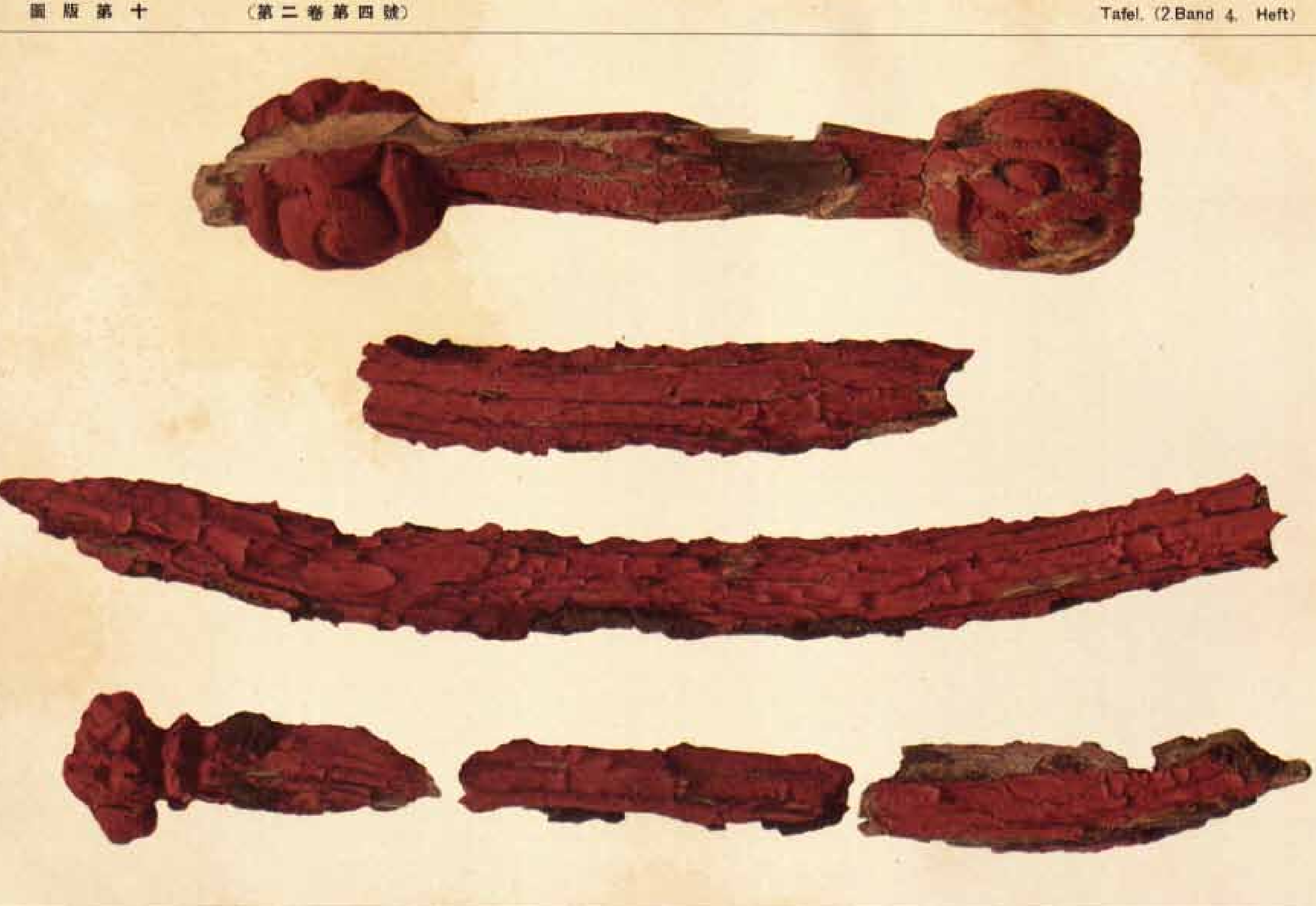


青森縣三戸郡是川村中居遺跡遠景
Fundstätte von Korekawa.



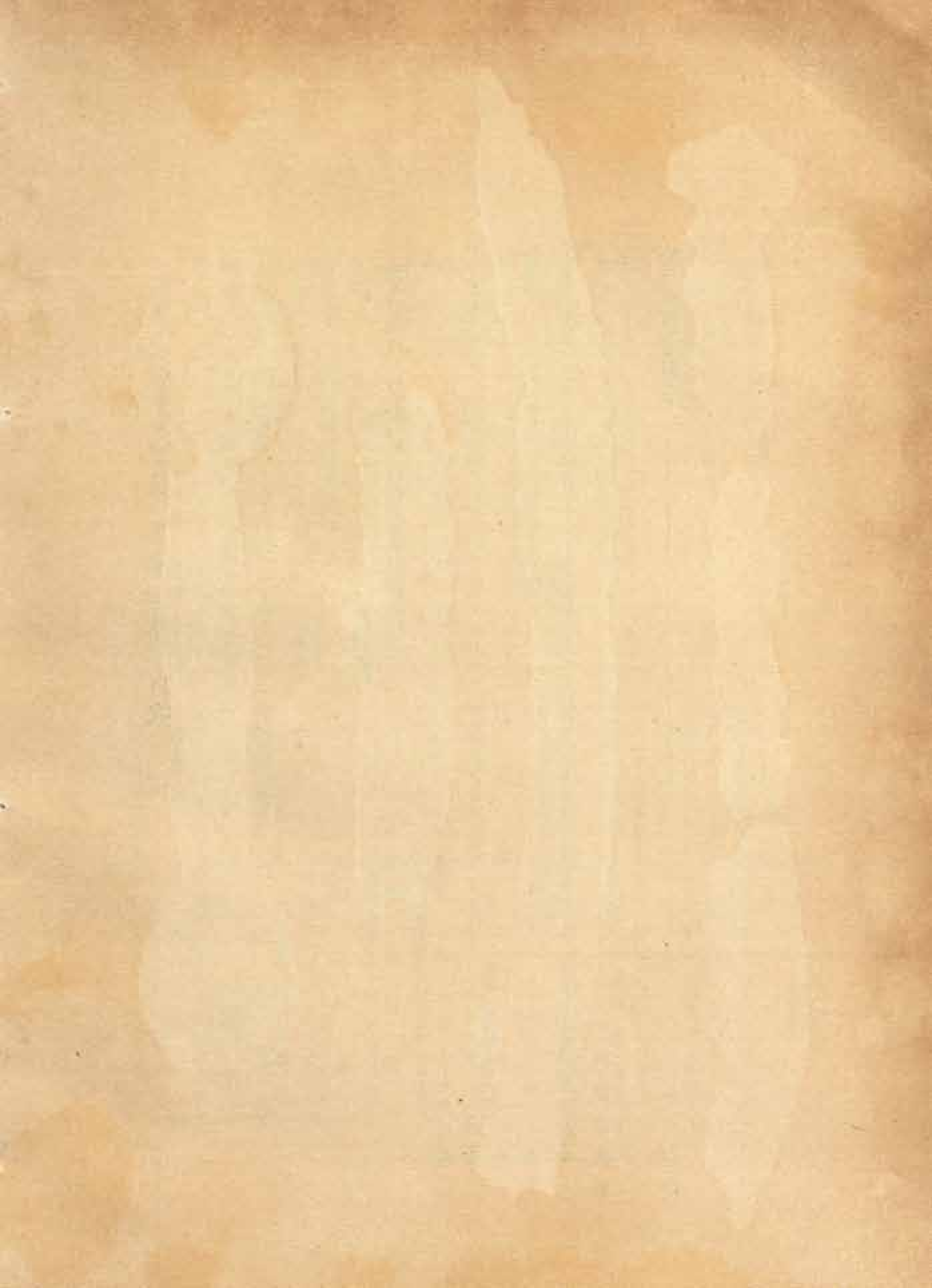
仝、遺跡發掘地近景
Ein Teil der Fundstätte.





陸奥是川泥炭遺跡出土

Schwertähnlicher Stab aus Korekawa



史前學雜誌　第二卷　第四號　目次

圖版第十、青森縣三戸郡是川村中居出土、木刀狀木製品。

圖版第十一、上、青森縣三戸郡是川村中居遺跡遠景、下、同、發掘地近景。

圖版第十二、上、同、發掘地北側斷面。下、同南側斷面。

圖版第十三、同、特殊泥炭層斷面の一部。

圖版第十四、上、同、出土の土器、下、同、植物製遺物。

圖版第十五、同、遺物出土の狀態（泉山氏發掘）

史前學會々則

一　本會ヲ史前學會ト名付ケル

二　本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三　本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル
　研究小報及パンフレツトノ發行
　史前學雜誌（年六回隔月發行）及年報ノ發行
　調査竝ニ研究旅行、臨時講演會竝ニ展覽會ヲ催ス

四　會　員
　本會ノ趣旨ニ賛成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル
　特ニ本會ニ貢獻シクル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五　本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌竝ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル（但海外在留者ハ別ニ郵送料ヲ要スル）

六　會員特典
　本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ其研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル
　本會ノ調査竝ニ研究旅行、講演會及展覽會ニ出席シ、本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

七　本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル（將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル）

八　本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク
　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九
　大山史前學研究所內

史前學會
電話青山一一二五番

幹事　大山柏　甲野勇
　宮坂光次　北條憲政
　杉山壽榮男　田澤金吾

會計　岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては內容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

定價一冊壹圓郵稅四錢

昭和五年七月十二日印刷
昭和五年七月十五日發行

編輯者　大山柏
東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九番地

發行者　岡田義一
東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九番地

印刷者　中村修二
東京市神田區表猿樂町二
株式會社開明堂東京營業所

發行所　史前學會
東京府豐多摩郡千駄ケ谷穩田九大山史前學研究所內
電話青山一一二五番
振替東京五八九六九番

發賣所　岡書院
東京市神田區北甲賀町四番地
電話神田二七七五番
振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第二巻　第四號

昭和五年七月十五日發行

是川研究號

史前學會

ZEITSCHRIFT FÜR PRAEHISTORIE

(SHIZENGAKU-ZASSHI)

Organ der Japanischen praehistorischen Gesellschaft

Herausgegeben

von

KASHIWA OHYAMA



2. BAND 5. HEFT

TOKIO

September 1930

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Aoyama Tokio.



Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Prachistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Prachistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   - A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   - B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Prachistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   - C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   - D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder

   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder

   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Prachistorie zu benutzen

   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Prachistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden

   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

   9. Onden Aoyama Tokio
Ohyama Institut für Prachistorie
(Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama	Kensei Hohjoh
Isamu Kohno	Sueo Sugiyama
Mitsuji Miyasaka	Kingo Tazawa

INHALT

I. Abhandlungen (Japanisch)

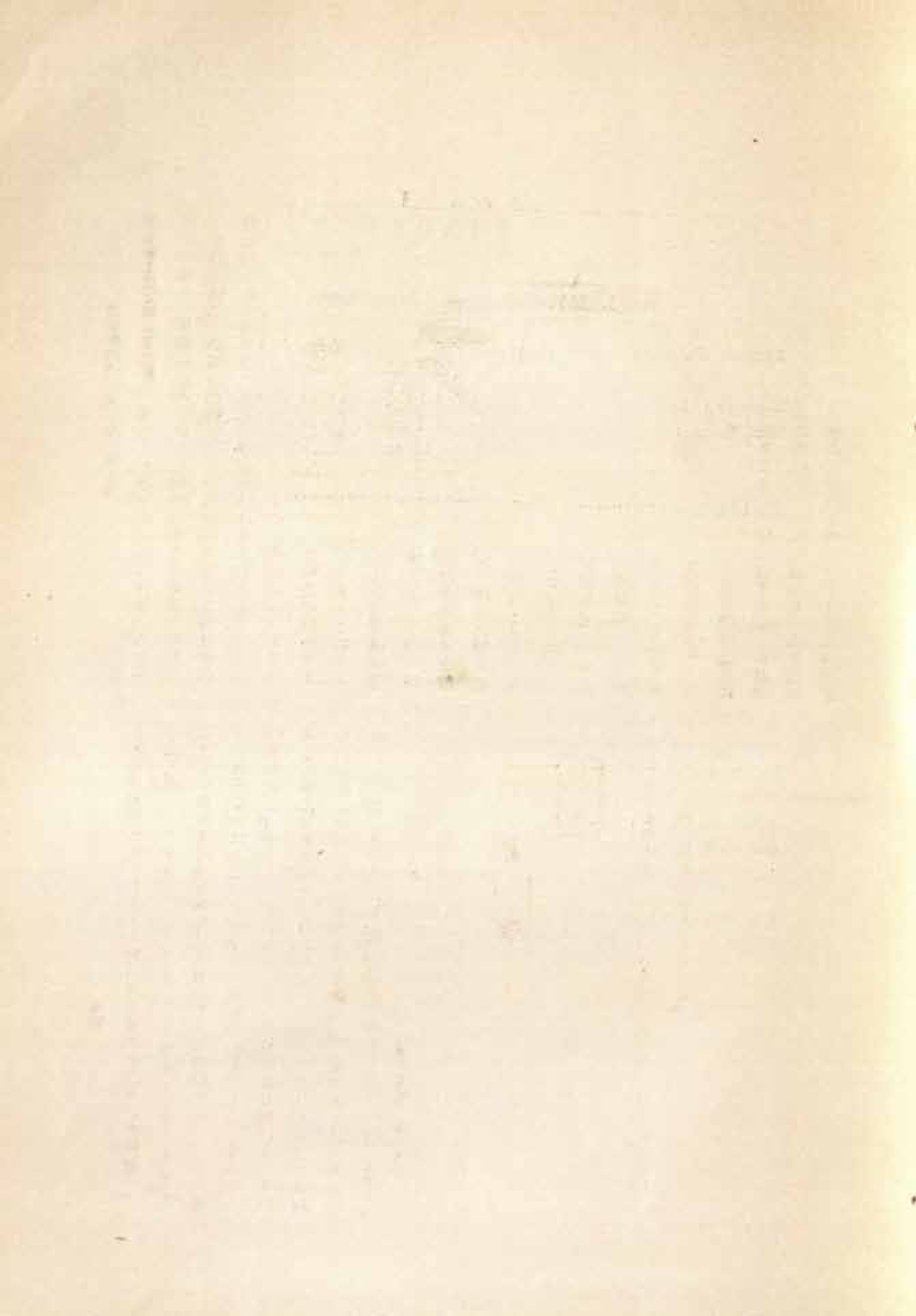
II. Kleine Mitteilungen (Japanisch)

1. Fundorte

2. Fundgegenstände

3. Yayoi-Kultur und ihre Familie





彌生式土器に伴ふ鑿石斧　彌生式土器と主として伴出する磨製石斧の一種に、所謂「のみ」形とも稱すべきその斷面方形を呈し、刄部と頭部との幅の相近い大さの石斧の存在する事は從來一般に知られてゐる所である。實測圖A——Bに示した三箇は特にその中でも小型精良の製作にかゝるものであつて Aは奈良縣磯城郡織田村字芝西田出土のサヌカイト製品、ほゞ方形に近い形狀を呈し、その斷面横に細長い矩形狀、双刄、精良な磨製にかゝる物である。Bは同縣高市郡新澤村大字一東常門の發見にかゝり、スレート製、その長さ三センチ餘に過ぎない小形品であつて、やはりその斷面は矩形に近く双刄であつて、Aと共に刄部の限界が明瞭である。極めて精良な磨製。Cは同縣同郡眞菅村中曾司出土のサヌカイト製の長さ僅かに二センチに餘る小形品であつて、双刄。やゝ先の二箇よりも製作は粗雜であるが、なほ左右兩側面よりの磨製はＡＢの手法に類似を示し、その表面に見得る稜はあるひは完全品でないためか、もしくは之にその稜を取る用途上の必要がなかつたか等のためであらう。この樣な小形品はあるひは利器以外の用に用ひられたものであるかも知れない。C以外は國大考古學研究室所藏。彌生式土器と伴出する石器の集成のため、類似遺物の報告を希望して已まない。

（國大支部、樋口清之）

會報

訃報

北海道史の著者、河野常吉氏は去る九月三日永眠せられた。此處に謹んで弔意を表する。

八・五糎、厚さ約五糎程の扁平で大形なものである。石質は不明



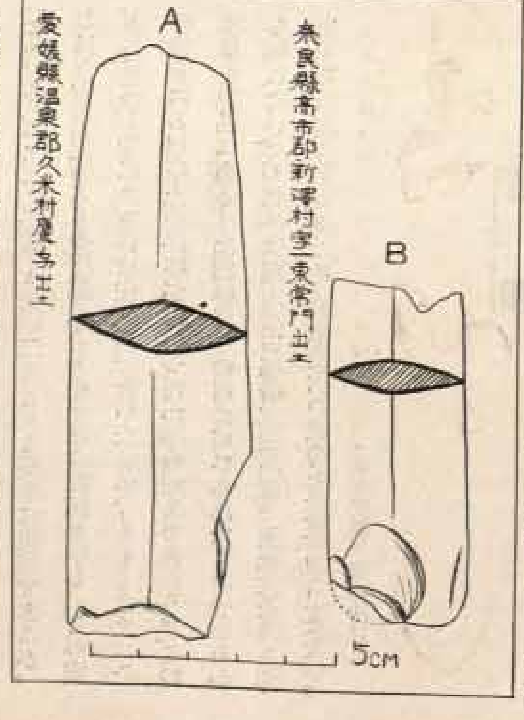
であるが、青色を呈する美しい石で、硬度は比較的低い様である。形は大體石斧に類似して、一方の側には略その中央に切り込みがあり、頭部よりの方が幅を減じてゐる。他側は石の自然面を利用したもの〻如く、僅かに緣を磨したのみで、刄部に向つて幅を增す。表裏の平も自然面を部分的に磨研したものらしく、縱橫に粗い磨痕を留めてゐる。その形狀の稍異なる點といひ、大きく、且つ重量の相當あるところから考へて、通常の石斧と同樣にも見られないが、いかなる用途を有つものであらうか。

右の大形石器の外に平取停車場附近から、二箇の石斧と表裏に磨り切りの溝を殘存する石片が一箇及び繩紋式土器破片が出土してゐる。石斧はいづれも大形石器と同質であつて、磨り切りの手方も一致してゐる。

（宮坂光次）

彌生式及其系統

磨製石鑿の二新例　實測圖Aは愛媛縣温泉郡久米村鷹ノ子發見で同村竹本定義氏藏品。全長一一・八センチ、幅三・五センチ、最大厚一・二センチの鎬を明かに有する灰白色粘板岩製品。Bは奈良縣高市郡新澤村字一東常門の出土で、同郡八木町萱嶋節三君の所藏。全長六・八センチ、幅二・七センチ、最大厚〇・八五センチで鎬の存在を見られる。黑色粘板岩製品。Aの遺蹟はその近くより多數の銅劍や、磨製石劍を出し、かつ繩紋式土器も稀に伴ふ石器伴出彌生式遺蹟、Bは磨石劍石鏃を出し、多數の



石器伴出の代表的彌生式遺蹟。

（國大支部樋口清之）

品は昭和四年秋季本貝塚調査の際、貝塚東北部に位する畠中に、他の縄文土器片と混じて存したのである。

横濱市中區蒔田町三殿臺貝塚出土の腕飾　本貝塚に關する說明的記載も、來るべき日に於いて述べる機もあらうと思ふから此處では省略する。第二圖の如き腕飾は、最大長五・七糎、最大幅一・九糎、最大厚〇・三五糎を算し、一端の上部には、片剝りになる二孔を通じて居る。用材は獸骨を使用せるもの丶如く感知する。然して全體の姿態の輕く彎曲せる形樣は、製作の精良と相俟つて、本品の持つ形態美を一層增大せしめて居る。貝塚を表徵する土器類は薄手より形成され、本品は其等と共に、貝塚西南方の斜面より採出したのである。（松下胤信）

横濱市中區根岸町ヒナソ貝塚出土の土偶と曲玉　横濱に存する多くの先史時代遺跡中、最も優秀な遺物を出す夫は、此處に述べようとする根岸町ヒナソ貝塚である。全般的記述は後の機會に讓つて、先づ土偶と曲玉に就いて記して見よう。

第一圖に示す土偶脚部片は最大長四・五糎、脚周（略中央部にて計測）七糎、全體の色調赤褐色を帶びるが、上部に當る折裂面の部分は深黑色を呈する。紋樣的所作として、上下兩端に太い隆起狀波線を畫き其中間に四條の竝行刻線を配して居る。然して脚底には、不規則な沈圓を中軸として、其外周に不整圓を施文し、所謂同心圓を形成する。此土偶片は、貝塚上において、耕作に從事中、發見された地主小島長吉氏より、私に送られたものである。

次に同氏の數多い藏品中時に異彩を放つ石器時代曲玉に就いて述べる。

第二圖々示の如く、全體略不整卵圓形を呈し、穿孔法は兩刳りを用ひ、最大長一・七五糎、最大幅一・一糎を測示する。本品は曾つて甲野勇氏が、埼玉縣眞福寺貝塚に於いてなされた、斯種遺品に對する分類のA型に屬する。（甲野氏埼玉縣柏崎村眞福寺貝塚調査報告二十四頁二十五頁參考）石質は美しい靑白色を





呈する玉質であるが、恐らくは碧玉ではあるまいかと思ふ。同じく小島氏に依つて、貝塚上において耕作中、採出されたのである。（一九三〇、三、二九、松下胤信）

北海道平取出土の大形石器　左圖は北海道日高國平取村平取停車場前より發見された石器である。同停車場新設工事の際偶然掘り出だされたものであつて、其の時の記憶によれば、大體厚さ一尺程の火山灰の下に黑土層があり、その黑土上表より五寸程下つた位置に存在したのであるといふ。

石器は厚さ五九糎、幅は刄部に於て一八・五糎、頭部に於て、

とも推察される。

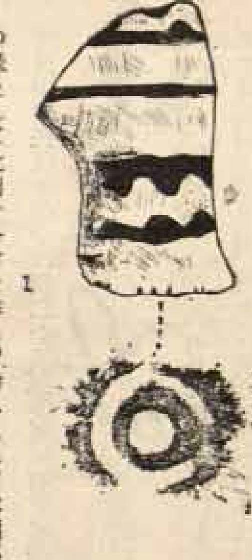
此他守矢家には中洲村發見の諸磯式土器の大きな破片と、靜岡方面で得られた彌生式甕の破片數個があつた。諸磯式土器は諏訪郡に於いて平野村小尾口海戶に於いて多く出土し、其他各所に散見されて居るが、此一片は爪型連續紋を附した代表的のものである。後者彌生式甕は余の稱する甕棺の一種類で、當地方出土のものと類似し刷條の跡を認める。

以上にて大體遺物の記述を了つた。之等遺物を通觀して思ひ及ぶ事は、往古に於ける交通狀態である。前述の如く半磨打痕を有する石斧や彌生式甕及び諸磯式土器の存在に依り、彼の駿遠地方や關東方面との關係が、深かつたことを認めることが出來る。之等は必しも當地方として稀ではなく、各所に檢出される處であるが、以つて當時旣に駿遠地方或は關東方面との交通が開拓せられて居たものと云へる。併し中山博士は考古學雜誌二十ノ四に於いて諸磯式土器に就いて、次の如く述べ『當時の文化移入は西と東とでは非常に時間的差違あり、一進一退遲々たりしものとせられ譬へ相互に酷似する同じ樣な諸磯式土器であらうとも、西のものは古かるべく東のものは新しかるべきことは最早多く論述する必要もあるまい」と論斷されてゐる。博士の說には頗る傾聽すべきものがあるが、然し此の說は何うであらうか。寧ろ遺物の中に見出す酷似點は該出土地のもの相互が少しも異ならざるものあり、夫れ等から類推すれば啻に時間的差違なきのみでなく、製作地相互にも密接なる關係を思はせ假令へ直接交通が無く轉々移入せられたとしても、其の移入に要した日數なり年代は、斯く隔つたものでなく極めて短きものではなかつたらうかと余は推思する。

此の問題は尙多くの資料を有して居るが、余りに埒外に走るから簡單にとゞめて置く。

（兩角守一　六月十二日脫稿）

橫濱に於ける貝塚出土の耳飾と腕飾　過去の多日の笑はしき思出の錄として此掘き一片を作る。幸ひにして本編が、橫濱先史文化史の上に多少なりとも寄與する所ありとせば、筆者の望外の幸とする所である。



橫濱市神奈川區篠原町篠原貝塚出土の耳飾　本貝塚に對する報告は、近く共實現を期して居るので、玆では共等の說明を後日に讓り、直ちに表題の如きものゝ遺品に關し、據述する事にする。第一圖々示の如き玦狀耳飾殘片は、最大長三糎、最大幅一・三糎を測し、石質は黑灰青色を呈する滑沢なる蠟石製である。本

寧ろ故意に貫孔した形迹があり、夫れに此の一端に附された一種の注口及び段梯狀の點等に就いて觀察すると、特殊の用途があつたものと思はれる。從つて他の注口を有せざる石器も同樣の用途から作られたものと推察される。

「註」　注口を有せざる類品

1. 諏訪郡玉川村發見　二個
2. 東筑摩郡入山邊村發見　二個
3. 同　中山村發見　一個
4. 同　松本市埋橋發見　一個

石器は此他石棒の小形にして先端丸味あるものと、短いが太い敲き石として實用に供されたと思はれるもの、及び皮剝、石鏃等に注意すべきものがあつたが省略する。

（五）　彌生式土器　第六圖VII 大島氏藏　小町屋區諏訪神社前宮横にて發掘さる。高さ二寸三分、口徑二寸三分、上り底で腹部ふくらみ、頸部と脚部とに少し頸れを呈し、腹部に一個徑二分五厘余の小孔を有して居る。色は外面赤褐色內面黒色を呈し、厚さ不整で二分乃至三分あり、內部の黒色は燒き色ではなく、內に容れた液體の滲潤に依つて變色したものと察せられる。孔の存在は祝部土器の丸底のものに屢々見かける吸口と類似したものであつて、此の孔に管でも通して內に容れた酒等を吸ひたるものであらう、小形で脚を有した變つた彌生式土器である。

（六）　土製錘　第六圖VIII　IX　共に神長官たりし守矢家所藏、前宮附近發掘品である。

VIII は一端を缺損せるも現存の長さ一寸二分、斷面太き處徑三分黄褐色を呈し、貫孔して居る。IX のものより稍々古きものか。

IX は長さ一寸二分斷面の徑一寸一分、貫孔を有し淡赤褐色を

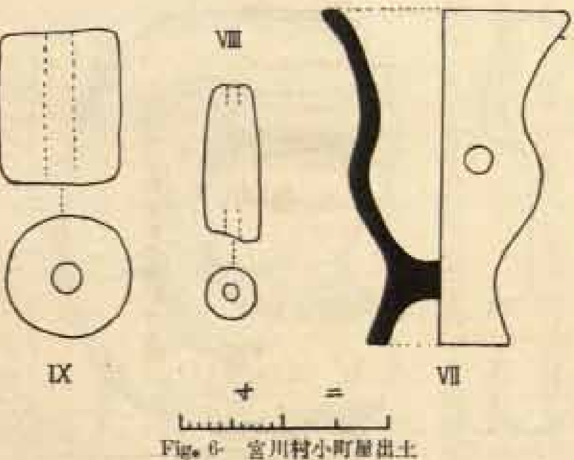


Fig. 6· 宮川村小町屋出土

呈し、埴部皿と同じ感じがし、時代新しきものである。同大同形のものが二個あり、孰れも未だ使用せし形迹がない。それに發掘の場所が諏訪神社、前宮遺蹟で、直ぐ近傍からは埴部土器の皿等を屢々發見して居る。神社と埴部土器とは關係深きものであり、その埴部土器と此の土製錘とは製作が類似して居ること等を考へると、土製錘と神社との關係も亦た深きを想到せられる。隨つて吾々が普通考へる錘でなく、其の用途は他に存し神社の祭祀用にあつたか

等は諏訪史に未だ載つて居ない。尚未報告の有紋石皿には長地村出土の完全優秀の模様を附せるものと、平野村小尾口海戸發掘の小生所藏小形品等がある。亦た最近調査した東筑摩郡中山村發見品も、頗る立派なものであつた。今之等を出土遺跡に就いて見るに、孰れも其の地方の優秀著名なる遺跡に限定されて居る。之れは石皿のみに限つたことではなく、他の石器土器等も亦た同じで、優秀遺物は優秀遺跡に伴ふ場合が多い。事實は頗る簡單明瞭の事であるが、之れ等の關係から推して當時の文化の普及狀態を想像し得て面白い。卽ち當時の民衆は一般に工藝に巧みで、自由に石器及土器を製作し使用したものと考へられて居るが、實際はそんな單純のものではなく、優秀の用具は矢張り酋長と云つた樣な權力ある一團にのみ使用され、一般へは普及されて居なかつたことが類推される。

（四）　貫孔搖鉢形石器　第四圖VI 牛山氏所藏　小飼通り發見、質堅き安山岩、徑四寸六分、高さ二寸、圖示する如く深き凹みを有し、その凹みの中央に徑六分余の孔が下底に貫いて居る。凹みは段梯狀を呈し、中央孔に向つて摺鉢の凹み狀を成し、且つ底部も凹みを有して居る。

上緣は六分厚み位あり、其の一端の緣が薄くなつて注口の形狀を呈して居り、貫孔の部分が無ければ一個の石皿ともなり得る。併し凹みが摺鉢形を呈して居るにより、便宜此の名稱を冠したのである。他にも貫孔摺鉢形の石器が各所に散見する。之等は注口を有さざるもので、其の用途は今迄不明とされて居た。今此の小飼通り發見のものを見てその用途を案ずるに注口を有し段梯狀を呈して居る點は石皿の變形とも考へられ、亦た摺鉢狀の貫孔を有する點は、肉類或は植物等を此上にて搗り潰し或は壓搾して流れ出る汁を得たかとも考へられる。亦た之等は木の實、肉等を潰すに用ゐた一種の小形石臼であつたものが、長いことと使用して居る間に自然磨滅し貫孔するに至つて遺棄されたかとの類推も下される。併し此の貫孔したものを見るに、自然の磨滅とは思はれず

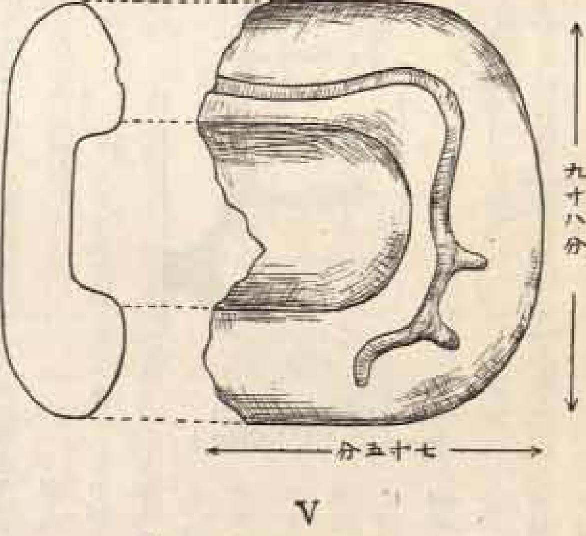


Fig. 5.　宮川村小飼通發見石皿

の資となし且つ亦愛藏せしものではなからうかとそんな考へも浮んで來る。

第三圖IIIの石斧は、大島憲章氏藏で同じく小飼通りの發見である。長さ五寸五分、幅一寸二分、厚さ一寸一分、質は綠泥片岩の様である。表面手擦れて黒色を帶び、磨研されて居るが、側面の一部に尙小打痕をとゞめて居て、遠州方面に多く發見される半磨石斧と形式を等くして居る。之を見ると初め全面に打痕を附してあつたのが、使つて居る間に漸次磨研せられたものと思はれる。他に同じ形式の石斧が二個存した。此石斧の存在に

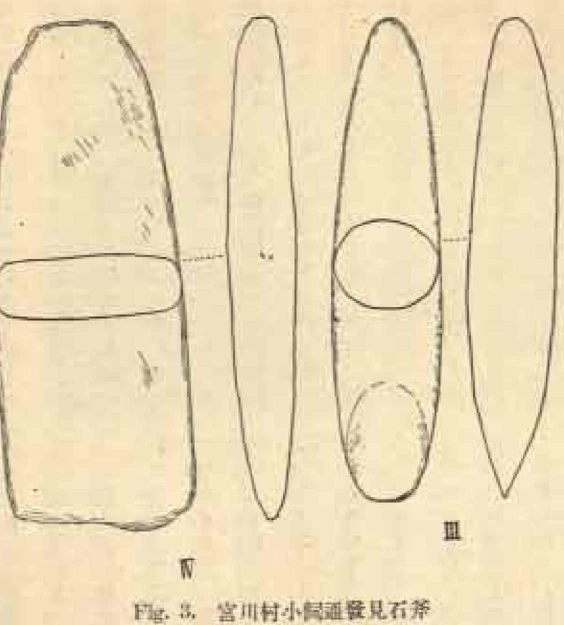


Fig. 3.　宮川村小飼通發見石斧

依つても當時既に此の地と彼の遠州方面とは、直接乃至間接に交通の開けて居たことが想定される。

第三圖IVの石斧は、長さ五寸九分、幅二寸二分、厚さ七分ほど短册形を呈し、淡綠靑色の硅岩で堅硬鋭利のものである。これと大さ形式を同じくするもの他に一個あつたが、これも淡灰白色の硅岩質を用ゐて居た。石斧は此外種々のものがあつたが他は省略する。

(三)　石皿　第五圖V大島氏藏　小飼通り發見現存の長さ七寸五分、幅九寸八分、厚さ三寸五分、深き凹みを有し、其の縁部に簡單ではあるが自由で大きな感じのする曲線紋様を沈刻して居る。惜しい事に半缺し全容を知ることが出來ない。石質は安山岩である。尙大島氏は完全で有紋の石皿がある由である。之

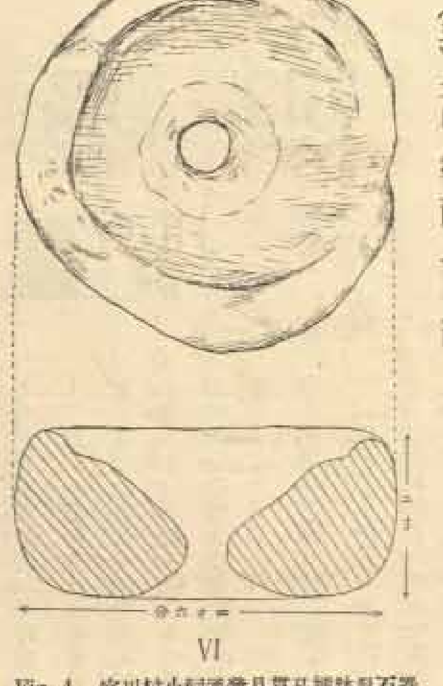


Fig. 4.　宮川村小飼通發見貫孔捕鉢形石器

の背後に前宮古墳又神陵と稱さるゝ古墳が存在し、今墳丘は存せざるも瑞籬を構へて人の出入を禁じて居る。此の古墳に就いては誰云ふとなく神陵と稱し、諏訪史にも建御名方命の墳墓の地にもあらんかと推考され、古來里人もよく其の意を體して崇敬の念を抱つて居るとのことである。此の地は夙に古記錄にも載つて居り、且つ彌生式に屬す遺物を發見する等、古墳の存在と相俟つて由緒古きを偲ばしめる。斯かる次第で前宮遺跡は啻に神社史のみならず、諏訪の上古史を案ずる上に重要なる地を占めて居る。以上遺跡の概述を了つた。次に遺物に就いて略述を試み度い。



Fig. 1. 諏訪郡宮川村附近地圖

遺物 （一） 滑車形土製耳飾 第二圖I 長徑九分、厚さ五分、胴部稍々彎曲し表面は略々平形を呈して居る。圖示する如く兩面に土版に見る樣な特殊の沈紋を附して居る。拓本に依つて模樣を見ると周圍が處々缺損して居る爲、點線圓を繞らしてある如く見ゆるけれども、圓線であつて、其の內部に相對のC字形を描き、一面には其の中間に線條を附し、他の一面には點線紋を附して居るのみで、兩面略々似たるものである。色は淡黑褐色を呈し、滑車形耳飾としては、小形の部に入るものである。之れは手山豐太郞氏の藏品で、最近小飼通りの桑畑に於いて發見せるものである。

Fig. 2 宮川村小飼通發見

（二） 磨製石斧 第二圖II は牛山氏所藏小飼通り發見品である。質蛇紋岩、色黑褐色を呈し、長さ一寸三分、幅五分、厚さ二分五厘、薄き蛤刃を附し、注意すると右端に一條の擦り切りの痕跡がある。這は其の製作の過程を知る上によい資料である。極く小形で美しく磨かれて居る。然も硬度著しく低く、此種石斧が凡て實用に供せられたものであるかは大いに疑問とする。或は有孔石器に於ける如く、原石の得難きと磨研した美に愛着を感じ、物々交換

南社の狩獵區域だつたと云ふ。それを、後から移住したブヌンが買ひ取つたものであると云ふ。して見れば、此の遺跡は大南社のものとも考へられるが、大南社のものに聞いて見ると、此處に蕃社はなかつたと云ふ。而して狩獵區域の山中に、大きな蕃社のある事は、普通の場合ないと見なければならない。

　此の遺跡の土器の包含狀態から見ると、余程の大きな蕃社の跡だつたと考へられる。而して土器片が、地表に散亂して居るのは、附近を通過する道路が、其處を露出せしめたからである。出土する土器には、大體に於て二種ある樣である。其の詳しい報告は、他日に讓るが、壺の底が、平らなものと、凹んだものとがある。而して皆無紋で有紋のものは認められない。何れにせよ、パイワン族の土器とは、全く異る所のものである。

　余は今の所、此の土器片を殘した種族が何れの蕃人であるかを考證す可き、確かな材料を有して居ない。然し、或は此れはパイワン族でもなく、又、ブヌン族でもない別の種族——今は消滅した——先住居のものではないかと思つて居る。とりあへず、資料として、報告して置く。

（鹿野忠雄）

遺　物

信州諏訪郡宮川村安國寺附近出土遺物の調査　玆に述べんとする宮川村の遺跡は曾て諏訪郡史編纂の際、鳥居博士等と踏査せし處であるが、最近諏訪史談會の一行に加はり再び調査する機會を得た。勿卒の間の調査とて能く盡すことは出來なかつたけれども、諏訪史以後の發見もあり、亦た未報告となつて居たものもあつたから、それ等に就いて簡單に報告して見よう。

遺跡地の概況　遺跡は中央線茅野驛から西へ十四、五丁にして達し、守屋山の一脈梁の裾が湖邊の沖積地に突入せんとする所に近い丘陵地、即ち諏訪郡の南部山際に相當して居る。安國寺區の名稱は安國寺の存在に依つたもので、其の位置は平地に向つて下つて居る。遺跡は其の山の手で塚屋通り中ノ澤、小飼通り樋澤城及び小町屋區に亘る廣大なるもので、附近一帶が先史原史、兩時代の遺跡である。

　右の中小飼通りは石皿、石棒、磨、打製石斧、皮剝石鏃及び土器類等を豐富に出し、石器時代遺跡として著名であり、昨夏伏見宮博英王殿下も御踏査遊ばされたことのある地である。

　樋澤城は石鏃及び祝部埴部土器等僅かに出して居るのみであるが、要害の地であり當時堡塞として、よつて以つて敵を防禦したと目せらるゝ處である。

　亦た塚屋通り及び小町屋は共に往古、古墳の數多く存在した地であるが、今は多く壞滅に歸し遺存するものは稀である。

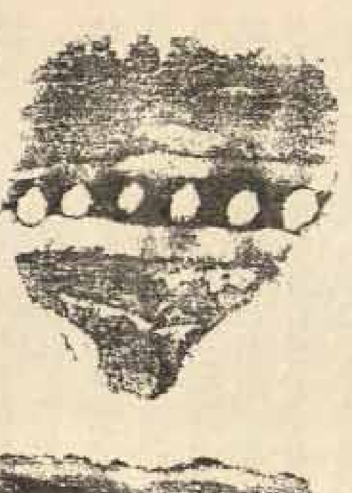
　小町屋は安國寺區に西接し、諏訪神社前宮の所在地で、最も古く開けた町であり、今は衰微して見る影も無いが傳へらるゝ多くの史實に依れば、最も殷賑を極めたものである。其の前宮

資料

遺跡

東京府荏原郡玉川村奥澤の先史遺跡　昭和四年秋季に於ける探訪と、其後の補加を合して、本小報を作成する。

玉川村奥澤の遺跡は、玉川水道淨水地に近い奥澤八二〇番地近邊の畠地に存する小谷に面した丘上である。此附近は住宅地となさん爲土木工事を行ひ、其結果として少許ながらも包含層を露出して居るし、又燒灰を夾雜する場合も少くない。





玉川村奥澤

遺物は繩文土器に屬し、製作粗雜色彩黑褐色若しくは赤褐色を呈する。文様は沈文を主とし、繩文平行文渦文或ひは擬繩目刷毛目竝びに曲線文等を含み（圖參照）夫々の複合になる變化形も存する。石器等に關しては捜索不充分の爲見出されなかつたが、黑燿石の碎片は往々包含層中に採見して居る。（松下胤信）

臺灣ライフンロク、マチダル社附近の遺跡　筆者は、一九二九年五月下旬、臺東廳警務課長植田末雄氏の好意により、森丑之助氏の踏査以來、兇蕃の跳梁のため、何人の出入も許されなかつた、內文鹿地方を踏査し、且中央山脈の脊梁を越えて、高雄州下に出づる事が出來た。此の旅行の時の發見であるが、同地方蕃人ブヌン族マチグル社の手前に、古い蕃社の遺跡が發見された。其の附近には、住家の跡と覺しきスレートの積み重ねられたもの等が認められ、又、土器の破片は實に、夥しく散亂して居た。

丁度蕃界警備線道路は、此の地點を通過し、ために、此の道路を通過するものは、重疊散亂する土器の破片の上を、踏んで歩く様な狀態なのである。

此の蕃社跡が、現住するブヌン族のものであつたならば、別に問題はないわけであるが、此れは、どうも他種族の遺跡らしいのである。此の地方に居住するブヌン族の何人に聞いても、此の社に就て知るものはない。已存の蕃社の位置等に就ては、詳しい彼等の間に、傳說さへも見當らないのは、不思議な事と云はねばならない。

元來、此のライフンロク地方に居住するブヌン族は、臺灣の大きな古代史から見たならば、割合に最近に、移住したものなのである。以前には此の地方は、山一つ隔てた、パイワン族大

IV　小　結

以上記述して來た所は靜岡縣小笠郡曾我村に存在する一の彌生式土器を主體とする遺蹟及びその遺物に關する忠實な事實のみの記載であつた。それ等が有する各特質の考察や、比較研究の如きは敢へてその全部を省略して記述して居らない。たゞ現今の自分にはそれ等よりもなほ焦眉の必要を此等の遺蹟遺物の事實の記載に認めなければならなかつたためである。今自分は、一の、東海道しかも遠江國の、そして彌生式の遺蹟を不充分ながら記載し得たのを喜んでゐる。終りに二三參考にもなる樣にと思ふ事を記述してこの文を終り度いと思ふ。

(一)本遺蹟の東々北方約千六百米の長谷は本邦最東方に位する銅鐸發見地である。

(二)本遺蹟の北方岡津の洪積丘陵上からは繩紋土器が發見され、又古墳もその丘陵上に營まれてゐる。そして本遺蹟は自分の提稱する「習逆川地帶」に接した沖積層上に低く位してゐる。

(三)本遺蹟出土の土器にはその特色に於て關西に最も多い特色を表現したものと、その一部には關東に多い特色を具有した物とが存在してゐる。その兩者の遺蹟內での關係は不幸不明であるが、自分の知る範圍に於ては本遺蹟の如きはおそらくそれ等を層位的關係に於ては示す事困難であり、兩者はそれ以外の關係に於て本遺蹟に存したものであらうと自分は考へる。(完)

隆起帶――先のA型土器口緣唇に存在するものであつて、堅に平行して四條づゝ四組存在する。その他一例として頭部と肩部の境に一帶を有するものも存在してゐる。この種の存在も大いに注意すべきものである。

隆起圓――A型土器に在つて端平であつてむしろ、球よりも圓と云ふ可きである。土の粒を作つて、これを上より押しつけ附着させたものであるらしい。

以上述べた所は本遺蹟出土彌生式土器紋樣についての概略であつた。之を要するに本遺蹟土器紋樣は、大體に於て、A形土器の肩部以上に多く存在し、中にはC型土器の如く實體繩紋を有するものも存在して特にその技工に於ては注意すべきものであり、又紋樣の種類には多數の擬繩紋が存在し、多くの幾何學的紋樣の中には竝列弧とか重楕圓とか又は波形紋等の如き注意すべき種類の一群や、他には立體紋の如き物が存在した。その表面には、他所の例の如き顏料の塗布等は認める事が遂に出來なかつた。又此等の紋樣も、その中に於て、繩紋と擬繩紋、又は、一般の幾何學紋と散亂平行線や弧等との間には、相當興味深い關係の存在等も亦認められる樣であつた。



Fig. 16.

以上述べて來た彌生式土器は、先づその型態から始めて、その完全土器に於ては、特殊な系數的性質の相異によるそれ等分類必要の一根據を示して、それと他の一般の理由とより完全土器をABC三つに分ち、それに部分型態中口緣部型態に於て認めて抽出した一の型式Dを加へて四つの形式が本遺蹟に存在した代表的彌生式土器の型態である事實を指摘し、又その形に於ては、壺形、鉢形、高坏形等のヴアラエテイが存する事實を陳べ、その製作に及んでは、それ等各型式の各〻に於ける成形、燒成を述べて粘土に及び、それ等が、各〻獨特の性質をその製作に於ても有する事を說き、最後に紋樣を記述して大體に於て、紋樣の質と量とそして有樣とが各型式によつても異り、又その中には種々の意味に於て興味少からざるものを有する事をのべて來た。

行直線の一部數條を特に一段下げて、規則的に配置し、均整な複雜さを表現したものも存在する。又他には十五圖(4)の如く方々に亂れ散つた物も見られる。此等平行直線は多くは櫛齒樣の器具を以て作られた樣に想はれる。

平行直線群の斜交——十五圖(3)に示す如く多數の平行直線が、格子狀に反方向の傾斜を持つ平行直線と交るものをかく呼んだのであつて、これは、その平行線が一の櫛樣の物で作られたのではなく、一本づゝ離れた、もしくは一本の器具によつて次第に作られたものらしく想はれる。

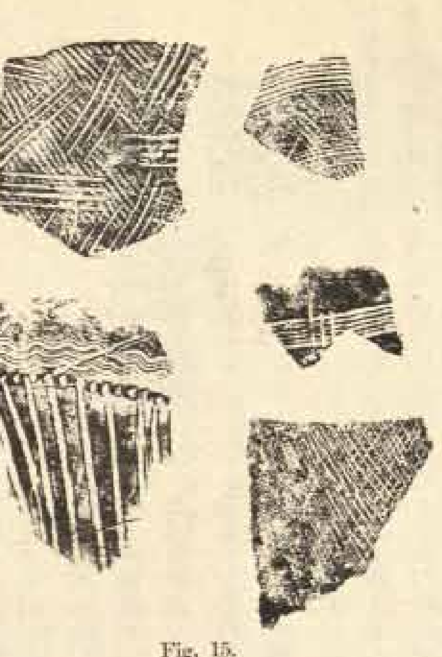


Fig. 15.

平行直線と直線直交——十五圖(2)の如く平行直線間に一本—五本の平行線帶、その平行線帶だけの長さに之に交るものを指す。やはり一種の平行線紋の復合として認め得るものである。

並列弧——第十六圖(1)に示す如く、弧が魚鱗狀に横に並んで、平行線帶の下に在るものであつて、之は他の曲線紋等と共に、やゝ注意すべき特色の異つた紋樣である。

重楕圓——十六圖(2)の如き物であつて、不完全な破片であるため全形は不明であるが、おそらくは楕圓の重なりであらうと想像される。この種の紋樣も大いに注意すべき性質を有してゐるものである。

波形紋——十五圖(5)十六圖(3)(4)に示すものであつてこれには極めて規則的な物と、不規則的な物とが存在してゐる。規則的な物は頸部等に於てもしば〳〵見る如く整然たるものであつて、多くは他の何等かの紋樣と列べて印せられてゐる場合が多い。

平行弧の亂散——十六圖(5)先の平行線の亂散と同性質を持つて、他の整然たるものから見れば極めて、自由な、しかし、頽廢的な紋樣の樣に思はれる。この場合に於て此等は決して波形等作るのではなくして、亂雜に方々に飛び散つてゐるものである。

孔——紋樣であるか否かは不明であるが、その結果から見れば一種の立體的裝飾の效果を表はしてゐると考へられる。高坏形土器脚部に限つて存在して圓形、同高位に三箇が存在する。

上の布をかく羽狀になる樣接合してそれを以て同時にかく押したものではないかと推定する、勿論この下段下部の不統一の縄目末端はその附近に存在する刷毛目より少くとも、廣き幅の下段を他の各段の如くに整へるためその一部を無雜作に消したゝめかく不統一になつたものと考へるのが當つてゐる樣である。この二つの推定は理論上は共に存在し得る物ではあるが、しかし、實際の場合としては、自分はむしろ、三枚の布を接合した一の布を以て同時に押したものではないかと考へる方がより正しきものではないかと云ふ感を强く感じてゐる。他の二例も共に同樣な物であるが殘片であつて、その製作技工等は不明である。

擬縄紋——櫛齒樣の器具を以て、作られた縄紋類似の形や効果を有してゐると考へられる物を擬縄紋と呼んで本項に含める。この擬縄紋には第十四圖に於ても示す如く一組の物が同方向に走る物、二組の物が羽狀に走るもの、三組以上の物が、羽狀もしくは羽狀の亂れた形を呈して交錯する物等が存在してゐる。各〻にはその幅の廣狹、並の粗密等が異り又同一の物に於てもその相互の距離は不一定である。多くは先の第八圖に於ても示す如く特に力を强く加へられた部分は深くその溝の幅廣く出來、そうでない方は細く淺く出來てゐる。又器具には極めて厚さの薄い物と、厚い物が存在した如く、又中には一の溝から他の溝に移る時に一部分その幅を擴げ、それがため可成り廣い幅の溝を持つた物も存してゐる。



Fig. 14.

刷毛目紋——これは紋樣として着けられたか、製作技工の必要より自然に殘つたか等は決定する何等の積極的證左が存在しない。たゞやゝ濃く、明確に附けられた物はたしかに見方によれば一種の紋樣的効果を有してゐる如く思はれる。その目にも大小可成りの種類が存在する。

點紋——いづれも連點紋である。中には平行直線の中に混つて存在するものもある。串樣の器具を以て作られたものらしい。

單直線——一本の直線が、口緣、頸等に往々にして存在してゐる紋樣としての効果は少ないが、しかしやはりその目的のため作られた如く考へられる。

平行直線——四五六七筋等の物が存在してその大小にも種々種類が存在してゐる。單に一組でなく一定の間をあけて横に平行する幾組かによつて、更に紋樣としての効果を表はしてゐるものも存在する。又第八圖(1)に示す如く、縦に平行する一定の長さの平

つもりである。

實體繩紋——實物の一種の布を押しつける事によつて成つたと考へられる繩紋をかく呼ぶ事にする。第十三圖に示すものであつて、これは先のC類土器の肩部に施された物である。同類の破片は他に二箇存在してゐる。圖によつても明かな樣に一種の所謂羽狀繩紋であつて、現存の部分にはその三段のみが示される。その繩目は密であり、各走向は正しく平行しかつ、その間隙に不統一

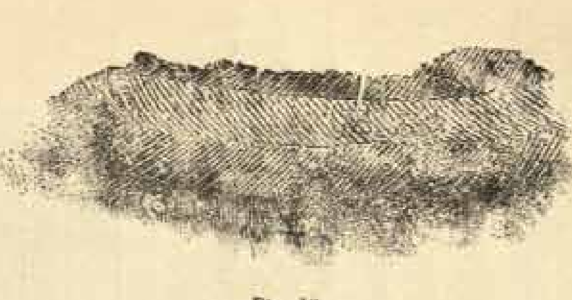


Fig. 13.

がなくいづれも密に並んで居る。自分はこれを一部の人の樣に、撚繩紋であるとなす事には反對でやはり一種の實體によつて作られた繩紋であると信じてゐる、勿論、油土や粘土によつて型をとつて檢する事がより確實な一手段と考へるが、不幸その機會を得なかつたのは殘念であつた。この繩紋について特に注意しなければならない事は、假りにその中央の段の物について觀察して見るのに、その一の繩紋帶の幅が、所によつて不一定な事である。すなはち一部に於ては二五ミリであつた物が、他部に於ては二〇ミリになつてゐる。又、その下段に於て中段との境に於ては比較的その末端が整列して居るのに對し、その下端は極めて不統一であつて、その端の方はほゞ一線ごとに長短を作り、次第に稀になつて、遂には所々その一部が散在するに至つてゐる。しかし、その散在してゐる撚り目の集合も元の方に明かに連絡するものであつて、これがやはり同一の實體の一部である事が知り得られる。この下段はその幅三〇ミリ以上四〇ミリにも及ぶものであつて、先の中段の物よりもはるかに大である。又各段の接合部に於てはその兩者の走向角度はいづれもほゞ同樣であるが、その各線は連絡せず一部に於ては二箇以上の線にその末端が汎り、兩者の連絡は認め難い。又上段に於てはその布の粒が比較的小さいのに對して中段の方はやゝ大である、すなはち五〇ミリの間に於て上段は一四箇、下段は一二箇の差を示し（勿論接近部分に於て）てゐる。此等の諸事實はこの羽狀繩紋の押捺技工を暗示するものであつて、直ちに斷定を下す事は危險性が多いであらうが、之を以て上中下段同一の一枚の布と解する事は可能性少き樣であり、又、之を以て一枚の幅狹き同一方面に走る目の布を交互に折り返して羽狀に成したと云ふ想定もやはり、その兩者の製作が同一物でない事が察せられる限り妥當ではなく、結局、自分は此等は少くとも上中下段異つた布を一枚づゝ押したか、又は、三枚以

孔	隆起帯	隆起圓	A 型	B 型	C 型	B′ 型
	○		○	○		
			○			
			○	○		○
	○	○	○	○	○	○
			○		○	○
						○
						○
○						
	○	○				

右に示した表については今更説明する必要もないのであるが、大體のその特色を列擧すると、(一)全體を通じて、その紋様存在位置が、いづれも土器々體の高所に存在し、又(二)その中に於ても肩部が最も多種多様の紋様を有し、(三)型式の中に於てはA類最も多様の紋様を有して居り、(四)又その存在位置に於てもA類が最も多くの(しかし比較的高位の)場所に存在し、(五)其他例へば刷毛目紋が頸以下底に至る各部分に存するに反し、擬繩紋が主として肩以上に存在する等の事實の如く、その紋様の種類に於て各々存在位置は大體に於て特殊なものが存する事が明かにされる等の諸事實はいづれも紋様とその存在位置と、型態の關係の特色を物語るものとして特に注意すべき諸事實である。但し此等は多少それ自身に於て資料選擇法や、又調査者の態度等によつて變動するものであつて、これは單に私自身の管見に觸れ得た範圍の諸事實にすぎないものではあるが、しかし自分はおそらくより多くの資料が本遺蹟から發見されて居つてもおそらくは先の卑見にはあまり大した訂正は見ないものであらうとひそかに信じてやまないものである。

紋様は右の如き位置に右の如き種類存するものではあるが、此等は單にそれ等自身單獨に存する場合は少く、往々にして二種以上の性質を異にした紋様が重複し、もしくは近接して以て一の統合されたる裝飾的効果を發現してゐる。殊にそれ等は、その附近の器形の變化に順應し、云ひ方を換へればそれ等によつて規定されてゐる。その各々は次の各種の説明に於て述べるが、特に平行直線紋と波紋、平行直線紋と弧線紋等に於て多くかつ著しい配合を見る様である。施紋法についても各種の説明の項に於て述べる

右の分類は決して紋樣自身の變化系統等の性質を示すものではなく、單に現存の資料それ自身の樣式の所屬を示すものであつてなほ本遺蹟には右の如き種類以外に、此等の多くがそうである如く、此等の要素である例へば各單元幾何圖形のコムビネーションのヴアラエテイのいくつかの如き理論資料の存在が豫想されるものではあるが、本文に於ては單に現存の事實資料のみを問題としてゐるものである。

右の如き各種の紋樣の存在する位置を左に表記し、併せて先の完形土器に於てのべた各型式（ＡＢＣ）と、口緣部に於て述べたＢ類を今B'としてその大體に於て認め得られる四つの本遺蹟出土各類土器に存在する紋樣の種類とその存在位置とを明かにしたいと思ふ。

種類＼位置	口緣唇	口緣內部	頸	肩	腹	下腹	底	脚	A型	B型	C型	B'型
實體繩紋				○	○						○	
擬繩紋		○	○	○				○	○			○
刷毛目紋			○	○	○	○	○			○		○
點	○			○					○	○		
單直線	○		○						○			
竪平行直線	○		○	○					○			
横平行直線			○	○					○			
斜交平行直線				○	○				○			
平行直線と直交線			○	○					○			
並列弧				○					○			
重構圓				○					○			
波形	○			○					○			
亂散平行弧				○					○			

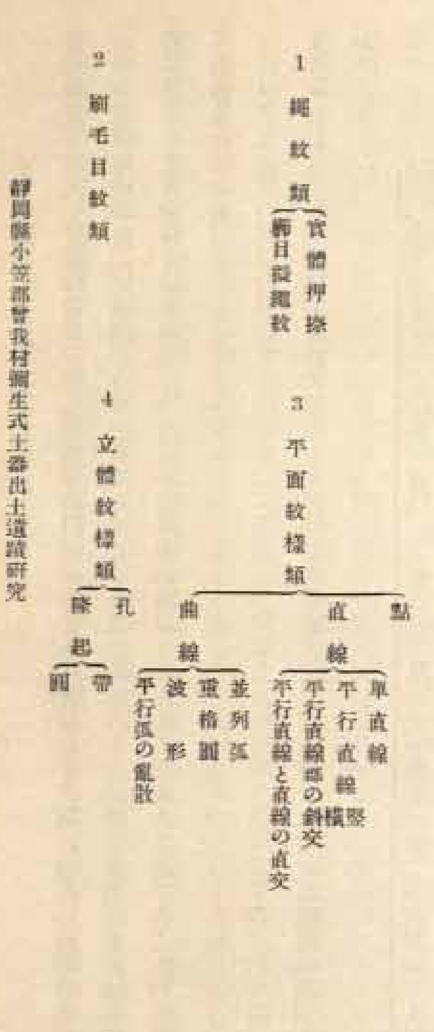
色は赤紅色を呈し、吸水性は稀であつて、堅密な焼成を有し石英粒子は極めて稀にしかしやゝ大な物を有し、その表面は極めて平滑な物（C類）とが存して居つたが、あるひはなほ他にこのB類に類するが、より薄肉であつて、吸水性は大に、石英粒子の含有少く色は灰黒色を呈する第十圖(9)―(13)等の一類を加へて大體に於て四種位の相異を認めなければならない。しかし此等はこのC類を除いて他はそんなに相互著明な相異が存するのではなく、相互幾分の連絡を認め得られるものである。

右の如き成形法焼成を有する土器製作の粘土は、これをどの地點より採集し、又如何なる性質の物であるか、不幸門外漢の自分には全く不明であるが、粘土の分布は、附近一帶に、包含層下方に於ても存在して、その採取は極めて容易な條件の下に在ると云ふ事を附言しなければならない。

III 紋樣

紋樣としての意識的附加物であるか否か、又は紋樣としての効果があるか否か等の問題は別として、器體一部に施された裝飾的意義を持つと考へる加工を假りに含めてこの條に於ては記述を續ける。

本遺蹟出土資料で自分の知見に觸れ得た範圍内のしかも紋樣を有するものゝ紋樣のみを整理分類する時には大體に於て次の表の如き各種が見られる。



存在したが、その完全型態に對して、各部型態の一である所の口緣部は或種の連絡を認め得られた。今この兩者を綜合して見るの に少くとも、坩形土器に於ては、先に自分が述べた完全型態の三種と共に少くとも四種類以上の分類が可能であつて、勿論その相互間には何等かの連絡は認め得られ、又將來なほ多くのヴアラエティが發見されるかも計り難いが、しかし少くとも今日に於ては この四種分類が可能であると云ふ事は否まれない所と思はれる。その各ヴアラエティが何によつて起り、又何を示し、又その相互 に如何なる性質の關係が存するか等の諸問題は、それを決すべくあまりにも資料は不完全であつて、ただ起り得るものは全く主觀 的な推想のみである。かゝる推想はむしろ記述せざる方はるかにまさり、又、それ等の究明は本小篇の目的とする所でもない事を 附言しなければならない。

II 製　作

製作についてはしばしば前文に於ても觸れる所があつて、あまり述べる可き多くを有しない。先づその成形法に於ては、先の坩形土器はいづれも底、下腹、肩、頸緣の四段の積重ねより成り、特にそのA類に於ては下腹部と肩部の接合は著しい特色を示して 角張つて居つた、又本類のある物に於ては肩部と頸部の接合部分が、特に部厚に隆起して、肩部の末端の內側へ頸部の下端を入れ 兩者の各々兩端を重ねて固着した痕跡を示すものも存在した。そのいづれもは明瞭な轆轤の使用痕跡を認め得なかつたが、しかし、 A類の大型品に存在する樣な整然たる整形や施紋はあるひは簡單な轆轤の使用を暗示してゐるかの如くにも想はれる。刷毛目は一 般に廣く存在して居つて刷毛による表面の整頓が廣く行はれた事が知り得られる。櫛目樣の先端を持つた器具は多くの擬繩紋の製 作には必ず使用せられて居つて、施紋器具の一種が想像せられる。又、先に述べた高坏様器の製作には、細形の物は、坏部と脚部 の接合部分が重厚であつて、先づ最初にこの部分から工作を初めて脚部と坏部を造出したものらしく、他の高坏脚部は主體容器に 脚部のみを第二次的に附着せしめたらしい痕跡を示してゐる。

燒成は、肉眼的觀察によつても全部が同一の物ではない事が容易に察せられる。先の完形品の部分に於ても述べた如く、それ等 には大體三種以上の區別を有して居つた。すなはち白黃色を呈して薄く、粗大な石英粒子を含有して、吸水性の極めて大きな物と （A類）やゝ精良な堅緻な燒成を持つて白灰色を呈し、厚肉であつてその表面は比較的平滑な物と（B類）及び、最も薄手であつて、

A類　第十一圖(32)(41)(42)及び第十二圖左端に示す如き物であつて、何れも基部で強く緊張し、それが(32)(41)の如きは急に擴がり、(42)第十二圖の如きは徐々に擴がる物であつて、この點明かに二種の區別が存してゐる。

一種　(32)(41)はその基部から急に外方に向つて擴がりその厚さも概して厚い樣である。側線にも大した變化はなく、極めて僅かの内曲が行はれつゝある樣であり、その厚さは先端に近づく程著しく減ずる傾向を有してゐる(32)の如きは三箇の孔をその側面に有してゐる。

二種　(42)及び第十二圖左端の如きは比較的厚手に出來、その基部を發して暫時は、其まゝに近い太さ、もしくは十二圖の如き一部それを減ずる傾向を有して下方に及び、可成り急に今度は上方に反轉して比較的安定な均衡を見せてゐる。

B類　第十一圖(31)(33)—(40)(43)及び十二圖中央、右が本類に屬するものであつて、いづれも概して薄手に出來、その中にも丈の高い物と低い物とが存在してゐる。第十二圖右の如きは丈の低い物であつて、第十一圖(33)—(40)の如きはいづれも皆之に屬する物ではないかと思はれる。(39)の如きは特にその基部に羽狀擬繩紋が附せられてゐるが、全體に無紋樣の物が多い。第十二圖中央の如き物は特に薄手であつて、丈の高い方に屬し、その下方に於ては急に段を作つてその裾が一段と擴がつてゐる。先のA類二種の物に比しいさゝかスレンダーな感を強く與へる。



Fig. 12.

脚部の右の如き形態は少くとも三種以上のヴァラエティがその中に存する事を暗示するものであるが、先にのべた他の形態のどの物にそのどれがより近似の關係を有してゐるかは全く不明である。たゞその多くはおそらくは坏形土器の脚部、すなはち高坏の一部ではないかと想はれる。不完全な資料ではあるがこれによつて本遺蹟には一種の高坏樣の容器も存在した事が推察し得られる。

以上述べた土器型態は、その中に坩形、鉢形、高坏形の各種の物を含有し各條に於て述べた如くその各々は又その中に於て少くとも數個以上の分類を必要とした。その底部脚部の如き部分型態は完全型態のどれに相當するかと云ふ事が確實に知り得ない物が

の口縁部の附屬すべき器形は未だ完形土器の中に見當らないのでその全形はどんな性質を有してゐるものであるかは明かでないがあるひは別に特別の一の型態を示す獨立の類が存在したのではないかと云ふ事を強く想はせる。

口縁部型態は以上の二類三種であつて、その一類を除く他は先の完形土器形態に對する所屬の明かに示されたものであつた。之によつて口縁部を通じて見た本遺蹟の土器には少くとも三類以上のヴアラエテイが存する事を推知し得られる如く思はれる。その各々の燒成等については次の製作の條を參照され度い。

底部型態　第十一圖(20)―(30)に示すものがそれである。底部の如きは多くは口縁部の如くにその形式を變化せず、從つてそこに個々の特色の表現される場合が極めて稀であり、又それを觀察する事も困難な場合が多い。本遺蹟出土品についてはそれ等を大體に於て「上げ底」と「平底」の二種に區別する事が可能である、前者は先の第八圖の(1)(2)(9)の如き物であり、後者は同圖其他及び第十一圖の如き類である。完形品A類に於ても必ずしもこの上げ底ばかりではなく平底も併用されて居るためそれ等の器形によるこれ等の二種の使用區別は明かでない。平底の物の中に於ても強いて注意すれば底部が全く平な物と、やゝ中央になる程下方に突出する傾向を有して、丸底に近づく物とが存してゐる又それに續く下腹部が横に擴まる物と比較的立つ物とが存してゐるがそれ等はあたかも口縁部に於けるが如き著しい區別ではない。又その燒成も平底は多種多様であつてあらゆるタイプの物を混じてゐるらしく思はれる。

Fig. 11.

脚部型態　第十一圖及び第十二圖に示すものであつて、この中には明かに、細形の物と太い物とが存し、前者は主としてその斷面形にあらはれた内部型態が、八狀を後者は冂形を呈してゐる。

A類　そのいづれもが外部に向つてその程度の如何を問はず反轉するものをA類と定める。このA類もその中に又二種の區別を必要としてゐる。

一種　第十圖(1)—(3)に屬するものであつて、その特色とする所は先の完全形のA類と同類その口緣部は強く外方に向つて反轉をなし、その多くは、その末端に、折り返し、もしくはそれに類する工作を有するものである。(1)及び(3)はこの折り返しが完全に行はれたものであり、(2)は一度强く反轉した口緣部がその先端に於て他とは反對に上方に折り曲げられたものであつて、この點はやや他の物と趣を異にはするもの丶、その心理作用に於ては類似の物と看做す可きものである。本種はあたかも、先の完全形Aがそうであつた如くその上に著しい紋樣を有し、(2)(3)共にその反轉の末端、すなはち折り返しの唇に當る所にそれを有し、(2)は不規則な二線の平行より成る波紋と、その唇下端に施されたやはり不規則な凹凸紋であり、(3)は唇の部分に竪に密に竝んだ平行線紋である。この種の物はその曲線の放大であると共にその形態はいづれも大であつて、この點亦一の特色として擧げる可きである。(2)(3)は坩形の口緣らしく、(1)は鉢形土器の口緣部であるらしい。

二種　第十圖(4)—(6)及び(8)(14)—(17)等が本種に屬する物であつて、その特色とする所はあたかも先の完全形(8)に於けるが如く、僅かの反轉を有する、しかも極めて短い口緣部であり、その多くは先端の折り返へしや、紋樣等を有しないのが普通である。假りに反轉が存するにしても全く退化した(16)の如きものであり、紋樣があつても(5)(6)の如き刷毛目や唇部に於ける簡單な凹凸位にすぎない。この口緣部は極めてかくの如く短いが、それに續く所の頸部も多くは至つて短小であつて、直ちに容量の大きい胴部に續く樣である。本圖に示した資料は皆坩形容器の口緣部であるらしく、それ等自身の中にも例へば(8)の如く急に肩部に續くものとそうでなくて他の例の如く徐々に肩部に移行するものとが存する樣である。その多くは先の完形土器B類の口緣と看做して大過ない樣である。

B類　その特色とする所は第十圖(9)—(13)及び(7)に示すもの丶如く、その程度の如何は別として、いづれも一度口緣基部でしまつたものが次第に內方に向つて曲りつ丶外方に開くものであつて、多くはや丶長い口緣部であり、その下端は徐々に肩部に移行し、その肩部亦あまり急に張らずに一種の撫で肩を呈してゐる。その先端は多くは最も薄くなつて終り、折り重ね等の特殊加工を見ない。紋樣も唇部等にはなく、二三の刷毛目紋を除いては僅かに(11)の如くその肩部との境界に一の幅狹く目の粗い擬繩紋帶を有してゐるに過ぎない程度である。その口緣の大きさも從つてあまり大ではなくて、全體的に見て細くて長大な感を與へてゐる。この類

十四糎、口徑約二十二糎。底部はかすかな上げ底となり、口縁を始め他の各部には何等の特殊變化もしくは紋様等を有しない。色は白黄色を呈して吸水性大に、石英粒子を多く含んでゐる。本土器はたゞ一種類の物より殘存しないため同類中に於けるヴァラエティは不明である。たゞその製作に於てはむしろ先の坩形土器のＡ類の物に最も近似の關係を有してゐる事を注意すべきである。

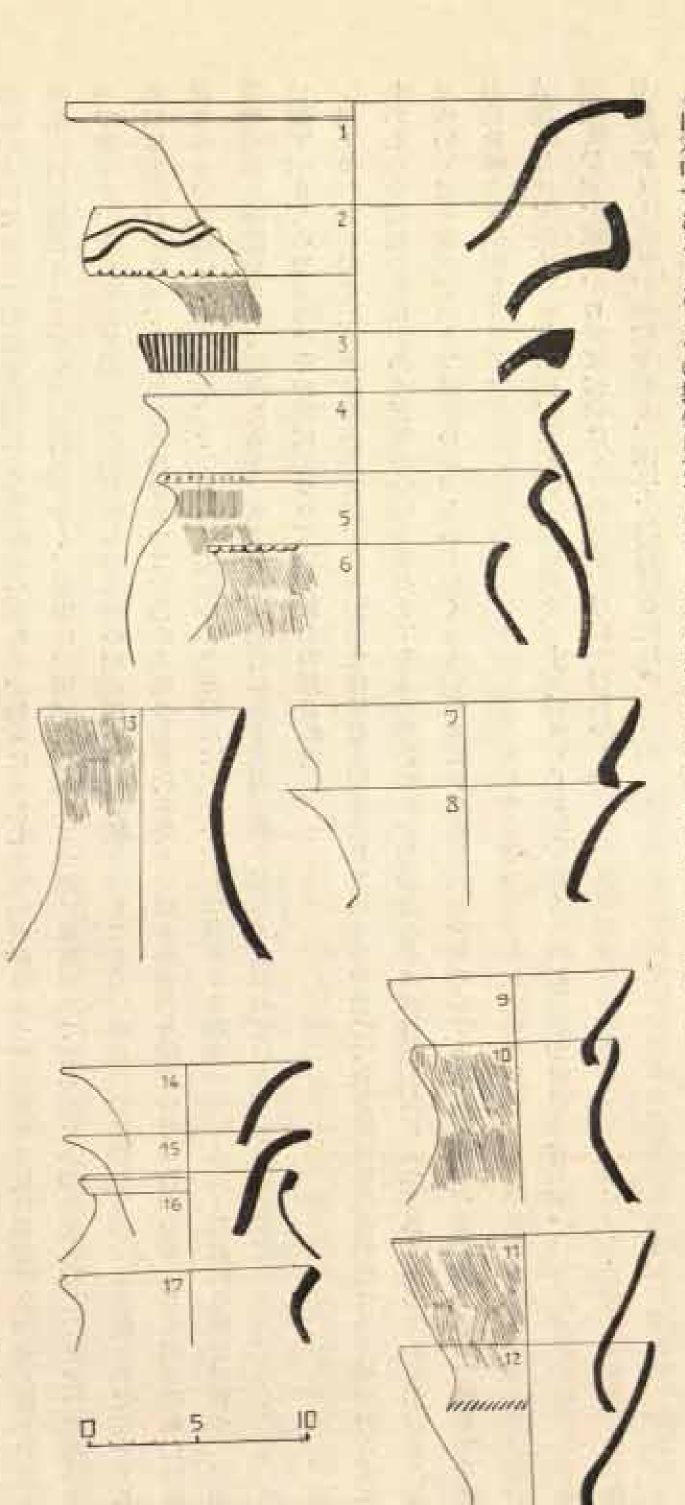


Fig. 10

(二) 部分型態——部分型態を示し得る資料は全破片中の半にも及んでゐる、しかし、特にその腹部とか肩部とかの特色少き部分や、又は先の完全型態の中で述べた一に屬する物は敢へて之を述べるまでもない。本項に於ては特に口縁部、底部、脚部等の如き特色を特に著しく示し得る破片を記述して、以て本遺蹟が有する土器のヴァラエティを知る一の方法とし度いと思ふ。

口縁部型態　第十圖に示す物がそれである。大體に於て之を次の二類三種に分つ事も可能である。

に立脚する事によつてなされた一の型式分類の方法であつた。が今Ｃ類を此等ＡＢより明かに分離して一類と認める理由はそれ等とは極めて趣が異つて居つて、やゝ假定的な物である。たゞ將來に於て次の理由以外のサイエンティフィツクな他の方法によつてもこの一類が本遺蹟の遺物から分立し得るであらう事を現存の不完全な資料を通じて豫想してゐる。本資料は第九圖右上に示すが如き不完全な一箇の資料及び同一類に屬するとせられる十數箇の破片であつて、その特色としては、型態上丸味を帶びた下腹部を示し、Ａ類に於けるが如き角張れる下腹部接合部なく、徐々にしかし力强い曲線を作つて、肩から底に移行する。燒成はあたかも關東の同種遺物に見る如く、石英粒子少く、堅密に、赤紅色を呈して一部には箆を以て磨かれたが如き痕を有し、吸水性は少く薄手であつて、その肩部に近く現在三段のみ殘る幅の相當廣い羽狀繩紋を印してゐる。後文に於てのべるが、本遺蹟に於て存在する繩紋は本類のみに印せられてゐる物であつて、他のＡ類の如き物と異り、織物の實物を捺しつけて作つた物である事が明かに知り得られる、すなはちこの點が、その僅かな型態の特色と共に本類を分立して観察する必要の存する如く想はれる部分であつて、本遺物は單に本遺蹟に於てのみならず、又それが本遺蹟に存する事は廣く彌生式土器研究の上にも貴重な事實を示現するものとして注視すべきものである。その繩紋については後說を參照され度い。

以上のべたが如き壺形土器の各形式は、各々が出土の狀態を明かにして居らず、從つて包含層中の位置狀態は全く不明であるがしかしその型態特色は、かく三類の分類を必要とするものであつた。勿論その各々の特色が何によつてかく異つてゐるか、是れ等については今論及すべきではないが、しかし少くとも完形品に於ては三類の分類の存する事は記憶すべき事實である。改めてその特色を綜りに列記して見る。

Ａ類　細頸、長大。幾何學紋、立體紋、擬繩紋を有し、多くは白黃色、薄くして石英粒子を多く含有す。

Ｂ類　鈍重、短小、口大に紋様なく、白灰色、厚肉、石英少し。

Ｃ類　圓くして大、繩紋を有し、薄手、精良なる燒成。

鉢形容器類　本類は僅かに第八圖９に示す一箇の完形土器と他に多數の破片から成つてゐる。極めて薄手であつて、その口緣部の如き僅かに二ミリに過ぎない。小さい底部から發した側線は次第に外方に大きく開いて、口緣部に近く急に上方に走つて終り、そのあまりにも大きい口緣部と、小さい底部は、その高さに對應して全體は不安定な不統一な感を與へてゐる。底徑三・五糎、高さ

し、成形は輪積み法、特に、底及び下腹の結合部と、肩部、口緣頸部の三段から成る物多く、各々その結合部は明かな特色を示して容易に認識し得られる。

B類　第八圖8に示すものであつて、本品は同樣の性質を有する破片によつてなほ他にも少からず同類の物が存在した事は知り得られるが、完全な物は僅かにこの一箇に過ぎない。その輪廓上の特色とする所は比較的低い全形の上に廣い口を有し、その緣から發する線は頸部に於てかすかにくびれて腹部に移り、腹部又次第に下腹に流れて底をなすものであつて、先のA類に比しその感は鈍重不均整である。その粘土はA類よりもやゝ精良な物で石英粒子も少く、色は灰黒色を呈して表面滑かに、吸水性少く、その厚さも全形に比して厚い方である。製作は先と同樣おそらくは三段の積重ねによつたものゝ如くであるがその特色はさまで明瞭ではない。口緣部は極めて僅か反轉するのみであつて、その末端も折り重ならずむしろ削ぎ取られた樣になつてゐる。これを先のA類に於て示した二つの資料の平均比例數と對比して本類のA類に對する特色を明かにし度い。

	I		II		III		IV		V		VI	
	高さ	腹徑	高さ	口徑	腹徑	口徑	高さ	底徑	腹徑	底徑	口徑	底徑
8	100.000 (10cm)	105.000 (10.5cm)	100.000 (10cm)	105.000 (10.5cm)	100.000 (10.5cm)	100.000 (10.5cm)	100.000 (10cm)	50.000 (5cm)	100.000 (10.5cm)	47.619 (5cm)	100.000 (10.5cm)	47.619 (5cm)
4	100.000	80.424	100.000	64.808	100.000	72.805	100.000	32.877	100.000	37.012	100.000	50.807
比較	+15.576		+30.192		+27.195		+17.123		+10.607		−2.188	

本表は云ふまでもなくあまりにも著しい兩者の相異を示すものであつて、今假りに之を先のA類に於ける二資料間の相異に照合するに I=21.153:15.576, II=10.385:30.192, III=5.609:27.195, IV=4.258:17.123, V=4.024:10.607, VI=1.613:2.188 の如き比較を見得られ全體的に通覽して、AB二類の相異はA類中最も異なれる二箇の資料の相異よりもはるかに大なる事が明かに知り得られるのである。これすなはちAB二類を敢へて分つ所以であり、又分たざる可からざる理由の存する所である。

C類　AB分類は右に述べたが如き完形資料を標準とし、その兩者の間に存する動かす可からざる系數上の相違を指摘し、それ

かつ最も整つた資料であつて、あるひはその意味に於て標本的指數を示すものとも考へ得られる。

	I		II		III		IV		V		VI		VII	
	高さ	腹徑	高さ	口徑	腹徑	口徑	高さ	下腹高さ	高さ	底徑	口徑	底徑	腹徑	底徑
2	100.000 (26cm)	78.847 (20.5cm)	100.000 (26cm)	59.615 (15.5cm)	100.000 (20.5cm)	75.609 (15.5cm)	100.000 (26cm)	25.000 (6.5cm)	100.000 (26cm)	30.747 (8cm)	100.000 (15.5cm)	51.613 (8cm)	100.000 (20.5cm)	39.024 (8cm)
4	100.000 (10cm)	100.000 (10cm)	100.000 (10cm)	70.000 (7cm)	100.000 (10cm)	70.000 (7cm)	100.000 (10cm)	30.000 (3cm)	100.000 (10cm)	35.000 (3.5cm)	100.000 (7cm)	50.000 (3.5cm)	100.000 (10cm)	35.000 (3.5cm)
比較	−21.153		−10.385		+5.000		−5.000?		−4.253		+1.613		+4.024	

右に示した表は敢へて說明するまでもないが、その比例に於て4は2よりも高さに比し腹徑はるかに大に、口徑又大きく、腹徑に對し口徑やゝ小さく、高さに比し下腹の高さやゝ大である。（以下兩者ほとんど同樣。）すなはち兩者はIII IVに於て著しき差異を見ないが、Iに於て特に明かな相異を示してゐるものであつて、此等によつて、明かに兩者はIの關係に於て最も良く識別し得られるものであると云ふ可きである。かく可成りの相異は示すものゝ之等は次に述べるB類其他に對しては明かに識別され得るものであつて、その意味に於ては均しく同一類に屬せしむ可きものである。（勿論此等の系數は材料の增加に伴つて多くの變動を示すものではあるが、今は一の試みとして現存の資料のみに付て試みた結果のみを提示する事にした。）かくの如き輪廓を有する本類は口緣部に於ては2 4及び第九圖左下方の物の如くいづれも輕く外部に向つて反轉し、その末端は僅かながら折れ重なつて部厚となる。特に4の物に於てはこの折れ重なりの外面に竪に平行し相接近する四條づゝの隆起帶を四組有して居つてまことに興味深く、その頸紋樣に於ても、有するものはいづれも皆横樣の物によつて作られた、擬繩紋及び幾何學紋であつて(1 2 4)中には1の如くその頸部中程に竪に平行し、一部分位置を異にして紋樣としての單調を破つた物や、又4の如きその肩の部分に他と同樣の羽狀擬繩紋帶中に小凸圓紋を連續させた物等が存在してゐる。全體に紋樣は多い方で、そのすべては肩及びそれ以上の頸、口緣部（特に4はその反轉內部は擬繩紋を有してゐる）に限られ存在してゐる。粘土は多數の白色石英砂及び他の砂粒（徑一ミリより一センチ位）を混じ、色は多くは白紅もしくは白黃、白灰色を呈し、滲水性は可成り大に、薄手に出來てゐる。底部には平底と上底の二種が存在

て行き度いと思ふ。

I 型 態

(一) 完全型態——その完形を示し、又それが想像を容易ならしめる資料はその數必ずしも多くを數へない。自分の知見の範圍に於て約十四箇を擧げ得るに過ぎない。

坩形容器類　完形土器の大部分を占めて十三箇、之はその形態より更に次の三形式に分つ事が可能である。

A類　第八圖I——7及び第九圖右上を除く全部がそれであつて全數十一箇、坩形土器中又最も多い數を示してゐる。本類の特色とする所はその全體的に見て細くやゝ長い頸部を有し上部は外に向つて可成りの反轉を示す口緣部につゞき、下部は下に至る程その大さを增す腹部に連り、特にその下腹部は最も大きく膨脹した腹部の線が急角度にその走向を内下方に轉じて作つたものであつて、從つてそれの下部に續く底部はその徑極めて腹部の徑に比して小さく、この下腹部のみを見る時には一見不安定の感を感じない事はないが、いづれもその全體としての均衡は良くとれて、むしろその下腹部の高さの低い事は重心の位置を下方により下げて不安定の感を一掃するものである。その完形を完全に示す大小二例をとつてその各部比例數を比較する事によつて、本類中にも相當範圍の形態の差異が



Fig. 9.

存する事を示し度いと思ふ、この場合本資料中よりとる所の第八圖2及び4はその形態に於ての可成りの差異を示すものであつて

靜岡縣小笠郡曾我村彌生式土器出土遺蹟研究

樋口清之

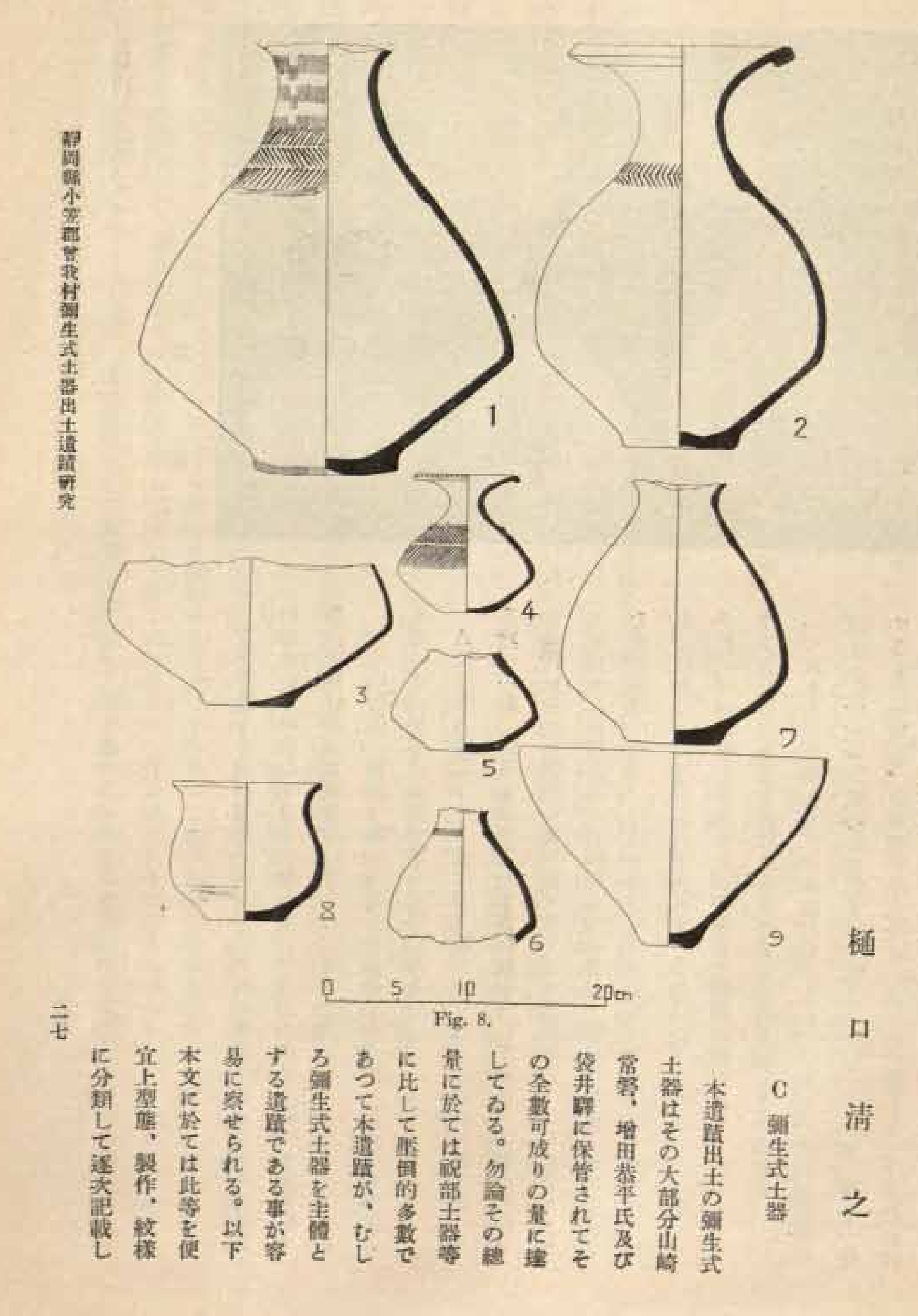


Fig. 8.

C 彌生式土器

本遺蹟出土の彌生式土器はその大部分山崎常磐・増田恭平氏及び袋井驛に保管されてその全數可成りの量に達してゐる。勿論その總量に於ては祝部土器等に比して壓倒的多數であつて本遺蹟が、むしろ彌生式土器を主體とする遺蹟である事が容易に察せられる。以下本文に於ては此等を便宜上型態・製作・紋様に分類して逐次記載し

9は前にも述べたやうに東方考古學協會一昨秋の收獲の一であつて、その地點から以前に銅劍一口・銅斧一口・その他結紐型或は劍柄型と呼ばれる用途不明の銅器が土民に據つて發見されたことがあり、それ等の出土品は前旅順要塞司令官山田勝康氏の所有するところと成つてゐるが、中でも用途不明の銅器の如き、最も珍らしき形態を備へ、製作極めて優秀である。

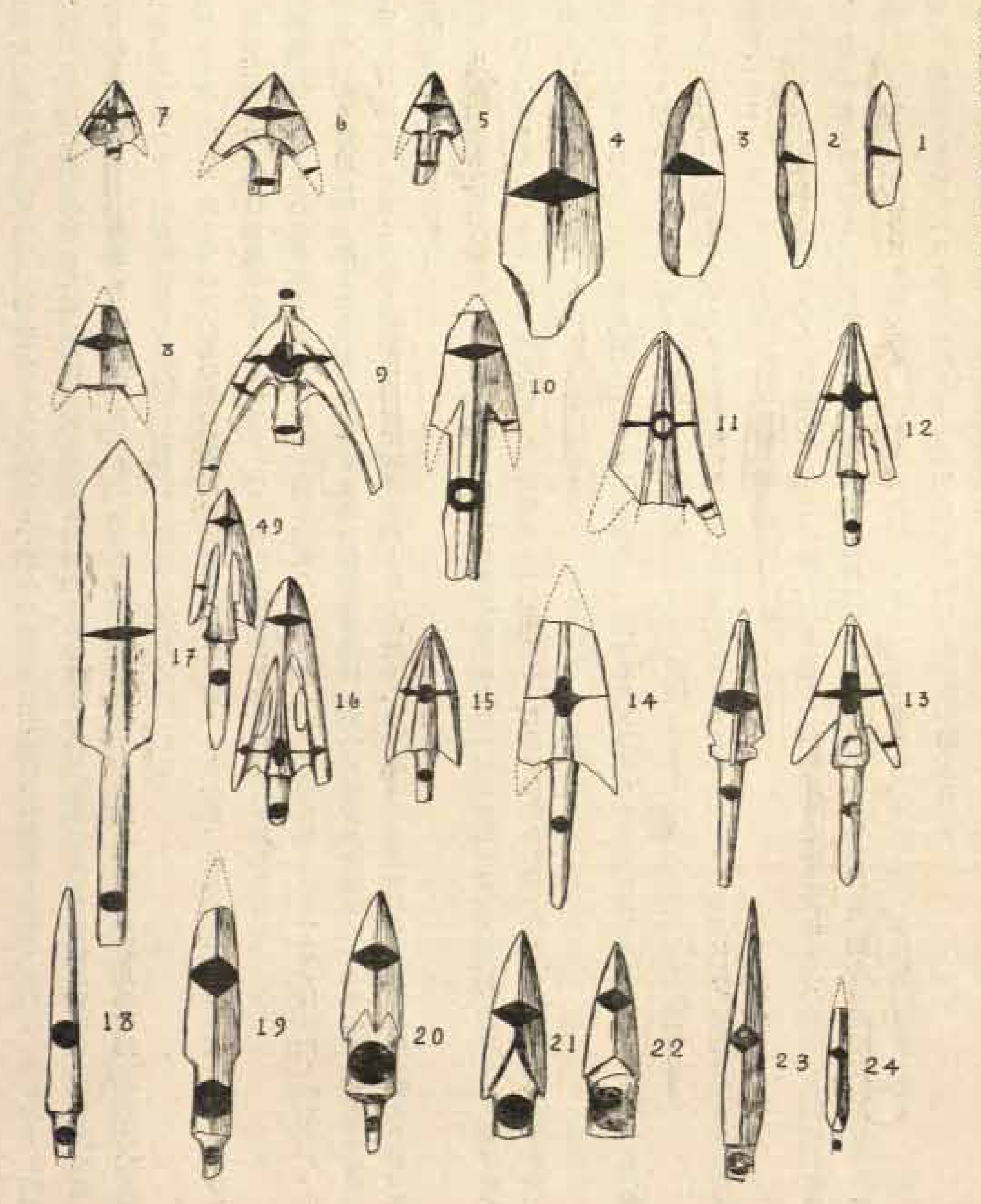
出土銅鏃そのものゝ型式上から相對的年代を考察してみると、1・2・3・4の如き原始形は最も年代の遡るもので、次に舌狀腸抉式に變じ、双翼腸抉式に進んでゐるやうである。日本の銅鏃は、相對的年代が降下して、愈々その型式が複雜になつてゐる傾きがあるが、支那大陸系統の變化經路は始めは實用的と言ふよりも寧ろ修飾的の現象を示し、愈々社會の趨勢に伴つて、多量生産と實用的方面との要求に迫られて、自然簡單な錐形様式に移り、次に文化的技能の加味するに及んで、再び複雜な型式に戻るものと、他方に於ては實利主義的にのみの變遷を來し、愈々時代の降下につれて、前者は影を潜めて後者の獨占するところとなつたものと考へられる。

終りに望んでこの牧羊城趾附近に、青銅文化の植栽移植された年代を推考してみると、漢民族が移住した時は既に此地に於ても青銅文化に浴した民族が居住してゐたのであるが、未だ一般的にはそれ等文化の賜惠に浸らなかつたやうである。然らば全く石器時代の革命をみたのは、銅鏃に三角錐形並に三翼系統の出現を見た前後ではないかと考察されるのである。因みに割合の最も優れた型式は、三角錐形と三翼系統であつて、前者は五八・九%、後者は二七・七%を示してゐる。

今まで述べ來つた事は、銅鏃に就てのみで、鐵鏃には全く觸れてゐないが、それは發見遺物に、鐵鏃が僅かに一例より無いので自然銅鏃のみに傾いたのであるが、然し將來に於ては必ず幾多の鐵鏃が發見されることを信ずる故その際に改めて稿を草したい。

銅鏃型式聚成図 其二

銅鏃型式聚成図 其一



猶この三角錐狀型式のみに限ぎつて、34・35・36に見るが如く、鏃身の一面或は三面に、三角形・卵形・方形の小凹を有する類例がある。その凹の大さ竝に位置等に就ては、別段正規の制約に基いたものではない様である。從つて重要な意味をも含まれてないと思ふが、兎も角も鑄造法も充分發達した時代に、而かも兵器として最も多數を要すべき鏃に、態々型を用ゐて彫り凹めるが如き不生産的方法を、敢て執つたその目的は果して那邊にあるか、甚だ不可解な問題である。

38より44に至る七例と50の二例を加へた八例の整の型式は、前者三角錐狀と同一であるが、鏃身に於ては稍々異り脹みを帶びたる圓錐體に、縱に三條の刄を付けた翼を有するものであつて、各の翼の手法に多少の變化が認められる。

38・41・50の翼は、鏃身に下方の直角なるもの39は鈍角を成し、翼の下三分の一から垂直に揩り落して段を付けたものである。中には同一手法で40の如く彎曲に揩り落したものもある。更にまた鏃身の圓錐體の部分に斷面圓錐體ならざるものがある（挿圖參照）。或は42の如く翼の約二分の一のところから下方に向けて次第に揩り落されたものと、44の如く齒牙狀を呈するものとがあるが、後者は有袋式で翼が他のそれより大きい。

45は46と共に、比較的複雜な型式であつて、45は鏃身上半が三角錐狀の型式を供へ、下半は明に三翼型式を表はしてゐる。先づ三翼式の變化と見るべきものであらう。猶三角錐狀と、三翼型式との接觸するところには僅かの段を付け、三角錐狀を成す各面に縱に稍々深い溝が付けてある。

46は破損物一例に過ぎないので、全形を復原することも出來ないが、按ずるに無莖系統の有袋式であることは明である。質は鏃類中最も優秀なものゝ如く、手法もまた極めて巧妙である。

47・48は何れも無莖系統有袋式に屬し、中空なる圓錐體の鏃身に三翼を附けたものであるが、この型式に限つて翼と翼との中間に不規則な孔を生じてゐる。

以上述べ來つた中で、出土地點を明にするものは極めて少なく、僅かに9・12の二例に過ぎない。12は土民の發掘せし場所が偶然にも古墳であつたのであるけれども、埋藏物の配置其の他に就ての狀態を知ることは出來ない。然し發掘者の談話を綜合して遺物は左記の如き種類であつたことだけは確實である。

同型の銅鏃二例・銅劍二口・銅斧一口・管玉二個・切子玉一個・佩玉一個・其他銅器一個（名稱不詳）

49は篦被の斷面を異にするのみで、他は16と同一である。

13は型式上、舌狀有莖式に屬するけれ共、製作上技術的には何れに較べても、遙に墮落が窺はれ、況んや鋭利味に乏しく、實用的の武器としては、あまりに貧弱な感がある。隨つて他の諸品とは同一に論ずべきでないかも知れないが、本遺跡發見遺物中、型式上からは少數の特種例とする。長さに較べて鏃身薄く、鎬は丸味を帶びた極めて不明瞭なところがある。

18は圓錐狀型式であるが、他に同例を見ない。（古賀恒一郎氏藏）

19より24に至る六例は、所謂四角錐狀の型式で、鏃身の斷面は19・23・24の三例は殆ど方形に近く、20・21・22は稍菱形を呈してゐるが、莖と篦被は共に斷面圓く、この三例に限り篦被の上部稜線との界に、一種の牙狀形の僅かの段が付けられてゐる。

24は極めて小形ではあるが、四角錐狀の多數はこの小形の占むるところである。大體の形狀上にこそ、大小の差はあるが、22・24は同型式で、たゞ23は稜線の一部を擦り有袋式の丸形短莖と成し、18は稜線を擦つて鋼の部分より次第に莖に續いて遂に斷面圓くなつてゐる。

この種の小形に限つて莖の原形がその儘のものを發見しないが、折損の痕跡を見て斷面圓形を成す有莖式であることは疑ふ餘地がない。

25より37に至る十三例は、共に三角錐狀系統である。從來支那各地の遺跡から發見される銅鏃の中でその過半數は實にこの三角錐狀系統の型式であつて、全く銅鏃としての體裁も整ひ、武器として最も多く消費されたものであると言ひ得られる。

以上十三例の銅鏃を、莖の上から分類すれば左の如く三種となる。

A　鏃身より續いて同質を以て莖を形成するもの

B　有袋式のもの

C　鏃身は銅を用ゐ莖に鐵を併用せるもの

Bに於ける有袋式の篦被は、斷面圓くその他は六角形に削り更に篦被を削り去るとき、鎬と篦被との接際を、或は26の如く篦被に直角ならしめ、23の如く鋭角或は19の如く鈍角ならしむるものがある。猶先端に丸味を帶べるものと然らざるとの二種がある。

また中には37の如く鋸齒狀を呈せるものもあるが、これは最も特種型に屬すべく、他にその類例を見ない。

逸すことの出來ない好資料である。

5・6・8・10の四例は、舌狀腦抉式であつて、莖被扁平で薄く、鏃身は鑄造後に加工されたもの丶如く、鎬の方向に鑪目の痕跡が認められる。

5・6は同一型式のものを、大正十五年の初夏、旅順管内大臺山の石塚から石器土器等と共に出土し、9・12の二例は共に銅劍・銅斧・其他の遺物を伴出した相對的年代考證の上に貴重な資料である。(12は內藤寛氏藏)

10は身莖共に稍長味を帶び、有袋式で鏃身の鎬が柄の先端まで延びてゐるので、自然に柄は十角形を成し如何にも鈍重な感がある。

7・9・11・12・13・14・15・16・49は、双翼腦抉式にして極めて種類に富めるものである。7は5・6・8と殆ど形狀同一であるが鎬の兩側を削り凹めて僅かの變化を齎らしてゐる。

9 は前記の如く、出土地の判然せるもの丶一であつて、鏃身中央の隆起と、長き腦抉とは他に比ぶべき例を見ない珍形である。

11は有袋式で、他の鏃とは全く異つた趣を示し、他の鏃は悉く內方に彎曲せる翼を有するに反し、外方に反りがある。中央の隆起は斷面八角の健先端に達し、恰も銅劍を見るの感がある。

12・13 は形體の上からも、又は莖先に似た中央凸起の著しいところも、或は莖の斷面菱形の點も、共に殆ど類似してゐるが、12の翼の先端卽ち腦抉が、切斷され且刄付けが施されてゐるに反し、13は扁平翼で刄付けを見ない。腦抉は先端尖り鬪の上方裏表二面に小凹のある點を異にしてゐる。

14は銅鏃として比較的大型に屬するもので、一見欣墟發見の鋼鏃に似たところがある。莖被から鏃身の先端に續いて凸起があり、莖は斷面菱形に近い。

15は前者に較べて小形ではあるが、全體の調子は同一の感がある。ただ異る點としては、鏃身の中央卽ち凸起を挾んで兩側が平でなく、いくらか凹みを持ちなほ兩翼に刄付けがしてある。莖被から續く凸起も莖も共に斷面圓形である。

16に至つては、一層複雜の度を加へ、鏃身の約上半は鎬あれども莖先を挾んで兩側著しく凹み、その結果最も薄くなつた部分は自然不規則が出來てゐる。莖は斷面圓い。嘗て山東省濟南方面から招來したと稱する全く同一型式のものを瞥見したことがある。

壺を以て的にしたといふ文獻を知らない。

この實例に徴しても、遼金時代にまで下るべき鏃が、質の如何に關らず、この地方に散布してゐると言ふことが實證し得らるゝと共に、或は聚成圖中にもそれ等のものが加へられてゐるかも知れないが、いま明白にこれ等を指摘することは不可能である。

型　式　表題の地域から發見せられた銅鏃を種類の上から類別すると、先づ四十餘種を數ふべく、型式上から大別すれば、大體に於て舌狀・双翼狀・三翼狀・三角錐狀・四角錐狀・圓錐狀の諸型式に分類することが出來る。

更に亦搭へ方からすれば、身、莖共に銅を用ゐたものと、身は銅にて作り莖を鐵にせるもの、或は全く無莖式のもの、込み柄のもの、四樣となる。便宜上込み柄を呼ぶに有袋式として置く。以下聚成圖に就て說明しやう。





1・2・3は無莖式に屬し、不等扁三角錐形で或る一方に特に刄を付け、一見刀子の樣式に似てゐる。製作極めて素朴であつて、大きさも亦圖に示すが如く一定しない。

4は舌狀型式のもので、原始的色彩の濃厚なもの卽ち石鏃の域を充分に脫し得ないものである。ただ鋒が丸味を帶びた線狀を呈してゐるだけに、僅かの變化を示せるに過ぎない。現品は旅順林源一郎氏藏品で、この地方に於ける石鏃との關係を知る上にも見

關東州方家屯會南山裡牧羊城趾竝其の附近出土銅鏃に就て

森　修

關東州内に於ける遺跡で一般周知の箇所としては、先づ旅順の南西に峙つ老鐵山の西麓に在る牧羊城趾に指を屈しなくてはなるまい。此の城趾が、世に傳へられて居るが如く果して漢時代の築城であるか否かは、文獻に徴す可きものが無いが、漢竝に王莽系統遺物の出土品を見ることに據つて、概ね其の年代を推定することが出來ると思ふ。

昨年の秋、東方考古學協會で發掘調査されたものもこの城趾で、古くは京都帝國大學の濱田博士に依り、附近の畑地に在つた甎墓と共に調査報告されたことがある。（東洋學報第一卷及第二卷）

さてこの牧羊城趾を中心として周圍の畑地から、土民の耕す毎に幾多の貴重な遺物が發見されるが、就中最も多數を占めてゐるのは銅鏃であつて、今日までの出土數量は實に夥しいものであらうと思はれる。然るにそれ等の多くは好事家の手元に逸散して、充分に其の資料を纏めることの出來ないのは甚だ遺憾とするところであるが、時間を厭はず勉めて調査した結果、漸く八百餘個の資料を蒐集し得たので、それ等に基いて種類と型式との分類を試るのである。

これ等の銅鏃は、大部分が漢系統のものであるけれども、それよりずつと年代の遡るものと、下るものとが含まれてゐる。

稍々他岐に互るが、嘗て旅順林源一郎氏蒐集品の中に、遼金時代と推考すべき緑釉手の、俗に高麗壺と呼ばれてゐる陶器で、肩から腹部の稍々上方にかけて錐筆に「**惟射瓶老**」の四文字を彫りつけてある壺がある。（寫眞參照）城趾の西側劉家屯附近から土民が掘り出したと言ふことである。壺の文字は既製品に彫られたものでなく、豫め釉薬をかけ、燒成前に篦様のもので彫りつけたものである。壺の口邊竝に肩のあたりには、鏃を以て射拔かれた多くの痕跡が明に認められ、口邊の如きは殆ど其の原形を止めてないまでに毀れてゐる。それ等痕跡に依つても彫りつけられた文意に依つても、明に的として用ゐられたことの證據となるが、未だ

は海岸の海女又は深山の炭燒き女に見る處のものであるが、朝鮮では逆に、濟州島、牧の島等の海女は頭上に載せることをしないで腰の上に抱へ又は背負ふて運ぶ(一〇)。故に朝鮮の女子の頭上運搬の風習は山上又は丘陵生活の遺風であるらしい。それに就いて考へ合すべきことは朝鮮で最も簡便な運搬具たるチゲである。朝鮮では天秤棒で擔ぐのは見られない。チゲは第十七圖に見る如く又になつた自然木を利用して造つたものであつて、關東で所謂背負ひ梯子に類するものであつて、ルユツクサツクと同一原理である。チゲは私等がルユツクザツクに於て經驗する如く山登りに便宜なものであるから山上生活から生れたものではあるまいか。即ち男はチゲを負ひ、女は子供を負ふが故に頭上に載せて物を運搬するの風習は山地又は丘陵生活の所産ではなかつたであらうか。

而てA型土器は主として山地の丘陵遺跡から發見されることは何等かの暗示をもつやうである。けれども、それ故に直ちにA型の總は山手の狩獵生活の樣式であると輕々に斷定することは許されない。この風習は山地生活を捨てた後に於ても、丁度現時の如くに、遺風として久く保存されることがあるからである。

この稿を終るに當つて小泉顯夫氏の厚意と森靖國君の助力を深く感謝する。（五・八・十五）

（一）　朝鮮總督府、大正五年度古蹟調査報告（鳥居委員提出ノ部八〇八頁）
（二）　東亞考古學會、貔子窩
（三）　京都帝國大學考古學研究報告
（四）　鳥居龍藏著　有史以前の日本（改版）三六五頁
（五）（七）朝鮮史講座、藤田亮策述、朝鮮の古蹟及遺物七四頁八一頁
（六）（九）朝鮮總督府、大正九年度古蹟調査報告
（八）　大山柏著　土器製作基礎研究
（一〇）　朝鮮總督府、生活狀態調査（其二）（善生永助）一四二頁

の面積も出來るだけ大きくしてゐる故に、右の條件に甚だ近接してゐることを知る。故に本遺蹟の把手はその能率を出來るだけ發揮



Fig. 17.　チゲを負ふ男

Fig. 16.　水汲む老婆

してゐるものと見ることが出來る。この點に於て本遺蹟文化はかなりの發達をなしてゐるものと考へなければならない。故に把手加着法に就いて別の方法が現はれざる限り本遺蹟の右に出づることは出來ない。併し若し別の新しい加着法が知られるならば此の土器製作者は右の條件から解放されるであらう(八)。例へば胴壁に穴を穿ちて土壁內部に把手を挿入するが如き方法が現はれたならば牛角は結合せずして一本となし、付ケ根の面積もさほど大きくする必要もなく、又自由なる角度を與へることが出來るであらう。然し此の場合には把手そのもの丶鞏固を計るために把手の內側に深い凹溝或は孔を刻し「窯中に燒くの際破壞を防ぐの用意に出づる」と共に亦把手內部に火力を作用せしめて土質の燒成を良好ならしめる必要がある。

京畿道風納里及岩寺里、慶尙南道金海、東萊等の所謂金石併用時代の牛角把手の多くが此種の凹溝又は孔を有するのは(九)か丶る理由に基くものと解される。

次に大形の甕鉢に於ける此等の角形把手は既に先輩が指摘されてゐる如く、現時朝鮮民間に於て見る樣に女子が頭上に載せて運搬する時の便宜の爲であつたであらう(第十六圖)而てこの女子が物を頭上に載せて運ぶ風習は內地で

重力線$\overrightarrow{AB}$に對する垂線ACとABとのなす角をθとすれば、

$\overrightarrow{AB}$に働く力は$g\sin\theta$。

$\overrightarrow{AB}$に働く力から付ケ根の面BCに垂直に働く

分力は$g\sin\theta\cos\theta$。

Bに於て把手と胴とが單に密接するとする時、

fに抗する最大摩擦は

$$\mu g\sin\theta\cos\theta = \frac{1}{2}\mu g\sin2\theta$$

但しμはBの摩擦係數とする。

故にBに於ける固着力は

$$f-\frac{1}{2}\mu g\sin2\theta = \left(1-\frac{1}{2}\mu\sin2\theta\right)f$$

以上なれば良い。

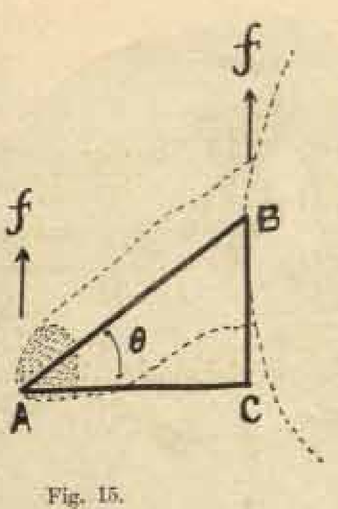


Fig. 15.

この力が最小なる樣なθは次式より得

$$\frac{d}{d\theta}\left\{\left(1-\frac{1}{2}\mu\sin2\theta\right)f\right\} = -f\cos2\theta = 0$$

$$2\theta = \frac{\pi}{2} \quad \text{即} \quad \theta = \frac{\pi}{4} = 45°$$

$$\frac{d}{d\theta}\left\{-f\cos2\theta\right\} = +2f\sin2\theta = +2f > 0$$

$$\theta = \frac{\pi}{4}$$

故に、θ=45°なる時、Bに於て重量による影響最小である。尤もBの面積によりて固着力に影響あること勿論である。

さて事實に於て把手と胴壁となす角度は既に述べたる如く5°を中心となしてゐる。θはこの角の餘角である。而てその付ケ根

てゐることになる。有紋土器は把手を有しないのを常とし、有する場合でも弧狀、半圓形のものが多く、牛角形、組合せ牛角形等ではない。故にこの種の把手はA型決定の根本要件である。そこで本遺蹟の組合せ牛角把手の付け方について少しく詳細に考察してみたい。

Fig. 14. 土　錘（ヌ）1/1

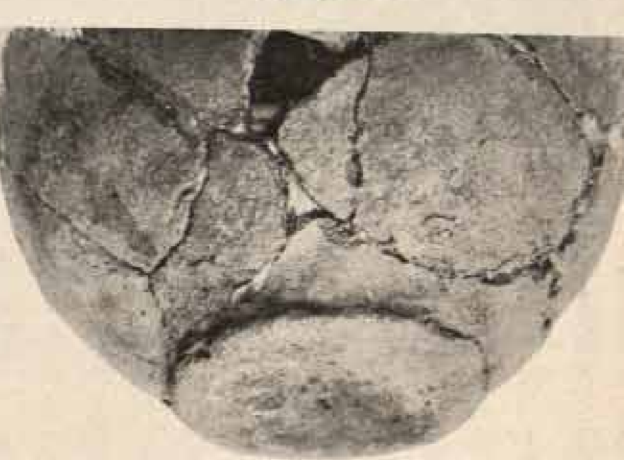


Fig. 13.　土器底部（オ）（加着の部分を示す）

今、兩側に組合せ牛角把手を有する土器の重量を4fとすれば把手の一方に加はる力は2fであつて、其牛角把手の一本の付ケ根に加はる重量はfとなる。

さて第十五圖に於てその把手ABは曲線體なれども計算を簡單ならしめるために直線と見做し、且つその長さを一定と見る。なほ把手の位置Bは不定なれども、著しく下斜曲面の方に移動すれば把手としてよりも鉤手としての作用となり、又反對に、甚だしく上斜曲面上に移動すれば實際使用上不便であるから、最も一般的の場合として胴の曲面に於ける切線が重力の方向と等しき場合を考へることにする。

段丘上の遺蹟（廣州郡九川面岩寺里）がある。

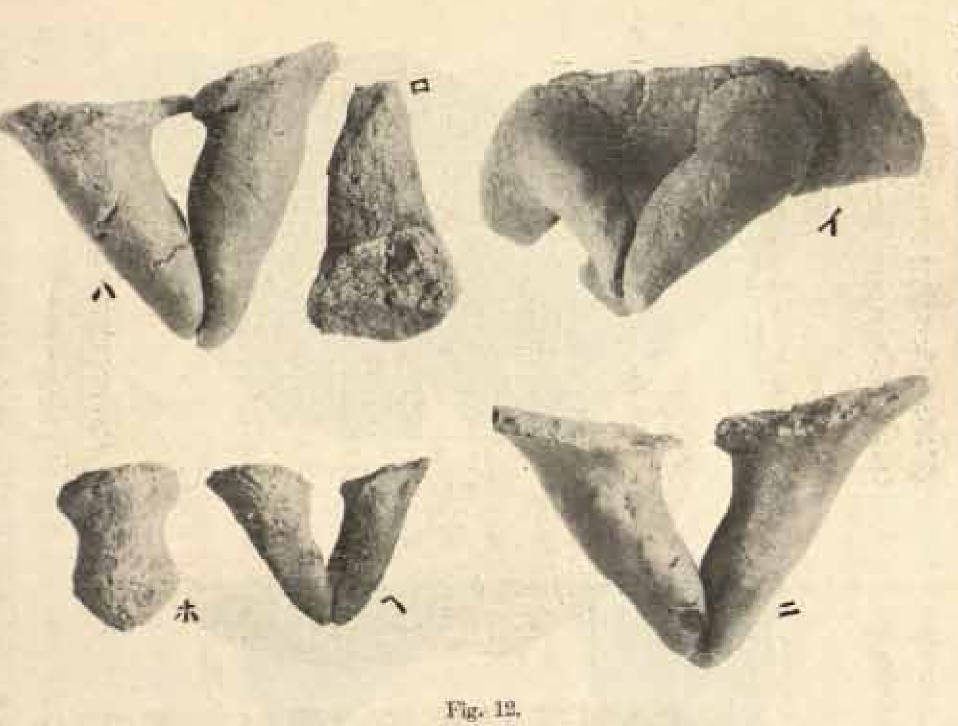


Fig. 12.

次に然らばこのA型文化とB型文化との對立は何に基因するかを見るに、鳥居博士は生活様式の相違であると說明してゐられる。卽ち、A型は山手の狩獵生活に、B型は海岸漁業生活に基くものであるとなしてゐられる。然るに濱田博士は南鮮と北鮮との人種的相違によるものと說明されてゐられる。（六）併し藤田學士は黃海道以北にはA型、B型が混在してゐる理由を擧げて、最初朝鮮半島には極めて原始的にして單純な厚手の彌生式土器が基調をなして發達し、而も南滿洲から、西部日本一帶と同一の土器系統に屬してゐたのであるが時代と共に稍發達の痕を見た有紋土器文化を有する同一民族が海岸線に沿ふて新しい所產と文化とを齎して來着したのではあるまいかと云ふ意見を述べてゐられる。（七）

諸先輩のこれらの意見に對して論評を茲に試みやうとする意志を私は有するものではなく、又それに就いて別に新しい材料を獲たわけでもない。ただ茲に私は把手の觀察と土俗的方面からの洞察を加へて見たいのである。

鳥居博士はA型土器は薄手、B型は厚手と言つてゐられるけれども、厚薄は比較的の言葉であつて、而も器體の大小、成形技術の巧拙に依存するものであることは注意しなければならない。然る時には、兩型は紋様と把手との有無によつて區分され

朝鮮の石器時代遺蹟遺物に就いて鳥居博士は二類型に區分せられてゐる。すなはち薄手の有把手無紋様土器を出土するA型と、厚手の無把手有紋様土器を産するB型とである。(四) 而てA型の土器は主として小砂利を混じ、B型の土器は雲母片を含んでゐるけれどもこの點は意識的に行はれてゐたものではないらしい。從て絶對的の區別ではない。何者、平安南道大同江畔の山地帯遺跡(寺洞、美林、高坊山)はA型ではあるが雲母片混合の泥土で作られてゐることを博士自らが大正五年度古蹟調査報告(八〇八頁)に記述せられ、又藤田學士によれば、黄海道夢金浦貝塚、京畿道江華島東幕遺跡の有紋土器は雲母片を含まずして長石粒を多量に含有してゐるとのことである。(五) 故に小砂利を混ずるか、雲母片を含むかは粘土を採集した場所の地質によつて決定されるものらしい。A型遺跡人の土取場は小砂利の多い地質であり、B型遺跡人のは例へば河底の如く雲母の多い地が普通であつたとすればそれは生活環境に基くものであつたであらう。近所に雲母を含有する粘土の在ることを知つてゐながら、態々遠く小砂利の粘土地を探し求めたであらうやうな特別の理由も見出せない。

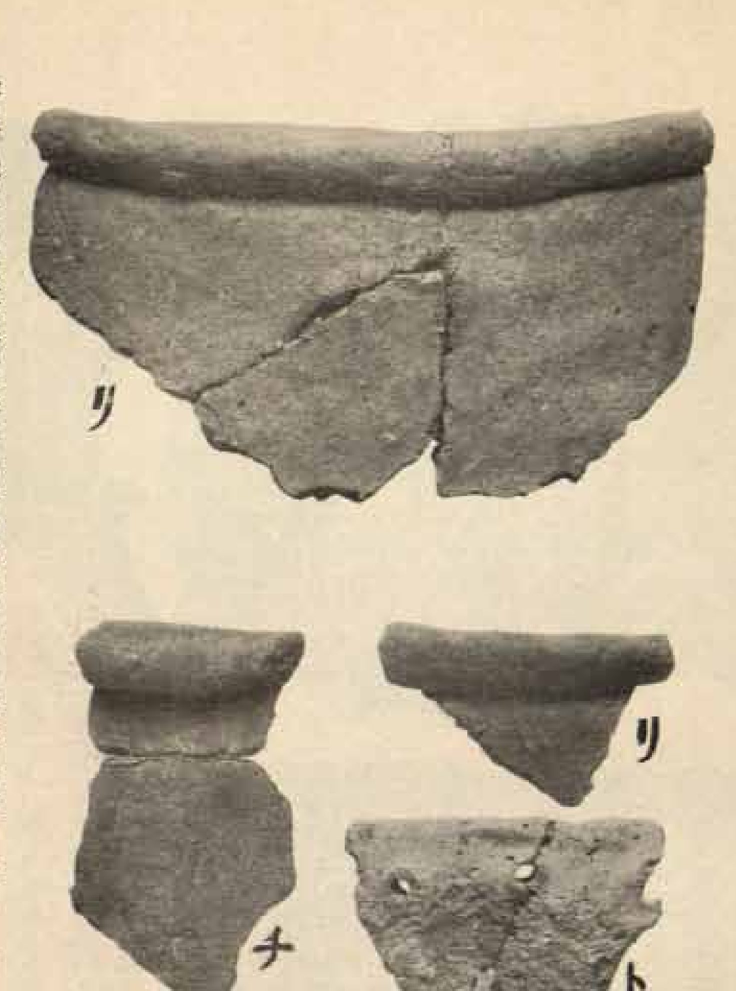


Fig. 11.

さて、この鷹峰遺蹟は鳥居博士のA型に該當することは明かである。この邊近にB型遺蹟を求むれば、東方八粁を隔てた漢江河

個數	角度
1	40°
1	42°
1	45°
1	46°
2	50°
1	51°
1	53°
2	55°
平均	48°

なほ瘤狀把手も一個發見されてゐる。(第七、十二圖ホ)。



Fig. 9.

ル

Fig. 10.

更に底部に就いてみるに、平底のものと上げ底のものと、上げ底にして臺を有するものとがある。平底のものでも丸底に薄い粘土板又は帶を加着して平底となせるものが甚だ多い。而もその加着は丸底器體が稍干燥した後に柔き粘土を以てせるために器體の重量による土壓によつて外方にはみ出してゐる。なほその部分を指頭にて押壓して密着を計りしため指紋を殘せるものがまた少くない。(第十三圖) 底部總數五十五個中、成形過程の判明せるもの三十二個であるが、その中、二十五個はこの方法によつてゐる。この點は既に鳥居博士が黃海道の山手土器(A型)に於て注意されてゐる。(一)これの類例を他に求むれば南滿洲貔子窩(二)九州薩摩國出水貝塚(三)に見ることが出來る。これは一般に土器成形過程の共通性に基く普遍的現象であるか、又は文化傳播に據る交通現象であるかを決定することは興味ある問題ではあるが、今のところ私には疑問として殘されてゐる。

さて高杯はこの樣式の一類型に納めることが出來るであらう(第八圖ヲ、カ)。

最後に紋樣は殆ど無く、僅かに一個、口邊部に內部より緣に沿ふて一列に二糎半の距離に孔を穿ちて、裝飾となし、なほ口唇に竝列に刻みを入れたものがある(第七圖、第十一圖ト)。

四　土製品　土器以外の土製品としては筒狀の土錘一個を得たのみである(第七圖、十四圖ヌ)。

遺物の記述はこれで終つた。次にこの遺蹟の文化相(Kulturphase)に就いてみる。

三　考　說

形態は復原し得たるものについてみれば、甕型（圖版第十六）深鉢型（第九圖）湯吞型（第十圖）高杯がある。成形は小形のものは手づくねであり、大形のものは幅三乃至四糎、厚さ三粍の粘土帶を卷上げたものが主である。

先づ口邊部から記述すれば、深鉢型は口脣を外部に折返し或は粘土紐を口脣の外側に加着して口邊部を厚くなし、破損を防ぐの用意に出でたものが頗る多い。（第七、八、十、十二圖チ、リ、ル）又口脣部を外方に張り出し外曲脣となし同一目的を達せんとせるものもある。（第七圖トの下）大形の甕は口邊部が長くて首を形成してゐる。（圖版第十六）

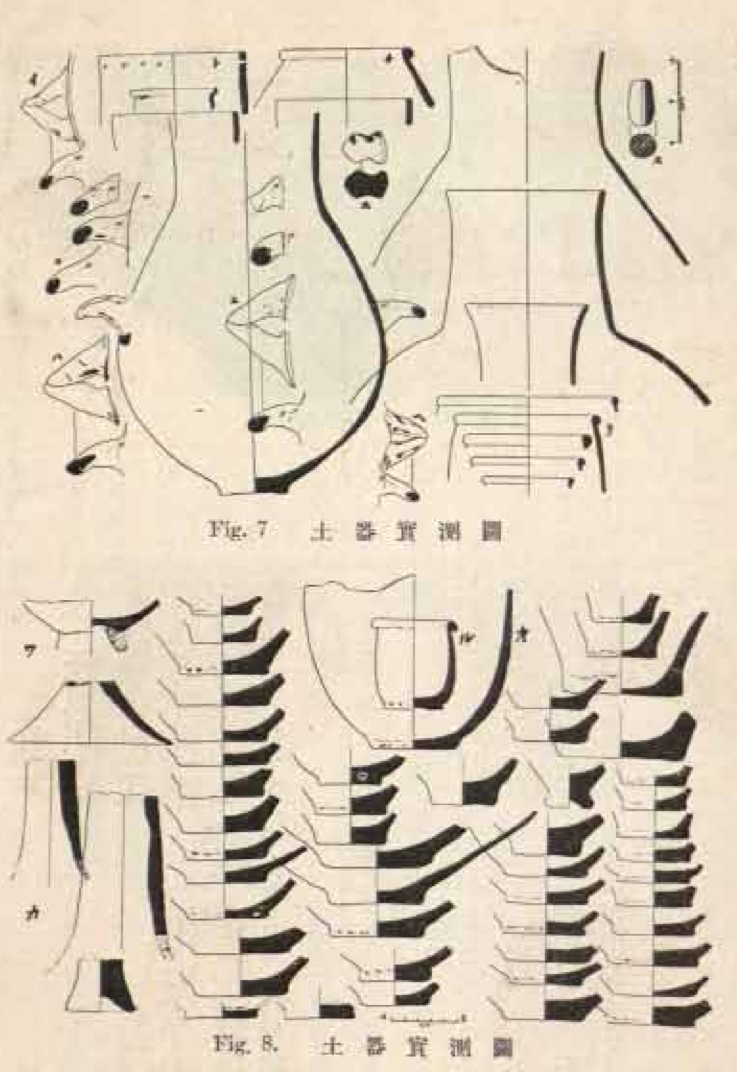


Fig. 7　土器實測圖

Fig. 8.　土器實測圖

次に胴部に於ては、大形甕はそのやゝ下部に緊迫部を有し、腰を形成し、その部分に把手を有す。把手は牛角狀をなし、その先端は合して一組となり、胴の左右に下向きに曲つて着いてゐる。今假りに之を組合せ牛角把手と呼ぶことにする。而て把手と胴壁とのなす角度は次表の如く四十五度を中心となしてゐる。これは後に說明するであらう如き意味を有するものとして注意すべきことである。（第七、十二圖イ、ロ、ハ、ニ、ヘ）

部端片一個。D地點では全く發見せなかつた。

土質は砂を含むもの多く、雲母を含むものは極めて少い。色は赤褐色、黄褐色、茶色、灰色であつて、それが斑交するものが多い。表面は磨研されてゐるが朱塗のものは發見しなかつた。土壁はその厚さ三乃至五粍にして最大一糎を出でない。所謂薄手である。



Fig. 5　石器實測圖

Fig. 6.　皮剝石庖丁及石斧

(f.g)石庖丁。fは粘板岩、g及び有孔のものは綠泥片岩(chlorite schist)にして楕形を呈し、その齒に相當する部分に刄あり。有孔のものは比較的厚身である。

(d.h)石斧は完全なものが一個で他は皆刄部を缺損してゐる。hは花崗岩、dは灰色片麻岩の斑糲岩又は脈岩(gabbo and dyke rock in grey gneiss)にして、何れも磨製。その中三個が所謂抉入擊形石斧にして、一個(h)は兩刄の蛤刄石斧である。他の一個は片刄小形である。



Fig. 3. A地點より纛島の沃野を望む ↓印の所は風納里遺跡地を示す



Fig. 4. A 地 點 遺 物 出 土 狀 態

(f)……石庖丁 (ル)……湯香形土器

(e)石鍋は角閃石輝石の變質して綠泥石となれるものにして、滑石と同じ感じを與へる。口端片であつて、口邊部の形態を察することが出來ないのは遺憾である。

砥石は長方形の硅質砂岩(silicious sandstone)にして携帶用のものかと思はれる。

三 土器 第七圖乃至第十三圖に示す土器は主としてA地點採集にして、第七圖及第十一圖「ト」はB地點採集。C地點では底

悉く山頂及び斜面に散在してゐる。唯僅かにA地點に於て芝草に蔽はれてゐたために、半疊ほど原狀を保存する部分が發見された。その所は第四圖に示す如く、表土が僅かに一尺ほどにて直に地山となつてゐる。その一尺の間に遺物が包含されてゐるのである。

地山は風化した粗粒の風化した花崗岩にて、俗に所謂眞砂地と云ふものであつて、その眞砂地は平面に切取つて均らされ、周圍に配水のためか九糎幅ほどの溝が設けられてあつたものの如くであるが風化のため明瞭ではない。その一隅に粘土が赭色に燒けて炭もある。粘土には藁の如きスサが切り込まれてゐるから恐らくは竈であつたのであらうと想像されるけれども遺憾ながら全く形態をうかがふことが出來なかつた。そこに包含された遺物は石庖丁、抉入石斧、それから土器端片多數であつて、復原して全形を偲ぶことが出來るもの三個を得た。(圖版第十六、第九、一〇圖)

Fig. 2.　東南線斷面想像圖

二　遺　物

一　動植物　動物の遺骸は全く發見することが出來なかつた。植物に就いては炭となつて殘つてゐる檞屬(quercus)一種が認識される。又燒けた粘土の中にスサとしてその殘像を留めた禾本科植物がある。なほ土器把手の付ケ根の部分に僅かに押捺された布目紋によつて、織物に使用された何等かの植物纖維の存在を認めることが出來る。

二　石器　第五圖、第六圖に示す如く、敲石二(a)皮剝一(b)石鏃四(c)石庖丁四(f・g)石斧五(d・h)石錘一(e)及砥石一を採集した。gはC地點、hはD地點にて、他はA地點にて得た。

(a)敲石は花崗岩中の結核(concretion in granite)の自然石を利用してゐる。

(b)皮剝は細粒花崗岩にして、鎌狀を呈し、弧の内面に刄部あり。その尖端の部分を稍欠損してゐる。これと同種の有孔のものを黃海道信川にて最近發見されたと聞く。

(c)石鏃は粘板岩質にて磨製無柄である。

京城府外鷹峰遺蹟報告

横山將三郎

一 遺跡



Fig. 1. 京畿道高陽郡漢芝面地形圖

京城の東、郊外に往十里と云ふ村落がある。その南に百米突内外の小山が東南に連つて起伏してゐる。その中の高い峰を鷹峰と呼ばれる。この鷹峰を中心として第一圖及び第二圖に示す如く、峰に沿ひ東南の方向に線を引き、その線上にある山脊をそれぞれA・B・C・Dと名付くれば、このA・B・C・D地點は何れも史前時代の遺跡地である。

就中A地點は形勝の地であつて、南には洋々たる漢江を望み、北には清溪川が流れ、麓を大きく廻つて、漢川と合して漢江に注いでゐる。東は纛島の沃野を隔てて風納里及び岩寺里の遺跡と相對峙してゐる。(第三圖)

山は花崗岩であつて、表面は風化して荒い砂地となり、草木が極めて少く禿山となつた部分が多い。故に遺跡地は洗ひ出されて散布狀態となり、遺物は



Fig. 5.　垂水神社附近出土馬

五

扨て上記の遺跡地は淀川流域の北邊をなす丹波高原の折裂線をなし西は六甲、摩耶山に連互する山丘の邊緣に位置するものであり西には加茂、池田、西宮附近に散在する同種遺跡と脈絡し、北方やゝ隔てゝ、高槻遺跡に系統を求められる。他方大阪平野を距てゝ河内國府、喜志、日下等の生駒山系の脈絡に位置する著名は遺跡地を迎へるものであつて、彼此關聯して本遺跡の當代に於ける地位自から明かなものがある。而して本遺跡は大阪灣に最も近く臨み而かも最も高地に位置することは大阪平原の成生に興味ある環境の一つをなすものと云へる。

六

尙ほ垂水神社東方約二町の一池畔に於いて陶馬が出土されてゐる。（第五圖）此種のものゝ發見が果して古墳であるか或は祭祠的遺跡であるかは今日尙ほ充分なる證明を與へることが出來ない。此の池畔出土のものも共の不明なる出土狀態であるが此種陶馬の類例の一つとして附加する次第である。

【昭和・五・七・九日】

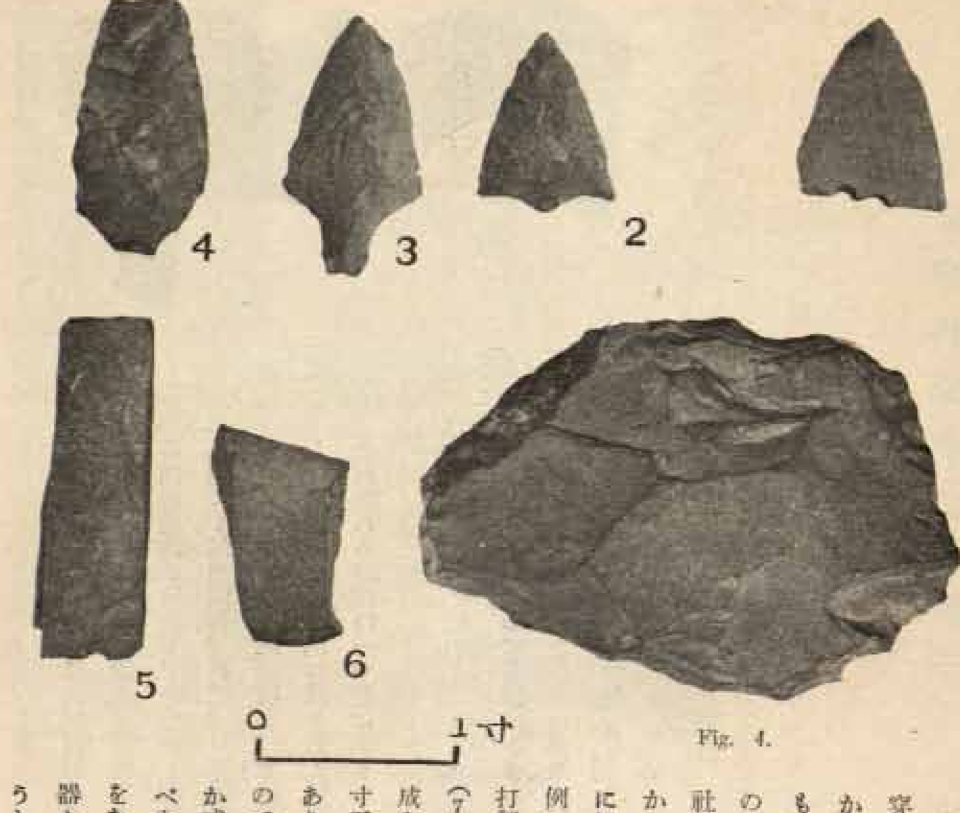


Fig. 4.

斧類は一個すらも見出されてゐない。

磨製石鏃（第四圖1）の一個は現存部約一寸、二個の穿孔を有するものであり、稍々綠色がゝれる綠泥片岩からなつてゐる。其の形式は所謂三角式無莖の有孔のものである。近畿に於ける此種遺物の出土してゐるものの僅に大和唐古（2）同新澤一（1）河內國府（1）攝津大社村六軒（2）同加茂（1）等の外、攝津高槻の京大農場からも出土を報ぜられてゐるに過ぎない。然るに今玆に提示するものは其の手法としても二個の穿孔ある著例に屬してゐることは注意に値する。二子石よりなる打製石鏃（同圖2―4）の外、石庖丁の殘缺あり（同圖6）（7）は恐らく石鑿製作の最初の課程に於ける切斷の未成を示すものであらう。尙ほ圖示してゐないが現存二寸五分の鑿形石器が出土してゐる。（5）は大形石器であり、此種のものは河內國府其他に往々發見さるゝものであつて、果して一個の完形する石器と認め得べきか或は原石として打缺きたる殘石に過ぎないものとすべきかである。此種大形粗石器の研究は興味ある問題をなすものであり、かの大和地方出土と稱する大形石器と關聯して特殊なる石器として見るべきものであらうと考へる。

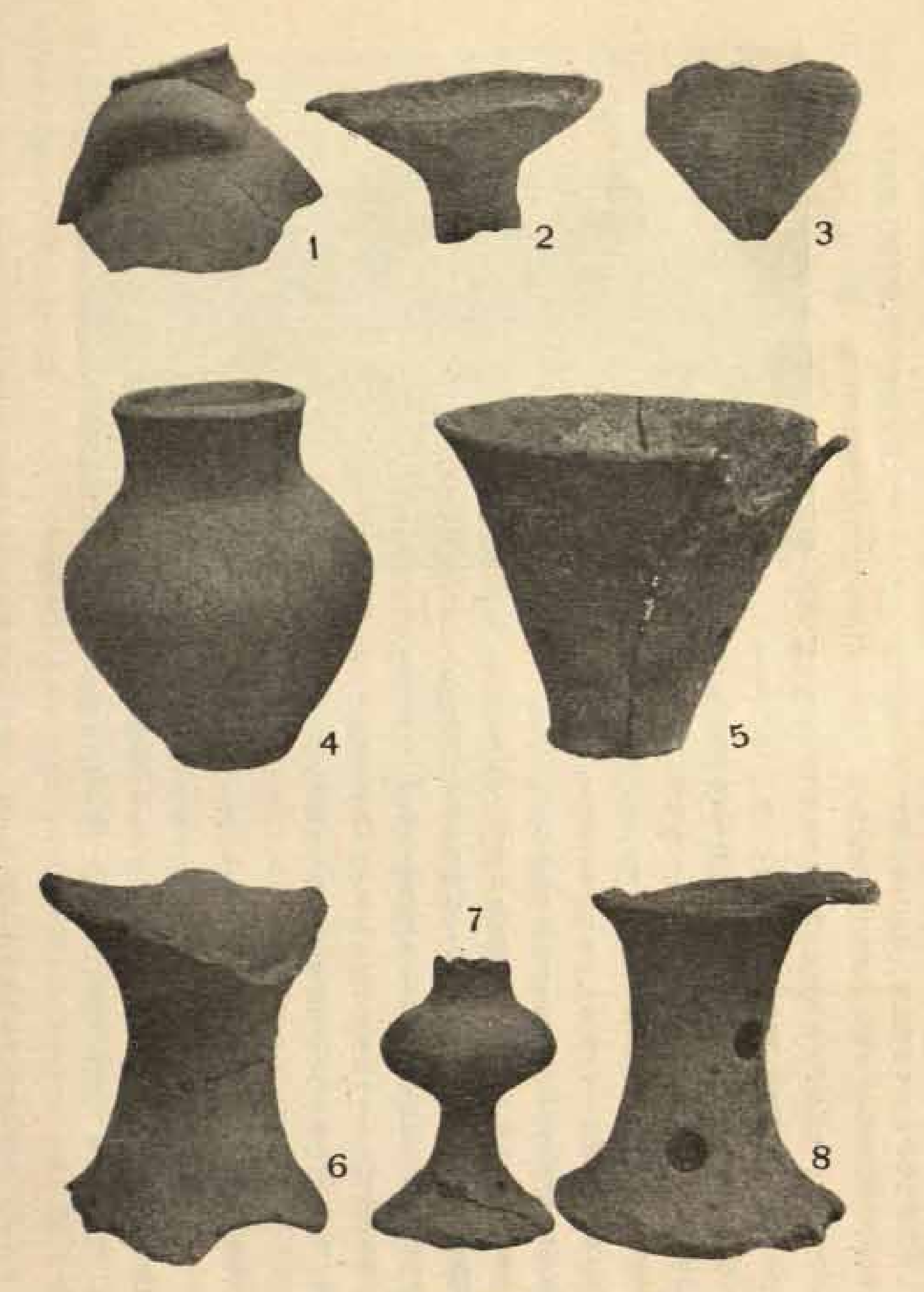


Fig. 3.　攝津國豐能郡垂水出土土器

大阪平原の發達が如何なるものであつたかを推究する地理學的考察に寄與するものも少くなからうと考へる。

三



Fig. 2. 垂　水　遺　跡

遺物として土器、石器に分つ。土器には壺形、鉢形、高坏形、器臺等の各種を見とめるが、就中、高坏形最も多くを占めて居り、壺形これに續き更に器臺の若干を見ることは注意に値する。

これ等のうち略々完形せるもの數例を圖示して、解說を試みて見よう（第三圖）

(1)は器體の口緣部に近く把手を有するものであつて、此式土器に多くの類例を見るものである。(2)は高坏形のもの(3)は壺形土器の口肩部を缺失するも、其質粗鬆なるもの(4)は完存する壺形(5)は高坏形の坏部を失へるも底徑の大なるもの(6)は(8)と同じく恐らく器臺をなすものであらう。(7)は小形の臺付壺形のものであつて、特殊な形態をなしてゐる。以上擧げたる土器を通觀しても其の形態に多樣のものゝあることを知ることが出來る。尙此外に一二特異とするものは頗る大形の壺の大きく開いた頸部と推定する口徑二尺に近い破片が出てゐる。これは曩に吾々の發掘した同國高槻の遺跡からも出て居り、又筑前須玖にも類品が認められる。又口緣部の緣端に紋樣を附するもの多く、其等の文樣は平行、圓點、重圓等のものであるが同國加茂及び畿內地方の他遺跡に出土するものと規を一にしてゐる。

四

石器としては磨製石鏃一個、打製石鏃三個、石庖丁の破片一個、石鑿一個、石器未成品及び大形石器等を見るものであつて、石

半を破壞して仕舞つたとのことを告げられたので、今更ら同氏の不遇に同情して其の快癒を祈ると共に折角氏の苦心して蒐集せる遺物を葬るに忍びず近畿に於ける一主要な遺跡の發見者として永く其の名を學界に記錄して置きたい爲に不充分な資料を顧みずこゝに記載したりとするものである。

二

遺跡地は前述の様に廣汎なる地域をなしてゐるが、多くは彌生式土器破片の點在するに過ぎず、完全なる包含地域を發見するに至つてゐない。而して發見せる遺物の大半は前に記した新京阪電氣會社の經營する一住宅地（踏査當時地均せる現場監督に其名稱を聞きたゞしたるも不明であつたので假りに垂水住宅地と名ける）の地均工事の際に發見するのであつて、戸坂氏の指示する地點は既に土壤を深く削平せられ、其の後方の山丘によつて原狀を推察するより外はない。（第二圖）氏の調査と實地を對照するに遺物は散列せる包含狀態に非ずして恐らく竪穴式の痕跡をなし、所謂る住居地に屬するものであると考へる。氏に據ると表土下約三尺、其の長徑約三間内外の一地は將しく黑土層をなし、それから土器其他の遺物を出せるものであつたと告げてゐる。今實地にこれを見るに周圍の削除せる土壤の斷壁には何等の遺物を含有することとなく、土工の言に徴しても發見する何者もないことを告げることは氏の指せる一區劃にのみ發見するものであつたことを傍證すると共に今尚ほ其の一部分の土壤が表土下近く殘つてゐることは旁々氏の言を信じて大なる誤りなきものであり、竪穴式のものであつたと推定する次第である。この一地點出土のものは氏の蒐集する土器、石器の大半をなすものであるが、氏は更に廣大なる丘陵一帶を丹念に檢索して土器散布及び若干の包含する事實を明にし、これから數ケ所に就いて東導するものであつた。これらの踏査にある歸結は千里山南方の丘陵地一帶は彌生式系遺跡を形成するものであつて、而かも其の最も著大とするものに竪穴式と推定するものゝあることは近畿に於ける新例として注意するに足るものである。而して此等の分布地域は丘陵に存置し、當代に於ける

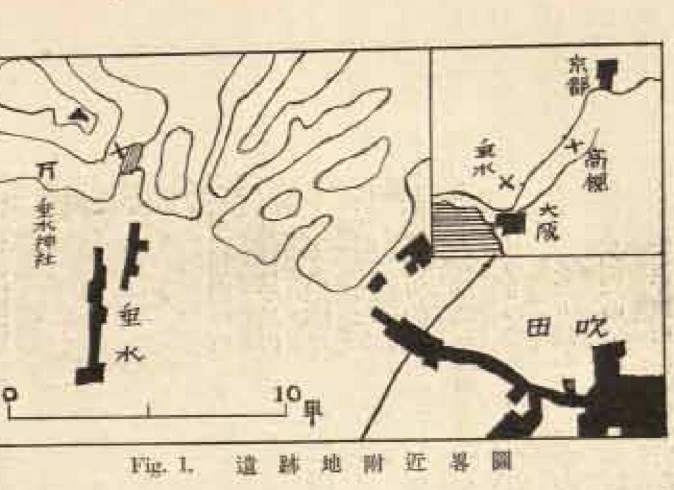


Fig. 1.　遺跡地附近畧圖

史前學雜誌 第二巻 第五號

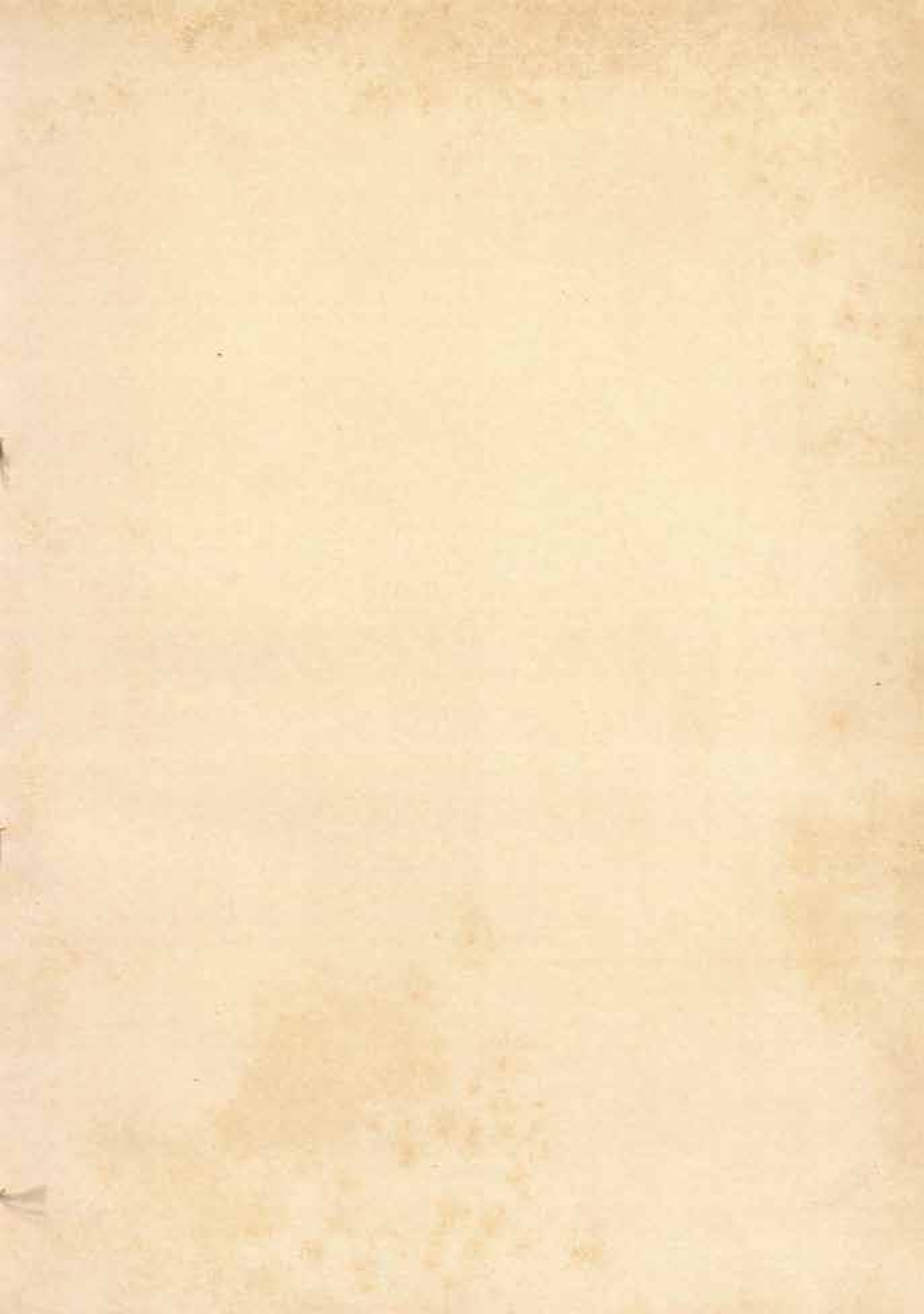
攝津國豐能郡垂水先史時代遺跡

島田貞彦

一

大阪市の北郊二里吹田驛の西方十五町にして旱を祈るに驗ありとする式内の垂水神社がある。即ち攝津國豐能郡豐津村大字垂水の地域であつて、背後は千里山一帶の丘陵を負ひ、直前には低平な沖積砂土をなす大阪平原に臨み、字句通りの景勝の地をなしてゐる。玆に述べんとする遺跡地はこの垂水神社の西北方若干範圍を包括する廣汎な地域に點在するものであつて、標高約三十米前後をなす丘陵上に存沒されたものである。（第一圖）

此附近一帶の丘陵は北方約半里のかの千里山住宅地を北境として漸次南方の丘陵に及び、盛んなる土工は丘陵を削り且つ平らにしてゐる。述べんとする重なる遺跡も遺物も全くこの土工の際に於ける偶發的の發見であつて、新京阪電氣會社の經營する垂水住宅地の地均工事に於けるものであり、今春四月以降の發見に外ならない。而して此等の遺物は幸ひにも千里山に住宅する一青年戸坂甚英氏の關心する所となり氏の異情なる考古癖は纖細なる殘缺に至るまで蒐集せられ、多數の彌生式土器の外、石器就中、磨製石鏃の伴出するものがあつたので氏はこの事實を我が濱田博士に報ずる處があつた。そこで去る五月廿二日、大阪府史蹟調査委員岸本準二氏と共に戸坂氏を千里山に訪ね、氏の東導により遺跡地を踏査すると共に蒐集品を檢することを得た。されど多量の土器を計測するに到底短時間を以てすることが出來なかつたので再訪を約し其の重なるもの一二三を撮影するに過ぎなかつた。然るに翌日に至り戸坂氏の父甚之丞氏より來信ありて、甚英氏は頻度の神經衰弱を來し、轉地保養するの止むなきと且つ苦心蒐集せる器の大

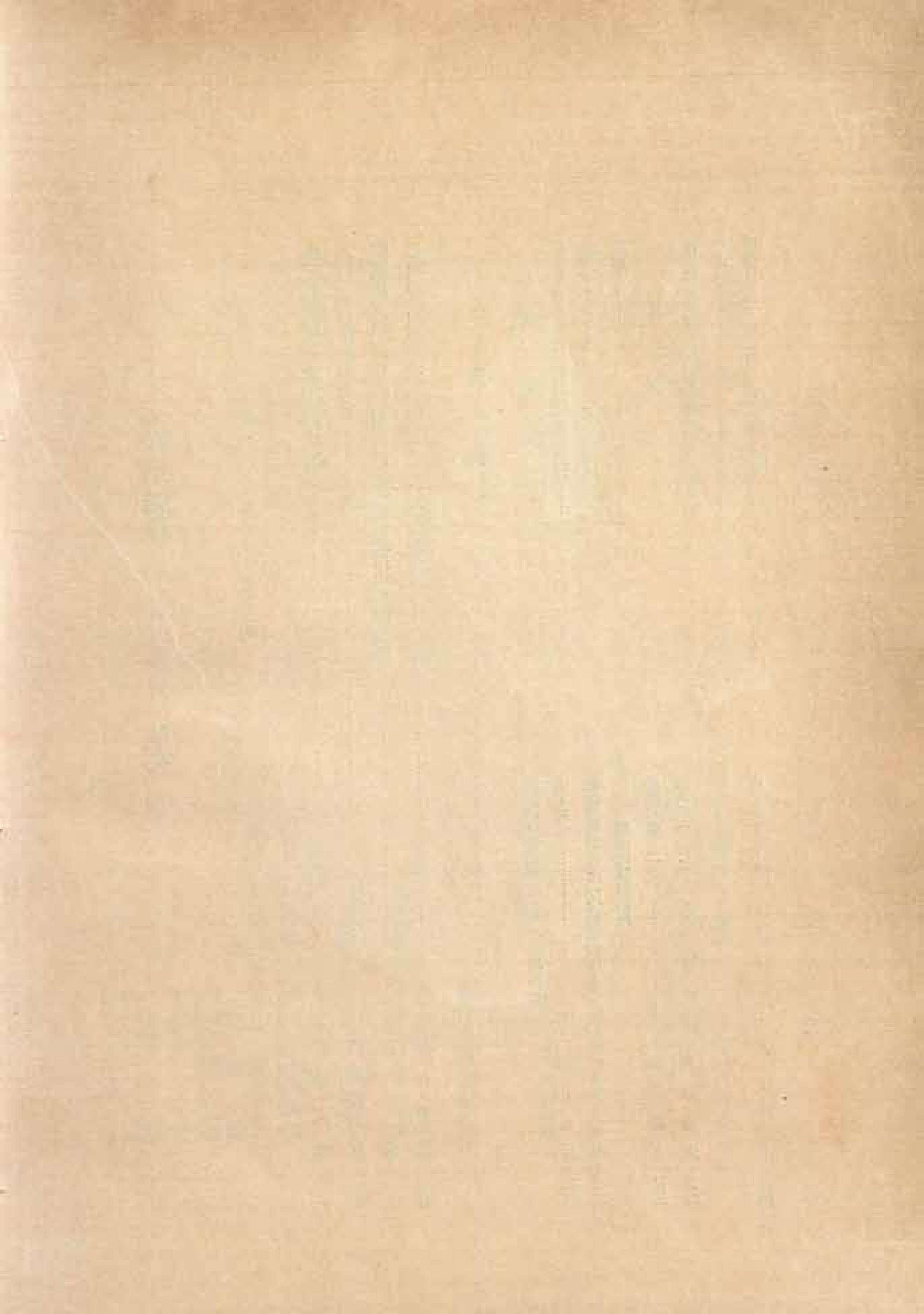


圖版第十六　（第二卷　第五號）　Tafel 16. (2. Band 5. Heft)



朝鮮京城府外鷹峰出土甕型土器

Tongefässe aus Yohoh bei keijoh-Fu Choh-sen.



史前學雜誌　第二卷　第五號　目次

史前學會々則

一　本會ヲ史前學會ト名付ケル

二　本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三　本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル
　研究小報及パンフレットノ發行
　史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ノ發行
　調査並ニ研究旅行、臨時講演會並ニ展覽會ヲ催ス

四　會員
　本會ノ趣旨ニ贊成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル
　特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五　本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌並ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル（但海外在留者ハ別ニ送料ヲ要スル）

六　會員特典
　本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ其研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル
　本會ノ調査並ニ研究旅行、講演會及展覽會ニ出席シ、本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

七　本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル（將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル）

八　本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク
　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穏田九
　大山史前學研究所内

史前學會
電話青山一二五番

幹事　大山柏　甲野勇　宮坂光次　北條憲政　杉山壽榮男　田澤金吾
會計　岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る
原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す
原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし
寄稿者の希望に依りては內容に關し相談に應ずることあるべし
寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

定價一册金壹圓郵稅四錢

昭和五年九月十二日印刷
昭和五年九月十五日發行

編輯者　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穏田九番地　大山柏
發行者　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穏田九番地　岡田義一
印刷者　東京市神田區表猿樂町二　株式會社開明堂東京營業所　中村修二

發行所　東京府豐多摩郡千駄ケ谷穏田九大山史前學研究所內　史前學會
電話青山一二五番
振替東京五八六九番

發賣所　東京市神田區北甲賀町四番地　岡書院
電話神田二七七五番
振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第二卷　第五號

昭和五年九月十五日發行

史前學會

ZEITSCHRIFT
FÜR
PRAEHISTORIE

(SHIZENGAKU-ZASSHI)

Organ der Japanischen praehistorischen Gesellschaft

Herausgegeben

von

KASHIWA OHYAMA



2. BAND 6. HEFT

TOKIO

November 1930

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Aoyama Tokio.



Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   - A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   - B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   - C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   - D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder

   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder

   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen

   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden

   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

   9, Onden Aoyama Tokio
   Ohyama Institut für Praehistorie
   (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama	Kensei Hohjoh
Isamu Kohno	Sueo Sugiyama
Mitsuji Miyasaka	Kingo Tazawa

INHALT

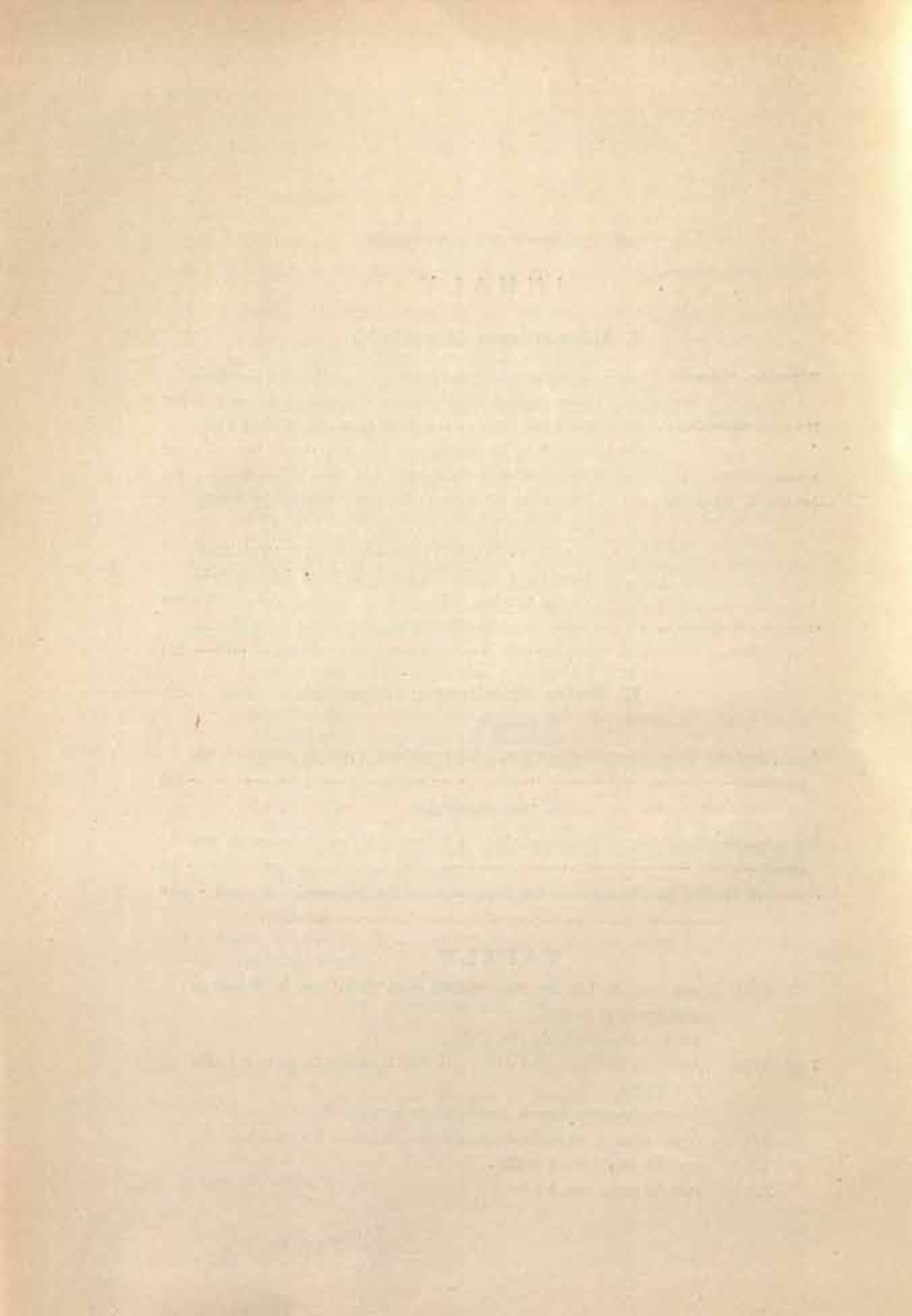
I. Abhandlungen (Japanisch)

II. Kleine Mitteilungen (Japanisch)

1. Fundort

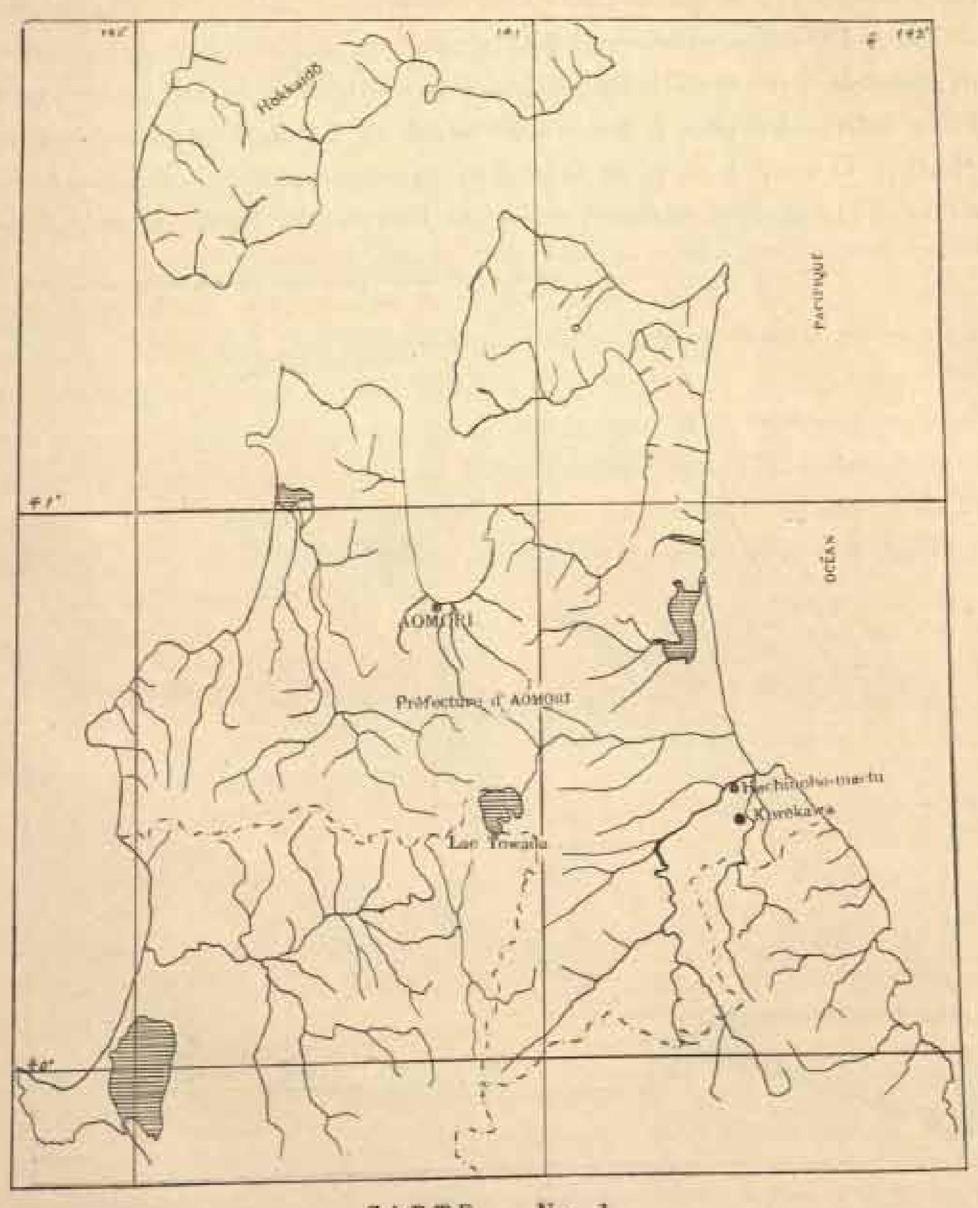
2. Fundgegenstände

TAFELN



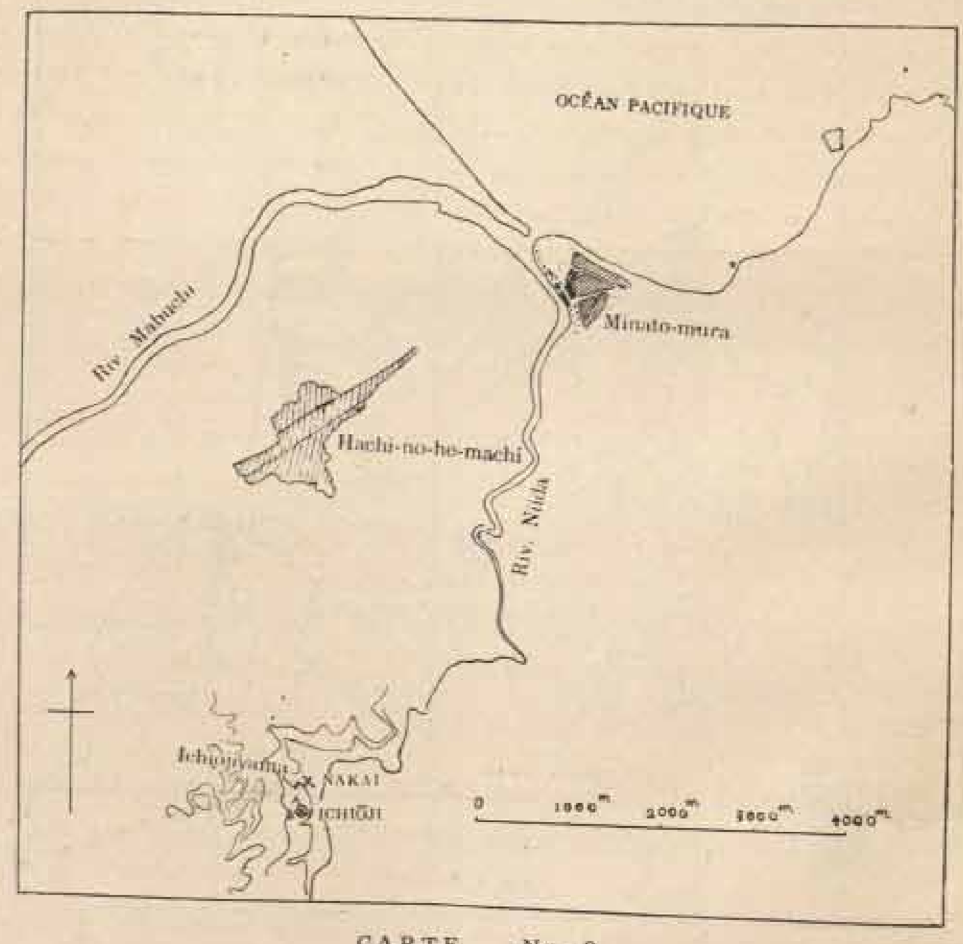
MIYASAKA Mitsuji. Le gisement préhistorique d'Ichiōji, près de Korekawa (Préfecture d'Aomori).

Résumé de l'étude de Mr. Miyasaka (texte japonais, p. 1 à 20) par M. Haguenauer, pensionnaire de la Maison Franco-japonaise.



CARTE No. 1

En avril 1929, les membres de *l' Institut Ōyama pour l'étude de la Préhistoire* ont exécuté des fouilles dans la préfecture la plus septentrionale de l'île principale de l'archipel japonais, celle d'Aomori (*Aomori-ken*), en particulier près du village de Korekawa, sur les sites de *Nakai* et d' *Ichōji* (carte n°. 1). Le premier de ces deux gisements a livré des restes qui semblent appartenir au néolithique supérieur, alors que ceux qui furent trouvés dans le second, distant du premier de 300 à 400 mètres seulement, représenteraient un stade de culture moins évolué; ils caractériseraient le néolithique inférieur dans le nord-est du Japon. Le compte rendu des fouilles faites à *Nakai* a été publié (cf. Zeitschrift für Praehistorie de l'Institut Ōyama, II, 4; les articles en japonais sont suivis d'un résumé en allemand.) Le gisement d' *Ichōji*, exploré en 1926 par M. Hasebe Kotondo qui y



CARTE No. 2

a signalé le premier la présence de vases cylindriques (*entō-doki*), vient de l'être à nouveau par M. Miyasaka, sous la direction du Prince Ōyama.

Les deux stations se trouvent sur le versant en pente douce de la colline d' *Ichōji-yama* (altitude moyenne 130^{m}) qui s'élève au-dessus de la plaine entre les deux rivières de *Mabuchi* et de *Niida*. Plus exactement, elles sont situées à proximité de la rive gauche du dernier de ces deux cours d'eau, à environ 7 kilomètres de la côte du Pacifique (voir la carte n° 2), mais le site d'*Ichōji* se trouve à une vingtaine de mètres plus haut que celui de *Nakai* lui-même à 20 mètres au-dessus du niveau de la mer. A *Ichōji*, les fouilles furent exécutées en deux endroits A et B. Ce dernier était distant du point A d'environ 20 mètres à compter dans la direction du sud-ouest, et était placé un peu plus haut que lui.

Le sous-sol était formé par un lit de cendres volcaniques jaunâtres (couche I) presque parallèle à la pente de la colline. Cette couche I apparut en A comme en B (fig. 1 et 2). En A, elle était recouverte par un stratum de sable noir d'origine probablement volcanique (couche II), épais de 0^{m}40 à 1^{m}20, qui supportait à son tour une couche de terre sableuse de couleur brune dont l'épaisseur maximum ne dépassait pas 0^{m}60 (couche III). La couche supérieure (IV), épaisse de 1^{m}15 à 1^{m}90, était constituée par de la terre brun foncé dont la couleur tirait par endroits sur le noir. En B, au-dessus des premières couches inférieures (I, II), on

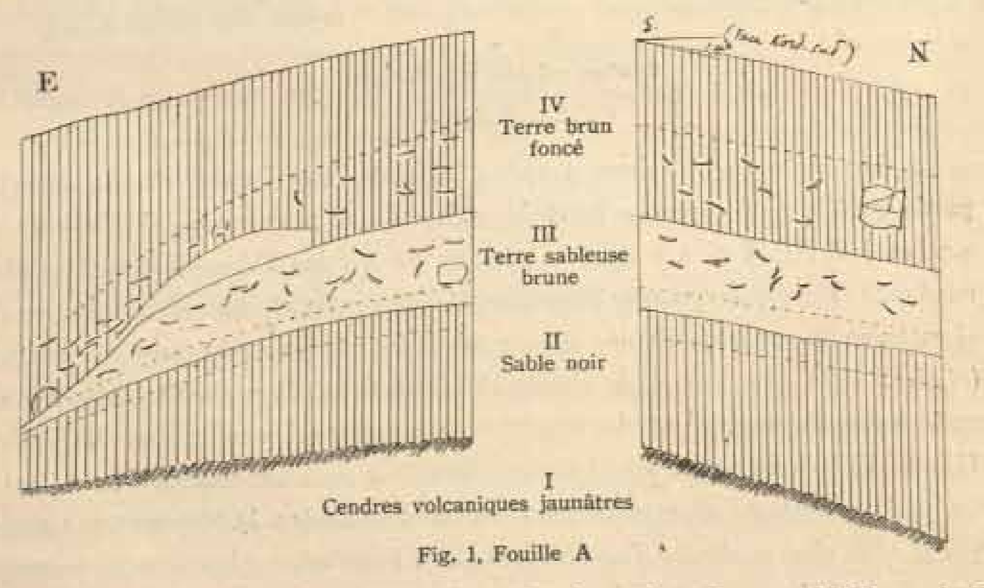


Fig. 1. Fouille A

rencontra aussi un lit de terre sableuse (III) de couleur brune (0^{m}75), mais il

était placé sous un autre de composition analogue bien que de couleur jaunâtre (couche III bis), qui n'existait pas en A. Ces deux lits contenaient, le premier (III) trois traînées de cendres de bois, l'autre (III bis) de la cendre mêlée à la terre sableuse. Le stratum supérieur (IV) était composé, comme en A, de terre brune ; son épaisseur variait entre $0^{m}80$ et 1^{m} 10.

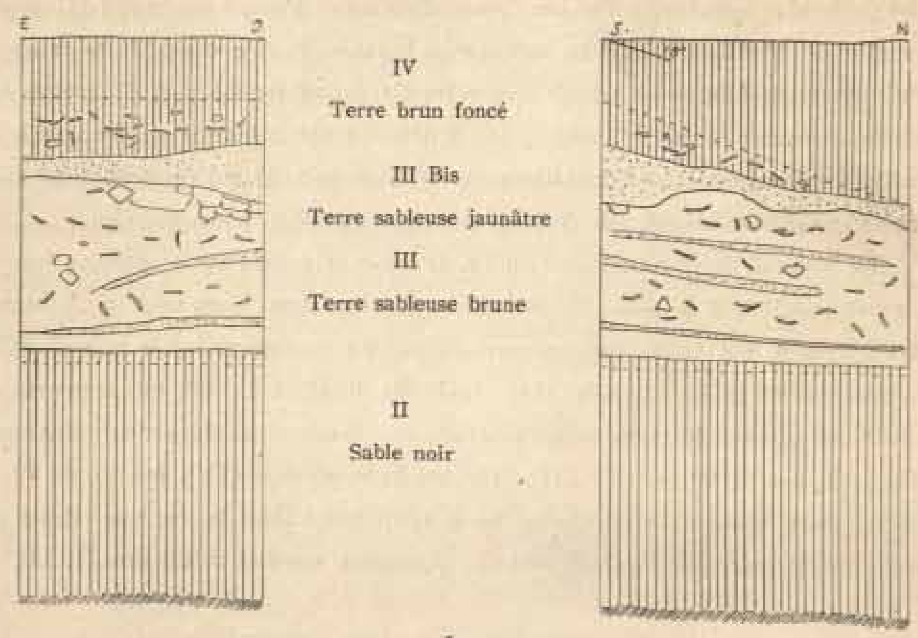


Fig. 2, Fouille B

Les restes préhistoriques furent découverts dans l'espace compris entre la partie supérieure des couches II et la surface du sol ; seulement, c'était dans les couches III (III bis) et la partie inférieure des couches IV qu'ils étaient le plus nombreux. De plus, les poteries furent trouvées pêle-mêle et rarement intactes en A, alors qu'en B, on recueillit une cinquantaine de vases complets et bien groupés (cf pl. XVIII). La base de la couche III de la fouille A contenait des cornes de cerf, des os de sanglier et des coquilles en assez grand nombre ; en B (couches III et III bis), les ossements d'animaux formaient un amas considérable.

Les ossements appartenaient aux animaux suivants : 1) Mammifères : *Shika* (cerf), shika nippon nippon' *Temminck*; *inoshishi* (sanglier), sus leucomystax leucomystax *Temminck* ; *usagi* (lièvre), lepus brachyurus brachyurus *Temminck* ; *tanuki*,

nyctereutes procyonoides viverrinus *Temminck*; *musasabi* (écureuil,) ; *kujira* (baleine); *iruka* (dauphin), delphinus sussumieri *Blanford*. 2) Poissons: *Kurodai* (dorade), sparus macrocephalus *Basilewsky* ; *suzuki* (perche), lateolabrax japonicus *Cuvier* et *Valenciennes*; *hirame* (sole), paralichthys olivaceus *Temminck* et *Schlegel*; *same* (requin), heterodontus japonicus *Duméril*. 3) Mollusques : *Magaki* (huitre), ostrea gigas *Thunberg* ; *asari*, paphia (ruditapes) philippinaium *Adams* et *Reeve* ; *hotategai* (peigne), pecten (patinopecren) yessoensis *Jay* ; *hime-ezobora*, chrysodomus (barbitonia) arthricus *Bernardi*; *kubogai*, tegula (chlorostoma) argyrostoma basilirata *Pilsbury*.

Des fragments de végétaux furent retrouvés dans l'argile des débris de poteries ; ils appartenaient probablement à la famille des *suge*, carex.

Les restes de l'industrie néolithique comprenaient des aiguilles en os, des pointes de harpon également en os, un hameçon en corne de cerf (fig. 7, p. 12 du texte japonais,) une hache faite d'un os de baleine (fig. 8, p. 12 du texte jap.), quatre haches en pierre polie (fig. 10, p. 13 du texte jap.), des grattoirs en pierre taillée (fig 11, p. 14 du texte jap.), des spatules *hera* (fig. 9, p. 13 du texte jap.), des pointes de flèches en pierre taillée et des poteries. Les aiguilles étaient les unes trouées, les autres sans trou. Les premières furrent trouvées en B (couche III); les autres, découvertes aussi en B (couches III, III bis), avaient une tête, ce qui permet de supposer qu'elles servaient d'épingles on de clous (cf. pl. XIX). Les pointes de harpon, de petite dimension, étaient de facture beaucoup plus simple que les instruments analogues trouvés dans les *kai-zuka* (kjœkken-mœddinger). Les grattoirs de forme allongée (fig. 11, n°s 5 à 10) furent découverts l'un (n° 7) dans la couche III de la fouille A, deux autres (n°s 5,6) dans la partie inférieure de la couche IV de la même fouille; les trois derniers proviennent de la couche III de la fouille B. Quant aux grattoirs de forme trapézoïdale, ils étaient les uns (n°s 1,2) à la partie inférieure de la couche IV en A, les autres (n°s 3,4) dans la même couche, mais en B. Les roches utilisées étaient le silex et le grès.

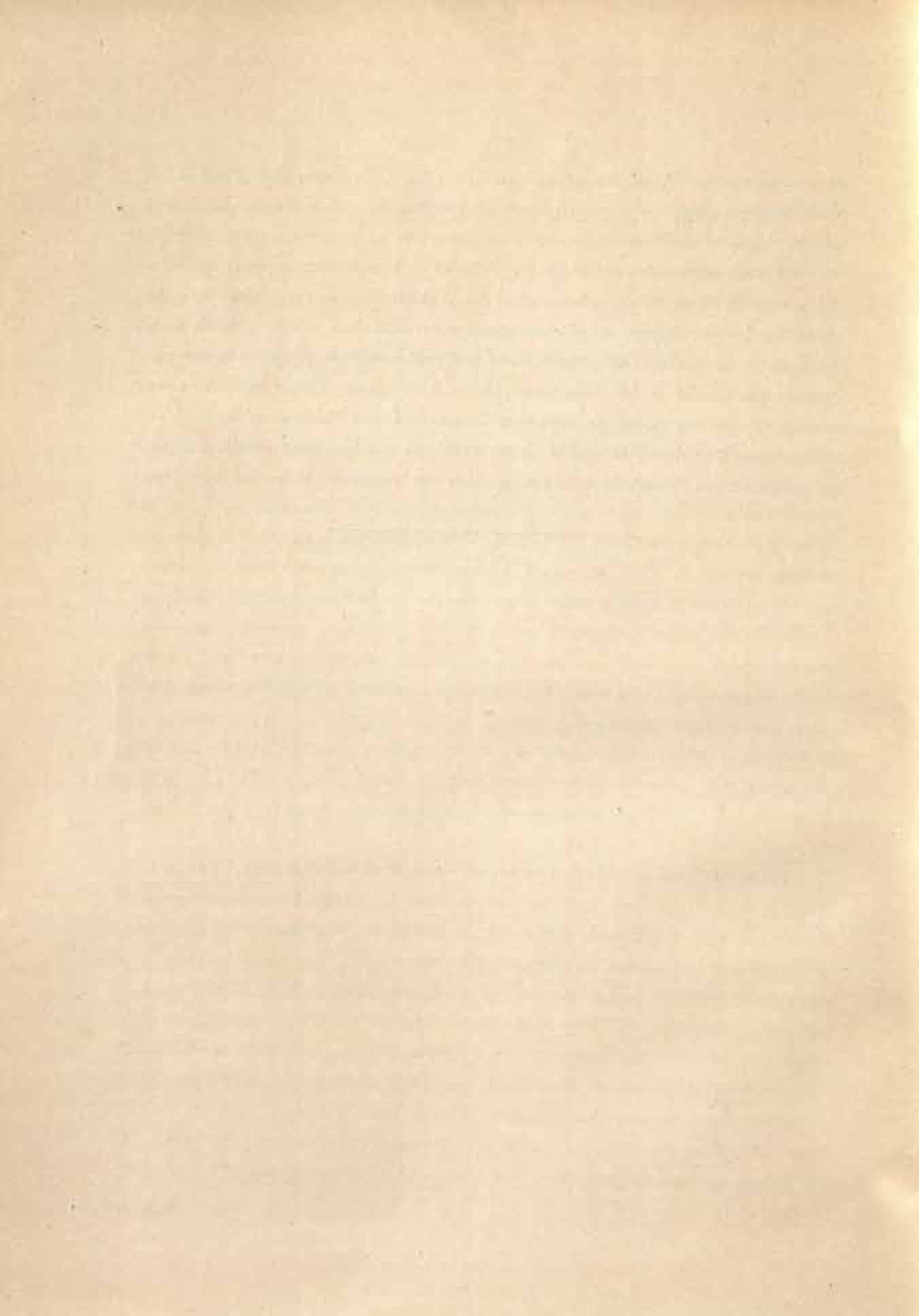
Les poteries peuvent être réparties en trois groupes d'après leur forme. Le premier groupe comprend les vases cylindriques déjà signalés par M. Hasebe ; comme ils furent découverts d'abord sur le site d'*Ichiōji*, M. Miyasaka leur a donné le nom de "poteries du type *Ichiōji* (*Ichiōji-shiki*)", mais il prend soin de faire remarquer qu'on a découvert depuis des vases de même forme dans le nord-est du Japon et au Hokkaidō. Ceux d'*Ichiōji* se laissent diviser en deux sous-groupes: a/ et b/. Le premier sous-groupe se compose de céramiques de form ecylindrique mais

plus larges à l'ouverture qu'à la base. Dans certains cas, la surface extérieure est droite ; dans d'autres, le vase présente un étranglement à quelques centimètres de l'ouverture, mais le corps n'est jamais renflé ni globuleux (cf. Pl. XX, XXI). Parfois, la surface extérieure, près de l'ouverture, est couverte d'une ornementation assez compliquée (fig. 12, p. 16 du texte jap.), tandis que le reste du vase est décoré de façon beaucoup plus simple. Le grain de ces poteries est assez grossier; la pâte de certaines d'entre elles contenait des fragments de végétaux. Ces céramiques furent trouvées, en A comme en B, dans les couches III et IV. Le sous-groupe b/ comprend des poteries qui proviennent de la partie inférieure des couches IV des fouilles A et B. Ces vases ont une forme cylindrique analogue à celle des précédents, mais avec cette différence que leur ouverture est beaucoup plus large. Les bords en sont largement échancrés et agrémentés d'une ornementation plus complexe que celle des vases du sous-groupe a/ (pl. XXIII,12). Le second groupe renferme des poteries retrouvées en grand nombre dans la région du Japon central, au nord-est du Kansai et dans le Kantō. On leur donne le nom général de "poteries du type *Katsusaka*" (*Katsusaka-shiki*). Ce sont des vases larges mais pas très hauts, dont le corps globuleux et ornementé se termine par un col évasé (cf. Zeitschrift für Praehistorie de l'Institut Ōyama; II, 1, Tafel IV, vase n° 1). Le troisième groupe est constitué par les "poteries du type *Ōmori*" (*Ōmori-shiki*) signalées par Morse (Shell-mounds of Ōmori, in Memoirs of the Science Department, University of Tōkyō, I; 1874). Les poteries des deuxième et troisième groupes furent recueillies dans la partie inférieure de la couche IV de la fouille A.

CONCLUSIONS. Les dissimilitudes frappantes qui existent entre les restes néolithiques découverts à *Nakai* et ceux amenés au jour lors des fouilles d'*Ichiōji*, autorisent à supposer qu'on se trouve en présence de deux populations néolithiques qui n'appartenaient pas à une même race, ou, tout au moins, qui vécurent à des époques différentes. Les potiers de *Nakai* avaient acquis une dextérité plus grande que les fabricants des vases du type *Ichiōji*. Bien plus, Mr. Miyasaka pense que les céramiques néolithiques du sous-groupe a/, trouvées dans les couches inférieures (III), appartiennent à un stade de culture plus primitif que celui du sous-groupe b/ et, à plus forte raison, que celui auquel remontent les vases des types *Katsusaka* et *Ōmori* puisque ceux-ci n'apparurent que dans les couches sus-jacentes. La forme des poteries du sous-groupe b/ laisse même croire qu'elles représentent un type évolué

du sous-groupe a/. Ainsi, les céramiques du type a/ seraient, dans l'état actuel de nos connaissances, les plus primitives de toutes celles qu'ont livrées les fouilles exécutées dans le nord-est du Japon.

Autre constatation intéressante: l'auteur fait remarquer que la présence d'ossements de bêtes et de poissons dans les couches inférieures prouve que les fabricants des poteries du premier sous-groupe vivaient à la fois du produit de la chasse et de la pêche. On ne peut être aussi affirmatif en ce qui concerne les hommes qui manièrent les objets retrouvés dans les lits supérieurs, car ceux-ci ne contenaient que des ossements de bêtes. Il est vrai que l'absence d'ossements de poissons peut être due à la nature de ces dernières couches, leur constitution géologique étant peu favorable à la conservation des arêtes et des petites vertèbres.



雜誌第四十三卷に「北九州に於ける甕棺調査報告」と題して甕棺に關する詳細なる觀察が録載されてある。本書がこの後の周到なる大規模の研究發掘によつて完璧を期せられたのも亦偶然の所產ではない。

扨て本書の主題はこれを「筑前須玖先史時代遺跡の研究」と題して上記發掘の成果を記述する。卽ち兩君の所論として擧ぐべきものに、甕棺個體の形態研究に於てその製作技術を論じて燒法の進歩を洞察して多量生產を目的とする專門の工業的所產なりと認め、これを繩紋土器の家庭工業の產物たるとを比較して、その劃期的躍進的進歩を指摘されたのは正しく原始生活より更に高級の文化へ、漸次形成されつゝある大なる集團生活と複雜なる社會組織への革變推移の一端を暗示されたるものとして、「合口甕棺の型式と其起原」に於ては、合口甕棺の型式を「上下兩甕同大同形のもの」及び「上甕小にして蓋の形式をなすもの」の二類に大別してそれ等の發生の前後に就いて、埋葬狀態の章に於て甕棺が常に水平位埋葬の狀態を示さず緩傾斜の埋葬位置を持つ點に注意して遺蹟學的研究を遂げ、その事由を甕棺永存の目的に出でたるものなりと觀じ、やがてこれが埋葬法上合甕棺に現れる甕棺個體の型式變化の主因をなすものと看做して、第二類に屬する上甕の小にして蓋化せる種類甕棺の發生を說明し、進んで之等によつて葬位觀念より規定されたる棺槨が棺槨自體に基く發達變化に支配されて、却つて本來の葬位觀念を失ふに到る徑路卽ち事物によつて示さるゝ極めて微妙なる人意の自然的流動移推の現象を論述された如きは純正考古學に立脚した論究として傑出した一二の片鱗を示すに過ぎないが其他支那、滿鮮地方の合甕棺又は內地の組合箱式石棺其他と比較研究して之等合甕棺の制が我國に於て獨自の發達を遂げたるものとなすの穩當なるを論じ、且つ墓制發達史上に於ける甕棺制度に就ては同時期に行はれた組合箱式石棺が正系となつて古墳墓の成期へ進展するを述べ、却つて甕棺にあつては限定されたる時期と地方に於ける一現象に止まるを指摘し、然も其技術は形を變じて同系統に屬する彌生式土器製作方面に傳り更に埴輪に迄之が存續せる事を說かれてゐる。

最後にこれ等多量甕棺を遺存せる地方を目して、周末漢初の支那文化東漸に基く漢文化の影響によつて齎らされた我が原始民の高等文化への躍進の主なる「ステーション」なりとなし、更に後漢代に於ける史乘に現はれた支那文化交渉が之等先行文化の生長に他ならぬを論破されてゐる。

猶本書はその主題須玖岡本合甕棺の研究に最も關係深い同地出土の古鏡に就いて梅原末治君が中山博士蒐集にかゝる百數十に餘る零碎なる鏡鑑の幾片を多大の努力と苦心を費してその復原圖制作に成功せられ、且つその詳細な說明を與へられて所謂秦鏡と漢樂浪郡遺蹟出土鏡との中間の遺品として更に秦鏡との微妙な關係を指摘されてゐる。

更に附錄として甕棺研究に關心を持つ者に取つて重要な文獻である青柳種信の筑前怡土郡三雲村古器圖說を寫眞石版に附して卷末を飾つてゐる。

最後に特筆すべきは本書が圖版作製に最も多くの苦心を致された點である。從來漫然とのみ知られてゐた須玖岡平の遺跡を正確に攻究實測を試みられたのを始め甕棺埋存狀態並に個々の遺物に就いて詳細明確に圖示されたのは、梅原君の鏡鑑復原圖と共に正に我等の推賞するところである。（田澤）

考古圖彙

故高橋健自博士の遺愛品中から古瓦——別に圖錄が刊行されてゐる。——を除いて主として、考古學及びこれと緊密な關係を有する遺物二百數十點を撰んで、鮮明な圖錄となしたもので、簡にして要を得た後藤守一・石田茂作兩君の解說文を添へてゐる。

納むるところ故博士が最も力を致された銅劍・古墳關係遺物並に和鏡の類等が多數を占めてゐることは申す迄もなきことながら、石器・骨角器繩紋式土器・彌生式土器等の史前時代遺物を初め塼佛・瓦經・土塔・寫經輪卷・彫刻等種々雜多の佛教關係の遺品や、更に支那考古學の遺物迄をも網羅して一見讀者をして今更ながら故博士の多方面に亙る偉大な業績の數々を追憶せしむるものがある。（菊版本・增補版五十葉圖・挾入・定價二圓・萬葉閣發行）（田澤）

勿論、本遺物を以て石槍等と類を同じく見る可きではなく、自分はやはり一種の石斧と看做す可きものと考へる。その想態のかくの如き特殊さは、あるひは特殊な用途への適應のため特にかく作られた物であつて、なほ他に類似の遺物が少からず存在してゐる事實が發見されるかも知れないと考へられる。

（樋口清之）

文獻

京都帝國大學文學部陳列館考古圖錄

昭和三年秋御大禮に際して京大文學部陳列館の公開が行はれこの機會に同陳列館考古學標品の圖錄が、同學考古學教室の充實した內容を語るにふさわしい豐かさを示して刊行された。さりながら同圖錄は發行後暫時にして絕版となつて一般好學の士の望みを滿し得ないのを憾みとしたが、幸に今回裝を新にして重刊を見たのは洵に嬉ばしい次第である。

扨て圖錄は濱田博士の序言の如く全く字義通りの重刊であつて二三圖版を原色版となし或は若干の遺物を加へた外何等前版と異るところを見ない。內容はこれを三部に分ち、第一部に日本及朝鮮の出土品を置き第二部に支那の遺物を配し第三部にその他諸外國の發見品を納めてゐる。第一部は更に（a）石器時代（b）金石併用期（c）原史時代（d）歷史時代（e）朝鮮各時代に分ち、第二部支那遺物は（a）先史時代及漢以前時代（b）漢及六朝時代（c）唐時代（d）宋時代以後に區分し、次いで第三部諸外國の發見品は（a）舊新石器時代（b）古代埃及（c）古代希臘（d）古代西亞諸國（e）印度及其他諸國の諸項に分つてゐる。圖版百二十葉中に總數約六百點の遺物を極めて巧みに配合して簡明によく全世界考古學的研究の對照を大觀し得ることは、さすがに東亞に於ける斯學の王座を占むる同教室の所藏品として他の追從を許さないものがある。

通例この種圖錄の再版刊行の場合は初版に比して劣るとも優るものが尠ないにかゝわらず、この圖錄に於ては前版に較べてより一層圖版の鮮明を期し更に二三の原色版を添へ、新に追加の遺物としては漢及その以前の青銅器・漆器或はスキーテン式等近時學界注視の標的となれるものを撰べるなど懇切な意したものである。（菊版圖版百二十葉和歐兩文目次付、定價五圓、申込所京大文學部考古學教室）

筑前須玖史前遺跡の研究

日本古代文化の黎明――原始生活の平和な營みを續くる民族にも、そのつゝましやかな生長の裡に漸次幼少の殼を脫せねばならぬ熟成の秋が來る。自からの熟成期に際して更に他よりより强烈なる刺激が加はるとしたならば、自然の生長に比してより一段の飛躍の痕をそこに認識さるゝであらう。我が古代民族が地理的の環境攝理に從つて、當時既に高度の生長を遂げて居つた支那文化の啓發によつて、石器時代の原始生活の殼を先づ最初に打破つて高等文化の曙光に浴したのが、日本古代文化の黎明が、九州北部所謂筑紫地方に出現した事實とその文化的生長推移を究め知らんとする心は今や考古學に關心を持つ學徒に切なるものがあるであらう。

京都帝國大學文學部考古學研究報告の第十一册がこの研究を主題に撰んだことは、我等同學の徒は、先づその纖明さと眞摯な學的態度に敬意を表せねばならぬ。

昭和四年の冬島田貞彥君が同大學同攷の諸氏と共に甕棺遺跡中の最も代表的たる須玖岡本の遺跡を發掘調査されて、十數個の甕棺と共に銅劍な發見せられたのは、當時獨り同君のみの欣びに止まらず學界を擧げて斯學の爲めその成功を慶賀したのであつた。研鑽一ケ年その成果が今本書となつて現はれたことを更に祝福したい。

さりながら同君の甕棺に關する研究は、その序曲は既に一昨年人類學

遺物は前述の甲野氏の調査報告の第四圖版１に記載せられたものと、今回上部に接合せる一破片とが五年後の今日に於いて發

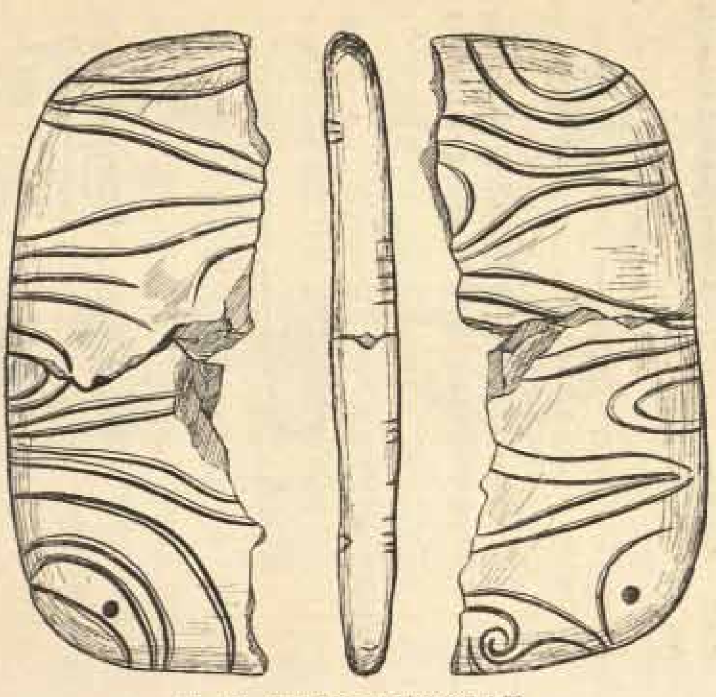


Fig. 3.　埼玉縣眞福寺貝塚發見土版

見せられ偶然的に兩者の接合を見たもので、該土版の一半の構成を知り得たもので採集奇談の一頁を飾るものである。全體の大きさ、十八糎に七糎、厚さ一・八糎

（池上啓介）

南滿洲石斧の一特異形　圖示する所の石器は、關東州旅順管內方家屯會南山裡郭家屯石器時代遺蹟より發見されて現在旅順關東廳博物館に所藏する物であつて、帶紅黄色の變麻岩製、全長約十二・五センチに及ぶものであつて、刄部、周邊以外は粗雜な磨製に屬してゐる。その形態は特に注意すべきものであつて、下端は突出した刄部を形成し、上端は中央凹入して磨かれてはゐるが刄なく、中央や丶上よりの左右は研磨によつてや丶抉入し、又、刄部はこの左右の抉入の部分より始まつてゐる。全體に平板狀を呈し、刄は双刄に屬してゐる。この石器は全體的に見て、南滿、特に海岸に近き遺蹟に於ける精巧な技術によつた整頓した型態の物に比して、はるかに粗製不整頓な型態を呈してゐる。南滿洲に於ける最も普通の石斧の型式は所謂、短冊形、のみ形等呼ばれる直線刄部の物を主として、本例の如きはその例を見ない所である。而して、その左右又はその上端に於ける抉入は、何物かへの緊縛への特殊裝置と見られるものであるが

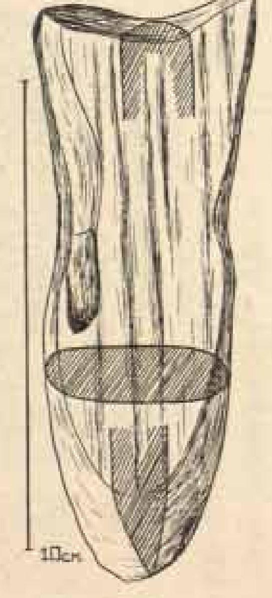


Fig. 4.

山字狀紋樣の部分のみが燒成せられたる後に彫刻せられゐる事に注目を要する。

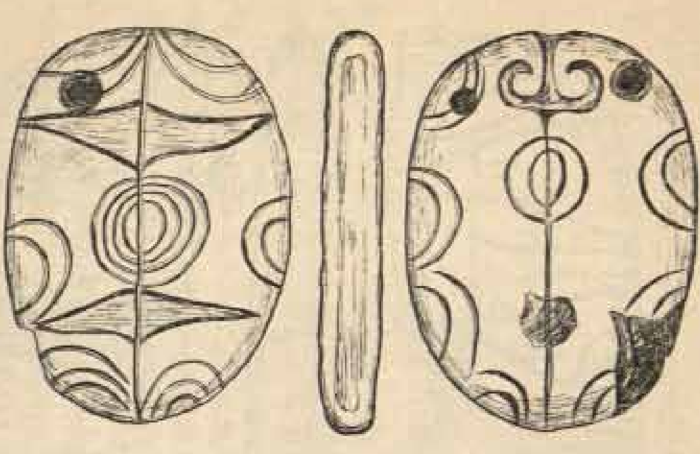


Fig. 1. 埼玉縣眞福寺貝塚發見土版

大きさ十一糎に八糎厚さ二糎。

第二圖は本年九月研究所諸員に依つて出土した方形の土版である。甲野氏報告A地點東方なる燒土露出地近傍の畑地の表土下八十糎の燒土上にa面を上にして出土したものである。全體黄褐色を呈しa面の中央に貫通せざる一孔を有するのみで方形の土版に往々見る如き、一部に懸垂用とも考へられてゐる穴を



Fig. 2. 埼玉縣眞福寺發見貝塚土版

有してゐない。大きさは、十糎に八糎厚さ二糎。

第三圖は第一圖と同じく原田氏に依つて表面採集せられ、兩方とも氏の好意に依り本研究所に寄附せられたものである。本

校の建つる所であつて、貝殻散布は元より、其他の遺物散在の證跡を追求する事は、頗る困難とする所であるが、幸ひ小學校運動場西北端に位する、畑道との境界の爲、側掘された一溝に露出した包土層中には、燒灰及び彌生式土器を包雜し、更に其近くに於いて繩文土器齋瓮を採得して居る。

彌生式は無文赤褐色又は黒褐色、今八個存在する。繩文土器は四個、主として黒赤褐色を成し、中一個は諸磯式系統に屬する爪形文を押施し、他の一個は明かに纎維の横走する破片であつて、所謂纎維土器の範疇に含有される。齋瓮は灰白色、一つは胴部片と覺しく刷毛目を附文する。他は口縁部片であつて、外部に輕く反轉を持ち、二重の縁部を持有する。

三、鴨居照ケ崎の隆起貝層中に於ける現生貝類

此處を訪れた目的は洞窟趾の見學に在つたが、今や採堀工事の進展につれて跡方も無く、僅かに寄せ來る潮音に、在りし日の俤を推想せしむるのみである。然し此明媚なる環境を利用して、彼等の奥津城を築選した古代人の心理は、私にある何者かを衝動せしむる所があつたと信ずる。

扨此洞窟趾の在る前面の海中に露出した、所謂照ケ崎の岩端の隆起貝層中に於ける現生貝類は、三浦半島の先史時代貝類の比較資料として、何等かの役に立つかもしれないと思ふので茲に記す事にする。

隆起貝層の前面は既述の如くあるので、海波に洗はれ、滿潮時の接近は不可能であるが、約三米余の層位であつて、砂泥中に混じ貝類を多量に包雜して居る。上層の調査は少なからざる危險を伴ふので、多くの遺漏は免れないと思ふが、採出せる主なる貝類は、アハビ、オホノガヒ、オキシヤミ、サヾエ、ナガニシ、スガヒ、マテ、サクラガヒ、カヤミガヒ等である。此中不明のもの數種あるが、オホノガヒの發育極めて良好で長大のものを見受くるも、アハビ、サヾエの包藏量極めて多い。

（松下胤信）

遺物

埼玉縣柏崎村眞福寺貝塚の最近出土の土版に就いて　眞福寺貝塚出土の土版に就いては、甲野勇氏の本學會小報第二號に本貝塚調査報告中に二個の出土例を報ぜられてゐる。後數度の該遺跡の調査の結果、新に三點の增加を見たから資料として報告することにした。

第一圖は昭和五年八月該遺跡の地主原田靜作氏の表面採集に依るもので楕圓形の土版である。全體黃褐色を呈し、比較的よく燒成せられてゐる。又兩面に見られる紋樣は關東出土の土版と大なる變化は見られないが、鳥居博士の所謂山字狀裝飾（人類學雜誌三十四卷第七號參照）施紋法である。即ち、該土版の

資　料

遺　跡

神奈川縣浦賀に於ける考古學的調査　久しい以前から、三浦半島方面の踏査を企てゝ見たいと思つて居た筆者は、昭和三年の八月遅ればせながらも、此が希求を滿し、第二回の其を本年七月六日果行したのであつた。殊に後者の場合に於いては、主として浦賀方面に範域を限定し、先づ馬堀より走水に出で、其より海岸に沿ふて鴨居高坂に至る行程を取る事にした。其時の一部分を成す報文が本編である。

一、浦賀町鴨居腰越貝塚

貝塚の占在地域は、東京灣要塞地帯に屬する爲、法規の示す所より、種々の點に於いて制約せられる點が少くない。依つて此記述も、其に準じて行かなければならない事を遺憾とする。

腰越の聚落の位置する狹長な低地に、一條の小川を擁しながら、周圍より一段隆起して存位するのが本貝塚であつて、現海面との距離も極めて近接的である。今貝塚の一部は人家に接し、他は畠地であるが、此等を通じて採出された遺物は、全體を通じて貝類土器類と成す事が出來る。次に其等の個々に就いて說明しよう。

貝類はハマグリ、シヤミ、レイシ、オホヘビガヒ、サヾエ等（他に不明のもの二種）であるが、此中サヾエ稍々多く、シヤミ稀少である。土器は彌生式齋瓮より成る。前者は寧ろ彌生式の範疇を脫して、埴瓮の領域に位するものであつて、主として口腹部、底部の破片より成り、無文、燒度粗成軟弱、色澤黃赤褐色、黑褐色又は灰褐色を示現する。全的に無文頗る優勢であるが、有文として少數ながら刷毛目文を見出す。後者は灰白色灰青色を呈し、無文に混ふるに刷毛目文を現して居るが、這種瓮器としては、比較的後期に屬する。

以上を通じて見る本貝塚の委相は、其資料に於いて假令些少なりとはいへ、顧みて深慮する時、極めて重要なる問題を投與するであらう。卽ち貝塚の位置の低地に存占し、然かも埴瓮及び齋瓮を以つて貝塚の主體を形成し、石器の存在皆無なる事等の諸點を識得する、尙附加すべきは、斯種貝塚の通有性として、釉藥を受案しだ陶質土器片を混出する傾向である。此等の事實を內省する時、種々の點に於いて、橫濱杉田東漸寺貝塚の文化相に比すべきであるが、茲では此が原史時代末期に占置する一貝塚なるを知得すれば足るであらう。

二、浦賀町高坂小學校構內

學界周知の遺跡として、茲に述べくもないが、筆者も亦二回の調査に依つて、斷片的な資料を得て居る。遺跡は浦賀の町に深く侵入した灣江に臨む臺地に存するのであるが、今高坂小學

註1　島田貞彦　水野清一　小川五郎　三宅宗悦四氏　攝津國高槻攝津農場石器時代遺跡調査報告　人類學雜誌　四十四卷七號

註2　前掲東京府久ケ原遺跡報文參照

註3　曾つて中山博士の云はれた、「彌生式土器は古式の土師器」なりてふ御説に對し、吾々は移して以て此場合斷言を貢つるを得べく、博士の明識博學なるに新なる尊敬の念を深うする。中山平次郎氏　所謂彌生式土器に對する私見考古學雜誌　八卷二號

（二）文献的事實の示す一側面

最後に本遺跡に對する確からしさを幾分なりともすべき一事象を投與して、本稿を終らうとする。

即ち日本書紀安閑紀元年の條に依れば、武藏國造笠原直使主竝びに同族小杵との國造、職承繼の軋轢を叙し、遂に使主が朝廷の臨斷に依つて武藏直となり、其の感謝の誠意を表現して、謹んで國家の爲めに横渟橘花多氷倉樔四處屯倉を朝廷に献つた事が見え、又續紀稱德神護景雲二年の條に六月癸巳武藏國橘樹郡人、飛鳥部五百國久良郡に於いて白雉を獲、之を朝廷に献じ、かくて天皇其吉祥を嘉し給ひ、武藏國天平神護二年已往正税未納赦除し、又久良郡今年田租三分之一を免じ、更に國司及び久良郡司名一級を叙位せられ、其献雉人五百國授位及び租税を賜ふた記事を見出す。

共時に對する絶對的地域を那邊に求定すべきやは、暫く論外としても、本地方が上代すでに大和朝廷勢力圏に侵潤して、早くも屯倉の設定を見、或ひは白雉献納を見たるが如き、以つて當地方に於ける吾等祖先の活動を推起せしむるに足る。されば下りて平安の時代に至りて、和名抄載する良椅郷の名を見る事、蓋し當然の移程にして、史前此地に一大聚落を營成したる本貝塚民衆の生活の跡は、如實に此間の消息を語示して余りあるであらう。

顧みて再び此地を觀測するならば、寺域内に微かなりとはいへ一孤墳を見出すのである（第四圖參照）。然かも古墳占據の地は、又濃厚なる土器片の散布地であり、又前述の如く墳上より輪を見出し、或ひは墳側に接して板碑の存立するを見る。更に貝塚近邊の臺上に注視すれば、先史時代貝塚は元より、原史時代遺跡として古墳及び經塚を擧示し得べく、眞に古代文化の應接に暇なき有様である。其故に此地に下降して、豐富なる文化的地歩を占得した民衆も有、其等臺地占據者との間に一脈の流動を認め得るとしたならば、其間に見出されるギヤツプこそ、彼等の生活様式の一轉機を意味するものでなければならない。　（完）

註、本篇は吉田東伍氏「大日本地名辭書」、太田亮氏「武藏」に負ふる所多大である。謹みて兩先學に謝意を表す。一九三〇、五、八、補稿

一九三〇、十、二十五、再補

ば、相對的に古式なるものが、明かに轆轤使用を受容せる埴瓮より先行形式であり、其間に時間的間隙を投影せるものたるを知得する事が出來よう（註3）然して其等の持現する個々の狀相を要言するならば、住居的構造を有する具體的態樣は接する事を得ず、殊に遺物に於いて、石器類に貧少であり、僅かに小石棒を揭ぐるに止り、又彌生式土器の形狀に於いても、單簡素朴何等の特殊的構造を見ず、寧ろ實用にも適した生活必須品なるを示し、稍後期に及んで脚部及び其系統の出現により、僅かながらも日用器以外に祭器としての用法を推せしむるのみである。されば精神的表現に於いても、他の裝飾的顯現に於いても、倒底此を進步した西日本同種文化と比肩せしむるを得ず、只製鐵技術の殘片に依つて、少許ながらも文化移動の波線を忖度せしむるのみである。されば前述石器の伴存を、本遺跡に對する文化上限の或時期を暗示するものであるとしたならば、瓦類の證徵は明かに其下限を暗示する資材と云ふべきであらう。

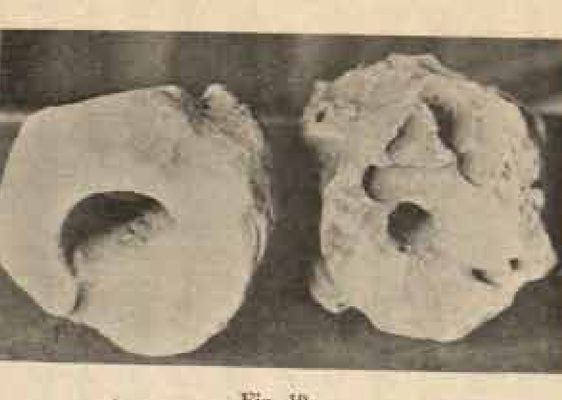


Fig. 19.

かくして吾々は少數なる繩文片の混入と、下層に占置せる彌生式土器の形態よりして、此地に移行せる對象的時期が彌生式石器時代文化の末端を想起せしめ、又他面彼等の社會的集團が周圍の環境の示す如く、漁撈に表現せられたる一グールプなるを意識し、加ふるに尙其等の民衆の生活樣式が形質的に劣弱なる勢力の保持者なる指唆する事が出來るのであつた。更に思ひを、早くも偉大なる金屬文化の曙光に目覺めて驚くべき製鐵文化の驅使に、彼等の文化的位置を强固ならしめた日に至るならば、本貝塚積成の示相も亦金石併用の文化圈に遊弋せる民衆に依つて遺存せしめられたる生活跡であつたであらう事を知る。玆に於いてか、總ての點に充實せる內包を示す西日本同種文化に對して、地域的年代的に異つた本遺跡が、其等の高き文化の流動に觸接する事遲きとはいへ、あくまでも其受容形式に於いて素朴的色彩を保ち、はた表現の形樣に於いても純化せられた地方的色調を具顯せる表證を思顧する事に於いてすら、吾々は今更ながら絕えざる時流のせゝらぎに盡きざる追惜をそゝらるゝと共に、かく隔つた環境に時空兩者の適合に依つて芽ばえた東日本彌生式文化の純性を、見出す事が出來よう。

吾々は既述の層位的の經過の示す事實に依つて、彌生式土器に對する二三の證徵を獲得する事が出來得たのであつた。今説明の便宜上其等の關係を表示するならば次示の如くなる。

第一表　A點a側に於ける層位的關係

	第一層	第二層	第三層	第四層
彌生式系統　A類				
B〃				
C〃				
D〃				
祝部系統　A類				
B〃				
C〃				
D〃				

第二表　B點に於ける層位的關係

	第一層	第二層	第三層
彌生式系統　A類			
B〃			
D〃			
祝部系統　A類			
B〃			

右表にして大なる錯覺と誤謬を含まざるプロバビリティを標示するものであるならば、多くの場合相對的に古式と認知せられるものを下層に、然して後期の彌生式を上層に伴ふ示證を意識する事が出來た。然しながら既往の業績の多くは、所謂古式彌生式と新式の其との間の並存關係を指示して、兩者並用の時期を想定せしむる場合が少くない(註1 2)。けれども本例の示現する所に依れ

して斯道の専門家の御垂教を希望する次第である。尚往々舍利瓶器を蔵めた岩石に木材を使用し、又其形狀近似せるものを見る。卽ち鎌倉極樂寺發掘嘉曆元年の銘文を刻する舍利瓶器を包藏せる其の如き此の較例である。

（三）其他の遺物

Ａ點近邊に於いて貝殼に加工を施した貝輪未製品及び其殘片各一個づゝ見出して居る。前者は蛤を使用して居る。縦長六・一糎、横長七・六糎、穿孔部の横長二・五糎、縦長二十一糎を測る（第十八圖8）他の一個は殘缺であるが、同じく蛤を使用せしものゝ如く、幅一・五糎長さ五・二五糎を算する（第十八圖7）。其他貝殼片に加工を加へたと覺しき殘缺一個を發見して居る。尚アカニシの殼を利用した匙狀を呈するものを一個見出して居るが、確然とした判定は今後の研究に待たなければならない。

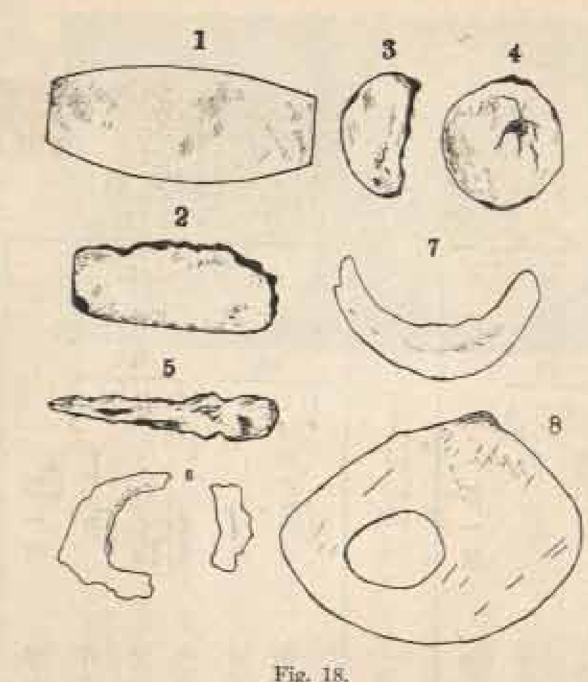


Fig. 18.

自然的遺物殊に骨片に對する考察は、他日何等かの機あらば適當の處置を施して此間の消息を明かにしたいと念じてゐるが今數本の大腿骨片と推知する稍長大なる骨片を採出して居る事を附記しよう。

一、結論

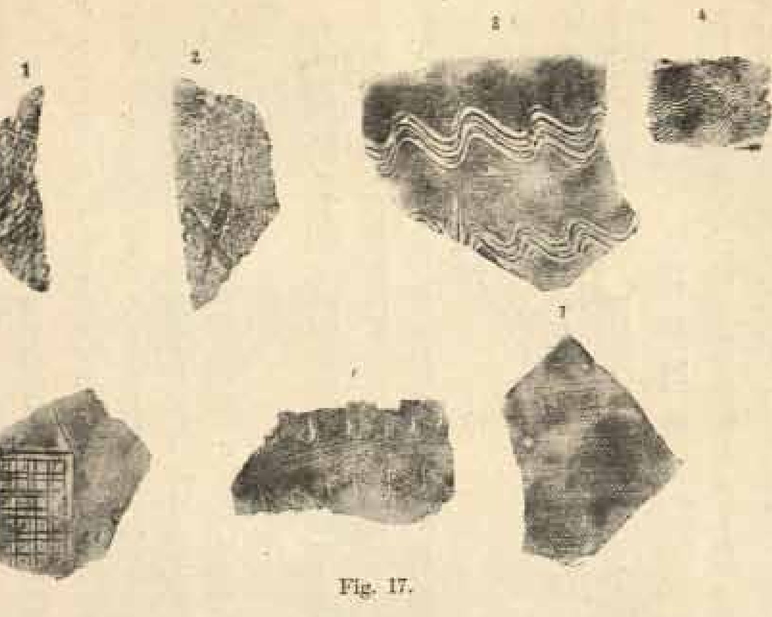
（一）貝塚の示現する文化相

以上述べる所に準じて、其總括的な記載を試みて、其等に對する二三の反省と顧慮を加へて見る。

が徑三・四糎、幅約一・四糎を算する。（第十八圖6）

鞴　後述隣接するであらう所の古墳が、建築場と僅かに小路を隔て寺域内に占在する（第四圖）。いふ所の鞴と認むべき製品は此墳上に遺存して居つたのであるが、今完形品二個破片數個を見る。中一個は高さ十八・六糎、孔三・五糎（第十九圖右）他の一個は高さ十六・一糎孔徑十糎（同圖左）共に灰青黄色を呈する泥灰狀の石質である。殊に前者の孔部邊は明かに焼火にあひ赤褐色に變じ、微量ながら鐵滓を附着してゐる。然して後者の孔部は注口狀を呈して居る。破片の石質形態等すべて同質である。此等は、かの鞴及び鐵滓を伴ふ南豆（註3）に於ける製鐵址、或ひは又生麥岸貝塚土出（註4）の鞴と相關して、興味盡きざる好題目を投與するものであらう。

扨灰黄青色を有する泥灰狀の石質は、東漸寺前面の沖合なる海底より採取する由であり、又、此石の別名を族立石と稱し、古韻掬すべき口碑さへ語り傳へられて居る（註5）。


Fig. 17.

註1　犢子窩　東方考古學叢刊第一册　六十一頁並びに圖版第五十六參照

註2　樋口清之氏　國學院大學附近の一住居趾について　武藏野　十一卷四號

註3　大場磐雄氏　南豆に於ける特殊遺跡の研究　中央史壇　十三卷八號

註4　學友黑田善次氏の所載、及び大場氏　歴史地理　四十七卷四號　論文參照

註5　昭和四年一月下旬吾々の採訪の際、此石に伴ふ傳説を聞知したが、其後樂原清一氏に依つて横濱貿易新報（横濱の傳説と口碑百二）に掲載された。尚本石材は現時東漸寺近邊の舊家に往々散見するが、此と類似する岩質の露頭に、東漸寺南方より流れ來る小川の川底を走向して居る。又一見此等が第三紀層を形成する青灰色凝灰砂質頁岩に類する感を與へるが、吾々の如きもの、推想を許さるべき領域でない。伏

註1　前掲　濱田梅原兩氏報告　四十頁參照

土製品

土錘及び土球とする。前者は小形の普通品一個と、大形品三個(中、二個完品一個半損)を數ふる。小形品は細長紡錘狀を成し赤褐色を呈するが、大形品は小圓筒狀を呈する黒赤褐色の素燒の良性である。第十八圖1は、長さ六・五糎經一・六糎。同圖2は、長さ五・五糎半徑一・一糎を算し、貫通孔を中軸として兩斷された一片であるが―形狀其他の點から、多少土錘と認定する事の妥當ならざるを思推するも、今假りに此範疇に入れ置く。A點a側の黒土層中燒土に混在して居つたものである。

後者は完品一個半損品一個とより成る。半損品は貫通孔を中樞として兩斷せられた半片で、灰白色の斑點を含んだ赤紅色、良質の燒成を有し、極めて堅緻の燒法を蒙つて居る。長さ三・六糎半徑〇・九糎、貫通孔は片刳りの進步した手法に成つて居る(第十八圖3)

完品は同圖に示す如く、高さ三・五糎經〇・八五糎、全體薄い褐色を呈し、稍不整な球形を形體つて居る。穿孔法は片刳りである。兩者ともAB兩點近接附近において見出したのである。此等の類品として大和唐古(註1)の其に求める事が出來よう。

註1　森本六爾氏　大和に於ける史前の遺跡(三)　考古學雜誌　十四卷十二號

鐵滓

既述の如く鐵屑は散漫的集積を取らず、整然たる層序を保つ硬層なる上に、強度の焔燒に依る凝結の爲、發掘の際大塊とし打截される場合が多い。其の持つケミカルな分析は、専門家の判定に委囑して、茲では吾々が鐵層及び其上層なる黒土層檢出の折上述彌生式系統中、B類よりD類の相伴的傾向强きと頻繁なりしを再記しよう。

製鐵關係品

鐵釘　B點に於いて鐵滓の集塊と混雜して存したのである。腐蝕極めて甚しく、加ふるに發見の際、何等の具體的證左に接しないため、或ひは後世の混入を保し難いが、長さ五・九糎、斷面矩形上方太く下端細長の形態を取る(第十八圖5)。所謂釘狀品を伴ふものに對しては、遠く貉子窟(註1)あり、又比較的後期に屬する遺跡よりも、共伴出を聞く事少くない(註2)。

鐵環　寧ろ鐵製環狀品と稱呼する事の妥當なるを覺ゆるが、今腐蝕の度著大にして、然かも兩斷される殘片を遺すに過ぎない

狀を施押せるものを見るし、時に徳利形の形態を見る事は、著しい注意を惹く。總數二十六個。（第十六圖五—六段）

C類土器　陶質赤黒褐色を示現する堅硬な焼法である。總數二十八個を算するが、這種土器類は、往々にして原史時代遺跡から採集する事が少くないし、又所謂高麗焼の範域に接近するらしくも感ぜられる。（第十六圖下段）

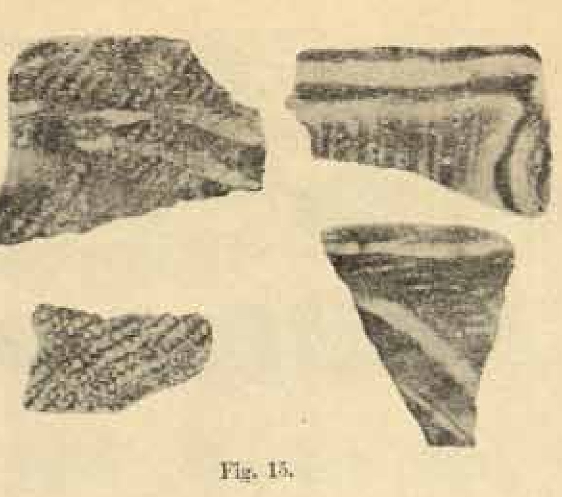


Fig. 15.

D類土器　總數八個。灰白色無文、厚さ比較的重厚である。けれども厚さの割合に比して、重量は輕減して居るし、全體的に瓦の持つ色彩を多分に表示して居る。（第十六圖四段）

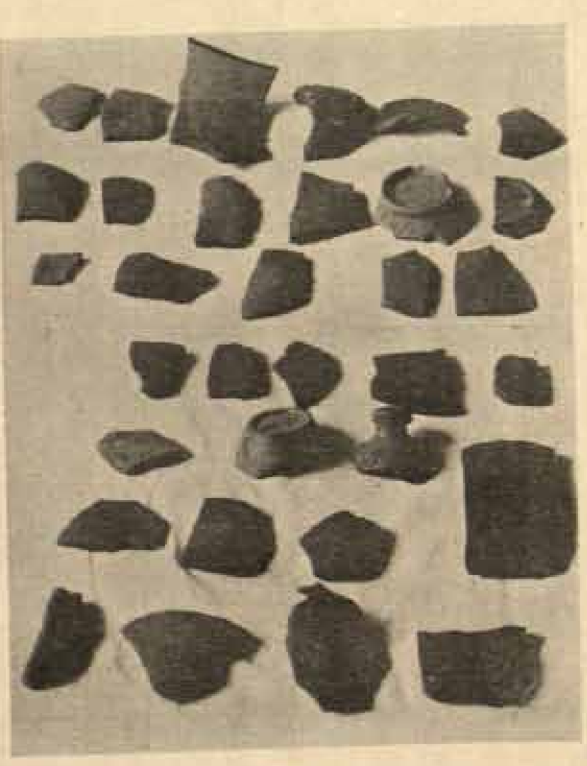


Fig. 16.

其外褐赤色を表す陶性のもの、或ひは灰青色を示す器片の若干と、青緑色を呈する磁器類の碎片を少許擧示し得る。尚附加すべきは、瓦片三個を發見した事である。中、一個は薄茶色を呈し、器面に×字狀の浮刻を穉く印して居る（第十七圖2）。他の二片は灰白色を示し、布目瓦との焼法製作全く一致し、且内面に斑點狀連續布文を押捺して居る（同圖1）。此事實は、上來屢々引例した所の金海貝塚（註1）に於ける其と更に接觸して興味ある題目を吾々に投與する。

する要を認めない程、余りにも明かなる事實である。

註1　前例に隨つて、假りに本類の數量的記載を試みるならば、底部十個、腹部七十個、口底部二十四個となる。

註2　來るべき日に於いて報告の機あると信ずる。

註3　大場磐雄氏、武藏蒲田町附近に於ける沖積層地の原史時代遺跡、歴史地理　四十七卷四號

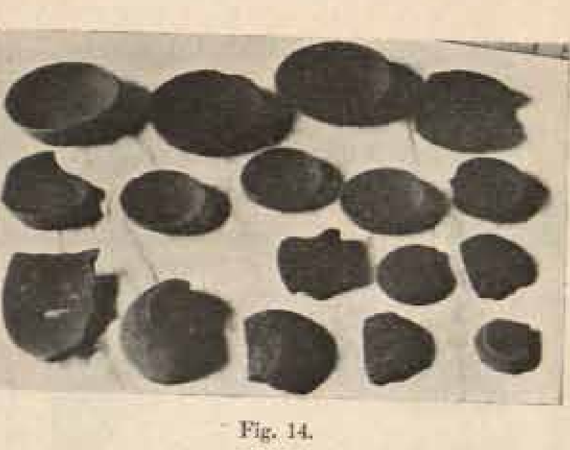


Fig. 14.

尙此等以外に屬する例として、第十二圖1 2の如き、線の巧みなる配文に依る燒成堅固、黑褐色を呈するものを檢採する。特に1の如きは、異彩を放つ作品として、多大の注意を換起するに足る。

第二種繩文系統　總數十三個中口緣部四個、腹部八個、底部一個。色調、黑赤褐色乃至黑灰褐色。文様は繩文を主として居るが、沈線且消失的傾向が強い。此文様消滅的現象は、其燒法、幾分堅硬を帶びて居る點を相關して、一般繩文土器と大なる相違を畫して居る。個々の說明と系的記載は、第十五圖に依つて充分補はれると信ずるが、第十二圖5は底部に施文せられた網代文である。燒法は赤褐色を表呈し、多少彌生式土器に近似して居る。第十五圖1は、灰褐色を呈する口緣部片であるが、一條の隆起紐條帶を緣部近く廻らして、其下に殆ど消失した繩文の痕跡を止めて居る。

第三種祝部系統　それ〲の示す性體より次の如く分別する。

A類土器　一般に稱呼せられる祝部土器とする。今稍見るべき破片七十九個を算し、此に碎片を加ふれば百十余個となる。中、底部十四個、口緣部七個、他は總て胴腹部片である。色澤は灰白色若しくは青黑色を呈し、往々にして釉藥の施置を蒙り、青綠色瑠璃狀の物質を器面に表示するものさへある。文様的作法として波狀文を主とし、加ふるに少數の網文及び內面に打出文を伴ふ。口頸部は復合をなして輕く外反するものが多い。底部は殆ど緣底より成る。（第十六圖A第十七圖3 4 6 7）

B類土器　陶質磁器性にして、黑青綠色を呈し、施釉を受くる事顯著である。大體無文を主とするが、第十七圖5の如く格子

個の破片を認め得る中、一個の高坏形土器の臺脚部片を檢出する。本類が朝鮮金海貝塚（註1）出土の共に類似し、更に東海地方の後期彌生式貝塚（註2）の類例と、連關する事を知るならば、又以つて興味盡きざる何者かを見出すであらう。

註1　濱田耕作　梅原末治兩氏　金海貝塚發掘調査報告　二十六頁

註2　中谷治宇二郎氏　日本石器時代提要　百五十頁—百五十二頁

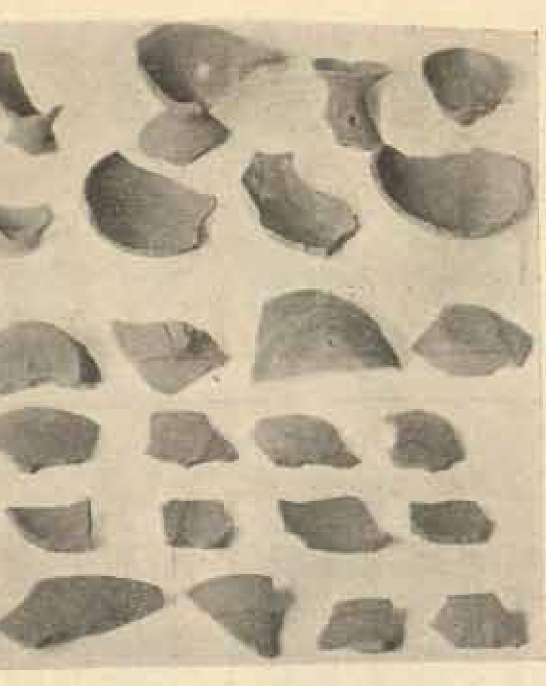


Fig. 13.

D類土器（註1）一般に埴瓮器と呼稱せられるものである。層位的に上層に占置するを常とし、燒成軟弱、色彩黃褐色、無文、轆轤の跡歴然たるもの多く、概して器形縮少せられて小形となる。卽ち小甕、坩、坏、盤等の形態をとり、古墳出土品との間に極めて近似的關係を示す。此中完形と認むべき坏三個、盤四個、略形態を推知すべき坏四個、小形甕一個（高さ七・九糎底經三・一糎）を見る。今完形なる坏盤の數的表示を揭出するならば左の如くである。

品名	高さ	底徑
坏	三・四糎	九糎
同	三・四糎	八糎
同	三・一糎	八・一糎
盤	二・一糎	四・九糎
同	一・七糎	六・三糎
同	二・一糎	五・五糎
同	二・一糎	六・五糎

底部は殆ど平底であるが、盤の中には不安定な丸底をなすものがある。其他の性狀に關する點は、第十四圖に依つて見られたい。

本類が橫濱に存する原史時代遺跡（註2）竝びに多摩川流域沖積地遺跡（註3）の遺物と、密接なる關係を有する事は、此處に論

個)と、口縁邊端に網狀印刻(第十二圖3)を施せるもの、外(一個)、他の總ては何等の構造を見ない。今既述の後を受けて、全般的にA類と稍異る所を掲出すれば、底部に木葉文の押捺をみるもの(實體文を施附して居る)、赤色顔料を塗彩せるもの、鋸齒狀文を施せるもの(一個)高坏形のプレッシュな發達を見せて透孔の表れるもの(脚部に四孔或ひは脚部と坏部とを貫く臺脚の中央内部に一孔を貫通する)、等の諸點を知る。其等に對する説明的記載は第十一圖第十三圖の挿圖に依つて、知得せられるであらうと信ずるが高さ七・八五糎、口部最大徑八・三糎、腹部最大周二十六・一糎を測る黝褐色刷毛を附す椀形土器と、高さ十・九糎、底徑三・四糎、口部最大徑六・九糎、全面滑澤、色彩赤褐色を呈する壺形土器を知見する。又以つて本類の形態を窺ふに足る代表的遺品である。其他高さ九・一糎、底徑四・六糎口徑七・九糎、腹部最大周二十八・一糎を測する小形甕を見出す。全體黝黒褐色を呈し、刷毛目を施す。

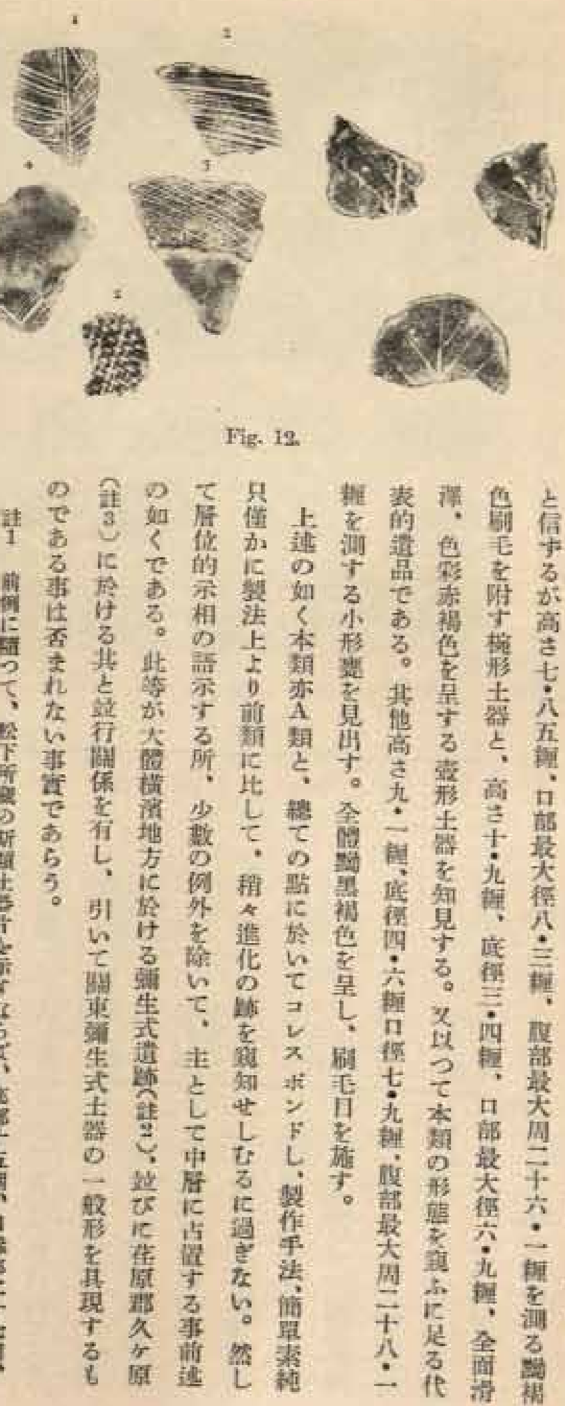


Fig. 12.

上述の如く本類亦A類と、總ての點に於いてコレスポンドし、製作手法、簡單素純只僅かに製法上より前類に比して、稍々進化の跡を窺知せしむるに過ぎない。然して層位的示相の語示する所、少數の例外を除いて、主として中層に占置する事前述の如くである。此等が大體横濱地方に於ける彌生式遺跡(註2)、並びに荏原郡久ヶ原(註3)に於ける共と並行關係を有し、引いて關東彌生式土器の一般形を具現するものである事は否まれない事實であらう。

註1 前例に隨つて、松下所藏の新類土器片を示すならば、底部十五個、口縁部二十七個、腹部三百五十四個、脚部十五個、合計四百十一個となる。

註2 近き將來に於いて、横濱彌生式遺跡遺物の報告を、新なる資料に基づいて發表する事を期して居る。

註3 中根君郎氏 武藏國荏原郡池上町久ヶ原及びその附近に於ける彌生式遺蹟 考古學雜誌 十八巻七號 東京府久ヶ原に於ける彌生式の遺蹟遺物並にその文化階梯に關する考察(一)(二) 中根君郎 徳富武雄兩氏 考古學雜誌 十九巻十號十一號 尚久ヶ原に對する論考は本年八月に於ける發掘經過を基礎とし、他日報ずる機もあらうと信ずる。

C類土器 燒成堅硬、黒灰褐色乃至褐色無文、一見彌生式と祝部との中間形を思測せしむる硬質な製法である。今總數五十一

ふ小形壺と、黑赤褐色刷毛目を附する高さ九・一糎、徑三・五糎の小形壺の半損品とを見る。兩者とも總て燒成粗雜、手捏の古拙的作品であるが、A類土器のティピカルな委樣を窺知するに足る。

扨、斯類土器の層序的關係に關しては、旣述の如く多少の例外を伴ふけれども、主として下層より中層の間に占置して、殆ど上層に占存するを認められない。此現象は種々の點にて類似的傾向を持つ朝鮮金海貝塚に於ける共と、明かに違反するけれども(註2)含有土器中黑褐色素燒(註3)と記せるは、稍本類との連係を認め得べく、かの三重縣柚井貝塚(註4)との比較も亦可能と信ずる。

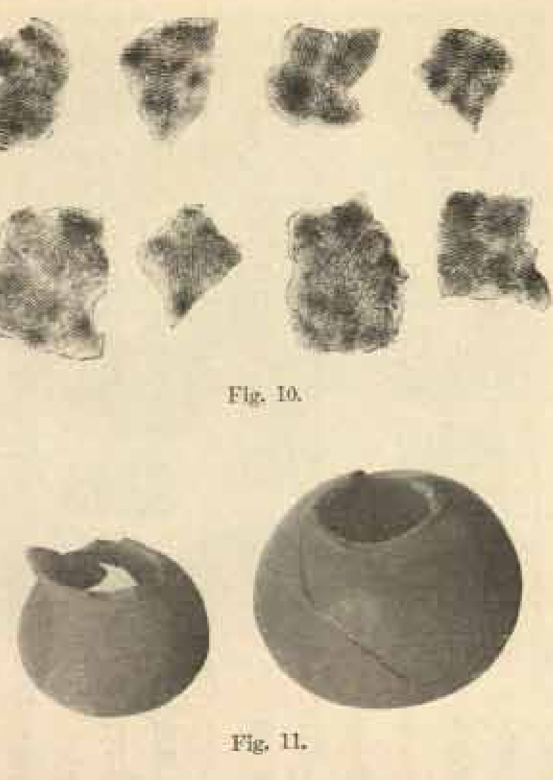


Fig. 10.

Fig. 11.

註1　種々の事情の爲今僅かに全彌生式土器片の數的表示たる揭出する事は出來ないが、假りに松下所藏の共に對する數量的關係を示せば、全數七百九十七個中、斯類土器は二百七十個、中底部五個、口緣部二十個、腹部百七十二個、高坏形土器脚部七十三個となる。

註2　濱田耕作　梅原末治兩氏　金海貝塚發掘調査報告　六頁二十四頁

註3　前揭書　二十七頁

註4　鈴木敏雄氏　三重縣桑名郡多度村柚井貝塚識考　考古學雜誌　十八卷十號

B類土器(註1)形狀其他大體A類に等しいが、燒成稍緊硬を帶び、色調黑褐色を遠ざかつて赤褐色又は黝灰褐色に近づく。然して器面には、幾分磨澤を加へられて滑澤の素質を有するものを指採する事が出來るし、文樣は漸時消失的傾向强く、刷毛目文の要素も頗る單化して、其施文法も僅かに竝行的に押捺されるに過ぎない。然し有文片は全的に僅少で、無文片比較的多數を占め、A類が有文を伴ふ必然的表出と明かに大きな差異を示して居る。器形はA類に等しいが、鉢形、皿形、坩形の形態を新に見られ、器底も平底に混ふるに緣底(一個)を現出する。口緣部に於ける手作は、僅かに口緣部邊端を著裝する帶狀緣部(二條の隆起縱行部と竝行二沈線が刻まれて居る)片(一

註4　其に對するテイポロジイの上から見る考へ方は別問題として、此場合私達は、近畿地方に於ける顯著な彌生式遺跡の一つである、和泉四池から見出された石製男根と照合する事に依つて、新なる反省と省慮に識されるであらう。　直良信夫氏　和泉四池出土の石製男根について　考古學雜誌　十八號十二號

土　器

大別して第一種彌生式系統、第二種繩紋系統、第三種貶部系統とする。左に其等に就いて示述しよう。

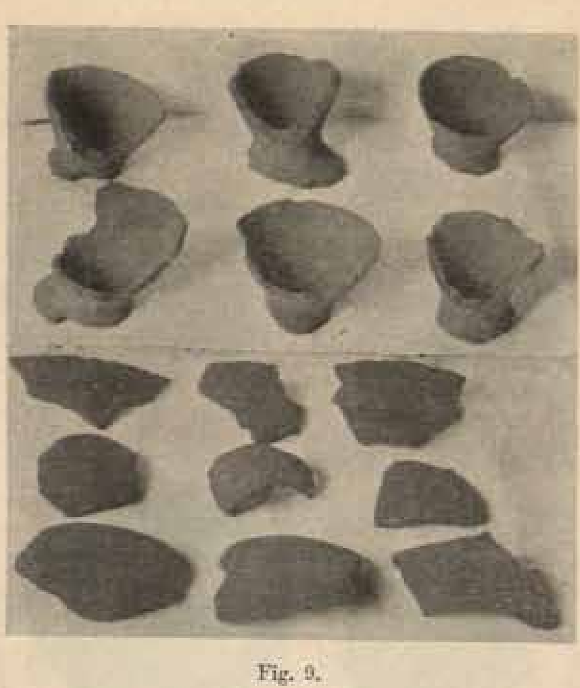


Fig. 9.

第一種彌生式系統　此を説明の便宜上、更に個々の示す性狀に依つて、次の如く分別する。

A類土器　全體を推知し得べき器片は極少であるが、胴部腹部片最も多く、口部、肩部、脚部片之に次ぐ（註1）。主として燒成粗雜、色調黑赤褐色乃至黝褐色、厚度〇・四糎より〇・九糎を限度とし、表裏兩面に刷毛目文を施押する。器形は壺形、甕形、高坏形、椀形等を示し椀形を除く三者最も優勢である。然して器形に見る特殊的構造、竝びに手法的極致を透視し得られる證示は全く認められず、寧ろ文樣の單調な素材と相俟つて、兩者よりよきコントラストをなして居る。器底は殆ど平底、口緣部樣式も其器緣の示す所よりして上斜外曲口多く、器形又他類に比して大形品を推想せしむる器片少くない。斯くの如き古樸素朴なる一般的態樣よりして、只強いて求むれば、高坏形土器脚部片の稍多き（七十三個）點より推して、斯種形式の侮るべからざる潜勢力を窺はれる點と、口部邊に波狀的所作を試施せられたる大形器片、或ひは僅少ながらも輪積法及び卷上法を施行せるものを檢探せるを、比較的注意すべき表出として指摘する事が出來よう。

A類土器の主用なる形態及び文樣は、第九圖、十圖、十一圖等の挿圖に依つて自得せられ樣と思ふが、完形と認むべきものとして、第十一圖1の如く、高さ十・一糎、底徑三糎、口部最大經六糎、腹部最大周三十一・三糎を算する黑赤褐色、刷毛目文を伴

石棒。全形の姿態頗る整ひ、表面極めて良好に磨研せられた精製の小形品である。一面の頸部の邊は半損し、又全體搔損狀をなす痕跡と、小打痕の形跡を認める。石質は粘板岩（註1）よりなり斷面圓形。長さ十一・六糎幅二・六糎。下部に位する一面は、鋭利なる器具を以て削平せられた如く、斜狀に削剝されて居る。

全體の均整的な姿相から、石棒と石劍との中間形を思はせない事もない（註2）。出土狀態不明に屬するが、A點の中央部に於いて、採掘貝殼に混じて占在した由である（註3）。本品を彌生式に表徵せられる遺跡に確存した表示は、重要視すべき一事實であらうと思ふ（註4）。（第八圖2）

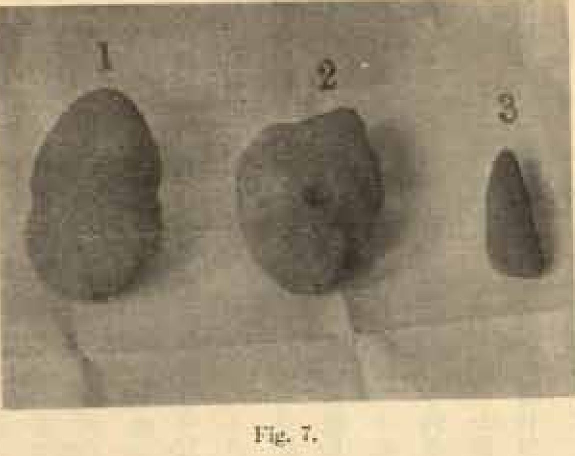


Fig. 7.

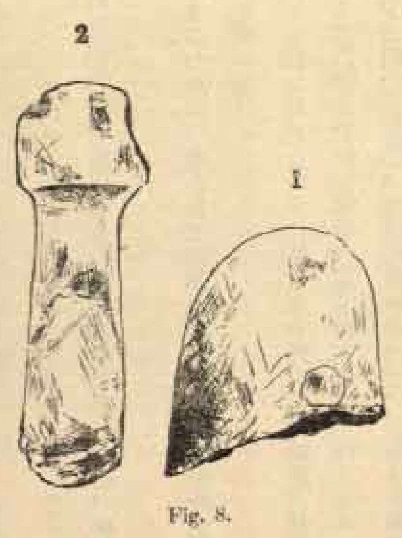


Fig. 8.

打石斧未製品、黒耀石片、石屑等に關しては述べる要はないが、それ〳〵の面に、與へられた打製痕を追求する事が出來て、明かに加工を加へられた證跡を示して居る。

原石、石屑片は少くないが、其材石を見ると、硬砂岩、砂岩等其外種々の石質を使用して比較的豐富な岩材に惠まれて居つたであらう事を推想せしむる。黒耀石片は僅かに一個であるが、又以つて本遺跡の文化的地步を想到せしめるに足る資料であらう。

註1　橫濱に存在する諸貝塚から、粘板岩質の石器を見出す事は、比較的少い傾向を持つて居る。

註2　所謂石棒と石劍の中間形と思惟すべき精製品は、鳥居博士の信州に於ける貴重なる業績を拜讀する事に於いてすら、尚且二三の資料を提供せられる。故に茲では手近の所で、保土ケ谷帷子貝塚に於ける其に注視するに止めよう。　八幡一郎氏　保土ケ谷貝塚雜記　人類學雜誌　三十八卷四號

註3　工事監督美濃部技手の言に據る。

横濱市杉田東漸寺貝塚の研究　（三）

尾形順一郎
松下胤信

（一）人爲的遺物

石器

挙げ得べき種目として、打製石斧未製品一個、同種類品二個、磨製石斧未製品一個、凹石一個、錘石一個及び石棒一個、其他黒耀石片、原石材料、石屑等を數ふる。

其等の包含狀態に對しては、不幸にして知り得なかつたが、主としてAB兩點に於ける採掘堆土竝びに貝殼を檢診の際見出したのである。左に順を追ふて個々のものに關し説明を與へる。

打製石斧未製品。上端細少にして、下端に及ぶに從ひ厚さを增す。然して全體の形様鈍重、且磨滅の度甚しい。石質は不明に屬するが全體黄味を帶びた灰黒色、今長さ十二・二糎幅三・七糎を測る。（第七圖3）

磨製石斧未製品。長さ五・六五糎（中央部）幅四・九糎（中央部）。斷面楕圓形を呈し、石質は閃綠岩質と覺しきものを用ふる。A點に於いて、積載された貝殼中に見出したのである。（第八圖1）

凹石。長さ十六・一糎幅十・九糎一面に一穴、他面に大小不整の數穴を見る。石質は灰青黄色を呈示する泥灰狀の岩質であるが、後述する製鐵具も亦此用材をもつて充てられ、いはゞ本地方を代表する岩材と云つてよい。（第七圖2）

錘石。大形品で長さ十六糎幅六糎を測る。略中央部と覺知する邊端に、輕いクビレを作る。下部に當る尖端から兩腹面にかけて、紐狀の溝が一條緩やかに走つて居る。建築場に隣接する寺域内の叢林中に貝殼と混在して見出したのである。石質は硬砂岩と感知せられる。（第七圖1）

り東印度群島ではかゝる石鏃はバクソニアン期のものよりも古い事を右の層序的關係からも、ジャヴァの場合からも、知り得たわけである。なほ第六圖は氏から寄贈されたジャヴァ出土の石鏃の寫眞である。寫眞でも判る樣にジャヴァ出土の石鏃と日本出土の夫れとが全く同一型である事を認め得ると共に、氏の知る限りではかくの如きタイプの石鏃が南東アジアの他の處に全く出土しないと云ふ事を理由として、これはまさに日本からの文化の波を物語ると斷言されてゐる。

若し夫れ氏の論の如く此の石鏃にして日本からの文化の影響に依るものであるとするならば、東印度群島、特にジャヴァの石器時代に於ては、その層序的關係の示す事實に依り、相對的年代の最も古き文化期が日本の石鏃の代表する文化期に相應することとなり、日本の石鏃に關する知識は、軈がて此の地方の層序的系列に、解明の根據を與へることゝなる譯である。然し乍ら日本の石鏃に關しての所謂型式學的研究や層位學的研究が、その解決に充分な程には進んでゐないのを憾みとする。そしてかゝる石鏃が日本の石器時代の相對的年代、層序的系列の如何なる地點に位置すべきかを、はつきりと論證する暇は今こゝに持つてゐないのであるから、これは氏の斷定の當否と共に之を後日の研究に期するの外ない。

ことにかゝる現象は文化移動論者にのみ有力なものでなく、却つて文化獨自發生論者にも論據を與へ得べきであるに於ては輕々に論じ去るべき性質のものではあるまいと思ふ。

以上で私の拙ない紹介的論文は幾多の不審を殘した儘終ることゝなるが、參考書に乏しい私には、全く分不相應なことであつたのに氣付く。而もなほこの粗末な、不充分なまゝの紹介を敢えて發表せんとする所以のものは學界に向つて、此の地方に就いての考古學的な關心を促すと共に、又氏の論文自體の含む幾多の疑問の箇處と、私の紹介が遭遇した尠なからざる不審の點とを先輩諸賢の吝みなき御教示の前に晒して、それ等の闡明を期したい爲である。（終）

——一九三〇・八・二〇——

の論據の確實さを增すことに努められてゐると共に、此の地方の石器時代の文化層を、氏自身が或る洞窟で發掘された結果に依って、次の四層に分たれ、その層序的關係を闡明されてゐる。そこで私も、今それに就き些か說明を試みて、私のこの稿の目的を充分ならしめたく思ふ。それは卽ち、

第一層―鐵及び青銅器と新しい土器

第二層―新石器時代末期の磨製石斧及土器。石鏃なし。

第三層―石器も土器もなし。利器は總て骨角製品のみ。

第四層―第五圖、(い)と同樣の石鏃を上位から、(ろ)と同じ石鏃を下位から、(は)と全く同じものを最上位から夫々出土する。土器の出土全くなし。

但、第五圖に示すものは日本出土、すべてマンロー氏著「史前の日本」に據る。

Fig. 5.

Fig. 6.

この第三層の骨器は、印度支那に於けるバクソニアン型の骨器（第三・第四兩圖と）伴出するものと同じである。卽ちバクソニアン期に屬せしめらるべきものである。

然るにジャヴァでは同じ骨器は右の日本出土の石鏃（第五圖）と同じ新石器時代石鏃（第六圖）を含む層の上の層から出土する。つま

二層のタイプは、寧ろ粗な形をしたジャヷァの石器から派生したものである。この粗な、ジャヷァの石器と云ふのは、東印度群島の西方部に出る最古の新石器時代のタイプを代表するものである。氏は更に深く之を研究して他の面も、もつと興味あるタイプのそれと近しい關係にあることを知られた。卽ちそれは明白な梯形の横斷面を有し常に殆んど總て手ごろの大きさをした石斧である。而も悉く眞黑な、そして肌の細い接觸變岩で作られてゐる。氏は此れと全く同じタイプで、同種の石から作られてゐる石器が、マニラのH・O・バイエル博士の蒐集品中にあるのを見出だされたのである。

ところが、東印度群島の西部とフィリッピン群島とには普通、たゞ纔かに舊石器的なものと、最も古い新石器時代文化階程に屬せしめらるべきものとしか出土しないのであるから、右に述べた様な特種な型の石斧は、新石器時代の中でも、比較的古い時代に實際、屬すべきであつて、決して共地方各々で獨自に發達して、その結果出來たタイプとは考へられずして、むしろ南東アジアの新石器時代に共通なものである様である。ともあれ、かゝるタイプは非常に興味あるものであるが故に、從來よりは一層綿密な注意が拂はるべきである。

右の氏の説明では角岩と接觸變岩とが、同じものとして取扱はれてゐるが嚴密に云へば、何人も知る如く岩石學上別個に分類さるべきものである。

以上で、氏の論文を骨子とする、東印度群島の石器時代の概要の紹介を終るのであるが、前にも申した如く、これは全く「表」の體裁のものである爲、論は甚だしく斷片的たらざるを得たかつたのを見る。而も私の拙ない說明は、それを解明するといふよりは寧ろ冗長になし、なほさら、斷片的にした憾あることを否めないと思ふ。かくの如く斷片的ではあつたが、然し乍ら氏の論說の根本をなすものは東印度群島には從來の說の如く半島經由の大陸文明を認め得ると共に、他に北方からの文化の影響を認め得るとなす論旨であつて、それ自體刮目に價するが、ことに日本からの文化の影響を、あとづけ得るとなす點は我々の關心を喚起するに充分である。而してかゝる氏の論旨の紹介こそ、我が學界をして此の地方に就いての考古學的事實に眼を向けしめるに役立つものであらうと信じたが故に、私は遲筆を運んで來た譯である。

然るに氏は、氏のこの論旨を更に徹底させる爲にか、最近濱田教授に寄せられた私信の中に新たな知見や、他の事例を擧げてそ

而して右の諸事例は氏に從へば、即ち、北方からセレベスに渡來した文化の波を示すのであつて、東印度群島の東部に於ける北方からの影響の他の例を示すものである事は最も信ずべきであると云ふのである。

然しこのタイプのものは太平洋諸島中の幾何かの島々に於て知られてゐるものと同じであつて密接な關係を相互に認むべきである。

氏は此のタイプの石斧に於てのみ太平洋諸島を參照されたが、私は前述のドラヴィダ型石斧もソロモン島に存在するのを A. Handbook for Visitors to the Bernice Pauahi Bishop Museum の第三十四圖に依つて知つた。共に相互の關係を暗示するものであらう。

又氏はポリネシア人が太平洋方面に擴つた時にフィリッピン群島を經由したか、どうか、と云ふ疑問を掲げて、その解決を彼等の祖先の西方から太平洋へ移民した時の事を歌つた歌謠の中に求められてゐる。

即ちその歌謠の中に彼等が通過した或る國についての歌がある。その國には二つの相異なる住民がゐて一つは黑色、未開であつて森林中に棲息し中間通しは互に親密だが外部のものに對しては、むしろ粗暴である。そして他のものは美しい皮膚をしてゐて、高度の文化階程にあり、而も熟練した農夫であつたと、云ふ事を歌ひこむでゐる。

こゝに於てフィリッピン群島に於ける未開のネグリート族と、及び、米作に長けたるインドネシア族に就いて思ひ出さねばならない。そして移住の道順に關するこの種族の持つ說話は、上に述べて來た石斧が示すと同樣の事實、即ちそのフィリッピン群島を經由して太平洋諸島に擴散したと云ふことを示すのではなからうか? その正、否は氏と共に私も此の方面の專門學者に一任するの他ない。

(四) 角岩製石斧 (Hornrock Axe)

此項も又飜譯的な紹介である。

氏は曾て、南東アジアの新石器時代の年代觀に就いて小論文を發表されたことがあるが、その際、特種な型の石斧に依つて、特色づけられてゐる四つの相異なる文化層を分つことを試みた。その第一、第三及び第四の各層は、前に參照した Dr. R. von Heine Geldern の所謂ドラヴィディアン型、東インドネシア型及び西インドネシア型の各タイプの上位に夫々まさしく位するものであり、第

れてゐる。同じニューギネアに發源を有すると想像される南方説であり乍ら、鳥居博士の想定さるゝが如き道順と、ボルネオ・フィリッピン等を經由して黒潮暖流に棹さすとする行程とが考へ得ることを知り、日本出土縄紋土器と類似する土器がニューギネアにも存在すると云ふ事實そのものと共に注目すべき事と思ふ。だが、想定されたる傳播路に於いて、あらゆる地理的條件を根據とすれば、博士の云はれてゐる道順を根幹と考へる事は、たとへ不可能と云へなくとも、不自然なものになりはすまいかと私は考へる。それはとにかくとして從來我國では南方からの文化の渡來がこそ最も「プロバビリティ」のある説として行はれてゐたのであるが、スタイン・カレンフエルス氏の考察の如く、從來のそれとは反對に、石器時代のある文化が日本に源を發し南下し東印度群島や、ニューギネアに及むだとするが如き説は、恐らく氏に於て初めてであらうと思ふ。而してこれは歴史時代に於ける種種の事例を以て逆に推測するを得るとすれば必しもあり得べからざるの事ではなく、況や考古學的事實の、之を證據だてるものあるに於ては、頗る傾聽に價する問題であると思ふ。

(三)　フィリッピン型石斧　(Philippine Axe)

このフィリッピン式石斧に關する記載は、不幸にして手許に一冊も參考書がないので、全く氏の所説の飜譯的紹介に過ぎないものである。

蘭領印度の史前關係遺物としては、僅かにセレベス出土の奇妙な石斧があるのみである。この石斧につきては、氏に依るとA. B. Meyer と O. Richter の共著 Steinzeit in Celebes 及び P. W. Schmidt の紀念論文集中の Heine Geldern 論説 Ein Beitrag zur Chronologie des Neolithikums in Südostasien. の第八圖に詳しいそうである。

扱てその基部全體が、明らかに、突刺用の目的で、打ちかゝれてゐて、他の種類のものよりは薄くなつてゐる事が此種石斧の特色である。

全く同種の例品を香港 Dr. Heanley の蒐集品中にあるのを氏が發見されてゐる。

又マニラの Prof. Dr. Otley Beyer の蒐集品中にも同型のものや酷似してゐるものが可成り多數あるが此等の中にはその基部に於ける打ちかきの部分がなくて、その幅廣き一面に小さな稜が作つてあるものがあるそうである。

こう云ふタイプの石斧がフィリッピン群島に澤山あるので氏は「フィリッピンタイプ」の名稱を附したのである。

だが私はこゝにフィリッピン群島から此種石斧の出土例が一つも知れてゐない事を强調しておき度い。何故ならば、印度からの文化の流れが馬來半島を經由して東印度群島に及むだとする從來の說に於いて、その途中に同種のものが全く出ないと云ふ事實がその論據を薄弱ならしむるものであるならば、フィリッピン群島に出ない事は同じ程度に氏の立論を妨げるものではなからうか。ことに臺灣・琉球でこれが出土したと公表されたことを知らない今日、尙ほ更らその感を深うする。然し又同時に從來の說を肯定するならば亦氏の說も同じ程度の「プロバビリティ」を以て認容さるべきである事は勿論である。

而して、かゝる文化移動に關する立論に當つては更に地理的條件、ことに今の場合海流の關係及び連絡路にあたるべき島と島との間の距離等々を考への中に入れねばならないのであつて、此に關しては我邦の人類學、考古學、比較言語學、等の諸先輩が旣に早くから種々論證を試みられたことではあるが、强く流れ、速く走る、黑潮暖流は常に南方から北方への文化傳播說に有力な論據を與えて來てゐる。

別して赤道直下獨自の海流現象、及びその海流が陸塊に衝突して北半球に於いては、東北方へ向ふ現象の如きは、決して氏の北から南への文化移動の說を助けるものではなくて、却つて南から北へのそれを暗示するものではなからうか。

勿論、臺灣、フィリッピン群島及びボルネオ島へと想定さる文化移動の路は、その各々の間を點綴する島嶼の配列に依り、海流の示す不利な條件を超越することが出來るであらうし、又、以下記述紹介する樣に、他の數個の例證が更にその蓋然性を增すではあらうけれども、決して從來の馬來半島を經由したとする文化傳播の說より有力であるとは未だ思へない。從つて今のところ東印度群島に浸透したすべての大陸文明が、幾許かの波をなして馬來半島から渡來したとする從來の說の、必しも絕對的のものでなく、同時に北方から渡來した文明をもあとずけ得ると云ふことを知つて、更に有力なる證明を將來に期するのほかあるまいと考へる。從つて、今、鳥居博士の高著「有史以前の日本」のうちに紹介されてゐるジョイス(Joyce)氏の論文に依つて、日本出土の繩紋土器と酷似してゐる史前の土器がニューギニアに出土することを知るのは興味多い譯であるが、それについて、博士はそれに現はれてゐる心理狀態と、兩地を連絡する路―博士にあつては我が委任統地に屬する島嶼―に考古學的證明のギャップの存在することを理由とされて兩者は全く別のものであるべきを主張されてゐる。それと同時に若しも交涉ありとすれば南方から日本への文化傳播の說がこそ證明さる可きであると附加されては居るが、結局兩地の間が繫らぬ限り斷案を避けると云は

今日でもニュー・ギネアのパプア人が特種な形をした石斧—即ちその横斷面に於て楕圓形又はレンズ様の形をなし、而もその基部が尖突な石斧—を用ひてゐることは、その分布の世界的なることと共に周知のことであらう。然るに東印度群島附近では、西の方は印度及び東北方の日本にあることが判然としてゐる外、從來ニュー・ギネアと、此等との間には分布の上に「ギャップ」があるとされてゐた。

印度のそれに就いては J. Coggin Brown 氏の "Catalogue of the Prehistoric Implements of Indian Museum" Calcutta に寫眞が載せてあるそうであるが、今手許に持たぬ爲にそれを示すことの出來ないのは遺憾であるが、日本のそれは今更ら云々するまでもなく、M・G・マンロー氏の "Prehistoric Japan" 中に既に指摘され寫眞が挿入されてある。遠州式石斧と云ふ人もある位で遠州附近に分布が濃密であるらしい。此等がドラヴィディアン型石斧と呼ばれるのは、デカン高原の住民ドラヴィダ族の名に由來するもの、印度のそれを基にされてゞあらう。それはとにかくとして、印度及び日本の二國と、ニュー・ギネアとの間の如何なるところからも、此の種石斧が出土したと云ふ事が公表されたことがないのであるが、果して然らば一體パプア人は何處からその特種な石斧を得たであらうかと云ふ事が、氏に於ては問題となつて來る。之に對して氏は次の諸事實を基礎として一つの考察を試みられてゐる。

暫らくグアム島にあつて、Bishop の博物館の爲に蒐集に從事してゐた Hornborstell 氏は同島で全く同種の石斧數個を手に入れられた事を氏(Dr. Callenfels)に語られたそうであるが、氏自身の家藏品中に北セレベスの Minahassa にある史前の古墳墓出土の二個の此種石斧を有し、他に同所出土の數個の例を知つて居られるとのことである。

此等の新事實を基礎として氏は、パプア人の石斧は—假令現在のところフィリッピン群島に於ける同種石斧の出土例が全然知られてゐないにせよ—その起源の日本にある事を自ら示すものであるとなし、從て北方から東印度群島に入つた文化の波を示すものであると結ばれてゐる。

そして、從來この印度群島に及んだ文化は數個の波をなして馬來半島を經て四方から浸透して來たであらうとは常に想像されてゐたことであるが、然し右に述べた北方からの影響が證明されたとすれば、それは東印度群島のみたらず亦フィリッピン群島及び太平洋の各部分に亙つての文化傳播に關する多くの問題を模様更えするであらうと附加されてゐる。

然し乍ら今日まで知られたところによると眞の新石器時代に屬する石器は常にかくの如き骨角器を含む層を、覆ふてゐる層位からのみ、發見されてゐる許りであると云ふ事實は、判然と云ひ得る。





Fig. 4.

次に少し以前のことであるが Schürmann 博士がスマトラの東部海岸の貝塚から骨製品の出土したことを報告されたことがあるが、而もこれは博士に從うとバクソニアン期以前の文化階程を示すところの舊石器タイプの石斧を伴うのみである。

而も世界の各地方で明らかにされてゐる樣に新石器時代に先き立つてその使用器具の大部分は磨製の骨角器であつた時代の存在を信じ得る。

故に此の地方の當時の人々は「磨く」と云ふ術を石斧に應用する以前に先づ骨や角を磨くことを學んだのであると云ひ得る。

これが氏の論理である。その前提をなす諸事例即ち氏の結論を導く理由の數々に就いて、一々詳細な吟味をなすことは今の場合不可能であつて、例へば、世界各地に於て新石器時代に先行する磨製骨器使用の一期の存在を斷定する事等議論としては面白くとも、事實果して普遍的に認められるかどうかを疑うのであつて、むしろ世界各地と云はずに、一特例としてかくの如き現象は考へらるべきではなからうかとも考へるのであるが、それ等の議論は他の機會に讓ることゝする。それはとにかく氏のこの結論は軈て次の問題を生む事になるのは當然である。

假令右に述べた樣なことが確實に證明されないにしても、バクソニアン型の石器の有する先端の磨研は、外部の影響に依るものであるとすべきか、又は舊石器時代の文化階程から骨を磨いてそれを主要利器とする時代を經て、此の地方獨自に發達したものとすべきかの問題を提出する。

（二）ドラヴィディアン型石斧（Dravidian Axe）

へようと思ふ。

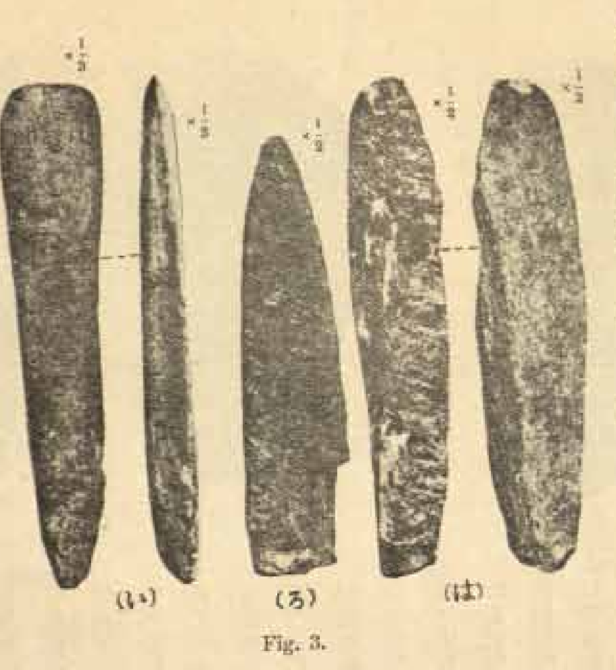


Fig. 3.

第三圖(い)は Trieng-Xen 出土のもの、地表下七十センチメートルのところから出たもので、バクソニアン型石斧と同樣に中間期に屬せしむべき層位的關係にある。長さ十九センチメートル半で、寫眞は正面と側面をあらはす。基部より刄部にゆくにつれて大となり全體滑であるがたゞ、基部に近く捲滅の痕跡があつて狹く圓味を帶びてゐる。そして兩面に削りとられたあとがあるが刄部は一面のみが磨かれて切剪の用に耐えた樣である。刄部に近く五乃至一ミリメートルの長さの九本の條線の整然と直線をなして並んでゐるのを認めるが、その意味するところは不明である。

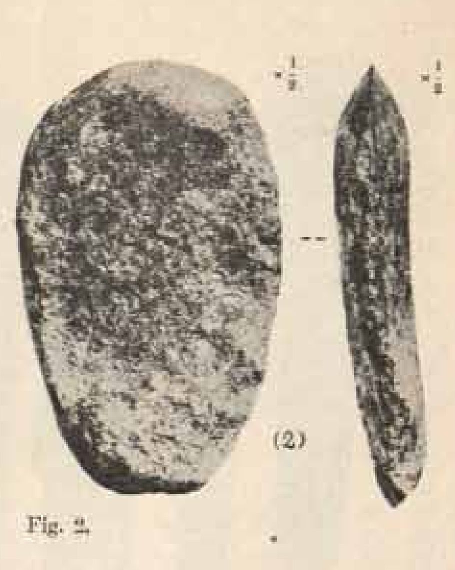
同圖(ろ)も亦同じく Trieng-Xen 出土で中間期のもの、長さ十三センチメートル、小刀子の一種であらうか。全面を被覆してゐるのは石灰質の塗抹物である。

同圖(は)は、亦同所出土のもの、右の兩者よりは古い文化期古拙期のもので地表下一メートルのところから出てゐるが、參照の爲に附加しておく。第四圖は骨、Lang-Néo 出土のもの、一種の扁平な篦の樣なもので前者と同樣、廚房の殘滓物の石灰質物が固く被覆してゐる。この篦狀の形は前述のバクソニアン型石斧のパレットナイフの樣な形と相應するものである。而して此等の遺跡は共に洞窟であるがその窟内にとくに廚房の殘滓物の多量に堆積してゐるところがあるので、斯の如く器具が固くその石灰質分で覆はれてゐる譯である。扨て次に又氏の言葉を聞こう。

然るに一方亦ジャヴァの東部にある洞窟からも同種の骨製品が出土するが、ジャヴァの場合には、印度支那等の樣にバクソニアン期の石器を伴出することなく、却つて石器の全く用ひられてゐない文化階程を表はしてゐるのであると云ひ得る。從つて石器時代の相對的年代の如何なる位置にジャヴァの場合があてはまるかを決める事は不可能である。

の中間期に相當する層から出土してゐる。

次に(2)は原物の二分の一大のもの、正面と側面とをあらはすが、(1)よりは稍々新しい型式に屬すべきもので中間期の末期か、又は第三期の初めに相當するものであらう。後者は Lang-Nèo 出土のものである。たゞに此等の遺蹟に於けるのみでなく他の洞窟等の遺跡に於ても同様な層位的關係のもとに出土し、その分布區域も印度支那・馬來半島等を含む一帶である。



(1)　(2)

Fig. 2.

純粹の舊石器の形をし乍らその先端にのみ磨研を加へられてゐるこのバクソニアン型石器に關して從來次の樣な解釋が自明の理として行はれてゐた。即ち大陸の一部、恐らくは印度支那あたりで未だ舊石器時代の文化階程に彷徨してゐた先史人たちが、既に新石器時代の文化を持つてゐた人民と接觸するに到つて、前者は後者から磨研の術を會得することとなり、先づ自からがもつてゐた舊式の石斧の而も先端丈けを磨く樣になつたと云ふ、甚だ面白い解釋である。而して氏も亦特に之に反對してはゐないが、而も氏は他の解釋法の可能であることを信ずるとて次の樣な事例を擧げて考察を試みられてゐる。すなはち、

印度支那に於て Lang-Nèo, Trieng-Xen の洞窟から出土した遺物の中に、奇妙な形の磨製骨角器の存在するのを見るが、此等はバクソニアン型の石器を包含してゐる層の中から出るのである。

こゝで亦私は、かかるバクソニアン型文化に屬せしめられる骨角器に就いて述べなければならないが、幸ひ、Lang-Nèo 及び Trieng-Xen 出土遺物に就いては、先きに參照したコラニイ孃の L'âge de la Pierre dans la Province de Hoa-Binh に可成り詳細に報告されて、その一部の寫眞が同書圖版第六及び第九に收められてゐるから夫等のうち二三のものを挿入の第三圖及び第四圖に轉載して若干說明を加

（一）　バクソニアン型（Bacsonian）石器

或る時代—多分七八千年以前—に極東の大部分は舊石器時代の特徴を持つた文化に依つて複はれてゐた樣であるが、印度支那・馬來半島・蘭領東印度諸島の一部分及びフィリッピン群島を含む一帶がその文化圏内にあつたと氏は推定されてゐる。そして Bacsonian 文化とは此の文化から派生したものであると云ふのである。

扨てこの Bacsonian と云ふ名稱の説明がなされなければならない。この名稱は元來 Haut Tonkin 一帶即ちトンキンの東北部支那に近き地方を呼むでゐるものであつて、その代表地名は Bac-Son と呼ばれる遺跡である。（第一圖參照）

第一圖

要するにバクソニアン文化と云ふのは印度支那の石器時代に於いて、一つの文化期を形成してゐるものである。そしてそれを特色づけてゐる石器は、純粋な舊石器の形を備へ乍らその先端丈けに磨研が加へられてゐるものであると云はれてゐるが、今ハノイから出てゐる印度支那地質調査報告第十四巻の Mlle. Madeleine Colani が著はした L'age de la Pierre dans la Province de Hoa-Binh, 1927 からそのバクソニアン型石斧なるものを轉載すると、第二圖が即ちそれである。(1)は長さ十七センチメートル、幅九センチメートル、厚さ四・五センチメートルで、パレットナイフの形をしたものである。基部には殆んど磨かれた痕はないけれども、刄部は兩面とも磨かれてゐて、全體堅緻な石斧である。これは Bac-Dong と云ふ遺跡から出たものであつて、著者コラニィ孃が分けて Période archaïque(古拙期) Période intermédiaire(中間期) Période la moins ancienne(近古期)の三つとなす遺跡各期の中

東印度群島石器時代概要

――ヴァン、スタイン、カレンフェルス氏論文紹介――

有光教一

昨年五月ジャヴァで開催された「第四回太平洋學術會議」の先史學の分科會で Dr. P. V. van Stein Callenfels が Problems of the Stone-age in the Far East「極東に於ける石器時代の諸問題」なる論文を發表されたが、先き頃その拔刷を濱田教授の許に寄せられた。此の論文は英文の四頁許りの極く短いものであつて、その表題はとにかく論じてゐるところ實はジャヴァあたりを中心とする印度群島の石器時代に關するものであつて、その體裁は南東アジアに於ける石器時代の二三新問題に關する「表」の如きものである。然し私は今、近時本邦學界に此の地方に於ける此の種の論文の紹介の稀である事を思ひ、且つこの論旨の中に、これ迄の定說を形成してゐた解釋に、反省を促す樣な箇處があるのに、學問的な興味を覺え、更に又氏自らが此の論文は、極東に於ける先史時代研究に解決の曙光を與ふる目的で編むだものであると云はれてゐる意氣に感じ、こゝに非才を省みず紹介を試みることとした。但し此の論文はその性質上からか惜しい哉、一枚の圖、一葉の寫眞の掲載もなく、その抽象的な論旨の儘の紹介だけでは、到底その一般をすら了解出來ぬので、私は不充分乍ら、一二此の方面の參考書からその足らざるを補ふ積りであるけれども、又先輩諸子の中に他の良き參考書をお持ちの方あらば是非御示教あらん事を願ふ次第である。從つて私が以下記述せんとしてゐるのは氏の論文を骨子とする東印度群島の石器時代の概要とも云ふべきものとならうが、幸にして氏の原意を損ふ事なければ望外の喜びである。

氏は南東アジアの石器時代を次の夫々特徴ある石器を標識とする四つの文化期に分けられた。その石器とは、即ち Bacsonian; Dravidian axe; Philippine Axe; 及び Hornneck Axe と稱されるものである。以下夫々に就いて氏の論說を紹介批判し乍ら、說明を加へることとする。

私の試みる說明なり意見は、すべて一段低く記して氏の論說と判然區別し、その歸するところを明らかにする。

1. 器内外面又は外面にあかがひ扇による條痕のあること
2. 纎維を多量に含むこと
3. 尖底のあること
4. 紋様に特長あること（細隆線紋、沈線紋、點列紋、沈線點列紋の内容に於いて）
5. 繩紋極めて稀れなこと
6. 貝押紋型紋あること
7. 口縁突起形式に特長あること
8. 腹部隆起帶あること
9. 紋様は腹部以上にあること

この式の土器を茅山式土器と假稱する。

もの一個、八糎のもの一個、七・五糎のもの三個、七糎のもの五個、四・五糎のもの一個となる。方底のものは邊の長さ六・五糎である。底が甚しく小さくなると尖底となる。器の口徑に比してあまりに底が小さいのに注意せねばならぬ。條痕は底にまである。尖底の形式は三戸式土器の或物の如き乳頭形のものはない。

器の大きさは明記する資料を持たないが口縁部の曲面によつて測定したものによると徑四〇糎を越えるものもあるがこれは測定片が口縁突起部に近いもので口形方形に近いものがあつたためのものであるらしい。最も多いのは徑二九糎内外のもので、最小徑十糎程のものもないではない。腹部隆起帯上に於ては徑三〇糎内外のものが多いから口縁部から腹部へかけて徑に大差ないものであつたらしい。細隆線紋のもの及腹部隆起帯を缺く條痕のみのものにあつては口部から底まで次第に細まつて行つたものであるらしい。勿論口部に於いて少しく外へ廣がつたものはあつたと思はれる。これ等には三角突起のみで中凹突起或は有孔突起がなく從つて突起部での外曲も見られないから口形は圓形のもののみであつたであらう。口縁部の腹部隆起帯を伴つた破片は多いが隆起帯で底を伴つたものはかなりの大片に於ても見られないので下半部が明になし得られないからどの形式に平底があり、どれに尖底があつたかを知り得ない。しかし腹部隆起帯以下の部が其の上部よりづつと長かつた事は破片から推定出來る。

類似土器出土地　三浦半島に於いて本貝塚土器に類似のものを伴出する遺跡は次の五例がある。

(1) 初聲村三戸、谷戸上畑地（三戸式土器と伴出、三戸式土器は赤土の直上にある）
(2) 三崎町諸磯白須畑地（地下二米、黒土の最下部、赤土との境に近く發見。この上方二〇糎程を距て、爪形刺突紋ある土器出）
(3) 浦賀町吉井、沼田貝塚（縄紋すこぶる多い一種と伴出。層位關係尚不明）
(4) 同町高坂貝塚（縄紋の變化多きものと僅か伴出層位關係不明）
(5) 衣笠村森崎春日臺（諸磯式土器其他のものと伴出。層位尚不明。赤土の直上にあるらしい）
(6) 他に西浦村佐島海岸にて細隆線紋片一片得てゐるがまだ遺跡を發見しない。

以上の遺跡の層位的研究の結果として、本土器の占める相對年代は推定される筈である。

結論　これを要するに本貝塚は其の面積大ならずとは言へ出土土器は他式のものを混ぜず、製作、紋樣、器形等に特殊相を示し、其の拙劣さにより又同式土器伴出の他の遺跡に於ける層位關係による古式土器の一種なることを推定される。特長として次の事をあげ得る。

つぶし中央をくぼませたもの(中凹突起)、これが尙大きくなつて中央のくぼみが深くなり内面へ突きぬけたもの(有孔突起)、と小突起が二個若くは數個並列したもの(並列小突起)との四形式がある。之を紋樣別に見てゆくと差のあることが知れる。細隆線紋のものにては突起はすべて三角突起のみであることは注意を要する。點列紋のものにあつては資料とした土器片中に突起少なく、三角突起はあるが細隆線紋のものに比して低い。131の如きは極めて低く存在を見のがし勝なものもある。これが突起であることは上面の四個の點によつて明である。沈線點列紋のものになると正しい三角突起なく、中凹突起ばかりである。中凹突起は腹部隆起帶と一隆線を以て結ばれ、紋樣はこれを中心として描かれた樣である。この垂直な隆線上には腹部隆起帶に見ると同じ刻線がつけられてゐるのが普通である。114に見られる突起は形式は有孔突起でありながら孔を有せぬ中間式のものである。之を要するに表に見る通り三角突起が甚だ多く、中凹突起が其の半數あり、他はその又半數にも達せぬくらひしかない。突起の形式は器形と密接な關係があるらしく、中凹突起の稍大きくなつたものと有孔式のものは特にその部口緣が器の外方へ腹部隆起帶のあたりから出てゐるものがあるからこの突起が口緣に四個あるものとすれば恐らく器の口形は方形に近いものであつたに違ひない。

口緣突起形式別

	三角	中凹	有孔	並列小
細隆線紋	一四	○	○	一
點列紋	三	一	○	○
沈線紋	一	三	○	一
沈線點列紋	([illegible]) 二	五	○	二
條痕のみ	二	二	二	○
其他	○	○	二	○
計	二二	一一	四	四

腹部には器體をめぐつて二本又は一本の腹部隆起帶があるのが普通であるがこれを缺くものもある。器面に於ける紋樣は紋樣帶をなして腹部隆起帶の上まであるが隆起帶が二本ある場合には下部隆起帶上まで紋樣があるがこれ以下にはない。細隆線紋を有するものでは腹部隆起帶を缺く樣である。しかし紋樣は隆起帶のあるべき部で終つてゐる。條痕のみで他の紋樣のないものでは隆起帶のあるものとないものとある。器面は腹部隆起帶の下から急にくの字形に曲つて胴が細くなつてゐるのが普通で隆起帶から上に於ては直徑に大差がない樣である。隆起帶以下と思はれる條痕のみの破片を見ると紋樣帶部のものに比して徑の甚しく小さいものが多いこともそれを考へさせる。

底部破片は平底十八個、尖底四個、方底一個計二三個ある。測定し得るものにつき平底の物の徑を測ると十糎のもの五個、九糎の

穴さへあるものがある。この孔は土器の破れ目の兩わきに孔をあけてしぼつて使用したものと考へられる。このものゝ多いのは土器燒成不充分のため破碎する事が多かつたからであらう。

器形　完形品が一箇もないから原形を見ることは出來ないが口緣部、腹部、底部と細かに見て行くと原形が推定される樣である。

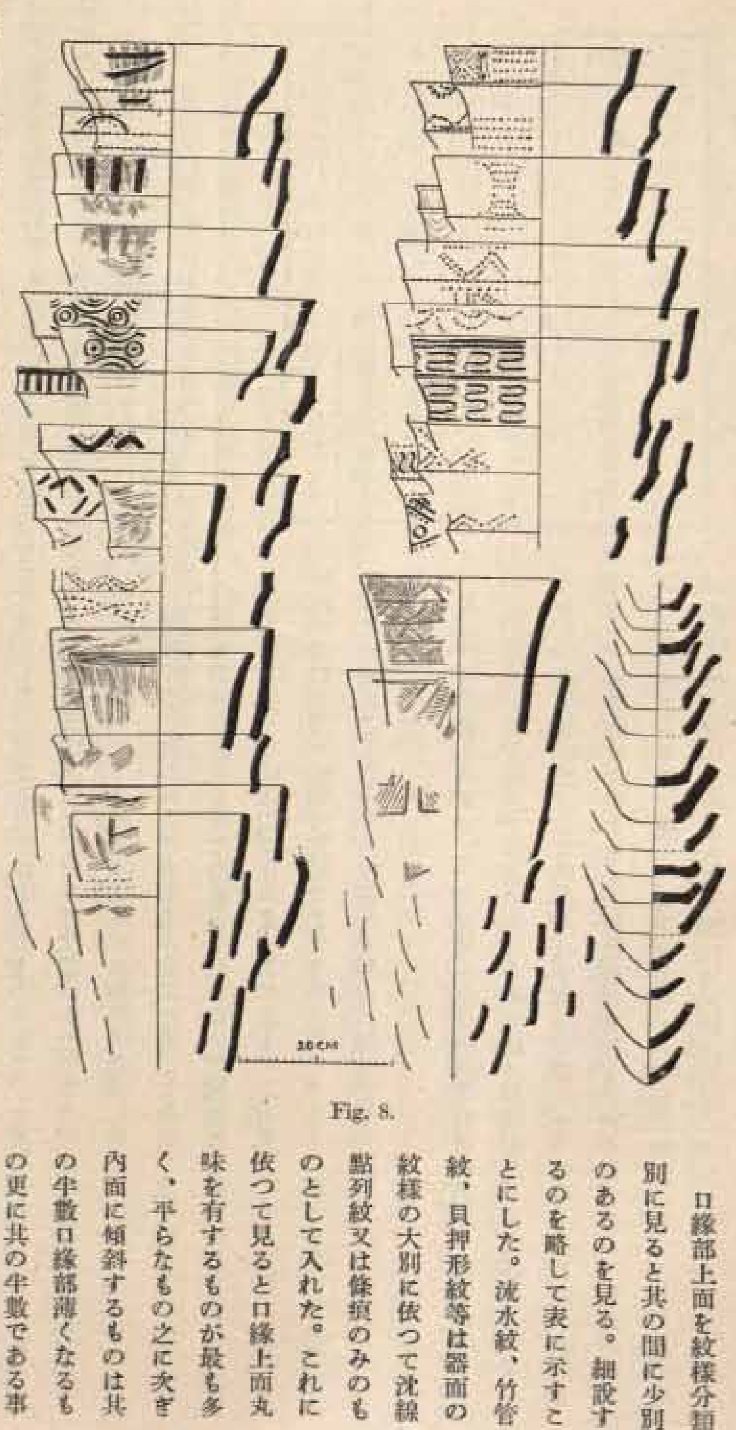


Fig. 8.

口緣部上面を紋樣分類別に見ると其の間に少別のあるのを見る。細說するのを略して表に示すことにした。流水紋、竹管紋、貝押形紋等は器面の紋樣の大別に依つて沈線點列紋又は條痕のみのものとして入れた。これに依つて見ると口緣上面丸味を有するものが最も多く、平らなもの之に次ぎ內面に傾斜するものは其の半數口緣部薄くなるもの更に其の半數である事を知る。口緣上面に於ける刻目は點列紋に於いて極めて少數に刻目の無いものがある他、有刻目のものが無刻目のものの約二倍ある事が言はれる。

口緣部突起　口緣部には突起のある破片が相當ある。これを形式別にすると三角形に突起したもの(三角突起)、とその頂を押し

る。（拓本參照）

貝押型紋　土器面に押された型によつて押型原體がはひ貝であるのを知る。殼頂を腹部隆起帶上にならべて押しつけたもので三例ある。（111 112 113）又土器面にはひ貝の背を押しつけたものも見られ（111）、口緣部の刻線代りに、はひ貝殼頂を並列して押しつけたもの（113）や其の先端を刻線として押しつけたもの（115 116）も見られる。(154)には内面にはひ貝先端による刺痕がかすかに見られるがこれは整形中偶然についた先端のあとであらう。(114)は口緣部突起に腹部隆起帶をつなぐ隆起線上にそれらしいものが見られる。この片には纖維束の壓痕がまばらに見られる。

口緣上面形式別

口緣上面	平		内傾		丸味		薄		口緣計		
刻目	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	計
細隆線紋	5	5	4	1	10	5	0	0	19	11	30
沈線紋	5	2	3	0	4	5	2	1	14	8	22
點列紋	10	2	3	0	7	0	1	1	21	3	24
沈線點列紋	4	6	5	3	4	1	2	0	15	10	25
縄紋	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1
條痕のみのもの	10	9	5	4	12	12	2	5	29	30	59
合計	34	24	20	8	38	23	7	7	99	62	161
	58		28		61		14		161		

條痕のみによるもの　本貝塚土器の特長と言ふべき條痕はあかゞひ屬の背に依つてつけられたものである事は山内氏も言つてゐられた。本貝塚からは、はひ貝は多く發見されるがあかゞひは一片もないからこれ等條痕もはひ貝によつたものであらう。少數の土器片は内面又は外面に缺いてゐるが他のすべては内外面に一面にひかれてゐる。大部分が整形のために無意味にすりつけられたと思はれるのに其の小數には有意味に、卽、紋樣として描かれたものがある。（98 100 103 104）條痕のみで他の紋樣のないもの一八一片ある。

之を要するに紋樣は極めて原始的な感のするもので圓、同心圓、同心半圓、弧、平行線、格子紋、其の他の直線の交錯によるもので渦紋等なく所謂縄紋式土器に於ける紋樣とは、かけはなれたものである。

小孔を有する土器片　これは紋樣ではないがこゝに附記する。十五片あつてその十二片迄が口緣部を有するもので口緣に近く割れ口に接して一孔がある。孔は土器面の内外から先端の鈍いものでこすりあけたものや中途で止めた

流水紋　所謂流水紋を有するものが四例ある。前記の別け方にすれば皆其の何れかに入るべきものであるが特殊なものとして別記する。(79)は水平な太沈線紋の間に流水紋を並列させ、其の間に爪形類似紋を入れたもので沈線點列紋に入るべきもの。他は何れも垂直な數本の平行線で區切られた間に流水紋を並列させたもので、(80)は沈線點列紋に(82)は竹管紋に入るべきものである。

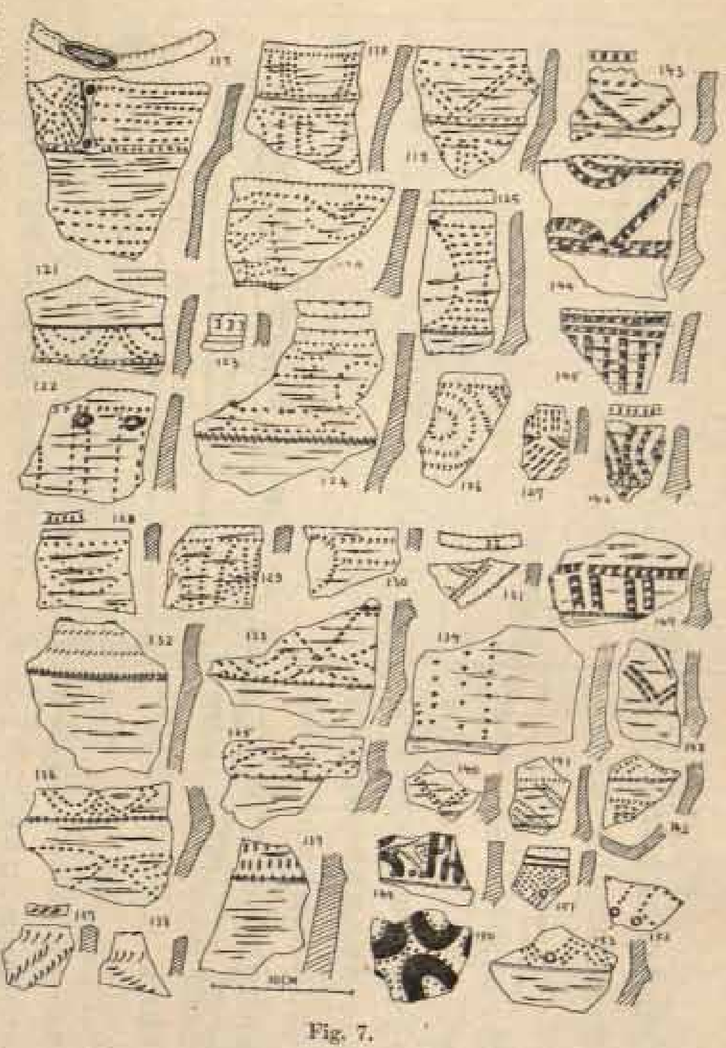


Fig. 7.

竹管紋　竹端を器面に垂直に刺突し小圓形の痕を附するものをいふ。九片ある。紋樣として特殊なものもなく、沈線點列紋と同意味のもので點列に代るに小圓を以てしたもの及び點列間に竹管紋を入れたものである。

(81)(83)(149)—(153)

縄紋　甚だ少ない。はつきり見られるのは二片で他の一片は僅に見られるに過ぎない。(156)は紋樣帶が縄紋によるもので紋樣帶の下は巾一糎程條痕がすり消になつてゐる。織物を押したとは見られず、まばらに或間隔をおいて押されてゐる。口緣部上面にも內面にまでも見られる。(155)は縄紋が一面に押されその間に指頭によるらしい太沈線が弧狀をなして横に描かれてゐるものでこの縄紋は一種の織物を押したかとも思はれる。(93)は沈線點列紋としてあげたものだが點列間に縄紋が所々に見られる。これは地紋として縄紋が施されたものらしい。三者共縄の壓痕に於ける各條は左傾で各節は何れも右傾であ

なり、三角形又は契形となり、之を器面につけたまゝ走らせつゝ刺突することにより線狀連點ともなる。最も多いのは斜に刺突したものである。これ等に屬するもの七一片、有紋片の約二三%を占める。器の腹部には隆起帶をめぐらし、帶上には刻目がある。紋樣はこの隆起帶と口緣との間に紋樣帶をなして施されてゐる。隆起帶が上部にある場合には其の下に第二の紋樣帶あり、更に其の下に第二の隆起帶がある第二隆起帶は第一隆起帶よりも低い樣である。紋樣は甚だ簡單で點列よりなる同心圓、同心半圓、平行線、弧、山形紋等が多い。不連續の模樣もあるが、連續したものが多い樣に思はれる。器面には一面に條痕がありその上に點列があるのが、普通だが時に點列間の條痕をすり消したもの又は全く表面に條痕のないのも僅か見られる。(117—142)

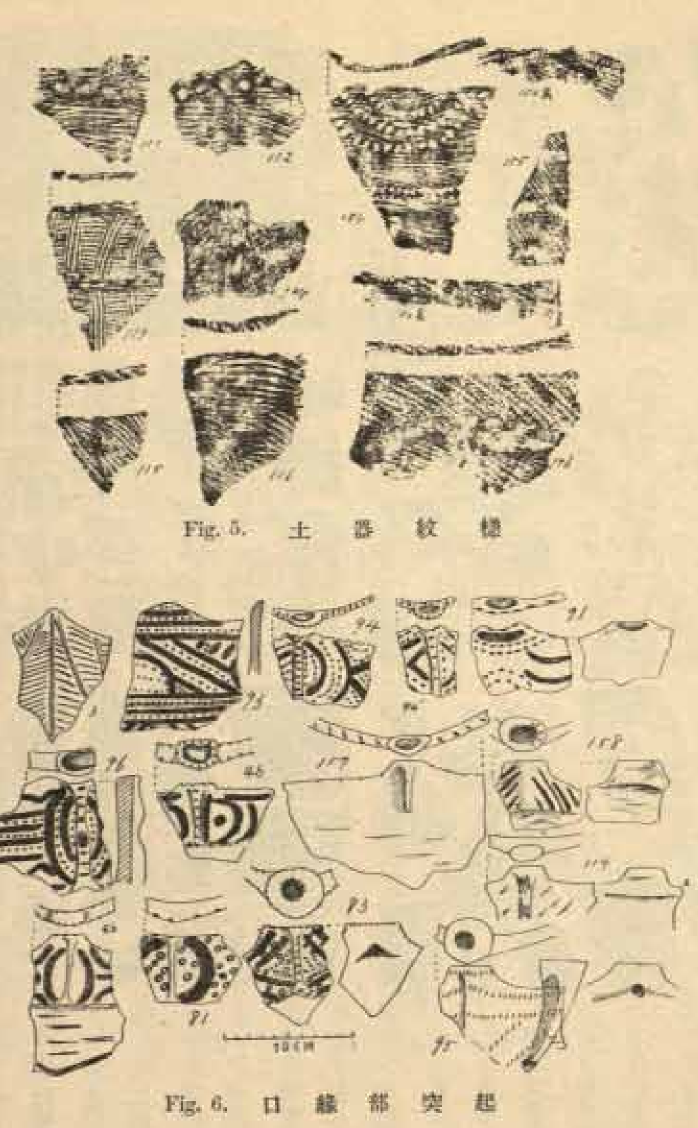


Fig. 5.　土器紋樣

Fig. 6.　口緣部突起

沈線點列紋　沈線紋と點列紋との複合紋である。これに屬する破片二七片、有紋片の約九%を占める。太い沈紋の間に點列を施したもの十片、竹を割つたものゝ端で描いた沈紋の間に點列を描いたもの十七片ある。紋樣は圓、同心圓、同心半圓、弧、平行線、山形等を沈線であらわし其の間に點列を描いたものであるが點列紋に見るところと少しの違がある。(84—97)

腹部の隆起帯がない。（拓本1－44）

沈線紋　竹端指頭等を以て沈紋を描いたもの。これに屬するもの六三片、有紋片の約二〇％を占める。指頭による太く淺い沈紋

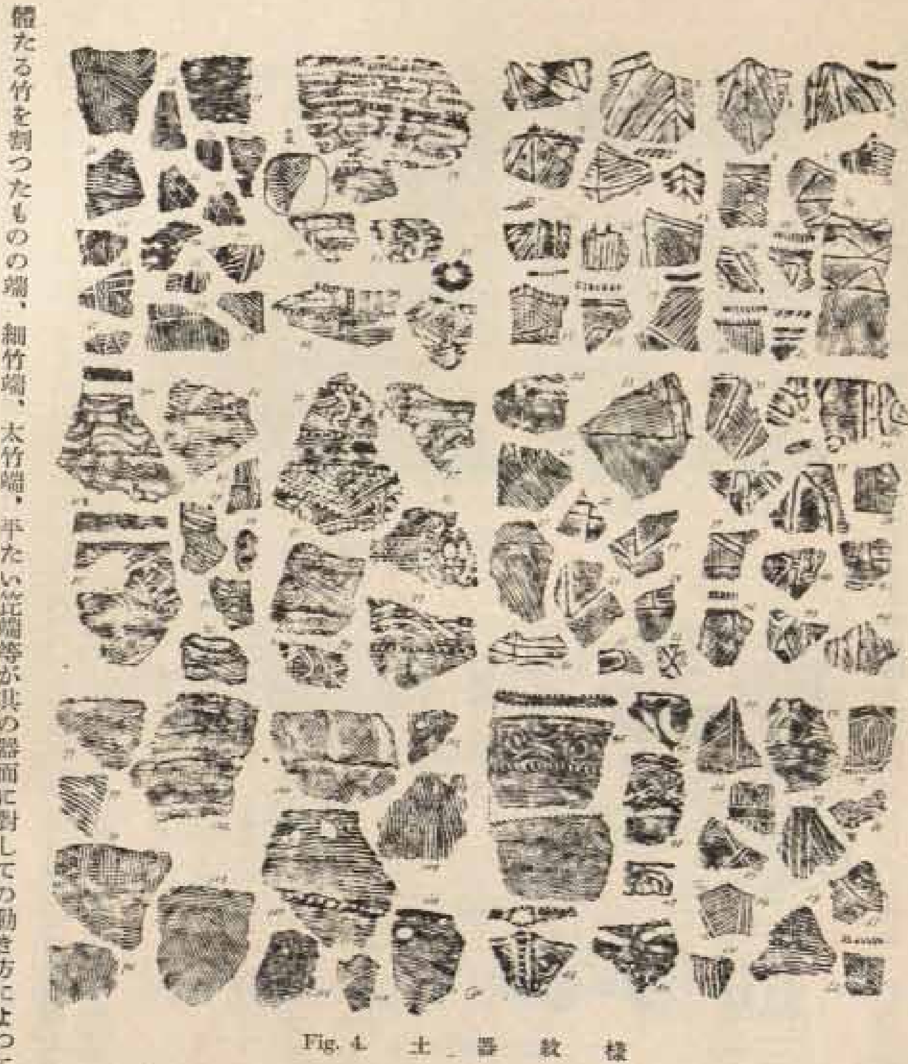


Fig. 4.　土器紋樣

のもの十片、極めて細く鋭い線によるもの九片、その他四四片は其の中間に位すべきものである。紋様は太き沈線のものにては同心圓、同心半圓、弧などあり、細沈線のものには格子紋、平行線などあり其の他のものは少數の弧形の他は直線又は平行線による沈線にて其の間を狹い平行線で埋めたものが多く隆線紋に於けると同じ感じのものがある。細沈線のものには三戸式（考古學雜誌第十九卷第十一號）に似た感じのものがある。（45－78）

點列紋　各種の刺突紋を之に入れる。施紋原體の形狀に依つて又原體の土器面に對する働きに依つて各種の形狀となる。原體たる竹を割つたものの端、細竹端、太竹端、平たい筬端等が其の器面に對しての動き方によつて小點、大點となり、半月狀點と

の露出貝層中から半磨製石斧を得られた。（第一圖）



Fig. 2. 骨　角　器

Fig. 3.

土器　採集した土器片四九三片中有紋片三一一片、條痕のみのもの一八二片ある。何れも燒成不充分、從つて脆弱である。色は黒、黒褐色が多く、赤褐色のものもある。製作極めてまづく表面に於いて凸凹多く厚さ一定せず曲面の一部から直徑を測定することは甚だむづかしい。多量の纖維を含み纖維は口緣に平行してゐる。内外面にはあかゞひ屬の殼を以て整形された條痕が明瞭についてゐる。厚さは一・五糎を最大なる方とし一糎内外のものと七粍内外のものとを普通とする。五粍程のものも僅かある。有紋片は紋樣によつて細隆線紋、沈線紋、點列紋、沈線點列紋、流水紋、竹管紋、繩紋、貝押形紋等に分類せられる。

細隆線紋　沈線に對して隆線と稱する。これに屬するもの九七片あり有紋全體の約三一%を占める。隆線は土器面に粘土の細紐を後からつけたものでその剝落した部に於て明かにあゞかひ屬に依る條痕の地紋があらわれてゐる。隆線は細く低く、斷面は多く三角形をなし本貝塚土器紋樣に於ける一特長である。紋樣は直線的のもの多く僅かに曲線のものもある。直線は三角形をなすものが大部分の樣である。隆線上に刻目をつけ隆起繩紋に類したものも見られる。紋樣は器の上部に紋樣帶としてほどこされ口緣部に於ける三角突起を起點として數條斜に腹部に起り之に平行せるものを作り又枝を出し、隆線間は平行沈線を以て埋めてゐるのが普通である。僅ではあるが之等の間に竹端による刺突點列のあるものもある。又平行隆線間は、すり消し法によつて地紋たる條痕が消されてゐることが多い。細隆線紋のものには

獣魚骨　量も相當あり色々ある様であるが其の種類を明になし得ないから他日にゆづる。

貝類　本貝塚は「かき」を主とするがこれに混じて左の二十三種が數へられる。貝製品はない様である。

あかにし　　みるくひ　　ぼうしうぼら
あさり　　さゞえ　　かゞみがひ
こしだかがんがら　　はいがひ　　すがい
はまぐり　　つめたがひ　　ながかき
おほへびがひ　　まがき　　つのがい
いたぼがき　　ふぢつぼ　　いたやがひ
いがひ　　おきしゞみ　　れいし
うちむらさき　　まつかぜ

角器　本遺跡から發見された鹿角は十三本あるが其の中五本は一端より切つた跡明かである。切りかけて止めた部でみるとやゝ鋭利な利器で引切つた様に見られる。恐らく黒曜石製の利器が用ひられたであらう。(イ)太い角を割つて細くし先端をすりへらしたもの。(ロ)(ハ)先端の片側をすり減らして鋭利にしたもの(ニ)小角を使用したであらう。(第二圖)

骨器　銛であらう。折れてゐるが先端は鋭い。

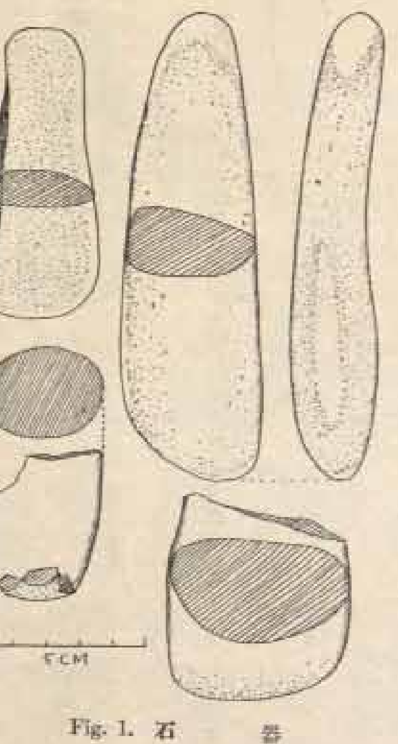


Fig. 1.　石　　器

石器　この遺跡には黒曜石片が僅あるがまだ石鏃は發見されない。石器としては丁度持ち頃な自然石の一端に打痕のあるものや磨り減つて滑になつたものがある。多くは自然石のまゝ使用したものであらう。整形されたものは極めて少いらしい。大場氏は出

茅山貝塚と其の土器

赤星直忠

發端　茅山貝塚の存在を知つたのは大正十年でこの貝塚の土器が他と異なるのを知つたのもこの頃である。爾來資料の聚集と類似土器出土遺跡の發見につとめて來た。古く沼田賴輔氏の報告によつて石器時代遺物發見地名表に載せられてゐた事は其の後知つた。

位置狀態　神奈川縣三浦郡久里濱村茅山觀音堂裏の畑地にある。東方へ突出した半島形の丘端に近い部で崖に露出したところでは赤土上直ちに貝層約一米あり其上約一米の黑土に覆はれてゐる。しかし畑に於ては地下三〇糎程で貝層に達する由である。內川を距てゝ同種土器を出す浦賀町吉井の沼田貝塚と相對してゐる。面積はあまり廣くない。廿年程以前に貝灰を作る目的を以て貝を發掘しその際出た土器石器等多數は畑の隅に山積されてゐたが事業中止と共に掘られた穴へ投入れられてしまつたといふ。今所有する資料はこの時掘出されたものゝ中、崖にころげ落ちたため埋められなかつたほんの一部に過ぎない。しかも五百片に近い數がある。數年前大場磐雄氏が來訪された時この土器を示し茅山式土器なる名稱を以てこの一種を呼ぶことを相談した。發表をすゝめられたが尚材料不足を感じてゐたのでさしひかへてゐたところ大場氏及山內氏（本春來訪されたとき茅山式と呼ぶことを再び相談した）が相次いで茅山式土器の發表をされたので現在の材料で知れただけの茅山式土器の內容を發表することにする。尚不充分であることを信じてゐる。地主から發掘の許を得た事があつたがまだ發掘の時期を得ない。露出部の小發掘は行つたが層位的の差異は全くない。しかもこの式の土器のみを出す純粹な貝塚である。表土中に新しい彌生式土器が僅か出るがこれとは無關係と思はれる。

遺物

遺物は獸魚骨、貝殼類の自然遺物と土器、石器、骨角器等の人工遺物である。

一王寺式土器破片に殘存する植物纖維

草野俊助

土器の内部に黒焦になつた纖維が殘つてゐる。その斷片を顯微鏡下で檢すると組織構造の概要を知ることが出來る。纖維は植物性のものであるが、草木の皮部から製出したものでなく、個々の維管束であることから推して、禾本科か莎草科(スゲ類)の葉莖の脉理であると思ふ。脉理は細長い纖維胞や膜細壁に孔紋を有する導管等の細胞群であるが、土器の纖維には孔紋のある細胞膜壁は明瞭に保存されてゐる。

上記の草類の脉理であるならば、葉莖を平行して縱走してゐるから、乾かした草を其儘使用したならば土器内の纖維は數本づゝ併んで保存される筈であるが、實際には纖維の走向は左程に整然として居らぬ。多分枯草を打ち又揉んで柔かにし、幾分脉理をバラ〱にして使用したものであらう。坏土に混入する藁の樣に、切斷した形跡や撚りをかけて繩狀にした形跡は認められない。

原料植物は何であらうか。一種であるか二三種であるか、夫等の點は判然しない。薄手の土器では纖維は細く、厚手の方では粗大であるのは原料植物の相違を示して居るのではないかとの疑もある。然し土器製造の目的に最も適したものが撰定される譯であるから、原料植物は野草の内一二の種類に限定されるのは當然であると思ふ。

土器内に殘存する纖維の痕跡

土器内の纖維片顯微鏡寫眞
孔紋部は導管壁

其他生活内容は判然しない。

一形寺式土器a形土器よりb型土器へは形態的移行の可能を認めることが出來るけれども、b形土器と共存した厚手式・薄手式土器・及び中居に泥炭地遺跡を殘した龜ヶ岡式土器文化との交渉に就ては、今何等の確證がないから、茲に言及することを避ける。

(1) 甲野　勇　史前學雜誌第二卷第四號

(2) 本遺跡は長谷部博士によつて一王寺或は中居貝塚と呼ばれ、山内氏はこれを中居貝塚と名じてゐる。私共の發掘地點では、貝塚と稱する程貝殼を見ず、僅かに貝殼を混じた包含地に過ぎないので、遺跡の大部分を占める一王寺の名稱を採用した。併し廣範な地域を占める全遺跡中には恐らく貝塚或は其他の特殊遺跡が包含せられてゐることであらう。

(3) 山内淸男　史前學雜誌第一卷第二號

(4) 杉山壽榮男　日本原始工藝槪說

(5) 山内淸男　史前學雜誌第一卷第二號

（第十四圖）これに用ひられた繩席紋中には、亦一王寺式土器に見る種類をも含んでゐる。

土版岩版　各れもB地點より發見された。土版は厚さ二・一糎程の相當大形なものゝ破片である。兩面に撚絲紋が押捺されてゐる。（第十五圖右上）岩板は黄褐色土層及び黑色砂層中に各々一箇宛存在した。共に破片である。前者は方形或は長方形と思はれ、現存する一邊の長さは九糎許り、厚さ三糎餘を算する。一面には羽狀の直線紋樣を沈彫してある。他面にも彫刻の痕跡が認められるが、餘り明瞭でない。（同圖左）後者は菱形を呈し、一邊の長さ六糎、厚さ一・七糎許りである。兩面共に摸樣がない。（同圖右下）

土錘石錘　A地點下部黑褐色土層より、各々一箇出土した。土錘は長さ六糎、幅四糎程の厚手式土器の破片を使用し、其兩端に切り込みを作つたものである。石錘は稍大形であつて、長さ一〇・五糎、幅九糎許り、土錘と同型式である。

結言

一王寺の遺跡は、新井田川を降つて鮫港に至るまで、今の海岸からは約七粁程距つた山中にある。併し往古此處が史前人の生活根據地であつた時代には、海が今よりも近く入り込み、新井田・馬淵兩河の沖積平地の一部は、未だ海灣であつたと考へられる。主として一王寺式a形土器を出すところの、黄褐色砂質土層・褐色砂質土層中に含まれた、クジラ・イルカ等の海棲哺乳動物又は魚類・貝類等の殆んど全部が、鹹水産であることは、其住民の漁撈生活を物語るものである。釣針或は銛頭等は、まだ近くまで彎入してゐた海に於て漁りに使用せられた道具であつたらう。そして又今其種類を明かにすることが出來ないけれども、恐らく群棲魚類ではあるまいかと思はれる、多量の魚骨層を見ては、更に大規模な漁具、一種の網の如きものも存在したのではないかと想像されるのである。同時に赤猪・鹿或は狸・兎其他鳥類に至るまで、其遺骨が豐富に殘存してゐることは、彼等の狩獵生活の一班を示してゐる。これを要するにa形土器の製作使用者は、勿論若干の植物質食料にも依つたのであらうが、主として狩獵と漁撈とを生業とする自然民であつた。夥しい自然遺物によつて、當時此土地が如何に海と山との幸を合せ有つてゐたかを知ることが出來やう。そして此歡樂鄕に養育せられた文化は、今唯手工藝によつて見るのみであるが、織物・編物等の精巧で其種類の多樣であること、或は土器・石器・骨角器等の製作技術から推して、既に可成優秀な程度にまで進んでゐたことを想像するに難くない。

此等文化の後を承けたと思はれる。b形土器、及びこれと共存する厚手式土器・薄手式土器には僅かに少量の獸骨を伴ふのみで、

又單に粘土紐を以て帶狀に縁取つたものも相當に見られる。（同圖5）紐狀の粘土を貼付して全體の模樣を表はす手法を採つたものは比較的少なく、（同圖3・4）一般に模樣は單調である。

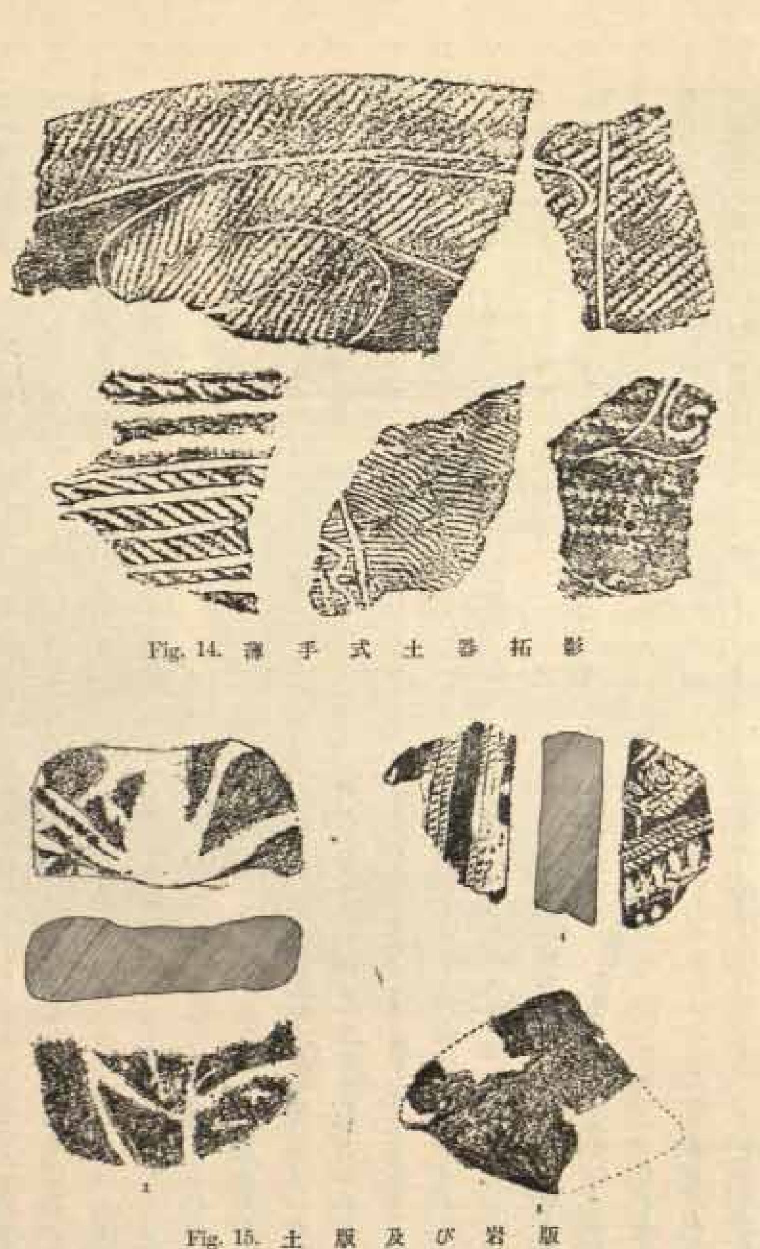


Fig. 14. 薄手式土器拓影

Fig. 15. 土版及び岩版

厚手式土器の中には、稀に一王寺式土器に見る手法を混じたものがある。同圖6がそれで、大體の器形及び口縁部の渦紋は厚手式のそれを踏襲してゐるが頸部に押された小圓形の刺痕列と胴部に壓せられた縄席紋とは屢々一王寺式土器に見る種類のものである。

薄手式土器　Ａ地點下部黑褐色土層中から、厚手式土器の破片に混じて出土した。悉く細片であつて其數も少ない。夫等は關東地方の貝塚に比較的多く見る樣な、縄席紋の上に直線或は曲線を以て沈紋を描いたもので、縄席紋の一部に磨り消しが行はれてゐる。

打ち或は揉んで人爲的に柔軟にした上、これを土と混じて土器を製作したのであらうとのことである。此纖維を混入した土器の製作手法に就いては、一王寺式土器中にも一二の相違を認めることが出來る。

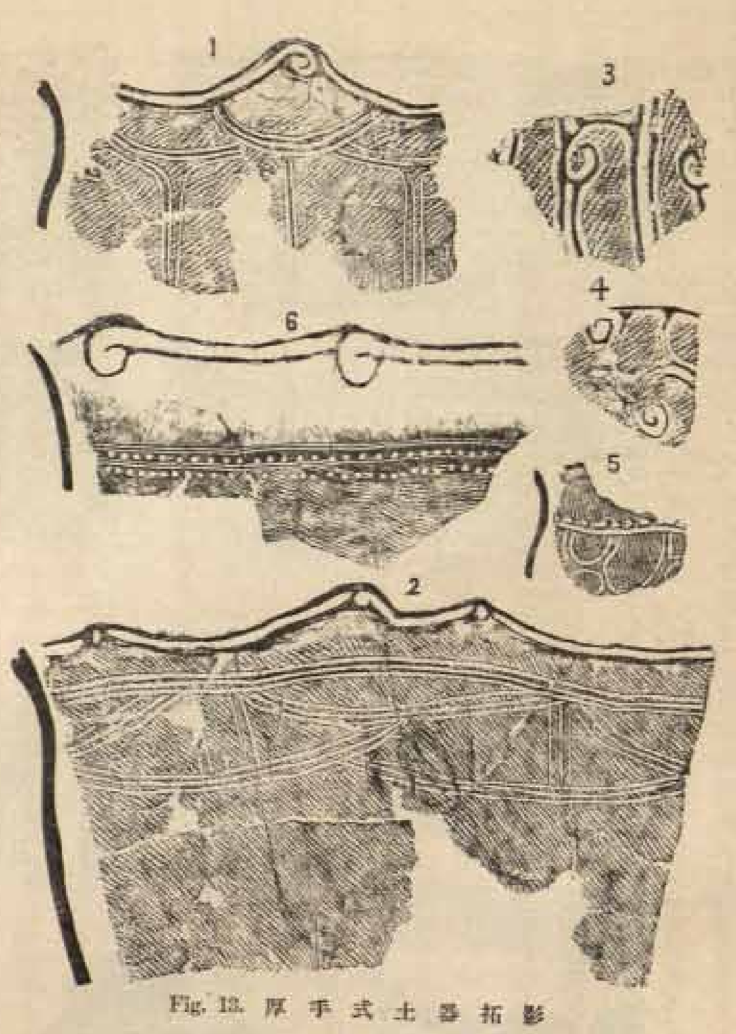


Fig. 13. 厚手式土器拓影

厚手式土器　A地點下部黒褐色土層の西側にかけて存在したことは、既に述べた通りである。この東側にもこれに類似するものを多少出してゐるが、胴部の破片のみで明かな特徴を認め得るものなく一王寺式b形と區別することが困難である。殘存遺物は殆んど全部が破片であつて、大半を存するもの二三を見るのみである。此等は所謂厚手式土器中でも調子が弱く關東地方或は中部地方等に見る樣な、强い隆起線を用ひたのは存在しない。東北地方に發見される通常の種類に屬する。大形破片に就いて推測すれば、器形は概して甕形を呈し、一王寺式に比すれば、口緣部・頸部及び胴部の角度が急で、稍强い彎曲を示してゐる。各個體間の器形には頸部の緊縮に多少の相違があるのみで、他は略同樣である。模樣は繩蓆紋を印した上に、口緣から胴部にかけて曲線の沈紋を付したものが多く、口緣部には山形の把手を小さく凸起させ、其處に渦紋又はそれの變形と思はれる小圓を表はしたものが多い。（第十三圖1・2）



Fig. 12.　一王寺式a形土器口緣部裝飾

心として、纖維の纒絡する模樣を貼付された粘土紐によつて表はしてゐる。それ以下底部に至る間には繩蓆紋を押捺することa形と同樣である。

次に一王寺式土器は、其製作材料の成分によつて、二種に分たれる。一つは通常の土器に見る如く、粘土中に砂を混じて錬劑としたものであつて、屢々長石の細粒と覺しいものを多量に含んだものが在る。a形の一部・b形の殆んど全部、及び後に述べる厚手式土器・薄手式土器は此の種類に屬する。

他の一種は粘土中に植物の纖維を混じた纖維土器である。本遺跡出土の土器に纖維を含むものゝあることは、杉山壽榮男・（4）山内淸男氏（5）等によつて注意され、山内氏は他遺跡出土の該式土器と共に一括して纖維土器と名付けられてゐる。

一王寺式土器破片中に殘存する纖維の痕跡は、必ず一定の方向に走り不秩序でない。即ち土器の壁の心に、圓周に沿ふて水平に置かれてある點が、多くの土器に共通してゐる。其内外には別に粘土を上塗りし、化粧してゐるのである。又底部に於ては、屢々渦狀の痕跡を遺してゐる。此等の狀態から見れば、纖維をツタの如く切つて粘土に混じたものでなく、土器の製作に對し其整形と何等かの關係を有する樣に思はれる。草野理學博士の顯微鏡下の御調査によれば、此纖維は禾本科植物或は莎草科植物の維管束であつて、其殘存狀態から推せば、植物をその儘使用したものでなく、

一王寺式土器　長谷部博士によつて圓筒土器と名付けられた種類の土器である。今回の發掘品中主要遺物ともいふべきもので、特にB地點は終始此種の土器を出すのみであつて、本遺跡の示す文化の特色を最も良く表はすものと思はれるから、遺跡名に因んで此名稱を與へたのである。其の特徴とするところは、器形が悉く簡單な圓壔形を呈することである。大小長短の別はあつても、形は大體筒形に近く、口に向つて稍開き氣味になつてゐるのが普通である。外側は頸部に少しくくびれを見せて、口縁が外方にそり、胴部がふくらんでゐるが、土器全體の彎曲は他の種のそれに比べて單調である。稀に口縁より底に至るまで殆んど彎曲を示さないものも存在する。次に土器の外側全面に亙つて繩蓆紋を押捺してゐることも該式土器の特徴である。繩蓆紋の種類は豐富であつて、口縁から底に至るまでの間に强く押捺せられ、頸及び口縁には其上に装飾を施してゐる。又稀に繩蓆紋を口縁内側或は底部にまで印したものが認められる。一王寺式土器は其の装飾方法の如何によつて、大體二種類に分たれる。

a形　主として褐色砂質土層、B地點の黄褐色砂質土層に包含され、黒褐色土層中にも混在する。コップ大の小形なものから高さ六〇糎程の大形なものに至るまで大小樣々であつて、器形も稍口の開いたもの、胴部の膨れたもの、圓筒に近いもの、細長いもの、太く短かいもの等、b形に比して多少の變化を見せる。口縁は水平、或は二對の低い山形の凸起を有するものと相半ばし、後者は稍外彎する傾向がある。底は殆んど平底である

繩蓆紋は其種類非常に多く、屢々網目樣紋を付し、或はそれに類似した紋樣を沈線で彫んだもの等が見られる。此等の種類に就いては更に調査の上他日報ずる豫定であるから、玆には一切を略すことにした。口縁部には數條の撚糸紐を口縁と平行して水平に、又は波狀に押捺したもの、撚系紐を組み合せて作つた繩紋帶の壓痕、或はこれに圓形の刺痕を交へたもの等、種々の装飾を施してゐる。此等の装飾は概して黒色砂層より出土するものに比較的簡單であつて、往々これを見ないものも存在する。褐色砂質土層・黄褐色砂質土層・黒褐色土層と上方に至るに從ひ、装飾の模樣は次第に複雜化する傾向がある。又後者は屢々粘土紐を頸部にめぐらし、凸帶を以て口縁部装飾と繩蓆紋との限界とする。（第十二圖）

b形　黒褐色土層中に包含される。B地點に於て本形土器の存在した場所は、其一部が既に直接耕作によつて破壊せられた爲め完形土器は僅少である。器形は口廣ろの圓筒形を呈し、頸部にくびれを有するものは少ない。又口縁には大形の把手を有するのが普通である。a形に比して比較的大形のもの多く、分厚に作られてゐる。其特徴は口縁部の装飾である。大きく凸起した把手を中

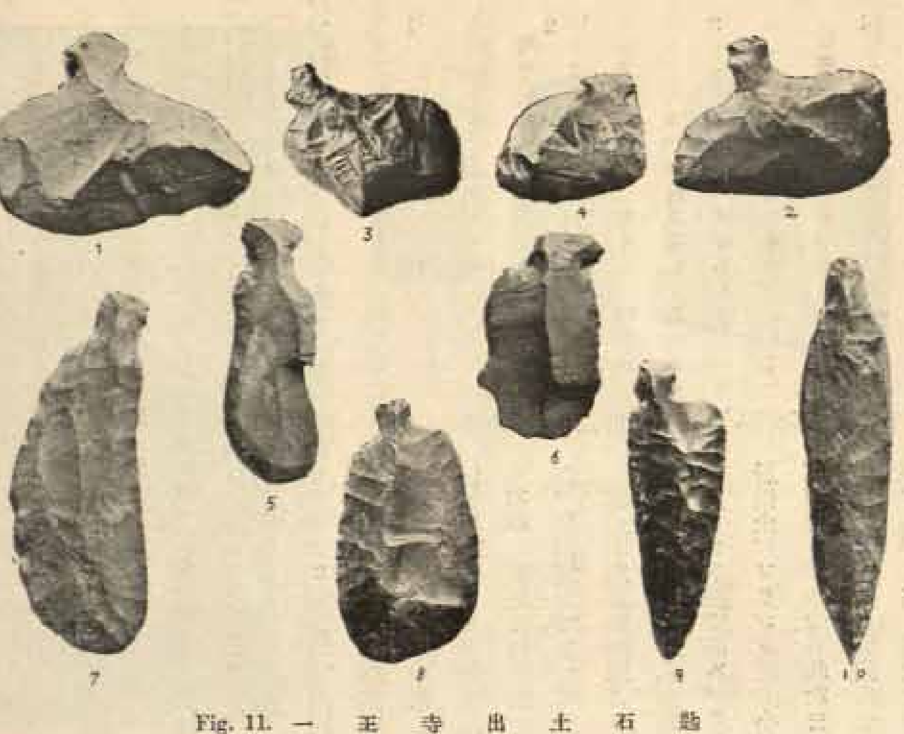


Fig. 11.　一　王　寺　出　土　石　匙

見るのみである。A地點下部黑褐色土層より出土した。7・8・9は製作精巧で刄部は細かく整形されてゐる。7（一〇糎・三・六糎）はA地點褐色砂質土層出土、半月形狀を呈し、8（六・三糎・三・九糎）は卵形、B地點褐色砂質土層中に發見された。9（六九糎、二・七糎）は同じくB地點褐色砂質土層出土、小刀狀に表裏を整形して、最も精巧なものである。他の一箇はB地點出土であるが、其の位置明かでない。小形で長さ四・二糎、幅一・七糎程の細長い形狀を呈する。

縱形石匙に似て、石鎗の如き身を有する石器が一箇B地點褐色砂質土層中に發見せられた。（10）縱形石匙9に近い形態を有し、全長一〇・五糎、幅二・三糎程、兩面精巧な打痕を有する。これと同種の石器破片が同層より出土してゐる。

石鏃　發掘及び表面採集によつて、二十箇餘の石鏃を得た。有柄無柄相半ばし、後者には細長い三角形狀、菱形、柳葉形のものが多い。有柄の石鏃は細長い三角形を主とし、柄は小形である。多くはフリント製である。

土　器

一王寺出土の土器には、一王寺式、厚手式、及び薄手式土器の三種が認められる。兩地點を通じて私共の發掘した量が非常に多かつたのと、又完形土器の多數に發見された爲に、未だ全部整理復形するに至らない。從つて以下記述するところは豫報の程度にとゞめ、詳細は追つて整理の後に讓らうと思ふ。

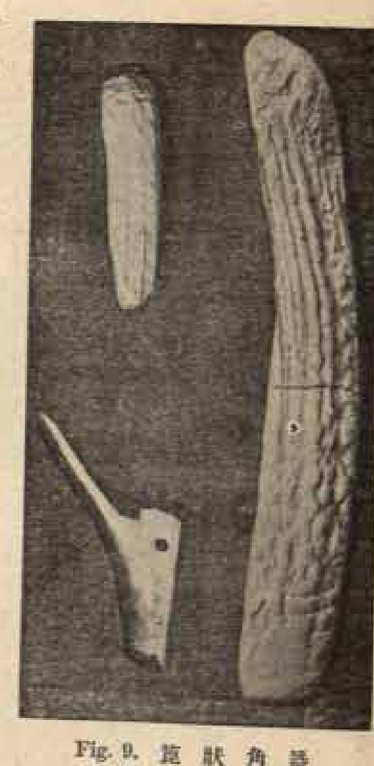


Fig. 9. 篦狀角器

石器

石斧 石斧及びこれに類似する遺物は、兩地點を通じて僅かに四箇發見せられたのみで、他の石器に比べれば少數である。各れも磨製で第十圖1・2・3はA地點下部黑褐色土層中に、4はB地點褐色砂質土層の灰中に存在した。1（長さ八糎、幅四糎、厚さ二・五糎）は硬砂岩質で粗製、刃部を缺損し、短冊形分厚な石斧である。2（長さ一〇糎、幅四・五糎、厚さ一・五糎）は良く研磨せられた薄斧であつて、同じく刃部を缺き、粘板岩製である。3（長さ二・五糎、幅三—七糎、厚さ一・五糎）は其形稍異なり、幅廣く一側に僅かな丸味を帶び、後は刃の如く兩面より急に薄くなつてゐる。（寫眞左側）他側には磨り切り石切りの後を存し、先端は缺損してゐる。4（長さ一三糎、幅二糎、厚さ〇・九糎）は粘板岩質で細長く紡錘形を呈し、斷面は蒲鉾形である。兩端に鑿形の刃を有する。

Fig. 10. 一王寺出土石斧約 $\frac{1}{2}$

石匙 石匙には二種の型が認められる。一は身が横に長く、柄がこれと直角に作られた、所謂横形であつて、他の型は、身が柄と同方向に伸びた所謂縱形である。

横形石匙は兩地點より各々二箇づゝ發見せられた。第十一圖1・2はA地點下部黑褐色土層より出土し、1（身の長さ七・一糎、幅三・九糎）は硬砂岩質。2（長さ六糎、幅三・一糎）はフリント製である。3（四・五糎、三・三糎）。4（四糎、二・一糎）はB地點下部黑褐色土層出土、フリント製で小形、稍粗製である。表面には鑿形加工の跡を存するが、裏面は原石より剝離せられたまゝで、僅かに部分的鑿形を認められるのみである。

縱形石匙は六箇發見せられた。5（肩より先端に至る長さ七・五糎、幅二・五糎）6（四・五糎、三糎）は共に粗造であつて、表面の打痕は大きく、刃部と裏面の一部に鑿形の打痕を

部に結節を有する。（第七圖左）泉山氏の蔵品中にも釣針の完全なのが一箇存在する。（第七圖右）矢張り鹿角を以て製られてゐるB點出土品も現存部の大いさ及び形狀より推測すれば、大體これと同樣のものであつたらうと思はれる。

骨製銛頭　悉く褐色砂質土層中に存在した。七箇中一箇は半ば缺損してゐる。形狀は大體柳葉形を呈するものと（圖版一九13・15）先端近くに膨みを入れて淺く抉つたもの（9・10・12・14）が存在する。抉りは淺く未だ鬚をなすに至らない。多くは管狀骨の彎曲部をそのまゝ利用し、表面は凸彎し、裏の髄腔に面する方は凹彎してゐる。又特に溝狀に抉つた場合も見られる（9）14は表裏共平らで薄く、11は半ば失はれて全形を窺ふことが出來ないけれども、丸味を帶び稍肉厚く、表裏同形である。

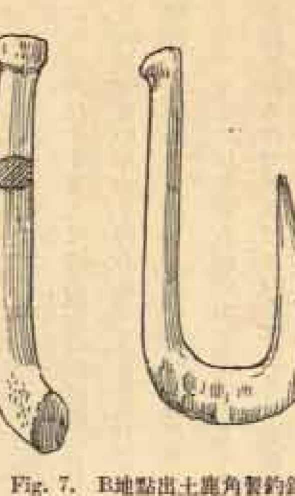


Fig. 7.　B地點出土鹿角製釣針

骨斧　B地點黃褐色砂質土層の灰を混じた土砂中に存在した。材料は鯨骨であるらしく、頭部及び先端の刃部を缺いてゐるが、現存する最大長一四糎、最大幅五・五糎、厚さ〇・八五糎程の扁平な形を呈し、頭部に近く兩抉りの孔を有する。泉山氏の蔵品中にもこれと同形のものが一箇ある。其刃部は蛤刃狀となり、一見磨製石斧と同形を呈する。恐らく本品もこれと同樣であつたらう。

Fig. 8.　鯨骨製骨斧

角製箆　鹿角を縱に半截して作つた箆狀のものが二箇發見された。一箇は主幹より製作し大形であつて、長さ一八糎幅二・五—二・八糎許り、厚さ一・〇糎程である。他の一箇は長さ八糎幅一・九糎許りで、頭部が厚く一・二糎程を算し、先端に向つて厚さを減ずる。鹿角の枝を使用したものと思はれる。（第九圖右・左上）

其他鹿角の分枝する部分を以て作つた有孔の角器が存在する。箆と同じく縱に半截して薄くし、枝も削つて細くされたもので、主幹の前後は缺けてゐる。その兩端に近く二孔を穿ち、枝にはこれと直角に一孔を穿つてゐるが、孔はいづれも片抉りである。（第九圖左下）

保存狀態の關係上、骨角器はB地點から發見せられたのみで、A地點では存在を認められなかつた。B地點出土のものは殆んど骨を用ひ、角器は僅少であつて、牙器と思はれるものは存在しない。

骨製針　先端を尖らせた細長い骨器、所謂骨針は、骨角器中數量的に最も多く發見せられ、且つその中に多少形態の相違がある。これを只形態的に分類すれば、大凡二種の別が見られる。

a　有孔骨針　頭部に孔を穿つたものである。B地點褐色砂質土層中より發見せられた。悉く兩抉りの手法により穿孔され、その中には兩面より小さな溝狀の窪みを穿ち、その中心に孔をあけたものが存在する。完形品八箇中、六箇は稍小形であつて、その製作精巧である。中央部の横斷面は、楕圓形或はそれに近い丸形を呈し、蒲鉾形又は稍扁平なものも存在する。表面はよく研磨せられ、滑澤を有するものが多い。中四箇は頭部角形又は稍丸味を帶び孔は正しく圓形に兩抉りせられてゐる。（圖版第十九1・2・3・4）他の二箇は頭部が稍尖り、孔は淺い溝形の窪みの中に、稍細長く穿れる。（同 圖版5・6）表面は前者程平らに研磨せられず、波狀の小起伏が見られる。大形な二箇の針は、その横斷面一面に凸彎し、他面凸入してゐる。孔は圓形に穿れてゐるが、その穿孔法は前者程精巧でない。（同 圖版7・8）圖版第一九8はアカエイの尾棘を以て作つたもので、B地點發見遺物中唯一の魚骨製品である。

以上二種類の骨針は、要するに、形の大小と材料との關係によつて、自ら生じた形態であらうと思はれる。その製作に使用せられた材料は、主として猪・鹿等の四肢骨であるが、厚さ太さ等を同じくする同一材料を使用して、小形な針は斷面比較的丸味を帶びた棒狀のものに作り得られ、これに反して、大形な針は、長さに伴ふて幅を増さねばならない必要上、自ら管狀骨の髓腔に面する彎曲面をそのまゝ殘存して、溝狀の凹みあるものとせられたのであらう。

b　主として黃褐色砂質土層中に發見せられ、又褐色砂質土層中にも存在した。これに屬するものは頭部にくびれ目を彫んだ丸形棒狀のものである。このくびれに糸の如きものを結びつけたと思はれるのであるが、共用途は一樣でないらしい。先端の尖がりaに類したものは針として使用せられたとも考へられるが（圖版一九11）細形で頭部の整つたものは一種の裝飾品とも思はれ（同圖版10）又比較的太く且つ短かいもの、殊に先端の平らに切斷されたものなどは用途が明かでない。（同圖版12・13）唯頭部の形狀により骨針として一括して玆に記述する。

骨製釣針　B地點黑色砂層より、鉤を缺損した釣針一箇發見した。鹿角を以て作られ、現存部の長さ四七粍巾五粍程である。頭

イルカ　Delphinus dussumieri Blanford ou Orcinus orca C Linne.

魚　類

クロダヒ　Sparus macrocephalus (Basilewsky).

スヾキ　Laleolabrax japonicus (Cuvier & Valenciennes).

ヒラメ　Paralichthys olivaceus (Temmink & Schlegel).

サメ　Selachii.

貝　類

*マガキ　Ostrea gigas Thunberg.

カヾミガヒ　Dosinia japonica Reeve.

アサリ　Paphia philippinarum Adams & Reeve.

*イガヒ　Mitilus crassitesta Lischke.

*ホタテガヒ　Pecten yesoensis Jay.

シヾミ　Corbicula sp.

ヒメエゾボラ　Chrysodomus-arthricus Bernardi.

クボガヒ　Tegula argyrostoma basilirata Pilsbry.

以上の種類を見るに、陸棲哺乳類を除いては、殆んど全部が水產動物に屬し、淡水產の遺物としては、シヾミ一種を認めるのみで他は悉く鹹水產である。これを本遺跡に近い中居の泥炭遺跡出土の自然遺物と比較すれば、この兩者の間には明瞭な差異が見られ人工遺物の相違と相俟つて注意すべき事柄であると思はれる。

植物質遺物は土器を構成する粘土中に殘存して、禾本科植物が認められる。これに就ては別項草野博士の論文を參照せられたい。

二　人　工　遺　物

骨角器

から意識して土器中に挿入したと思はれる場合も少くない。B地點褐色砂質土層に發見せられた猪の頭骨がその一例である。第六圖に示したのがそれで、上部及び側面を包んだ土器片を既に取り去つた爲め稍不明瞭であるが、横臥せる土器中に存在した。又一箇の鼬鼠の頭骨はさかしまに伏せられた土器の底部近く、充滿した土砂中に發見せられた。かくの如き狀態より推測しても、此處に集積せられた土器が、甚だしい移動を蒙つてゐないことが明かである。

遺　物

私共の發掘した面積が比較的狹小であつたのにもかゝはらず、遺物はA地點B地點を通じて非常に豐富に存在し、自然遺物・人工遺物各々の種類も相當多く發見された。殊に包含地遺跡には割合に發見することの少ない動植物質の遺存を見たことは、この遺跡を遺した史前人の文化を窺ふのに重要な資料といはねばならない。

一　自　然　遺　物

A地點はB地點に比して濕度高く、殊に下層は過潤甚だしかつた爲めに、遺物の保存狀態は良好でなく、貝殼或は獸魚骨等の自然遺物は著しく脆弱となつて、採集すること殆んど不可能であつた。從つて次に揭げる自然遺物は主としてB地點出土のものに就いて檢出したのであつて、發掘作業中A地點で認め得たものは、*印を付して區別した。尙ほ此他種屬を明かにすることの出來ない物が多く存在し、殊に殆んど層をなして發見された魚骨に至つては、全く檢出することが出來なかつた。

哺乳類

*シ　カ　Sika nippon nippon (Temminck)

*イノシシ　Sus leucomystax leucomystax Temminck.

*ウサギ　Lepus brachyurus Brachyurus Temminck.

タヌキ　Nyctereutes procyonoides viverrinus (Temminck).

ムサヽビ　Petaurista leucogenys.

クジラ　Cetacea.

あることは想像するに難くないとしても、彼等の日常生活の中心をなしてゐた住居址であつたとは考へられない。これを要するに今回の發掘に於て我等の知り得る限りは、唯一種の特種遺跡であるといふことのみである。

尙特種遺物の存在狀態に就いて簡單に述べれば、本遺跡からは他の包含地遺跡に發見されることの少ない鳥獸魚骨の類、及びそれを材料として製作された骨角器等の有機質遺物を多量に出土してゐる。此等は主として褐色砂質土層及びB地點の黃褐色砂質土層中に存在し黑色砂層及び黑褐色土層中には稀であつた。此等の中最も良好な狀態に保存せられたのは灰層或は灰を混ずる土砂の層中であつて猪・鹿の四肢骨の如きは、人爲的加工の有無、其程度の如何に係はらず、其表面光澤を呈し、研磨せられたもの丶如くであつた。砂層中に存在するものは比較的よく保存せられてゐたが、黑褐色土層中に發見せられたものは脆弱となり、其狀態最も不良である。本遺跡がかくの如く多量の有機物質を保存し得たことは、堆土の强壓を受けた砂質土層中に包含せられたことにもよるであらうが、主なる原因はその中に混じた灰の作用によるものと思はれる。B地點黃褐色砂質土層中に殆んど層をなして存在した魚骨の如きは全くその好例である。


Fig. 5.　灰層中に保存された鹿の下顎骨


Fig. 6.　土器の內部に存在した猪の頭骨

又獸魚骨は屢土器中に發見せられた。其中には埋沒の過程に於て、偶然土器中に混入したと認められるものも存在するが、初め

黒褐色土層中には、南側寄りの部分に土器が存在し、其上部は耕作によつて破壊せられてゐた。北側寄りには遺物は少量である。その上部には褐色を呈する粘質の薄い土層が認められるが、其中には遺物を含まない。表土はA地點と同様である。

かくの如くA・B兩地點に於ける遺物の出土狀態は、自然の堆土中に見られる關係が殆んど一致してゐるにも係はらず、A地點には破碎せられた土器片が主として發見せられたのみであるに反し、B地點は殆んど完形土器の複雑な堆積である。故に此一王寺の遺跡に其痕跡を留めた史前人の生活は、略同一時期に始まつて同一時期に終つたと推測しても、此二地點が同一性質の遺跡であるとは考へられない。即ちA地點に於ける遺物包含の狀態は、屢貝塚の貝層中に於て、又或種包含地遺跡に經驗する如く、殆んど無意味な遺物の堆積埋沒を見るのみである。即ち人爲的に遺棄せられた遺物や、又は傾斜面の上方より移動した遺物が、此處に集積したものと思はれる。只本地點で特に注意しなければならないことは、褐色砂質土層の上部に盛り上つた堆土によつて、黒褐色土層中に存在する遺物が大體東及び西に區別せられることである。即ち東南方の窪み中に陷入する堆土中には、主として一王寺式土器を包含するに反し、西方の平坦部に堆積した土層中には、一王寺式土器に混じて、相當多量な厚手式土器を發見することである。此種土器はB地點には全く認められないのを以て見れば、一王寺式とは異なる遺物であつて、本地點に近接する地域に、別に厚手式土器を主要遺物とする遺跡が存在して、一王寺式土器を主體とする史前文化と、此の地點で遺跡上の接觸を見た結果ではあるまいかと考へられるのであるが、これは全く一の假說であつて、これに相當する遺跡の存在、及びこれと一王寺遺跡との關係の如何は、今回の如き小發掘によつて決定せられる問題ではない。

B地點は其最下層より最上層に至るまでの間に、略同一系統に屬する一王寺式土器を出すのみならず、其存在狀態は全く特殊であつて、通常の包含地遺跡に見られるところとは著しく相違してゐる。即ち多數なる完形土器―B地點出土品で殆んど全形を窺ふことの出來るもの大凡五十箇に達する見込みである――が上下左右に密接重疊して、殆んど完形土器の一大集團を呈する。本地點の東方に隣接する山内氏發掘のC地點に於ても、略同樣の結果であつたといひ、又私共と同時に行はれた泉山氏の發掘に見るも殆んど變るところなかつたのに徵すれば、此等三地點を含む相當廣い範圍に亙つて、完形土器の大集團を形成してゐたことを推測することが出來る。而してこれは如何なる事を意味するのであらうか。B地點を含む一帶の地域が、A地點の如く他地點より移動し來つた土器の集積や、又は單なる遺棄によつて生じた遺跡であるとは思はれない。又此處が彼等の生活の一端を表はす重要な遺跡で

みである。褐色砂質土層、B地點にのみ認められる黄褐色砂質土層、及び下部黑褐色土層中には、遺物が多量に包含される。但下部黑褐色土層の深部には、比較的遺物を含まない。A地點の上部黑褐色土層は、耕作を蒙らない部分に殆んど遺物を見ない。B地點に於ても、北側にはこれに相當するものを認め得るが、南側では薄く、耕土は直ちに遺物を包含する下部黑褐色土層と接してゐる。

次に遺物の存在狀態に就いては、兩地點の間には相當の相違が在り、又保存の狀態に就いても多少異つてゐる。而して此相違は遺物の種類及び性質と相關連するものがある。これを左に述べて見やう。

A地點に於ては、遺物を包含する最下の層、卽ち黑色砂層の上部一五糎程の間に、完形土器一箇及び半面を存するもの其他破片等が少量發見された。褐色砂質土層は其下部一五—二〇糎程の厚さに、鹿・猪等の獸骨・少量の貝殼が殆んど層をなして存在するが、濕氣の爲めに保存は良好でなく、唯其形骸を留めるのみである。西側略中央に近く、粗製の石臼が存在した。其上方には土器片・石器等相當多く混在し、又部分的に少量の灰が混在する。本層の上面に盛り土の如く高まつた堆土中には、遺物は殆んど發見せられなかつたが、その堆土を境として東方に傾斜する線は稍弧形を呈し、これに沿ふて土器破片が亦弧狀に配列されて存在した。下部黑褐色土層中に包含せられる土器は、此弧狀の堆土を境とし、東方卽ち傾斜面には所謂一王寺式土器を主體とし、西方の稍平らな部分には、一王寺式土器と共に厚手式土器が相當多量に混ずる様である。上部黑褐色土層は耕作によつて他より移動し來つた遺物を除いては、極めて少量であつて、土器小破片の外殆んど認められない。

B地點に於ては、其最下層たる黑褐色土層には、土器石器等、遺物を混じてゐるが、其量は極めて豐富であつて、完形土器の多く存在したことは聊か相違してゐる。又骨器及び相當多量の獸魚骨が混在する。褐色砂質土層中には、完形土器が横臥或は顚到して互に上下相重つて存在し、此間には石器・骨角器・獸魚骨・貝殼等が多く含まれてゐる。本層には厚さ七—八糎程の灰層が三重に交はつてゐるが、これと土器の重疊する狀態には何等の層位關係が認められない。(圖版第十八下) 黄褐色土層中には多量の灰を混じ、完形土器が横臥或は側立し、稀に直立して存在した。(圖版第十八上) 尚ほ此層には石器が比較的多く發見せられ、骨器も亦相當多く發見されたが、特に注意を惹いたのは、土器の底部に灰と混じて殘存した魚骨の層である。厚さ七—八糎程に密着して大小魚の骨が發掘區域全體に亙り一面に存在する。

に比して狹小であつた爲めに、地盤の傾斜は測ることが出來なかつたが、黒色砂層は非常に厚く、恰度二米を算し、其上面は略平坦である。褐色砂質土層は厚さ七〇―九五糎を有し、上表は小起伏を呈する。此間に厚さ七―八糎程の灰層が三層交はり、部分により

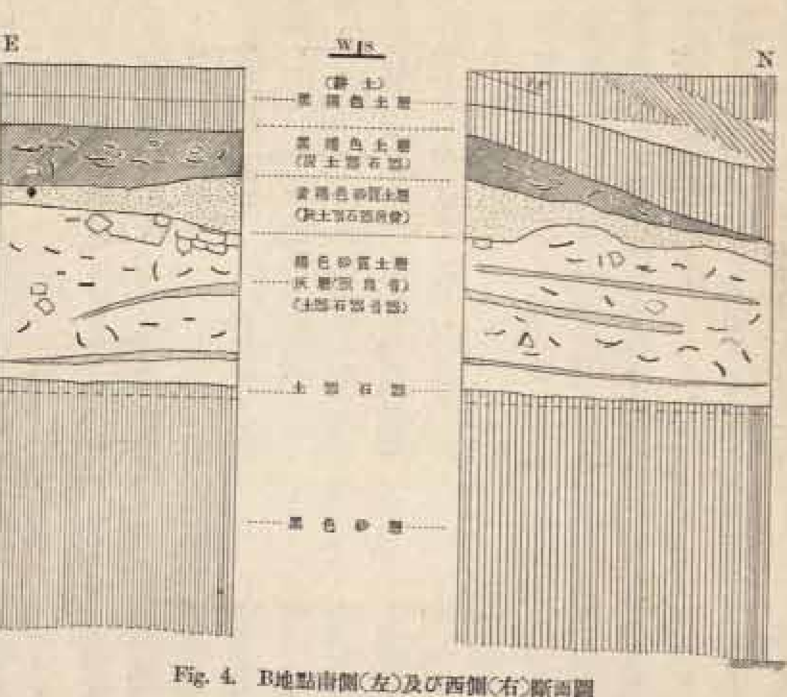


Fig. 4. B地點南側（左）及び西側（右）斷面圖

互に連絡する。此上にはA地點で認められなかつた黄褐色を呈する砂質土層が存在し、厚さ一五―三〇糎を算する。この上にはA地點の黒褐色土層に相當する二重の土層が堆積し、其下部黒褐色土層は南側で四〇糎を算し、北邊に至るに從ひ次第に薄くなつてゐる。上部黒褐色土層はこれと反對に、南側に薄く北方は厚い。而して其上表二〇糎程は耕作の爲め攪亂を蒙つてゐる。（第四圖）

以上二地點に於ける發掘の結果を綜合するのに、黄褐色砂質土層の有無を除いて、自然の堆土は殆んど同樣の狀態に重積してゐる。これによつて推測すれば此A・B二地點を含む或る範圍內に於て、其成因の如何は別として、土砂の堆積は略等しく行はれたことゝ思はれるのであるが、その局部局部に就いて見れば、A地點に認められなかつた黄褐色土層が、B地點に介在した如く、他地點との間にも部分的小差の存在することは推測されるのであつて、廣範な地域に亘つてゐる一王寺の全遺跡を、唯此近接した二地點の發掘によつて窺ふことは困難である。

遺物出土の狀態　AB二地點の土砂の堆積による層序が大體等しく重積してゐるにつれて、其層中に於ける遺物の包含狀態も略相似してゐる。先づ兩地點を通じて概觀すれば、地盤の上に堆積した黒色砂層の大部分には遺物が包含せられてゐない。上部の一五糎程の間に、土器・石器・骨器・其他鳥獸魚の骨が存在するの

倣すことが出來る。

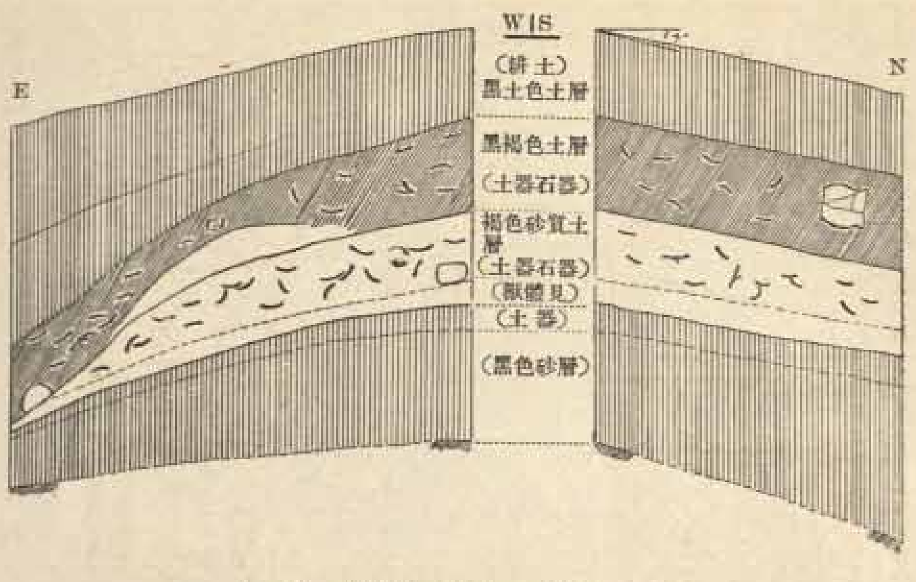


Fig. 16.　A地點南側（左）及び西側（右）斷面圖

黒褐色土層の下には、厚さ五〇—六〇糎程の稍褐色味が強い黒褐色の土層があつて、西北から東南に傾斜する。更に其の下部には、輕石の微粒を多量に含んだ褐色の火山性砂質土層があり、西北側では約六〇糎の厚さを有するが、中央部より稍東南に寄つたところから厚さを減じ、急に傾斜して東南側に至り殆んど絶えてゐる。最後に同じく輕石の細粒を混じた黒色の火山性砂層があつて、厚さ〇・四〇—一・二〇米程で黄色の地盤に達する。地盤は大略南に高く北方へ強く傾斜し、又稍東方に傾いてゐる。第三圖はA地點の南側斷面及び西側斷面を示したものである。これに就いて再言すれば、北々東に傾斜する火山灰の地盤の上に、同じく火山性の黒色を呈する砂層が堆積し、其表面は大體西から東に向つて傾斜する。此上に堆積した褐色砂質土層は、略同方向に傾き、中央より稍南に至つて急に降り、抉り取られたかの樣な狀態を呈する。其緣には褐色の土が盛り上げられた如く高まり、西側と水平に近く敷かれてゐる。これは後にも述べる樣に遺物出土の狀態と連關して、何等か人爲加工の跡ではないかと思はれる。稍褐色を帶びた黒褐色土層は殆んど同厚に此上を蔽ひ、東及び東北に向つて傾斜してゐる。其上面には再び黒褐色土層が厚く重積し、其表面は耕作の爲め攪亂されてゐる。B地點に於ける發掘の結果も、大凡A地點のそれと同樣である。本地點はA地點の西南方約二〇米のところに撰ばれ、東西二・五米南北三米の範圍を發掘した。其位置が尾根の稜に近く存在したので、地表面は殆んど水平である。發掘面積が深さ

發掘地點　一王寺の遺跡はこれまでに長谷部博士・山内清男氏及び泉山岩次郎氏によつて數ケ所の發掘が試みられて居る。私共は

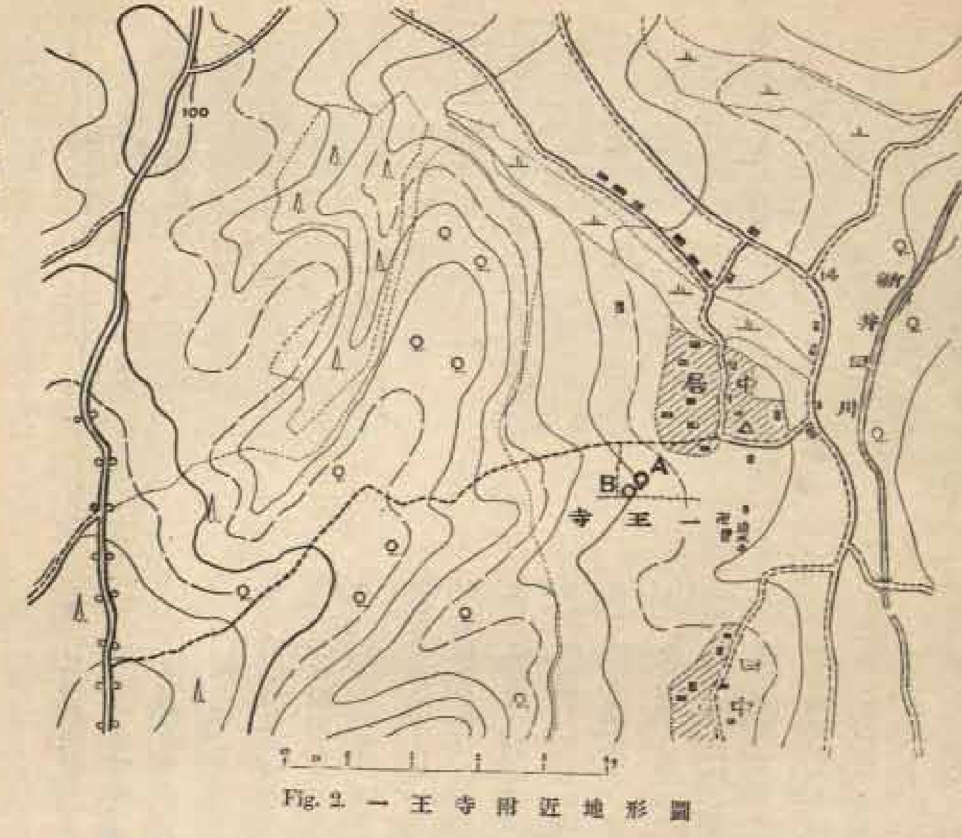


Fig. 2. 一王寺附近地形圖

泉山氏の經驗に基いて、中居の地域内に、山内氏の發掘地點B・Cに近くA・B二地點を撰んだ。(3) A地點は遺跡が北方の淺谷に向つて傾斜する斜面の中腹に在り、山内氏B地點の稍下方である。B地點はその上方、西南に約二〇米程距たり、山内氏のC地點西側に接してゐる。地表面に於ける此兩地點の比高(各々發掘區域の西北隅を標準とする)一・七五米を算し、地表は大體西南より東北に低く下り、地盤も亦略これと同樣に傾斜してゐるものゝ樣である。(第二圖及び圖版第十七上・下)

發掘　A地點は東西四・五米南北三米の面積を發掘し、深さ二・五米に及んだ。其位置が傾斜面の中腹に撰ばれた關係から、其發掘區域に於ける地表も自ら傾斜し、大體西南隅最も高く、東北に向つて降る。その比高約七五糎内外である。

地表は畑地となつて耕作された結果、厚さ五〇糎許りの間攪亂されてゐるが、其下方には黑褐色を帶びた土層があり、西側に薄く、東北側に至るに從つて漸次厚さを增してゐる。此土層は本來耕土と同一のものと思はれ、兩者を合して一層と看



Fig. 1.　一王寺遺跡の地理的位置
●印　一王寺　　▲印　中居

二

地形　青森縣の東海岸は、尻屋岬以南に殆んど彎曲なく、略一直線に南下し、鮫港に至つて始めて小灣を形成する。馬淵川・新井田川の二河川はこの内に注入して、夫々その下流に平地を沖積せしめてゐる。この二河の間にはさまれた洪積臺地は、南から北に向つて楔狀形に凸出し、先端は八戸町に至つて盡きる。この臺上八戸町より約四粁許り南方に存する一王寺山は、標高一三〇米内外を有する低い山塊であつて、その東方を南北に流れる新井田川の溪谷に向つて急に降り、七〇米の邊から緩傾斜となつて東北に尾根を出し、左右に小さな谷を擁する。一王寺の史前時代遺跡はこの尾根の上に存在するのである。

位置　緩いスロープを呈する尾根の先端、斷崖上に在る清水寺の背後に當り、左右の谷に臨んだ平地は、小字一王寺及び中居の地域に亙つて、約一万五千坪程の間にひろがり、土器の破片石鏃等が多く散布してゐる。卽ち一王寺遺跡である(2)中居の泥炭遺跡は、此處から東北に下ること僅か三四百米の近距離に在る。

史前學雜誌 第二卷 第六號

青森縣是川村一王寺史前時代遺跡發掘調査報告

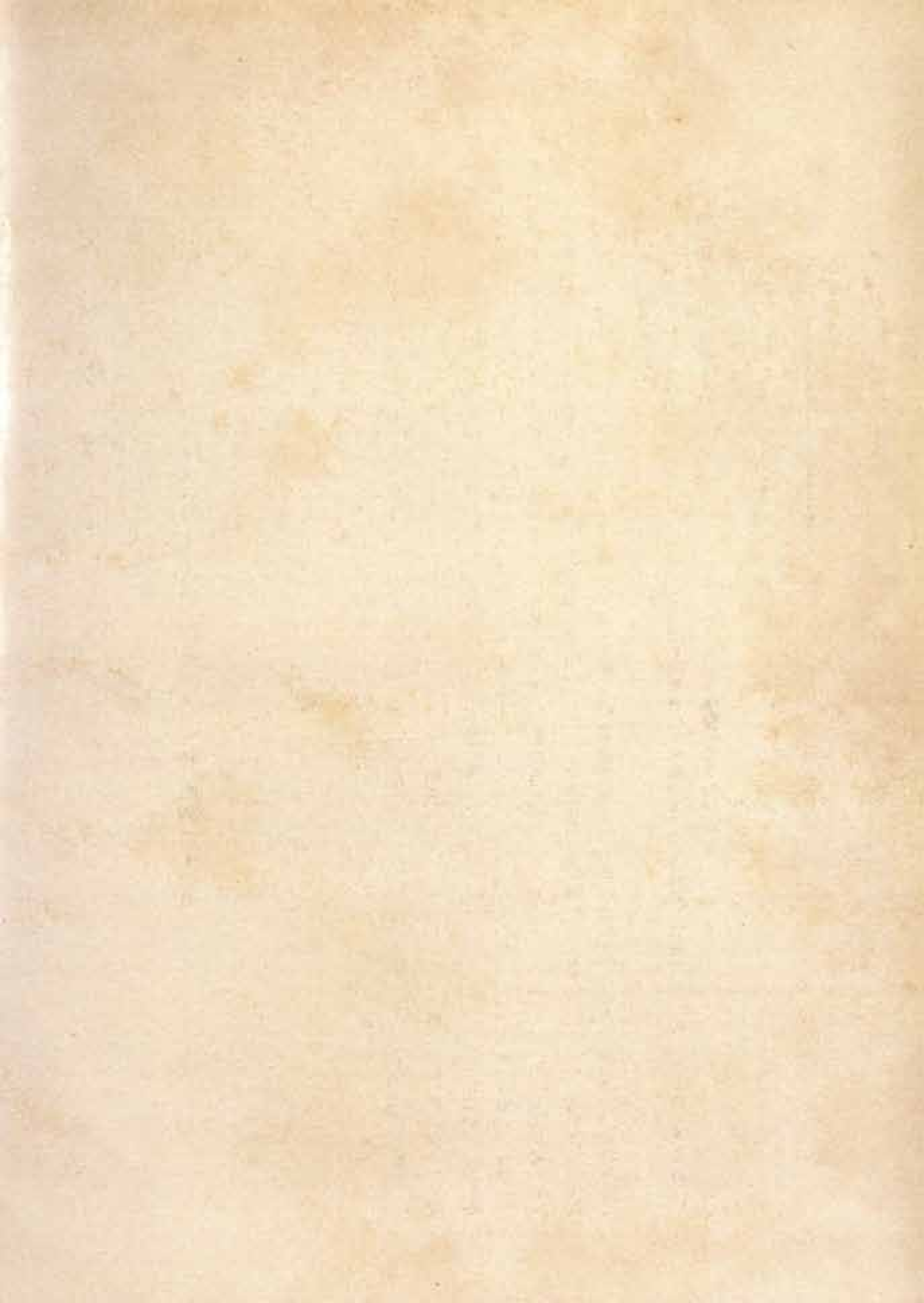
宮坂光次

緒言

青森縣三戸郡是川村中居小字一王寺の史前時代遺跡は、先に甲野勇氏によつて報告された中居泥炭遺跡を去る三四百米許りのところに在る。(1) 本遺跡は昭和元年東北帝國大學醫學部の長谷部言人博士が山内清男氏と共に發掘を試み、東北日本の石器時代に新たに圓筒土器文化の存在することを發表されたので俄に有名となり、爾來東北帝大文學部の喜田貞吉博士・杉山壽榮男氏其他關係學者の來訪を見ること再々であつた。偶々昨昭和四年四月、泉山岩次郎氏の好意によつて、其所有地に在る泥炭遺跡の一部を發掘することを許されたので、東京帝國大學醫學部の小金井良精博士・喜田博士・杉山壽榮男氏等と共に、大山史前學研究所員一同是川村に赴いたのである。而して甲野氏は竹下次作君と泥炭地の遺跡を發掘され、私は池上啓介氏と共に泉山岩次郎氏同斐次郎氏の斡旋によつて、一王寺遺跡の發掘に從事した。本報告に入るに先立ち直接發掘作業に援助せられた池上啓介氏、其間種々の御教示を賜つた小金井・喜田兩博士・大山公爵並びに泉山家に深く感謝の意を表し、又其後の整理に當つても池上・竹下二氏の多大なる努力を煩はしたことに對して感謝の微意を表する。

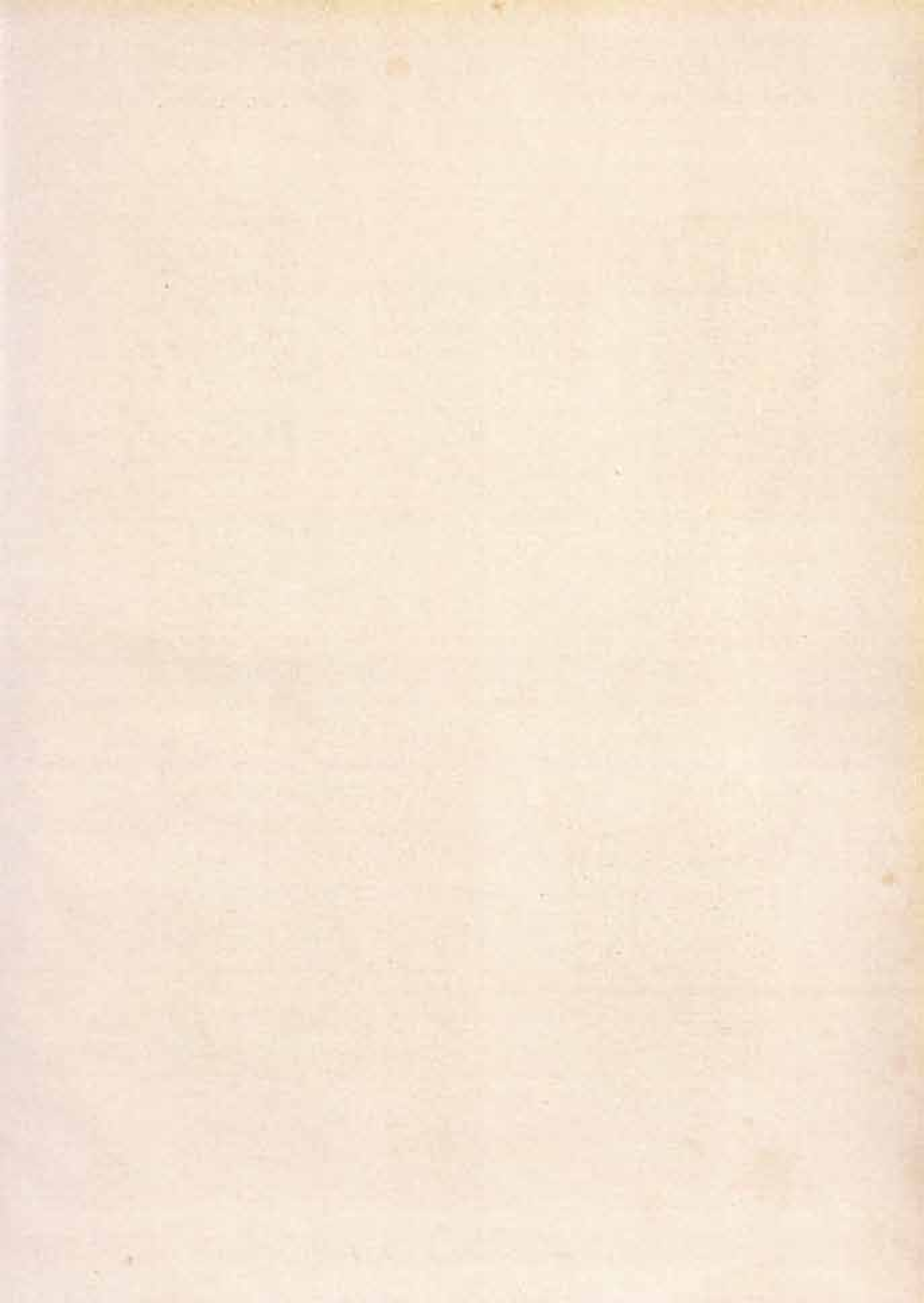
尙又本遺跡出土の植物質遺物に就いては、東京帝國大學醫學部の草野俊助博士に御調査をお願ひして、特に別項の如き御發表を請ふたことは、私共の誠に幸とするところである。玆に併せて感謝する次第である。

遺跡



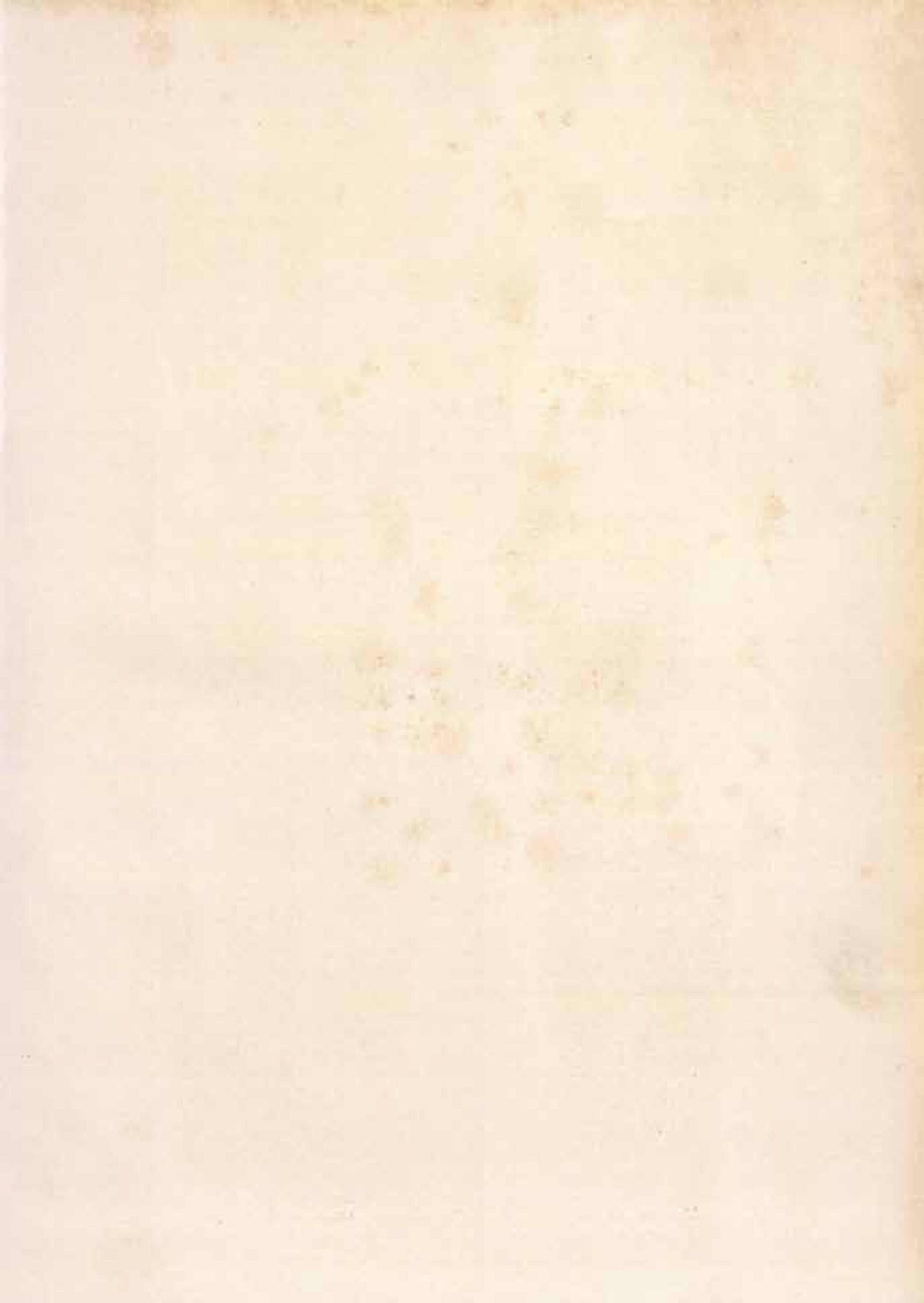


一王寺遺跡出土土器
Poteries découvertes à *Ichiōji.*





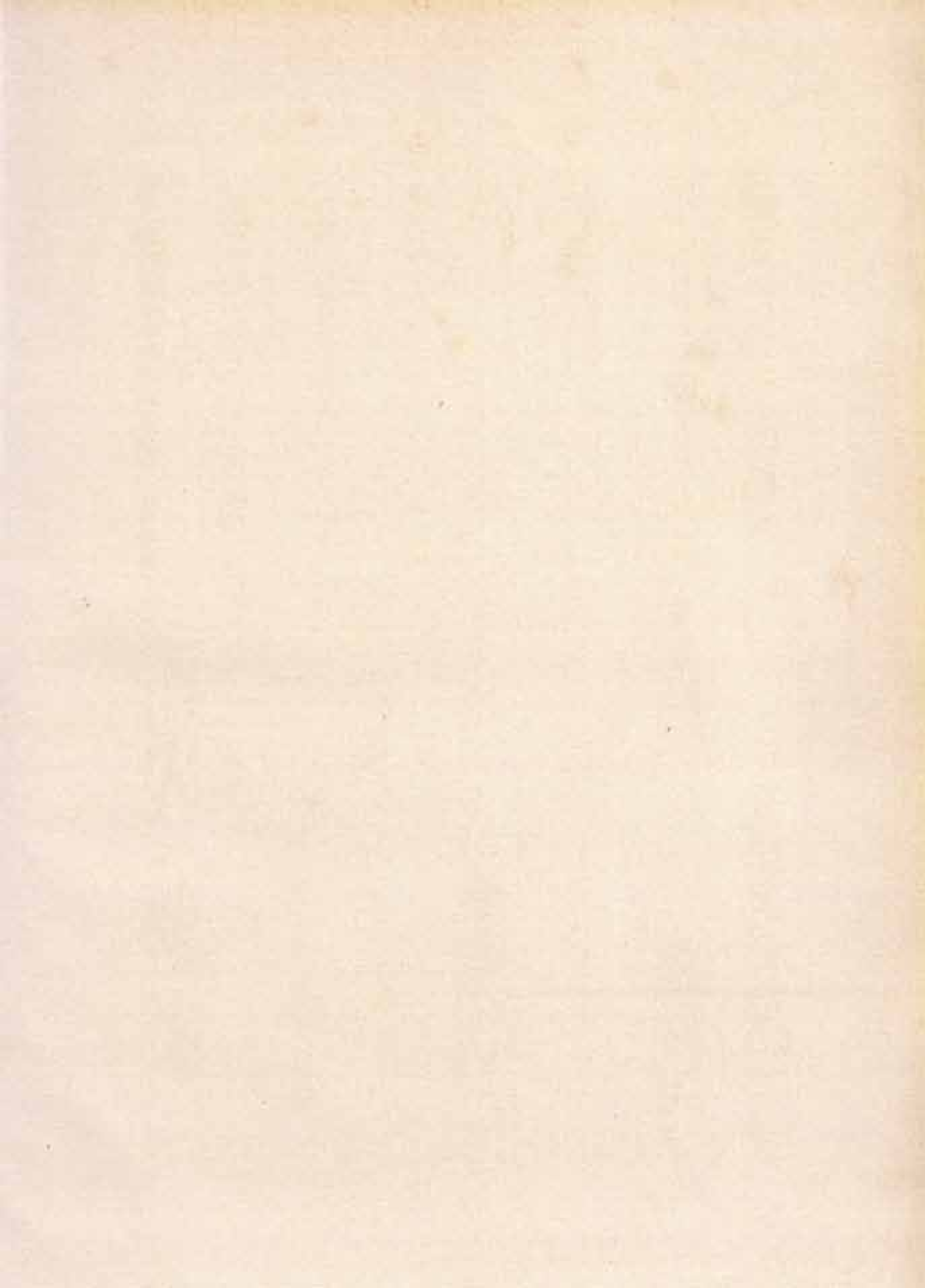
一王寺遺跡出土土器
Poteries découvertes à *Ichiōji.*





一王寺B地點出土骨角製品

Objets en os et corne découverts dans la fouille B à *Ichiōji*.

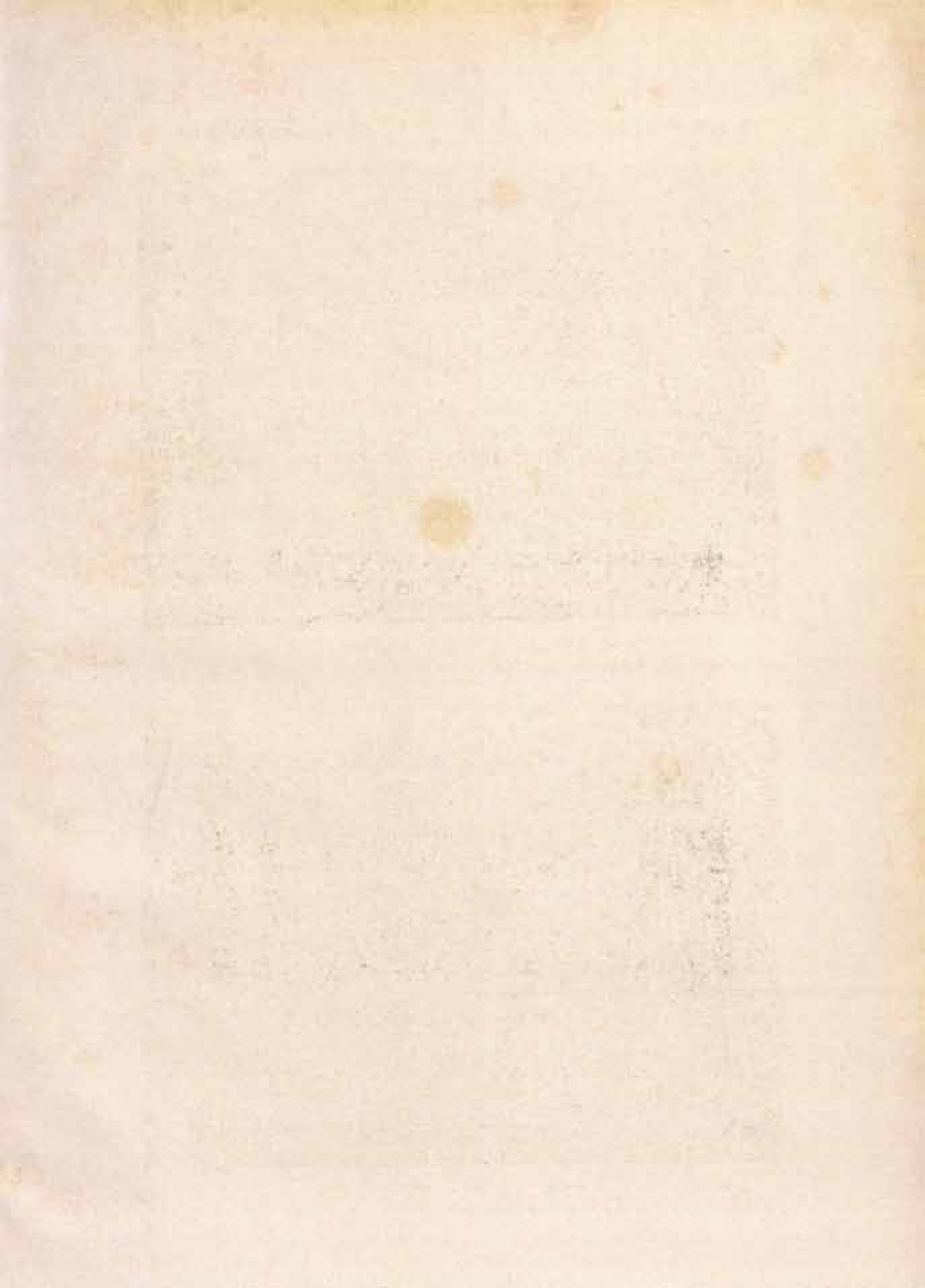




一王寺B地點遺物出土ノ狀態 (1)
Aspect in situ des restes découverts dans la couche III bis de la fouille B à *Ichiōji*.



同　上 (2)
Aspect des restes dans la couche III de la fouille B.





青森縣是川村一王寺及中居遺跡遠望
Vue de loin des sites d'*Ichiōji* et de *Nakai* près de Korekawa (Préfecture d'Aomori.)



一王寺遺跡發掘地點全景
Vue d'ensemble du site d' *Ichiōji*.



史前學雜誌　第二卷　第六號　目次

資料

遺跡

遺物

文獻

史前學會々則

一　本會ヲ史前學會ト名付ケル

二　本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三　本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル
　研究小報及パンフレツトノ發行
　史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ノ發行
　調査竝ニ研究旅行、隨時講演會竝ニ展覽會ヲ催ス

四　會員
　本會ノ趣旨ニ賛成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル
　特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五　本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌竝ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル(但海外在留者ハ別ニ遞送料ヲ要スル)

六　會員特典
　本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ共研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル
　本會ノ調査竝ニ研究旅行，講演會及展覽會ニ出席シ、本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

七　本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ，本會ノ會務ヲ執ル(將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル)

八　本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九
大山史前學研究所內　史前學會　電話青山一二五番

幹事　大山柏　甲野勇　宮坂光次　北條憲政　杉山壽榮男　田澤金吾
會計　岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては內容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

定價一册壹圓郵税四錢

昭和五年十一月十二日印刷
昭和五年十一月十五日發行

編輯者　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九番地　大山柏
發行者　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九番地　岡田義一
印刷者　東京市神田區表猿樂町二　中村修二
株式會社開明堂東京營業所

發行所　東京府豐多摩郡千駄ケ谷穩田九大山史前學研究所內　史前學會　電話青山一二五番　振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區北甲賀町四番地　岡書院　電話神田二七七五番　振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第二卷　第六號

昭和五年十一月十五日發行



史　前　學　會



